山岳

Vol.96/2001

エスパース

厳しい遠征条件だから選ばれる。エスパース

ブロードピーク（8051m）・仮C3とK2
撮影・近藤和美

1970年の第1号エスパースの発売以来、数々のアイディアと改良を重ね、いつしか山岳テントの代名詞とまで言われるようになったエスパース。現在ではスリーシーズン用から厳冬期遠征仕様まで9機種がラインナップされ、多くの登山者から信頼を得て愛用されています。

カモシカスポーツは登山家の信頼に応えます。

KAMOSHIKA

カモシカスポーツ ホームページ http://www.kamoshika.co.jp/

山の店・本　店 ☎03（3232）1121　〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 1-28-6・2F
山の店・横浜店 ☎045（212）2044　〒231-0062 神奈川県横浜市中区桜木町 3-11
●AM10:30～PM8:00（月～金）／AM10:30～PM7:00（土・日・祝）

山の店・穂高店 ☎0263（82）1511　〒399-8302 長野県南安曇郡穂高町北穂高 2827-18
●AM10:30～PM7:00

第九十六年（通巻一五四号）

山岳

二〇〇一年

山岳　二〇〇一年　目次

日本人による中国登山20年……「山岳」編集委員会・児玉　茂……7
第2次RCCのあしあと
——極限登山者の輩出を促した先駆的集団——……二宮洋太郎……40
フォーラム「JACが挑んだ世界最高峰への足跡」
——'70エベレスト・'80チョモランマ・'88三国交差縦走、そして現在——……高所登山委員会……60
「秩父宮記念山岳賞」受賞記念論文
マッキンリーの気象……大蔵喜福……82

K2　二〇〇〇年の記録……寺沢玲子……104
チョンムスターグ初登頂……山田　新……114
より高く、より遠く、未知を求めて
——中国崑崙山脈未踏峰登頂報告——……中村　淳……127
ナラカンカール峰登頂と極西北ネパール紀行……大西　保……137
メコン川（瀾滄江）水源問題を検証する
付、メコン源流の山……中村　保……148

『山岳』第一年第三号から再録
駿州田代山奥横断記……荻野音松……177
荻野音松君を憶う（『山岳』第三年第三号）……小島烏水……191
駿州田代山奥横断記解説……南川金一……194

図書紹介
『リュックサック80周年記念号』『リュックサックⅧ』（永田秀樹）、『輝ける時の記憶』（村井　葵）、『上高地―三部作』（関塚貞亨）、『日本アルプスの発見―両洋文化の交流』（三井嘉雄）、『山書散策―埋もれた山の名著を発掘する』（上村信太郎）、『深い侵食の国―ヒマラヤの東　地図の空白部を行く』（池田錦重）、『登山の運動生理学百科』（大蔵喜福）、『カラコルム・ヒンズークシュ登山地図』『カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究』（薬師義美）、『日本の地形』（長岡正利）、『A Passage to Himalaya（児玉茂）、会報「山」図書紹介一覧―二〇〇一年度―……197

＊

追悼
S. Brawand氏（岡沢祐吉）、平塚直秀氏（織内信彦）、港　叶氏（高田允克）、五十嵐篤雄氏（高橋正美）、徳永篤司氏（大島輝夫）、相川　修氏（朝比奈英三）、井口正男氏（井出秀雄）、田中政一氏（羽鳥　肇）、尾藤昭二氏（山本光二）、桑原信夫氏（浅野清彦）、西郷正郎氏（永野敏夫）、山岸猛男氏（松尾良文）、水野公男氏（牧野　衛）、小田　稔氏（中村純二）、須藤建志氏（宮川清明）、坪井圭之助氏（田島　汎）、会報「山」掲載訃報……227

＊

支部だより……264
会務報告（二〇〇〇年六月～二〇〇一年五月）……283

山岳図書目録（二〇〇〇年）……日本山岳会図書委員会……A46
八〇〇〇メートル峰登頂者一一〇人に聞く
——高所登山・体力と順化に関するアンケート——……山本正嘉……A37
英文梗概……A15

写真

追悼……240〜241

表紙挿絵・本文中カット　宮下啓三

日本人による中国登山二十年

「山岳」編集委員会・児玉　茂

はじめに

二十年という年月は長くもなし、短くもなしというところではないかと思う。行ってきた事のまとめ＝データの集積となると、後になってそれを一気に果たそうとするのは案外難しい仕事になる。会組織としての蓄積を「データとして使えるように残す」という体制が現在のところ整っていないため、山岳編集委員会としてその作業をすすめておくことにした。(1)

今回のテーマである「中国登山」は、それを最初に実現させたのが日本山岳会であり、僅か二十年前のことだが、それに続く活動に関するまとまったデータは日本山岳会のどこを探してもない。各隊の報告書を書庫に集めたり、当事者たちの記録の断片を繋ぎ合わせただけではデータとはならない。記憶がまだ辿れるうちにデータを使える形にまとめておきたいと考え、もっとも身近な事業である「海外登山基金の十年」をまず取り上げて一昨年の『山岳』九四年に残すことができた。今回はそれに続くものだが、範囲を大きく広げて、この二十年の間に日本から出た三四二の

登山隊の活動の、最も基本的なデータを同一基準で並べることにした。(2) 不十分な点は多いと思うが活用いただければ幸いである。文末に掲げた一覧表の見方はその表の前に凡例として記したので、ここでは「日本人による中国登山二十年」をその前後を含めて概観しておきたい。

1

一九七九年十一月に中国政府は、「各国人民と登山家の友好往来を増進し、国際登山、旅行活動の拡大を促進するため、一九八〇年から次の八つの山を外国に開放することを公表した」(3) 八つの山は、チョモランマ、シシャパンマ、コングール、コングールチュビエ、ムスターグアタ、ミニアコンガ、アムネマチン、ボコダである。その一九八〇年に日本隊は日本山岳会によるチョモランマ登山の成功と、女子登攀クラブのシシャパンマ試登、ミニアコンガとコングールの偵察を果した。翌八一年にはチョモランマを除く七つの山、シシャパンマ、コングール、コングールチュビエ、ムスターグアタ、ミニアコンガ、アムネマチン、ボコダに十六の登山隊を送り、新たに追加されたスークーニャンの登山とチョゴリの偵察も行い、他の外国隊を圧倒して中国登山の割当分を一気に独占するような形になった。ネパール・ヒマラヤやカラコラムでの登山が小規模な登山隊でも可能になっていた時期に、高額な登山料と数々の規制の付いた中国での登山は敬遠されるのではないかとも思われたが、蓋を開けてみると世間の関心の高さにも後押しされて、「中国登山」は日本人の次なる海外登山の対象として圧倒的な関心を集めた。

日本ヒマラヤ協会の山森欣一さんは「中国登山二十年」(『ヒマラヤ』一九九九年三月号) の中で、中国登山の特徴について、「これまで日本隊はヒマラヤが新しく解禁されるとドッと押し掛け、熱が冷めるとさっと引き上げた歴史がある。ところが中国登山熱だけは、相変わらずの盛況が続いている。これはただ単に中国の国土が広いばかりが原因ではない」とされ、「その理由の一つに〔戦争の加害意識〕があると思う」とされた。登山隊のスポンサーになった年代の人達の中には、過去の過ちを寄付や観光旅行代金として償うという気持ちがあるのを感じるという。この遠

慮がちな傾向は想定外の料金請求に対して先方の主張に従う事にもなり、相当長期間に亙って中国での登山経費は他地域での経費に比べて高額となったかもしれない。

この二十年の間に、登山料の引き下げや諸手続きの簡略化などの状況の変化がある。登山隊数のデータを五年ずつで区切ってみても日本隊の数が減る傾向はなく、八五年までが六十九隊、九〇年までが八十一隊、九五年までが八十五隊、二〇〇〇年までが一〇七隊となっている。(4)

日本人の中国奥地の山への関心の高さは、いつから始まったのだろうか。八つの山が外国人に開放される少し前、日本では〝シルクロード・ブーム〟が起きていた。NHKの番組に刺激を受けて、白水社から刊行されていた『西域探検紀行全集』や『ヘディン中央アジア探検紀行全集』を書棚から取り出して読み直した人も多かったに違いない。これらの本が翻訳・刊行されたのは一九六五年前後のことで、ネパール・ヒマラヤの登山が盛んになり、登山や探検の本が熱望された時代だった。(5) 一九五〇年代までのヒマラヤ初登頂時代の本は朋文堂などから翻訳書が幾つも出ており、やがてそれらがまとめられて『世界山岳全集』が一九六〇年に刊行された。この時代はもちろん限られた人達を除いて、一般の登山者は実際にヒマラヤで登山ができるとはとても考えられない時代である。

あかね書房の『ヒマラヤ名著全集』や白水社の『ヒマラヤ〈人と辺境〉』が発刊された一九七〇年代は、日本人によるヒマラヤ登山の経験やそれ以前の出版物の後を受けて、もう少し奥深くヒマラヤや中央アジアを勉強しようという時代だったかもしれない。この時代はまた探検や登山の原書を集めて研究しようという人も増えてきた。深田久弥氏をはじめ蔵書家は少なくないが、戦前からこの分野の欧文文献を集めて読んでいた日本人はほんの僅かしかいなかった。上述したように、多くの日本人にヒマラヤや中央アジアの山が具体的な情報としてもたらされるのは、一九五〇年代後半から後のことであり、シルクロードの昔から日本人と深い関係があったわけではない。とはいえ背景には中央アジア（西域）への強い憧れがあり、その延長上に「中国の山」があることは間違いない。

日本人のアジア辺境との関係が始まったのは明治三十年代である。河口慧海や大谷光瑞の探検談は一時新聞紙上を

通して人々に伝えられたが、当時の日本はその関心を押し広められる状況ではなかった。東洋学の学者や地理に関心のある学者が副次的な研究対象としたに過ぎない。昭和に入って学生登山が盛んになるとヒマラヤへの関心が生まれた。アルパイン・ジャーナルやジオグラフィカル・ジャーナルから興味のある記事を翻訳してみたり、エヴェレストの本を共同購入したりして登山計画を練り上げていた。エヴェレストは英国に譲り、自分たちは別の八〇〇〇メートル峰ジャイアント、カンチェンジュンガかナンガパルバットに遠征隊を送るというのである。そんな学生登山界の中で、吉沢一郎さんや望月達夫さんはパミール、テンシャン、クンルンや南東チベット、四川の雪山に注目するとともに、奥の深い探検史に嵌まり込んだ。そしてヒマラヤ地域以外の中央アジアやチベットの高峰についての日本で最初のまとまった翻訳・論考を残した。(6)

日本国と日本人の大陸への高い関心に対応して、中国辺境の歴史学や考古学は一九四〇年代に一つの盛期を迎えるが、戦後も東トルキスタンやチベットの研究は歴史学中心に進んだ。一方で探検家的地理学者はついに現れず、登山者の中に中央アジア探検の研究者を生んだ。上にあげた「ヘディン」と「西域」紀行全集の監修者は中央アジア史研究者（江上波夫、榎一雄）と登山者（深田久弥）という組み合わせであり、深田さんの行き届いた解説により中央アジアは一段と身近な存在になったということである。一九八〇年の中国登山開放を迎えるまでに、日本の登山者は以上のような背景を持っていたということであろう。この間に内蒙古を除いて直接中国の山や辺境に足跡を記した日本人は限定された。

望月さんの後、中国の山についての論考はごく少なく、『岩と雪』4号（一九五九年）に水野勉さんのまとめた「中国におけるヒマラヤ、チベットの研究」があるくらいである。水野さんはこの後J・ダブスの、古代から一九五〇年代までを網羅した中央アジア探検通史『東トルキスタン探検史』を翻訳紹介した。(7) 一方中国人による登山活動については断片的な論考がある。(8) 一九六〇年のエヴェレスト（まだチョモランマという呼称はなじみがなかった）登山以後、一九七五年のエヴェレスト再登山までの間、最後の八〇〇〇メートル峰ゴザインタンに独力で登った。この

登山は地質や氷河などの研究者との合同計画で、以後高峰遠征登山は科学調査と一体で行われるようになった。(9) そして最新の情報は一九七七年のトムール登頂である。(10) この〝トムール〟という初めて聞く山名がどの山に相当するのか、この当時の我々の側の知識ではなかなか判明しなかった。

ヒマラヤ登山が年々盛んになり残された高峰が払底してくると、高い垣根越しに霞んで見える中国側の山への関心が高まってきた。『山岳』に一九七〇年代の「ヒマラヤン・ノーツ」をまとめられた片山全平さんは、「中国国内にあるチベット、新疆、青海などの山域での登山は、世界の登山界に残されたもののなかで最後の、最大の魅力的な課題である」とし、やがて実現するであろう登山の交流に先立ち、戦後の中国登山界の歩みを「中国登山界の沿革と現状」と題して一九七七年末の『山』に書いている。(11)

同じ号の『山』の巻頭には西堀栄三郎会長の「合同登山の可能性をさぐる—中国登山界との初の接触」という記事が載った。「日本スポーツ界の各代表で組織した日本体育友好代表団の一員として、十月二十七日から十一月八日まで中国を訪問する機会を得、同国のスポーツ界の総元締である中華全国体育総会との友好を深めてまいりました。これは日中文化交流協会のお世話によるもので、王震副首相、廖承志氏らと親しく歓談、また私は日本山岳会の代表者という立場から、異例ともいえる中国登山界の代表者と一夜の懇談会を持つことができた」で始まるこの会談こそが中国登山開放のきっかけを作ったものである。次いで一九七九年八月号の『山』に「チョモランマ登山計画について」という渡辺兵力副会長執筆の記事が載った。「(昨秋の西堀会長訪中)後、日本山岳協会の御推薦の書面とともに一九八〇年にチョモランマ峰への登山計画を提出いたしました。すでに新聞紙上(七月十四日)で御覧のように、意外に早く中国から登山許可が参りました」とあり、この前段階の六月に植村直己氏が訪中し、その時に出た具体的な内容が同じページの下段に次のように載っている。「植村氏が会った中国登山界の要人は喬加欽、史占春、許競、王富州らの諸氏である。喬加欽氏は中国登山協会主席で、チベット自治区革命委員会副主任を兼ねており、史占春氏は同協会副主席であった。西堀会長訪中当時、同氏は協会責任者として対応されたようで、最近の登山界の情勢に対処して

協会内の人事整備がなされたものと思われる。登山問題については、①中国人による登山計画は「四つの近代化」遂行のため、一九八二年まで中止。②外国登山家の受け入れは前向きに考えられている。エベレストは日本隊優先、西独のゴザインタンはすでに許可交付、ただし期間など未定。③崑崙、天山は踏査未了で、外国人の受け入れはない。以上が骨子であるが、外国登山隊受け入れのため、登山料、宿泊施設、輸送の整備、および規約の準備がなされつつある。」(12)

2

メスナーとハーベラーがエヴェレストに無酸素、アルパインスタイルで登頂したのは一九七八年のことである。登山の流れはヒマラヤの高峰でも着実に変化して、大時代的な大人数、大物量登山は人々の興味を引かなくなってきた。ところが中国の登山開放は時代の進行とはズレた重厚なる規定を伴って始まった。「来華登山団体はすべてその国に駐在する中国の公館あるいは本国政府に登録する登山組織を通じて、中国登山協会に申請し「来華登山旅行申請書」に必要事項を書き込まねばならない。認可ののち双方は会談を行い、議定書に署名調印するものとする。登山許可は入国後発行する」(13)というような規定は見ただけで御免被るという人もいるだろう。魅力的な山やルートは他にいくらでもあるのだから、中国の山、それも限られた山へなど行く必要がないというのが血気盛んなクライマーたちの感覚だったろう。それでもチョモランマの魅力は勝って、メスナーも開放の年に日本山岳会隊とは対照的な小人数で訪れ、単独・無酸素・アルパインスタイルですばやく登頂を果たしている。

未登峰は最初の年に登られてしまい、後は繰り返しでしかないので、開放後の最初の五年は対象の山が限られていることもあって登山隊は増加しない。(14)一九八五年になると、山が行政的に属する地域の登山協会も態勢が整い、開放される山が一気に増えた。東部ヒマラヤ、青海、クンルン(15)など登山の分野では手付かずの目新しい地域が開放されて「中国の山」という次元に変化が起った。登山隊付きの連絡官や通訳などに漢人ではない地元の人も加わる

ようになり、「チベット」あるいは「クンルン」などという呼称が使い易くなった。日本で知らなかっただけの山ではなくて、「未知の」という修飾詞を付けてチベットに登山隊を送ることができることになり、今まで様子見をしていた各山岳会も「未知」「未踏」に惹かれて中国に向いだした。登山の流れから見ると逆行あるいは先祖帰りであるが、十九世紀の探検時代の続きを引き受けたいという気持ちは充分解る。とは言え残念なことに、開放された山の幾つかは、今では軍用道路のすぐ脇という至便な位置にある場合もあった。

この時代から目立つ存在となるのは日本ヒマラヤ協会の隊である。中国登山協会はもとより、西蔵登山協会、青海登山協会、新疆登山協会、四川登山協会とも直接交渉の機会を作って、未開放の山の登山許可を得る手際のよさは目を見張るばかりである。それぞれの地域に登山隊を送り込むことで、地方の登山協会も実績をあげることができる。

一九九〇年代までには人の多く集まる山が特定されてきた。中央ヒマラヤではチョオユーとシシャパンマに集中する。相対的に困難でないこの八〇〇〇㍍峰は、「一度は経験したい八〇〇〇㍍の高さ」や「アルパインスタイルの実践」や「中高年でも登れる八〇〇〇㍍峰」や「次の目標のためのトレーニング」などそれぞれの目的のために沢山の登山者を集めている。パラパント飛行も行われたし、全く別の発想で岩壁に新ルートを開いたクライマーもやってきた。パミールではムスターグアタである。誰が見ても登れそうに思えるこの山は、おそらく最も多くの外国人登山者が頂上に立っている。一九九一年からは個人単位でも参加できる旧ソ連の「パミール国際キャンプ」の様な企画をこのムスターグアタでも行っており、中国登山協会と新疆登山協会で共催している。四川省ではスークニャン山群と雪宝頂が都市から近いことと、観光名勝地があって人気が高く、登山対象としての魅力は薄れてきた。

別次元で特定される山も浮かび上がってきている。その第一はミニャゴンカで、あらゆるルートからの登頂が試みられているが、成功率が低く、大きな遭難が目立つ山である。雲南・チベット境に聳える梅里雪山も恐ろしげな印象を残す山で、同じ隊が意地になって登頂を試みるがその度に牙をむく。テンシャンにも雪崩のこわい山がある。トムールは五回の挑戦をことごとく退け続けている。北側（キルギス共和国側）に回れば何のことはないのに、南側の上部

尾根はいつでも雪崩が出る。

最も最近の五年で目立つのはチョモランマ登山者の増加かもしれない。ゴミも目だって増えそれを掃除しようという動きもある。エヴェレスト／チョモランマはもはや遊び尽くされているが、それでもチョモランマ詣の人波は絶えないようだ。二十年が経って情報は行き渡り、交通の便が格段に良くなり、登山手続き・入域許可取得も他の国の事情と変わらなくなった。かつては走資派と呼ばれた行為が国是となり、すっかり空気が変ってきた。もはや「中国の山」として他と区別しなければならないものは特にないのではなかろうか。

一九七〇年代末頃、登山はある行き詰まりを呈していた。プロ化した世界のクライマーたちは信じられないようなパフォーマンスを次々に繰り広げているが、普通の登山者たちはとてもそれに付いていけなくなった。丁度この頃、登山の進化に対して、単純な地域の拡大が「中国」において行われたために、息を吹き返した登山者が沢山いたのではあるまいか。そればかりか一旦は諦めた中高年の登山者や新規参入者も中国の山は受け入れた。開放された山の数が限られていた時期は、珍しさはあっても登山の流れの中での中国の山の位置付けは大きいとは言えなかった。しかし開放山域の拡大に伴って山域・山群の広大さ、山のタイプの多様さが見えてきて新しい展開が始まった。すなわち将来どの様なスタイルの登山が行われようとも、それら全てに応じられる懐の深さがあるということである。

文末の一覧表を見れば判る通り、登山隊が出る前に偵察隊を送っている隊が目だって多い。このような状況はネパールやカラコラムでは考えにくい。自分たちが登りに行く山がどんな山なのか、どこからアプローチすれば良いのか、交通手段はどうか、荷上げはロバかラクダか、どのような登攀ルートが考えられるかというような原初的な面白さが伴っていた。日本人はネパール・ヒマラヤにおいても、ヒンズークシュやカラコラムにおいても、数の上で他の外国隊を圧倒してきたが、(16) 北西ネパールやカラコラムのいくつかの山群を除けば、その原初的部分に関しては皆ヨーロッパ人が解決をつけていたものであり、この意味でいつまで経っても二番煎じを越えられなかった。日本人の海外登山の歴史から言えば、この二十年間の「中国登山」ほど各方面に亙って実りのあった時代はないし、今後も主導的

に登山を展開できる場所であろうと思われる。一覧表に「＊」記号で示した、日本人が外国人として初めて入った山域や初登頂した山の数は、百を越えている。ちなみに、二十年が経過した二〇〇〇年現在、初入域や初登頂に類するタイプの登山は「中国」においても終了しつつある。

3

一九八一年一月に中国登山協会が東京新聞出版局との共同出版で『中国の高峰』を発刊した。中国の登山隊によって撮影された、はじめて目にする山々の写真と科学的な解説文からなるこの立派な本は、中国側の受け入れ体制が充分整ったことを思わせた。同じ一九八一年にアムネマチンから戻ってきた上越山岳会が早速『中国登山ハンドブック』を出版した。上越山岳会の渡辺儀一郎氏は早い時期から中国に登山の申請書を送り続けており、一九七五年にはそれまでの中国登山情報をまとめた『中国登山研究』三号を発刊して準備に怠りがなかった。この年の日本の登山隊は帰国後ほぼ例外なく「登山報告書」を作成しており、次に中国の山を目指す人達に良い目安を与えた。日本ヒマラヤ協会は一九八三年から中国登山を開始し毎年各山域に複数の登山隊を送っており、最新の情報を集めデータを集積した『中国登山の手引き』を一九九〇年からほぼ二年置きに発行し中国をめざす登山者に便宜を図っている。各登山隊からもたらされる情報は膨大で、まるで七、八十年間の空白を埋めるかのようだ。中国辺境の山の情報は、現在では日本に一番多く蓄積されていると思われる。文末の一覧表にはできるだけ多くの報告書や書籍を載せるようにした。ただし各報告書の内容は玉石混交であって全てが資料として使えるわけではない。

十九世紀や二十世紀初頭までとは違って、一九三〇年以降は欧文による中国辺境の文献は限られてくる。登山については、スイスのハイム隊とアメリカ隊のそれぞれのミニャゴンカの本、一九三七年にブータン国境沿いにチョモラーリに初登頂したS・チャップマンの本、戦中から戦争後にかけてのシプトンとティルマンのムスターグアタ、チャクラギール、ボグドオーラを扱った二冊しかない。(17) キングドンウォードの本は数が多いが山を観察しただけで終わっ

ている。開放後の欧米人の本もそれほど多くはないようだ。英文に限れば、C・ボニントンのKongur, 1982、ボニントン、クラークのEverest, The Unclimbed Ridge, 1983、D・スコット、A・マッキンタイアーのThe Shishapangma Expedition, 1984、G・ラウェルのMountains of Middle Kingdom, 1985、S・ヴェナブルズのEverest, Kangshung Face, 1989、ボニントン、クラークのTibet's Secret Mountain, 1999等が主なところである。一九八〇年にボニントンとコングールの偵察に入ったM・ウォードは、その後中央アジアとチベットに関する論考をいくつもアルパイン・ジャーナルに書いている。

戦後の一九五三年に出版されたH・ハーラーの『チベットの七年』は物語の面白さとは別に、当時のチベット最新情報として人々の興味を引いた。それゆえに一九八二年の開放直後の「中国チベット」に西側の人間の一人として入った興味深い報告Return to Tibet, 1984（ドイツ語版はWiedersehn mit Tibet, 1983）は欧米では再びベストセラーになったが、日本ではほとんど紹介されなかった。日本人と欧米人とでは中国に対して受けとり方がだいぶ異なるようである。

中国側の文献としては先にあげた『中国の高峰』があるが、それより以前から中国科学院による一連の数冊から十数冊にもなる調査報告叢書、『新疆綜合考察叢書』や『珠穆朗瑪峰地区科学考察報告』、『希夏邦馬峰地区科学調査報告』、『青蔵高原科学考察叢書』を入手する事ができた。一九七九年に発行された地理研究所編の『青蔵高原地図』三〇〇万分の一は表現が美しい地図で山々への夢をかきたててくれた。

開放後に出た本で注目されるのは、周正『東昆侖秘境探検記』1986であろう。日本にも知人の多い周正氏はこの一九八五年のウルグムスターグの記録を中公新書の一冊『崑崙の秘境探険記』としても刊行した。周正氏の山の本は他にも多数あり、古代から現在までの中国登山史『氷山雪嶺両千年』1983も日本語に訳されている。(18) 新刊には各登山隊のエピソードを綴った『孔雀翅膀上的明珠』1997がある。漢・英両文による、外国人登山者を読者に想定したガイドブック的な本も出ている。ハンディな史占春他編『中国登山指南』1994に対して、西蔵登山協会編『雪域

神山』1995は豪華写真集のようである。いずれの本も特定の山の写真と秘密扱いだった人民解放軍の一〇万分の一地図がベースの部分地図で構成されていて、山の様子が手に取るように解る。中国科学院はその後も山岳地域の調査を独自に精力的にすすめて詳しい調査報告を次々に出版し、なお継続中である。『南迦巴瓦峰地区登山科学考察叢書』、『喀喇昆侖山―昆侖山地区科学考察叢書』、『青蔵高原横断山区科学考察叢書』などは大いに参考になる。われわれ日本人はこれら漢文文献を比較的容易に入手できるし、読みこなさないまでも利用する事ができるが、一般の欧米人はこの利便には浴せない。欧文文献の不利をかこつ日本人としては、この有利さを利用しない手はあるまい。

地図については、中国登山協会との合同登山を指向し、登山技術の指導などを行ってきた長野県山岳協会が協力して、登山協会で作成した地図を日本に持ってきて印刷・販売した。『中国山峰一覧図』五五〇万分の一と『青蔵高原山峰図』二五〇万分の一は一九八六年に出版された。美しい仕上がりで内容は正確であり、長野県山岳協会編の『山脈別山名一覧表』と合わせて、目標の山を見付け出すのに大いに役立った。この地図の後、一九八七年にM・ウォード監修でRGSとエヴェレスト財団から発行された地名索引付きの地図The Mountains of Central Asia, 二〇〇万分の一も登山対象地域が一枚の地図に含まれており重宝なものである。

一九九四年になると旧ソ連崩壊に伴って売りに出された機密地図が入手できるようになった。中国全土をカバーしているのは二〇万分の一シリーズ地図で、部分的に一〇万分の一もある。今まで全く秘密のベールに包まれていた広大な地域が、地形も読み取れる縮尺で自由に調べられるようになった。試みに青海から新疆、チベット、四川までの登山対象地域全体を二〇万分の一地図で並べてみると（約六百枚）、8.6 m×15 mもの大きさになり、改めてその広大さに驚かざるを得ない（一覧表の各山の位置（経・緯度）はこの地図を用いて確定した）。その後も一九九七年になって、蘭州氷河凍土研究所よりThe Map of Snow Mountains in Chinaというタイトルで一〇万分の一地形図を編集した多色刷りで陰影をほどこした地図が次々に販売されるようになった。[19] 一九八五年までの、TPC五〇万分の一だけしか利用できなかった時代があった事など全くうそのようである。

註

1　一九五二―一九六二年までの日本隊の「ヒマラヤ登山年譜」は山岳五三、五七、五八、六〇にまとめられている。

2　個人ベースの「隊」を組まない登山も、大編成の登山隊と同様に許可と報告の次元では「隊」として数えられる。

3　史占春「中国の登山活動」、『中国の高峰』一九八一、p8

4　表1「日本からの登山隊の地域別／年度別推移」参照

表1　日本からの登山隊の地域別/年度別推移

	隊	カラコラム	クンルン	パミール	テンシャン	南東チベット	チベット高原	青海高原	東部ヒマラヤ	中央ヒマラヤ
1979	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
1980	4	—	—	1	—	1	—	—	—	2
81	18	1	—	4	6	3	—	2	—	2
82	10	1	—	1	4	1	—	—	—	3
83	5	—	—	—	1	3	—	—	—	1
84	8	—	—	—	2	1	2	1	—	2
1985	23	1	2	1	1	1	2	8	3	4
86	16	—	1	1	3	3	1	—	4	3
87	12	1	2	—	1	4	—	—	—	4
88	14	—	1	1	2	3	1	2	1	4
89	20	2	2	4	2	2	1	4	—	3
1990	19	2	3	1	3	4	1	—	1	4
91	18	—	1	3	1	8	—	—	1	5
92	19	1	1	1	1	3	4	3	1	4
93	12	2	—	2	—	1	—	3	—	4
94	20	1	1	4	2	1	2	5	—	4
1995	16	—	2	2	1	1	4	—	—	6
96	16	—	2	2	3	—	2	—	1	6
97	23	—	1	2	4	2	5	1	1	7
98	27	1	—	5	—	5	3	—	1	12
99	22	1	2	2	—	3	2	2	1	9
2000	19	1	1	3	1	2	1	—	3	7
	342 隊	15	24	38	34	55	30	31	18	97 隊

5　白水社版の全集に含まれる各巻の多くは、昭和十二～十九年の間に一度翻訳出版されたことがある。戦前のこの時代も「内陸アジア探検記」が多くの読者を得ていた。

6　吉沢一郎：「黄河および揚子江の源流に於ける三大山群」山と渓谷七二―七七号、「サルウィーン河源流域の探検報告」山小

屋一二三―一二五号、望月達夫：「ミニャ・ゴンカ山群」山岳三五―二、「クングール山群」山岳三六―一、「ションバーグの天山山脈踏査」山岳四四、山書研究七号　など

7 J.A. Dabbs: History of the Discovery and Exploration of Chinese Turkestan, 1963　山書研究八号　一九六七

8 大曽根純「中国の山岳会」『山岳事典』山と渓谷社　一九六〇

9 施雅風『中国冰川学的成長』p48～50　科学技術文献出版社　一九九五

10 『再次登珠穆朗瑪峰』外文出版社　一九七五、『五星紅旗挿上托木尔峰』外文出版社　一九七九

11 片山全平「中国登山界の沿革と現状」山三九〇―三九二号　一九七七、七八

12 片山全平「ヒマラヤをめぐって」山四一〇号　一九七九

13 「外国登山団体来華登山規則（暫定）」『中国の高峰』p148

14 表1参照

15 地域区分の各地域名および範囲については一覧表凡例を参照

16 一九五五―一九七七年までのヒンズークシュとカラコラムの日本隊に関するデータは、日本ヒンズークシュ・カラコルム会議編『ヒンズークシュ・カラコルム登山探検誌』一九八〇がある。

17 A. Heim; Minya Gonkar, 1933、Burdsall & A. Emmons; Men Against the Clouds, 1935（『ミニャコンカ初登頂』一九九八）S. Chapman; Helvellyn to Himalaya, 1940、E. Shipton; Mountains of Tartary, 1951（『ダッタンの山々』一九七五）、H. Tilman; China to Chitral, 1951、この他に一九二一年の偵察隊を含めて七次に亙るチベット側からのエヴェレスト遠征隊の本があるが、この登山をチベット登山に含める人はいない。

18 一九八五年の米中合同ウルグムスターグ登山で知り合ったR・ベーツの仲介で、『氷山雪嶺両千年』の英訳文をベースとし、欧米人の登山データも加えた本、Zhou Zhen & Liu Zhenkai; Footprints on the Peaks: Mountaineering in China, 1995 が発刊されている。中国の古典になじみのない欧米人にも読み易いようにJ・ニートによって再編集され、文献目録と六千メートル以上の中国の山のリストの付いた、英語としては最初の「中国登山史」である。

19 チョモランマ周辺、シシャパンマ周辺、コングール・ムスターグアタ周辺、チョゴリ周辺、ナムナニ周辺、カイラス周辺、ナムチャバルワ周辺、メイリーシュエシャン周辺、クンルン最高峰周辺などの地図が販売され続行中である。

1989 などによる)、3「通用している欧米名」(J. Neate; High Asia, 1989 などによる) とするが、欧米名のないものは [ ] にピンイン表記を記す。
- 中国名のないものは「――」とする。漢字で日本名と中国名が同じものも (発音はもちろん異なる)「――」とし、この場合の英字名を [ピンイン] で表記する。また現地名のカタカナ日本語表記のみのものがある。
- 無名峰、例えば「クンルン 7167」の中国名欄は「――」、欧文名は P. 7167 とする。
- 緯度/経度差のない同じ山群の隣り合った山は、西―東、Ⅰ―Ⅱ等で区別するが、標高は入れる。
- 地域の広い「青海高原」、「チベット高原」、「南東チベット・四川・雲南」はおおよその位置がわかるように山域名称を入れる。(地図 1：山域名称図参照)
- 緯度/経度は、現在入手できる最も縮尺の大きいシリース地図、旧ソ連製の 1/20 万地図に準拠する―地図番号も入れて検索の便宜をはかる。(地図 3：1/20 万地図インデックス参照)
- 標高は中国発表のもの、人民解放軍の地形図に準拠した中国登山協会監修の地図の標高数字を用いる。
- ルートは「方面」、複数隊が訪れた山については「稜/リッジ」、「壁」の区別。(より詳しくは直接文献を参照のこと)

5 成果及び結果；偵察、踏査、試登 (頂上目前の場合から、取りついただけまでを含む)、初登頂、登頂を区別する。
- 同一山群のマイナー峰の登頂、技術的に問題にならない山の登頂の場合も例外としない。
- 特記すべき登山、方法は備考として付記する。[ ] はその他の付記。
- シシャパンマ、チョオユーについては、頂上のどの部分に立ったかを区別する必要が生じている。(山頂が広大な山であるが、以前には問題にならなかったことが、登頂者の増加で議論の対象になってきている)

6 主体登山隊名；国際公募隊参加者は含まず、独自に隊を作った者たちだけを対象とする。たたし区別の難しい場合があり、判別できないことがある。日中合同隊はスペースがあれば表示する。

7 報告・発表文献；雑誌記事、報告書、書籍と外国語発表記事 (Sangaku, American Alpine Journal の Climbs & Expeditions, Alpine Journal, Himalayan Journal, Japanese Alpine News) また ( ) は隊による報告、発表が入手できず間接的資料に拠ることを示す。

8 映像記録 (放送されたものに限る)；放送局名、タイトル、放送日。
(各放送局名呼称：KTV 関西テレビ放送、TVO テレビ大阪、ANB テレビ朝日、TBS 東京放送、NTV 日本テレビ放送、TX テレビ東京、NHK)

日本人による中国登山 20 年一覧　凡例

1　この一覧表に含まれる「登山隊」の範疇；登山隊、登山のための偵察隊、調査隊、踏査、その他未踏査地域への入域。

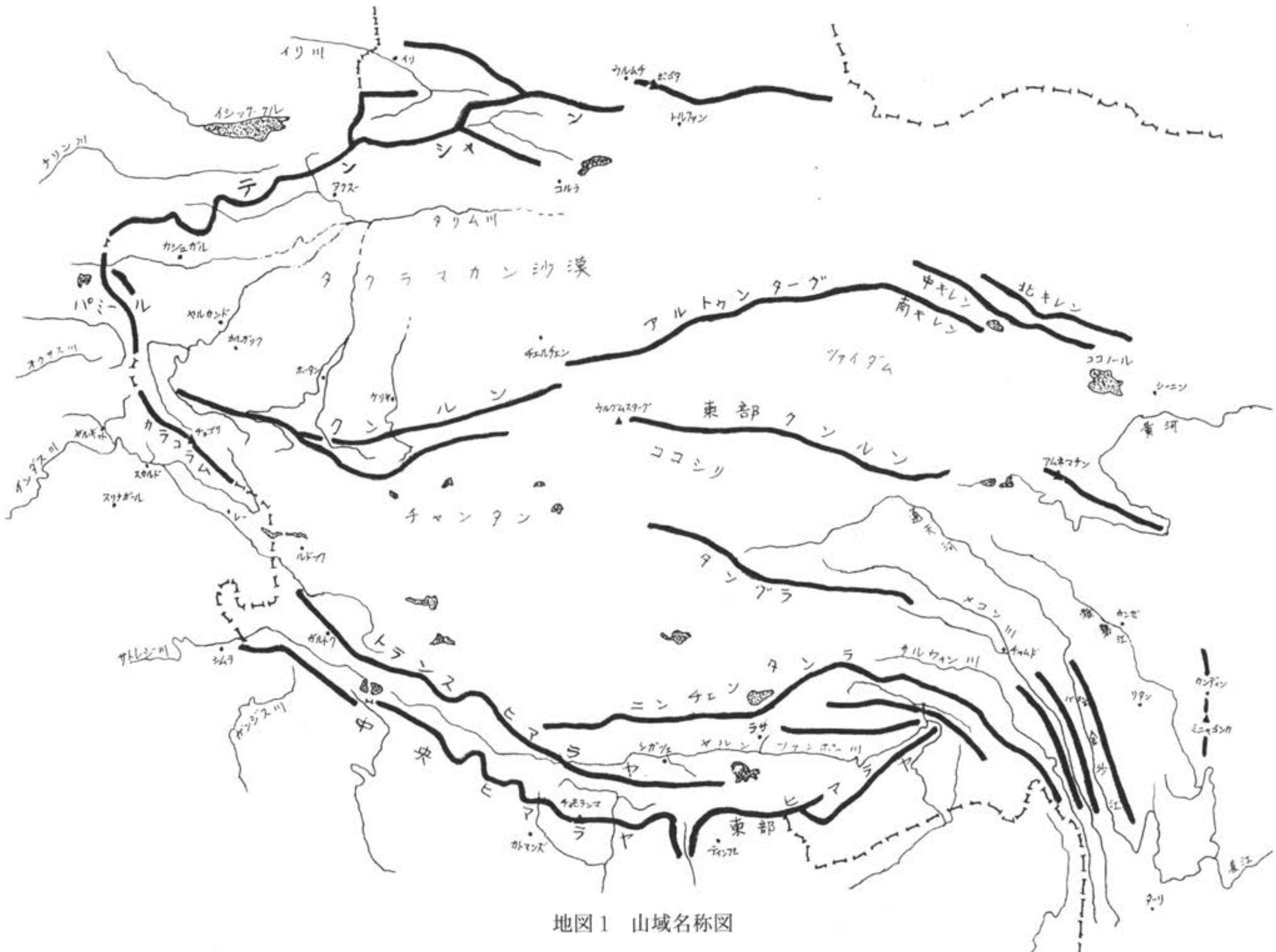
2　地域区分；中国政府の省・自治区によらず、山脈・山域による区分とし、以下の 9 つに分ける。(地図 2：地域区分図参照)

- **中央ヒマラヤ**；サトレジ河流出部から東、インドおよびネパール・ヒマラヤのチベット側、シッキム西境まで
- **東部ヒマラヤ**；シッキム東境から東、ツァンポー河屈曲部まで（国境線は中国主張のもの）
- **青海高原**；おおむね青海省の範囲、アルトゥン山脈、クンルン山脈の西端は東経 90 度の線
- **チベット高原**；北縁はクンルン山脈南麓で東経 90 度以西、南縁はヤルンツアァンポー河谷、タングラ山脈とニンチェンタンラ山脈東端は東経 96 度線まで
- **南東チベットと四川、雲南**；チベット高原との境界は東経 96 度、北縁は青海・四川省境、東境は四川盆地西端
- **テンシャン**；パミールに接する部分から東、キルギス共和国との境、東端は東経 95 度
- **パミール**；テンシャン山脈とクンルン山脈の間、中国側パミール
- **クンルン**；パミールに接する部分から東経 90 度以西
- **カラコラム**；カラコラム山脈の中国側地域

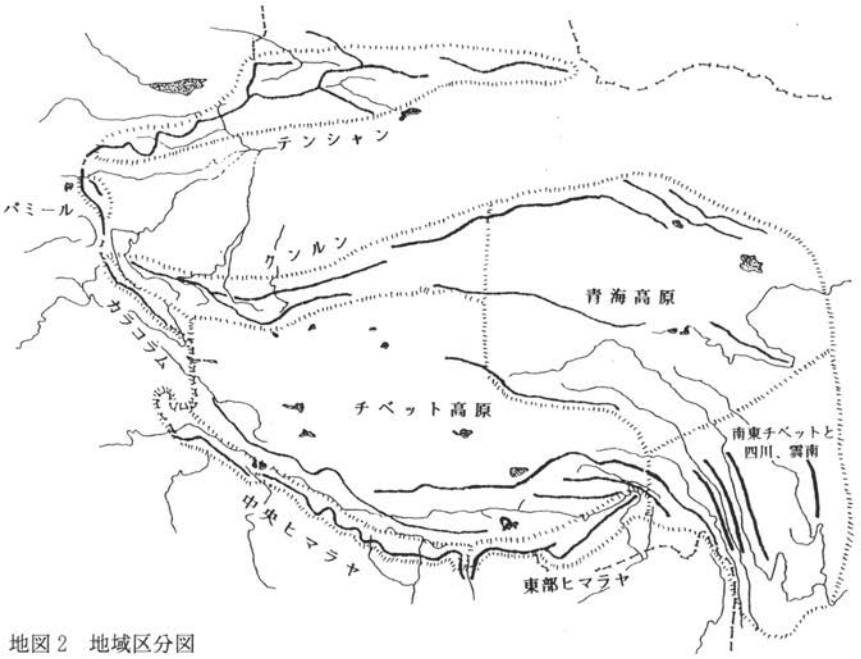
3　年月；冬季だけを区別するが、同時期に複数の隊が訪れた場合は月も表示する。同年度の範囲で、偵察と本隊を並べることや、春と秋の違いがあっても同年度の同一峰の別隊を並べて解りやすく整理した所もある。

4　山名・ルート；初出箇所のみ「＊」記号を付け、日本語名とともに標高、中国名、欧文名（ピンイン表記を含む）を記し、さらに位置を明確化する経度、緯度と、照合の便のため旧ソ連製 1/20 万の地図番号を付す。

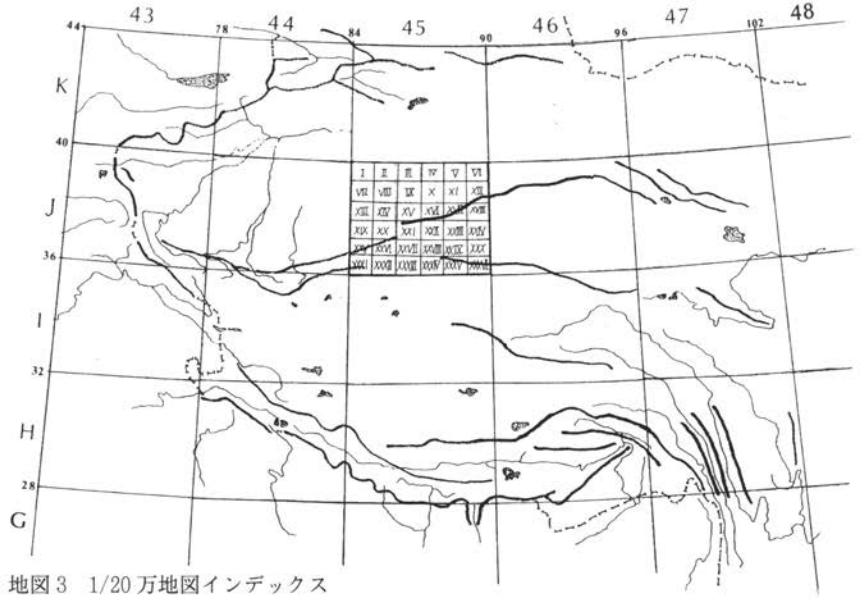
- 記号「＊」はまた同時に日本隊として、或いは外国人としての初入域を示す。
- 二回目以降の繰り返しは日本語名のみとする。
- 同一の山の新ルート、異なった方法による登山（別季節を含む）、同一地域の周辺峰での登山は「＋」記号で区別するが、同一山群の小諸ピーク、同一の山の置換ルートは区別しない。
- (　　) は登山を目的としない踏査隊、調査隊、取材隊、捜索隊などを示す。
- 山名は原則として最初の命名者のものに従う。1「ローマ字、漢字の日本式読み名」、2「漢字による中国名、あるいは漢字表記の現地音名」(「山脈別山名一覧表」


テンシャン
パミール
カラコラム
タクラマカン沙漠
クンルン
アルトゥンターグ
中キレン
北キレン
南キレン
ツァイダム
東部クンルン
ココシリ
チャンタン
タングラ
トランスヒマラヤ
ニンチェンタンラ
中央ヒマラヤ
東部ヒマラヤ
ヤルンツァンポー川
タリム川
イリ川
イシック・クル
ウルムチ
トルファン
アクスー
カシュガル
ヤルカンド
ホータン
ココノール
シーニン
黄河
メコン川
サルウォン川
金沙江
長江
ラサ
シガツェ
カトマンズ
インダス川
ガンジス川
サトレジ川
オクサス川

地図1　山域名称図



地図2　地域区分図



地図3　1/20万地図インデックス

日本人による中国登山20年一覧

中央ヒマラヤ

年月	山名・標高・ルート 中国名・欧文名(ピンイン名) ／ 位置(経緯度) ／ 旧ソ連製1/20万地図番号 ／ 備考	成果及び結果・備考	主体登山隊名	報告、発表文献 映像記録(放送されたもの)
1979	＊チョモランマ 8848 m 珠穆朗瑪 Chomolangma	北稜下部の偵察、雪崩遭難 27.59/86.55 H45－XXXⅢ、G45－Ⅲ	日本山岳会	(山岳-75)
1980	チョモランマ北稜、北壁	北稜からの登頂、北壁初登攀	日本山岳会	山岳-75 山-424 「みんなが頂上にいた」「チョモランマ・チベット」 「チョモランマに立つ」 Sangaku-1980 AAJ(CE)-1981 NTV［これがチョモランマだ「生と死に賭けた36時間！」80年7/16］
1980	＊シシャパンマ 8027 m 希夏邦馬 Shishapangma	試登 28.21/85.47 H45－XXXⅡ	日本女子登攀クラブ	(「シシャパンマ1981春」)
1981	シシャパンマ	登頂	日本女子登攀クラブ	「シシャパンマ1981春」「女たちの山」 AAJ(CE)-1982
1981	＊ランタンリ 7205 m 南當里 Lantang Ri	試登 28.23/85.42 H45－XXXⅡ	京都大学 (ポーロンリの西隣)	「チベット高原学術登山隊概要報告書」
1982	＊ポーロンリ 7292 m 希夏邦馬西峰 Porong Ri	初登頂・遭難 28.23/85.43 H45－XXXⅡ	大分県山岳連盟 (シシャパンマの西側)	山-445 山岳-78 Sangaku-1983 AAJ(CE)-1983
1982	＊カンペンチン 7299 m 康彭欽 Kanpenching	初登頂 28.34/85.33 H45－XXXⅡ	京都大学	山岳-78 岳人82/7 「カンペチン」 Sangaku-1983 AAJ(CE)-1983
1982	シシャパンマ	中央峰登頂 速攻登山	日本山岳会東海支部	岳人83/1 「ドキュメント速攻登山」 AAJ(CE)-1983
1983/84	＋冬季チョモランマ北西壁	試登	カモシカ同人	山と渓谷84/4 AAJ(CE)-1984
1984.5	＊ナムナニ 7694 m 納木那尼 Gurla Mandhata	偵察 30.26/81.18 H45－XVI	中国／同志社・京大	岳人84/9 「日中合同納木那尼峰先遣隊報告書」
1984.7	ナムナニ	偵察	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ84/11
1985	ナムナニ	初登頂	中国／同志社・京大	岳人85/9 「ナムナニ」「聖山巡礼」 AAJ(CE)-1986
1985	＊ララガ・リ 6671 m 果巴隆 [Gobarung]	試登・北東稜 28.30/85.35 H45－XXXⅡ	岩手医科大学 (カンペイチンの南東続き)	(山岳年鑑'86)
1985/86	＋冬季チョモランマ北稜	試登・遭難	ウータンクラブ	山と渓谷85/11、86/1
1985/86	冬季チョモランマ北西壁	試登	カモシカ同人	「魔頂（チョモランマ）」
1986	＊チャンツェ 7553 m 章子 Changtse	登頂 28.02/86.55 H45－XXXⅢ	西蔵登山協会／長野県山岳協会	岳人86/9 「チベット友宜の華長存」 AAJ(CE)-1987

1986	＊チョーアウィー　7354 m	初登頂	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ86/12　岳人86/12　AAJ(CE)-1987　HJ-v44
	喬烏衣　Cho Aui	28.04/86.37　H45－ＸＸＸⅢ		
1986	＊ラプチェカン　7387 m	試登	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ86/12
	拉布及康　Lapche Kang	28.19/86.21　H45－ＸＸＸⅢ		
1987	ラプチェカン	初登頂	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ88/1　山と渓谷88/1　岳人88/2　AAJ(CE)-1988　HJ-v45
1987	＋チョモランマ西稜	試登	防衛大学	山岳-83　Sangaku-1988
1987	＊チョオユー　8201 m	登頂、パラパント下降	カモシカ同人	岳人87/12　AAJ(CE)-1988　HJ-v45
	卓奥友　Cho Oyu	28.06/86.40　H45－ＸＸＸⅢ		ANB［チベット紀行・世界新8201メートルの大飛行 88年2/14］
1987/88	＋冬季チョモランマ北東面	試登	ウータンクラブ	山と渓谷88/5　AAJ(CE)-1988
1988	＋チョモランマ／サガルマタ	交差縦走、頂上テレビ中継	日本／ネパール／中国	山岳-83　山-516　AAJ(CE)-1989「チョモランマ／サガルマタ1988」 「中国・日本・ネパール1988年チョモランマ／サガルマタ友好登山隊報告書1988」 Sangaku-1988　AAJ(CE)-1989
				NTV［チョモランマがそこにある「いざ最高峰へ〃」88年5/5］
1988	シシャパンマ	登頂　連続２峰	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ89/5　AAJ(CE)-1990
1988	チョオユー	登頂　連続２峰	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ89/5　AAJ(CE)-1990
1988/89	冬季チョモランマ北東面	試登	長谷川恒男	山と渓谷89/3　AAJ(CE)-1989
1989	シシャパンマ	登頂	愛知学院大学	「遥かなるチベット希夏邦馬峰登頂」　AAJ(CE)-1990
1989	チョモランマ北西壁	試登	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ90/1
1989	＊スークアンリ　7308 m	初登頂	大阪市立大	「四光峰の風」　AAJ(CE)-1990
	四光峰　Siguang Ri	28.09/86.40　H45－ＸＸＸⅢ		（チョオユーの北東近接）
1990	シシャパンマ	中央峰登頂　高年齢者	京都大学	山岳-85､86　山-544　ヒマラヤ学誌２　AAJ(CE)-1991
1990	チョオユー	登頂	学習院大学	山岳-86
1990	チョオユー	試登	第２次ＲＣＣ	(山岳年鑑'91)
1990	＋チョモランマ・カンシュンＲ	偵察	明治大学山岳部	「チョモランマ・カンシュン谷周辺の地形」
		H45－ＸＸＸⅢ/ＸＸＸⅣ		
1991	チョモランマ・カンシュンＲ	試登	明治大学山岳部	炉辺９号　山岳-86　Sangaku-1991　AAJ(CE)-1992
1991	チョモランマ	登頂、遭難　少人数	貫田、二上	山岳-86　山と渓谷91/9「二人のチュモランマ」　AAJ(CE)-1992
1991	チョオユー	登頂　中高年登山	シルバータートル	山岳-87
1991	シシャパンマ	試登、遭難	長野県山岳協会	「遠き峰シシャパンマ」
1991	シシャパンマ	中央峰登頂	立正大学	「希夏邦馬峰」
1992	＋チョモランマ北東稜	試登	日本／カザフスタン	山岳-88　Sangaku-1993
1992	チョオユー	登頂　連続２峰	カトマンズクラブ	(山岳年鑑'93)
1992	シシャパンマ	試登　連続２峰	カトマンズクラブ	(山岳年鑑'93)
1992	シシャパンマ	中央峰登頂	日本山岳会福岡支部	山岳-87　AAJ(CE)-1993

1993. 3	＊チョモロンゾ　7790 m 拉瑪朗卓　Chomo Lonzo	偵察 27. 56/87. 06　G45－Ⅳ	立教大学山岳部	(山岳-89)　山-579
1993	チョモロンゾ	登頂　北西面初登攀	立教大学山岳部	山岳-89　山と渓谷94/2　岩と雪164 「立教大学チョモレンゾ登山隊報告書」 AAJ(CE)-1994 TBS［モーニングアイ：立教大学山岳部チョモレンゾ登頂に成功 93年11/22］
1993	チョオユー	登頂	群馬県山岳連盟	ヒマラヤ94/4
1993	チョオユー	前峰登頂	東京チョオユー登山隊	(山岳年鑑'94)
1994	＋チョオユー南西壁２ルート	登頂　アルパインＳ	山野井泰史ら	岩と雪168　岳人94/12　山と渓谷94/12、95/1
1994	チョオユー	登頂	日本大学	山-597 「日本大学チョオユー登山隊報告書1994」
1994	チョオユー	試登	北見山岳会	(山岳年鑑'95)
1994	シシャパンマ	中央峰登頂	労山雪豹同人	(山岳年鑑'95)
1995	＋チョモランマ北東稜	初登攀	日本大学山岳部	山岳-90　山-602 「日本大学エベレスト登山隊報告書」 Sangaku-1995 HJ-v52　NHK［チョモランマ遥か―8848 m 未踏ルートへの挑戦 95年9/17］
1995	＊マカルー東稜　8463 m 馬卡魯　Makalu	初登攀 27. 53/87. 05　G45－Ⅳ	日本山岳会青年部	山岳-90 「マカルー東稜」 Sangaku-1995　HJ-v52
1995	シシャパンマ	中央峰登頂　中高年登山	ＹＭＳタートル倶楽部	山と渓谷95/12 「シシャパンマ」
1995	チョオユー	登頂　速攻登山	小西、山本	岳人95/8　山と渓谷95/8
1995	チョオユー	登頂	秋田県	(ヒマラヤ99/3)
1995	チョオユー	登頂	法政大学	(ヒマラヤ99/3)
1996	＊ヤンラカンリ　7429 m 央然康日　Ganesh Himal	偵察 28. 23/85. 07　H45－ＸＸＸⅡ	日本ヒマラヤ協会	山と渓谷97/2 (ガネッシュヒマールのチベット側)
1996	チョモランマ	登頂	立正大学	(ヒマラヤ99/3)
1996	チョモランマ	登頂	福岡市山岳協会	「福岡珠穆朗瑪登山隊1996年報告」
1996	チョオユー	登頂	札幌中央勤労者	(ヒマラヤ99/3)
1996	チョオユー	試登	日本／カザフスタン	(ヒマラヤ99/3)
1996	＋リスム　7050 m 富曲　Risum	偵察 28. 22/85. 43　H45－ＸＸＸⅡ	日本勤労者登山連盟	登山時報97/4 (ポーロンリの東隣)
1997	リスム	初登頂・北東稜	日本勤労者登山連盟	登山時報97/8、97/8　岳人97/8
1997	チョモランマ北西壁	試登　アルパインＳ	戸高雅史	登山研修1998
1997	＊ガウリサンカール　7134 m 赤仁瑪　Gaurisankar	試登　東北面アルパインＳ 27. 58/86. 20　G45－Ⅲ	山野井泰史	登山研修1998
1997	チョオユー	登頂	泉州山岳会	(ヒマラヤ99/3)
1997	シシャパンマ	試登	長野県山岳協会	(ヒマラヤ99/3)
1997	シシャパンマ	試登	マウンテンゴリラ	(ヒマラヤ99/3)

1997	＊ロンライカンリ　6859 m	偵察	同志社大学	（山岳-95）	
	絨来康日（カキュカンリ）	29.45/82.45　H44－ＸＸⅢ			
1998	ロンライカンリ	試登	同志社大学	（山岳-95）	
1998	＋ラプチェカン無名峰　7100 m	試登	京都府山岳連盟	AAJ(CE)-2000	
		28.19/86.22			
1998	チョモランマ	登頂	昭和山岳会	山と渓谷98/7	
1998	チョモランマ	登頂	日本勤労者山岳連盟	山と渓谷98/7	
1998	チョモランマ	登頂・番組撮影	テレビ朝日	（岳人1998年海外登山リスト）	ANB［チョモランマの渚 99年4/4］
1998	チョモランマ	試登　単独	小西浩文	（岳人1998年海外登山リスト）	
1998	チョモランマ北西壁、北稜	試登　単独	戸高雅史	山と渓谷98/3	
1998	チョオユー	登頂　２人	貫田宗男	（岳人1998年海外登山リスト）	
1998	チョオユー	登頂　２人、１人遭難	諸岡慶太郎	（岳人1998年海外登山リスト）	
1998	カンペイチン	登頂、北峰7230 m も登頂	愛媛大学	（岳人1998年海外登山リスト）	
1998	ナムナニ	登頂	日本山岳会福岡支部	山岳-93　山-643 「ナムナニ峰登頂」 Sangaku-1998	
1998	＊カバン　6717 m	偵察	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ99/1　山と渓谷99/2	
	喀邦　Kabang	28.35/85.22　H45－ＸＸＸⅡ			
1999	カバン	試登　連続３峰	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ00/2　山と渓谷00/2　AAJ(CE)-2000　HJ-v56	
1999	＋ゲナ・ラ　6902 m	初登頂　連続３峰	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ00/3　山と渓谷00/2　AAJ(CE)-2000　HJ-v56	
	古納拉　Gonalha	30.27/81.22　H44－ＸⅥ	（ナムナニの東の峰）		
1999	＋ナムナニ・北面	登頂　連続３峰	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ00/3　山と渓谷00/2　AAJ(CE)-2000　HJ-v56	
1999	チョオユー	登頂	クライミングファイト	（岳人1999年海外登山リスト）	
1999	チョオユー	登頂　連続２峰	谷川太郎	（岳人1999年海外登山リスト）	
1999	シシャパンマ	試登　連続２峰	谷川太郎	（岳人1999年海外登山リスト）	
1999	シシャパンマ	登頂	群馬岳連	（岳人1999年海外登山リスト）	
1999	シシャパンマ	中央峰登頂	マウンテンゴリラ	（岳人1999年海外登山リスト）	
1999	シシャパンマ	中央峰登頂	日本山岳会東海支部	日本山岳会東海支部報80	
2000	チョモランマ	登頂	東北海外登山研究会	「至上の頂チョモランマ」	
2000	チョモランマ	登頂	北海道岳連	山と渓谷00/8 「SUMMIT—北の大地から世界最高峰を極める」	
2000	チョモランマ	登頂　高年齢登頂	法政大学	山と渓谷00/8　山-664 「法政大学チョモランマ登山隊報告書」	
				ANB［テレメンタリー2000「挑戦／63歳チョモランマに立つ」 2000年7/6］	
2000	チョモランマ	試登	丸山芳雄	（岳人2000年海外登山リスト）	
2000	チョモランマ	試登	野口　健	（岳人2000年海外登山リスト）	
2000	チョオユー	登頂　高年齢登頂	イエティー同人	山と渓谷00/9	
2000	シシャパンマ	試登　単独	小西浩文	（岳人2000年海外登山リスト）	

東部ヒマラヤ

年月	山名・標高・ルート 中国名・欧文名(ピンイン名)	成果及び結果・備考 位置(経緯度)	旧ソ連製1/20万地図番号	主体登山隊名 備考	報告、発表文献 映像記録(放送されたもの)
1985	＊ギャラペリ　7294 m	偵察		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ86/1　山と渓谷86/2
	加拉白里　Gyalaperi	29.49/94.55	H46－ⅩⅩⅢ		
1985	＊(ヤルツァンポー河)	踏査		大分岳連踏査隊	岳人86/2　山岳年鑑1986
1985	＊クーラカンリ　7538 m	偵察		神戸大学	岳人86/2
	庫拉崗日　Kula Kangri	28.13/90.37	H46－ⅩⅩⅩⅠ		
1986	クーラカンリ	初登頂		神戸大学	山岳-82　岳人86/10「クーラカンリ初登頂」「天帝の峰に挑む」 Sangaku-1987　AAJ(CE)-1987　HJ-v44 ANB［秘境チベット大紀行・世界第二の未踏峰クーラカンリに挑む 86年8/24］
1986	＊カルジャン　7221 m	北峰に初登頂7216 m		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ87/1　AAJ(CE)-1987
	卡熱彊　Karjiang	28.14/90.38	H46－ⅩⅩⅩⅠ	(クーラカンリ山群)	
1986	ギャラペリ	初登頂		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ87/2　山と渓谷87/2「ギャラペリ 謎の河の秘峰」AAJ(CE)-1987
1986	＊カント　7060 m	偵察		同志社大学	(「遥か久恋の峰・カント峰」)
	康格多　Kangto	27.55/92.39	G46－Ⅲ		
1988	カント	初登頂		同志社大学	岳人88/7「遥か久恋の峰・カント峰」AAJ(CE)-1989
1990	＊ナムチャバルワ　7782 m	偵察		日本山岳会	山岳-86　山-548　ヒマラヤ90/7、8、9　Sangaku-1991　AAJ(CE)-1991
	南迦巴瓦　Namchabarwa	29.38/95.03	H46－ⅩⅩⅢ/ⅩⅩⅣ		
1991	ナムチャバルワ	試登、遭難		日本山岳会	山岳-87　Sangaku-1992　AAJ(CE)-1992 NHK［未踏峰ナムチャバルワ 92年1/12］
1992	ナムチャバルワ	初登頂		日本山岳会	山岳-88　山-571「ナムチャバル初登頂」Sangaku-1993　AAJ(CE)-1993 NHK［再挑戦ナムチャバルワ 93年1/2］
1996	＊チョモラリ　7364 m	登頂		長野県山岳協会	山岳-92「女神の山チョモラリ」Sangaku-1997　HJ-v54
	綽莫拉日　Chomolhari	27.50/89.16	G45－Ⅵ		NHK［白き天女の峰チョモラリに挑む 97年1/4］
1997	＋クーラカンリⅡ　7418 m	試登		中国／日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ97/9「未登峰クーラカンリⅡ」
1998	＊ガンカールプンズム　7570 m	偵察		日本山岳会	山-645
	崗嘎普松　Gangkarpuensum	28.04/90.27	H46－ⅩⅩⅩⅠ		
1999	＋リャンカンカンリ　7534 m	初登頂		日本リャンカンカンリ登山隊	山と渓谷99/8　Sangaku-1999　AAJ(CE)-2000　HJ-V57　山-647
	良崗康日　Liankang Kangri	28.05/90.27	H46－ⅩⅩⅩⅠ	(ガンカールプンズムのルート上の峰)	
2000	＊タラーリ　6777 m	試登、6480 m 峰登頂		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ01/1　AAJ(CE)-2001　JANews-1
	打拉日　[Tarlha Ri]	28.22/91.08	H46－ⅩⅩⅩⅡ		
2000	＋クーラカンリ北稜	試登		日本ヒマラヤ協会	AAJ(CE)-2001　JANews-1

2000	クーラカンリ山群	偵察	東海大学	（岳人2000年海外登山リスト）

青海高原

年月	山名・標高・ルート 中国名・欧文名（ピンイン名）／位置（経緯度）／旧ソ連製1/20万地図番号／備考	成果及び結果・備考	主体登山隊名	報告、発表文献 映像記録（放送されたもの）
1981	＊アムネマチン　6282 m 瑪卿崗日　Amne Machen	初登頂・南稜 34.47/99.27　I 47－X	上越山岳会	岳人81/9「アムネマチン初登頂」　AAJ(CE)-1982、83
1981	アムネマチン	登頂	峠山岳会	（ヒマラヤ96/5）
1984	＋アムネマチンII　6268 m	登頂・北西稜	長野県山岳協会	岳人84/12「友好の阿尼馬卿」　AAJ(CE)-1985
1985. 3	＊ヤラダツオ、黄河源流 雅拉達澤（5214 m）[Yagradagze]	偵察 35. 10/95. 40　I 46－XII、I 47－VII	日本ヒマラヤ協会／読売新聞	（「ルポ・黄河源流行」）
1985. 7	＋（黄河河源）　35. 01/95. 59	取材	NHK取材班	「遥かなる河源に立つ」　NHK［大黄河・遥かなる河源に立つ 86年4/13］
1985. 7	ヤラダツオ、黄河源流	登頂、踏査	日本ヒマラヤ協会／読売新聞	ヒマラヤ85/10「ルポ・黄河源流行」「読売　黄河源流を探る」
1985. 7	＊バヤンカラ　5287 m 巴顔喀拉　Bayankara	登頂 34. 06/97. 35　I 47－XIV	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ85/10
1985. 8	ヤラダツオ	騎馬踏査	日本山岳会学生部	山岳-81「日本山岳会中国登山隊1985」　Sangaku-1986
1985	＊スチューリアン　5547 m 祁連山（素珠鏈峰）[Quilianshan]	初登頂 39. 13/98. 31　J 47－IX	日本山岳会学生部	山岳-81「日本山岳会中国登山隊1985」　Sangaku-1986 （北キレン山脈最高峰）
1985	＊カカサイジモンカ　6178 m 可可賽根孟克（玉珠峰）[Hohsaiginmongh]	登頂・北面 35. 39/94. 15　I 46－V	日本山岳会学生部	山岳-81「日本山岳会中国登山隊1985」　Sangaku-1986 （東部クンルン山脈）
1985	＊グラタンドン　6621 m 各拉丹冬［Geladaindong］	初登頂、長江源流踏査 33. 25/91. 10　I 46－XIX/XX	京大探検部／松本征夫	山岳-81「遥かなる揚子江源流」　Sangaku-1986 （タングラ山脈）　KTV［青蔵高原　ほとばしる揚子江源流 86年］
1988	スーチューリァン	登頂	福島高校ＯＢ会	「西望祁連」　AAJ(CE)-1989
1988	＊シンチン　6860 m 新青峰（布喀達坂峰）Buka Dabam	登頂　前衛峰6237 m 36. 02/90. 55　J 46－XXXI/XXXII	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ88/12　岳人88/12　AAJ(CE)-1989 （東部クンルン山脈）
1989	シンチン	試登	京都山岳会	岳人89/10「崑崙の秘峰新青峰」
1989	スーチューリァン	試登、隊長病没	秋田アルパインクラブ	秋田アルパインクラブ会報406、407
1989	＊アルチン　5798 m 阿尓金　［Altun Shan］	初登頂 39. 15/93. 28　J 46－X	秋田市／蘭州市	「秘峰アルチン山」　AAJ(CE)-1990 （アルトゥンターグ東部）
1989	＊年保玉則VI峰　5250 m ——　［Nyainboyuze］	登頂 33. 17/101. 30　I 47－XXIV/XXX	京都山の会	「青海高原・西寧から成都へ」 （青海、四川省境）
1992	シンチン	主峰初登頂	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ92/9　AAJ(CE)-1993

1992	＋アムネマチン主峰	東稜試登		日本山岳会青年部	「アムネマチン登山隊92報告書」 炉辺9号 AAJ(CE)-1993
1992	ユイチュ（玉珠峰）	踏査 6179 m 周辺		新潟県山岳協会	AAJ(CE)-1994
1993	＋アムネマチンV 6090 m	登頂		鳥取大学	(ヒマラヤ96/5)
1993	アムネマチン主峰	登頂・東稜		山梨県山岳連盟	「勇攀高峯・アムネマチン未踏ルートに挑む」
1993	ユイチュ	登頂・南面		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ93/11 AAJ(CE)-1994
1994	ユイチュ	登頂		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ94/12 AAJ(CE)-1995
1994	＊ユイシュ 5933 m	登頂		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ94/10 HJ-v51 AAJ(CE)-1995
	玉虚峰 ——	35.45/93.41	I 46－IV	(東部クンルン山脈)	
1994	＊党河南山 5665 m	初登頂		大分県山岳連盟	「党河南山」
	—— ——	39.13/95.18	J 46－XII	(南キレン山脈)	
1994	＊(メコン川源流)	踏査		東京農大探検部	季刊「民族学」73 山岳-96 Sangaku-2001
	瀾滄江源 Mekong R.	33.42/94.41	I 46－XXIII		
1994	＊東カンツァーリ 6102 m	偵察、周辺調査		松本征夫／九州大学	「遥かなり秘境ココシリ」
	東崗扎日（Kangzhangri）	35.35/89.44	I 45－VI	(ココシリ) NHK［遥かなり秘境ココシリ 日中合同探検隊60日間の記録 94年10/30］	
1997	＊チアジャジマII峰 5890 m	初登頂		新潟県山岳協会	「遥かなり曲阿加吉瑪」（山岳-96）
	曲阿加吉瑪II ——	33.28/95.12	H46－XXIV	(メコン川源流部)	
1999	＊崗則吾結峰 5808 m	初登頂		日中鉄道友好合同登山隊	「未踏峰に挑む」
	—— ［Kangzegyai］	38.30/97.43	J 47－XIV	(中キレン山脈)	
1999.1	＋冬季・東カンツァーリ	初登頂		増山 茂	山岳-94 Sangaku-1999 AAJ(CE)-2000 HJ-v56
					TX［青き透明な大地・ココシリ 2000年1/3］

チベット高原

年月	山名・標高・ルート	成果及び結果・備考		主体登山隊名	報告、発表文献
	中国名・欧文名(ピンイン名) ／ 位置(経緯度) ／ 旧ソ連製1/20万地図番号 ／ 備考				映像記録(放送されたもの)
1984	＋(カイラス巡礼)	取材		NHK取材班	「西蔵・聖地カイラス巡礼」 NHK［聖地カイラス巡礼 85年3/19］
1984	＊(カイラス、ヤルツァンポー河源)	踏査		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ84/11 山と渓谷85/1 岳人84/12
	岡仁波斎（6638 m） Kailas	31.05/81.20	H44－X		
1985	＊ニンチンカンサ 7191 m	試登・南面		大分県山岳連盟	「第二次チベットヒマラヤ登山隊報告書」
	寧金抗沙 Ningchin Kangsha	28.55/90.14	H46－XXV		
1985	＊ニンチェンタンラ 7162 m	偵察		東北大学	「チベット高原の盟主」
	念青唐古拉 Ninchen Tangla	30.25/90.32	H46－XIII	(ニンチェンタンラ主峰)	

1986	ニンチェンタンラ	初登頂		東北大学	「東北大学日中友好西蔵学術登山隊報告書」「雲表の国」 AAJ(CE)-1987
1989	*(ゼプ氷河)	氷河調査		日中合同チベット氷河調査隊	Bull. Glacier Reserch 9 「世界の山やま」
	則普冰川 [Zepu] Glacier	30.30/94.45	H46－XIII		(ニンチェンタンラ山脈東端)
1990	*ザンセルカンリ 6460 m	初登頂		西蔵登山協会/長野県山岳協会	山岳年鑑'91 AAJ(CE)-1991
	蔵色崗日 Zangser Kangri	34.20/85.50	I45－XIV		(チャンタン高原)
1992	*サンディンカンシャ 6590 m	初登頂		松永敏郎	「桑頂抗沙峰登山隊報告1992」
	桑頂抗沙 [Sandingkansha]	30.50/91.30	H46－VIII		(ニンチェンタンラ山脈)
1992	*チャンサンラム 6324 m	初登頂		西蔵登山協会/長野県山岳協会	AAJ(CE)-1993 (ヒマラヤ99/7)
	姜桑拉姆 [Jiangsanglamu]	28.48/90.16	H46－XXV		(ニンチンカンサの南の山群)
1992	*モンダカンリ 6422 m	試登		もんたにゅ会	山と渓谷93/1
	蒙達崗日 [Moida Kangri]	28.25/90.38	H46－XXXI		
1992	ニンチンカンサ 南面	登頂		自衛隊山岳連盟	AAJ(CE)-1993
1994	*チャチャチョ 6447 m	偵察		長野県山岳協会	山と渓谷94/8
	卡加崎(カンジャシャオ)[Kajaqiao]	30.31/93.29	H46－XVI		(イーゴンツァンポー河の南側の山群)
1994	*ルンポ・カンリ 7095 m	試登		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ94/9 山と渓谷94/8
	羅波崗日 Lungpo Kangri	29.50/84.36	H45－XIX		(トランスヒマラヤ)
1995	+タンラ・ポ 6394 m	初登頂		中央大学山岳部	山岳-90 岳人95/4 山と渓谷95/5 「中央大学山岳部チベット遠征合宿1995報告」
	唐拉 Tangla Po	30.21/90/40	H46－XIII		(ニンチェンタンラ山群)
1995	+ニンチェンタンラIV峰 7064m	初登頂		中津川労山	「未踏の白き頂を目指して」
1995	+ニンチンカンサ	登頂・西面		栃木県高体連	登山研修1996 「輝ける白き峰」
1995	ニンチンカンサ	登頂・南面		福岡大学	「寧金抗沙峰合同登山隊1995年報告書」
1996	*ツァン・ラII 6323 m	初登頂		滋賀県高体連	(ヒマラヤ99/7) 「蔵拉 ATEI'96報告書」
	蔵拉 [Zanglha]	28.56/86.05	H45－XXVII		[ツァンラ主峰の位置を示す]
1996	チャチャチョ	試登		長野県山岳協会	(ヒマラヤ99/7)
1997	*チョムカンリ 7048 m	登頂		中央大学山岳部	山と渓谷97/9
	穿母崗日 Chomo Gangari	29.55/90.02	H46－XIX		(ニンチェンタンラ山脈)
1997	+キズ 6079 m	初登頂		長野山岳協会	「友好のピーク キズ峰」
	—— [Kyizi]	30.08/90.25	H46－XIII		(ニンチェンタンラ山群・支尾根の1ピーク)
1997	+ジェトンスンソン 6249 m	試登		長野県山岳協会	(ヒマラヤ99/7)
	解同速送 [Gyaitongsogsum]	28.48/90.15	H46－XXV		(ニンチンカンサの南方)
1997	*ジャドゥ 6088 m	初登頂		長野県山岳協会	(ヒマラヤ99/7)
	加杜 [Jado]	30.52/91.31	H46－VIII		(サンディンカンシャの北隣)
1997	ニンチンカンサ	登頂・西面		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ98/1 「寧金抗沙峰」
1998	+ニンチンカンサ西稜	登頂		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ98/12

1998	＊無名峰（サカ） 6380 m	初登頂		日本教員登山隊	「チベット未踏無名峰へ」
	—— P. 6380	30. 01/90. 05	H46－XⅢ/XⅨ		（チョムカンリの北西）
1998	＋ブータカンリ 5964 m	初登頂		大阪明星学園ＷＶ	「布打剛日峰登山報告」
	布打剛日 ——	30. 11/90. 28	H46－XⅢ		（ニンチェンタンラ山群・支尾根の１ピーク）
1999	チョムカンリ	登頂		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ99/12 山と渓谷00/1 「チョムカンリ」
1999	ニンチンカンサ	登頂		奥田仁一	AAJ(CE)-2000
2000	＋ニンチンカンサ東稜	登頂 坂原単独		日本教員隊	AAJ(CE)-2001 JANews-1

南東チベットと四川、雲南

年月	山名・標高・ルート 中国名・欧文名（ピンイン名）	成果及び結果・備考 位置（経緯度）	主体登山隊名 旧ソ連製1/20万地図番号	報告、発表文献 備考	映像記録（放送されたもの）
1980	＊ミニャゴンカ 7556 m	偵察		北海道山岳連盟	「貢嘎の東」
	貢嘎山 Minya Konka	29. 36/101. 52	H47－XXⅣ		
1981	ミニャゴンカ北東稜	試登、遭難		北海道山岳連盟	「貢嘎山」 AAJ(CE)-1982
1981	＊スークーニャン 6250 m	初登頂・西南面		同志社大学	岳人81/4、81/10 山-436 「四姑娘山」 AAJ(CE)-1982
	四姑娘山 [Siguniang]	31. 06/102. 54	H48－Ⅶ		
1981	＋二姑娘山・大姑娘山 5276 m	登頂		同志社大学	「四姑娘山」
	[Erguniang] [Daguniang]	31. 03/102. 54	H48－Ⅶ		
1982	ミニャゴンカ北東稜	試登、遭難		市川山岳会	山と渓谷83/1 「ミニャコンカ奇跡の生還」 AAJ(CE)-1983
1983	＊（横断山脈西南部）	踏査		松本征夫	山岳-79
1983	＋スークーニャン	試登・西北		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ83/12
1983	＊岷山山群	登山技術研修		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ84/3
			I48－XXⅥ		
1984	＊玉龍雪山 5596 m	試登・東面		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ84/8 山と渓谷84/10
	—— [Yulongxueshan]	27. 05/100. 10	G47－XⅠ		
1985	二姑娘山・大姑娘山	登頂		マウンテントリップ	（ヒマラヤ96/10）
1986	（横断山脈）	踏査		神戸大学	（山岳-84）
1986	＊雪宝頂 5588 m	初登頂・南面		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ86/11 「天府の霊峰・雪宝頂」
	—— [Xuebao Ding]	32. 40/103. 50	I48－XXⅥ/XXXⅡ		
1986	＊ゲニ 6204 m	偵察		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ87/2
	格聶 [Genyen]	29. 47/99. 37	H47－XXⅡ		

1987	＊梅里雪山　6749 m	試登・東面		上越山岳協会	（ヒマラヤ96/10）
	―― [Moirixueshan] gkawagarbo	28.25/98.43	H47－XXXⅢ		
1987	スークーニャン	合宿		同志社大学	（山岳－95）
1987	大姑娘山	登頂		アルパインツアー	（山岳年鑑'88）
1987	ゲニ	試登		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ87/11 「神の山　ゲニ峰」
1988	ゲニ	初登頂		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ88/9　山と溪谷88/9 「神の山　格聶峰」 AAJ(CE)-1989
1988	＊チェルー　6168 m	初登頂		中国地質大／神戸大学	山岳-84　山-522 「チェルー山初登頂」 AAJ(CE)-1990
	雀儿山　[Cholashan]	31.48/99.05	H47－Ⅳ		
1988	＋梅里雪山・北面	偵察、試登		京都大学	山岳-86
1989	梅里雪山・北面	試登		京都大学	山岳-86　Sangaku-1991　AAJ(CE)-1990
1989	＊シャラリ　6032 m	試登　5250 m に登頂		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ89/11 「桃源郷への山旅」
	先熱日　[Xianre Ri]	28.22/100.22	H47－XXXV		
1990	梅里雪山・東面	偵察		京都大学	（山岳-86）
1990	雪宝頂	登頂		さがみ家族山の会	「雪宝頂の白い鋭峰」
1990	＋ミニャゴンカ北西稜	試登		北海道山岳連盟	山岳年鑑'91　AAJ(CE)-1991
1990.12	冬季・梅里雪山・東面	試登、遭難		京都大学	AAJ(CE)-1991
1991.1	梅里雪山・東面	救援隊		京都大学	山岳-86 「日中合同梅里雪山学術登山報告書」
1991	ミニャゴンカ北東稜	試登		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ92/1 「天壇の山に挑む」 AAJ(CE)-1992
1991	＊党結真拉(ヤンモーロン)　6033m	試登・北面		日本大学北桜会	山岳年鑑'92　（ヒマラヤ96/9）
	――　[Yanmohlong]	30.04/99.18	H47－XVI		
1991	＊ヤンゴンシャン　5273 m	初登頂		日本山岳会宮城支部	山-558 「羊拱山登山報告書」
	羊拱山 [Yanggongshan]	32.13/102.45	I48－XXXI		
1991	雪宝頂	登頂		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ91/11 「美しき四川の夏」 AAJ(CE)-1992
1991	＋小雪宝頂　5026 m	初登頂		さがみ家族山の会	「美しき白い峰・小雪宝頂」 AAJ(CE)-1993
	―― [Xiao Xuebao Ding]	32.39/103.52	I48－XXXII	（雪宝頂の南東）	
1991	スークーニャン	試登		拓殖大学	山岳年鑑'92
1991	＊(サルウィン・イラワジ境界)	踏査		中村　保	ヒマラヤ91/7 「ヒマラヤの東」
1992	＋スークーニャン南壁	初登攀		広島山の会	山岳-88　岩と雪156 「四姑娘山群」 AAJ(CE)-1993
1992	大姑娘山	登頂		さがみ家族山の会	（ヒマラヤ96/10）
1992	大姑娘山	登頂		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ93/1 「美しき谷の姉妹峰」
1993	＊ムグツォ　4962 m	試登、遭難		市川山岳会	（山岳年鑑'94）
	折多　P.4962	……	H47－XVII	［山の特定困難］	
1994	ミニャゴンカ北東稜	試登、遭難		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ95/2　山と溪谷94/12 「ミニャコンカ峰―登山と遭難の記録」 AAJ(CE)-1994
1995	ミニャゴンカ・ヤンズコー氷河	1981年隊の捜索		北海道隊	山と溪谷95/1、2

1996	梅里雪山	試登　6250 m まで		中国／京都大学	AACK 時報13
1996	梅里雪山	踏査一周		中村　保	岳人97/3-5　山と渓谷97/1 「深い浸食の国」 HJ-v51
1996	チェルー	試登		さがみ家族山の会	(ヒマラヤ01/4)
1997	ミニャゴンカ北西稜	登頂		札幌山岳会	山岳-93　山と渓谷97/7 「1997貢嘎山」「生と死のミニャコンカ」 Sangaku-1998
1997	ミニャゴンカ南西稜・北西稜	試登		横断山脈研究会	横断山脈研究会ニュースレター4
1998	ミニャゴンカ北西稜	試登		横断山脈研究会	横断山脈研究会ニュースレター8
1998	ミニャゴンカ一周	踏査		横断山脈研究会	岳人99/1　横断山脈研究会ニュースレター8、9
			H47－ＸＸⅣ、H48－ＸⅨ		
1998	＊ラモシェ　6070 m	試登		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ98/11
	田海子　Lamo she	29.57/102.03	H48－ＸⅨ		
1998	＊カンリガルポ山群	踏査		中村　保	山岳-94 「深い浸食の国」 Sangaku-1999　HJ-v56
	崗日嘎布　Kangri Garpo Range		H47－ＸⅨ/ＸＸＶ	(ニンチェンタンラ山脈と横断山脈の接点)	
1998	＊蓮華夕照連山主峰　5704 m	初登頂		日本勤労者登山連盟	山と渓谷99/5　AAJ(CE)-1999
	―― P. 5704	30.16/101.57	H47－ＸⅧ		
1999	＊レドマイン　6112 m	初登頂		学習院大学山岳部	山岳-95 「レッドメイン峰登山報告書」 AAJ(CE)-2000
	勒多漫因　Reddomain	29.46/101.55	H47－ＸＸⅣ		
1999	雪宝頂	登頂		日中合同学生隊	山-654
1999	＊ヤルンツァンポー屈曲部北側	偵察（H46－ＸＸⅢ/ＸＸⅣ）		学習院輔仁会	「チベット東南部ヒマラヤ偵察行」 JANews-1　HJ-v57
2000	＊横断山脈・四川	踏査（H47－ＸⅥ）		中村　保	山岳-95　Sangaku-2000　HJ-v57
2000	＋ラグー氷河	偵察（H47－ＸⅨ/ＸＸＶ）		シルバータートル	JANews-1　HJ-v57

テ　ン　シ　ャ　ン

年月	山名・標高・ルート 中国名・欧文名(ピンイン名) ／ 位置(経緯度) ／ 旧ソ連製1/20万地図番号 ／ 備考	成果及び結果・備考	主体登山隊名	報告、発表文献 映像記録(放送されたもの)
1981	＊ボゴダ　5445 m	主峰初登頂、遭難	京都山岳会	岳人81/9 「中国・天山山脈処女峰ボゴダ」 AAJ(CE)-1982
	博格達　Bogdo Ola	43.47/88.20　K45－Ⅴ		KTV［処女峰ボゴダに挑む 81年7/19］
1981	＋ボゴダ西峰　5213 m	試登	国鉄山岳会	「国鉄岳連中国親善登山報告」
1981	ボゴダ西峰	初登頂	天山会	岳人81/10 「天山の詩・ボゴダⅢ峰初登頂報告書」 AAJ(CE)-1982
1981	ボゴダ・4203 m 峰	踏査	もんたにゅ会	「天山への夢遥か」
1981	＋ボゴダ	試登・北西稜	上智大学アルペン F.	(ヒマラヤ95/5)
1981	＋ボゴダ	主峰登頂、山群踏査	日本山岳会学生部	山岳-77　山-436 「日本山岳会学生部ボゴダ峰登山隊1981の報告」 AJ-1983

1982	＊ボゴダⅡ峰　5362 m	初登頂		日本山岳会学生部	山岳-78 「日本山岳会学生部ボゴダ峰登山隊1982の報告」
	―― P. 5362	43. 47/88. 25	K45－V	（ボゴダ山群第二の高峰）	
1982	ボゴダ北面	登山と訓練		中国登山協会／長野山協	岳人82/12 「天山友誼」
1982	ボゴダ	試登		伊東市勤労山岳会	山-451　山岳年鑑83　山岳-78ノート 「ボゴダをめざして」
1982	＋ボゴダ・ショカルスキー　4613m	試登、剣石Ⅱ登頂		立正高校山岳部	山岳-78ノート 「無名峰、剣石Ⅱ峰登山報告書」
1983	＋ボゴダ	試登・南面		日本山岳会関西支部	（山岳-80）
1984	＋ボゴダ	西峰―中央峰縦走		日本山岳会東海支部	山岳-80　岳人85/12 「日本山岳会学生部ボゴダ登山隊1984年の報告」 Sangaku-1985
1984	ボゴダ　5180 m（Ⅳ峰）	初登頂		仙台一高ＯＢ会	「天山博格達Ⅳ峰」
1985	ボゴダ・ショカルスキー	試登		福島天山友好登山隊	「天山への路」
1986	＊シュエレン　6627 m	偵察、試登		日本山岳会東海支部	山岳-86　岳人87/3
	雪連峰　[Xuelian]	42. 03/80. 30	K44－XV/XXI		
1986	＊トムール　7435 m	試登		女子登攀クラブ	岳人86/11 「天山山脈　托木尔峰」 AAJ(CE)-1987
	托木尔　Pobeda (Победа)	42. 02/80. 08	K44－XⅣ/XV/XX/XXI		
1986	ボゴダ	登頂		福岡教育大学	「86博格達登山報告書」
1987	トムール	試登		西陣山岳会	（ヒマラヤ95/6）
1988	雪連峰	試登		日本山岳会東海支部	山岳-86　AAJ(CE)-1989
1988	＊カシカール　6342 m	偵察		岡山県勤労者山岳連盟	（ヒマラヤ95/6）
	科其喀尔 [Kaxkar]	41. 54/80. 09	K44－XX		
1989	カシカール	試登・南面		岡山県勤労者山岳連盟	AAJ(CE)-1990
1989	雪連峰	南峰登頂		日本山岳会東海支部	山岳-86　岳人89/11 「雪連峰　日中友好天山山脈雪連峰登山隊1988」 AAJ(CE)-1990
1990	雪連峰	主峰初登頂		日本山岳会東海支部	山岳-86 「雪連峰　日中友好天山山脈雪連峰登山隊1990」 AAJ(CE)-1991　Sangaku-1991
1990	トムール	試登、遭難		横浜市立大学探検部	EXPEDITIONⅢ 「'90天山山脈トムール峰登山隊報告書」
1990	ボゴタ・ショカルスキー	登頂		鳥取岳同人	「天山夢紀行」
1992	トムール	試登		天山登攀倶楽部	「'92天山山脈トムール峰登山隊報告書」
1994	カシカール	初登頂・北面		瀬戸内労山ＪＷＡＦ	登山時報248-251 「天山山脈　科其喀尔峰初登頂の記」 AAJ(CE)-1995
1994	トムール	試登		天山登攀倶楽部	「'94天山山脈トムール峰登山隊報告書」
1995	ボゴダ	登頂		栃木県山岳連盟	「ボゴダ峰（5445 m）登山報告書」
1997	＊クルグルムスターグ　5242 m	初登頂		静岡大学	山岳-93　Sangaku-1998
	格熱格尔慕孜塔格[Geregeer Mustagh]	43. 35/85. 07	K45－Ⅱ	（ボロホロ山群）	
1997	＋プルクット　5015 m	初登頂		鳥取岳同人	「天山夢紀行1997・プルクットからの報告」
	―― ――	43. 38/85. 08	K45－Ⅱ	（ボロホロ山群、クルグルムスターグの尾根続き）	
1997	＊（ユルドゥス盆地）	踏査		川上　隆	山-631

1997	＊西ボゴダ山群無名峰　4410 m	初登頂	岩手大学山の会	「ボゴタ山群登山隊報告書」	
	—— P. 4410	43. 45/88. 14	K45－V		
2000	＊トモルティー　4888 m	試登	新潟山岳協会	「托木尔堤峰登山隊2000」	
	托木尔堤峰　Karlik Tagh	43. 05/94. 20	K46－XI	（テンシャン山脈東端）	

パ　ミ　ー　ル

年月	山名・標高・ルート 中国名・欧文名（ピンイン名）	成果及び結果・備考 ／位置（経緯度）／	旧ソ連製1/20万地図番号	主体登山隊名 ／備考	報告、発表文献 映像記録（放送されたもの）
1980	＊コングール　7649 m	偵察		京都カラコルムクラブ	山岳-84　岳人81/11
	公格尔　Kongur II	38. 37/75. 20	J43－XVI		
1981	＊ムスターグアタ　7546 m	登頂		京都カラコルムクラブ	AAJ(CE)-1982
	慕士塔格　Muztag Ata	38. 15/75. 10	J43－XVI		
1981	コングール北稜・東稜	試登、遭難　アルパインS		京都カラコルムクラブ	山岳-84　岩と雪85　AAJ(CE)-1982
1981	＋ムスターグアタ北峰　7184 m	初登頂		川崎ダスビダーニェ	山岳-77　岳人81/11　「シルクロードの白き神へ」　Sangaku-1982
1981	＊コングールチュビエ　7530 m	登頂		中国／防衛大学	山岳-77　「踏跡6号；コングールチュビエ峰登山特集」　AAJ(CE)-1982
	公格尔九别　Kongur I	38. 38/75. 13	J43－XVI		
1982	ムスターグアタ	登頂		日本北沢登山クラブ	山岳-78ノート　AAJ(CE)-1983
1985	＋コングール山群　5780 m 峰	試登		もんたにゅ会	（ヒマラヤ85/9）
	—— Rongnon	38. 34/75. 14	J43－XVI		
1986	ムスターグアタ	登頂、スキー		西域登山研究会	山と溪谷87/8　ヒマラヤ90/8
1988	＊チャクラギール　6678 m	初登頂・南西稜		明治学院大学	山と溪谷89/1　AAJ(CE)-1989
	喀克熱格勒　Chakragil	38. 57/75. 09	J43－X		
1989	＋コングール北西稜	登頂		京都カラコルムクラブ	山岳-84　岳人89/10　岩と雪137　「かがやく峰 Kongur」　AAJ(CE)-1990
1989	コングールチュビエ	試登		宮崎県山岳連盟	「中国西域コングールチュビエ峰」　AAJ(CE)-1990
1989	ムスターグアタ	登頂		京都大学	ヒマラヤ学誌1
1989	ムスターグアタ	登頂		篠崎純一	岳人90/2
1990	ムスターグアタ	試登		鶴岡ヒマラヤ研究会	「絲綢之路の白き峰」
1991	ムスターグアタ	登頂		日本山岳会学生部	山岳-87　山-558　「日本山岳会慕士塔格山登山隊　91報告書」
1991	ムスターグアタ	登頂		長野県海外登山研究会	山岳年鑑'92
1991	ムスターグアタ	登頂		福岡県山岳連盟	「ムスターグアタ報告書」
1992	ムスターグアタ	試登		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ93/4
1993	ムスターグアタ	登頂		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ94/1

1993	＊コクセル　6705 m	初登頂		山形大学	「Koboldt コクセル峰初登頂特集」 AAJ(CE)-1994　山-585
	科克色熱　Koksel	38. 35/75. 17	J 43－X VI		
1994	＋コングールⅣ	初登頂		立川女子高校	登山研修1996 「女子高生・汗と涙の初登頂」
1994	ムスターグアタ	登頂		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ95/1
1994	ムスターグアタ	登頂		京都山岳会	(ヒマラヤ95/9)
1994	ムスターグアタ	登頂		神奈川教員	(ヒマラヤ95/9)
1995	＋ムスターグアタ山群　6849 m	初登頂		日本山岳会青年部	山岳-91　山-606 「絲綢之路の高峰に立つ」 Sangaku-1996
	——　P. 6849 m	38. 13/75. 11	J 43－X VI		
1995	チャクラギール	事故中止		福岡山岳連盟	「新疆登山協会」案内
1996	ムスターグアタ	登頂		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ96/12
1996	ムスターグアタ	登頂		慕士塔格登山隊「浪」	山と渓谷97/8
1997	ムスターグアタ	登頂		芝浦工大	「新疆の太陽、風と山」 山-641
1997	ムスターグアタ	登頂		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ97/12
1998	ムスターグアタおよび北峰	両峰登頂		栃木県山岳連盟	「遥かなるムスターグアタ1998」
1998	ムスターグアタ	登頂		リコー山の会	(岳人1998年海外登山リスト)
1998	ムスターグアタ	試登		無名山塾会	(岳人1998年海外登山リスト)
1998	ムスターグアタ	登頂		岩・山	(岳人1998年海外登山リスト)
1998	ムスターグアタ	登頂		九里徳泰	(岳人1998年海外登山リスト)
1999	ムスターグアタ	試登		御殿場山岳会	(岳人1999年海外登山リスト)
1999	ムスターグアタ	登頂		恩田真砂美	(岳人1999年海外登山リスト)
2000	コングールチュビエ	試登		栃木県高体連	(岳人2000年海外登山リスト)

クンルン

年月	山名・標高・ルート 中国名・欧文名(ピンイン名)	成果及び結果・備考 位置(経緯度)	旧ソ連製1/20万地図番号	主体登山隊名 備考	報告、発表文献 映像記録(放送されたもの)
1985	＊ムスターグ　6638 m	偵察・5850 m 登頂		日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ85/12　岳人85/11　山と渓谷85/12 「地球の背骨の一角に立つ」
	慕士山　Muztagh (K 5)	36. 03/80. 07	J 44－X X X Ⅲ		
1985	＊西部クンルン	調査偵察		京都大／名古屋大	AACK 時報10
			I 44－Ⅳ		
1986	＊クンルン7167　7167 m	初登頂		東京農業大学	山岳-82　山と渓谷86/12 「中国崑崙山脈7176 m」 AAJ(CE)-1987
	——　P. 7167	35. 19/80. 56	I 44－IX		

1987	＊カシタシ　6697 m	試登　5740 m 登頂		福岡山の会	「中国崑崙山脈無名峰6699 m 報告書1987」 AAJ(CE)-1988
	喀什塔什［Kaxtax］	36, 13/82, 02	J 44－ＸＸＸⅣ/ＸＸＸＶ		
1987	＊(アクサイチン・ユルンカシ源流)	調査		日中合同氷河調査隊	「Glaciological Studies in West Kunlun Mountains 1987」
			I 44－Ⅳ/Ⅹ		
1988	＊クンルン6903　6903 m	初登頂		京都大学	AACK 時報11　AAJ(CE)-1989
	――　P. 6903	35, 23/81, 06	I 44－Ⅳ		
1989	＊チョルパンリクムスターグ　6510m	初登頂		仙台一高山岳会	「Chqlpanlik muztagh 報告書」 AAJ(CE)-1990
	――　Cholpanglik	35, 35/79, 57	I 44－Ⅱ		
1989	＊ウルグムスターグ　6973 m	登頂		立正大学	山と渓谷90/7　AAJ(CE)-1990
	木孜塔格　Ulugh Muztagh	36, 28/87, 25	J 45－ＸＸⅣ	（中央クンルン）	
1990	＊(東部クンルン(アルトゥンターグ))	踏査		坂井南雄治／産経新聞	稲門山岳会会報67　産経新聞1990, 9, 3 「中国の野人」
			J 45－ⅩⅦ/ⅩⅧ/ＸＸⅡ/ＸＸⅢ		
1990	＊(アシクレ盆地)	踏査		法政大学地理	「沙漠・水・人間」 大関「アジアの山旅」
			I 44－Ⅳ		
1990	ムスターグ(ムーシュムスターグ)	初登頂・東稜		栃木県高体連	岳人91/1 「慕士山（ムスターグ）初登頂」 AAJ(CE)-1991
1991	＋ムスターグ	試登・西稜		福岡教育大	(ヒマラヤ95/10)
1992	クンルン7167	試登		西陣山岳会	(ヒマラヤ95/10)
1994	＊ギシリクターグ　6488 m	偵察		山形県山岳連盟	(ヒマラヤ95/10)
	庫台克力克　――	35, 59/81, 33	I 44－Ⅳ、J 44－ＸＸＸⅣ		
1995	ギシリクターグ	初登頂		山形県山岳連盟	「ギシリク・ターグ初登頂」
1995	＊ハーンヤイリク　6744 m	偵察		日本勤労者山岳連盟	「崑崙山脈ハーンヤイリク峰偵察報告書」
	――　Johnson's E-58	35, 51/79, 35	I 44－Ⅱ		
1996	ハーンヤイリク	初登頂		日本勤労者山岳連盟	「砂塵の彼方へ崑崙山脈ハーンヤイリク初登頂」 AAJ(CE)-1997
1996	＊四岔雲峰　6748 m	周辺偵察		四岔雲峰山麓遊游隊	岳人97/8 「タクラマカン沙漠横断と崑崙山脈トレッキング」
	――（阿克塔格）　Aktag	36, 43/84, 35	J 45－ＸＸＶ	（中央クンルン）	
1997	クンルン7167	登頂		西陣山岳会	「崑崙山脈7176ｍ登山報告」
1999	＊ケリヤ川源流部	偵察		稲門山岳会	山と渓谷99/12
			J 44－ＸＸⅣ、I 44－Ⅳ/Ⅴ		
1999	＊チョンムズターグ　6962 m	偵察		稲門山岳会	山岳-95　山と渓谷00/2　山-658　HJ-v57
	瓊木孜塔格　Chong Muztagh	35, 39/82, 20	I 44－Ⅴ、J 44－ＸＸＸ/ＸＸＸＶ/ＸＸＸⅥ		
2000	チョンムズターグ	初登頂		早稲田大学山岳部	山岳-96 岳人00/11 「チョンムスターグ登頂」 AAJ(CE)-2001　JANews-1
					ANB［遥かなるコンロンを越えて・幻の山チョンムスターグ登頂 2001年3/18］
2000	＊西部クンルン(KOR65)　6540m	初登頂		京都府立一中ＯＢ会	山岳-96 「KOR 65登頂報告」
	――　P. 6540	35, 48/79, 35	I 44－Ⅱ		TVO［未踏峰に挑む！　夢を追い続けるシニア山男の登山記録 2000年10/9］
2000	カシタシ	試登		信濃高体連	(岳人2000年海外登山リスト)

カラコラム

年月	山名・標高・ルート 中国名・欧文名(ピンイン名) ／ 位置(経緯度) ／ 旧ソ連製1/20万地図番号 ／ 備考	成果及び結果・備考	主体登山隊名	報告、発表文献 映像記録(放送されたもの)
1981	＊チョゴリ 8611 m 喬戈里 [Qogir] K 2	偵察 35.53/76.31 I 43－V	日本山岳協会	山岳-77 岳人82/1 山と渓谷82/1 Sangaku-1982
1982	チョゴリ北稜―北壁	登頂、初登攀	日本山岳協会	山岳-78 山-449 岩と雪86 岳人82/11 山と渓谷82/11 岩と雪92 「喬戈里峰登頂記」「砂漠と氷雪の彼方に」「チョゴリへの道」 Sangaku-1983 AAJ(CE)-1983 NHK［全記録・喬戈里峰登頂 82年10/8］
1985	＊クラウン 7295 m 皇冠峰 The Crown	試登・東壁 36.06/76.12 J 43－XXXV	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ86/2 岳人86/1 「砂漠の涯の遠き頂」
1987	クラウン	試登・南東稜	静岡大学	山岳-83 山と渓谷88/1 「静岡大学西蔵学術登山隊報告書」 Sangaku-1988 AAJ(CE)-1988
1989.6	＊ガッシャーブルムⅠ 8088 m 加舒尔布鲁木Ⅰ峰 Gasherbrum Ⅰ	偵察 35.42/76.42 I 43－V	横浜山岳協会	岳人89/9 AAJ(CE)-1990
1989.9	ガッシャーブルムⅠ	試登・東稜	宮城県山岳連盟	「シャクスガムの遥かなる峰」 AAJ(CE)-1990
1990	＋チョゴリ北西壁	登頂、初登攀	横浜山岳協会	山岳-86 岳人90/12 ヒマラヤ91/1 「聖域の巨峰」 Sangaku-1991 AAJ(CE)-1991
1990	クラウン	試登、遭難	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ90/12 AAJ(CE)-1991
1992	クラウン	試登、遭難	日本ヒマラヤ協会	ヒマラヤ93/1.2 AAJ(CE)-1993
1993	クラウン	初登頂・東壁	日本山岳会東海支部	山岳-89 山と渓谷93/12 「日中友好皇冠峰登山隊1993報告書」 Sangaku-1994 AAJ(CE)-1994
1993	＊チリン 7038 m 麒麟峰 Chiring	偵察 35.55/76.10 I 43－V	岐阜大学	「駅麟峰初登頂」
1994	チリン	初登頂、北峰も登頂	岐阜大学	岳人94/11 「駅麟峰初登頂」 AAJ(CE)-1995
1998	＊ガッシャーブルムⅡ 8035 m 加舒尔布鲁木Ⅱ峰 Gasherbrum Ⅱ	偵察 35.45/76.39 I 43－V	立教大学山岳部	岳人98/10
1999	ガッシャーブルムⅡ	試登	立教大学山岳部	山岳-95 「加舒尔布鲁木Ⅱ峰」 AAJ(CE)-2000
2000	チョゴリ北稜	試登	東京YCC	労山第12回海外登山集会資料 JANews-1

（児玉茂 編）

第二次ＲＣＣのあしあと

―極限登山者の輩出を促した先駆的集団―

二宮洋太郎

一、はじめに―ＲＣＣⅡのイメージ

第二次ＲＣＣ（Rock Climbing Club Ⅱ）という集団が発足したのは一九五八年（昭和三十三年）、今から四十数年も前のことです。当時はやっと戦後が終わったころで、まだ外国に出られない鎖国の時代でした。現在とは国内の社会情勢も日本のおかれた国際環境も全くちがうわけで、また当時この集団が旗印にしていたアルピニズムの内容や価値観、あるいはそれらを含めた登山というものも、現在とはかなり相違しています。したがって本日の私の話が皆様にとってどの程度意味のあるものかよく分かりませんが、たとえば「一つの時代の歴史」として、あるいは「少し古い世代の山に対する態度」としてお聞きいただければ幸いかと思います。

はじめにＲＣＣⅡの特色、そのあらすじみたいなものからご紹介したいと思います。

まず第二次ＲＣＣという名称ですが、これはやはり会の目的や性格をずばりと表現しております。第一次ＲＣＣと

第二次 RCC 創立総会に集まった人々（1958 年 1 月 31 日）　後列、左から吉尾弘、五十嶋一晃、渡辺司夫、甘利二朗、原田善雄、大高俊直、堀仁、吉岡三樹、中列　小林忠次、奥山章、大江幸雄、芳野満彦、亀岡隆志、吉田二郎、内田康弘、前列　小板橋徹、浅野孝一、二宮洋太郎、深田久彌、藤木九三、山川淳の諸氏（「岳人」第 119 号昭和 33 年 3 月号より転載）

申しますか、最初のＲＣＣは皆様もご承知のように、一九二四年（大正十三年）から約十年間活動した団体で、関西登山界の藤木九三、水野祥太郎、津田周二などによってつくられました。そして当時の新知識としてのロッククライミングを中心とするスポーツ的な近代登山術の研究と実践に活躍して、穂高滝谷の初めての岩登りや、積雪期の山の開拓までを実行したグループです。日本のアルピニズムの黎明期においてパイオニアの大きな役割をはたしたといえます。

　われわれの第二次ＲＣＣはそのアルピニズムを継承して、さらに発展させるため、その設立総会で第二次を襲名することを全員一致で承認しました。このＲＣＣⅡの大きな特色は、山に登るための団体だった当時の一般の山岳会とちがって、アルピニズムを研究する研究団体であり、会員は同人として対等で、運営は合議制であったということです。

　したがって、山行には会はノータッチでしたが、同人達が尖鋭なクライマーであったため、一九五

七年（昭和三十二年）からの国内の積雪期の岩場のDifficult Variationルート、いわゆるDVルートの初登攀競争に活躍した同人が多かったことは事実です。集団の極地法による登山とちがって、少数あるいは個人のクライマーがDVルートに挑戦するというこの流れは、さらに一九六三年（昭和三十八年）以降は、折からの海外渡航の解禁もあって、アルピニズムの本場のアルプスの北壁や六級ルートにも向かい、大きな成果をあげました。

これらはいずれも同人個々の登攀でありましたが、その後RCCⅡが海外遠征を自ら組織したこともあります。一九六五年（昭和四十年）に発足した「中央アジア登山委員会」がカフカズ、パミール、ヒンドゥクシュなどへ遠征隊を派遣し、一九七〇年（昭和四十五年）発足の「ヒマラヤ委員会」は日本エヴェレスト南壁登山隊を出しております。前者は当時閉鎖されていた広大な中央アジアのはての山々で、探検の要素も含む登攀であり、後者は「より高くより困難な」DVルートの頂点というべきものでありました。

こうした果敢なアルピニズムの先鋭的でパイオニア的な行動はRCCⅡの大きな特色でしたが、このアルピニズムの行動を一貫して高め、その方向や基礎を培った登攀の基層文化ともいうべき研究活動、文化活動もまた、研究団体としてのRCCⅡの大きな特色でありました。この研究活動と登攀が互いにフィードバックされて、RCCⅡの発展がありましたが、それについては後にまたふれます。

以上は簡単なあらすじみたいなものですが、それでは、このようなRCCⅡが外からはどのように見られていたか。ここで後世の人のRCCⅡ評をいくつかあげてみます。

一九八二年（昭和五十七年）刊の佐瀬稔著『喪われた岩壁』に、次のような記述があります。

「積雪期の岩登りを、邪道異端の行為から、正統アルピニズムとして大声に主張し、認知させたのがRCCⅡ、それは出発点ではまさしく『反体制運動』だったのである。だが華やかな登攀が相次ぎ、一流クライマーが第二次RCCに相ついで投じて同人となるにつれ、第二次RCCは急速に反体制の色を失って行く。皮肉なことに革命集団がいつの間にか権威の集団となる」。

「北岳バットレス中央稜」積雪期初登攀（1958年1月）　RCCⅡ発足のきっかけとなった。左から小板橋徹、甘利二朗、奥山章、吉尾弘（撮影　芳野満彦）「北岳の頂上　本当になつかしい　しかも生きているのは小板橋君と私　2人だけ　なんだか変な氣持だ」という芳野満彦の讃がある

さらに、もっと新しい一九九八年（平成十年）刊の福島功夫著『山の名著三〇選』に、RCCⅡの同人である吉尾弘著『垂直に挑む男』（一九六三年刊）の書評として書いたものがあります。

「吉尾たちは、ともかくも当時の登山界のよどんだ風潮に一石を投じ、過激なまでに革新的な登山を実践した。しかし彼等の変革の情熱に、将来の展望を切り拓くに十分な先見性が伴っていたかどうか疑問がある。（中略）RCCⅡの『革命』は華々しかったわりに内容がなかったのではないか。」

後世の二人の第三者の評をとりあげてみましたが、当時においても山岳界のなかでは、平地に波瀾を起こすような新しい登攀やデモンストレーションを次々におこなったRCCⅡに対して、批評は、非難をふくめて、限りなく多く、さまざまなものがありました。この批評のなか

に、虚像と実像がつねに入り乱れたことも、これまたＲＣＣⅡの特徴でありました。したがってこのように四十数年後の今日、その実際のあしあとを確かめる機会を与えられたことは、まことに幸せであると思います。

なお、後でまたふれますが、ＲＣＣⅡの組織は一応今も存続しております。本日お話しするＲＣＣⅡは、創立時の一九五八年（昭和三十三年）からエヴェレスト南壁遠征の一九七三年（昭和四十八年）までの十五年間のＲＣＣⅡを対象としております。これは、藤木さんたちのＲＣＣは十年でしたが、第二次はこの十五年で設立の目的や活動が一応燃えつきたように、私には思えるからです。勝手な区分ですが、ご諒承いただければと思います。

二、設立―その背景と目標

はじめに誕生当時の社会的背景について簡単にふれておきます。

ＲＣＣⅡ誕生の前々年である一九五六年（昭和三十一年）は、経済白書が「もはや戦後ではない」と述べたように、初めて「戦後は終わった」とされた時代ですが、ちょうどその年にＪＡＣのマナスルの登頂があり、国内では数年来、登山ブームが高まっておりました。登山人口も急増して、山岳書や案内書、それにレビュファーやヘックマイヤーなどヨーロッパの尖鋭なアルピニスト達の登攀記の翻訳書がよく読まれました。そして新しく尖鋭なアルピニズムの方法として、日本の意欲的な社会人登山家を中心に、積雪期のＤＶルート開拓が注目されてきた時代です。

その翌年、この傾向は強くなり、三月の前穂高四峰正面や谷川岳の一ノ倉沢滝沢などの最も難しいルートが次々に初登攀され、それが一部のジャーナリズムの関心をよぶことにもなりました。当時、遭難事故も多発しており、登山が社会の関心を集める新しい現象になりかけていたのです。

こうしたＤＶルートの挑戦者のなかに、奥山章という天才的なクライマーがいました。彼は戦中戦後に谷川岳を登って、当時三十歳を過ぎていましたが、まだＤＶルートをねらう一人でありました。彼は一九五八年（昭和三十三年）一月、それぞれバックのちがう四人の挑戦者を糾合して、北岳バットレスの中央稜を初登攀しましたが、これを機と

「RCCⅡ 涸沢講習会」(1959年6月) 後列左から 氏名不詳，吉尾弘，小板橋徹，吉田二郎，芳野満彦，片山全平，前列左から 藤木高嶺，奥山章，藤木九三，二宮洋太郎

してRCCⅡの結成へ意欲を燃やしました。彼は第二次RCCの設立趣意書でこう述べています。

「この度同志あい集い、第二次RCCともいうべきものをつくろうという気運がたかまりました。旧RCCは関西において活動しておりましたが、今回は東京在住の若い前衛的な登山家を結集して強力な組織をつくり、セクショナリズムの打破と、共同研究や情報交換の場をつくりたいと考えます。こうした活動の雰囲気のなかから、やがて海外の山への大きな夢も実現するに違いないと確信します。」

この呼びかけに、一九五八年（昭和三十三年）一月の末、藤木九三、深田久弥、高須茂などの先輩や、奥山を中心に二十数名の若手クライマーが集まり、第二次RCC設立総会が開催されることになりました。初代代表は岡部一彦でした。

発足直後の五月に、奥山はRCCⅡの機関誌『RCC時報』の第一号に「スーパーアルピニズムの旗のもとに」という巻頭文を書いていま

す。

「僕等にはアルピニズムの先蹤者達からうけついだ遺産を、さらに次の世代の人々に申しおくる義務があります。そうした意味でなすべき僕等の時代的な役割は何か、それを正しく意義づけることこそ第二次RCC結成の目的でした。『ルートランキングの研究』『新しき用具の研究』『登山用語の研究』等々、僕等はセクトのカラを脱し、共同の場で視野を広く持ちながら、僕等にとって本当に必要な問題を慎重に、具体的に着々と解決しつつあります。そしてそれらの努力はすべて僕等の理想と目標に近づくための、重要なステップとなることを僕は信じます。その理想と目標を一人の仲間はスーパーアルピニズムという言葉で表現しました。」

このスーパーアルピニズムという言葉は、後に行為として、人工登攀や連続登攀などのビッグクライムを意味するようになりましたが、この一文からはまだその内容は伝わってきません。むしろここでは登攀の時代的役割を問い、ルートランキングなどの研究活動の推進をうたい、アルピニズムの行為に対する思考や、基礎の研究などを通して、広く豊かなアルピニズムを実現したいと言っているようであります。このあたりは奥山章の多面性を示すものかもしれません。

RCCⅡの規約は設立後一年を経過したころにできましたが、「アルピニズムを多角的に研究することを目的とする」「同人は第二次RCCの運営、事業などについて平等の権利をもつ」「種々の命題によって研究活動をおこなう」等々、当初からの趣意を簡潔に規程化したもので、自由平等の大人の会らしく法三条式の簡単なものでありました。会の運営も世話人の会議や総会の決議で動き、代表もあまり権限はありませんでした。この会の運営は自由で平等でした。同人制であったことが大きな要因であったかも知れません。同人は一定の資格のある者に限定されましたが、その後増え続けました。RCCⅡの新しい登攀や多岐にわたる事業は、その自由の中から生まれたものと云えます。

こうして動きはじめたRCCⅡですが、振り返ってみると、このスタートは、登山ブームとなった社会の流れのなかで、オルガナイザー奥山の呼びかけによってつくられ、DVルート開拓という時流にバックアップされたというこ

とでありましょうか。

ではRCCⅡはいったい何をしたのか。それを次の四つの章に分けて、RCCⅡのあしあとを振り返ってみたいと思います。

三、活動 (1)―アルピニズムの体系的研究

『RCC時報』一号には、簡単な誌面に三つの記事があって、いずれもRCCⅡの性格や方向を象徴するものでありました。一つの岩場のルートランキング、一つは埋込ボルトのテスト報告、もう一つは創立同人渡辺司夫君の遭難死を悼む一文です。

日本の岩場に初めて客観的なルートランキング（後にグレーディングという）をつくるための試論。それから来るべき人工登攀の用具として、画期的な埋込ボルトの実際の埋込と衝撃試験の報告。これらはいずれもアルピニズムの研究の場を標榜していたRCCⅡがかかげた二つの大きな命題でありました。そして最後の哀悼の一文は、この尖鋭な集団の最初の十字架でした。遺憾ながら、その後の進展とともに十字架は続くのですが。

研究活動を目的とするRCCⅡは当初、グレード、登山技術（用具、用語を含む）、登山思潮、海外登山などの研究会を設けましたが、そのなかでグレードと技術のテーマが相伴って、スポーツとしてのアルピニズムの指導教程の基礎となることに着目して、この両方を総合した大きな目標として、アルピニズムの体系化をめざすことになりました。穂高で何度か開催した登山教室の企画も、その最初の段階の実験でありました。

次に各研究会の経過を述べることにしますが、はじめのグレード研究会の動きに入る前に、同じ時期の外国のグレードの状況について簡単にふれておきます。

一九二六年にドイツの名クライマー、ヴェルツェンバッハによって、アルプスの岩場のルートに六段階制のグレードがなされました。このグレード体系は非常に簡素的確で、いわゆるヨーロッパの体系、ドイツ、オーストリア、イ

ギリス、イタリア、フランス、スイス、などの各国のグレードの原型となり、その後さらに数量的なソ連のアルピニズム憲章にまで発展しました。各国のグレード体系にそれぞれ若干の差異があるのは、もちろん山のスケールのちがいもありますが、グレードの目的の相違があるからです。たとえばスイスやフランスのように指導者やガイドが社会的に必要であれば、そのための養成機関や資格認定のシステムが要るでしょうし、ドイツやイタリアのようにガイドレスが普及すれば、精密な案内書が必要となるでしょう。また遭難事故が多発して社会的規制の声が強まれば、登攀者の資格問題もおこります。いずれもその根底にはグレード体系があって成り立つわけです。

ＲＣＣⅡの「グレード研究会」は、国内の代表的な岩場のルートやピッチについて、その登攀の困難度をできるだけ客観的に測定し、全国同一評価体系のなかで、六段階にグレードしました。さらにそれを基礎とした三段階の登攀能力のグレードとともに、ＲＣＣ体系として公表されました。一応完成まで七年間を要しましたが、最も留意された点は、その公共性のために、科学的に問題を取り扱うことでした。評価のためには主観をできるだけ排した帰納法と統計学上の数量化の方法を採用し、さらにクライマー集団のメリットを生かした個々の調査と、反復討議の過程を経てまとめられ、一九六五年（昭和四十年）に『日本の岩場』として公刊されました。なおこの公表前後には、この体系と各国のグレードとの実際上の比較調査がなされ、その結果、十分に国際比較に耐えられることが報告されました。

このグレード体系は、前にもふれましたが、技術体系と併用して、スポーツとしてのアルピニズムの指導教程の基礎となり、登攀指導や能力検定、カリキュラムなど、登山が科学的な体系を形成するうえで、最も重要なシステムであります。したがって、定期的な検討・改訂が必要となります。

次に「登山技術研究会」ですが、この研究会は埋込ボルトの埋込および衝撃試験という、まさに衝撃的なイベントからはじまりました。積雪期のＤＶルート登攀の開幕という時代背景のなかで、このボルトの考案者、同人大江幸雄ははっきりと、「この埋込短小ボルトを考案した動機は、人工登攀用具研究の一部として考えたもので、その目的は従来の方法で登攀不可能な岩壁を登ることにあり、また事故発生時などに充分信頼しうるアンカーとして使用するこ

とです」と言いきっています。

このボルトの設計、製作、実験は、すべて同人の専門家たちの手によるものでした。また当時、登攀不可能といわれた谷川岳一ノ倉沢コップ状正面壁が、同人松本龍雄たちによって日本最初のボルト使用の登攀で登られました。いわゆる人工登攀の第一号であります。埋込みボルトは、その後軽量化・量産化され、DV開拓期の人工登攀時代を迎えることになりました。

技術研究委員会はこのボルトの製作やピッケル、アイゼンなどの登山用具の改良、モデルRCCの製作などにもタッチしましたが、最も力を入れたのは登山技術体系の整備です。当時の登山技術体系は藤木・水野体系からいくらも出ていませんでした。技術の中心だった奥山は『時報』五号で、「RCCのグレード体系が完成した今、グレード体系を骨格とするアルピニズムの肉づけとして、技術体系の研究をさらにすすめなければならない。グレード体系が単にクライマーの主観を集めたものでなく、科学的統計的に研究されているように、技術体系も単に経験的演技の羅列とその解説であってはならない。登攀という演技を分類整理し、体力科学や運動生理学の面からも解明し、さらに科学的な指導法にまでまとめあげることが必要である」と、その方向を述べています。

一九六八年（昭和四十三年）の『現代アルピニズム講座』第三巻に、研究会の「登攀技術教程―技術解説と指導法研究」が試案として発表されました。しかし一九七二年（昭和四十七年）に奥山がなくなり、その後の進展をみることができなかったのは、まことに残念なことでありました。

「登山教室」は、それまでのグレードや用具、技術などの研究成果を総合して、モデル講習会として何回か穂高涸沢で実施されました。RCC体系による二～三等級ルートを中心に、中級程度の雪上技術や岩登り技術の基礎課程を習得させ、同時にその指導研究もかねておりました。その結果は『現代アルピニズム講座』第一巻の「技術の指導体系」にまとめられております。

研究会のなかに「登山思潮研究会」がありますが、これは集団の尖鋭な登攀という行為に、思考や方向性を与える

役割をはたしたといえます。機関誌の『RCC時報』や各種の出版物、ゼミナール、座談会などで、千坂正郎、山川淳ら研究会のメンバーや、いわゆる長老達のアルピニズム論やRCCⅡ論が多く展開されて、RCCⅡの行動や方向、研究などに多大の影響を与えていたことは、まぎれもない事実でありました。

『時報』六号には、思潮研において「近代登攀史の年表をつくり、人、山、時代をRCCの立場からみなおす」ことや、「RCCⅡの行動テーゼの草案をつくる」ことなどが提案されています。ただ研究会として「近代登攀史」は時間ぎれとなりましたが、研究会の同人である安川茂雄や斉藤一男は、それぞれ『近代日本登山史』(あかね書房)、「近代日本のアルピニズムの歴史」(『現代アルピニズム講座』第一巻)などとして、個人の労作を発表しています。

さらに研究会の活動として「海外登山研究会」があります。これは一九六三年(昭和三十八年)の総会で新発足することになりましたが、その実施のために、一九六五年(昭和四十年)九月に「中央アジア登山委員会」、一九七〇年(昭和四十五年)三月に「ヒマラヤ委員会」をそれぞれ発足させました。

四、活動 (2)—出版その他の普及活動

RCCⅡが運営を世話人を中心に合議制ですすめたことは前に述べましたが、そのために停滞や思いつきに振りまわされることも少なくありませんでした。しかし全体としては自由闊達に議論をし、やることはやったのではないかと思われます。それを反映した機関誌『RCC時報』は若干の停滞もありましたが、一九五八年(昭和三十三年)五月から一九六九年(昭和四十四年)五月まで十三回発行されました。今それを読みかえしてみると、当時の空気がよく伝わってきます。

『時報』のほかにRCCⅡの大きな活動期や研究の区切りの段階などに、その成果を特に出版物にまとめ、登山界や一般社会に公開して意見をもとめました。それらを一応年代順にあげてみます。

『岩と雪』創刊号(山と渓谷社)　当時の尖鋭な登攀記録を編集。一九五八年(昭和三十三年)十月刊

『ケルン』六号（朋文堂）　RCC同人特集。一九五九年（昭和三十四年）九月刊

『登攀者―積雪期登攀記録集』（山と渓谷社）　同人を中心とした一九五七年（昭和三十二年）からの代表的な国内DVルート初登攀等の記録集。一九六三年（昭和三十八年）七月刊。本書は尖鋭的なアルピニズムの具体例となって、全国の若いクライマーにDV登攀を普及させることとなった。

『日本の岩場―グレードとルート図集』（山と渓谷社）　グレード研究会のまとめた日本の代表的な岩場のグレード表とルート図。一九六五年（昭和四十年）十一月刊。日本で初めての岩場の科学的なガイドブックとして、クライマーに普及した。また外国の岩場との比較も可能となった。

『挑戦者―'65アルプス登攀の記録』（あかね書房）　一九六五年（昭和四十年）夏アルプスに挑戦した同人達の記録集。一九六五年（昭和四十年）十二月刊。日本人クライマーのアルプス進出の暁鐘となった。

『現代アルピニズム講座』全七巻（あかね書房）　RCCⅡが総力をあげてアルピニズム全般にわたる解説、研究、評論等をまとめたもの。同人五十五名が執筆。この時代のレベルを示すものであるが、総花的でRCCらしさがないとの批評もありました。一九六八年（昭和四十三年）七月～一九六九年（昭和四十四年）二月刊

『日本の岩場―グレードとルート図集』改訂版　一九七一年（昭和四十六年）五月刊

以上は出版関係の活動ですが、そのほかアルピニズムを社会的に普及させる活動があります。思いつきのようなことがらをふくめて玉石混淆でありましたが、その意欲と行動を若干あげておきます。

「登攀報告会」積雪期DVルート開拓の初期、同人を中心とした初登攀者たちのなまなましい報告を聴く会を、一九五八年（昭和三十三年）四月（第一回）と一九五九年（昭和三十四年）五月（第二回）に、そしてアルプス北壁等の登攀について、帰国直後の一九六五年（昭和四十年）十月（第三回）に開催し、好評であった。

「アルピニズム・セミナー」　若い現役の登山家を対象に、第一回は一九五八年（昭和三十三年）十月に三日間開かれた。テーマはたとえば、日本登山思潮史、グレーディングについて、前衛的アルピニズム論、積雪期登山のタク

ティクス、人工登攀、埋込ボルト、等々。第二回は一九六三年（昭和三十八年）六月、第三回は一九六五年（昭和四十年）十月に、テーマは異なるが同じスタイルで開かれた。これは私どもにとってもよい勉強会になりました。

「冬山のすべて―銀嶺展」　一九五八年（昭和三十三年）十一月に都内のデパートで実施。この展覧会開催には異論もあったが、企画者の奥山は「新聞社や百貨店の期待は、人工登攀のオーバーハングの乗越しやチロリアンブリッジなどをインドアで公開させ、客寄せの手段にしたいのだろうが、ある程度妥協して逆にＲＣＣらしい個性のある展覧会としたい」と述べています。これは手を汚してでもＲＣＣⅡのＰＲを考えていたのかもしれません。

「藤木九三レリーフを滝谷に設置」　佐藤久一朗作のレリーフが一九六五年（昭和四十年）六月、他団体と協力して穂高滝谷出合にとりつけられ、六月四日に除幕式が行われた。折にふれて藤木祭が催されている。（編者註参照）

「日ソアルピニスト交流会」「日伊アルピニスト交流会」　前者は一九六九年（昭和四十四年）五月、後者は一九七一年（昭和四十六年）五月、いずれも交換登山で来日した両国の登山家との交流登山および歓迎行事。

「日本アルパインガイド協会発足」　直接ＲＣＣⅡと関係はないが、一九七一年（昭和四六年）四月、同人の奥山が同協会を別途発足させました。その趣旨書は「アルプスのガイド達は、ガイドのみならず技術の研究者、教師、用具の開発者、アルピニズム社会の管理者など重要な役割を演じているが、日本の登山界でも同じような社会をつくらなければならない」と述べています。これはガイドとしてのプロ宣言で、奥山は翌年なくなったが、同協会は今も続いています。

五、活動　(3)―個人山行（ＤＶルートから北壁へ）

ＲＣＣⅡは個々の登攀には直接タッチしませんでしたが、設立前後、積雪期ＤＶルートの開拓時代の開幕となった前穂高四峰正面壁や、谷川岳一ノ倉沢滝沢などの登攀、ＲＣＣⅡ誕生の伝説となった北岳バットレスの登攀などをはじめ、それに続く数年間、同人達のパイオニア活動はまことにめざましいものでした。その活動がさらに人工登攀や

連続登攀にまで発展すると、スーパーアルピニズムのRCCⅡなどという虚名が高まりました。スーパーアルピニズムの提唱者であった奥山自身が『登攀者』の座談会で、「あれはただのアルピニズムだよ。僕が言おうとしたのは、既成概念をぶちこわさなければならない。アルピニズムというのはいつでも登山のアヴァンギャルドなんだ」と解説しておりますが、虚は実をよび、実は虚をよんだ。これはRCCⅡの一面でもありました。

これらの活発な登攀活動が、ある種の反感とともにRCCⅡの知名度や評価を高め、若い多くのクライマー達の憧れの的となったことは、その後のRCCⅡの発展が物語っています。このころの同人達の個々のパイオニアワークについてくわしくふれる余裕はありませんが、その代表的な二十数例は、前にふれた『登攀者』に雪と岩と鉄の記録として残されております。

同人のなかには、その自らの記録とその精神的土壌を率直に書き残した人々もいます。たとえば、『わが岩壁』古川純一・三十五歳、『山靴の音』芳野満彦・二十七歳、『垂直に挑む男』吉尾弘・二十一歳、『初登攀行』松本竜雄・二十七歳などで、いずれも中公文庫から出版されております。これらの年齢はRCCⅡ発足当時のものですが、いずれも若く、より困難なアルピニズムの道へ、青春をかけた人々の息づかいが、これらの書から伝わってきます。

国内のDVルートの開拓は、より若い人によって、より広く山々にひろがり、昭和四十年代に入っても続くのですが、大勢はアルプスへ移ることになりました。

一九六三年（昭和三十八年）夏には、同人芳野満彦と大倉大八はヨーロッパアルプスのアイガー北壁登攀をこころみて、日本人のアルプス六級ルートへの先鞭をつけました。ヒマラヤ指向の風潮に新アルピニズムが拓かれたといえます。一九六四年（昭和三十九年）には海外渡航の自由化もあり、翌年RCCⅡ同人を中心にアルプス三大北壁の二つと主なルートが登られました。その後同人以外にも毎年日本人クライマーが続き、冬期の三大北壁、そしてディレッティシマ（直登）にまで発展することとなりました。

この画期的な一九六五年（昭和四十年）夏の記録は、やはり前にふれた『挑戦者』一巻にまとめられております。

そこに新旧世代の十人の同人によってアルプスの記録が淡々と書かれ、国内のＤＶルートで培った登攀力が、氷以外はアルプスで立派に通用したことも記されています。ただ渡部恒明と林与四郎というＤＶ時代からの同人が不幸にも犠牲となりました。

当時の日本の各団体があまり焦点の定まらない海外登山を指向するなかで、アルピニズムの生地の北壁や六級ルートに、マンメリーからレビュファまでの尖鋭な登攀を追うように期せずして同人が集中したことは、やはりＲＣＣⅡらしい行動というべきでありましょう。

六、活動　(4)―組織山行―地平指向と垂直指向

一九六三年（昭和三十八年）の春に「海外登山研究会」がスタートしたことは前にふれましたが、当時海外各地の山々には、ＪＡＣやＡＡＣＫのほか大きな大学のグループなどが進出しておりました。尖鋭なアルピニズムを標榜するＲＣＣⅡとしては、どこをどう登るのが最もふさわしいのか、議論が続きました。

一九六五年（昭和四十年）九月、当時の空白の大陸、中央アジアのカフカズ（コーカサス）、パミール、天山等を目標として「中央アジア登山研究会」が発足しました。この広大で未知の天地に皆の眼が向いたのは、ある印象的な一夜からでありました。

一九六三年（昭和三十八年）の師走、ＲＣＣⅡの有志が、ロシア文学者で、ソ連の山の文献などの翻訳者である袋一平氏をかこんで、中央アジアの山々の話を聞きました。カフカズのウシバの話、天山のポベーダ峰、パミールのコムニズム峰など、四千米から七千米を超える遙かなる山々。そして天に突き刺さる二本の巨大な牙のような、ウシバの双耳峰のスライドを、皆は食い入るように見つめました。岩と氷と蒼い空の厳しい美しさとともに、そこに至る広大な中央アジアという重くロマンに満ちた言葉が、恻々として私たちの血をかきたてるのも聞きました。

しかし、そこは当時中国やソ連の閉鎖された地域でありました。交流のなかったソ連との試行錯誤の交渉の結果、

同人望月亮らの尽力で、ソ連プロスポルトの線からようやく話がまとまりました。中央アジア登山委員会は一九六六年（昭和四十一年）から一九七一年（昭和四十六年）まで、カフカズへウシバを中心に四隊、パミールのレーニン峰へ一隊、そのほかヒンズークシュやヒンズーラジなどへも三隊を出しています。いずれも日本人としてのパイオニアワークでありました。

またカフカズでは現地の登山学校に二名が入学して、ソ連のアルピニズム憲章によるグレードや技術、能力システム等を実地に体験しました。

当時としてはほとんど前知識もないまま、中央アジアのはて、それこそ地平の彼方の山々を登ったことになります。スーパーアルピニズムのRCCⅡではありましたが。垂直だけでなく、パミールやヒンズークシュの未踏の地の踏査をふくめた英国流の探検と登攀、いわば地平と垂直の山行も重ねていったのであります。記録は『時報』や安川茂雄著『アフガニスタンの山脈』（あかね書房）『パミールの短い夏』（朝日新聞社）などがあります。

一九六五年（昭和四十年）からネパールは登山禁止でしたが、一九六八年（昭和四十三年）には解禁されました。同人の奥山は、ヒマラヤをやるなら北壁の延長として六千米の壁を登ろうと主張をしており、一九七〇年（昭和四十五年）春の総会で実行のために「ヒマラヤ委員会」が発足しました。この直後、JACがエヴェレストの垂直の壁、南壁に挑戦したが、八〇五〇米で敗退、東南稜から登頂したというニュースが流れました。RCCⅡのかざすアルピニズムの旗は「最も高く最も困難な登攀」であります。エヴェレストの南壁こそまさに我々の目標ではないかというアピールがおこりました。しかしそれには、RCCⅡが反対していた極地法なども必要になるのではないか、という反論もありました。

RCCⅡは創立以来十二年を経過して、途中から入ってきた若いクライマーたちが第一線に立ちつつありました。一人のクライマーの最盛期は決して長くはないのです。かっての国内のDVルート開拓の流れは、少しずつ世代を変えながら、アルプスの北壁を洗い、いまやヒマラヤをうかがう勢いとなっていました。

若い世代を中心にヒマラヤ委員会は、このエヴェレスト南壁計画へまとまり、一九七一年（昭和四十六年）十二月に入って登山許可が下り、南壁計画を発表することとなりました。隊長は、南壁に反対であった同人奥山に内定しましたが、彼は翌年死去し、計画の中心であった湯浅道男が登攀隊長となりました。彼も途中で入った世代でしたが、隊員はさらに若い世代となりました。隊にはＲＣＣⅡの同人ばかりでなく、全国から選ばれたクライマーも参加しました。

一九七三年（昭和四十八年）七月、ＲＣＣⅡはそれまでの最多の四十八人のクライマー集団をもって、二一五〇米の南壁の登攀に向かいました。個のアルピニズムの主唱者ＲＣＣⅡの、最初にして最後の集団登山でありました。そして十月二十七日、八三八〇米を最後として、ついに敗退することとなりました。悪天候だったといいます。東南稜からの登頂というおまけがありましたが、結局、一九七〇年（昭和四十五年）のＪＡＣの轍を踏んだという結果に終わりました。記録は、ＲＣＣⅡの報告書と、同人で新聞記者の藤木高嶺著『あゝ南壁』（朝日新聞社）があります。

七、流れと終焉―きらめきと残されたもの

『登攀者』のなかで同人山川淳は次のように指摘しています。

「どんなに優れた技術も、クライマーの豊穣な精神との平衡がとれなければ、登山における人間回復どころか、遂に人間喪失となりかねない。」

当初から登攀のための基層文化の研究を目的としていたＲＣＣⅡは、志したアルピニズムの完全な科学的体系がまだ未完のまま、エヴェレストを迎えることになりました。ＲＣＣⅡは十五年間の一途な燃焼を経て、その最後のきらめきをエヴェレストの南壁で迎えました。それも劇的な敗退という形で。そこまでＲＣＣⅡを持ちあげた流れが突如消えたのです。いや敗退したから流れが消えたのかもしれません。社会の期待に応えられなかったＲＣＣⅡは、時流にも見離されたのです。

第二次 RCC 事業年表（1958 年～1973 年）

1958.	1. 31	設立総会にて第二次 RCC（RCC Ⅱ）発足
(昭 33)	4. 4	第 1 回登攀報告会を開催（東京理科大学）
	4. 20	埋め込みボルトを試作，衝撃試験を実施
	5	RCC 時報 1 号を発行
	10. 28～30	第 1 回アルピニズム・セミナーを開催（学習院）
	10	山と渓谷社〔岩と雪〕創刊号の登攀記録を編集
	11	三越池袋店にて展覧会〔冬山のすべて〕を主催
1959.	1	RCC 時報 2 号を発行
	5	第 2 回登攀報告会を開催
	6. 24～28	第 1 回 RCC Ⅱ登山教室を涸沢にて開催
	9	朋文堂〔ケルン〕6 号（RCC Ⅱ同人特集）を編集
1960.	6	第 2 回 RCC Ⅱ登山教室を涸沢にて開催
1963.	6. 28～30	第 2 回アルピニズム・セミナーを開催（学習院）
	7. 1	第 2 次 RCC 報告『登攀者』山と渓谷社から刊行
1964.	4	RCC 時報 3 号を発行
	5	藤木九三同人レリーフ完成
	12	RCC 時報 4 号を発行
1965.	6. 4	藤木九三同人レリーフを滝谷に設置・記念ザイル祭
	7	RCC 時報 5 号を発行
	9	中央アジア登山委員会発足
	10	第 3 回アルピニズム・セミナーを開催（学習院）
	10	第 3 回登攀報告会（ヨーロッパ・アルプス）を開催
	11	グレードとルート図集『日本の岩場』山と渓谷社から刊行
	11	同上発刊記念講演会を開催（国立教育会館）
	12. 15	第 2 次 RCC 報告『挑戦者』あかね書房から刊行
1966.	6	RCC 時報 6 号を発行
	7～	第 1 次カフカズ登山隊遠征（デイフタウ南壁、ウルルアウズ他　上田哲農他 7 名）
	7～	ヒンドゥクシュ登山隊遠征（コ・イ・ムンジャン他　安川茂雄他 6 名）
	10	RCC 時報 7 号を発行
1967.	1	RCC 時報 8 号を発行
	6	RCC 時報 9 号を発行
	7	ヤルクーン踏査隊（海老原道夫・高橋善数）
	12	RCC 時報 10 号を発行
1968.	7～69. 2	RCC 編著『現代アルピニズム講座』全 7 巻あかね書房から刊行
	7	RCC 時報 11 号を発行
	7	第 2 次カフカズ登山隊遠征（ウシバ西壁　清水一行他 7 名）
	7	奥ヒンドゥクシュ踏査隊（雁部貞夫他 2 名）
	12	RCC 時報 12 号を発行
1969.	5	RCC 時報 13 号『創立 10 周年記念特集』を発行
	5	日ソ・アルピニスト交流登山および歓迎行事（富士山、剱岳、京都、東京）
	7	パミール登山隊遠征（レーニン峰　上田哲農他 3 名）
1970		藤木九三、上田哲農、深田久弥の同人長老が相次いで物故
	3	ヒマラヤ委員会発足
	7	第 3 次カフカズ登山隊遠征（チャテンタウ北壁他　二宮洋太郎他 5 名）
1971.	4	日本アルパイン・ガイド協会発足
	5	訪日イタリヤ登山隊と交流登山（穂高岳、富士山、京都、高山）
	5	『日本の岩場』改訂版を刊行
	7	第 4 次カフカズ登山隊遠征（シュロフスキイ峰、ウシバ他　高田直樹他 9 名）
1972.	7	奥山章同人物故
1973.	8	エヴェレスト登山隊遠征（南壁、東南稜　水野祥太郎他 47 名）

（訂責　二宮　洋太郎）

旧約聖書ヨブ記にでてくる怪獣リヴァイアサンは、社会の必要性によって生まれながら、遂に社会を呑みこんでしまう怪獣ですが、ＲＣＣⅡは逆に呑みこまれてしまった。別の表現でいえば、前衛は時代に追いつかれれば前衛であり得なくなるのであります。

かつてＲＣＣⅡの代表であった上田哲農は、

「登山の様式はつきつめるところ最後は個人に帰着する問題だ。ただＲＣＣとしての信条を問われれば、躊躇なく『より高くより困難なものに挑むものこそアルピニズムの主流』と確信をもって答えよう。この考えが不明瞭になったとき、集団としてのＲＣＣの存在理由もまた消滅してしまう。」と述べています。

これはイズムというより態度、姿勢というべきものかもしれませんが、このような厳しい旗をかついだ尖鋭なアルピニストの集団が、国内のＤＶルート開拓にはじまって、アルプスの北壁、そして世界の最高峰の南壁への道をひた走って、頂点に至ったとき、そこにあったものは何であったか。

あるいはそれは怪獣リヴァイアサンの死を悼んで、天空に華麗に展開した花火であったかもしれません。

四散した花火の余燼はあちこちに残されました。あるものは新しいアルピニズムの道を往き、今までのヒマラヤ登山の様式を変えました。あるものは登山の科学的体系的な研究を引き継ぎ、あるいはさらにグレード体系の改訂を続けるＲＣＣⅡの残された人々もいます。しかしそれらは余燼などではなく、新しい若木として成長することを、願わずにはいられません。

たかだか十五年の間に次々に世代交替をしたにもかかわらず、旗は少しも変わらなかった。その旗は無償の行為とストイックな献身をともないました。振り返ってみると、この奇妙な一団は、「愚直なまでにアルピニズムの旗をかついだ集団」という感慨さえいたします。

最後にこの感慨は、途中で倒れた同人も含めたこの奇妙な一団への、ささやかな墓碑銘となるのかもしれません。

（編者註）本稿は二〇〇一年二月二十八日、本会集会室で図書委員会の主催により「第29回　山岳史懇談会」として、講師に筆者「二宮洋太郎」氏を招き、講演していただいたものを、講師自ら、『山岳』第九十六年のためにまとめられた。

副題の「極限登山者」というのは『山岳』第九十二年で、田口二郎さんが「登山史上の人・各務良幸」のなかで使った造語です。田口さんはヨーロッパ・アルプスでは三大北壁とか、ドリューの西壁など困難な壁の登攀を「エクストリーム・アルピニズム」と呼んでいた。この呼称は日本には伝わらなかったが、戦後に日本人で初めて北壁登攀にいどんだ芳野満彦をはじめ、冬期三大北壁を単独で登攀した長谷川恒男に至る日本人の「極限登山者たち」という呼び方を田口さんが使われた。それを副題として使わせていただいた。

本文中の一九五八年一月の第二次ＲＣＣ創立総会の写真は二宮氏から提供いただいたものであるが戦前のＲＣＣ代表藤木九三が出席し、創立を祝福したこと、また本文十四ページに「一九六五年六月、滝谷に佐藤久一朗作の藤木九三のレリーフを設置」とあるが、その二年前の「一九六三年五月に同じ佐藤久一朗作の藤木九三のレリーフが六甲山高座の滝そばに設置された」と『山岳』第九十三年の「佐藤久一朗伝」は伝えている。そういえば佐藤久一朗氏も登山に対する考え方は幅広く、大きく、その交友も老若にわたって広く大きな輪を持っておられた方であった。

この創立総会には深田久彌が出席したのも、同氏の山に対する考え方の幅広さを改めて感じさせるものであろう。山岳会も藤木、深田両氏の謦咳に接したことがない会員が殆んどを占めるようになった。横山厚夫さんが「近頃のハイカーは、百名山の深田さんは知っていても、小説を書いたことも知らない」と何かに書いていたが、会員でも深田さんの「優れた紀行や、ヒマラヤ研究」について知っている人でも、第二次ＲＣＣの創立総会に出席していたことに改めて敬意を感じる人も多いのではないだろうか。それにしても、創立総会に出席した人たちが、皆若々しいことに、ある感慨を持たざるを得ない。

フォーラム「JACが挑んだ世界最高峰への足跡」

—'70エベレスト、'80チョモランマ、'88三国交差縦走、そして現在—

高所登山研究委員会

「あれから三十年、JAC三つのエベレスト」

フォーラムに寄せて…

会長　大塚博美

一九七〇年、日本山岳会がエベレスト登山を実施してから、丁度三十年を迎える。この間に本会が行なったエベレスト登山—七〇年エベレスト、八〇年チョモランマ、八八年三国合同登山—を振り返ってシンポジウムを開くことになった。

これらはJACの海外登山の歴史の中でも重要な位置を占める節目の登山であったので、非常に意義深いものがあると思われる。この充実した三十年間の登山の数々を見渡す時、世界の登山界の潮流を無視しては正確には捉えられない。

七〇年代は黄金時代と言われた八〇〇〇㍍峰十四座の初登頂終了の後を、引続き更なる困難なバリエーションルートからの登攀、いわゆる「鉄」の時代へと移行する。七〇年JACエベレスト南西壁への挑戦は、この幕開けの嚆矢として南東稜の登頂と共に意義深いものがある。

八〇年代にはそれまでの重厚な極地法登山形式に対して、軽量小パーティーによる、自由な個性的で多様な登山形式、いわゆるアルパインスタイルがその対極として定着してくる。その代表はスーパースターのR・メスナーである。

またこの時代に中国が登山を解禁し、その許可の第一号は日本に発給された。その実施はJACが行ない、北壁初登攀と北北東稜の二ルートからの登頂の偉業を成し遂げた。以降堰を切っ

たように各国の登山隊が中国領土の各地に向かった。

九〇年代は国際公募による商業登山隊の出現がその特徴であろう。エベレストの登頂者は一〇〇〇名を超え、世界最高峰としての新鮮さは薄れたが、高きがゆえになお人を引き付けてやまない。

一九二四年、北東稜で消息を絶ったG・マロリーの遺体が七十五年振りで捜索隊によって発見された。一九九九年のことであった。ヒマラヤの風雪に曝された遺体は、いまなお多くのことを生けるが如く物語るように私には思えてならない。と同時に、この北東稜をソロで登頂したR・メスナーのことを思い合わせ、登山の変遷に感慨無量であった。

また、JACの三つのエベレストで活躍した日本を代表する鉄人クライマーの、小西政継、植村直己、加藤保男、山田昇ら故人の登山界に残した輝かしい業績も末長く語り継がれるであろう。

このシンポジウムは登山と自然環境保全、そしてこれからの二十一世紀の登山のあるべき姿への指向など、いろいろな問題提起をしているが、これらの問題を考えるに当たって何らかのお役に立てれば幸甚である。

パネルディスカッション

コーディネーター　伊丹紹泰、　司会　坂井広志
パネリスト　平林克敏、湯浅道男、重廣恒夫、山本宗彦

坂井　日本山岳会は一九七〇年に日本人としてはじめてエベレストに登頂し、今年で三十年目になります。その後一九八〇年、一九八八年とこの世界の最高峰をさまざまなルートからチャレンジしてまいりました。この三十年間、登山界を取り巻く環境は大きく変化してまいりました。いまやエベレストの総登頂者数は千人を越え、この山はヒマラヤ登山の象徴的存在となっています。今回この三つの登山隊に関わった方にご登壇頂き、それぞれの登山に参加した想い・意義・価値、そして今だから言えるどのような苦労があったのか各時代背景を交えてお話し頂きたいと存じます。

伊丹　コーディネーターの伊丹です。今回パネルディスカッションにあたり三つの登山隊、七〇年・八〇年・八八年のエッセンスの部分をビデオに用意してあります。各登山隊の話に入る前に、ご来場の皆さんにイメージを抱いていただくために当時のビデオを見ていただきたいと思います。その後、各登山隊の内容をそれぞれパネリストの方に基調スピーチを頂きディスカッ

ションをする、というふうに考えております。

さて、平林さんが七〇年に登られた時はエベレスト登頂者二五人目、八〇年に重廣さんが登られた時は一〇六人目、八八年に山本さんが登られた時は登頂者ナンバーを通すことは不可能なくらい多くの人が登っています。二〇〇〇年のデータによりますと、もう一二〇〇名を越えているということです。経済発展と共に世界最高峰エベレストを巡っては登山隊、登頂者の数は一九七九年に中国側が門戸を開放して以来急速に増えてまいりました。それでは最初に七〇年エベレストのビデオをお願いいたします。（七〇年ビデオ）

一九七〇年エベレスト

伊丹　エベレストは一九五三年にイギリス隊に初登頂され、その後スイス隊、アメリカ隊（西稜）、インド隊、そして一九七〇年に日本隊に順番が回ってきたわけです。一九七九年に中国側が門戸を開放して以来急速に増えてまいりました。日本山岳会は一九五六年にマナスルに初登頂した後、マナスル初登頂十周年を念頭に当初一九六六年にエベレスト登山の計画を考えていたそうですが、当時の登山許可の取得はどうであったか、ネパールには登山全面禁止期間がありました。本隊に先立つ一年前の一九六九年の春に藤田佳宏さんが偵察隊の隊長としてウエスタンクームに、同年の秋に宮下秀樹さんが隊長になられて南西壁の取り付きまでの偵察をするのですが、このあたりの許可取得に始まり七〇年の登山に関わる部分までを登頂者でありますす平林さんに詳しく語っていただきたいと思います。

平林　早いもので今見ていただいた映像から三十年経ちます。あの時は三九人の隊員でしたが、すでに八名の隊員が山や病床で亡くなられました。二十世紀最後の年、日本山岳会の今日の晩餐会に我々と一緒にエベレストを共有し亡くなられた多くの友人達を交え話をできないことを大変残念に思います。そういう意味も含め、エベレストのことを話したいと思います。

一体、日本山岳会がいつからエベレストをやろうということを考えたのか。これは会として組織が出来てエベレストをやる以前に、マナスル以降それぞれの若い隊員には、いつかエベレストに行きたいという夢や思いがあったように思います。私は一九六四年に三田幸夫さんよりエベレストを計画しているから企画委員になれと通知を頂きました。当時サイパル登山から帰ってきた年でしたが、すでに会の中にはマナスル以降エベレストに対し熱い想いがあったと理解しております。

南西壁についてですが、当初、長老の人達、槇有恒さんや三田幸夫さんたちはうまくいくのかな、という意見もありました。しかし、計画が進むに連れ徐々に成熟し六四年の終わり頃には時勢からいってバリエーションルートをやろうという気運が盛り上がってまいりました。それは一九六三年のアメリカ隊の西稜登攀を考えましても、また八〇〇〇メートル峰も全て登り尽くされ

ており、そのような機運が出てくるのも当然の成り行きでした。

さて、ネパール政府からは六六年のエベレスト計画に関して内諾を得ていたのですが、一九六五年の三月一九日と思いますが、突如ネパール政府は全面登山禁止をします。この背景にはいろいろな理由があったと思われます。私が六三年にサイパルに行っていた頃、ネパールにはチベット難民が多数入ってきました。また一九五九年三月にダライラマがインドへ亡命、それ以降中国軍の武力弾圧と制裁は徹底的で、多くの犠牲者が出ておりました。このように国境を越えてやってくる難民や中共封じ込めの他国の動きにネパール政府は頭を痛めておりました。一方、各国の遠征隊がエベレスト街道に入り過ぎますと、一種の経済恐慌のようなものが起こり、通過する谷の地域賃金・物価が上がったりします。このような理由もあり全面禁止になったのだと思います。

日本山岳会としては当初マナスルから十年目くらいにエベレスト登山を念頭においておりましたが、ネパール政府の事情で実行が遅れてしまいました。その間に南西壁の計画が出て、真剣に取り組もうという機運になっていきました。しかし、当時のネパール政府は一隊一ルート、あるいは一国一シーズン一ルートという登山許可の基本方針をもっており、日本山岳会は毎日新聞、NHKの後援でエベレストの南西壁を計画し、スキー隊はノーマルルート、サウスコルから読売、TBSの支援で計画、このあたりの二隊の行き違いは登山隊が出発するまで続きました。ネパール政府は日本山岳会の登山許可は南西壁のみで東南稜からは登っては困るということを強く言っておりました。先発隊の私が現地で交渉にあたったのですが、大塚さんや松田さん等本隊がカトマンズを出発する日まで決着できずにいました。日本山岳会としては南西壁を登るにはどうしても東南稜からのサポートが必要であったわけですが、結局東南稜ルートについての話し合いはうやむやの状態で、とにかく出発することとなった訳です。隊員たちの中には、南西壁がうまくいかなかった場合は東南稜から登り、何としてでも日本人のエベレストを成功させなくてはならないという考えが基本にあったわけです。

エベレストの南西壁についてはいろいろな意見がありました。そのため第一次、第二次の偵察隊を本隊登山の前年に出し、キャラバンルートやシェルパの雇用、アイスフォールの通過、南西壁の取り付きといった事を調査・偵察することにいたしました。結果は第一次の藤田さん、続いて第二次の宮下さんの偵察では南西壁をなんと八〇五〇㍍まで登って帰ってきました。これは当時、驚異なことで世界中に日本隊はきっと登るのではないか、と予想されるくらい大きな話題となりました。しかし、そのうち多くの各国登山隊がこの八〇五〇㍍前後の高度で敗退しているわけですから、最初の偵察隊は世界の山岳界に先駆けた、すばらしいものだったと思います。

この南西壁は七五年にイギリスのクリス・ボニントン隊が成功するのですが「EVEREST THE HARD WAY」という本が発刊されヨーロッパでベストセラーになりました。私はこれをすぐに入手、翻訳出版しましたが、その中でジョン・ハントは日本の三つの輝かしい業績の上に初めて南西壁登攀が実現したのだと述べています。それは私たち日本山岳会の偵察隊と本隊、七三年の湯浅さんたちの隊の成果であり、たいへん重要な事だったと位置付けしております。また、クリス・ボニントン自身、自分達が南西壁を成功出来たのは日本人の山田圭一さんが撮られた航空写真によってルートが非常に鮮明によくわかったと、もし、日本隊が最初からその写真を持っておられたら南西壁を成功されていたであろうとも言っています。

私は南西壁を登るという計画案が出たときに、それでは酸素器具をはじめ、全て日本製の装備で実施したいと考え酸素器具の開発を担当いたしました。六五年から五年くらいかかりまして南西壁を登る目的で開発いたしましたが、その酸素呼吸器の形式は七〇年から八〇年中頃の登山まで使用されました。その後旧ソ連製のものが入ってきましたが、七〇年のエベレスト登山の際に開発した数々の装備をはじめ岩壁に建てるテント台などは当時としては画期的なものであったと思います。高所医学や地球物理学等、学術調査に払った役割も大きかったと思う。

このように、日本人として初めて八八四八㍍のエベレストに取り組む日本山岳会の人たちの努力と英知というものは大変なもので、評価は高かったと私は思います。私達が登頂に成功し、カトマンズに帰ってきた折、クリス・ボニントン隊がアンナプルナの南壁を初めて登りまして帰路、カトマンズで私たちと出会いました。彼が国際隊でエベレスト南西壁を登るときは参考にしたいとの要請もあっていろいろ話をしました。その時に日本の隊員を七一年の国際隊に入れなければダメですよ、と話をしました。日本山岳会としては植村君と、小西君を参加させる予定でしたが小西君は冬のグランドジョラスで凍傷になり、代わって伊藤君が行くこととなりました。実際、二人は大変立派な貢献をしてくれました。

いろいろな事情や時代背景もありましたが日本山岳会が最高峰エベレストに登るということは当然の思いであり、今後どのように登山思想や登り方がどんなに変わろうとも、やはり最高峰でありますからエベレストを目指す人は次々と出て来るものと考えます。ですから七〇年の登山がなぜエベレストであったかは、それは世界最高峰という他に比較する理由がないからであります。

伊丹　南西壁は一九七一年隊長ディレンファースの国際隊に植村直己さんと伊藤礼造さんが参加するのですが、当時大学生だった私は九段会館でその報告を聞きました。国際隊は翌七二年にヘルリヒコッファーが隊長を引き継ぎ、その後イギリス隊のク

リス・ボニントンが再度挑戦するのですが、到達高度は八三〇〇㍍でした。次に湯浅さんが若干三十七歳という年齢で、第二次RCCの登山隊を率い、重廣さんが八三八〇㍍まで到達いたしました。クリス・ボニントンは当時ヒマラヤ鉄の時代における三つの課題ということで、アンナプルナ南壁、ナンガ・パルバットのルパール壁、そして日本山岳会が手を付けましたエベレスト南西壁と本に書いてあります。さて、湯浅さん、一九七三年のRCC隊は七〇年の日本山岳会のエベレスト登山をどのように継承されたのか、そのあたりはいかがでしょうか。

湯浅　そうですね、七三年のRCC隊は、酸素の器具をもう一度平林さんに製作をお願いし使わせてもらいました。また、住吉・金田・坂野ドクターに参加をお願いし、住吉ドクターのセオリーで高所順応を実行、結果、初めて高所登山を体験する隊員達は一人も命を失わずに登山が出来ました。もうひとつ、案外皆様に知られていませんが、私は八月までは募金で東京銀行協会の決定を受けるまで在京し、ようやくモンスーン中にカトマンズからルクラへのフライトを敢行して隊と合流しました。この間、重要な登山のマネージングやさまざまな問題については鹿野勝彦君が隊員達をうまくまとめ、その後大きな影響をもちまして、伊丹さんも加わった中心グループがナンダ・デヴィ縦走登山へと繋げました。この隊は、大学山岳部出身者に関係なく、重廣さんや加藤保男さんたちが参加をした事が、新しい形で日本山岳会や日本の登山界全体がヒマラヤ登山に動いていった訳で、今になってみると大きな意味があると考えています。

伊丹　重廣さん、当時、南西壁の八三八〇㍍まで到達されてどうだったでしょうか。

重廣　そうですね、七〇年の南西壁のエベレスト登山は日本の山岳界の転換期だったと思います。なぜなら、それまでの日本山岳会のヒマラヤ登山は八本爪のアイゼンを履いて「登る」登山でした。しかし、南西壁という目標を定めるに従ってヨーロッパと同じように前爪のある十二本のアイゼンで攀じる登山となり、街の社会人山岳界の支援を日本山岳会が受けなければならなくなった訳で、これは宮下秀樹さんなどの大きな決断であったと思われます。そのような時流が七六年のナンダ・デヴィに継承され、その後の日本山岳会の多くの登山隊にも繋がり成果を生んだと思います。それぞれの時代でいろいろな山登りがあったのでしょうが、新しい息吹や血を取り入れながら会は発展して来たのではないでしょうか。

　そのスタートが七〇年のエベレスト登山、そして岩登りを得意としたRCCの七三年のエベレスト登山だった訳です。当時、湯浅さんがわずか三十七歳でこのような大きな登山隊を組織するとは考えられないことでした。当時、私は荷揚から降りてきてルクラで登ってくる湯浅さんと会ったのですが、湯浅さんが「やっとここまで来た」と涙を流されました。この出会いが私

をその後のヒマラヤ登山を継続させる原動力、あるいは組織する喜びとなりました。そういう意味で登山隊員はいろいろな出来事を体験しながら、次の新しい目標や人材を作り出す元になったのではないかと思います。

伊丹　一九七〇年の登山隊は当時五年間登山隊の鎖国をしていましたネパールで登山を再開するという事で、たいへんな苦労があったと聞いております。訓練をされていないポーターを面接、募集しても彼らは雇われたい理由で年齢を偽り山歴もごまかすなど……。大学生だった当時の私はこの登山の新聞記事を切り抜き、本当に夢をかきたてられました。世界の登山界はヒマラヤ鉄の時代の幕開けに入ってきて、若い私達は身近な所で先輩達が世界の最高峰に挑んでいるということは大変勇気付けられておりました。続きまして十年後の八〇年のチョモランマに移りたいと思います。（八〇年ビデオ）

一九八〇年チョモランマ

伊丹　八〇年の登山隊は七〇年の南西壁以来、宮下秀樹さんの熱い思いが北壁に結びついた隊であったと思います。中国との交流は一九七七年に西堀栄三郎さんが未交流スポーツ団体の代表としての訪中に始まり、七九年に日本山岳協会と日本山岳会、日中文化交流協会の三団体に正式登山許可が下りました。読売新聞社が全面協力をされ、渡辺兵力さんと宮下秀樹さんが現地に行ったことで計画がスタートするのですが、八〇年、北壁からのチョモランマ初登攀者であります重廣さんに、お話をお願いいたします。

重廣　あれから二十年という歳月は非常に早く、また人にも大きな変化をさせるものだと感じます。使用する登山道具にしても進歩があります。私は一九五〇年に人類初の八〇〇〇㍍峰アンナプルナを登頂したフランス隊の記録を読み、いつかはヒマラヤの高峰に立ってみたいという思いでトレーニングをはじめました。最近は行きたい時にいつでも行ける環境も整って、先人達の経験と情報の集積で安易にヒマラヤ登山が出来ますが、当時はなかなか簡単に実現するものではありませんでした。

　昨年、チョモランマの八〇〇〇㍍を越えた所で『そこに山があるから』と言ったマロリーの遺体が発見されました。皆さんも新聞等でその遺体の写真をご覧になったと思います。私はそれを見て感じるのはやはり装備の発達です。今から七十六年前にマロリーたちが着ていた衣類は、現代よりはるかに重いものであります。先程申し上げました五〇年のアンナプルナ峰のフランス隊は軽量登山隊あるいはナイロン登山隊と言われております。マロリーたちが使った天然素材、麻のザイルや綿帆布のヤッケやテント、鉄のハーケンはナイロン素材、アルミに代わります。マロリーたちの時代の登山装備を現代のものと比較すると、重量では当時の三分の一から五分の一まで軽くなり、一方機能面で言えば三倍から四倍位になっていると思います。そ

のような近代装備をもってしても我々はせいぜいマロリーたちと同じ事くらいしか出来ない。すなわち、当時マロリーたちがいかに卓抜した体力と技術をもったかがわかる訳です。

最近では世の中が便利になり登山許可の取得もしやすくなったのですが、先程伊丹さんの話にありましたようにチョモランマは非常に長い年月、この頂きに立ちたいという人達が夢を抱き続けたわけです。中国・チベットが一九七九年に解放され、最初はお金をたくさん持っていたイランにチョモランマ登山許可がでたのですが、フランスからホメイニ師が帰ってきたこともあり方向転換、代わって日本隊に許可が参りました。私は一九七三年以来五度目のヒマラヤ登山でパキスタンの岩峰ラトック1峰の登山を終え帰る途中、チョモランマの登山許可を取得した日本隊の偵察隊に参加するよう要請があったのですが仕事の都合で参加できず一九八〇年の本隊に参加いたしました。先程の映像のようにそれぞれ重要な局面でいろんな人達の力が必要であるという事で、卓抜した技術をもって核心部の突破がされただろうとおもいます。

私と共に北壁を登頂した尾崎隆隊員は八六〇〇㍍を超えてからの西稜に続く岩稜にハーケンを十四から十五枚使いました。非常に困難を極めた登攀だったため、彼はサングラスと酸素マスクを取り払って登り続け、夕方の九時に頂上に到達しました。我々はその日のうちに最終キャンプまで戻れず八六〇〇㍍の地点でビバークをし、食べる物もなかったのですが、幸いにして翌日の夜半に前進基地にたどり着きました。私はこの時やはり人の経験・体得してきたものは貴重だというという再認識をしました。八六〇〇㍍、気温マイナス三〇度Cの環境下で、着の身着のままでザックを敷いてのビバークでしたが、幸いにして翌日晴れて生還したのですが、最終キャンプを出る際、尾崎隊員は先に降っていました、しばらくして前進基地の宮下さんからはトランシーバーで下った尾崎はザイルがないのでは無いかと言う心配した声があり、急いでザイルをもって下ったわけですが、そこに尾崎隊員の姿はありませんでした。その前に最終キャンプで私は不要なものを袋に詰めて落としたのですが前進基地では宇部隊員と同じように滑落したのではないかと、心配をしたそうです。実は尾崎隊員はノーザイルで二ピッチを苦もなく下ったのです。本人は登頂しビバーク後の事は極度の疲労でほとんど覚えておりませんでした。しかし、彼はそれまで培った技術と体力で頂上から生還しました。そういう意味では経験の積み重ねはたいへん貴重だというという事を再認識した登山となりました。

それと同時に、私にとってこの北壁登攀はヒマラヤ登山の大きな変換となりました。それまでのヒマラヤ登山は誰かが先に行って登られた、いわばトレースされた山でした。K2にしても、すでに二十三年前にイタリア隊が登頂したルートを使いま

したので、その後の登山はできればこの時の北壁の体験のように誰も登ったことのないルート、誰も登ってない山、誰も登ったことのない方法でということに変り、カンチェンジュンガ縦走、未踏のナムチェバルワやマカルー東稜への登攀へとつながっていきました。

それともう一つ一番勉強しましたのはマネージメントのことでした。一九七六年ナンダ・デヴィ縦走隊の鹿野隊長をはじめとし、八三年のカンチェンジュンガの縦走登山等。隊員を生還させるのも、そして登頂させるのも下で見守っている人達の努力というのが必要だという認識をしました。最終キャンプを離れた登頂隊員は、いわばゲートを離れた競争馬と同じで、安全に下に戻るという願望も、本人には体力がどんどん低下していることを認識し判断する能力はありません。そんな体験がその後の私自身の登山隊長、あるいは登攀隊長としての方向づけをしたのではないかと思います。登山には的確なオペレーションが必要です。登りたい人が集まって登山隊を組織し、持っている力を十分に発揮をして頂上に向かう事も良いのですが、それだけでは頂上には登れません。登るためには登れる人を集め、登る戦略を組み立てて指揮する事であります。その為に後方にいるものが正確な判断をし、隊員を生還させる必要があります。

チョモランマ北壁までの登山ではどちらかと言えば多くの人を参加させながら、限られた人しか登頂ができなかった訳です。しかし、その後の日本山岳会の登山はできれば参加をした人達を全員頂上に到達をさせたい、というものに変換させて行く元になったのが八〇年の登山でした。

伊丹　重廣さんと尾崎さんが八六〇〇㍍でビバークしていた時、宮下さんから、もう登山は終わりだから上部に居る人達を励ますために火を焚けと言われ、私達は食料カートンをどんどん燃やしました。それは上部から見えたそうです。深夜、雪盲でほとんど目が見えなくなり下山してきた尾崎隊員を私達が北壁の基部まで迎えに行った事を私は昨日のように思い出します。

平林さんや湯浅さんは先輩として一九八〇年のお話を聞いていかがだったでしょうか。偵察隊の隊員選考までご協力いただいたそうですが、湯浅さんいかがですか。

湯浅　そうですね。一九七八年エベレスト登頂二十五周年記念式典・ネパール観光省創立記念式典に招かれ、史占春氏以下中国登山協会の指導者とお目にかかり北面からの登山許可を依頼しました。「機会が来たら必ず日本に許可します」という約束をしました。私は日本山岳協会の日中友好登山委員長として読売新聞と組んで許可取得しようと努力しました。ところが先程話がありましたように三団体に許可が来ました。でも日本山岳会が行なうのに最も相応しいという事で、日本山岳協会の加盟団体である日本山岳会がやることについては特に西堀さんが訪中した重みを考えてほしい、と一ヵ月ほど説得しまして日本山

岳会にお任せいたしました。しかし、私も先発隊、隊員の選考には加わらせて頂きました。

ただ、私は大変嬉しかったことは、急遽、偵察隊が派遣されましたが、その時、日本隊員の装備と中国隊員の装備、どちらがいい装備を使うかという際に、従来のヒマラヤ登山隊の慣例を破って、隊長の斎藤惇生先生が「自分達が好きで来たのだから中国協力隊員には、いいシュラフといい羽毛服を使うべきではないか」とおっしゃられた考え方を当時の若い仲間がたいへん大事にし、その後のヒマラヤ登山におけるシェルパさんに対する考え方を大きく転換していきました。おそらく、こういう席で話す機会は最後だと思います。登山隊は、たった一人のリーダーのキャラクターによって隊員達はどんどん成長していくことを私は大変嬉しくおもいます。

伊丹　平林さんいかがですか。

平林　一つの登山が成功しますと、話題は全国に広がります。結局、遠征に協力してくれた産業界や登山界、また友人・知人などあらゆる人達があらゆる所で我々の遠征を見守って下さった方がいるんですね。ですから、そのような人々の思いの中にもエベレストやチョモランマ北壁があるのです。産業界に身を置く私は思わぬ所でその人たちに出会います。そして私達の成功を我が事の様に非常に喜んでくれます。日本山岳会員である我々が喜ぶことは当たり前な事です。しかしその成功は底辺の広い人達によって支えられており、私達はそのような方々に思いをいたしながら登山をしなくてはならないのです。八〇年の登山に行っていない私ですが、山を知らない人や里山を登っている良き人達からもたくさん質問が出てまいりました。私達はこの機会にそのような多くの人たちのことも考えながら、登山とのかかわり合いを考えていかなければならないと思います。

伊丹　重廣さんがパネラーのため八〇年は北壁の方が主体の話になってしまったのですが、北東稜では濱野吉生さんを中心に加藤保男さんなどが活躍、登頂されました。ベースキャンプを中心に中央ロンブク氷河と東ロンブク氷河、二つの氷河に北壁と北東稜の山登りが展開されました。

最後に一九八八年のビデオをご覧下さい。（八八年ビデオ）

一九八八年交差縦走

伊丹　八八年の登山隊は今西寿雄元会長が当時の報告書に書かれていますが、もともと日本山岳会東海支部が主管をしようと計画をしていて、その計画を東海支部が本部に読売新聞社のスポンサー付きで委譲して下さった。マナスルの時のような背景がありました。そのあたり湯浅さんどうでしょうか。

湯浅　そんなに難しいことではなかったのですが、実を言うと日本山岳協会が一九八〇年の許可を日本山岳会に委譲したことで突き上げをくいまして、K2＝チョゴリの計画をし、その代案として史占春が許可をくれました。小西政継君に隊長として

チョモランマ登山隊 1980		三国友好登山隊 1988	
西堀栄三郎　渡辺兵力		今西寿雄　大塚博美	
27人　13人　24人		97人　84人　101人	
中国側　ノースコル（北稜）／北壁		ネパール側・東南稜／中国側・北稜	
71日間　3月5日　5月14日		73日間　3月6日　5月17日	
北稜C8　8250m　　北壁C6　8230m		北側C7　8680m　南側C5　8350m	
北稜	5月3日	北側	5月5日
北壁	5月11日	南側	5月5日
北稜	加藤保男	北側	山田昇、山本宗彦、中村進、中村省爾、三枝照雄
北壁	重廣恒夫、尾崎隆	南側	北村貢、C4出発　南峰直下で引返す
20トン		21.7トン（北9.5トン　南12.2トン）	
180,000,000円		362,801,000円	
フランス製ボンベ　160本		フランス製ボンベ　348本	
宇部明隊員、5月2日雪崩死亡		日本人死亡事故なし	
中国側登山解禁、最初の外国隊 新北壁ルートの初登攀 報道隊登頂計画（第二ステップ上断念）		国際交流　日・中・ネ三国友好登山 世界最高峰、山頂より実況生中継 ネパール・中国　越境交差縦走	
1ドル＝230円　10000円＝63元（1元＝160円） 白米10kg 3340、地図（5万分の1）160 都バス（初乗り）130、新聞2600/月、ビール（大）240		1ドル＝150円　70円＝40元 白米10kg 3760、地図（5万分の1）230 都バス（初乗り）160、新聞3100/月、ビール（大）310	
環境庁富士山クリーン作戦198トンゴミ回収 逗子開成高校山岳部八方尾根で遭難 プラブーツ登場		青函トンネル開業、瀬戸大橋開業 リクルート疑惑表面化 消費税法導入	
モスクワオリンピック（日本不参加） イラン・イラク全面戦争 朴大統領暗殺、ソ連アフガニスタン侵攻		ソウルオリンピック開催 イラン・イラク戦争終結（国際決議） ソ連アフガニスタンより撤兵開始	
日本テレビ　読売新聞社		日本テレビ　読売新聞社　世界初頂上より生中継	
チョモランマ・チベット（公式報告書） チョモランマに立つ（雑誌／読売新聞）		中国・日本・ネパール1988年チョモランマ／サガルマータ友好登山報告書（JAC） 三ヶ国語（日・中・英語）・写真報告書（読売）	
シェルパでなく協力隊員（チベット族）による荷揚げ 北壁隊雪崩遭難で登頂延期、苦戦、報道隊登頂断念 チョモランマ名（エベレスト）使用		登頂者：中国人、ツェリン・ドルジュ（北）／ピンソーダシュウ（南）、ネパール人、アンラクパ（北）、アンプルパ（南） 南側隊、日本隊員登頂断念（南峰直下）	

3 登山隊の概要

	エベレスト登山隊 1970	
総隊長　隊長	松方三郎　大塚博美	
隊員　報道　シェルパ（協力員）	30人　9人　26人	
ルート（チーム）	ネパール側　サウスコル（南東稜／南西壁）	
登山日程　日数　BC建設・撤収日	95日間（キャラバン30日込）　3月23日　5月25日	
キャンプ　数　ハイキャンプ標高	南東稜線C7　8513m　南壁C4　6600m	
登頂日　第1登　第2登	南東稜	5月11日　5月12日
	南西壁	5月10日8050mで登攀断念
登頂者	南東稜	松浦輝男、植村直巳、平林克敏、チョタレー
	南西壁	8050mで断念　嵯峨野、加納
隊　荷（総重量）	30トン	
登山経費	110,499,000円	
酸　素	フランス製ボンベ　350本	
事　故	成田潔隊員、4月21日心不全死亡	
登山背景	1965年-1969年の登山禁止解禁初 世界6番目の国としての登山許可 スキー隊との許可競合	
社会背景	1ドル＝360円 白米10kg 1600、地図（5万分の1）80 都バス（初乗り）40、新聞750/月、ビール（大）140	
時　代（日本）	大阪・万国博覧会開催 日本、中国、相次いで人工衛星打ち上げ ヨド号事件、三島由紀夫事件　二重靴登場	
時　代（世界）	メスナー兄弟らナンガパルバット岩壁登山 フランス、シャルル・ド・ゴール大統領急死 人類月面に到着（アメリカ）	
報　道	NHK　毎日新聞社	
関連資料（報告書他）	エベレスト報告書（JAC公式） 毎日グラフ・エベレスト登頂（毎日新聞） エベレストへの道（NHK）	
特記事項	荷揚ポーター1000人 ローツェフェース滑落事故 アイスフォール落氷でシェルパ死亡	

行ってもらいましたが、その後いろいろ不祥事がありました。借財をしたまま放置して一年半、中国登山協会の史占春主席が疑念をもたれ、更迭されるかも知れない、という報を平林さんからいただきました。すでに日山協理事は辞めていましたが、日中友好委員長という資格で、ほんの一部ですが私財三〇〇万を持参して「すべて日山協の不実に起因するものだ」と謝罪し、「残金は一年以内に支払います」と王調査委員長に誓約書を提出しました。許競副主席の名通訳・名手配で、中国側の問題を解決することが出来ました。「その友情に報いたい。お互いにチョモランマの隊長を努めた間柄ではないか」ということで史占春からは何でもいいから登山計画を申し出てくれという事で、私は「日・中・ネ三国で実は国境を越えた登山をしたい」という提案を出しました。私はネパール政府からの許可は会員の橋本龍太郎先生にお願いし、一緒にネパールに行き国境を越える登山をする了解を先に頂き、それから中国へとなった訳です。さらに橋本先生は花村仁八郎氏、田中精一中経連会長、宇野收関経連会長三氏に募金委員会発起人就任をお願いし、募金体制を作って下さいました。それが現在の登山基金だ、ということはあまり知られていません。今西会長の申し出を受け橋本先生の了承もありましたので、日本山岳会がやる、それならばそのまま計画を本部へ移します、とさせて頂きました。中身はみな友達が行くことですから変わりありませんでしたし、読売新聞の要望もあり、また大変一生懸命やっていましたのでそのまま委譲いたしまして、その後は順調に進んだという訳です。

伊丹　北側は重廣さんがノースコルで指揮をとっていたのですが、この登山はオペレーションが難しかった。私もＡＢＣで荷上の管理。この登山は荷上をいかにうまく行なうかという事を日本にいた時からさんざん議論をいたしました。重廣さんにこの登山の特質を手短にお願いいたします。

重廣　これは中国・ネパール・日本の三国友好登山であり、交差縦走すなわち世界で初めてパスポートを持った登山でした。私は一九八〇年の体験があったので交差縦走の北壁登攀隊長として指名されたのでしょう。交差縦走のマスタープランの作成、それからチベット側の現場で指揮をとるという事でした。私は、最初はただの交差縦走でなく、できれば一九六三年のアメリカ隊の辿った西稜からチョモランマの頂上を越えてローツェシャールまで行くという『グランドトラバース』をやりたいという事を申し上げておりました。でも最終的には三国の登山隊がそれぞれの力を合わせ、今出来る事ということであの交差縦走に落ち着きました。南北両隊合わせ総勢四八〇名が参加した大きな隊で、先程の話のように精緻なオペレーションが必要でした。基本的に登山計画作成は何月何日何人を登頂させるかという設定からスタートするのですが、この時の登山隊は五月五日子供の日に登頂・縦走ということが最初から明確に決まって

いました。一般に我々は登山計画を作っても実際に予定の登頂日に登頂できたという事はほとんどありませんで、私自身も十数回を越えるヒマラヤ登山の中で、予定通り登れたのは唯一この五月五日だけでした。この登山隊は人数が非常に多いということ、物資が潤沢にあり、またある程度期間が有効に使えるという事で五月五日に登れるかどうかは天候次第でした。三国の登山隊員がルート工作、荷揚を均等に分担する事、最終キャンプまでに各国別のテント生活をして各国の習慣食生活を拘束しないで幸いにしてうまい具合に登頂する事が出来ました。

北面に関しては八〇〇〇㍍峰十四全座登頂を目指していました山田昇隊員の参加が非常に大きかったと思います。当時隊員選考の際、今西寿雄さんは北側は結構だが南側は大丈夫かと言われ、私は「大丈夫でない」と言うと北側から隊員を出すことになるので「南側も同じく大丈夫です」と申し上げました。いろいろな経緯で南側から登れなかった事は残念でしたが、この登山がその後の日本山岳会の若い人たちのヒマラヤ登山育成に大きくつながっていったという事です。八八年の登頂者である山本宗彦君も一九九五年に登攀隊長としてマカルーの頂上に行っていますし、一九九六年には山本篤君がK2へ登山隊長として行き、立派な成果をあげました。

先程から申し上げましたように、それぞれの登山隊がその後に続く人を育てていくという役割を担ってきたということです。八〇年に我々ははじめて中国と協力して山登りを始めたのですが、このとき中国側からはじめて参加した高所協力員に、隊員たちはベースキャンプ周辺で彼らにアイゼンの装着や新しい登攀技術を教えました。その経験をした中国登山協力隊員たちが八八年には大きく成長して縦走隊員、あるいは登頂隊員になり、さらに、その後チベット登山協会として八〇〇〇㍍峰全山登頂を目指す原動力になり、現在に至っております。ここでも日本山岳会は自国の若い人達だけでなく中国、チベットの登山界の人達にも大きな経験や影響を与えたのではないかと思います。同時に培ってきた友好というものはいろいろなヒマラヤ登山につながって行ったと思いますし、今後も続くと思います。

伊丹　先程一九七〇年のエベレストの時は十一歳だった山本宗彦君がビデオの最後で登場いたしましたが、北側の登山隊に当時どんな思いで参加していたのでしょうか。

山本　私は当時二十代でして、チョモランマに行く話があった時は裏側のいろいろな事については知らなかったし、純粋にチョモランマに行きたいという思いだけでした。そもそも、その気持ちが出ましたのは一九八五年のカンチェンジュンガ登山の時でした。隊員として参加させて頂き、この時の登山隊は一応の成功を収めたのですが、私は八三〇〇㍍で終わりました。それもカンチェンジュンガの南峰でルート工作を最後までやった後に人手不足で主峰にまわされ、荷揚をやらされ（笑）失礼しま

した、荷揚をしまして、さんざんこき使われた挙句に頂上は無しという結果に終わり、大変悔しい思いを致しました。ただ、無知だったのでしょうが、その時に八三〇〇㍍まで登れたことで、チョモランマの頂上も手の届く範囲ではないか、という思いもあり、八八年には是非参加したいと思っておりました。

北側を選んだ理由については面接の際も私ははっきり言ったのですが、一つは中国という国に行きたい事でした。現在では中国側の通常ルートと言われています当時の北東稜はあまり登頂例はありませんでしたし、南面側のアイスフォールがちょっと怖かったこともありましたので、どうせ行くのならば登頂例の少ない所に行きたいという事で北側に参加させて頂きました。登山が終わってから考えてみますとこれは完全に仕事であったと自覚しましたが、当時はそういう意識は正直ありませんでした。最初に重廣登攀隊長が五月五日に登頂する計画を発表された時は「出来る訳ないではないか」と正直思っておりました。ただ自分は是非登りたいと、あわよくば自分が縦走したいというおもいはありました。登山が進むにつれて重廣登攀隊長は荷揚管理、在庫チェックが非常に厳しく、ほとんど毎日させられました。隊員はトランシーバーを持って外に出て荷揚チェックを行なった程です。結果的には、その管理が隊員達を上へあげる原動力になったのですが、後で目的達成のためにはそれ位の厳しさは当たり前であった、と実感いたしました。

振り返って考えてみますと、交差縦走した数名の隊員を確実に頂上を越えさせるために、正直われわれはこの五月五日の登頂日に合わせ最後のステージをけっこう無理しておりました。五月三日にC4のノースコルからC6以降に必要な物資を背負って出発し、翌日はC5まで、次はC6まで、次は頂上を経由してC5、C4まで下るという、五日間行動し続けるので、頂上は越えませんでしたが縦走隊に近いような内容でした。なおかつ、我々はサポートということで南側の縦走隊員の酸素も担いでおりました。私は二本担ぎましたが、その他もろもろの物も加え十五から十七㌔くらいあったのではないかと思います。私の酸素は三角雪田の上部で切れて、遅れましたため重廣登攀隊長からはトランシーバーでお叱りを受けましたが、私はその部分の下降を考えステップを切っていたため、余計遅れて酸素が切れました。もう一本の酸素を吸いたかったのですが南面の縦走隊のものであり我慢し頂上に行ったため大幅に時間が遅れました。登頂日当日はいい天気だったのですが、朝は風が強かったため最終キャンプ出発を午前九時頃まで延ばし山田昇隊員が先に出発した後、出発しました。結局我々はかなり遅れ頂上は午後四時過ぎのため、ほぼ七時間かかってしまいました。体力的にも問題があったのでしょう。私はあとで知ったのですがテレビは頂上でバンザイをして放映が終わったのですが、実はドラマが始まったのはその後でした。最終キャンプで南から来た

チベットの隊員が泊まると言い出しました、残りの酸素もなく危険だという事で下るよう説得をしたのですが聞かず、結局泊まりました。あとでわかったのですが彼は酸素を隠し持っていたそうです（笑）。私達は先に下ったのですが、正直言って他の隊員をかまう余裕はありませんでした。私がC5に辿り着いたのが夜中の十二時過ぎでした。そのあと中村進さん、三枝照雄さん、中村省爾さんで、最後の人が戻ってきたのが午前三時近かったのではないでしょうか。何事もなく良かったのですが、振り返りますと見えない支えがあって出来たと思います。

ビデオでは私は頂上で情けないような声を出していたのですが、あれは演技ではありません。私は頂上であのような気持ちになったのは初めてです。当時、私と同じような若い年代の隊員も多くいました。なかには残念ながら山で亡くなった人もいるのですが、その若い人の参加が契機となり続く後輩たちが後の山岳会の遠征等に参加してまいります。すなわち、一九九一年のナムチェバルワに始まり九九年のガンケルプンズム偵察まで、ずーとその人たちが活躍してきたのではないかと思います。

一九八八年は大変大きな登山隊で南北交差縦走、撮影という目新しさはありましたが、登攀そのものについては新しさはなかったかもしれません。しかし、この時の登山隊は、その後の優秀な人材を日本山岳会は残したと思います。今回の登山についてはそのように考えます。

伊丹　八八年の三国の登山隊はもともと中国とネパールからの要請に基づいて、今までのご恩返しのようにして始まったと思います。若い人材の育成、山本宗彦君をはじめ、多くの人たちがその後の登山の基礎になるようなことを学んでくれたと思います。また、副産物として日本山岳会に当時で七〇〇〇万円の海外登山基金を残す事ができました。海外登山助成金制度が設立されて十年目、「山岳」で特集もされておりましたが、いろんな日本の登山隊に対し、この基金は貢献したと思います。

一方、南側は縦走隊員が来なかったのですが、当初八五〇〇㍍に予定した最終キャンプの位置が八三五〇㍍だったり、またサウスコルに上がったが十分な酸素がなかったなどいろんな問題があったと思うのですが、湯浅さんいかがでしょうか。

湯浅　やはり隊長がいけなかったのでしょう。事前の出発についてもキチンと我を通し自分の考え方を貫けば良かった。ようやく委員会に計画変更を強要して先発隊を二十日前に行かせているのですが、みんな眼底出血にやられている。重廣さんには何度か叱られました。でも私がバンコクに着いた時、もう北側はBCが出来ていたのですから少し南側なめていたのではないかなー、と思います。いまだからいえますが、本隊がBCに着いた時に、個人登攀具も含めて二分の一の隊荷が着いていませんでした。それでも何とか一名のトラバース隊員、一名の登頂隊員は出せる仕組みを作ろうと思い直していました。しかし、

やはり八八四八㍍の高さを持っているエベレストは難しいと思います。たまたま、何度もやり直せる高さでダメージを受けても登れるかもしれませんが、いま言ったように登頂日時が決まって一度ダメージを受けたら、たぶん八八四八㍍というのは乗り越えられないでしょう。七〇〇〇㍍峰が難しかろうが、どんなルートであろうが、その高さが高いという違いがエベレストの困難さであろうと思います。

大塚会長にはこの席を借りまして、最後までごねましてお詫び申し上げます（笑）。「降りろ」「いやだ」という交信を三日間いたしました。その間、ネパール隊員を日本隊員七人で最終キャンプまで荷物を上げて、初めてネパール人に登ってもらうという快挙を成し遂げました。という事で、お帰りなさいと隊員を説得して、降りてもらいました。

痛恨事は水腰先生が亡くなられたことで、私は登頂一週間前に北側の了承も得ず四日間かけてカトマンズに遺体を降ろしました。私でないと遺体解剖の交渉が出来ません、宗教上の理由でネパールでは初めての解剖事例でした。亡くなられた奥様がお医者様でしたので納得をしたかったという事でした。

いろいろな思い出、いろいろな人に、とにかく大塚会長、山田前会長も含めまして、亡くなられた今西元会長もどれだけの力を使ったかを考えますと、もう少し重廣君に誉められる登り方をしたかったと思います。隊員たちには申し訳なかったのですが、帰ってから立派に登山をしていますので安心している次第です。当時、鈴木清彦君も最終きゃプで見送ったのですが、その後サウスピラーから自分の大学の隊で登頂しました。みんながそんな人生を送っておりますこと、それが私の務めであり誇りだと思います。

二十一世紀の山登り

伊丹　来年は二〇〇一年、二〇〇五年には創立一〇〇周年を迎えるのですが一九七〇年、一九八〇年、一九八八年の大きな登山隊、その後ナムチャバルワ、マカルー、青年部でもK2、ダウラギリ、カンチェンジュンガと続いてきております。脈々と山登りは継承されているのですが、一〇〇周年を迎える今、新しく入ってくる会員達の性格、質も大きく変化していることは否めません。二十一世紀の山登り、あるいは日本山岳会の山登りはこう在るべきではないかという提言を平林さんから一言づつお願いいたします。

平林　大変難しい課題だと思います。皆さんご承知のように二〇〇年前に登り始めたヨーロッパアルプスにしてもロッキー山脈にしましても形を変えて今でもさまざまな登山が行なわれています。高さが七〇〇〇㍍のヒマラヤであろうと八〇〇〇㍍の高峰であろうと私たちが歩んできた欧州の山々や日本の山々と同様に今後同じような形で続いていくであろうと思います。しかし、大きく違うのは情報があふれ過ぎており、どう行って、

どこを曲がったら、どうなるかという情報が八〇〇〇㍍の山の頂まで紹介されています。装備にしましても運動具屋さんに行けばすぐに八〇〇〇㍍の頂上に行く装備が手に入りますし、極地にいく装備もあります。求めれば安易に全てが得られる時代になっています。過程が省略されて結果だけをすぐ求められる社会は薄っぺらで模倣の文化となります。やはり過程を重視し、山登りの本質みたいなものをしっかり求めながら若い人を育てていく事をしなくてはいけないと考えています。日本山岳会は山登りをする団体でありますから山に登ることは当然ですが、中高年のみならず若い人の層を広げ、これまで私達が育んでやってきた事の思いや考えを率直に伝え、若い人達の集う熱い会になってもらいたいと思います。先程も申し上げましたが山を登る人のみならず、あらゆる社会の人たちが私達のことを見つめ、また憧れとして見ている人もいるのですから、私達日本山岳会は山を通して、山と人の生きざまのようなものをしっかりと見つめながら山を登る人々の集う会になってほしいと思います。

湯浅　ヒマラヤ登山で一番変わったのは酸素が軽くなったことで、そういう時代に若い人がどうやっていくか。山田昇が最後に私に言ったのは「なんでや、バダバタとテントがなっていても一回テントから出たらいいのではないか。なぜ、そんな躾を大学山岳部にしないんだ。」

大学山岳部はいろんな問題を抱えています。しかし、冬の登攀をしないかぎりはヒマラヤの困難な登山はすべきでない。なぜなら天気が悪ければテントにいるという生活をしていますと、一つ一つの困難に直面した時に生き抜いていく力が出ません。別に難しいルートでなくてもテントに入れないような厳しい状況の登山を若い人は是非やっていかないと、世界のリーダーたりえないし、魅力のある登山は開けないのではと思います。

重廣　私も二十年近く日本山岳会の登山に参加いたしました。それぞれのヒマラヤ登山は我々だけの個人の力ではなく、いろいろ人達の支援を得た登山でした。私もいろんな人から、あるいは基金からお金を出して頂いてヒマラヤに行くことが出来たのですが、そのために自分自身に課したのが必ず登頂成功と参加した人を出来るだけ多く頂上に到達させて次の夢を描いてもらうという登山でした。ところが最近は大きく世の中は変化し、山登りをする人の考え方も変わってきました、登山が元来その成果が個人に帰結をするものならば、必ずしも登山は右肩上がりの思考ではなくなってきています。ただ私がなぜヒマラヤ登山隊の中にヒマラヤに行きたいと一生懸命トレーニングをした人を三〇パーセント位入れたかというのは思想を継続してもらいたいという山岳会の夢を託せる人の養成ではなかったかと思います。それぞれの人がそれぞれの山登りをする変革の時代にきていますが、ただ、その根底に流れる困難の追求というのは継続をしていただきたいと思います。次の若い人たちがいかに

引き継いで行くか見守りたいと思います。

伊丹　山本さんは四十歳、日本山岳会の中堅会員として今後の日本山岳会の高所登山、あるいは山登りについてお考えがありましたらお願いいたします。

山本　ここしばらく日本山岳会から遠のいており、また無責任な発言もあるかもしれませんが、三人の諸先輩方とちょっと違う面の話をしたいと思います。私は日本山岳会に初めてお世話になったのは一九八二年からで日本山岳会の登山が多くありました。私は学生の頃からヒマラヤにはさほど興味はなかったのですがヒマラヤの縦走はやりたい、やるべきだと思っておりました。もし私がもっと早く生まれていたのならば、是非ナンダ・デヴィ縦走をやりたいと思っておりました。学生の頃その事を先輩に言ったところ、「そんなこと出来る訳ないだろう」と一蹴されたのが今でもヒマラヤ登山の原点みたいなところです。カンチェンジュンガのときもチョモランマのときも縦走だということで参加しました。私の頭の中にも昔から、これならば縦走できるだろうというプランを考えていました。日本山岳会もナンダ・デヴィで縦走を行ない、カンチェンジュンガで縦走を行ない、チョモランマでもそれを継続させたと思うのです。

ところが残念ながら登攀というレベルではそのノウハウは完全に継承されていないのではないのではという気がします。これから登山がどのように発展されるのかわかりませんし、また自分もこの歳です。ちょっと引っかかりますのは私ですらこの会の中では若い方だというのは、寂しい気がします。登山は歩くことから始まり、攀じる。そして縦走、これは歩くということなのですが、まだまだ大きな可能性を秘めているのではないかと思います。成功例も少ないです。以前冗談半分で日本山岳会の一〇〇周年の登山はヒマルチュリからマナスルまで縦走をしては、と言ったのですが「おまえはやれるか」と問われ「出来ません」と、でも二十一世紀になればそういう人間が出てきてもおかしくないはずだと考えたことはあります。昔と比べれば装備の高性能、軽量になっているとすればおかしくない。自分自身が出来るかどうかは別にして、新たな課題を設定できる余地はまだまだあると思います。確かに情報量は多く安易になっているところはありますが、新たな課題を設定してチームを作っていく事が長い目でみて人を育てるという気がします。

最後に無責任な事を言いますと、そのような事を考えなければいけないのは執行部の人達だと思ったりすることもあります。または、新たなグループを作り上げ、日本山岳会を引っ張って行くということでもいいと思います。

伊丹　私見ですが、このパネルディスカッションは、一九七〇年のエベレストからの三十年を振り返ってというテーマがいいのではないかと当初思ったのですが、この際三つの遠征を並べてみてはという提案があり、同時に四人のパネリストの方から

意見を頂戴しこれからの日本山岳会の展望ができればという大塚会長のお考えもありました。

七〇年南西壁に先鞭をつけた初めての日本のエベレスト登山隊、八〇年は南西壁の流れをくんで北壁に向かい、それから八八年はいままでヒマラヤを持つ国（ネパール・中国）に登らせて貰っていた事に対するお礼、ということで三つの登山隊の性格は明らかに異なっていたと思います。やはりマナスル初登頂以来、諸先輩がある意味で血と汗と涙で日本山岳会の登山史を作ってくれた、この熱い想いを我々は受け継いで来ましたし、次の世代にも十分認識を持って受け継いでもらいたいと思います。日本山岳会は山登りをする団体ですから山登りに対する情熱を若い人に十分に継承してもらいたいと思います。

ここで担当の高所登山委員会の坂井君にマイクを渡し、パネルディスカッションは終わらせていただきます。

坂井　日本山岳会が世界最高峰に挑んだフォーラムいかがでしたでしょうか。出版された本や報告書にはない、それぞれの登山に関わった生のお話、皆さん印象に残ったのではないかと思います。

ところで、高所登山研究委員会では日本人の八〇〇〇㍍峰登頂者にアンケートを行なっております。あるデータによりますと、一九九〇年からこの十年間に八〇〇〇㍍峰に登頂した人数は二百名を超えているそうです。登頂者の年齢層や経験度合いも幅があり、また隊という面で見るとヒマラヤに行く登山隊の数の三分の一は八〇〇〇㍍峰を目指している時代に入りました。これにはいろんな理由があると思われます。先程らいパネリストの方が話されたように装備の進歩、情報化やシェルパを初め受入態勢の整備等々、一言でいえば大衆化に入っているのかという気もします。その礎を築いたのが日本山岳会のマナスル初登頂に始まり、この世界最高峰を目指した三つの登山であり、それぞれの時代時代の苦労を乗り越えてヒマラヤを目指した登山者たちではないでしょうか。その歴史の結果が先程の八〇〇〇㍍峰登頂者数の増加に繋がってきたと思います。

あと一ヵ月で二十一世紀になります。今後、どのような山登りがヒマラヤでは展開されていくのでしょうか、未知・未踏はどんどん少なくなり求めるべきか課題が無くなりつつあるようにも思われます。しかし、私は逆に未知や未踏が少なくなってくるからこそ、登山者自身の登り方が問われる時代が来る。有限の記録という次元から、登山者自身の登る姿勢、価値観や哲学、そのような、いわば無限の広がりがこれから展望出来る。閉塞感でなく、期待を持ってヒマラヤ登山を続けていきたいと思います。日本山岳会もそのような登山隊を輩出していくべきではないかと思います。本日は皆様有り難うございました。

（開催：二〇〇〇年十二月二日、作成：坂井広志）

エベレスト登山史

1852年　世界最高峰と確認される
1855年　「ピーク15」といわれていたが、イギリス人の初代インド測量長官として功績のあったジョージ・エベレストの名をとり「エベレスト」と命名される
現地民は「チョモランマ」（中国・チベット側）、「サガルマータ」（ネパール側）と呼ぶ
1921年　英国偵察隊が北方（チベット側）ルートから入り、ノース・コル（6985メートル）に登る
1922年　英国2次隊、8228メートルに達する
1924年　英国3次隊、酸素なしで8572メートルに達する
＊マロリーとアービンが最終アタックから帰らず、頂上に達したかどうかは謎につつまれたまま
1933年　英国4次隊、8570メートルに達する
1934年　英国人ウィルソンが徒歩で非合法登山を敢行したが、東ロンブク氷河で凍死
1935年　英国5次隊、ノース・コル（6985メートル）まで（偵察が目的）
1936年　英国6次隊、ノース・コル（6985メートル）まで
1938年　英国7次隊、8290メートルまで
1947年　カナダ人デンマン非合法の単独登山に失敗
1950年　＊戦後、北方チベット側のルートが閉鎖される
米国人ヒューストンらが初めてネパールから入り、アイスフォールを偵察
1951年　デンマーク人ベッカー・ランセン、南からチベットに入る非合法の単独登山に失敗
英国隊、ネパール側のルートからアイスフォールを突破、ウエスタン・クームに入る
1952年　春、スイス隊8450メートルに達する／秋、スイス隊8100メートルまで
1953年　英国隊、ヒラリーとテンジンが5月29日初登頂
1954年　これまで標高は「8840メートル」とするものが多かったが、公式に「8848メートル」とされる
1956年　スイス隊が4人登頂
1960年　インド隊が8625メートルに達する／中国隊が北方ルートから3人登頂
1962年　インド隊が8717メートルに達する
1963年　米国隊が初めての西稜からを含め4人登頂
1965年　インド隊9人登頂
1969年　春、日本山岳会第1次偵察隊、ウエスタン・クームから南壁偵察
秋、日本山岳会第2次偵察隊、未踏の南壁に8000メートルまで試登
1970年　日本山岳会隊、5月11日に植村直己、松浦輝夫、5月12日に平林克敏、チョタレイが登頂
1971年　国際隊、南壁に挑むが途中で失敗
1973年　イタリア隊が8人登頂
秋、日本第2次RCC隊がポスト・モンスーンに初登頂に成功（2人）
1975年　日本女子隊の田部井淳子とアン・ツェリンが登頂（女性初）／中国隊が北方ルートから9人登頂（女性を含む）／英国隊が未踏の南壁ルートから初登頂
1976年　英・ネパール陸軍合同隊が2人登頂／米国隊が10月8日に2人登頂

1977年　韓国隊が9月15日に2人登頂
1978年　オーストリア隊が9人登頂（メスナーとハーベラーは初の無酸素登頂）／西ドイツ隊が12人登頂
フランス隊が4人登頂
1979年　ユーゴスラビア隊2人が西稜直登ルート初登頂／西ドイツ隊が3人登頂
秋、日本山岳会が北方ルートに偵察隊を送る
1980年　冬、ポーランド隊の2人が厳冬期初登頂
＊中国が北方チベット側ルートを開放する
日本山岳会隊、北方ルートから加藤保男が単独登頂、北壁から2人初登頂／メスナーが無酸素での単独登頂
1981年　米国医学調査隊の2人が登頂して心肺機能調査を行う
1982年　中国人民解放軍が高度8848.13メートルと測定／ソ連隊が南壁の未踏ルートより2人初登頂、計11人登頂
冬、イエティ同人隊の加藤保男隊長が初の単独厳冬期登頂を果たしたが遭難
1983年　秋、イエティ同人隊の3人が無酸素登頂したが2人遭難／山学同志会の二人が南稜から無酸素登頂
冬、カモシカ同人隊の3人が登頂
1984年　オーストリア隊の2人が無酸素で北壁グレート・クロワールを初登頂
1985年　映画「植村直己物語」撮影隊の7人が登頂
1986年　スイス・フランス合同隊の2人が無酸素アルパインスタイルで北壁往復44時間のスピード登攀
1988年　チェコスロバキア隊の1人が南壁にアルパインスタイルで登頂
日本・中国・ネパール三国友好隊が南北交差縦走に成功、頂上からテレビが生中継した（5人が登頂）
1990年　アメリカ・中国・旧ソ連合同隊の20人が北稜ルートから大量登頂
1991年　日本チョモランマ隊の2人が登頂
1993年　冬、群馬県冬期サガルマータ隊が厳冬期の南壁初登頂（6人）
＊エベレスト初登頂から40周年目にあたるこの年は過去最高の90人の登頂者を記録した
1994年　愛知学院大学隊の3人が登頂／秋、サガルマータ登山隊の1人が登頂
1995年　日本大学隊、未踏の北東稜から2人が初登頂
1996年　福岡チョモランマ隊の4人が登頂／立正大学隊の2人が登頂
国際公募隊の難波康子が日本人女性として2人目の登頂を果たすが帰路遭難
1998年　日本勤労者山岳連盟隊の8人が登頂／昭和山岳会隊の4人が登頂／続素美代（国際公募隊）が日本人女性として3人目の登頂／テレビ朝日撮影隊の2人が登頂
＊初登頂からの登頂者がのべ1000人を越える（1048人）／このシーズンはこれまで最高の118人（1シーズン）が登頂
1999年　亜細亜大学隊の1人が登頂／国際公募隊の日本人1人が登頂
2000年　法政大学隊の4人が登頂／東北地区海外登山研究隊の6人が登頂／北海道山岳連盟隊の3人が登頂
＊山本俊雄（63歳：法政大隊）は最高年齢での登頂／高橋留智亜は日本人女性として4人目の登頂

【2000年春（プレ・モンスーン）までの主な記録を掲載】

「秩父宮記念山岳賞」受賞記念論文

マッキンリーの気象

大蔵喜福

一九八九年二月、厳冬のマッキンリー登頂をめざした岳友、山田昇、小松幸三、三枝照雄三氏は、極北の過酷な悪天候のもと、帰らぬ人となった。気力、体力、技術とも最強パーティーと認め誰もがその成功を疑わなかったのだが……。

遺体となって発見された地点は、八四年同時期に行方不明となった植村直己氏が、最後に確認された地点にほど近いデナリ・パス直下であった。主因は烈風による気象遭難が有力視された。当時のレンジャーのひとりは数キロメートルにおよぶ烈風の雪煙が、二、三週間もたなびいていたと証言している。

(1) マッキンリー気象観測プロジェクトの十年

日本山岳会科学委員会委員であった私は、彼らの遭難が直接の契機になり、科学委員会管轄下のプロジェクトとしてマッキンリー気象観測に乗り出した。目的は気象遭難防止と高所登山戦略に役立てるための気象データの蒐集である。九〇年に気象観測機器設置登山隊を組織し、マッキンリーの五七一五㍍地点に世界最高所の定点観測ステーショ

ンを設置した。以来二〇〇〇年六月まで十一年間継続して隊を派遣、十年間分の気象データを蒐集し初期の目的を遂げることができプロジェクトを終了した。

この研究は二〇〇一年度からは、アラスカ大学国際北極圏研究センターに引き継いでいただけたので、こちらも出来るだけの協力関係を崩さない体制で継続することとし、今年は、センターの依頼で新規にソリッドステート型のウィンドセンサーなどの観測機器設置という予定を立てていた。だが、先方より新規機器についてはもう一年のテストが必要との連絡を受け、打合せを兼ね機器設置なしの身軽な形で行くことになった。

マッキンリー・二〇〇一年

登山隊はプロジェクトからは離れたがスタンスはまだ沿線上にあり、基本的に日本山岳会の学生部と会員から参加者を募った。二月末までに隊員は次のようになった。北口創尉（二十歳、法政大学山岳部）、田村護（六十三歳、会員）、田村誠太郎（二十二歳、明治大学学生）、内田敏子（七十歳、会員）、西田重人（四十二歳）と私の六人編成である（田村は親子参加）。

登山隊は十年前に崩壊した第一代の機器機材の残骸など撤去清掃の作業に専念することにした。そしてその後、六月十六日午後四時から五時にかけて全員が頂上に立った。その日の朝ハイキャンプ（五二五〇㍍）は、気温摂氏マイナス二十八度（簡易温度計）、風はやや強かったが晴天となった。例年になく寒くダウンジャケットとミトンに助けられた。内田敏子会員は持ち前の負けん気で見事に登り切り、マッキンリー登頂の女性最高齢記録（六十二歳米人）を大幅に塗りかえ、男性記録（七十二歳）にも迫るギネス記録を打ち立てた。チームワークの後ろ楯があるにせよ素晴らしい記録である。また着実に歩をすすめ頂上を勝ち取った田村護会員の六十三歳という記録も立派である。

今年は春の積雪量が例年になく多く、氷河上のクレバスはほとんど顔を出さずルートは直線的、雪崩も非常に少ないなど雪が安定、安全性が高く楽な登行となった。天候も比較的よかった。そのためか「魔のマッキンリー」が、ス

キーヤーおよびボーダー達の恰好のスノーフィールドに変わり、多くのエクストリーマーが目についた。なかでもマッキンリー南西壁メスナークーロワールをボードで滑り降りた広田勇介氏（二十三歳）、石川哲也氏（二十二歳）ペアには驚いた。彼らはレスキューガリーも滑り、十八日には頂上からの滑走にも成功した。両氏とチームを組んでいる岩井右木子氏（二十四歳）もスキーで行動し、ＶＴＲでの記録を撮るなど彼らのバックアップに活躍していた。登攀技術はと気になったが、しっかり登っていたので安心した。

三～四年ほど前よりボードを持ち込んで楽しむ登山者が急増し、当初公園レンジャーは「雪崩など（で事故を）起こされてはたまらない」と渋い顔をしていたが、今年はそんな苦言はなく冒険は制限なし、自己責任で自由気儘な様であった。それゆえ登路の脇は二重三重にもシュプールが取り巻く始末だ。事故が起きなかったので幸いだったが、スキーヤーおよびボーダーには、滑る技術もさることながら、気象状況をしっかり学習、把握して入山する必要性を強く感じた。状況のよい時は何事も起きず物事も上手く運ぶが、いったん空の機嫌が悪くなると、とんでもないことになるからだ。

遭難死ゼロ

この三年のマッキンリー山登録入山者数は一昨年が千百八十三人（登頂者五百八で登頂率四三％）昨年が千二百十人（同六百十三で五二％）、本年が千三百五人（同七百八十で六〇％）と人数も登頂率も増加の傾向だが、これは良好な天候が続き氷河の状態が安定していたからで、山がやさしくなったわけではない。九九年は八年振りに遭難死ゼロを記録した。その後の二年間もなく、喜ばしい傾向が続いてはいるが、遭難事故が全くないわけではない。

入山二カ月前までの事前登録義務の徹底化、登録料の徴収（九五年より一人百五十ドル）、レンジャーステーションでのオリエンテーション（現状ルートの解説、装備・食料チェック、ゴミ・排泄物処理等の衛生面、凍傷、運動生理の高所医学面等）という三つの制度が遭難を減らすのに効果を上げているといえる。

ただ、マッキンリー山の気象的特徴などのレクチャーはほとんどない。気象は個人の登山技量の一部と認識し、そこまでのサービスは過剰との判断か？　われわれプロジェクトのデータは毎年知らせてあるが、データがより使いやすい形になっていないので、まだ直接利用にまでいっていないようだ。役に立てて貰えたら非常に嬉しい。

タクティクスはイコール天候

天気はタクティクスに大きく影響するので、戦略として考えるという形をとる必要がある。まずは悪天候を休養してばかりいると二〜三日が無駄になり、アタック日を逃し、時間切れで敗退の憂き目にあう。好天時にここぞとばかり無理矢理な行動をとると高度障害などで苦しみ敗退する……などである。

基本的には雲の状況（雲形、動き、風）を常に観察し、翌日を予報する観天望気の知識が必要である。局地的予報は観天望気で十分可能といえる。ただ（観天望気だけでは）中長期の予測は不可能なので、レンジャー経由の現地気象通報など参考にする。その予測に基づいてハイキャンプへの荷上げ量や滞在日数、アタック日をおおよそ決めて、毎日の修正によって行動ということになる。だから悪天候日は単に行動中止とするのではなく、その度合いによって、少しでも前進といったタクティクスや高所順応に役立てる休養など、いかに無駄なく行動するかが登山成功のカギとなる。

なお、レンジャー経由の天気予報はCBラジオチャンネル19で毎晩八時、ランディングポイントより送られる。また連絡用のトランシーバーを持っていれば、常にランディングポイントおよびメディカルキャンプのレンジャーステーションと交信が可能である。エアサービス各社で借りられる。

以下蒐集できた各年度、気温・風速の最大値（風速は瞬時値の記録で最大値を保持したものではない）のデータを第1表に示す。

頂上はいつも冬

ここで十年間の気温と風速のデータを中心に、マッキンリー登山十二回の経験を重ねて、ノーマルルート（ウエストバットレス）の年間の気象概要を考察してみる。冬は九八年三月冬期マッキンリーに単独登頂した栗秋正寿氏の報告を照らし合わせてみる。

データから大まかに推し量るとこの山の気象は夏と冬の二期に分かれると考えられる。気温でいうと四月中旬と八月下旬を境とし、急激な変化がある。登山シーズンの四月下旬から八月中旬までが夏、八月下旬から翌四月中旬までが冬といえる。ただし五〇〇〇㍍以上はいつも冬であるという認識がいる。

だからこの山のトップシーズンは四月末頃から七月初旬までの約十週間ほどである。この間は温度も上昇し、天候は安定し登山に適する。この時節がエア・タクシーの飛来に支障のない氷河状態でもあるからだ。七月に入ると雪面が腐りランディングもテイクオフも難しくなるので登山者は激減する。トップシーズンは六月いっぱい、登山者の賑わいは最高潮になる。

下部氷河上（二〇〇〇〜三五〇〇㍍）の行動では、日射の温度は摂氏三〇度以上にもなり強烈で、熱射病や熱中症、日焼けに注意しなければならない。太陽が陰ると途端に気温は下がり一気にマイナスになる。温度差は軽く四〇度を超える。この時期の最低気温の平均は摂氏マイナス一五〜一七度である。直射日光と寒さ対策双方のウエアに配慮が必要である。四〇〇〇㍍より下部では寒さも特別ではないので夜間（白夜）活動も不可能ではない。

低気圧や前線による降雪、吹雪など悪天候は、最長でも三日も待てば遠のく。天候に関しては、メディカルキャンプ四三三〇㍍までは、多少ぐずついた天気（降雪や吹雪、ホワイトアウト）でも行動できる。悪天候で太陽が隠れると気温が一気にマイナスになり、強風があれば体感温度も極端に下がる。ちょっとした油断が凍傷を招くことになるので、ウエア、グローブなどに気を使うこと。

ウエストバットレスのショルダーより上部は、岩稜と岩峰、雪のリッジなので、緊張感が途切れるとスリップ事故

第1表　各年度　気温・風速のデータ概要

●1990年度　有効測定期間 '90 6/15～'91 6/26
　最低気温　'91　2/ 3　午前 7：00　−58.2℃
　最高風速　'90　8/27　午前 9：05　63 m/s（センサー崩壊で11/22までの最高値）
●1991年度　センサー支持架台が倒壊しセンサー崩壊のため、データ回収のみ設置なし
●1992年度　有効測定期間 '92 6/22～'93 2/8（異常電流発生でロガー本体停止）
　最低気温　'93　1/21および2/2　−51.0℃（ロガー本体停止2/8までの最低値）
　最高風速　'92　9/12　午後　43 m/s（センサー崩壊９月中旬までの最高値）
●1993年度　有効測定期間 '93 6/17～'94 6/25
　最低気温　'94　3/ 4　午前10：15　−52.7℃
　最高風速　'93 11/18　午前 2：45　41.47 m/s（センサー崩壊11月下旬までの最高値）
●1994年度　有効測定期間 '94 6/25～'95 6/19
　最低気温　'95　3/15　午前 0：00　−52.2℃
　最高風速　'95　2/16　午前 0：30　63.89 m/s（気温−40.0℃）
　新規システム
　最低気温　同上
　最高風速　'94　7/22　午前 3：10　82.50 m/s（センサー崩壊9/6までの最高値）
●1995年度　有効測定期間 '95 6/19～'96 6/23
　最低気温　'95 12/ 2　午後 1：30　−59.4℃
　最高風速　'96　1/12　午前 4：30　57.70 m/s（気温−44.5℃）
●1996年度　有効測定期間 '96 6/23～'96 10下（異常電流発生でロガー停止）
　最低気温　'96 10/18　午前10：45　−45.7℃（ロガー本体停止10下旬までの最低値）
　最高風速　'96 10/28　午後 1：00　47.60 m/s（ロガー本体停止10下旬までの最高値）
●1997年度　有効測定期間 '97 6/24～'97 10中（異常電流発生でロガー停止）
　最低気温　'97 10/ 7　午前 1：30　−43.4℃（ロガー本体停止10中旬までの最低値）
　最高風速　'96 10/10　午前10：45　36.80 m/s（ロガー本体停止10中旬までの最高値）
●1998年度　有効測定期間 '98 6/13 ～'99 6/23
　最低気温　'99　2/ 3　午後 3：30　−57.4℃
　最高風速　'98　7/ 3　午前 6：00　20.56 m/s（センサー異常で７月下旬までの最高値）
●1999年度　有効測定期間 '99 6/23～'99 12/19（異常電流発生でロガー停止）
　最低気温　'99 12/18　午後 5：45　−53.4℃（ロガー本体停止12 /19までの最低値）
　最高風速　'99　7/ 2　午前 7：45　27.37 m/s（センサー異常で７月中旬までの最高値）
●最終回収　'00　6/21

注）＊時間は日本時間
＊普通、風速とは前10分間の平均風速をいうが、ここでの風速は瞬時値の記録で、最大値を保持したものではない。
＊異常電流発生でロガー停止については、CPU 誤動作による動作停止を防ぐためワッチドックタイマーを付けていたが、静電気等原因不明の異常電流が流れ記録停止となる。
'97 以降はタイマーを外し誤動作を起こりにくくしたが、相当以上の異常電流により停止した。

などにつながる。強風時には特に慎重に行動すること。登山の技術にはヒドンクレバスがあるので、氷河に対応するスキー登行とロープワーク、アイスアックスとクランポンの氷雪登行、フィックスロープ登攀のテクニックが必要。

(2) マッキンリーの観天望気

ルートを追って観天望気による局地的な悪天と好天の見分け方と、悪天の特徴的な事項を具体的に記す。

カヒルトナ氷河本流では、この氷河最北に位置するカヒルトナパス（三一四五㍍）の上空を観天すること。常識的に考えるならば、天気は西から東へ動くのだが、ここは西側にフォーラカー峰（五三〇四㍍）、クロッソン峰（三九〇一㍍）をつなぐ比較的高い尾根に遮られて、西からの悪天の兆候となる気圧七〇〇ヘクトパスカル前後の雲の塊は、カヒルトナパスを北から越えてくることが多い。多くが寒気と降雪を伴うが大嵐になることは稀である。

カヒルトナ氷河はランディングポイントよりカヒルトナパスまで一〇〇〇㍍の標高差がある。風があれば雲は流れるが、風がなく氷河が太陽に照らされた後に停滞すると、二五〇〇以上三二〇〇㍍が必ずホワイトアウトになる。その場合は周辺温度は上昇しどんよりとして暖かくなる。この状態をメディカルキャンプ（四三三〇㍍）あたりから俯瞰すると、流れ込む雲は滝のように氷河谷に流れ留まる雲海となっていく。この程度だとホワイトアウトが問題になるだけですむ。

寒気を伴った風が吹き下ろしている場合は、周り全体の峰の四五〇〇㍍以上に雲がかかる。積雪はさほどではないが、急激に気温が下がり吹雪となる。こうなるとほぼ一日悪天が続く。このあたりでは大きな天気の変化は全て北側からの雲を注視していればよい。

三三五〇㍍の通称デポ（キャッシュ）キャンプは、カヒルトナ氷河が東に折れてせりあがった斜面にあり、頭上にはウエストバットレスの末端壁が迫っている。この周辺になるとカヒルトナ氷河本流とは異なって、東からの雲の動きに注意するとよい。西からの崩れはカヒルトナパスから上昇してくる残り雲で、あまり問題にならない。

四五〇〇メートル以上にかかる東からの厚い雲は風雪をもたらす。多い時は積雪二〇センチメートル以上あり右岸よりにとられているルート上の斜面は表層雪崩に注意しなければならない。こんな時はウィンディコーナーは烈風域になる。ここでの烈風は息つぎがなく数時間も続くことが多い。経験では五時間もテントを被って凌いだことがある。

吹雪（ブリザード）時にウィンデーコーナーを抜けるのは要注意だ。時期や状況にもよるがウィンデーコーナーは時には氷結した斜面になる。烈風が吹きはじめたら危険極まりない。起立限界に近い秒速三〇メートルほどの風は夏でも吹く。この風に捕まったら、耐風姿勢をとりながら、膝上までの濁流の中を遡行するといったようなパワーがいる。一〇キロほどのソリが浮いてしまい凧のようになった経験がある。

雪崩

ルート上の雪崩に関しては、デポキャンプからウィンディコーナーを経由してメディカルキャンプ上部四六〇〇メートルまで、ウエストバットレス側の斜面からが出やすい。幾つものデブリが散見され油断できない。規模の小さい表層雪崩だが、巻き込まれたらただではすまない。気温が上昇するお昼前後の行動は慎重に行うことだ（ウエストバットレスのショルダーから上のリッジは問題ない）。

私が巻き込まれた雪崩について以下に記す。参考にされたい。

二日間で積雪三〇センチメートルほどの降雪があった後の表層雪崩だ。九〇年六月十日の午前十一時、場所はデポキャンプから、高度差二〇〇メートル傾斜三〇度ほどあるモーターサイクルヒルと呼ばれる雪壁にかかる地点。距離にして三〇〇メートルほど上部に幅二〇〇メートルの亀裂が走り、一気に表層が崩れて、雪崩はロート状の地形に沿って中央に集束し、長さ三五〇メートルほどの流れとなった。

上部が騒がしいので見上げると一〇〇メートルほど前を雪崩が疾走して来ていた。音は聞こえなかった。K隊員とロープを結びその真下で行動中だった私は間に合わないと判断し、窒息しないために口と鼻を手で覆っただけで、襲ってく

る雪崩にまともに吹き飛ばされた。強烈なショックがきた。ボディブローを食らって流されるまま頭から逆さまに埋まった。デブリはギシギシと音を立てて身体を締めつけてきた。口と鼻を手でカバーしてあったので呼吸ができた。中は真っ暗だった。最初は天地左右がわからなかったが、逆さという感覚は残った。運良く押し出しの末端でそれも浅目だったのが幸いし足先が動いた。しばらくもがいて自力脱出ができた。知らずにストックとピッケルで耐風姿勢をとっていたらしく、ストックを持っていた右手の親指付け根が腫れ上がっていた。痛みはきつかったが行動に差し障りはなかったのでテーピングだけで済ませたが、後に亀裂骨折だったことが判明した。

悪天と積雪

メディカルキャンプからハイキャンプまでの悪天を呼ぶのは、頂上ドームに覆いかぶさる笠雲の類（つるし雲、レンズ雲）やハケ雲だ。これはブロッキング現象による前線の迷走で東から上部岩壁を覆う。周囲にも同じように笠雲の類が現れるのでいつも注意深く見回すことが肝腎である。厚く重いレンズ雲などに覆われたら風雪が始まる。さらに、東からやって来る雲（巻層雲など、時として南から）に覆われる。上空にかかるというより包まれる状況が多い。この場合は降雪が問題で風は弱まる。ただし、最長二〜三日続くので覚悟しておくこと。

メディカルキャンプで大降雪によって閉じ込められた例を記す。九四年六月十五日の午後より降りだした雪は、時折吹雪を伴い三日間続き積雪は一㍍近くに、その後も断片的に降り続き、二十一日まで都合六日間行動不能となった。この場合は気温の変化もさることながら、毎日、高度計（気圧計）の変化を見ることが重要。降雪、吹雪が続く場合は一〇ヘクトパスカル前後降下する。最悪の場合は数時間で四〇〜五〇ヘクトパスカル下がるという変動もある。悪天も気になるが、大きい変動の場合はハイキャンプ五二五〇㍍では高度障害に注意すること。居ながらにして三〇〇㍍ほど高度が上昇する状態と同じだからだ。メディカルキャンプの高度でも気を付けたい。高度計（気圧計）で予測は可能だから忘れないことだ。

メディカルキャンプよりウエストバットレスへは、固定ロープを辿ればショルダーへ容易に達せられる。この斜面は深いラッセルや烈風があると辛い登りとなる。東からの薄い雲で覆われると、異常なほど温度が上昇しホワイトアウト状態になる。降雪があるとレスキューガリー側より小さな表層雪崩が起こる。デブリに注意がいる。

ブロッキング高気圧（気圧系の東進を妨げる変則型高気圧）によって起こる前線の移動があるとウエストバットレスのリッジ上は猛烈な吹雪となる。行動中、烈風に襲われ退却したことがあったが、この時は北東からの雲であった。リッジは全方向からの（のべつ幕なしの）烈風に襲われ、ツエルトを被るのが精一杯、手で押さえたまま二時間以上耐えたことがあった。雲が迫ってくると悪天となるので早めの退却が無難である。

上部の気象

ハイキャンプ（五二五〇㍍）以上での悪天の特徴は、烈風とホワイトアウトである。吹雪あるいは烈風は東南と東からが多く、この兆候は東の空に湧く雲（笠雲など）で予測する。五七〇〇㍍くらいより上にすっぽり笠雲がかかると風雪は強くなる。二、三重ねともなると最悪だ。周囲の山々にポッリ、ポツリとレンズ雲が出てきたら要注意である。すぐに退却した方がいい。早ければ一時間ほどでにわかにかき曇ってくる。だから東の空に雲がないのを見計らって行動を起こすのがよい。いままでの経験から吹雪が遠のくのに二日かかる。

デナリパスから頂上にかけて、稀にホワイトアウトになる場合があるが、この場合も東からの雲だ。刷毛で描いたような、ほわっとした煙のような雲が幾筋もわき上がると二時間もしない内にホワイトアウトになる。なお南壁からわき上がる雲も注意にこしたことはない。同じようになる。

（3） 風の予測

気象の予測には観天望気の他にもうひとつ重要なことがある。それは風の予測である。晴れ上がっていても吹雪で

も烈風荒れるなかの行動には危険が伴う。予測できるにこしたことはないからだ。風の予測にはヒマラヤ等の観測と実測データから導き出した私なりの方法があった。それは温度と気圧の変化で予測する。「気温・気圧の数値が底をついた後、急上昇に転じたのち強風が吹き出す」という相関関係である。同じ場所に留まっての記録の方が正確だが、行動中の記録でも傾向はわかる。毎日朝夕、定刻に温度と気圧の数値をグラフとして記録する。グラフ上の過去のデータ中で、最低気温と最低気圧を一旦記録した後、急激な気温と気圧上昇のあった場合は、その数時間から一日後に猛烈な強風が吹き出す。簡易な寒暖計と高度計付き時計があればできることなので、記録しグラフ化しておくことを勧める。

このメカニズムは、ブロッキング現象によって起きる高層の切離高気圧や切離低気圧の発生による複雑な前線の動きによるものである。偏西風に左右される中緯度における気圧系の東進という気象の動きと違い、高緯度地帯の天候の特徴ともいえる。ヒマラヤの高高度における局地的気象にも似たような傾向があるが、マッキンリー（アラスカ山脈）では、西側ベーリング海で発生した低気圧の東進に対抗して、東側に発生するブロッキング現象（高気圧）がもととなって、前線があらゆる方角に進んだり停滞する。この場合は南からの比較的温度の高い強風を呼び込む。東に低気圧があって西にブロッキング高気圧が起こる場合は、北からの冷たいブリザードに襲われる。

マッキンリー周辺では通常、低気圧の東南進に対抗して東側にブロッキング現象が起こる場合が多い。発生周期は夏で十日ほど、そうひどくはないが悪天は二〜三日持続する。冬は栗秋氏によると二週間から三週間周期で発達すると一週間持続すると報告している。夏の方が冬より頻度が高いようだ。ここでは気温・気圧の急な変動（上昇だけでなく下降も）のサインが、ブロッキング高気圧あるいは低気圧の発生または発達の前兆とみなしてよいようだ。風向きと気温・気圧の数値をグラフにとりつづけることが、気象変化を知るカギとなる。特に冬は烈風を伴う吹雪を予測する最大の武器というわけである。この方法は私自身が冬のヒマラヤで、栗秋氏が冬期マッキンリーで実証してくれ、強風の予測に非常に役立つものと思える。

ただし夏の時期は、ウィンデーコーナー（約四〇〇〇㍍前後）とウエストバットレスのリッジ、ハイキャンプ周辺から頂上（五〇〇〇㍍以上）の地域を除きそれほど強烈な風は吹かない。

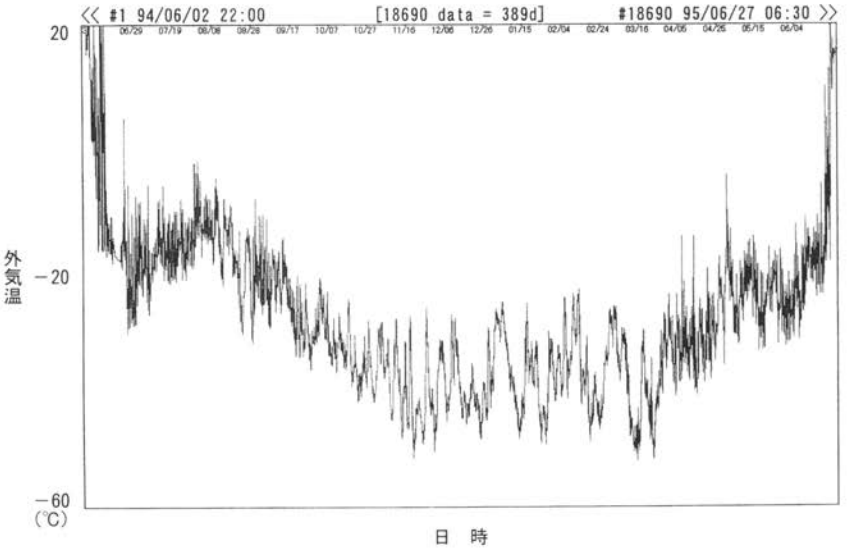
以上、経験上から夏（六月）のマッキンリー山の気象概説をしたが、登るには最良の時期なので、気象の傾向を把握し変化を速やかにとらえ好天を利して一気に登ることだ。重ねて記すようだが、平均の最低気温は摂氏マイナス一七度ほどだが寒さは半端ではない。いままでの経験でもハイキャンプ五二五〇㍍以上で、最低気温が摂氏マイナス二五～三〇度近くまでなった年度が五回ある（簡易温度計）。それに対応できるグローブやオーバーシューズ等防寒装備の準備を怠らないこと。行動中の摂氏マイナス三〇度は、グローブをしていてもアイスアックスの金属部分を持っているだけで凍傷になる可能性がある。五〇〇〇㍍を越えたら状況は冬と同じと考えよう。

（4） データでみる観測地点十年間

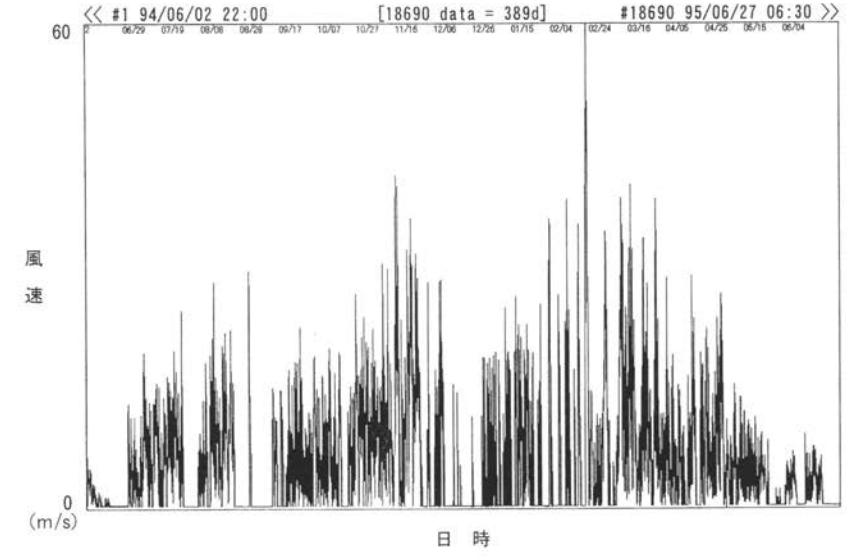
気温・風速共年間観測ができた一九九四年と九五年のデータを第1図から第4図に、栗秋氏が冬の登頂に成功した九八年三月のデータがあると有用だったが、九七年度は十月中旬までしか記録できず、まことに残念な結果となってしまった。そこで参考に九八年度の年間気温のデータのみ第5図に示す。

気温と湿度

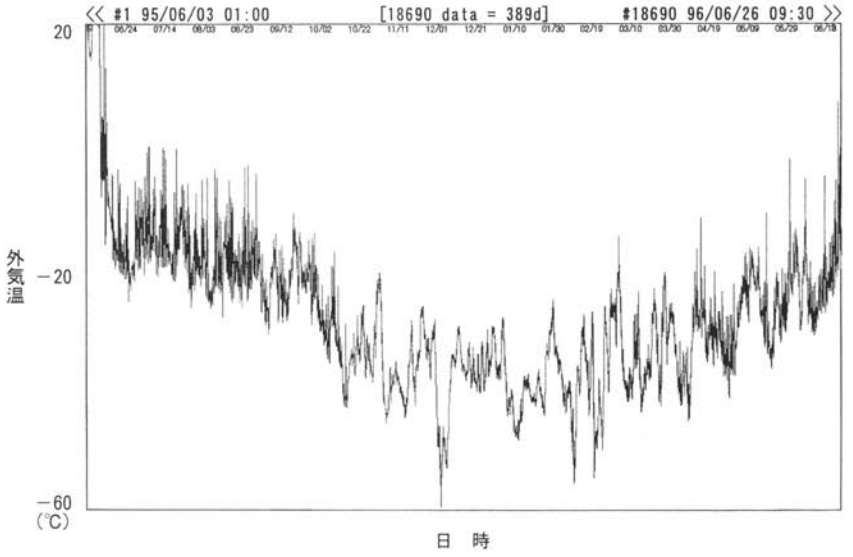
最低外気温度は、九五年十二月二日の摂氏マイナス五九・四度。気温による電気抵抗等のデータ補正および高度補正を考えると、頂上の最低気温は摂氏マイナス七〇度に肉薄する。観測地点平均外気温のデータからは、話題になっている地球温暖化（森林に悪影響を及ぼす凍土の溶解というアラスカの温暖化）を裏付ける推移がみえる。この十年だと三年度から五年度までは比較的温かく、六年度からまた序々に冷える傾向にある。なお、雪中に埋めてある記録コンピュータ、データロガーボックス内温度の最低は外気より摂氏約一〇度ほど高い値が毎年記録されている。



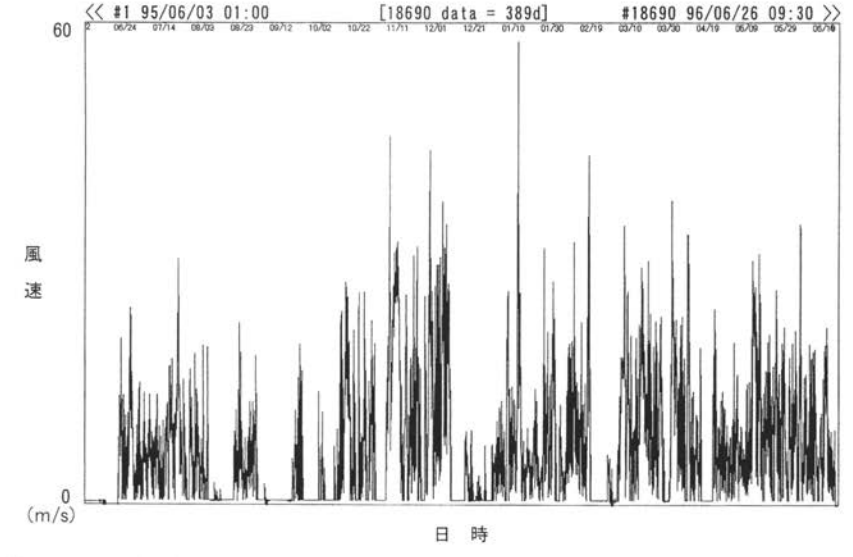
第1図　1994年度（有効観測期間 '94 6/25～'95 6/19）外気温



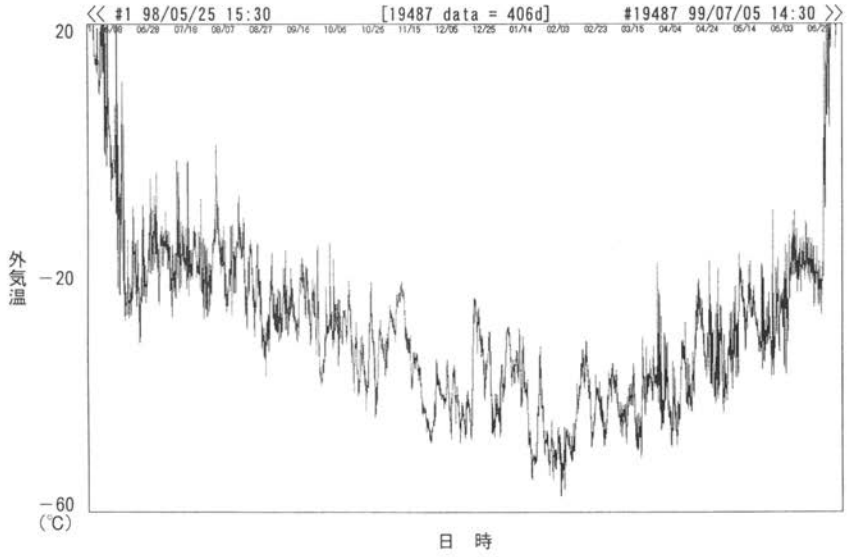
第2図　1994年度（有効観測期間 '94 6/25～'95 6/19）風速



第3図　1995年度（有効観測期間 '95 6/19～'96 6/23）外気温



第4図　1995年度（有効観測期間 '95 6/19～'96 6/23）風速



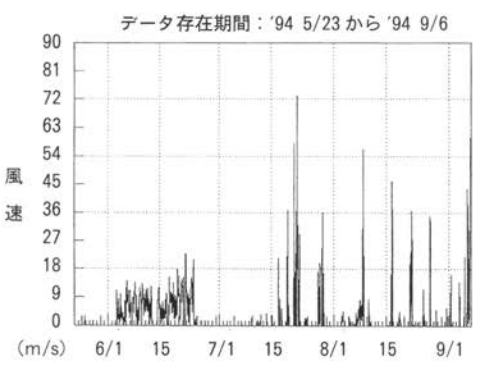
第5図 1998年度（有効観測期間 '98 6/13〜'99 6/23）外気温

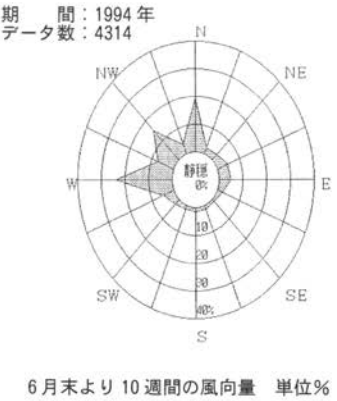
湿度は九四から九五年の夏の平均で六〇%以上、冬の湿度は最低が四五%、平均で五五%ほどある。超低温でも湿度の数値は想像以上に高く驚きである。

風速と圧力

風に関してのデータは、はかりしれない自然の驚異に毎年センサーの異常が発生し真冬の烈風は捕らえきれていない。風向センサーはほとんど問題なく記録されるが、三杯式風速センサーは通年測定できていても、ある時から記録が途切れたりし、杯が凸凹状態になって回転軸のセンターが狂うことが幾年も続いた。異常が起きた日が特定できずデータの信憑性には問題が残る。

マッキンリーでは気圧・温度から推定すると夏の終わりは八月で、七月下旬から強風が段々と吹き、湿ったベーリング海からの低気圧が西からの風にのって大量の降雪をもたらすのではないかと推測している。風速センサーの破損はその雪と意外に高い湿気による三杯への氷着、烈風に飛ばされる氷破片の衝突等が原因と思われ、時としては出力が記録されていない（止まっている？）。いままでの風速の記録でも、八月の下旬と九月の中旬に南





第6図　a　1994 年度（プロペラ式　有効観測期間 '94 6/23～'94 9/6）
b　1994 年度（プロペラ式　有効観測期間 '94 6/23～'94 9/6）

からの強風が来て、その後風杯が破損し記録が止まっている。これは相当発達したブロッキング現象の影響による烈風が原因と考えられる。早い時期に破損した時の条件は一致している。

参考として真冬に入る前に測定された記録を示す。三杯型センサー最大風速では九〇年八月の毎秒六三メートル、九五年二月の毎秒六三・八九メートル、プロペラ型センサーでは九四年七月の毎秒八二・五メートル等がある。いずれも前後に丸一日から数日のスパンで強風が吹き荒れている。

最高風速を記録した九四年の新規システム（プロペラ型センサー）の風速と風向のデータを第6図aとbに示す。このシステムでは風速のグラフは一日二四データ（一時間毎）の瞬時値を表してあるので、測定された最大瞬時値の七月二十二日午前三時十分の毎秒八二・五メートルはグラフには現れていない。二十二日は観測時午前一時毎秒七二・八メートルが表示される。ちなみに最速値をホールドした十分前の午前三時の瞬時値は毎秒七一・五メートルである。この時は十九日午後より強風域に入り凪もあるが二十一から二十二日の午前中まで六〇メートル前後の風が吹き荒れている。毎秒八二・五メートルは時速約三〇〇キロメートルという途方もない烈風である。ただし平地の風圧換算は測定高度では約七割となる。稜線を吹き抜ける風の加速を加味すると約一・三倍（実験値）になるので、平地で毎秒七五メートル

という恐ろしい風になる。

計算と実験では平地での起立耐風限界値は毎秒三三㍍である。マッキンリー観測地点周辺なら限界値は毎秒四三・八㍍である。八九年二月の山田等三名の遭難時には現場では毎秒三九㍍の強風が吹いていた（平地換算では毎秒約二九㍍に等しく、正面より受ける空気抵抗約三三㌔、揚力が一三㌔である）。しかし、稜線ならばその約一・三倍になり毎秒五〇・七㍍となる。すでに限界値を超えている。その上に局地的な乱気流が起こっていたとすれば実際の風はこれ以上の圧力となる。毎秒五〇・七㍍の風は一定方向の単純な風とし計算しても（平地では約毎秒三八㍍の風速）空気抵抗は五二㌔、揚力は二〇㌔以上となる。大人一人分の重量が正面からもろに被さるのである。そんなところで毎秒八二・五㍍（平地換算毎秒七五㍍）という風は想像すらできない。

風向については、夏には全方位に風が回る印象が強いが、観測地点においては第6図bのデータ（九四年六月下旬から十週間分の風の割合）では、西、北西、北の風が多い。他の風向データも同じように処理すると明確だが、未処理なので明確にはいいきれないが、大きな天候変化がない場合は西から定常的に吹いているようだ。強力なブロッキング現象が起きるなどすると、やはり東南側からの風になるようだ。二十二日午前三時十分毎秒八二・五㍍を記録したとき、風向は北北西でその後北北東から北西、西と動く。十九日午後より強風域に入っているが、この日の風向はほとんど東北東から東、二十日は東北東から東、そして南、西北西に回り込んでいる。二十一日は南西が多く、この四日間は東から時計回りに烈風が二周したことになる。まるで台風のようだ。

いずれにしても、高層の自由気流ではないので地形の影響もあり、場所ごとで大きく違ってくる。要は悪天候になると風は舞い、天候の安定したときは西あるいは北西の風が吹く。冬は南から南西が多い傾向で、夏とは反対である。

気圧による高度変化

最低気圧は九五年の二月に約四三〇ヘクトパスカルを記録した。夏の気圧の最高値がこの前年の六月で約五〇〇ヘ

クトパスカルだから夏と冬では七〇ヘクトパスカルの差がある。九二年は最低値が約四五〇ヘクトパスカルで最高値が五一〇ヘクトパスカルで六〇ヘクトパスカルの差である。その気圧差を単純にメートルで表わすとそれぞれ、約九〇〇メートルと七〇〇メートル高くなる勘定。気圧変化を考慮すると冬の頂上はいずれにしても、七〇〇〇メートル峰に近いといわれることが実証された。

現実にこれだけ高度が変貌する高峰はほかになく、居ながらにして高度障害に掛かってしまう特異さと恐怖が理解できる。

なお、九八年の三月八日午後一時過ぎ、単独で冬期登頂に成功した栗秋正寿氏の頂上のデータによると、その時の頂は霧で南からの疾風があり、気温は摂氏マイナス三七度、気圧四六六ヘクトパスカルと報告している。

三月は山の気象でいうと冬期に入るが、マッキンリーでは気温も上昇に転じ始め、気圧はほとんど夏と変わらない。非常に安定したよい時に登っている。彼の気象に関する学習が実を結んだ結果といえるが、素晴らしい登山である。因みに気圧で比較すると六月初旬（〇一年現地観測）晴天時ランディグポイントでは七八〇〜七九〇ヘクトパスカル、六月中旬のメディカルキャンプで五九〇前後。二月中旬（栗秋報告九八年）が七六〇〜七七〇ヘクトパスカル、三月初旬で六〇〇前後とそれぞれ約一〇ヘクトパスカル低いという程度である。

マッキンリーの冬を八月中旬から四月上旬の八カ月とすると、その平均外気温度が摂氏マイナス三五度ほど、極低温の厳冬期といえるのは概ね十二、一、二月である（十一月と三月も時としては摂氏マイナス五〇度を記録するが）。

（5） マッキンリー気象観測用機器

第一次マッキンリー気象観測登山隊は、九〇年六月マッキンリー頂稜五七一五メートル地点に定点観測機器を設置。以来毎年同時期に登山隊を派遣し、機器点検保守、センサーと記録装置の回収・据替えを実践してきた。観測機器架台崩壊やセンサー破損と、挫折と再生の繰り返しが続いたが、自動観測機器については第五次隊（九四年）が最大レベル

の機器を設置し、この山の特異さを示す貴重なデータを捕らえることができた。

最大レベルの観測機器は、プロペラ型風向風速一体型センサー（ＫＤＣ―Ｓ４ヤング社製）風速測定範囲は毎秒〇～六〇メートル、瞬間最大耐風速一〇〇メートル。風向ポテンシャル〇～三六〇度（不感帯五度）。記録インターバル十分、記録時間は四百四十日と設定し、風向風速とも瞬時データを記録する（コーナシステム社）。

小型軽量なので長期フィールド使用向きなのだが、高所極寒そして烈風のマッキンリーでの耐久性に不安が残った。従来のプロペラ型センサーと異なるのは、風速信号が非接触式の周波数出力で起動風速が低いという点だ。負荷のない発電方式（プロペラシャフトに付いた永久磁石が回転し、固定されたコイルに周波数信号が発生する方式）で無理のない動きが特長。

さらに温度湿度センサー（ヴァイサラ製。記録インターバル十分、記録時間は十四カ月、湿度・気温の瞬時データを記録）を新規に設置し前回より多くのデータがとれるようにした。

従来システムのものは、風速センサーが毎年破損したので、この点を予測して前回と前々回使用した三杯型風速センサーと矢羽根型風向センサーをそれぞれ素材等強固に改良した（牧野応用測器製、記録インターバル十五分、記録時間四百四十日、風向・風速の瞬時データおよび最大瞬間風速を記録）。その他外気温度センサー（熱電対ＰＴ１００）一台、自動記録装置データロガーの内温度センサー（同）一台、気圧センサー（ヴァイサラ製。高所仕様、記録インターバル十五分、記録時間四百四十日）だ。

自動記録するデータロガー（コンピューター）はプロペラ型風向風速一体型センサーと温度湿度センサーはコーナシステム社製のものをそれぞれ一つ用い、残りのセンサーはすべて白山工業製のロガー二台で処理する三つのシステムを組んだ。ロガーは静電気などの外部ノイズから守るために金属ケースかアルミ箔にてシールドを施した。十一のセンサーで記録が重複しないよう時間をずらし風向、風速、最大瞬時風速、湿度、外気温、内気温、気圧の瞬時データを測定できる。前回と比較してより多くの要素が観測できるシステムになった（写真１　新システムは九四年度記

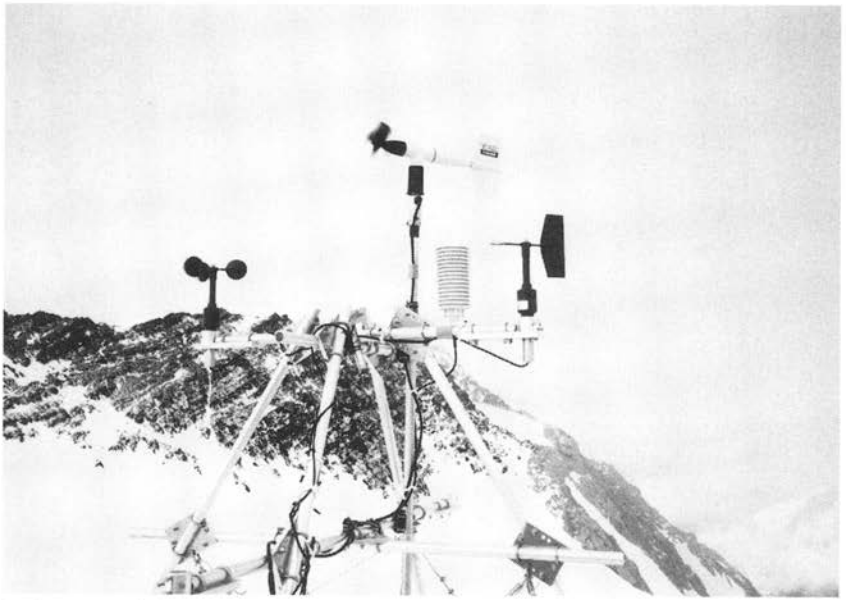


写真1　1994年第三代観測装置（設置日 '94 6/23）

録のみで、九五年度回収時にはセンサーは跡形もなく飛ばされてしまっていた）。

その後の四年間は基本的には第三次より継承しているシステムで続けた。しかし、九六、九七年と連続して四カ月弱、九九年は六カ月間の測定で雷や静電気等異常電流発生でロガーが自動停止してしまった。

初めてすべてのデータが年間測定に成功したのは、九四年六月中旬から九五年六月である。年間継続観測のできたものを整理すると、外気温度とロガーボックス内温度が九〇・九二・九三・九四・九五・九八年度の六年間。風向・風速が九四・九五年（風向のみは九四・九五・九八年）、湿度は九四年度、気圧が九四・九五・九八年度である。

なお、時間は日本時間で入力されている。

付記

1　マッキンリー登山の概要

マッキンリーは北アメリカ大陸の最高峰。エアタクシー利用でアプローチが非常に楽なので、高所登

山のメッカとして多くの登山者に人気のある山だ。ただし、物理的高さに惑わされ高所登山入門コースといった認識でのぞむと間違いが起きやすい。極北の過酷な自然条件をもった特異な独立峰であることを忘れてはならない。気圧の面から見ると、実際の標高よりはるかに高い山であると考えるべきだ。悪天下では「凍れる魔の山」に変身し、夏でも過酷な登山を強いられる。

マッキンリーには東西南北それぞれの面から多くの登山ルートがあるが、ここでは一般ルートといえるウエストバットレスを紹介する。

アラスカ州タルキートナから北北西へ直線で約九〇キロメートルの地点が、マッキンリー登山の起点となるイーストフォークカヒルトナ氷河上のランディングポイント。グローバルポジションは北緯62度58分、西経151度10分、標高二一三四メートルだ。エア・タクシーで約五十分ほどだ。マッキンリー頂上位置は北緯63度04分、西経151度00分、標高六一九四メートルである。ランディングポイントより頂上まで水平移動距離が約二八・五キロメートル、標高差は四〇六〇メートルである。この間にキャンプを四〜五設け、約二週間ほどかけて登るのが標準である。登山期間は荷上げと高度順応、その他に休養を三日とると十三日ほどになる。悪天候になるとまず三日は行動できないので標準としては十五日前後が目安。

2　コース概要

カヒルトナ氷河本流に下り北進し、カヒルトナパス手前で東に折れ、われわれがデポ、欧米人はキャッシュと名付ける三三五〇メートルキャンプへ。モーターサイクルヒルと呼ばれる斜面を登り、プラトーをウィンデーコーナー四〇五四メートルへ。さらに氷河を越えてヴェイスンと呼ばれるプラトーにあるメディカルキャンプ四三三〇メートルへ。それからウエストバットレスのヘッドウォールを登り、ショルダーと呼ばれる四九四〇メートルから岩と雪のリッジをハイキャンプ五二五〇メートルへ。ここをアタックキャンプに右上する長いトラバースを経てデナリパス五五四七メートルへ、南へ進路をとりフットボールフィールドと呼ばれる約六〇〇〇メートルのプラトーを経て頂上稜線のショルダー六一三二メートルから雪のリッジを登

ると頂上六一九四メートルに至る。高度感は抜群で晴れていれば、果てしなく続く山脈を俯瞰できる。

登山技術としては、氷河歩行の一般的ロープワークと雪氷登攀の基本およびフィックスロープでのユマーリングテクニックが必要。ただ、ソリ引率、氷河でのローピングとスキー登行、クレバスの越え方、見極め方などには経験がいる。

本稿は第三回秩父宮記念山岳賞受賞の記念論文である。受賞対象となった業績は以下の三点。

一、登山者の立場から極寒の高山における烈風の実体を突き止める必要を認識して、マッキンリーの山頂近くに、通年稼動の無人気象観測・自動記録装置を設置した。この装置の設計は、風の観測に重点がある。二、装置の保守・交換のための登山は、事実上一回に限られる。第一次～第四次の登山で設置した装置には越年中に破損・故障が起こったが、改良を重ねた結果、第五次の設置以降のものは順調に働き、第十次までの観測記録が得られた。

三、毎年の保守・交換のための登山を通じて若手登山者を育成し、有為の人材を育て上げた。これらの毎年次登山はすべて無事故裡に完了した。

本稿ではこのうち、マッキンリー山頂近くの風の観測データを中心に、マッキンリー山頂の気象について論文を寄せていただいたものである。

K2 二〇〇〇年の記録

寺沢玲子

はじめに

山野井泰史がヴォイチェフ・クルティカとK2東壁を考えていると知らされたのは、一九九九年春のことであった。ある日、夫人の妙子からBCまで同行しないかと誘いを受けた。一九八八年晩秋、コンコルディアから眺めたK2の雄姿に再び相まみえたいと願っていた私は、二つ返事で承諾した。数日後、妙子からK2の名目隊長を引き受けて欲しいという思いもよらぬ依頼を受ける。山野井やクルティカとも話し合い、有事の場合を想定すればそれが良策だとのこと。妙子も永年の山仲間の一人である飛田和夫と山学同志会会員中垣大作の三名で南南東リブを登ることに決めた。後に中垣は体調不良のため参加を取りやめ、妙子と飛田でチームを組むことになった。巷の反応が恐ろしくもあったが、腹を決め名目隊長の座に収まることにした。こうして技術的にも経験的にも一番未熟な隊員が隊長を務める奇妙な隊が成立した。

パキスタンへ

六月十二日、機上の人となる。クルティカとはイスラマバードで合流する。イスラマバードでの準備を終え、ブロードピークを目指す前橋山岳会隊とスカルドまで一緒の車をチャーターし、費用をシェアする。彼等とはこの後ゴレⅡまで宿泊地を共にする。

スカルドでは、K2モーテル近くのこじんまりしたゲストハ

ウスに落ち着き、買出しや梱包作業をする。八月一杯粘る予定でアタと石油は多目に用意、七十三個の荷が梱包された。

ベースキャンプを目指して

六月十九日、ジープ四台に荷とメンバーが分乗し、アスコーレを目指す。途中沢の決壊で車を乗り換え、さらにアスコーレの手前約一キロの地点で車を乗り捨て、ポーターの手でアスコーレまで荷を運ぶ。

六月二十日、キャラバン初日はジョラまで。かつて縁に薄氷の張ったデュモルド川を腰まで浸かって渡渉した記憶が残っており、憂鬱であったが、なんと立派な橋が出来ていた。

六月二十一日、ジョラからパイユへ目まぐるしく変化する天候の中を歩く。パイユには多くのトレッキング・チームや登山隊がテントを張っており、水汲みも順番待ちになる。

六月二十二日、パイユにてレスト。ポーターたちはロティ作りを始める。小雨降る中、裏山に高所順応に出掛ける。

六月二十三日、パイユからウルドカスへ。山野井とクルティカは、トランゴ岩峰群を指しては楽しげに語らい、飛田は八五年K２時のポーターと遭遇、昔話に花を咲かせている。

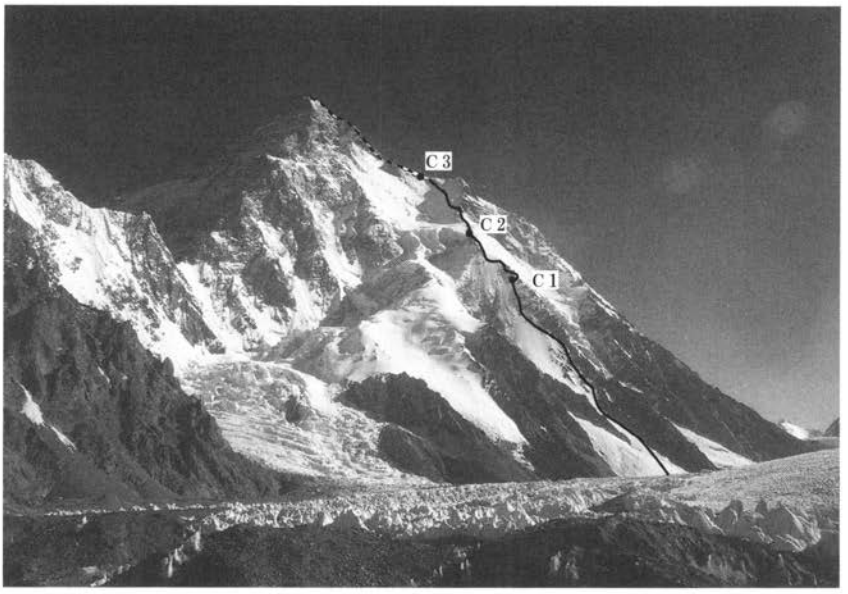
六月二十四日、ウルドカスからゴレⅡへ。ポーターの中にも遅れ出す者が出てきた。

六月二十五日、先ずコンコルディアを目指す。トレッカーや登山隊の数の多さに我が眼を疑う。頂稜部に雲を纏ったK２の雄姿を望む。前橋山岳会隊と分かれ、ブロードピークBCへ。労山隊のご好意でキッチン用具を借用。

六月二十六日、今日はいよいよBC入り。山野井とクルティカが先行しBC場所を決め、ポーターに荷の置き場を指示することにする。一時間ちょっとでK２BCに着く。七十三人いたポーターも五十五人に減った。昨夜揃えておいたルピー札を確認しながら一人一人に手渡すと、膨れ上がっていたザックの大きさは半分になる。既に韓国隊二、ブラジル隊、国際隊それにハンス・カマランダーのスキー隊が登山中で、この内の一韓国隊がこの日、十五時四十五分南南東リブから四名登頂した。

登山開始

六月二十七日、飛田、妙子と三人で韓国隊に登頂祝福と挨拶に伺うが、いきなりロープ使用料として一人五百ドルを要求される。我々が観光省から登山隊リストを受け取った時点では、南南東リブには我々しか隊はなかったが、連絡官は問答無用であった。彼は横柄で、後からもう二隊韓国隊がK２に来るので、金が払えないなら彼等が登山活動を終了するまで待て、それが嫌なら他の隊に頭を下げて南東稜へ行けば良い、と言う。既に金を払って南南東リブに取り付いている隊も確かにいた。英語のほとんど出来ない隊長は無言、我々は隊員が下降して来るの



サボイア氷河分岐点よりＫ２南南東リブとそのルート

を待って再度話し合うことにする。午後、サボイア氷河出合近くの慰霊碑に参拝する。

六月二十八日、昨夜下降してきた隊員を介して再度話し合いに行く。我々の粗末な和文計画書に眼を通していた一人が、何かを隊長に告げると急に態度が軟化した。ナンガ・パルバットで彼の隊の隊員が一人転落死した九〇年、妙子が同じくＢＣにいたことを思い出したらしい。しかし、誠意を見せて欲しいと言う真意が理解出来ず、結局他隊の了承を得て、南東稜で順応活動をすることにした。午後、南東稜のルート工作をしている韓国山岳会隊とブラジル隊それに国際隊の隊長を訪ねると、快くルート使用を許してくれる。午後から山野井・クルティカは東壁の偵察に出掛ける。

六月二十九日、飛田・妙子は南東稜取り付き往復。朝の晴天は何処へやら、黒い雲が立ち込め始める。昼前、飛田達と東壁チームが相次いで帰幕、東壁側は既に雪が舞い始め、視界が利かなかったとか。夕刻より雪。翌三十日は終日雪。全員夜遅くまでのんびりする。

七月一日、早朝起きるも、雪は相変わらず降り続いており、夕刻まで止まず。

七月二日、朝目覚めると視界ゼロ。雨漏りがひどいので、昼に皆でメステントにブルーシートをかける。韓国隊の無酸素登頂をした隊員が手に凍傷を負っているのでガーゼと包帯を譲っ

て欲しいと言って来る。包帯で保護して下山することになった。

七月三日、朝起きると一面の雪。本日も停滞。朝食後時々青空が覗く。メステントを張り直し、各自テント整理をする。韓国隊によると、K2の肩から頂上にかけてハンディ・トーキーでは交信が難しく、彼らはブロードピークBCまで降りて交信していたという。前橋山岳会隊と相談し、周波数を合わせてお互いの交信を傍受しあうことにする。夕方から快晴となる。明日から行動開始とする。

七月四日、二時には満天の星空だったのに五時前には既に雪となる。ブロードピーク上空は青空という。十四時過ぎ、東壁チームは偵察に出掛ける。東側に回り込むと交信不能なので、最初から無線機は持参しない。

七月五日、小雪も上がり、青空が見えてきた。六時過ぎ飛田達は順応のため二日間の予定で南東稜C1往復に出発。東壁チームは一旦帰幕。

七月六日、晴れ。ブロードピークC1～C2間に労山隊六名、C1上部に前橋隊二名、その他C1周辺に数名の姿を視認出来る。飛田達は十二時にC1に到達後一時間程休憩して十七時過ぎ帰幕。この日韓国のPark Young Seok隊がBC入りする。彼等も南東稜だ。

七月七日、目まぐるしく天候が変化する。労山隊の女性隊員が訪ねてくる。十四時三十分東壁チーム突然帰幕。視界が利かずルートを見出すことが出来ないので、一旦全て回収してきたとのこと。夕刻四隊目の韓国隊Han Kyu Yoo率いる大部隊がBC入りし、Park隊とで一大K2村が出現した。夕食時、韓国のHong Gil Um氏が訪ねてくる。彼等もまた南東稜で、結局南南東リブに向かう隊は我が隊しかなかったことがわかった。

七月八日、小雪舞う中、八時三十分飛田達はC1に向かい、十四時到達。休養中の前橋隊が日本食を持参して訪ねてきてくれた。

東壁断念、南南東リブへ

七月九日、東壁は断念、クルティカは離隊するつもりであったが、時間の許す限り別働隊として山野井と二人で南南東リブを登ることにする。昼過ぎ、飛田達が帰幕。

七月十日、曇り時々晴れ。朝六時、山野井たちは南南東リブC1、六四〇〇㍍へ。

七月十一日、夜半の星空は消え、また雪が舞い始める。昼前山野井達が降りてくる。

七月十二日、空模様を眺めながら飛田達が出発。カマランダー隊は十四日に見切りをつけてBCを去るが、南南東リブ約七〇〇〇㍍付近に彼等のテントが残置してあるので、使用して良いという。昼前から天候が急変する。飛田達も雪まみれで降りてくる。夕方急に雲が去り、青空となる。Hwang とLeeが来る。

七月十三日、夜半からまた雪が降り出し、本日全員停滞。昼過ぎには雪は止み、皆傾いたテントの土台を直す。カマランダー達がクルティカを訪ねて来る。夜には満天の星空だったのが、何と雨に変わった

七月十四日、未明より雨が雪に変わり、濃いガスが立ち込めている。ブロードピークBCは曇ってはいるがそれほど悪くはないというので、飛田と二人で前橋隊へ遊びに行く。

七月十五日、曇り時々雪。早朝CM隊の高所ポーターにモレーン上に遺体があると起こされる。K2からの雪崩の爆風でブロードピーク側に飛ばされていたものが、今度はブロードピークからの雪崩で、再度飛ばされて戻ってきたのだという。クルティカは、昨日カマランダーに八六年南壁から登頂後転落死したポーランドのT・ピトロフスキーと思われる遺体があると聞かされ、確認にいっていたという。身元はわからないが、収容して埋葬したいという彼の意見に異存はなく、飛田と寺沢それに連絡官の四名で出掛ける。件の悲惨な遺体と大腿骨一本そして胴体だけの遺体をもう一体発見、収容・埋葬する。またこの時、破損した赤色のベルグハウス社製ザックを発見したことにより、後日、元日本山岳会副会長松田雄一氏を始めとする多くの方々の協力で、九三年無酸素登頂後行方不明となったドイツのP・メツガーの遺品であることが判明し、ご遺族の元にお返しすることが出来た。

七月十六日、昨夜からの雪が止み、久々に太陽の光がまぶしい。九六年日本山岳会南南東リブ隊隊員の高貝喜久雄氏が夫人と訪ねてきて下さる。午後また天候が崩れ、強風が吹き荒れ、出発は中止。

七月十七日、昨夜からの雨が夜半から雪に変わり、終日強風が吹き荒れる。クルティカは天候が回復しないようなら、ポーターを確保出来次第下山したいという。

七月十八日、夜半の星空はまたしても消え曇天。五時、山野井が単身順応のため南東稜のC2往復に出掛ける。午後、遺品を回収したことを聞いたBBCが取材に来る。

七月十九日、雲が厚い。韓国放送が遺体収容に関する取材に来る。労山隊の高所ポーター二人が不足したアタを譲り受けに来る。クルティカが彼等にコンコルディアまでの同行を依頼すると彼等は即座にOKする。下山準備を始め、十五時過ぎ、クルティカはブロードピークBCへ下降、前橋隊に一晩泊めていただく。山野井は三泊の予定で十四時に出発、順応の遅れていた妙子はC1まで同行し、明後日帰幕。飛田は昨夜から風邪気味なので、薬を飲み早目に就寝。

七月二十日、五時C1は昨夜から吹雪との連絡が入る。BCは土砂降りの雨。午後、労山隊がCM隊に電話を借りるため、BCまで上がってくる。

七月二十一日、夜半の雪も止み、快晴。十二時過ぎ、山野井

C2約七〇〇〇㍍着。その後約七五〇〇㍍まで登り、この日はC2に泊まる。妙子はC2到達後BCへ下降した。飛田は十四時前BCを出発し、二十三時前C1に到着。

七月二十二日、山野井は昨日の到達地点まで再度到達した後、昼BCに帰幕。飛田はC2付近で濃霧となり既に雪のC1へ下降。BCも夕方からにわか雨と深い霧。

七月二十三日、深い霧の中十一時飛田BC着。ブロードピーク上部は快晴だとか。

七月二十四日、視界ゼロ。Park隊の訪問を受ける。韓国隊のアシスタント・コックが腹痛と火傷を負い、治療を請われる。

七月二十五日、ブロードピーク側は良く晴れており、隊の動きが良く見える。皆で双眼鏡や五百㍉レンズで覗く。昨日治療した韓国隊のアシスタント・コックが、スキルブルムBCで拾得したハーネスと樽を持参、個装に若干の現金を加えて交換する。彼曰く、国際隊の隊長は本を拾ったというので会いに行くと、それは故広島三朗氏の日誌だった。奇しくも今日は広島隊がスキルブルムBCを設営した日であった。

七月二十六日、快晴。ブロードピークでは労山隊が二名登頂。飛田・妙子は明日からまた行動開始。山野井は二〜三日休養。

七月二十七日、晴れ。三時前、飛田・妙子出発。十時三十分C1着。ブロードピークでは前橋隊の松田隊員が左大腿に落石を受け、連絡官から協力要請が来る。山野井にその旨を伝え、下降。途中でハンガリー隊の医師に出会い事情を話すと、彼は手術道具一式を持参し四針縫合、その後毎日診察してくれる。

山野井アタック

七月二十八日、快晴。十時前BC帰幕。山野井がしきりに空を仰ぎ、落ち着きがない。突然、昼からアタックするという。急いで昼食の用意をするが、半分も食べない。山野井が神経を集中し、空気が張りつめ、声をかけることがためらわれる。十二時三十分、振り向くこともせず、BCを出て行く。暗黙の了解で、こちらからも声をかけない。二十二時前、飛田達のいるC2に入る。南東稜では落石による負傷者が相次ぎ、重篤なけが人も出た。

七月二十九日、晴れ。前橋隊アタック。十時三十五分、名塚隊長と高所ポーターがブロードピークに登頂するも、彼等のBCに電波が届かず、喜びの中継をする。その間に我が隊は山野井が単身肩のC3七九〇〇㍍に向かい、妙子は七四〇〇㍍まで往復し、飛田はBCに下降。

七月三十日、快晴。〇時五十五分、山野井から出発の連絡が入る。「頂上直下に見える灯が昨夜から全く動かず、アタックを中止して救助活動に変更するかもしれないと」いう。判断は一切本人に委ねる。山野井のこの日の行動詳細については、本人の筆に譲る。

登頂を終えて南南東リブ取付に戻った山野井泰史（左・妙子，右・連絡官）

南東稜からアタックしている二人Hwangと Leeの隊長と、C2からよれよれで帰幕した妙子と共に、無線機を片時も離さず山野井からの連絡を待つ。十一時五十六分、頂上雪原、十二時二十八分、最高点を踏み、十分後Hwangと前後して下降、十六時三十分C3着の連絡が入り、漸く安堵する。長い一日だった。この間にブロードピーク労山隊の二次隊が登頂、我々の周波数に合わせていることを忘れて興奮するスタッフ達に山野井との交信が阻害され、気が気ではなかった。

七月三十一日、晴れ、夕方より雪。山野井C3より七時下降開始。C3のHwangより南南東リブを山野井と一緒に下りたいと連絡が入る。山野井にそれを伝え、了解を得る。彼等がC1に辿り着く頃から空模様が怪しくなり、一気にBCまで下降することになる。山野井の性格を考え悩んだが、妙子達と南南東リブ取り付きまで迎えに行く。

十六時五十分、ガスの中から先ずHwangが軽い凍傷の顔でフラフラ降りてくる。約三十分遅れて疲れた身体に笑みを浮かべた山野井が降り立つ。十八時三十分、頂上直下で酸素切れのため断念したLeeが、数歩歩いては立ち止まることを繰り返しながら下降してきた。夜、何も無いはずの食卓に祝いの料理が並んでいる。訊くと各隊のキッチンスタッフが料理を少しずつ運んできてくれたという。

K2南南東リブ単独登攀

（山野井泰史）

東壁には、偵察を含め三回向かったが、壁のコンディションが悪すぎ、登ることはできなかった。ヴォイチェフはK2をあきらめBCを去ることになった。

天候は雨または雪が降り続いたが、チャンスが訪れることを信じて、僕は単独で南南東リブに挑戦することに決めた。

七月二十八日、チョゴリザ側は晴れており、チャンスと感じた僕は、十二時三十分BCを出発した。

南南東リブは急な雪壁の中にところどころ4級の岩が出てきて、ルートにスパイスを与えてくれる。しかし七五〇〇㍍からの登攀は膝まで雪に潜り、体力を限界近くまで引き出さなければならなかった。

七五〇〇㍍付近に適当に作ったテント場は斜めで体は安定しないし、マットレスはテントの隅で丸まっている。BCからここに到着するまで二十八時間ほどが経っている。

七月三十日、眠っているのか起きているのかわからない時間が過ぎ、北風が出発しろとばかりにバタバタとテントをたたく。三時間前に作った紅茶はすでに凍りつき、コンロで温めてもなかなか融けてくれない。それでも自分が何かしなければならないという一人を楽しむ余裕があり、悪い気分ではない。食欲はなく、ビスケットを五枚だけ口に入れる。

ザックの中身をもう一度点検する。ヘッドライトの電池、グローブ、テルモス、チョコバー、十分すぎる量だ。外は満点の星空。いつもと同じように左からクランポンをつけ、今はまだ見えないボトルネックを目指して、ゆっくりと出発した。

寒さを感じない。何時間も前からピッケルとバイルを素手で握っている。ボトルネックも、左へのトラバースでとても硬い氷に出くわした以外はほとんど問題がなかった。特別息苦しさも感じず、無酸素での登攀という意識もなく、時々落ちている酸素ボンベも不思議なもののように見える。常に自分の体に異常がないか気になるが、心臓と肺はちゃんと機能している。下降時は危険そうな美しい雪壁はダブルアックスで進んだ。最後の仕上げを急ぐつもりはなかったし、その力も残っていないようだった。

急雪壁を抜けると視界がよくなり、頂上稜線は頂に向かって左に伸び、紺色の空に消えている。最後は一気に三十歩進み、本当の頂に着いた瞬間、言い知れぬ疲労感が体を襲い、倒れこむように腰を下ろした。自分が表情を変えていないことがわかったが、心の中では微妙な震えを感じていた。展望は素晴らしく、僕にとって初めてのヒマラヤ登山になったブロードピーク、命をすり減らすような登攀だったガッシャブルムⅣ峰がともに見え、中国側は名前もなさそうな小さな山々がたくさん見えた。

二十～三十分は経過しただろうか。早々に下山しなければな

らない。余りに長く頂にいてはいけない。すでに多少バランス感覚が悪くなっている。K2で起きた多くの悲劇は下山中の出来事である。まだまだ死にたくないと思いながら下山した。

夕方、ショルダーのテント場に到着した僕は疲れており、何もする気がなく、一面に雲が広がった空を見上げていた。それでもお茶を作り飲まなければ明日、下山ができなくなる。五〇〇ccのお茶を作り、無理やり飲んだ。多分これで明日も歩けるだろう。

BCに戻って四日目、僕は考えていた。自分の登攀リストの中に、新たに八五〇〇㍍以上の山が加わったことは嬉しいが、筋肉のなくなった腕と脚を見ると悲しくなる。この体が高所での登攀の恐ろしさを物語っているのだろう。もっと水分を摂取し、ゆっくり登るべきだったのだろうか。ルートを目標の東壁から南南東リブに変えたことなど、いろいろ考えると、嬉しさも半減する。それでも難しい山といわれる。あの美しいK2の頂に立てたのだから、僕は満足しなければならないと思う。

（「山」六六六号より）

飛田と妙子の行動

八月一日、今回一番の大雪。動物的感で下降してきた山野井はドッと疲れが出たようだ。

八月二日、曇り一時雪。前橋隊が祝福に来る。この日、ある韓国隊の高所ポーターが南東稜C4に衰弱したまま置き去りにされ、それを国際隊のメンバーがC2まで降ろしたとかで、BCでは言い争う声が響き渡る。

八月三日、韓国山岳会隊下山。処理しきれないゴミの中からガス・カートリッジを拾っては黙々と背のザックに入れるHwangとLeeの姿に、巷で言われているほど韓国のクライマーは環境問題に無神経なわけではない、と思わずにはいられなかった。

八月三日、晴れ時々曇り。韓国隊高所ポーター置き去りのことで、BCでは大変な騒ぎになり、皆興奮している。このことがインターネット上に流され、件の韓国隊は一方的に悪者扱いされていたことを帰国後知らされた。

八月四日、晴れ風強し。労山隊の高所ポーター三名ABCに荷上げに来る。各キャンプはPark隊と共用するとのこと。二十一時頃台風並み強風が吹き荒れ、メステントが崩壊しかける。幾分風の弱まった〇時、飛田が出発。

八月五日、快晴風強し。ルート上のフィックスが雪崩で切断、明るくなるのを待って修復するもその先も多量のデブリとなっており、飛田は断念して帰幕する。妙子と話し合い、飛田は南東稜に魅力を感じず、登山活動を断念、妙子は国際隊とC3隊のテントとシュラフを借用して南東稜に登ることになり、この日C1まで上がるが、あるはずのシュラフはなく、国際隊の

隊長とシュラフを被って一夜を過ごす。翌六日、C2へ上がるもまたしてもシュラフはない。上がってきた労山隊の倉橋氏にシュラフカバーを借用する。

八月七日、曇り時々雪。妙子C2ステイ。労山隊ABCへ。キッチン・クルーも荷上げに来ている。私と飛田はスキルブルムBCへ。故原田達也氏の日誌と小物入れ袋、そしてそれに庇われるようにあった「菊田佳子」と書かれたハブラシケースを発見した。

八月八日、雪後晴れ。妙子は倉橋氏とC3へ。夕方より雪が雨交じりとなる。八月九日、晴れ後雪。十五時二十分、妙子BC帰幕。我が隊の登山活動は終了した。

下山まで

その後降雪の毎日となり、八月十一日、労山隊がK2を去る。国際隊、Park隊、Um隊と順次BCを去り、我々六名だけとなった。迎えのポーター達が上がってくるまでまだ四日もあるので、毎日全員でBCの清掃を試みる。どの隊も隊員が先に下山し後をエージェント任せにしているせいか、大量のゴミや食料が放棄されっ放しである。中には大型バッテリーまで置き去りにし、そこから液体の漏れているものもある。可燃物は燃やし、出来る限りの不燃物を収集したが、限界がある。帰路我々のポーター十九名中二・五名の荷は他隊のゴミであった。

八月十五日、コンコルディア泊。十七日、ゴンドコロ峠を越え、途中マチュルーで二泊後、八月二十日スカルドに着く。イスラマバードへ連絡をすると、須藤建志氏の事故を知らされ、愕然とする。カラコルムを真剣に愛する岳兄がまた一人去ってしまった。八月二十三日、陸路イスラマバードに着き、翌二十四日、デブリーフィングを終え、登山隊は解散した。

＜記録概要＞

隊の名称　日本K2登山隊二〇〇〇年

活動期間　二〇〇〇年六月十二日～八月二十四日

隊員構成　寺沢玲子（隊長48）、山野井泰史（35）、W・クルティカ（52）、飛田和夫（54）、山野井妙子（44）

目　的
一　東壁よりアルパインスタイル
二　南南東リブよりアルパインスタイルでの無酸素登頂

結　果　七月三十日　山野井泰史が南南東リブより単独無酸素登頂

〔註：本登山は日本山岳会海外登山基金二〇〇〇年度助成金を受けて実施された〕

チョンムスターグ初登頂

山田　新

最近、大学山岳部の「創部〇〇周年記念」などをうたう登山隊が目につくようになった。早稲田大学チョンムスターグ登山隊も、創部八十周年の記念事業であった。

記念登山というのは、たいていは資金集めの方便だろう。それはそれでいい。だが、登山グループが年月を経るうちに活力を失い、そんな名目でも立てなければ登山隊も出せない場合もある。残念ながら、我々はそうだったと思う。

登山のありようが大きく変わる中で、大学山岳部の衰退は、いまさらいうまでもない。しかし、少数でも入部してくる新人がいる限りは、なんとか事故のない、いい登山をさせてやりたいと、OBらが気をもんでいる、というのが、多くの大学山岳部の現状だろう。

こうした背景を背負って、OBの間でもち上がった登山計画は、隊員もほとんど決まっていないといった、心もとない状態でスタートした。一九九八年のことである。

「幻の山」を求めて

標高六九六二㍍のチョンムスターグを、初めて登山対象に選んだのは八八年の京都大学隊である。彼らは西部崑崙の峠を越え新疆とチベットを結ぶ新蔵道路を経由し、車で山脈南側のチベット高原に回り込んで接近を試みた。しかし、悪路に阻まれ、ケリヤ峠まで到達したのがやっとであった。その後十年以上、挑戦する者もなく未踏峰のまま残っていたのは、京大隊の先例が登山者に「接近困難」の先入観を与えていたからだろう。

この山の位置するケリヤ川源流域は情報が少ない。記録としては一八九八年に測量のためこの地域に入ったインド測量局の英国人、デージー大尉の著書＊があるのみである。

＊H.H.P.Deasy：In Tibet and Chinese Turkestan(1901)

アプローチ・ルートの偵察は不可欠と思われた。車を使った京大隊の首尾を検討し、昔ながらの家畜によるキャラバンで山に接近する方法を採用することにした。未知の自然の予測不可能な諸条件と機械力の兼ね合いを考えると、車では最善の準備をしても目標の山に必ず到達できる保証はない。むしろデージーの時代と変わらぬ駄獣のキャラバンの方が、なにかと応用がきいて可能性があるだろう。駄獣を使うなら、無人のチベット側ではなく、タクラマカン砂漠南縁の、人の住む場所を出発点とすることになる。

一九九九年五、六月にOB二人の偵察隊を出した。彼らは西域南道の拠点都市ホータンから四輪駆動車で一日行程のポルー村をキャラバンの出発点とした。ケリヤ川源流に、外国人としてデージー以来百一年ぶりに到達したが、荷運びのロバの消耗などから、BC予定地までたどり着けなかった。ガスの一瞬の晴れ間にかすむ、チョンムスターグらしい山の姿を写真に収めたのにとどまった。

これではとても本隊を送るわけにはいかない。同年九月、今度はデージーが入山路に使った、カラサイ村からのルートを探る。カラサイはポルーより約二百＊㎞東方にある。児玉茂OBが単身、現地入りした。ぶっつけ本番で情報収集しながらロバ十二頭のキャラバンを組み、十日でチョンムスターグの麓に達した。この第二回偵察の模様は児玉の記録（「山岳」第九五年ほか）に詳しい。

児玉が撮影したチョンムスターグの見事な姿は、我々が初めて眼にするものだった。西部崑崙にはどちらかというと、ヌナタックのように雪を被って丸い山容が多いが、チョンムスターグだけは岩稜やヒマラヤひだに飾られ、登攀価値も高いと思われた。

いまどき目標の山を、登る前に探しに行く登山は珍しかろう。こうして計画が動き出し、「幻の山」を探り当てたとなると、仲間のモチベーションは高まる。九九年秋、私はようやく「行ける」との確信を抱くに至った。早大山岳部のOB組織である稲門山岳会内部で募金が始まり、登山の実行部隊は金集めにわずらわされることがなかった。ありがたいことである。

学生の参加

私はこの山に山岳部の学生をぜひとも連れて行きたかった。七千㍍を切る標高や、少なくとも下部は技術的に問題なさそうな山容には、経験の浅い学生にも力を発揮しやすい条件がある。なにより、キャラバンを含め、いまどき得がたい探検的要素が

あった。あえて不人気の山岳部のドアをたたいた学生が「入ってよかった」と思ってくれるだけでも意義がある。計画を説明すると、みな参加に強い意欲を示した。

隊員は最終的に山岳部全部員の五人、OB六人、テレビの撮影助手として学習院大山岳部の棚橋靖OBの計十二人となった。副隊長の大谷映芳はテレビ朝日のディレクターで、世界の辺境や山岳取材を重ねている。今回も番組の取材を兼ねての参加である。第一回偵察に携わった木野広明と稲葉英樹両OBも参加する。木野はテレビ取材のカメラを担当する。ほかに、一九六五年ローツェ・シャール隊の隊員だった六十歳代のシニアOB二人も参加が決まった。

シニアの活躍

二〇〇〇年七月十一日、大谷ら五人の先発隊が成田をたった。ホータンで食料やプロパンガスなど必要な大量の物資を調達する。入山口となる、カラサイの下村キャントカイでのロバとロバ使いの雇用交渉も任務であった。

本隊は十八日に出発し、二十二日、キャントカイで先発隊と合流した。先発隊によって、入山準備はすべて整っていた。ホータンでの物資調達には棚橋が活躍してくれた。シニアOBの働きも大きかった。ロバの交渉は、最年長の成川隆顕隊員がまとめあげた。医療用酸素ボンベを入手するため、ウルムチから一人カシュガルに回ったのは白鳥健二隊員であった。白鳥隊員はキャントカイへの道中、砂と増水で立ち往生したトラックに付き添い、隊荷を守って再度のビバークもした。

雨にたたられたキャラバン

二十三日朝、隊員十二人、新疆登山協会のウイグル人スタッフ三人、馬方十七人、ロバ九十頭の大キャラバンが動き始めた。

翌日、カラサイから沢伝いに崑崙の前山に分け入り、三六四〇メートルのウレーシュ峠を越えた。小雨の中を沢沿いに下る。南からのパシムとの川合流点で、増水のためロバが川を渡れず、丸二日間停滞する。二十六日午後、ようやくロバを徒渉させ、左岸の泥のがけにロバの道をつくって河岸段丘に上がった。二十七日も雨だった。午後、クヤック川の渦巻く濁流をなんとか渡りきったが、GPS計器によると、前日のテント場から六百メートル移動したにすぎない。この乾燥地帯で増水に苦しめられるとは、予想外であった。昨秋の偵察時の快晴続きとは大違いである。

我々が濁流と苦闘していたころ、ふもとでは、ニヤーケリヤ間の幹線道路が川の増水で何カ所も決壊していた。馬方らによると、六年ぶりの大雨だという。パシム川もクヤック川も、その流域に万年雪をいただく「ムスターグ」（氷雪の山）はないので、大水の原因は雪や氷河の融水ではなかろう。目の前の濁流は、上流で降っている雨のせいということになる。灌木が根

0
30
60km
チェルチェンへ
民豊(ニヤ)
サラグザック
ボスタン
トグラック川
タクラマカン砂漠
于田(ケリヤ)
公路
トランコージャ川
カラサイ
2960
キャントカイ
A
B
パシム川
クヤック川
セルックトゥズ川
第一次偵察隊ルート
(ボルールート)
ウズターグ
6292
C
カラサイルート
N
D
ガングットルック湖
ボルー
2560
ショールクル湖
4472
E
ショールクル盆地
北チャンタン高原
F
a アシクレ湖
4520
ベルクレク
G
BC
ケリヤ川
b
ウルグクレ湖
チョンムスターグ
6820
6962
c
パパパトゥン
第一次偵察隊最終到達地点
ケリヤ峠
西部崑崙・チョンムスターグ
へのアプローチルート
99年9月:第二次偵察隊・2000年夏:本隊ルート
(カラサイルート)関係の地名
A ウレーシュ峠 3640m
B クヤック 3000m
C キュッカン 4360m
D クジルアット峠 5141m
E クジルチャップ (峠) 4600m
F ヤトーコーガン 4335m
G セルックルックボヤン (峠) 4790m
99年5月:第一次偵察隊ルート
(ボルールート)関係の地名
a リュウホワン峠 (アトト峠) 5114m
b トポラト峠 5044m
c アトタム峠 5504m
地図1

こそぎ流されてくるのを見れば、これほどの増水はしょっちゅうあることではないことが分かる。

セルックトゥズ川をさかのぼる二十八日も朝方、ロバに荷物をつけているうちに水が増えた。流れに行く手を阻まれたが、最年長の六十歳すぎの馬方ジュムラホンが迂回路を知っていた。かつてはケリヤ川源流まで放牧に入ることがあったという。七〇年代には人民解放軍測量隊の補給のため、我々のBC予定地周辺まで入山した経験者が馬方の中にいる。キャラバンは彼らの記憶と経験が頼りである。

ロバはキャラバンの主役

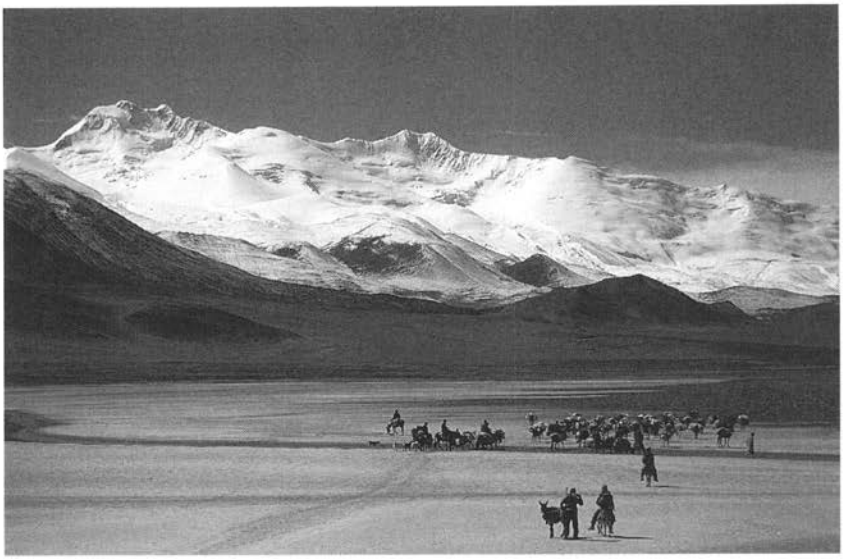
カラサイのロバは強い。第一次偵察で使ったポルーのロバの平均積載量は三十キロだったという。それでも五千メートルの峠越えに耐えられず一頭が衰弱死した。対照的にカラサイのロバは五、六十キロの荷物や人を乗せて高原砂漠を平然と行く。またがると足が地面につきそうな大柄の隊員だと、ザックも含め担荷量は百キロ近くなるのに、我慢強く歩く。疲れきって地面にひざを折り動かなくなることもあったが、驚異の体力といわねばならない。

ポルーでは牧畜に頼る比重が減ってキャラバンのノウハウが失われつつあるのに対し、カラサイではいまも山中への羊の放牧が毎年行われていることが、大きな差となっているようである。しかしここ数年、牧民の定着化を図る地方政府の方針で、カラサイの住民は下の村に移住させられ、夏の放牧の拠点としてかろうじて維持されているにすぎない。ロバを連ねてのキャラバンが不可能になる日が近いかもしれない。

それにしてもなぜロバなのか。同じ新疆でも私がかつて経験したK2（チョゴリ）北面などシャクスガム川流域への入山には、もっぱらラクダが使われている。キャントカイ周辺には、驚くほど巨大で立派な体をしたラクダがいるが、馬方らは山中のキャラバンにはロバが最適なのだという。大量の飼い葉を運ばなければならないラクダに対し、ロバのえさは山中に自生する草や灌木でほぼ事足りるそうである。標高五千メートル近くなると、ロバの食草は、馬方らがヤプカックと呼ぶ小灌木くらいしかないが、ロバはこれを喜んで食う。

三十一日、小雨の中キャラバン・ルートの最高所、クジルアット峠（五一四一メートル）を越えた。四八〇〇メートルまで下って日が落ち、幕営したが、水がない。最後の水場で汲むことになっていた水を、なぜか馬方たちが汲んでいなかったのである。やむなく、ビスケットなどの行動食とペットボトルのわずかな水で食事をすませた。翌日、ショールクル湖の畔の泉の水で人心地ついた。

増水で遅れた日程を取り戻すため、毎日の行程が長い。早朝から日暮れまで黙々と四、五十キロ進む日もあり、キャラバン全体に疲労感が漂う。それでも八月二日、ついにケリヤ川源流域



キャラバン12日目の8月3日、目標の山チョンムスターグがはじめて姿を現す

に入った。ケリヤ川は崑崙の前山に深い谷を刻み、タクラマカン砂漠に流れ込む。谷沿いにさかのぼるのは不可能とされているため、大きく迂回するのである。

チョンムスターグ！

三日、久しぶりに朝から晴れた。大きく開けた緩やかな谷を登りつめると、セルックルックボヤンと呼ばれる峠である。峠というより、広大な平原だった。細長い湖のほとりを行く。左手の低い尾根に登り、峠に出ると、いきなりチョンムスターグの姿が目に飛び込んできた。東西に横たわる真っ白な山脈の中央に、その山はそびえていた。雲が垂れ込めることが多かったキャラバンの最後に、不意を突かれ、胸に迫るものがあった。なお二十キロの距離を残しているが、写真では読み取れなかった尾根の入り組み具合もよく分かる。

山岳部主将の渡辺佳苗がタオルを顔に当て、しゃくりあげている。紅一点ながら学生を束ねる立場にあったが、濁流に翻ろうされ、意のままにならないロバの背に揺られる長い道程に、人知れぬ苦労もあったのか。

BC設営

この日、チョンムスターグ山頂の北西十キロの標高四八五〇メートルにBCを設営した。幅百メートルほどの川原より一段高い、砂の堆積

した古いモレーンの上である。川原には澄んだ流れもある。雪の前山の奥に、ちょこんと山頂が見える。文句のないテント場だ。予定より二日余計にかかったが、ともかく無事に着いた。馬方の親方ヌラホンが笑顔で握手を求めてきた。その手を強く握りしめる。

徒渉のタイミングの判断の悪さや、水無しの露営など、馬方らに不満がなかったわけではない。だが、例年にない多雨の悪条件の中、よくやってくれた。彼らとのコミュニケーションを取り持った、日本語の堪能なヌル・ムハマッド連絡官ら新疆登山協会のウイグル人スタッフの貢献もキャラバン成功の要因である。荷物を下ろしたロバの背中はあちこち荷ずれで皮が破れ、痛々しかった。ロバたちにとっても厳しいキャラバンであった。

四日、大谷、棚橋と私の三人でABC適地を探しに行った。残りの隊員はBCで荷物整理である。北西稜末端の五二〇〇㍍に、モレーンからしみ出したきれいな水の流れるお花畑があった。野生ヤクのものらしい大きな糞があちこちに落ちていた。この場所をABCと決めた。

五日朝、ロバと馬方の半数がカラサイに引き返して行った。多忙なヌル連絡官も一緒に下山する。彼らを見送ったあと、残ったロバの一部に高所用の装備、食料を積み、ABCへ荷上げをする。後からくる学生らを待つ間にテントを張り、荷物を整理する。さらにC1へのルートを偵察するために私は大谷、棚橋と三人で北西稜のガラ場に取り付いた。上部が見渡せる五七〇〇㍍まで登った。そのあたりから雪面となるが、技術的には全く問題のない緩やかな斜面である。

この日ABCを往復した学生は疲労の色が濃い。高度の影響も出ている。高度計が高度を下げ、高気圧到来を告げているが、六日は休養日とした。皮肉にも六日は雲一つない快晴が終日続いた。これほどの好天が登山期間中、二度とないことは知る由もなかった。

大谷パーティーの先行

七日、C1への荷上げが始まった。C1は北西稜の五九〇〇㍍のピークに置く。大谷と木野、棚橋がABCからC1を往復した。三人はテレビクルーを兼ねる。テレビ朝日ニュース・ステーションの「世界の名峰」シリーズなど、高所や辺境の取材を何度も共にしている。

私と稲葉は学生らとBCを出て、ABCで荷物をピックアップしC1を目指す。しかし、学生はC1にたどりつけず、途中から下った。頭痛でBCにとどまった者もいる。最初から学生の高度順化の遅れが目につく。短期決戦だけに、早く遅れを取り戻させたい。午後あられが降り、天気は早くも下り坂だ。

十日、大谷ら三人はC1からスノードームと名付けた六六五〇㍍の雪のピーク基部のC2予定地（六四〇〇㍍）を往復した。

大谷らは、これで高度順化は得られたとして、BCでの休養をはさんで一気にアタックしたいといってきた。

計画では、学生とOBの混成パーティーを二つないしは三つつくって、高度順化を重ねながら一緒に頂上を目指すことにしていた。学生とシニアOBも、体力、順化の進行度を見ながら、できるだけ多くの隊員を登頂させる腹積もりであった。

ところが、学生は下痢、発熱、頭痛と、代わる代わる体調を崩している。大谷らに対して、学生の順化の遅れは明らかだった。大谷らの突出によって、私の目論見は崩れる。大谷パーティーが先行し、学生抜きでアタックすると、体力、技術両面で未熟な学生の登頂の可能性は、ますます少なくなってしまうのである。足並みのそろわない弱体パーティーの宿命といえばそれまでだが。

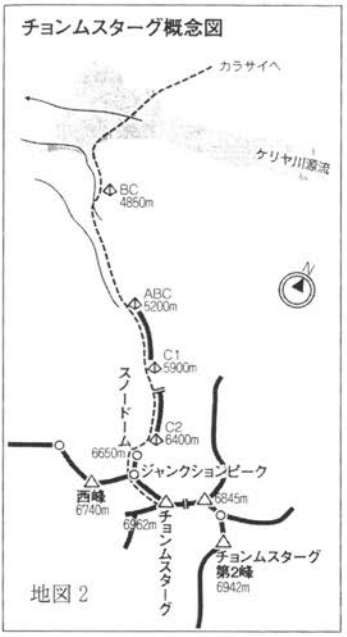
それに、ルートで技術的に問題になるのは、C2より上の頂稜だ。学生を安全に登らせるには、ルート工作に相当の手間ひまをかけなければならない。一方で、天候がぐずついているだけに、登れる者を先に登らせておく必要に迫られていたのも事実である。じくじたる思いを抑えながら、大谷ら三人を第一次アタック隊として送り出すことを決めた。

十一日、大谷ら三人が休養のためBCに下った。稲葉と私でC2への荷上げを兼ねてルート工作する。雪の大斜面の下り口にロープを百メートル固定した。それより先、広い雪の稜線を行く。風下の東側に大量の雪が貯まっている。前日、大谷らがラッセルをしていると、足元がズンと音をたてて沈みこんだという。隠れたクレバスや、雪庇の崩落が恐いので、大谷らのトレースよりさらに西寄りにルートをつけ直し、学生の荷上げに備えて二カ所にロープを固定した。この日、アタック・キャンプのC2建設のため二年生以上の学生四人がC1入りした。

十二日、ときどき雲はかかるが、しばらくぶりに穏やかな天気である。学生四人を稲葉と私が引率してC2に荷上げに向かう。予定通り六四〇〇メートルにテントを張り、C2ができた。大谷らがこのキャンプに入れば、アタック体勢完了である。学生は大きな役割を果たしてくれた。次回C2に上がるときは、彼ら自身のアタックが目的となる。

十三日、前日のC2荷上げ隊がBCに下り、大谷らがC1入りした。この日、二次アタックのメンバーを私、稲葉に学生は渡辺、山田剛士の二人と決め、隊員に告げた。BCにアタック近し、という緊張感がみなぎった。

十四日、大谷パーティーがC2入りした。二次隊はC1に入り、一日遅れで大谷パーティーを追う。午後、C1ではあられが激しくテントをたたいた。夕方、大谷と交信した。翌朝七時(北京時間＝以降同じ)に出発する、ビデオカメラも携行するため、できるだけ荷物を軽くしたい、と伝えてきた。翌日の晴天を祈って眠りについた。



地図2

登頂記

（大谷映芳）

前夜は、ときおりぱらぱらとテントをたたく雪の音のせいもあって、ほとんど眠れなかった。十五日午前五時（北京時間、以下同じ）、寝袋を抜け出す。天気は期待したほどよくない。

明るくなるのを待って七時二十分、テントを後にする。スノードームの頂上直下の急斜面に固定ロープを残す。ラッセルを続け、ゆったりした尾根を行く。その先に小さな雪のピークがある。チョンムスターグの頂稜と西峰（六七四〇メートル）への稜線のジャンクションとなっている。それから先は吊り尾根状で、九時半に最低鞍部に着いた。

このころ、天気が変わった。風が強まり、ときおり雪が飛んでくる。先のルートは見えにくくなり、頂上は姿を隠した。ルート左手の北壁側には大きな雪庇が張り出しているため、視界がないと危険だ。しかし、上空はところどころ青空がのぞく。早くも天気待ちである。約一時間後、ガスが晴れたため、行動を再開する。アンザイレンし、雪庇を避けて南側の急な雪の斜面にルートをとる。クレバスが口を開ける谷底まで、すっぱり切れ落ちている。技術的に難しいわけではないが、硬い雪の上に新雪がかぶり、いわゆる「いやらしい」状態だ。気心の知れた仲間の技術を互いに信用し、コンテニュアスで進んだ。

約一時間で岩峰の基部に着いた。岩峰の直下はクレバス帯となっている。再び視界が閉ざされてしまった。二度目の天気待ちをする。一時間ほどして多少先が見えるようになったので、岩峰の基部をトラバースし、クレバスの上の急斜面を直上。ガスの中を二ピッチ、ロープを伸ばした。視界は全くなくなり、またしても待機である。

すでに午後三時を過ぎ、引き返すならここしかない。C2の山田隊長と何度か無線交信をする。時間的にもう、あまり余裕がない。登るのか戻るのか、決断を急ぐよう求められる。この時間から頂上へ向かえばビバークの可能性もある。出直して翌日もう一度頂上を狙ったらどうか、など隊長とのやりとりが続いた。しかし、ここまでの、緊張を強いられるルートを再度登

アタックの翌朝（8月16日）、天気は回復してチョンムスターグが見えた
前夜は最低鞍部の大岩の陰でヒバークした

りたくなかった。天気が果たしていつ回復するかも分からない。天気の難しい山である。登れるときに登っておきたい、との気持ちが強かった。

あっという間に、また一時間近くたってしまった。もう時間切れだな、と話し合っていたその時、頂上岩壁が見え始めた。意外に近い。午後四時、登攀続行を決めた。

ひざまでのラッセルで岩の基部目指して斜上する。雪が吹き溜っており雪崩の不安が頭をよぎる。急いで抜けるしかない。岩にたどり着いてほっとした。四カ所でハーケンを打ちながら、二ピッチ進んだ。「もう問題ないですよー」。上から棚橋のうれしそうな声が届く。そこから百メートルほど緩やかな雪面を登りきったところが頂上だった。展望は全くないが、それ以上先はなく、雪庇となっている。午後五時三十分だった。

なんて難しい山だろうか。猫の目のように変化する、先の読めない天気、斜面にのった不安定な雪。体力や技術以上に経験やカンが要求される登山だった。

雪は一段と激しく、風も強くなった。なんとか、この日のうちにC2までたどり着きたい。そそくさと記念写真を撮りビデオカメラを回して、下山にかかった。

風雪にトレースは消え、チリ雪崩に追われるように先を急ぐ。ホワイトアウトで斜面の傾斜すら分からない。谷側に下りすぎたり、雪庇に寄りすぎたりして、何度も肝を冷やした。しかし、

記憶に残っていた最低鞍部の大岩が、一瞬だが、ガスの中にぼんやり浮かび、何とか危険地帯を抜けることができた。

あとはラッセルを続けるだけだが、往路に立てた目印の小旗がどうしても見つからない。夕暮れが迫る。八時半を過ぎた。ビバークせざるを得ない。大岩に戻り、三人でツェルトをかぶる。頂上を明け渡した処女峰に「ビバークくらいして、ゆっくり帰れば」と、耳元でささやかれたような気がした。

眠れない長く、つらい夜が過ぎていった。十六日、夜が明けても視界は悪い。九時半、日が差し始め急に明るくなって、小旗が点々と立っているのが見える。これで帰れると、うれしかった。十二時半、C2に着いた。

果たせなかった二次登頂

十五日午後九時十五分に大谷がビバークを伝えてきてから、十三時間にわたって連絡が途絶えた。彼らを信頼してはいても、不安が募る。トランシーバーに大谷のいつもののんびりした声が飛び込んできたのは、十六日午前十時を過ぎていた。

C2で大谷らに飲ませる茶を沸かしながら、以後の段取りを考えた。大谷は、本峰へのルートは固定ロープをべた張りしない限り、学生には無理だろうといってきた。それに二次隊の学生は相当疲れているようである。一度全員をBCに下ろして態勢を組み直すことにした。

やがて、スノードームの頂上に人影が現れた。前日のトレースがすっかり消えた斜面に、くっきりと足跡を刻みながら三人が下りてくる。こみ上げてくるものがあった。

十六日のうちに大谷らアタック隊の三人はC1まで下り、残り全員がBCに集結した。十七日を休養日とし、十八日から二次アタックに移る。

チョンムスターグ本峰の二次アタックは学生を外して稲葉と私の二人が行き、学生二人とOB二人のパーティーを西峰アタックに向かわせることにした。大谷は、西峰へはラッセルさえ頑張れば行けそうだという。西峰隊のリーダーとして、カメラを回しながらの本峰登頂で疲れたところを気の毒だったが、木野にもう一踏ん張りしてもらう。それに白鳥OB、学生は渡辺と山田剛士が挑む。

十八日、稲葉と私が西峰隊より一足先にBCを出発した。雲がかかり、異様に暑い。アタック後そのまま、C1で待機していた木野をねぎらい、C2を目指す。大斜面を登りきったとたん、猛烈な雷に二度も見舞われた。

十九日、朝五時に起きて外をうかがうが、ガスがまいている。七時過ぎに出発する。スノードームの上に立つと、西風が冷たい。ジャンクション・ピークに向かうが、頂上方向はガスに隠れたままだ。ジャンクションへの登りの手前で稲葉と相談し、翌日、再挑戦することにしてC2に下った。C1から西峰隊が

上がってきて合流した。

二十日朝も天気がはっきりしない。両アタック隊は待機のあと、九時ごろ天気の好転を期待して出発した。ドームの上に抜けるが、やはり視界が悪い。風をよけて下り口で天気待ちをする。ガスは一向に晴れる兆しがない。まだ何日分か、天気回復を待つだけの食糧、燃料は残っている。学生は、なにがなんでも登山を継続する気持ちがあるのだろうか。たずねると黙っている。彼らもここまで、精いっぱい頑張った。稲葉がぽつりと「学生が行く気がなければ、やめましょう」という。

下山を決めたとたんに、天気が好転するのではないか、という思いが、強迫観念のように頭に張り付いていた。だが、潮時のようである。隊としては登頂を果たしている。もう、無理はすまい。私は撤収を決断した。

チョンムスターグの天気のように、心のもやもやは晴れないが、仕方がない。C1への大斜面を下りながら、「やることはやった」と、胸の中で反すうしていた。

〈記録概要〉

隊の名称　二〇〇〇年早稲田大学チョンムスターグ登山隊

登山期間　二〇〇〇年七月十一日～九月十一日

目　的　西部崑崙山脈の未踏峰チョンムスターグ（六九六一メートル）の初登頂

隊の構成　隊長＝山田新（53）、副隊長＝大谷映芳（53）、隊員＝成川隆顕（63）、白鳥健二（60）、木野広明（36）、稲葉英樹（36）、棚橋靖（37）、渡辺佳苗（22）、春野一彦（20）、山田剛士（20）、中島卓也（20）、有村哲史（19）、連絡官＝ヌル・ムハマド・タシ（34）

＊棚橋は学習院大学山岳部OB

行動概要

七月十一日　先発隊（大谷、成川、白鳥、棚橋）成田発―北京

十八日　本隊出発―北京

十九日―二十一日　本隊はウルムチ、ホータン経由ニヤへ

二十二日　両隊、キャントカイで合流

二十三日　キャラバン開始　キャントカイ―カラサイ

二十四日　コシラシ、二十五日　コシラシ停滞、二十六日　クヤック、二十七日　クヤック川渡渉左岸へ、二十八日　ヤールックサイ、二十九日　クムブラック、三十日　クムブラック滞在（高所順化トレーニング）、三十一日　クジルアット峠越え、八月一日　クジルサイコシ、二日　ヤトーコーガン、三日　BC（四八五〇メートル）設営

四日　ABC偵察、物資整理

五日　ＡＢＣ（五二〇〇㍍）設営
八日　Ｃ１（五九〇〇㍍）設営
十二日　Ｃ２（六四〇〇㍍）設営
十五日　第一次アタック隊（大谷、木野、棚橋）主峰登頂、帰路ビバーク
十九日　第二次アタック隊（山田隊長、稲葉）主峰へ向かうが悪天候のため退却。西峰アタック隊（木野、白鳥、渡辺、山田剛）Ｃ２へ
二十日　両アタック隊出発するも、悪天候のため断念。
二十三日　帰路キャラバン出発
三十日　キャントカイ到着、キャラバン終了
九月十一までに全員帰国。

報告

報告書『チョンムスターグ６９６２ｍ』（二〇〇〇年十一月）、早大山岳部報『リュックサック13号』（二〇〇一年三月）。
「幻の山チョンムスターグ初登頂」（岳人二〇〇〇年十一月号）、The American Alpine Journal 2001 (Climbs & Expeditions)

より高く、より遠く、未知を求めて

中国崑崙山脈未踏峰登頂報告

中村　淳

プロローグ

平均年齢六十三・五歳の高齢隊が、少年時代に抱いた未知への憧れを求めて、中国タクラマカン砂漠の南に連なる崑崙山脈の未踏峰に挑戦した。二〇〇〇年八月十三日、幸い天候に恵まれて隊員五名が六五四〇㍍峰の初登頂に成功した。今回は日中合同登山ではなかったが、中国スタッフの献身的な支援協力により全員十七名が無事に帰国し、夢を叶えた。

この隊の母体は、京都一中山岳部とその伝統を受け継ぐ鴨沂・洛北高校山岳部のOB会「北山の会」である。京都の生んだ多くの登山家、探検家の母校、旧制京都一中の山岳部は一九一五年に創部され、加納一郎、今西錦司、西堀栄三郎、四手井綱彦、梅棹忠夫、川喜田二郎を始めとする数多くの部員たちが京都の北山を本拠に、探検的性格を育む京一中山岳部の伝統を創り上げた。

戦後、一九四八年四月の学制改革により、京一中と府立第一女学校が統合されて新制鴨沂高校となった。二年後に学区再編成で洛北高校が旧一中校舎に新設された。母校に戻った部員が洛北高校山岳部を創り、鴨沂高校山岳部と共に京一中山岳部の伝統を引き継いだ。

この山岳部OBたちが親睦を目的として一九九一年に「北山の会」を創った。当初から登山活動などは行わない会であったが、OBたちが総会に集い、酒を酌み交わし語り合う内に、山岳部歌の一節「行く手は北山、その彼方」へと馳せるロマンを

求めて「崑崙の夢」への挑戦が具体化した。

京都一中山岳部創設八五周年を迎える二〇〇〇年にこの計画が実現し、併せて京一中創立一三〇周年・洛北高校創立五〇周年の記念事業に華を添えることができた。

■ 実現までのプロセス

一. 未踏峰「雪山」を探す

発端は一九九七年十月、京一中山岳部最後の部員となった高橋脩、川井久造、安藤久男、中村淳がヒマラヤ・カラパタールへトレッキングした時、カトマンズ駐在の安藤が「カンチェンジュンガ周辺に登れそうな雪山がある」と話したことに始まる。彼が意味する「雪山」とは氷壁岩峰の険しい山ではなく、熟年者でも登頂可能な雪稜の山である。北大山岳部で活躍し南極越冬隊員や北大ヒマラヤ遠征隊長などの経歴を有する安藤が隊長になり、会員有志が集り目標の山を探した。

一九九九年三月、KANGCHENJUNGA HIMAL AND KUMBHAKARNA HIMAL（ポーランド発行の登攀ルート・ガイドブック）の中から、カンチェンジュンガ西尾根上の未踏峰P六一〇〇峰を目標の山とした。六月、中村と高島法男がカトマンズへ行き、この峰の登山許可についてネパール当局と折衝したが、非公開の山への入山を拒否され、ヒマラヤの未踏峰を断念した。

帰国後、方向転換を図り、中国タクラマカン砂漠の南に連なる崑崙山脈の未踏峰を探すことにした。岐阜の図書館に旧ソ連製の地図で、中国崑崙山脈の二〇万分の一の地図があるとの情報を得て、八月二十七日に中村、高島が岐阜県立図書館へ行き、そこで旧ソ連製の色刷り一〇万分の一の地図を見つけた。必要と思われる範囲の地図をカラーコピーし、地図上で目標の山を探した。

現地調査は、まず安藤が八月三十一日～九月十三日、ウルムチ、ホータン、カシュガル方面の予備調査を行い、現地情報を提供した。これを受けて九月二十六日に偵察隊三名（高橋、秋野、高島）が出発し、イエチェンからの新蔵公路の崑崙山脈を越した先の、奇台達坂東方に位置する未踏峰の「雪山」を見つけて帰国した。この無名峰の呼称をKOR65とした。KORは各母校の頭文字と崑崙を捩ったもの、65は六五〇〇㍍級の高さを表わしたものである。

二. 「0」からのスタート

十一月に開かれた総会で崑崙遠征計画が了承された。その直後にこれまで隊長を務めた安藤が国際協力事業団のフィリッピン派遣で参加できなくなった。計画を延期すべき重大事であったが、替わって参加予定者中で最上級生の高橋脩が隊長に指名

され、実現への準備作業が「0」からスタートした。

十二月に最初のプラン会を開き、出発日を二〇〇〇年七月二十四日とし、毎月プラン会を開催するなどの基本事項を確認した。本隊が僅か半年余りの準備期間で出発できるのか不安はあったが、隊員たちは装備、食料、輸送梱包、医療など、それぞれ担当する作業に取り組んだ結果、準備作業は僅か六ヶ月で完結した。

毎回、プラン会の後にビールとワインを飲みながら談笑する時間を取った。これはお互いに高校卒業後四十数年間の空白の時間を埋めるのに役立った。お互いを理解し合い、信頼の絆を結び合うことが崑崙隊の成否に関わる基本的重要事項だと考えた。

高齢で遠征経験「0」の本隊が計画実施に踏み切るためには、大きなハードルを二つ越さなければならなかった。それは高齢者の健康に関わる医師と、高所登攀経験を有する登攀隊長の参加であった。

医師については、総会の席で崑崙の夢を熱く語った市田太郎（七十一歳）先輩に参加をお願いした。出発三ヶ月前に医師の参加が決定し、第一ハードルをクリヤーした。

高所登攀経験のハードルが残った。当初から本会員の中で高度な経験を有する松田謙介を第一候補として、本人の参加を要請した。最終的には松田は不参加となったが、本隊の準備期間中、プラン会に出席して技術指導や適切なアドバイスを行い、二月には八ヶ岳ジョウゴ沢で氷壁登攀技術を指導するなど今回の登頂成功に大きく貢献した。

六月三日に開かれたプラン会で高橋隊長から「松田に替わって田中昌二郎を登攀隊長にした。これまでの経緯を理解し、協力して欲しい。」と登攀隊長の決定を告げた。田中は隊員の中で唯一人の大学山岳部の経験者だった。

三、支援協力のもと準備を終える

今回の登山活動を全面支援してくれた中国のエージェントは、新疆ウイグル自治区の首都ウルムチの達坂城旅行社で、崑崙偵察隊が現地調査で世話になった。出発に際し、両者で取極め事項の実行を約束するための確認書を締結した。基本事項として、目標の山の登録（登録した山以外は登山禁止）、期間、人数を確認した。提供項目では、装備、食料、輸送の他、C1への荷上げ協力、緊急時の輸送、事故の賠償などについて確認した。

手間取ったのは一トンを超える荷物の輸送であった。準備期間が少ないため、輸送に数ヶ月を要する船便は間に合わず、コストの高い航空便の輸送となった。また輸送品の中にはガスボンベなど航空便での輸送が困難なものがあった。

これらの難問解決の糸口を与えてくれたのが関空―西安間の直行便のある日本エアシステムであった。航空券の購入に際し

同大阪支店に支援を求めたところ、帰国日変更可能な普通席航空券を特別価格で発券して頂いた。同時に荷物輸送の手助けとして手荷物重量一人四〇キログラムの枠を認めていただいた。これで同一機による十七人分計六八〇キログラムの貨物の同時輸送が可能になった。更に残りの貨物を輸送するための航空貨物取扱業者として阪急交通社が紹介された。

一般的にガスボンベの航空便は認められない状況にあったが、阪急交通社が折衝した結果、危険物のUN番号を確認し特殊梱包することにより輸送が可能になった。西安空港での中国国内線への積み替えについても、現地支店の尽力で輸出入手続が完了した。

六月十七日から梱包作業を開始し、二十三日に阪急交通社に依頼した航空貨物三八六キログラムの第一便がウルムチへ向けて発送された。実現化プロセスは準備段階から実施段階へと移行した。

出発一ヶ月前の六月二十五日に川喜田総隊長以下全隊員が出席し、結団式を行った。総隊長が「より高く、より遠く、未知なる世界を求める京一中山岳部の伝統を今に引き継ぐ崑崙隊の登頂成功を祈る。」と挨拶し、隊員一人一人が挑戦への意志を語った。

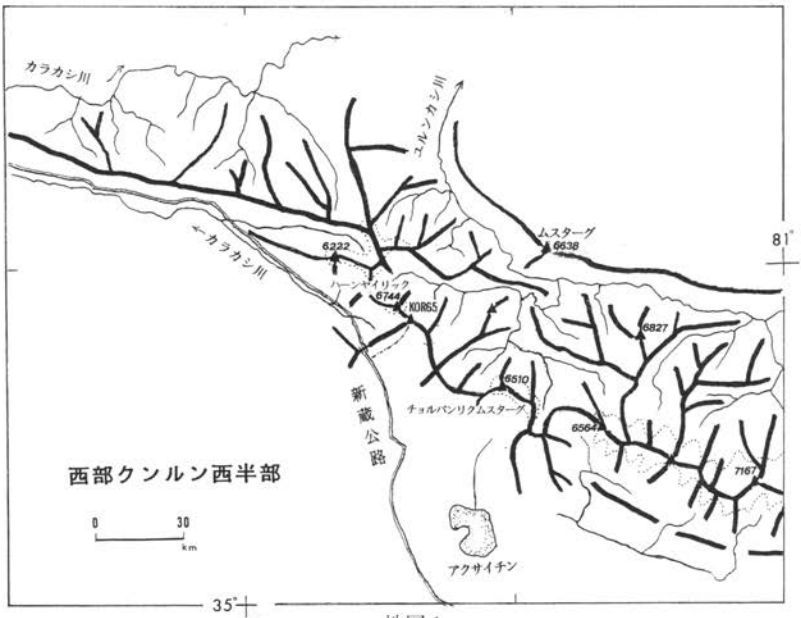
■登山隊活動報告

一．4WDのキャラバン

二〇〇〇年七月二十四日、崑崙隊が関西空港を発ち、西安、ウルムチを経て、翌二十五日にカシュガルに到着した。第一便で発送した貨物はカシュガル登山協会の倉庫に保管されていた。中国側が用意した装備を点検し、食料の現地調達を済ませて、七月二十七日に4WDジープ六台と貨物トラック一台でキャラバンを開始した。

この日はイエチェンに泊まり、隊員たちはホテルでの最後の晩餐と酒を嗜み、明日からの禁酒を誓った。また、高山病予防のため、この晩から全員がダイアモックスを朝夕一錠ずつの服用を開始した。

二十八日、イエチェンを発ち、新蔵公路は直ぐに山区に入った。隊員は高度順応のためアカズ峠（三三〇〇メートル）の手前で車を降り、峠まで約一時間の歩行を行った。峠を下ると、道は両岸絶壁に挟まれたゴルジュの底を通る悪路となった。数日前の大雨で道路は至るところで決壊流失し、軍隊が応急補修する中を辛うじて通過することができた。この日はクディを通過し、新蔵公路の始点から一七〇キロメートル地点にある標高三一七〇メートルの牧草地で幕営した。



地図1

二十九日の行程は、セラク峠（四九〇〇㍍）を越えて崑崙山脈の南側を流れるヤルカンド河右岸の幕営地まで約一〇〇㌔㍍の道程だった。セラク峠を越えるときに、昨日と同様に高度順応のための歩行を行った。悪路のためトラックは遅々として進まず、幕営地には三時間遅れて到着した。

三十日は、貨物トラックを先発させ、三時間後に本隊が移動を開始した。途中のヘイカ峠（四九五〇㍍）は乗車したまま通過し、新蔵公路を東へと進んだ。至るところで河川が道路を横断して流れ、車の渡渉に注意を要したが、遂に貨物トラックの後輪が河川に埋没し、夜半になって軍隊の救援を受けてようやく脱出した。その夜は、本隊は標高四七五〇㍍地点の五〇九道班（道路管理所）の宿舎を借りて泊まることができた。

二、BC設営、登頂活動を開始する

三十一日は五〇九道班に留まり、高度順応のための休息日とした。これまでに高度障害を起こした者はなく、全員が順調にBCへ登行できる状態にあった。朝一番にこれまでに溜まったストレスを開放するために全員集会を開き、自由に発言することでチームワークの修復を図った。午後、ジープ二台で四〇㌔先のBCサイトを偵察した。緩やかな砂地で近くに清流がある標高五二四〇㍍地点にBCを設営することにした。

八月一日、崑崙隊は再び一丸となってBC地点への移動を開

始した。奇台達坂（五三四一m）を降った地点からオフロードに入り、東へ八キロメートルの河の手前で貨物トラックを止めた。ここで荷物をジープに積み替えて、河を渡渉し、更に二キロメートル進んだBC地点へピストン輸送した。

医療テントを中心に各テントの配置を決め、九張りの隊員用テントを張り終えた頃から小雪が舞い、強風が激しくテントを揺さぶった。真夏とはいえ急変する崑崙の天候に戸惑い、これからの気象の厳しさを肌で感じさせられた。

二日は休養日でBCの住環境整備を行った。三日に上部の偵察とルート工作を開始し、C1サイト（五七二〇メートル）を設定した。四日から中国側協力員の支援を得て、C1への荷上げを行い、五日にC1を設営。六日にはA隊（田中隊長、中村、亀井、高島、横倉）がC1に幕営し、翌七日に氷河トラバースのルート工作とACへの荷揚げを敢行した。氷河横断直前で時間切れとなり、氷河上に荷物をデポしてC1へ降り、B隊（秋野隊長、川井、須川、倉橋、村若）にルート情報を伝えた。

八日にB隊がC1からACへの荷揚げを行ったが、何故かルートを誤って氷河を横断せずに、氷河左岸のモレーンを登り、標高六〇〇〇メートル地点に荷物をデポし引き返した。このB隊の行動が、後の登頂隊の活動に大きな影響を与えることとなった。

三、未踏峰への挑戦

九日は全員揃ってBCで休息を取り、明日から始まる頂上アタックに備えた。この日に医師から隊員の健康状態が発表され、十名が高所登攀可能なAランクに入った。これを受けて、登攀隊長が登頂計画を説明した。A隊がルート工作し、B隊が後続してACに入り、ここで合同C隊となって登頂することになった。隊員の登頂意志を確認した上でA隊四名（田中隊長、中村、亀井、横倉）・B隊四名（秋野隊長、川井、須川、倉橋）を編成した。

一〇日、A隊がBCを出発し、中国側協力員の支援を得てC1を氷河サイド（五八〇〇メートル）へ移設した。翌十一日に氷河を無事に横断し、標高六一〇〇メートルのACサイトへのルート工作と荷上げを行った。C1へ戻り、この日にBCから登行したB隊と合流した。この夜、天候の周期を判断して、登頂日を一日早めることとした。

十二日は、A隊がACサイトへ直行し、AC設営を行う。B隊は氷河左岸のデポを回収してACに入ることになっていた。A隊がAC直下のルンゼを登攀しているときに、眼下の氷河上にB隊の姿を見つけた。B隊は、出発直後に一名が登頂を断念して三名となり、デポの回収に多大な時間を要してしまった。両隊の時間距離は約二時間ほどで、これで間違いなくB隊もA

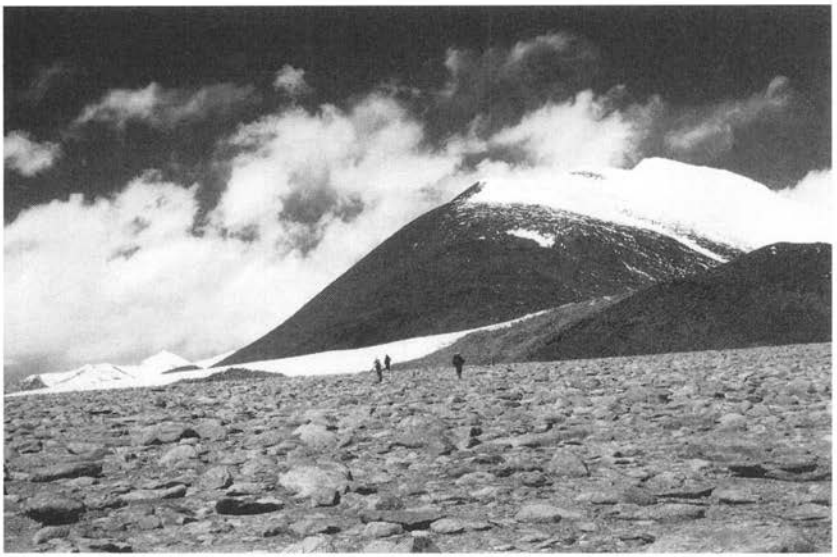


写真1　氷河ルート工作に向かう。KOR 65 は右手奥

地図2

Cに到着できる状況にあった。

その時、A隊長のトランシーバからB隊長の「これからC1へ引き返す」という声が聞こえた。「何事だ?」一瞬耳を疑った。ここで時間をかけて事情を掌握する余裕がなかった。このハプニングで、B隊の中で登頂意志のある須川が一人遅れてACに入り、登頂隊は田中隊長、中村、亀井、須川とテレビ取材の横倉の五名となった。

八月十三日、午前六時五十九分、頂上アタックを開始した。ACは、頂上の南に伸びる主稜線から西へ分かれた平らな尾根

の雪面と岩面との境に設営してあり、出発すると直ぐに頂上から氷河に落ち込む急峻な大雪渓に入る。昨夜の降雪は一〇㌢ほどで、慎重に状況を判断しながら、この不気味な大雪面を一気にトラバースした。

予めC1からの観察で登頂ルートに選んだ岩混じりの雪稜に取り付き、ここに赤旗標識竿を立てる。この雪稜は西の方向に傾き、頂上との距離が遠くなるので、標高六二〇〇㍍当たりで一〇〇㍍ほど雪面を東へトラバースし、西稜中央ピークにつながる岩混じり斜面へ移動した。南面の登攀斜面は雪が緩み、ピッチが上がらない。

十二時十五分、標高六三二〇㍍のコルに到達した。ここに尾根からの降下地点を見失わないように標識を立てる。ACを出て五時間余、晴天微風の好条件のもと、行動食を摂り、西尾根ピークの五〇㍍ほどの斜面に取り付く。左は雪庇のある岩壁、右はAC横のルンゼに落ち込む雪斜面、その間を一気に直登してピーク頭部に出る。目前に白く輝く主峰が姿を現した。足元の尾根はゆるい傾斜で主峰直下のコルにつながっている。

午後二時三十分、登攀隊は遂に頂上直下のコルに到達した。高度計は六四七〇㍍を示している。残り高度差は五〇～六〇㍍ぐらいだろうか。ここから幅広い雪面が嶺につながり、西日を受けた頂上が手に届くほど近くに見える。遅れ気味の須川がようやく調子を取り戻してきた。もう少しの辛抱だ。もぐる軟雪に悩まされながら、一歩一歩と高度を稼いだ。

四. KOR65の登頂成功

午後四時十五分、北端岩壁頂部の最高地点に登頂する。頂上は濃いガスに包まれ何も見えない。頂上は南北四〇㍍ほどのやせ尾根で、東側に雪庇が張り出し、西は雪の急斜面がコルへつながり西尾根へと伸びている。北端の最高地点は岩壁でガスの彼方へ深く落ち込んでいる。

頂上では田中がトランシーバで登頂成功をC1へ伝える。この通信を傍受したBCサイトが直ちにインマルサット衛星電話で京都の留守本部へニュースを伝えた。中村が日中両国旗と北山の会のペナントを結びつけたピッケルを掲げて立ち上がり、全員で声を張り上げ「ヤッホー」。その後、GPS計器を使って標高を測定する。高度表示は六五四〇㍍、旧ソ連製地図の表示より二十九㍍高い。

午後四時三十分、夕暮れが迫る中、トップ中村、ラスト田中で下山を開始する。西尾根からACへの下降を始める頃から、風雪を伴いガスは一段と濃くなる。頼みの踏み跡が徐々に消えはじめ、トップの緊張が高まる。折りしも背後から一条の夕日が差し込み、眼前にブロッケン現象が現れ、自分の影が映っている。観賞する余裕はなく先を急ぐうちに、再び辺りは暗さを増したホワイトアウトの世界に戻る。

焦燥と不安を抱きつつ下降を続けているうちに、ガスの一瞬の切れ目から視界が広がり、眼下に最初に立てた一本目の標識の旗が閃き、大雪面の彼方に小さなACテントを確認することができた。午後七時二〇分、無事にACに帰着する。今朝ここを出発してから帰着まで実に十二時間二十一分の強行軍であった。

登頂隊は十四日にACを撤収してC1へ降り、翌十五日に中国側協力員の支援を得てC1を撤収し、午後、無事BCに帰還した。その後本隊は、十七日にBCを撤収し、復路は二日間で山区を通過し、イエチェンのホテルに三週間ぶりに帰着した。全員久々にシャワーを浴び、美酒、美食で登頂成功を祝った。

エピローグ

良いことがあれば悪いこともあるのが世の常である。本隊にとって確かに初登頂という良い結果は得られたが、振り返ってみるといくつもの問題点が指摘される。

当初から本隊は、中学・高校時代の山岳部員たちがそれぞれの社会活動を終えて数十年ぶりに会し、少年時代の夢を具現化したもので、経験や技術の蓄積がない稚拙な登山隊であることから、身のほど知らずで無謀な登山と評される要因を内包していた。

経験「0」からスタートし、知恵を出し合い、力を合わせて推進を図ったプロセスに、判断の甘さや思慮不足が多々あったことは否めない。また、我侭で身勝手な高齢者の言動がマイナスに働いたこともある。

十一月二十五日に開催された報告会の席上、日本山岳会前会長の斎藤惇生先生が祝辞の中で「わが国二〇〇〇年度の登山活動記録として、第一位はチョモランマ最高齢登頂者の山本俊雄氏で、次いでこの高齢隊の崑崙未踏峰の登頂である」と述べられた言葉に、隊員たちは面目躍如たる誇りと感動を覚えた。このような高い評価を頂き素直に喜べばいいのだが、今この隊に求められるものは「初登頂」の結果を語ることよりも、この結果を生み出したプロセスを総括して、良かったことは堂々と、悪かったことは勇気をもって報告することであろう。

荷上げの失敗や登頂放棄、空々しい言動などいろいろとマイナス要因を突き詰めていくと、本隊の最大特徴である「高齢隊」に帰着する。今回は夢を孵化させるIncubatorとして、実現化プロセスの推進役に徹した。隊員たちが一致協力して目標を達成したことで、そこに新たな人間関係が生まれ、同時に山の仲間の輪が広がるものと考えていた。この考えは甘かった。所詮、高齢者の即製の混成チームで、老人同士がお互いに認識し合い、隊の規範ともいえる共通の基盤を作るには時間が少な過ぎた。

視点を代えて見ると、隊員たちが年寄りの我侭の許される歳

だとすれば、もう無理することはないのだ。隊員としての自己責任以外に、誰にも拘束されることのない一老人に戻るのも悪くない。むしろこれが高齢化社会での自然の成り行きとでも言えるのであろう。

最後に、この高齢隊の体験が活かされ、高齢化社会の活性化の一助になることを願いつつ「KOR65登山報告書」の制作をもって〝終わりよければ、すべて良し〟としたい。

今回の登山に際しご支援ご協力を頂いた多くの方々に対し、老人の戯言に終わることなく、「成功」の報告ができることが最大の恩返しと心得まして、ここに衷心より厚く御礼申し上げます。

〈記録概要〉

隊の名称　北山の会崑崙隊

登山期間　二〇〇〇年七月二十四日～八月二十五日

目　的　中国新疆ウイグル自治区崑崙山脈の未踏峰（六五四〇㍍）の初登頂

隊の構成　総隊長＝川喜田二郎（81）、隊長＝高橋　脩（68）、副隊長＝川井久造（69）、登攀隊長＝田中昌二郎（60）、秘書長＝中村　淳（67）、医師＝市田太郎（71）、隊員＝河端　繁（66）、秋野子弦（63）、亀井清太郎（63）、四手井靖彦（63）、高島法男（62）、須川眞一（60）、堀江徹雄（57）、倉橋和義（55）、市田照子（67）、テレビ大阪取材＝吉田正男（40）、村若宏司（35）、横倉良昌（35）、連絡官＝高衛東（30）、通訳＝巴特尓（24）、作業員＝孫継林（46）、張屹（22）、炊事＝王小華（24）、運転手＝付克山、雷博、李宇、曽金平、張新玉、阿不都

行動概要

七月二十四日　本隊　関西空港発→西安→ウルムチ
二十五日　ウルムチ→カシュガル
二十七日　カシュガルよりキャラバン開始
八月　一日　BC（五二四〇㍍）設営
五日　C1（五七二〇㍍）設営
十二日　AC（六一〇〇㍍）設営
十三日　KOR65未踏峰（六五四〇㍍）登頂
十七日　BC撤収→十九日　カシュガル→二十三日　ウルムチ
二十四日　ウルムチにて現地解散

報告書　北山の会崑崙隊『KOR65登頂報告』ご希望の方は中村淳までご連絡ください。

［〒六〇六―〇八三二
京都市左京区下鴨北園町二〇―一］

ナラカンカール峰（六〇六二メートル）登頂と極西北ネパール紀行

大西保

はじめに

幻の七〇〇〇メートル級の山が極西北ネパールの端にある？という深田久彌さんの記述を思い出す人達ならば、河口慧海、長谷川伝次郎の本を夢中になって読み、マナサロワールやカイラスを想い、一九六三年に北大隊（安藤久男隊長）のナラカンカール峰登山(1)のあったことを思い出し浮かべることができるだろう。まだナラカンカールが七〇〇〇メートル峰と信じていた、あの頃を……。

またグルラマンダーダや、カイラスを含む西チベットの探検史をひも解く者には、ハーゼイやムーアクロフト、ナイン・シン、ウェバーとホジソン、スミスとドラモンド、ストレイチー兄弟、ランドァ、ローリング、シェーリング、ロングスタッフ、ヘディンなどといった十九世紀後半から二十世紀初めの古い探検家の記録、地図やスケッチ、写真などは欠かせない資料であった。また、第一次大戦以降の学術的な調査記録として、地質学のハイムとガンサー、チベット史のトゥッチ、そしてティッヒーやその他の西チベットを歩いた幾つかの旅行記も同様に重要な研究対象であった。今回の登山隊の参加者は、皆てこれらの本の虜になった熟年というか？超中高年という表現が適切な、在阪の先輩数名をこれまでの仲間に加え、総勢十二名の老朽登山隊となった。ちなみに私は下から二番目の若造という事になる。

ナラカンカールについては、どうしてもこの事を記しておかねばならない。最近、シドニー・ウィグノール著『ヒマラヤのスパイ』(2)を読んだ方々も多いことだろう。一九五五年十月、

ナラカンカールを求めて、ウライ・バンジャン（峠）五二〇七㍍を越え、プランで中共軍に捕らえられた記録である。同じ著者の前著では隠されていたが、この本ではスパイ行為が事実であったことが明らかにされている。ただ帰途に厳冬のヒマラヤの峠を越え、セティ河上流を難渋して下る描写はすさまじい。二番目に出かけた北大隊は正当にネパール領内から接近したが、同じようにプラン（タクラコット）では中共軍には歓迎されなかった、と記録にある。(3) ナラカンカール峰探索の結果、この地にナラカンカールと呼ばれる七〇〇〇㍍峰はなかった。という同隊の記録が誤解を受けて、一時外務省との間で問題をかもしたが、六一年の中ネ国境協定地図には、ネパール西北隅にも、実際にない七三三五㍍の標高の山が記載されていたという。北大の調査した南部のタクプー・ヒマールでは、国境協定地図に六六三五㍍の山があった。

一九八三年になって、ネパール観光省は、一九七九年に新たに制定された中ネ国境協定付属地図に基づいて、無名峰の六〇六二㍍ N 30 21 27／E 81 23 58 のピークを「ナラカンカール」の名前で呼び、登山を解禁した。（私たちはこの山の登山許可を取得した）では六一年地図の六六三五㍍はどうなったか？ 新たな国境協定付属地図では、そのピークは国境外のチベット領内にある六五二一㍍に相当するらしい。国境線はこのピークの八五〇㍍東北東（E 60）にある約六四五〇㍍の東肩を通っており、ネパール内のこのナラカンカール山塊の最高峰はこのピークの三㌔真南にある六四二一㍍ N 30 15 04／E 81 23 32 ということになっている。北大隊が発表したパノラマ写真（北大隊のパノラマ写真より作成したスケッチ［折込一］参照）の一番左の山がナラカンカール最高峰六四二一㍍である。写真のナラカンカール六六三五㍍とあるのは、チベット領内の六五二一㍍となる。右へ台形状になつた端の少し低い肩が国境線で南北に走っている。なおこの周辺での最も高い峰はチベット内の六六一三㍍（N 30 15 06／E 81 22 24）(4) でナラカンカール最高峰の西一・七五㌔のところにあり、同隊発表のパノラマ写真の左より二つ目のピークがそれである。

北大隊の報告書に、その山名の意味を「ヒューマン・スケルトン」とあり、直訳すれば人間の骸骨の意である。

このナラカンカール峰一帯が登山の対象としてオープンされたとはいえ、極西北ネパールの遠隔地にあり、このような辺鄙な低山へ登りに来るような人はこれまでにおらず、永年周辺へは、リミ谷の人達の放牧やチベットとの交易、時としてカンパ族がチベットから逃れる時に通過するだけのものであった。

ウェバーやスミスら狩猟家一行(5)は、一八六四年に確かにこの周辺を通過して、ツァンポ河上流に達していると私達は確信しているが、ヘディンは執拗にその紀行について反論していた。それから丁度、百年後の一九六三年秋に北大隊がこの地を

踏み、さらにその三十七年後になって私達が出かけた訳だが、多分この周辺を探索した外国人としては、記録の残っているものではこの三隊のみではなかろうかと思う。ウィグノール達は、ウライ山群では活躍したが、この周辺には接近すらしていない。

私達は一九九七年から四年計画で全西北ネパールの国境地帯のヒマラヤを広く歩き、（「山岳」九四年・一九九九年　折込地図参照）六〇〇〇メートル級の山頂から周囲の山々を同定する山旅を始めた。確か今回の山行で結末を迎えるはずであったが、その魅力にどんどん嵌り込んでしまって、あと五年後までの計画も既に出来上ってしまった。

私達のグループは仲が良いのか、良くないのか、ほとんど病的化して西北ネパール偏執症集団となってしまった感がある。

極西北ネパールの山旅

二〇〇〇年六月二日　摂氏四五度のネパールガンジの最高級ホテルは、隊長部屋に冷房完備があるのみで、隊員は「暑くて一睡も出来なかった」と溢したのであった。

雨のためカリコツト周辺の峠を越すことができないチャーター機は、今回で私たちにとって七度目となるスルケツトで数時間待機し、正午にフムラ・カルナリ川の崖上のシミコットの飛行場へ到着した。西ネパール偏執仲間のYにとっては大阪を発ってから僅か三日目のことである。日本を船出してこの地までキャラバンを含めて、七十七日間もかかった北大隊の隊員らがこの報告を読んだら、多分気分を害するに違いない短日数での到着であった。

ポリスステーションの副長官の話では、国境周辺のチェックポストは現在マオイスト出没の影響で、フムラ・カルナリ川沿いからリミ谷にかけては唯一ムチュー村にしかないとのこと、そこでイミグレとカスタムの業務も行っているとのことであった。シミコットはカイラス山詣での外国人達で満杯であった。昨年（一九九九年夏）、ジョムソン、アッパー・トルボからムグへの横断終了後、ジュムラにデポしてあった炊事用具類、テント、食糧はジュムラ・ポーターによって運ばれシミコットに数日前に到着していた。一方カトマンズからの登山用具、食糧、隊員個人装備などもシェルパとカトマンズ・ポーター達によってロシアンヘリと定期便により空輸させておいた。

六月五日にシミコットを出発して、フムラ・カルナリ川沿いのカイラス街道を歩き、二日目、どしゃ降りの雨の中を針葉樹のジャンガルのチュムサ・コーラに入谷する。雨が益々ひどくなり三三五〇メートルの樹林帯の中でキャンプする。ここで三日間動けない豪雨となり、川横の路は、濁流化した流れが危険な状態で、前進を拒む。テントの中にも流れが出来る始末で何もかもがずぶ濡れとなり、上部の広場に移動した。途中枝沢から鉄砲水が出て通行不能となったが、シェルパとポーター達によって

崩れた山肌に簡易路がこさえられた。

十一日　シンジュンマの二軒のカルカのある二股から、左俣に架かる新しい橋を渡り、左岸の気持のいい草原を通って、右岸側のヨセミテ風の大岩壁帯に懸かる見事な大滝に見とれ、ブルーボピーの群生に歓喜しつつ、ツムサ（三九二〇㍍）の広河原の快適なキャンプサイトに着いた。

ここで三日間の高所順応をすることにした。対岸（西）にはシンジュンマまでの岩壁帯、本流の上部にはニャラ・ラ峠（四九四〇㍍）への谷が正面に、その左に大きくチュンガール・コーラの谷があり、正反対の東側から本流が入り込んでいる。翌十三日、この本流に入り、クキ湖への接近を試みるが、前述の大雨は四六〇〇㍍付近から積雪となっていて太腿まで潜る。ジョギングシューズでは辛い順応活動となって諦める。翌日再びクキ峠をめざしたが、背後の斜面から岩壁中のガリーを抜けてシミコットへ通じる路は、今では廃道となっているらしく、積雪のある稜線で踵を返した。各自のペースで、ゆっくり四〇〇〇㍍から四六〇〇㍍辺りまでの順応を行ない、パルスオキシメーターで各自の数値を出し、順応適応性を計る。この積雪量だと五〇〇〇㍍近いニャラ・ラ（四九四〇㍍）の積雪には難渋するかもしれない。

もうかれこれ、十六、七年も毎年付き合っている信頼出来るシェルパ達が、全員で三日間のラッセルをして、ニャラ・ラの峠越えルートを確保してくれた。おかげで先に進むことが出来た。セリマツォ湖へ出発の十五日の朝、黄金色に輝くサイパル（七〇三一㍍）北壁、フィルンコプフ（六七三八㍍）と西峰（六六八四㍍）の双耳峰が見事な姿を見せてくれた。この地で放牧しているカルカの馬主に馬を借りる。おかげで渡渉は乗馬のままで進めるし、高齢隊員は登りの心配はないし、体力維持には都合がいい。十一頭借りた。（一頭五〇〇ルピー）。峠手前のセリマツォ湖畔で一泊して、西の二つの五〇〇〇㍍峰に上がってみたが、生憎天気が悪く視界ゼロ。翌日も朝から天候は良くなく濃いガスの中を出発した。

峠への路は既にラッセルされていたので簡単に越す事が出来た。峠の大きなラプチェ（経文を彫った石積み）のところから崖下の路へと急下降し、広大なタルン・コーラ上流の草原へと下って行った。翌朝、各自乗馬を楽しみつつ流れに沿った草地から、北に細長いタルンツォの湖畔路を通り、激流の無名谷を乗馬のまま大騒ぎして渡渉をする。白い砂路を下るとタクチェ・カルカに着く。チベット人が使用するテント、チベッタンクールが一張りあって、ザン村の一家族が放牧で住んでいる。ここで美味しいミルク、ヨーグルト、フレシュ・コテージチーズを賞味することが出来た。広大な広河原を横切ってリミの谷（タクチェ・コーラ）の左岸の草原にテントを張った。楽しませてもらった馬をここで帰し、休養と順応を兼ねてこれからの三日

間をここで過ごすことにした。

二十二日、橋を渡り、尾根から小谷沿いに北へ通じる路を進む。この路はコ字状に湾曲しているタクチェ・コーラをショートカットする直線近道となっている。峠に出て、広々とした高原一面に紫色の花をつけたツツジ科の背の低い花に感動を覚える。北大隊のタクプーヒマールへの谷サジャ・コーラと、ラプチェ峠（五〇四八㍍）への谷チャヤクポンル・コーラの出合の少し西の、チベット高原風の草原にベースを設けた。（四七一二㍍ N 30 20 28／E 81 39 57）これからの約十日間、隊を二つに分け、東のチャンディ・ヒマールを探る隊はタイソル・コーラを遡る。もう一隊は順応と休養を兼ねて、チャヨラム湖から無名峠（五一三三㍍）と周辺のピークに立つことにした。その前に帰国組のYとAの二名は国境のロルン峠（四九五三㍍）を巡り、マナサロワールとカイラスを国境稜線から望見して、我々と合流後シミコットへ向けて下山した。

チャンディ・ヒマールを探る

六月二十三日　水谷（弘）、柳原、赤山と私の四人はシェルパ二名とサジャ・コーラの冷たい流れを渡渉して下流へ向かって草原を下り、ラプチェ峠への流れを渡渉してタイソル・コーラへ入り、右岸沿いの路を北進する。やがて谷は東に向きを変えて、ここから谷は大きくU字状に開ける。北（右岸）側にチャンディ・ヒマール(6)が始まり、六〇〇〇㍍に満たない丸く大きな山々が続く。やがて上流域は湿性草原となり、そこにいた野生化した馬やチベット・キャン達が侵入者を見て逃げ廻る。水溜まりには小さな魚が沢山潜んでいた。広大な谷は殆ど高度を上げない。遡行に三泊を費やして、東隣りのドザム・コーラの上流のニン・コーラとの分水嶺にあたる五九一四㍍峰が正面に見えて、その手前で南からの小沢に入り、再び分水嶺へ向かってサイドモレーンを上がる。この谷の名前の由来になっている氷結したタイソル湖の、自然のロックフィルダム状に堰き止められた岩棚下流の白砂の河原にキャンプを設けた。北のチャンディ・ヒマール側は、タイソル・コーラの支谷が入り込んで、西から六〇一六㍍、五九六四㍍、六〇二六㍍、六〇六九㍍、六〇二四㍍の五つの雪を被った、小さいながらも氷河を持った丸い山が東西に並ぶ。南西方向には六〇三八㍍峰がこじんまりした姿で迎えてくれた。出合の小沢から見え、私達が登って周辺を調べてみようとしているピラミダルなピーク、チャンワタン峰（六一二五㍍ N 30 19 35／E 81 53 17）はここからでは見えない。

分水嶺に上がってみると、遠くW二八一度の方向、五十五㌔先にナムナニ峰（七六九四㍍）東壁が見える。真反対の東にはE一〇一度の方向、二十五㌔先に頂上部分のチャンラ峰（六五六二㍍）の顕著な岩壁帯が見えた。ニン・コーラの源頭

部の国境チベット側は崗弄布嗄日（カンヌンプカリ・ヒマール）と呼ばれ、六〇〇〇㍍弱の岩峰群が並び、その奥にヘデインがシンチェン、シンチュンと称したと思われる(7)このチャンデイ・ヒマールの最高峰が（六二五六㍍ N 30 20 32／E 82 00 43）(8) E九二度方向に堂々と聳えて、右に小さく第二の高峰、六二五四㍍（E九七度の方向）N 30 20 49／E 82 20 57が見えた。

二十七日、氷化したタイソル湖畔から、南側のリン・コーラとの分水嶺となる雪原に出て、五七三八㍍（N 30 19 58／E 81 51 46）にハイキャンプを設けた。私達の持っていたインド測量局の地図（五万分の一、一九六七年 62 F/15）では、リン・コーラ南側の峰々の部分は空白で地形も標高も記載がない。六〇〇〇㍍前後はあろう峰が数座、障壁のようにハイキャンプから目の前に見え、氷河もかなり発達している。リン・コーラ側からでも、このキャンプ地へは簡単に来ることが出来、広い上流に氷結している数個の湖も見えた。

翌二十八日朝、チャンワタン峰西面の氷河から、五ピッチ右斜上して西稜に出て、さらに六ピッチのラッセルから雪壁を二ピッチ登って頂稜に出た。東へナイフリッジを辿るとチャンワタン峰の頂上であった。七十三歳の赤山の顔にやっとほころびがもれ、記念撮影をする。同ルートを懸垂下降で下り、ハイキャンプと湖畔のテントを徹収して、タイソル・コーラの河原を四七七九㍍まで一気に下りキャンプ地とした。快い疲労感が残る。

翌日、長時間の歩行で、夕方に仲間の待つサジャ・コーラのベースキャンプに戻った。

（時間記録） ハイキャンプ発5：00——頂上8：40～9：20——ハイキャンプ着12：20～13：20——タイソル湖畔キャンプ着14：30～15：15——タイソルコーラ・キャンプ地16：40着

私達はここをベースに一日の往復でラプチェ峠（五〇一八㍍）（国境標識12）へ出かけたり、ロルン峠（四九五三㍍）や、六・五㌔西の無名峠（五一三三㍍）と付近の山に立って、チベット側の風景とカイラス山やマナサロワール湖、西行するタゲ・ツアンポの流れと眺望を楽しみ周辺の調査活動を終えた。

ナラカンカール（六〇六二㍍）レギュレーション・ピークへ

七月二日 冷たい早朝のサジャ・コーラの渡渉を何回したろうか、その冷たさを一段と感じつつ流れに入り、そして真西の草原の丘に向かって進み、ギョー・コーラ右岸へと出る。とてつもなく広い谷というよりチベット高原風景の草原を歩く。

「リミ」と名付けたザン村で買った真黒なチベタンマスチーフ犬は、今ではすっかり大きくなって我家の一員となっていて、元気に私達の前や後を走りまわっている。やがて正面にナムナニ峰の巨大な東壁が西の空に屹立して現れた。右のスカイライ

ンは北稜で、一九九九年の秋の終りに下部の雪稜から、日本ヒマラヤ協会隊（山森欣一隊長）の岩崎、野沢井、古屋の三人の若者達がアルパインスタイルで攀じった。その好ルートが指摘出来て、自分が興奮してくるのが解る。ここから見ると、正に彼らは天空に攀じっていったという感じがする。数少ない若い日本のヒマラヤンクライマーも「なかなかやるものだ」と思わず笑みが出てくる。(9) 夕焼けが包むまでこの秀峰を見入ってしまった。

翌日、左岸に渡渉して、一向に高度を上げない谷筋を歩むこととなった。中国科学院発行地図にある五二五〇㍍の小さな湖は今ではすっかり干上がっていて、北隅に僅かな痕跡が残る。この湖へ流れ込む南西からの沢の左岸に、ナラカンカール峰登山のベースキャンプを設けた。翌四日はベースキャンプ・セレモニーを簡単に行なった後、数名がネパールの最西北端隅になる、インド測量局地図（一九七四年 62 F/7）ではナラカンカール峠（五五一四㍍）と記されている峠の手前の湖へ散歩に出た。

七月六日、ベースキャンプにリエゾン・オフィサーとキッチンボーイを残し、背後の草付き斜面を登り、国境上の五六〇二㍍ピークの南側から南西に入る沢筋を歩く。五七三三㍍（N 30 21 660／E 81 24 866）の、周りが一㌔程の湖の横にハイキャンプを設けて、全員がこのキャンプに入った。正面に二つの小さな氷河を携えたピークがあり、その真中にコルが見えるので、偵察旁々上がってみる。柳原とサーダーの二人はコルからそのまま、右のピークをどんどん歩き続け、一時間後に頂上へ立ってしまった。大きなケルンを立てているのがハイキャンプからでも見える。こうして呆気無く、レギュレーションピーク（規定された峰）のナラカンカール峰（六〇六二㍍ N 30 21 27／E 81 23 58）に登ってしまった。何のルート工作も登山用具も使用することなくスニーカーで初登頂されてしまった。頂上で手を振る二人を全員は唖然とただ見守るのみであった。

翌七日、地図上七〇〇〇㍍南に、やや高度は低いが、私達がナラカンカール南峰（六〇二四㍍ N 30 21 15／E 81 24 20）と名付けたピークがあり、北東面に氷壁が頂上まで繋がっていて、まだこちらの方がレギュレーションピークより格好がいい。この北東壁に柳原と私、シェルパ二名で取付くことにした。キャンプ横の湖から、後退した氷河をどんどん登り、やがて出歯のアイゼンツァッケだけで立つようになり、五〇㍍ザイル五ピッチのアイスクライミングを楽しんで、頂上直下の雪稜から左の岩へ進むと頂上であった。もうひとつのパーティの赤山、藤本夫妻、水谷夫妻、佐藤、井上とシェルパ達はこの山の北西稜の国境上のコルから頂上に立ち、全員揃って記念撮影をしたのち、南東稜を下りハイキャンプに戻る。数名のメンバーにとっては遥々持参したプラスチックブーツがやっと活躍した登山でもあった。ハイキャンプを撤収してベースキャンプに下り、ヒマラヤ

六〇〇〇㍍峰の初登頂を祝う。頂上からのパノラマは、生憎ガスが出て全てを見渡せなかったが、南に続く国境上の山々、チベット側の六〇〇〇㍍級の山々を同定することが出来た。一瞬、ガスの晴れ間から、目の前にナムナニ峰の東壁から南東壁が堂々たる姿を見せてくれた。

（時間記録）

北西稜パーティ：ハイキャンプ発4：55―頂上7：05～8：00

―ハイキャンプ着9：30～9：50―BC12：00着

北東壁パーティ：ハイキャンプ発5：20―頂上7：15～8：00

―ハイキャンプ着9：10～9：30―BC11：30着

ナラカンカール・ハイエスト（六四二二㍍）への探索

一九六三年の北大隊がタクプー・ヒマールと呼んだ所には、確かにチベット側に六五二一㍍峰があって、国境線がこのピークの八五〇㍍東の肩（六〇㍍低い）を通っているが、これはピークとは認めがたい。現在ネパール政府が定めているナラカンカール山塊の最高峰は六四二二㍍ N 30 15 04／E 81 23 32である。そこで、その位置と周辺地形を明らかにして、ルートを確かめて、あわよくば登る、というのが今回の私達の目的だった。北大隊の登ったスノーピーク(10)からのパノラマ写真を明らかにするのも後人の私達の役目かもしれない。

七月十日　ベースを発ってギョ・コーラの右岸を六㌔㍍下降すると、中国科学院地図に五二〇八㍍と記してある付近の尾根を越える。数日前キャンプした二股出合の左俣側へ降りてキャンプ、そのまま南下して、再び五二〇〇㍍の広い高原に出ると三つの湖があった。この周辺は北大隊が三十七年前に辿って以来、誰一人も外国人は通っていないだろう。そう願いたい気もする爽快な高原に出る。

そこは広漠とした静寂の中に湖があって、乾いた風がさあーっと吹き抜けて行って再び静粛だけが残った。三つ目の大きな湖の西に、タクプー・ヒマールがガスの切れ間からアルペン的な姿を見せて、透明な藍色の空は、私達の進むサジャ・コーラの対岸の峠へと消えている。全員が感動した一瞬であった。その感動は北大隊の人達も同じ想いだったろう。

サジャ・コーラへは一旦、四〇〇〇㍍下る。下り口には大きなラプチェがあり、上流にはサジャ氷河が見えて、タクプーヒマールの六三六九㍍（ティル・カン峰）と北の六三九五㍍峰が輝いていた。河原から再び六〇〇㍍の登りで峠に出てリミ谷（タクチェ・コーラ）のハルジェ村への小谷を下降して、翌日、戸数四〇戸、人口約二〇〇人のリミ谷の中心村であるハルジェ村（三九九二㍍）に到着した。サキャ派のゴンパかと思われる、村の中心に建っているゴンパを訪れた。紅壁にオンマニペメフムの白字の浮文字が記され、ゴンパの拝殿屋根の鴟尾（しび）

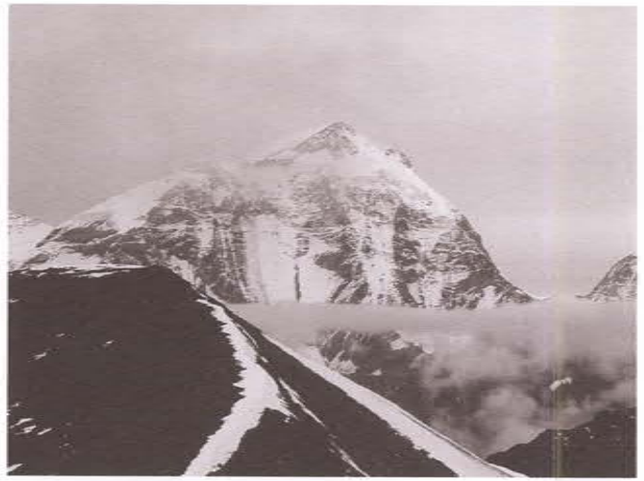
極西北ネパール Far North Western Nepal

OSAKA ALPINE CLUB Exp. 2000 Autumn

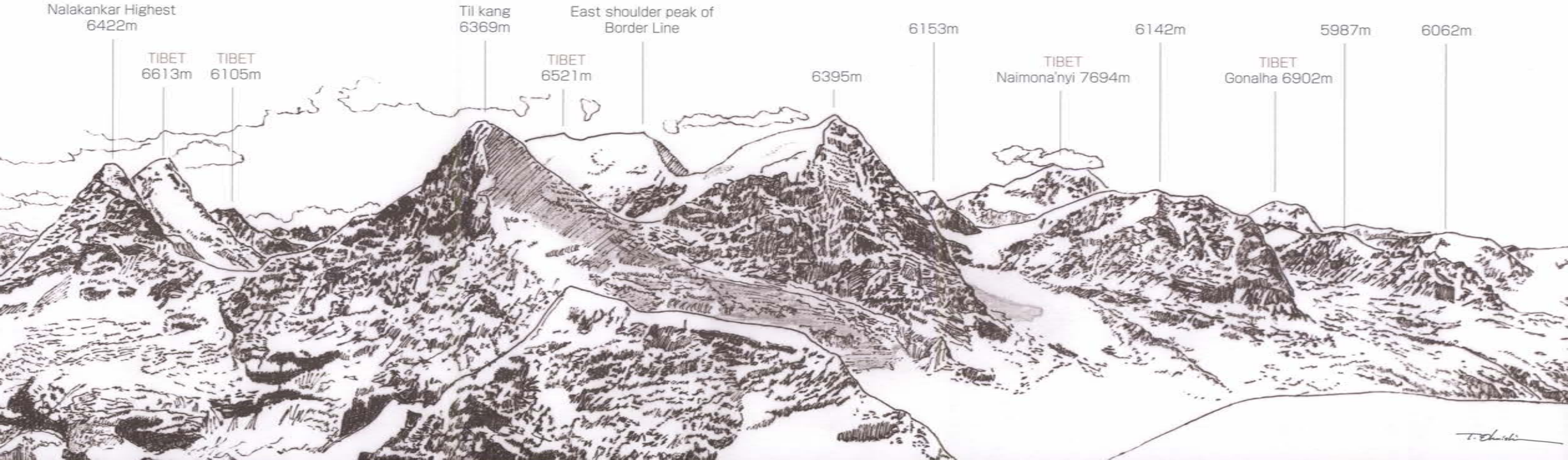
ナラカンカール最高峰とタクプーヒマールの山々を望む
1963年北海道大隊発表のスノーピーク（5896m）からの
パノラマコピースケッチ「山岳」Vol. LIX 1967より

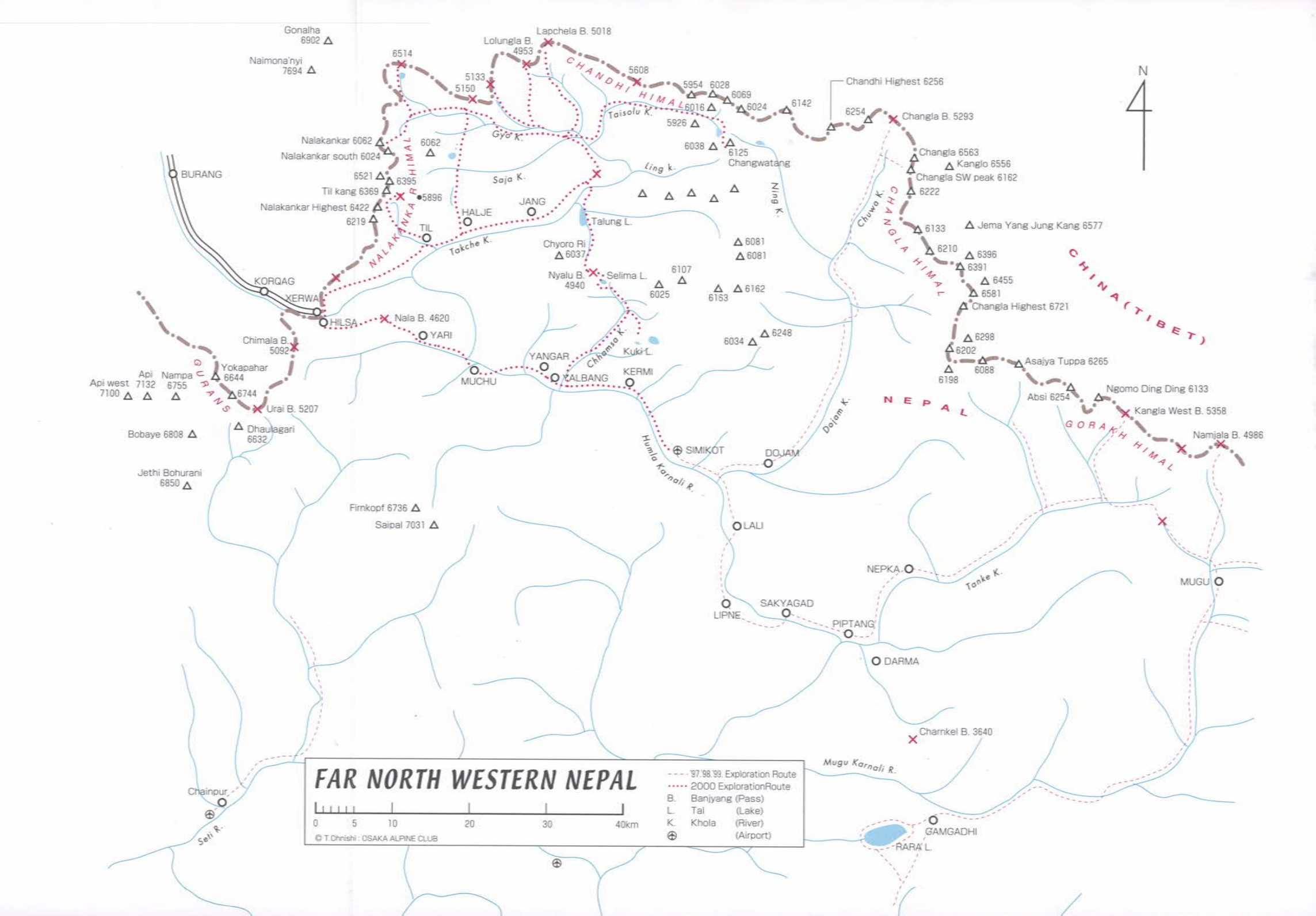
The mountain at the Nalakankar Highest and Takphu Himal
seen from Snowpeak 5896m, Hokkaido Univ. exp. '63.
copy by "SANGAKU" Vol. LIX 1967

South East face of Til Kang 6369m seen from Til gaom



East face of Naimona'nyi 7694m seen from Nalakankar South peak 6024m




FAR NORTH WESTERN NEPAL
'97.'98.'99. Exploration Route
2000 ExplorationRoute
B. Banjyang (Pass)
L. Tal (Lake)
K. Khola (River)
(Airport)
0 5 10 20 30 40km
© T.Ohnishi : OSAKA ALPINE CLUB
N
Gonalha 6902
Naimona'nyi 7694
Lapchela B. 5018
Lolungla B. 4953
CHANDHI HIMAL
Chandhi Highest 6256
Changla B. 5293
Changla 6563
Kanglo 6556
Changla SW peak 6162
6222
Jema Yang Jung Kang 6577
CHANGLA HIMAL
Changla Highest 6721
CHINA (TIBET)
Asaiya Tuppa 6265
Ngomo Ding Ding 6133
Kangla West B. 5358
Namjala B. 4986
GORAKH HIMAL
Changwatang
Taisolu K.
Gyo K.
Saja K.
Ling k.
Ning K.
Chuwa K.
Dojam K.
NEPAL
Nalakankar 6062
Nalakankar south 6024
Nalakankar Highest 6422
NALAKANKAR HIMAL
BURANG
Til kang 6369
HALJE
JANG
TIL
Takche K.
Talung L.
Chyoro Ri 6037
Nyalu B. 4940
Selima L.
KORQAG
XERWA
HILSA
Nala B. 4620
YARI
MUCHU
Chimala B. 5092
GURANS
Yokapahar 6644
Urai B. 5207
Dhaulagari 6632
Bobaye 6808
Jethi Bohurani 6850
Api west 7100
Api 7132
Nampa 6755
YANGAR
YALBANG
KERMI
Chhomsa K.
Kuki L.
SIMIKOT
DOJAM
Humla Karnali R.
LALI
Firnkopf 6736
Saipal 7031
LIPNE
SAKYAGAD
PIPTANG
NEPKA
Tanke K.
MUGU
DARMA
Charnkel B. 3640
Mugu Karnali R.
GAMGADHI
RARA L.
Chainpur
Seti R.

は黄金色に輝いていて、拝殿正面の造りは全て木造である。それに拝殿に入る階段には擦り減った平石が敷いてある。幕、ゴンパ内の仏像、仏画の壁画類など、門外漢の私にはよく解らないが、すばらしいものであった。文化人類学や宗教学者に良い研究材料を提供するであろう村である。(11) この村の本流側でキャンプすることにした。このリミの谷はチベット仏教徒のチベット人や、ネパールのシェルパの人々には重要なバター茶やチャン（酒）を呑む食器である木の器「お椀」を生産し、チベット各地へ出荷している。生産は上流のザン村でなされ、販売は下流のこのハルジェ村と更に下流のティル村が一手に引受けていて、三つの村がいかに昔から共同体としてお互いの利益を補っているかが理解できる。高級品は楓の節で、松、樺などは普及品である。銀製の彫刻を填めたものもある。

七月十三日　リミの谷を下り、ティル村（四〇〇二㍍）へはティル・コーラを遡る。こんな山中のネパール最西北部に石積集中家屋の村がある。チベットや西ネパールのチベッタン集落で時々見かけられ、またトルボのいくつかの村がそうであるように、この村も同様の建築様式で、石壁の隣りに家が作られていて一戸建ての家はない。村の真中の集会場には今では廃校となった教室があって、校庭に私たちはテントを張らせてもらった。ここでナラカンカール・ハイエストを探る隊と、リミ谷の三つの村を更に詳しく調査する隊に分けた。両班とも十八日には再びこのテント場に集合することを決めて、登山班の水谷、柳原と私、サーダーと二人のシェルパとで雨降る中をティル・コーラを遡る。

四八〇〇㍍付近にはゴルジュから滝状の急流となっていて、その部分の下流の四二〇〇㍍の草地でキャンプすることにした。翌日は夜半から降雨で全く視界が利かず、天気待ちで停滞と決めた。翌十七日、草付きの斜面を上がり、四八六八㍍でキャンプする。午後から雨も止み視界が利いたので更に上部のティル・カン峰（六三六九㍍）の南東壁基部からナラカンカール・ハイエスト峰（六四二二㍍ E 30 15 04／N 81 23 32）の国境線上北側のコルへの懸垂氷河にルートを探るためにガレ場を上がり、五二〇〇㍍まで達したが、ここからは容易に取り付くことが出来ない。上部は懸垂氷河が立ちはだかっていて、国境コルへのルートは難しい。上部のルートが断たれてしまい前進を断念することにした。

下降を決めて、ティル・コーラへの源頭側へトラバースし、ティル・カン峰から東へ北大隊のスノーピーク（五八九六㍍）へ伸びる尾根のコル（五三七四㍍ E 30 16 35／N 81 26 18）に向かう。コルの向側の北には平坦なサジャ氷河上部が広がり、東から望見出来たティル・カン峰の北面と国境線上の六〇〇〇㍍級の山なみがガスの中に霞んでいた。ハイキャンプへ戻り、急いで撤収してティル村へと下った。一週間、リミ谷の三つの

村を現地調査した仲間とも合流して、実りのあった村人との交流と興味ある調査報告を受けた。

翌日からリミ谷の右岸の路からフムラ・カルナリ川との合流点を過ぎ、二日目に国境のヒルサに出て隊員はここで三日間の休養を取った。シェルパ達一同はプランで新鮮な野菜、果物を仕入れて、マナサロワール湖へと遊んだ。合流後、一行はカイラス街道をシミコットへと逆コースを歩き、七月二十八日昼過ぎにシミコット着。同日、空路ネパールガンジを経由して、夕方にはカトマンズのホテルでシャワーを浴び、和食を楽しむことが出来た。

註

（1）「ナラカンカール紀行」安藤久男「山岳」五九年一九六四

（2）S. Wignoll : Prisoner in Red Tibet, London 1957 S. Wignoll : Spy on the Roof of the World, New York 1996［邦訳　三浦彌子訳『ヒマラヤのスパイ』文芸春秋社一九九七年］

（3）「北海道大学西ネパール遠征隊報告一九六三・七～一九六四・二」（HIMALAYA EXPEDITION OF A. A. C. H. 1963年）　同登山隊事務局一九六四年

（4）『西蔵冰川』中国科学院青蔵高原綜合科学考察隊　科学出版社　北京一九八六年

（5）Thomas W. Webber : The Forests of Upper India and Their Inhabitants, London, 1902 Charles Allen : A Moutain in Tibet, London 1982［邦訳　宮持優訳『チベットの山』未来社　一九八八年］

（6）「西ネパール北部国境の知られざる山群」大阪山の会　吉永定雄・大西保「山岳」九四年　一九九九年

（7）Sven Hedin "Southern Tibet" Atlas of Tibetan Panoramas : 207 from Narrow passage, July, 21, 1907, Stockholm 1922

（8）Harka Gurung and R. K. Shrestha : Nepal Himalaya Inventory, Ministry of Tourism & Civil Aviation, Kathmandu 1994 の中に 738 Changla (Kananu Pukari) N 30 20 32／E 82 00 27 とあるが、27秒はタイプミスと思われる。地図上では E 82 00 43 が正しい。

（9）月刊「ヒマラヤ」No. 340, 二〇〇〇年三月号．日本ヒマラヤ協会

（10）中国科学院蘭州氷河凍土研究所発行：納木那尼 1/100, 000（一九九七年）によるとスノーピークと

は（五八九六㍍）のピークと思われる。

（11）この村の経済環境については、一九七四年にM・C・ゴールドスタインによって調査された事がある。また、周辺のガイドブックとリミ谷の紹介をしている本としてStan Armington & Sushil Upadhyay : Humla to Mt. Kailas, Bangkok 1993がある。

〈記録概要〉

隊の名称　大阪山の会極西北ネパール登山隊二〇〇〇

活動期間　二〇〇〇年六月二日～七月二十八日

目　的　ナラカンカール峰（レギュレーションピーク登頂）と西北ネパールの地域研究

隊の構成　総隊長　吉永定雄　隊長　大西保

隊　員　阿部和行・水谷弘治・赤山伸夫・藤本勇・新井浩・水谷徳子・佐藤朋子・井上田鶴子・藤本光子・柳原武彦

（ネパール側隊員）サーダー：アン・プルバ・シェルパ、ミンマ・ヌル、ダワ・カンチャ、ツルジム・ヌル（登山許可は合同隊に発行される）

報　告　大阪山の会URL　http://www.showa-p.co.jp/oac

Osaka Alpine Club CD-ROM No. 4

The American Alpine Journal Vol. 43 2001

メコン川（瀾滄江）水源問題を検証する

【付記】メコン源流の山々

中村保

メコンという言葉の響きはなぜか憧憬を誘う。アジアの母なうる大河、恵みと豊饒の川はインドシナ半島を潤し、雲南省の深い浸食の国を貫いて遥かチベット高原へ遡る。全長四三五〇キロメートルのうち二三五四キロメートルの中・上・源流部が中国領を流れる。知名度が高いこの川の水源の確定が二十世紀末、一九九九年まで持ち越された事実は興味深い。

メコン川探検の歴史・一八六六―一八九四年

「世界に残された最後の大きな地理上の謎が一つ解決された」（英国王立地理学会）。

二〇〇〇年十一月の上旬に四川・青海の旅から帰国した直後に“The Last Barbarians, The Discovery of the Source of Mekong in Tibet”（Michel Peissel 1997）を手にして、本のカバーを見たときの第一印象は「ちょっとおかしいぞ」という違和感であった。著者のパイセルはハーバードとオクスフォードで学んだ人類学者で、欧米では著名な現代の探検家であり、ソルボンヌ大学で博士号をとったチベット研究家として知られている。“Mustang, A Lost Tibetan Kingdom”, “The Cavaliers (騎士) of Kham”など著書も多い。

彼のチーム、英仏遠征隊が一九九四年にメコン水源に初めて到達したときの紀行が上記の本である。読み進むうちに疑問が湧いてきた。彼らより僅か十日ほど前にメコン水源の探査に入った東京農大探検部の足跡や記録について書いていないのである。片手落ちも甚だしい。東京農大と中国科学院との日中合同隊の

一九九四年の記録は『民族学』73（一九九五夏、国立民族博物館監修）に概略が載っているが、詳しいリポートが出されたとは聞いていないし、海外には発信されてはいないようだ。例えば、権威ある英国の王立地理学会に報告していれば、パイセルは日中合同隊の成果に言及せざるを得なかったろう。探検史の上で、日本人による素晴らしい実績が世界に知られないのは本当に惜しいことである。そんな思いが、本稿を書かせた動機である。

まずメコン川探検史から入って、一九九四年と一九九九年の水源踏査の話に繋げよう。インドシナを流れるメコン川はフランスとの縁が深い。フランスは植民地獲得競争で大英帝国に遅れをとり、ようやく手に入れたインドシナを死守するため、英国のビルマ以東への侵攻を阻止し、そこから雲南経由で中国進出を図った。一八六六年六月、パリにおいてフランス地理学会は海軍士官のラグレ（Doudart de Lagree）を委員長とするメコン川上流部探検委員会を発足させた。ナイル川水源発見の四年後であり、ジューヌ・ベルヌが『地球から月へ』という空想科学小説を出版した年である。

フランスにはメコン遠征を積極的にバックアップする格好の理由があった。その一つが、フランスの探検家アンリ・ムオ（Henri Mouhot）がメコン下流域を踏破し、カンボヂアで〝アジアのベルサイユ〟と呼ばれた壮麗なアンコール・ワット遺跡を発見して名声を博していた事実である。この遠征隊がフランス地理学会のみならず英国の王立地理学会によっても支援されていたことにフランスは痛く刺激された。若いムオは英国の偉大なアフリカ探検家マンゴ・パークの孫娘と結婚していた。が、悲しいことに、二回目のメコン探査行の途中で熱病に倒れ、三十五歳でこの世を去った。

新たに隊長に任命されたラグレはムオの墓をつくり、フランス国家の記念碑を建てていることを命じられた。しかし、ラグレ自身も苦難の旅の末、雲南府（昆明）から北東に進んだところから先には行けなかった。金沙江（揚子江）の現在の攀枝花近くまで達したが、そこから遠くない雲南省曲靖県会澤で病死した。後に雲南の探検に名を残すフランシス・ガルニエ（Francis Garnier）とともに大理を目指しての途上で、アミーバ赤痢、肝炎、喉の感染症の三重苦に喘いで一八六八年三月十二日に息を引取った。この頃すでにフランス・カトリック教会はサルウィン川とメコン川の雲南北西部と雲南・チベット国境に近いところまで伝道活動を広げていた。病に臥すラグレを会澤に残し、ガルニエは大理に向かい、宣教師M. Leiguilcherの手引きで大理城内に入ることができたが、僅か三十六時間の滞在で辛くも脱出した。当時、大理は回教徒が支配する殺戮の町であった。その九年後にキャプテン・ウイリアム・ギルが恐怖の余燼冷めやらぬ大理を通った時の状況は拙書『ヒマラヤの

東』に書いた。

一八六八年は中国南西とミャンマー（ビルマ）の探検史における節目の年であった。フランス隊のラグレは雲南へ入りメコンを探り、英国のスレーデン（Major Sladen）はビルマのバモーからイラワジ川上流部へ旅だち、貿易商クーパー（T. T. Cooper）は三月に成都を出発し四川省西北部巴塘を経て東チベットへ向かった。

一八九〇年七月、フランス政府は二人のフランス人、デュトロイユ・ド・ラン（Dutreuil de Rhins）とグルナール（Joseph Fernand Grenard）にアジア内陸部の探査を命令した。ド・ランはコンゴ探検の経験があり、インドシナと中央アジアの地理的調査で目覚しい業績をあげていた。一八九一年二月に二人の小規模な隊はパリを出発し、三年にわたる長途の旅となった。パリ―コーカサス―サマルカンド―〈ロシヤ・トルキスタンの全域通過〉―中国領トルキスタン―〈カラコラム山脈横断〉―ラダック―中国領トルキスタン―〈タクラマカン砂漠横断〉―北西からチベットに入り、ラサを目指した。しかし、目前にして手前のナクチュカ（那曲）で阻まれ、針路変更を余儀なくされ、未探検のチベット高原を中国西部に向かった。途中、サルウィン源流部を踏破し北東に旅した。唐古拉山脈の高い峠を越え、曲がりくねった流れが蛇行する沼沢の多い湿地帯の高原を進み、揚子江支流の源流域とメコンの源流域の分水嶺に接近した。川はまだ凍っており、雪が融けると幅数マイルの泥の沼地になるところだ。グルナールの "Tibet: the country and its inhabitants"（London 1904）からメコン水源に立ったときの描写を引用する。

「一八九四年四月八日午前九時に我々は自らに課してきた目的の一つを達成し、この上ない満足感を味わった。標高一六七六〇ftのザナグ・ルンムグ（Zanag Lungmug）峠を越えて、メコンの最西端の水源であるルンムグ・チュー（Lungmug Chu、パイセルの本では Lungmo Chu）に入ったからである。〝発見〟の喜びは探検家の旅の苦難を忘れさせてくれる。今は氷の下でじっとしているが、もうすぐ控えめな水流となって山を下り、フランスの領土である平原に届く。その流れが、絶えて音信がなくなっている母国と我々を結びつける糸だと想像すると喜びは倍化する。……ルンムグ・チューはノルパ・チュー（Norpa Chu）とのジャンクションでザナグ・チュー（Zanag Chu 現在の中国名：扎那曲）と名を変える。さらに下って、ザガール・チュー（Zagar Chu 現在の中国名：扎阿曲）との合流点でザ・チュー（Za Chu 現在の中国名：扎曲）となる。」（中村注：Lungmug or Lungmo Chu の現在の中国名は隴冒曲である）

しかし、彼らの発見は後に誤りであることが指摘される。彼らが越えたザナグ・ルンムグ峠は、一〇〇年後に確認されたこ

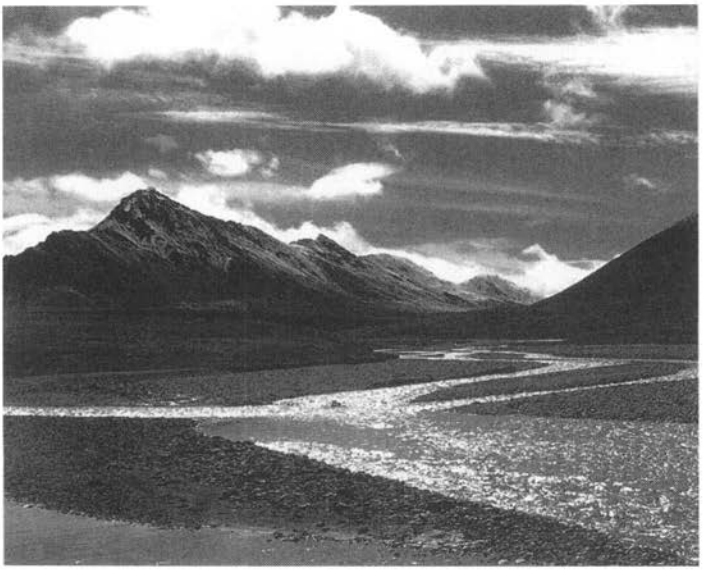


写真1

メコン川源頭には5500-5800 mの頂に小さな氷河が張りついている。源頭は中国の青海省玉樹チベット族自治州雑多県扎青郷にある（東京農大探検部）

とだが、パイセルが到達した水源から少し離れていた。ド・ラン一行は、メコン水源が明らかになり目的が達成されたので、もはやメコンを下る必要はないと判断し、ザガール・チュー（扎阿曲）を辿って北上し揚子江との分水嶺を越えて西寧への未知のルートを探そうとした。しかし、ヤクの歩みは遅く食料も十分でなかったので断念し、メコンを下り旅を続けた。もしザガール・チューすなわち扎阿曲を北に辿っていたら、メコンの正しい地理的源頭に達したかもしれず、玉樹付近で命を失うことはなかったろう。扎那曲と扎阿曲の合流点はド・ランにとって運命の別れ道であった。ド・ランには水源に関する自分の考えを主張する機会はこなかった。

一八九四年六月一日、玉樹を出発してから五日目に付近のツムブムド（Tumbumdo）で、馬が盗まれたことをめぐって、チベット族のカンバと争いになり、ド・ランは殺害されてしまった。グルナールは西寧か蘭州にでて旅を完遂する。東チベット探検史に残る悲劇の一つである。その後、一八九八年には玉樹の北でオランダ人宣教師ラインハルト（Rijnhart）も玉樹南西のラシ・ゴンパ（Rashi Gompa）の近くで行方不明になっている。

グルナールは帰国後メコン水源の発見を主張したが、四月の雪の中では正確な水源の位置の確認は実際上不可能だったので、説得力に乏しかった。グルナールは二度と主張することなく、

『エンサイクロペディア・ブリタニカ 一九一〇年、十一版』の記述「メコン川の水源問題は確実には解決していない。Dza-Nag と LungMung のあいだの北緯33度東経93度あたりの斜面にあるだろう」にも反論しなかった。

メコン源流部の川の名称について整理する前に、チベット語の外国語への表記の仕方の難しさを知るために、パイセルの"The Last Barbarians"の冒頭に書かれた著者の注釈を引合いにだす。言語学にまったく素人の私は常々苦労し、悩んでいるので大いに頷ける。

「チベット語は音標言語（written phonetic language）である。チベット語の綴りは古めかしい音声表記の伝統を重んじる。その結果、古典的なチベット語のスペルを使うと、学者はべつとして、一般の人をミスリードすることになる。したがって自分の本では、チベット名を書くにあたり、二世紀のあいだ西欧の旅行者が採用してきた近代の発音のアルファベット表記を使っている。中国の地図に見られる奇妙な名称は使わないほうがよい。中国の軍隊がチベットを侵攻・占領したときに新たに付けられた地名だからである。チベット名を中国名に書き換えると、まったく理解できない結果を生み出す。」

メコン川はラオス／ミャンマーから中国に入ると瀾滄江と名前を変える。雲南から東チベットを北上して昌都で上流部は二つに分かれ北西に向かう。西が昂曲（Ngom Qu）、東が本流の扎曲（Za Qu, Dza Chu or Za Chu）である。扎曲は源流部の北緯33度12分、東経94度36分の地点で扎那曲（Dza Nak or Zanag Chu）と扎阿曲（Dza Kar or Zagar Chu）に分かれる。前者は西へ延び、後者は北上する。土地のひとは扎那曲が扎曲の本流という。旧ソ連製の地形図（二〇万分の一）でも扎那曲のほうにメコン川と記されている。しかし、後述するように流量は扎阿曲のほうが大きいようだし、長さについても、扎阿曲のほうが僅かに長い。中国科学院は扎阿曲を本流としている。

パイセルのフランス隊――一九九四年

ド・ランの死後一世紀が過ぎた。ちょうど一〇〇年後、「一九九四年九月十七日、6：30 pm、我々はアジアの母なる大河〝メコン〟水源の自然の円形劇場に着いた。人類が月面に立ってから二十五年後のことである。ここから三つの小さな流れが一体となって下り、河口まで二八〇〇マイルの旅をする」とパイセルは自分たちがメコン源頭への最初の到達者であることを誇らしげに宣言している。彼らの成果はヨーロッパでは暫く話題にならなかったが、権威ある英国の王立地理学会が認知するにおよび、急速に広く世界に知られるところとなった。学会誌"The Geographical Journal, July 1995"の記録欄に、パイセルが寄稿したリポートをもとに、"The Source of The Mekong identified"（メコン水源の確認）という見出しの記録が載せら

れた。内容は次きとおりである。

一．チベット研究家であり探検家のDr. Michel Peissel（フランス地理学会）、Dr. Jacques Falk. Hon. Sebastian Guinnessはメコン川の主要な水源の位置を調べ測量を行って中国から帰国して間もない。彼らは一九九四年九月十七日に標高四九七五メートルのRup-sa峠、メコンの源頭に到達した。この峠は、メコン（Dza-nak）水源の最後の四〇キロメートルを囲繞するDrug-diとSag-riという山稜が繋がる鞍部であり、メコンと揚子江の分水嶺を形成している。正確な位置は北緯33°16. 543′、東経93°52. 929′である。

二．過去一世紀の間に多くの探検隊がメコン源頭到達を試みて失敗した。一八九四年にカンバによって殺害されたフランスの探検家、ド・ラン（Dutreuil de Rhins）は、殺される二ヶ月前にメコン（Dza-nak）の右岸の支流、ルンムグ（Lungmug or Lungmo）川の水源に到達し、そこがメコンの源頭であると、誤った記録をしている。我々が知る限り、他の外国人がメコンの源頭に到達した記録や主張は存在しない。この地方を旅した初期の探検家、コズロフ、タイクマン、ロックヒルはメコンの水源には近づかなかった。理由は政治的および地理的障害の両方のためである。

三．メコン源流域は中央アジア内陸高地の人煙から数百キロも離れた荒涼たる僻遠の地で、広大なナンチェン王国の一部である。二〇万人のカンバの遊牧民が昔からの生活様式で暮らしている。騎馬遊牧戦士、ナンチェン・カンバは半独立の二十五の部族によって構成されている。昔から侵入者に反抗し、中国政府にも激しく抵抗した。複雑なことに、彼らはダライ・ラマの支配にも服従しなかった。現在でも、遊牧民の大半は中国支配から逃れようとしているので、政府は青海省南部への外国人の入域に消極的である。

四．一九九三年、二年間に亘るチベット馬の研究の一環として、Dr. Peisselは例外的にナンチェン西部に入ることを許可された。肺の大きい気性の荒い新種の馬の調査に引続いて、一九九四年に中国青海登山協会の協力を得てメコン源流への旅行も許可された。

五．メコン川の源流は、Drug-di山稜の南にある唐古拉山脈には達していない。メコン源流は揚子江上流部ダム・チュからの主な支流域の広範な平原によって遮られており、生き残りのグルナールが断定しているDza-nakのLungmo峠（グルナールのZanag Lungmug峠）にあるわけではない。「行っただけでは探検家とは呼ばれない。記録を書き、世間に発表して初めて探検家として評価される」というのがパイセルの哲学である。宣伝上手で自己主張の強い人のようだ。さらに彼の本から引用を続けよう。

「王立地理学会が暗黙に認知し、記録を発表したことによっ

て、疑い深い人たちもついに納得するにいたった。フランス通信の配信をフォローして、ロイターが一連の報道の引金を引いた。一九九五年四月十七日のニューヨーク・タイムスの一面に〝アジアの荒野、水源を目指すキャラバン〟と題して掲載された。この記事はM・サイモンによって書かれ、メコンの赤ん坊をまたいで立っている私の写真が紹介された。翌日、インターナショナル・ヘラルド・トリビューンも一面で取り上げた。報道記事の洪水はオーストラリアからザンジバルまでゆきわたり、ある人は、我々の発見は〝地球上に残されていた最後の地理的な謎を解決した快挙〟であると言明した。ロンドンのサンデー・タイムスは〝メコン川のレースはギネス・ブックに載せる価値あり〟と持ち上げ、インデイペンデントは〝探検の新時代〟と賑やかにに歓迎した。

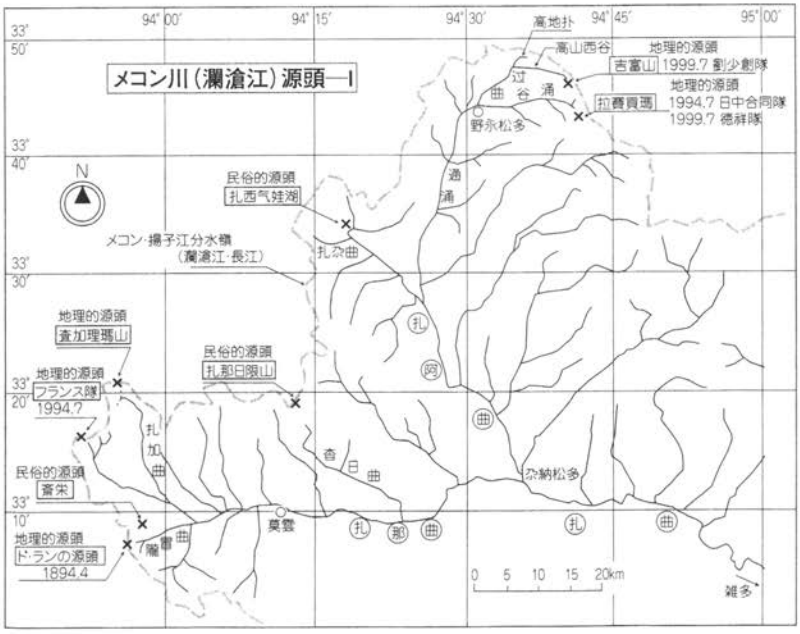
「今回だけは、メコンをめぐる物語はハッピーエンドを迎えた。中国の通信社は我々の発見を報道した。ナイルや他の多くの川とは異なり、他には誰も挑戦しなかった。私は初めからそう信じてきたことだが、もし探求心があれば、この地球上には探検されるべき対象がまだ確実に残されているという事実に多くの人たちが気づいた。勿論、人それぞれがより立派な仕事をしてきたであろうことは承知している。しかし、敢えて言えば、一番乗りをすることほど私にとって素晴らしいことはない。セバスティアンと私が王立地理学会の満員のホールで講演をした時、聴衆の熱狂的な反応に圧倒された。」

読んでいて、著者の自己顕示の強い表現が鼻についたが、それはさて措き、彼らだけがメコン源頭の探査をしたと書いていることに疑念をもった。パイセル一行は、西寧で青海登山協会から東京農大と中国科学院のパーティーが十日ほど前にメコン源流へ向かった、と聞かされて驚き、先を越されることへの不安にかられている。しかし、日中合同隊の成果を、その後知ることはなかったのだろうか。知っていても無視したのだろうか。現在でも欧米ではメコン源頭の発見者・最初の到達者がパイセルたちであると認知され、信じられているのだろうか。もしそうなら、訂正しなければならない。

日中合同隊――一九九四年

一九九四年には偶然にも、同じ時期に二つのパーティーがメコンの水源を目指した。青海登山協会がサポートするパイセル隊と中国科学院・東京農大探検部の隊である。中国では珍しいことではないが、中国側の両方の組織は互いに連絡を取り合うことはなく、相手の行動計画は知らなかったらしい。

『民族学』73の記録「メコン川の源流を求めて」の当事者である東京農大農友会探検部監督の北村昌之氏の説明を聞き、同氏から中国科学院の報告や新聞のコピーの提供を受けた。一九九七年にメコン源流域の未踏の山塊、曲阿加吉瑪山塊に挑んだ



地図1

新潟山岳協会登山隊の隊長、藤井信氏からも貴重な資料を頂いた。それらの情報をもとに日中合同隊（一九九四年）と中国科学院（一九九九年）の軌跡と成果を追ってみよう。

一九九四年九月十二日に日中合同隊はメコン源頭に到達した。パイセル一行の九月十七日より五日早い。しかし、源頭の位置は異なる。後で詳しく説明するように、中国科学院が主張する「正しい源頭」（中国語で〝正源〟）扎阿曲の地理的源頭に合同隊は立った。メコン源頭についての中国科学院の考え方を綜合すると、次のように整理される。地図1をご参照いただきたい。

扎那曲：地理的源頭――查加理瑪山
　民俗的源頭――扎那日根山、扎那霍霍珠地、斎栄
扎阿曲：地理的源頭――拉賽貢瑪
　民俗的源頭――扎西气娃湖

中国科学院との合同隊が扎阿曲最長の流れの源頭を〝正源〟としたのは、彼らなりの明確な科学的根拠がある。合同隊は、雑多から扎曲の川沿いにはヤクのキャラバンはできないので、扎曲・扎那曲の南側を大きく迂回し、扎那曲を下って莫雲に行き、そこから再び山越えをして扎阿曲に下り、扎那曲と扎阿曲の合流点、杂納松多に辿りついた。〝正源〟を確定するための一つの要素として、合同隊は合流点で二つの川の川幅と流量・流速の測定を行った。一方、パイセル一行は同じよう調査を行った形跡はなく、どちらの川が〝正源〟なのかというような疑い

は抱かずに扎那曲へ向かったようだ。

一九九四年十一月九日発の新華社＝中国通信は、青蔵高原の調査を終えて北京に戻ってきた中国科学院の専門家の話として「探検隊は九月上旬、扎曲の左の扎阿曲を調査した。その結果、中国科学院と東京農業大学の専門家は、扎阿曲の源が扎青郷の海抜五一六〇㍍、拉賽貢瑪山南の氷河の末端にあり、扎那曲より二・六キロ長く、扎阿曲が瀾滄江（ランカンジャン）の源であることを確認した」と報道し、それまでの扎那曲の扎那日根山〝正源〟説を覆した。

合同隊に参加した中国側のリーダーで中国科学院自然資源綜合考察委員会の周長進博士は一九九五年三月の中国科学院『地理研究』において「瀾滄江正源問題に関して」と題する論文で次のように発表している。

一、現地調査によって、メコン川の源頭は青海省雑多県の拉賽貢瑪山上の小さな氷河から流れでる扎阿曲であると決定された。源頭の標高は五一六七㍍、位置は東経94度41分35秒北緯33度44分13秒のところである。氷河の上の最高地点は五六三二㍍。源頭の盆地状に開けた谷の標高は平均で四八二〇㍍、周囲の山の平均標高は五五〇〇㍍である。

【注記：問題点の整理】

問題は東京農大の当事者による発表と周博士の発表の数値が異なる点である。源頭の標高は七㍍の差にすぎないので無視できるが、位置の違いは大きい。北村氏の言による

と、周博士は途中で引き返し源頭まで行っていない。東京農大は彼らの実測数値を帰途北京で周博士に渡してきている。現場に居合わせなかった周博士が何故別の数字を使って発表したのかは理解できないと言う。日本語の仮報告と前記『民族学』では、源頭の位置は周辺の最高峰、賽錯山（サイツォ）（五六三二㍍、チベット名：パラグ、雑多県地図より）の南に連なる山の東面氷河より流れ出るポイント、東経94度41分37秒、北緯33度42分41秒（標高は五一六〇㍍）としている。中国の一〇万分の一の地形図でチェックしたかぎり、位置に関しては東京農大の記述が正しいと判断されるので、添付スケッチ図（地図1）「メコン川（瀾滄江）源頭―I」ではこちらに統一する。一九九九年の劉少創隊も殆ど同じ位置を測定しているし、徳祥隊も近い位置を地理的源頭としている。

二、扎阿曲〝正源〟の根拠：（長さ、流域面積、流量）

（1）一〇万分の一の地形図上で合流点から上流部の長さと流域面積を積算したところ、長さは扎阿曲が九三・三キロ、扎那曲は九〇・七キロであり、流域面積は扎阿曲の二五六〇・〇平方キロにたいし扎那曲は一九八三・〇平方キロであった。

（2）一九九四年九月四日に行った合流点、尕納松多での実測データも扎阿曲の優位性を示している。扎阿曲

の流量は毎秒五四・九立方㍍、川幅四〇・〇㍍、平均水深〇・七二六㍍、平均流速は毎秒一・八九㍍。扎那曲のほうは流量が毎秒一〇・六立方㍍、川幅三〇・〇㍍、平均水深〇・三三㍍、平均流速は毎秒一・〇六七㍍であった。

ただし、実測は一回だけなので、絶対的な基準にすることには異論はあるかもしれない。

上記の論文は民俗的源頭（アメリカ人は精神的源頭—Spiritual Source—と表現）についても書いている。

扎那日根山は扎那曲の中流部、莫雲郷の約十七㌔㍍北方の北緯33度19分20秒、東経94度13分40秒のところにある。山頂の標高は五五五〇㍍。扎那日根山を水源とする埋荀谷と查日曲はいずれも扎那曲中流の小さな支流にすぎない。

扎西气娃湖は扎忝曲上流の沼沢地にあり、北緯33度34分15秒、東経94度18分14秒に位置する。標高は四六五〇㍍。扎西气娃湖は沼沢中の幾つかの小さな湖がつながってできている。この湖から流れでる水量は、扎那曲のほんの一部を占めているにすぎない。（写真2）

扎那日根山はチベット語で「聖なる山」、扎西气娃湖は「吉祥湖」である。宗教心の強いチベット族のあいだで神聖な意味をもつ場所をメコンの源頭とするのは不思議ではないが、科学的には正しい源頭とは言えない。民俗的源頭とする所以である。

中国科学院の別のリポートでは、英国の王立地理学会で発表されたパイセルの記録、すなわち扎那曲の魯布薩山口（Rup-Sa Pass）をメコンの〝正源〟とするのは非科学的であるとし、パイセルの主張は退けられている。「メコンの源頭を発見したと、パイセルと二人のフランス人が声高に言うRup-Sa Passは、一〇万分の一の地形地図にある吾隴達と同音で、実際は扎那曲西南方向の小さな支流にすぎない。これは隴冒曲の水源で、全河長は十二㌔㍍前後しかない。扎那曲の源頭は扎那周底上流の河長二十八㌔㍍、流域西部の沼沢地から発している。そのうちの一つの沼沢を補給源としている扎加曲が源頭から流れ

写真2　扎阿曲の扎西气娃にある民俗的（精神的）源頭。（東京農大探検部）

でる川である。源頭の標高は四九七六㍍である。」パイセルたちの発見を一蹴している。

パイセルの言う源頭を旧ソ連製二〇万分の一の地形図にプロットしてみたところ、扎那曲の別の流がもっと北まで延びていることに気付いた。彼らは扎那曲の源頭には達していなかった可能性が高い。しかし、パイセルたちが辿った支流と北に延びる別の支流（あるは本流）の長さは、中国側が指摘するほどの大きな差はなく、彼らがメコン源流の〝最西端の水源〟に到達したことは事実である。もしかしたら、パイセルの到達点が中国科学院のいう扎那曲の地理的源頭、査加理瑪山であるのかもしれない。地図1には別に表記したが、私の手持ちの資料からはまだ特定できない。一方、中国科学院の指摘、即ちパイセルたちフランス隊は短い支流、隴冒曲に入ったというのは、旧ソ連製の地形図に経度・緯度をプロットしてみる限り誤りである。隴冒曲の源頭を通過したのはド・ランとグルナールである。

写真3　氷河から最初の一滴が流れ出す。源頭は氷河の末端部、標高5160メートル、北緯33°42′41″東経94°41′37″。（東京農大探検部）

二つの中国隊――一九九九年

一九九九年に中国科学院は再び〝正源〟の調査・測量を行った。一九九四年の調査結果に異論が出てきたからである。と言っても、扎阿曲か扎那曲かの根本的な疑問ではなく、扎阿曲の真の源頭の再調査が目的であった。大少二つの調査隊によって一九九九年六―七月に現地調査が行われた。中国国家地理雑誌『地理』一九九九・一〇号に掲載された記事を追ってみよう。前半で、メコン水源をめぐる六つの説を紹介している。五つ目まではすでに出ているので、六番目の説について記す。それは土地の人間が「聖なる山」と称している扎那霍霍珠地（ザナフォフォジュディ）（パイセル隊の到達点）である。茫々たる草原の中の沼沢地で、長いあいだチベット族が瀾滄江の水源として信じてきた民俗的源頭である。しかし、経度・緯度が書かれていないので、位置は同定できない。同誌は、六つ以外にも源頭について幾つかの説があり、メコンのような大河の水源をめぐって多様な説があることは従来ないことだとし、一つに絞りこむための水源確定作業は

必要で有意義なことであると結んでいる。

後半で、〝両調査団の水源遡行―論争を引き起こす〟という題で二つ隊の成果について詳しく解説をし、正源問題の評価について試論を展開している。次のような書き出しで始まる。

「メコン水源に関する意見の多さに、中国の科学者や探検家は瀾滄江遡行の意義と緊急性を日増しに強く感じ、中国人自らの手で自国領土内の世界的に有名な大河の源流を究明しなければならないと考えるようになった。」

一九九九年四月には中国科学探検協会は瀾滄江の正源を探し出すと宣言した。六月末には、相前後して二つの調査隊が出発した。

（1）徳祥瀾滄江考察隊

中国科学院自然資源綜合考察委員会の関志華教授が長となり、隊の学術委員会、顧問委員会および考察組委員会が関連分野の専門家により構成された。先発隊は科学者七名、新聞記者八名で組織された。調査の費用は天津の徳祥集団（企業グループ）が一〇〇万元を単独で寄付。調査隊は早くも一九九七年から準備を始めており、一九九九年六月に出発した。

（2）劉少創瀾滄江考察隊

中国科学院・遠隔地探査所の劉少創博士を長とする調査隊で、一九九九年六月末から水源調査を行った。この隊の主力隊員は実質的には劉少創一人だけだった。劉少創博士の調査は中国科学院・遠隔地探査所の同意と支援をうけ、資金源を遠隔地探査所の所長基金、国家遠隔地探査応用エンジニアリング研究センター研究基金、武漢測量製図科学技術大学、遠隔地探査通信エンジニアリング国家重点実験室主任基金と中国科学院・遠隔地探査通信開放研究実験室基金から仰いでおり、合計で一〇万元であった。

上記二つの調査隊が同じ時期に調査を行い、二つの異なった結果を得ていた。このことは多くのメデイアと水源の結論に関心をもつ人々のあいだで広く注目された。「瀾滄江の水源としてありうる〝正源〟は一つであるべきだ」という観点に立てば論争は避けられないことだ。

現在、河川の水源確定の国際的な基準は三つある。

(1) 〝水源最奥〟原則、即ち最長の支流にある源頭が正式な水源である。

(2) 〝水量最大〟原則、即ち水量最大の支流にある源頭が正式な水源である。

(3) 川の流れの主方向に一致した支流の源頭が正式な水源である。

勿論、二つの調査隊はこれらの基準を熟知して、踏査にあたったことは言うまでもない。

地図 2

A. 吉富山水源調査の結論と根拠—劉少創隊

劉少創は吉富山がメコンの水源であると結論づけた。この隊は、メコン源流部の尕納松多で扎阿曲と扎那曲が合流することを知っており、本流の水源である扎阿曲の各支流のうち、劉少創は主として三つの支流を調査した。

(1) 扎西气娃湖

当地のチベット族が扎阿曲の水源だと認めている民俗的源頭である。この湖は湿原上の細流でつながれて一つになっている大小とりどりの季節性の小さい湖と沼沢地の総称である。この湖と沼沢の水が集まって扎尕曲となり、東経94度26分00秒北緯33度27分20秒で扎阿曲に合流する。合流点での観測結果が示すところでは扎西气娃湖から扎阿曲に注ぐ水量は本流の四分の一しかないこと、川の長さからみても、扎西气娃湖に注ぐ最長の塔尼雅木曲は源頭から尕納松多までの距離は七六・七キロメートルで、吉富山からの一〇一・五キロメートルより短い。

(2) 拉賽貢瑪

遠隔探査(リモート・センシング)の映像分析、および実地調査での検証により、拉賽貢瑪の源頭の位置は、氷河の末端(海抜五一六〇メートル)、東経94度41分37秒北緯33度42分39秒であることが確認された(中村注:一九九四年の日中合同隊・東京農大の測定位置と殆ど同じ)。こ

こから尕納松多まで九九・四キロメートルで、これも吉富山からの一〇一・五キロメートルより短い。かつまた、吉富山の源頭ならびに拉賽貢瑪の源頭から両者が合流する野永松多までのそれぞれの長さは二三・六キロメートルと二一・五キロメートルであり、二度にわたる実地測量では両支流の水量に明らかな差異はないことが判っている（高山谷西：六・二㎥／秒、五・六㎥／秒　高地扑：六・一㎥／秒、五・四㎥／秒）。このことは吉富山の水源がつくる支流の主方向が拉賽貢瑪の水源がつくる支流の方向より扎阿曲の主方向により近いことを証明している。

（3）吉富山

吉富山は青海省治多県と雑多県の境界、海抜五五五二メートル、東経94度41分12秒北緯33度45分35秒に位置する。水源の補給源は治多県側の雪の積もった盆地であり、多くの人がメコンの水源と認めている拉賽貢瑪の氷河末端から僅か六キロメートル離れているだけである。

劉少創は、扎那曲と扎阿曲の長さと流域面積について行った精密な測量と実地調査によりえた数値を綜合的に分析した。扎那曲は水量、流域面積ともに扎阿曲より小さいだけでなく、合流点の尕納松多までのそれぞれの長さも、扎阿曲の源頭である吉富山からのほうが扎那曲の最長の支流より長いことが判った。この結果に基づいて、劉少創は扎阿曲の高山扑の源頭、吉富山が瀾滄江（メコン）の〝正源〟であると結論づけている。なお、劉少創は扎那曲流域内で扎那霍霍珠地や扎那日根などの民俗的源頭も実地調査している。

B．拉賽貢瑪水源調査の結論と根拠――徳祥隊

徳祥瀾滄江水源科学探検考察隊は、無人地帯で精力的なフィールド・ワークを行い、水源地区の果宗木査山の氷河から融けだした水を集めた小さな一筋の流れを発見した。この細流は拉賽貢瑪に注いでいた。その具体的位置は東経94度41分44秒、北緯33度42分31秒（海抜五二二四メートル）にある。彼らは果宗木査山の東側の斜面に〝瀾滄江源頭〟と記した石碑を建て、拉賽貢瑪が瀾滄江（メコン）の〝正源〟であると宣言した。この調査によって、アジアで最も重要な河川の一つであるメコンをめぐって続いていた源流論争に終止符がうたれ、ついに定説がで確立されたと判断した。考察隊はこの結果を玉樹州政府と共同で中央政府に報告し、国務院から正式に発表してもらおうと考えた。一九九八年の雅魯蔵布大峡谷科学探検隊以来の一大快挙であると評価する専門家もいる。（中村注：一九九四年の日中合同隊の東京農大発表が発表した源頭の位置にに極めて近い。水平距離で三六〇メートル、標高で五七メートルの違いにすぎないが、合同隊のことは何も触れられていない。）

『地理』誌には徳祥隊の測量・測定の数値は載せられていないので、ここでは、徳祥隊（関志華教授ほか二名）が発表した

表-1　扎阿曲・扎那曲

調査隊	年　月	河　流	河　長		流域面積		河　幅		平均水深		平均流速		断面流量	
			km	%	km²	%	m	%	m	%	m/s	%	m³/s	%
徳祥隊	1999年7月12日	扎阿曲	97.83	105	2457.9	123	62.0	122	0.73	192	2.63	145	119.0	339
		扎那曲	92.96	100	1999.3	100	51.0	100	0.38	100	1.81	100	35.1	100
劉少創	1999年	扎阿曲	101.5	102										
		扎那曲	99.4	100										
日中合同隊	1994年9月4日	扎阿曲	93.3	103	2560	129	40.0	133	0.73	221	1.89	177	54.9	518
		扎那曲	90.7	100	1983	100	30.0	100	0.33	100	1.07	100	10.6	100

表-2　高山谷西・高地扑

調査隊	月　日 1999年	河　流	河長 km	流域面積 km²	氷河 km²	河幅 m	水深 m	流速 m/s	m³/s
徳祥隊	9月14日	高山谷西	22.59	97.25	2.78	9.45	0.30	3.37	9.55
		高地扑	21.61	78.83	0.60	11.0	0.29	2.49	7.94
劉少創	（不詳）	高山谷西	21.5						6.2
		高地扑	23.6						6.1

中国科学院自然資源綜合考察委員会の報告書「瀾滄江（澜公河）正源および源頭の確定」から引用し、併せて他の隊の結果も載せ比較をしてみた。（表1）徳祥隊は規模が大きく、十分な機材を投入して組織的な調査をしているので、測量・測定結果にたいする信頼性は他の隊より高いと思う。例えば、扎阿曲と扎那曲の合流点からのそれぞれの河長と流域面積の計算には、一九九四年の日中合同隊は一〇万分の一の地図を使ったのにたいし、一九九九年の徳祥隊は一九九八年のTM衛星画像を使っている。劉少創隊はリモート・センシングの映像を利用したというだけでスペシフィックではない。また、流速や流量の計測には、徳祥隊は専門的な機器を使っているのにたいし、合同隊は手作業的な方法で行っている。劉祥創隊は測定したかどうか不明である。

上記の徳祥隊の報告書においては、扎阿曲、扎那曲いずれが地理的正源かの問題にたいしては扎阿曲を選んだ。三つの調査隊の測定結果は、僅かではあるが扎阿曲のほうが扎那曲より長いことを示しているので妥当な判断である。次に、扎阿曲の源頭は高山谷西か、あるいは劉少創が主張する吉富山（吉普山）かについては、河流の長さと流域面積（集水面積）の大きさ、および源頭の氷河面積の大きさから、高山谷西の源頭の拉賽貢瑪に流れ込む融水を育む氷河の下であると報告書では結論づけている。（表2）即ち、前述の東経94度41分44秒北緯33度42分31

秒、標高五二二四㍍の地点である。

ふたたび『地理』誌に戻ろう。水源および源頭の確定の明確な根拠に話がおよぶと、徳祥隊の報告書の断定的なトーンとはニュアンスが少し異なる。隊長の関志華教授は拉賽貢瑪の果宗木査山を唯一の水源として決めるには、さらなる技術的かつ綜合的な調査・測定をしなければならから、現在のところ確定したと公布することはできないと語っている。

〝源頭はただ一つ、誰が瀾滄江の水源をきめるのか〟『地理』誌は最後を次ぎのように締め括って、最近の状況を客観的に分析している。

二つの科学調査隊は、結論の一致こそみていないが、問題解決のための態度は共通しており、それぞれ科学的、専門的、そして綜合的な手法で対応すべきであることを十分認識している。両者の結論は関係部門や専門家の最終的な認知をまだ得ていないので、水源を一つだけに絞るためには、二一世紀に調査が引継がれねばならないだろうと、『地理』誌は余韻を残す表現で結んでいる。しかし、私の見方では一九九九年の中国科学院・徳祥隊の調査結果が最も信憑性が高いので、徳祥隊の調査をもってメコン川水源の源頭は確定されたと判断する。ただし最初の発見者・到達者は一九九四年の東京農大探検部であることも認知されるべきであると考える。

以上長々と説明をしてきたが、注意を惹きたいのは、冒頭で書いたようにパイセルのパフォーマンスにたいする疑問であり、日中合同隊や中国科学調査隊の成果・実績が欧米で正しく理解され、評価されているかどうかである。一九九五年以降二〇〇〇年までの王立地理学会の〝The Geographical Journal〟を念のため改めて繙いてみたが、合同隊や他の中国隊の記録は載っていない。北村氏に聞いたところ、日本側は海外には発信していないし、パイセルの本にたいしても外国に異議を唱えていないという。中国側は、パイセルの主張は科学的でないとして退けているが、そのことを海外に発信したかどうかは寡聞にして知らない。（以上のまとめを表3に示す）

パイセル自身は中国側の成果を薄々感じていたらしい。王立地理学会の一般向け地理雑誌〝The Geographical, April 1995〟に次のように書かれている。「パイセルは、中国の軍隊がメコンの真の水源を発見した可能性を認めている。〝それが事実だとしても、情報はいっさい公表されなかった〟彼らは自分達の発見を主張する必要があろう、とパイセルは語っている」しかし、一九九七年の本の中では、中国隊（日中合同隊）の調査結果には触れていない。パイセルが中国側の動向を具体的に知らなかったとすれば、地理の学術調査には関わりのない青海登山協会を協力相手に選んだことに起因するのかもしれない。

順序が前後してしまうが、ナショナル・ジオグラフィック

表-3　メコン川（瀾滄江）源頭一覧表

川名	評価基準	区分	場所	調査隊	年	経度・緯度				(m) 標高	摘要
扎阿曲	1999年9月 中科・徳祥隊 長さ・流域面積： 衛星写真図 川幅・流速・流量： 9月12日実測 流域面積　2457.9 km² 長　さ　97.83 km* 川　幅　62 m 流　量　119.0 m³/sec 平均流速　2.63 m/sec 平均水深　0.73 m	地理的源頭	拉賓貢瑪	日中合同隊［中国科学院／東京農大］	1994	E	94°	41′	37″	5160	日本 日本隊の記録が正しい
						N	33°	42′	41″		
						E	94°	41′	35″	5167	中国
						N	33°	44′	13″		
				中国科学院（徳祥隊）	1999	E	94°	41′	44″	5224	果宗木査山の斜面（東側）日本隊のGPSによる測定位置に近い
						N	33°	42′	31″		
				中国科学院（劉少創隊）	1999	E	94°	41′	37″	5160	（同　上）
						N	33°	42′	39″		
			吉富山	同　上	1999	E	94°	41′	12″	5552	※劉少創隊の測定では京納松多-扎阿曲源頭：101.5 km
						N	33°	45′	35″		
		民俗的源頭	扎西气娃湖	同　上	1999	E	94°	18′	14″	4650	チベット族が扎阿曲の源頭と認めている 1994年日中合同隊も調査
						N	33°	34′	15″		
扎那曲	流域面積　1999.3 km² 長　さ　92.96 km 川　幅　51 m 流　量　35.1 m³/sec 平均流速　1.81 m/sec 平均水深　0.38 m	地理的源頭	ルンムグ峠	ド・ラン／グルナール隊	1894	E	93°	57′	概略	5055	初めてメコン源頭付近に到達（外国人として）
						N	33°	07′			
			ルプ・サ峠	パイセル隊	1994	E	93°	52′	56″	4975	「メコン源流発見」を欧米に宣伝
						N	33°	16′	32″		
			査加理瑪山			E	93°	55′	概略	4976 or 4780	扎那曲の源頭・西部沼沢地 パイセル隊の到達点と同じ可能性も
						N	33°	22′			
		民俗的源頭	扎那日根山	中国科学院（劉少創隊）	1999	E	94°	13′	40″	5550	1994年日中合同隊も調査
						N	33°	19′	20″		
			扎那霍霍珠地			パイセル隊のルプ・サ峠					チベット族の「聖なる山」 劉少創隊の情報
			斎栄			扎那曲西端に近い					東京農大情報

（アメリカ）誌の踏査のことにも触れておきたい。一九九三年二月号（Vol. 183, No. 2）で紹介されている記事についてである。トーマス・オニールという編集スタッフとマイケル・山下という写真家が冬季に源流部に入り、河口まで取材した。彼らは西側のジャーナリストとして初めてメコン最西端の氷結している水源に来たと書いているが、地図も無く位置も地名も示していない。チベット族の遊牧民を案内役に使い、民俗的な源頭のいずれかにアクセスしただけである。いずれの源頭に至ったかについての具体的記述はない。

外国の反応―二〇〇一年

メコン源流問題について誰に問い合わせるのが最善か迷ったが、先ずは昨年（二〇〇〇年）成都で知り合いになり、その後親しく交信を続けているリバー・ラフティング（川下り）のエキスパートでアメリカのナショナル・ジオグラフィック誌の編集者の一人であるマイケル・マクロー氏に白羽の矢を立てた。同氏は世界最大のヤルン・ツァンポー峡谷の大屈曲部（グレート・ベンド：ナムチャバルワ峰を抱き込むように奔流となって下る最悪のゴルジュ帯）に取組んでいる。現在ツァンポー峡谷の本を執筆中であり、奥さんも著名な冒険家で今年の夏にはナショナル・ジオグラフィック社から「青ナイル下降」の紀行を出版した。マクロー氏自身はメコンについては詳しく知らないが、彼ら冒険家たちのネットワークを通じてアメリカの専門家のコメントと見解を取ってくれるか、或いは適任者を紹介して欲しいと依頼した。そのためにA4で十一ページの英訳に三枚のスケッチ・マップを添付してEメールで送信した。

狙いは的を射ていた。マクロー氏はすぐコロラド在住のピート・ウイン氏を紹介してくれた。私はウィン氏がメコンの下降をしていることは東京農大の北村氏から聞いていたし、また彼は二〇〇〇年の八月に怒江（サルウィン川）源流の初下降に成功していることは、ロスアンゼルスに本部を置く「カム援助基金」のウエブ・サイトで知っていた。面識はなかったが彼が最適だろうとは思っていた。早速ウィン氏に同じ資料をメールしたところ、折り返し満足すべき答えが入ってきた。常々感じていることだが、総じて英語圏の人たちはきちっと返事をくれる。書類文化の伝統は日本も含めアジアやラテンの国とは違う。

ウィン氏の見解を記す前に、彼のことに少し触れよう。ウィン氏はコロラドの地球科学エクスペディション（Earth Science Expedition）というNPO研究団体に関わっている地質学者である。このNPO（非営利組織）は中国の未踏・未探査の河川の地理的調査を行っている。彼が中国の川下り遠征を初めて計画するにあたり、一九八〇年代に相談した相手は、私の友人でアメリカ山岳界の重鎮で知日派のニコラス・クリンチ氏であった。クリンチ氏はヒマラヤとチベット高原の地質学の

権威である登山家・地質学者、ピーター・モルナー博士の親友である。農大隊がメコン源流を訪れた一九九四年にウィン氏は中国での最初の遠征を実現し、雲南省大理の洱海に源を発し瀾滄江に注ぐ黒恵江を下降した。このチームにモルナー博士は参加した。

一九九九年のメコン源流の下降では、ウィン氏の隊はまことに不運だった。通関でのトラブルで時間を費やされたため、今度はメコン川の下降を目ざしてやってきた東京農大探検部のパーティーに先を越されてしまった。メールで私にこう書いてきた。

「ご存知のように、一九九九年に北村昌之さんの隊は我々より僅か一日前に扎曲（メコンの源流）の下降を開始しました。そして、彼らの成果を後で聞きました。私はメコン川の源頭からの初下降の栄誉を北村隊に与えました。このことは私のウエブ・サイトに載せてあります。我々は昌都から雲南までメコンを下る合同遠征につて協議しましたが、我々のボートや機材はラサに置いてあり、昌都に移送する前にまだラサ周辺で使います。したがって、メコンの下降は二-三年後になるでしょう。」ウェブ・サイトには東京農大に遅れをとった無念さが書かれている。前置きが長くなってった。ウィン氏が寄せた情報に移ろう。四月二十七日のEメールである。

「中村様、

貴方のリポートを読み地図をよく吟味しました。貴方の調査に感銘を受けています。

パイセル（Peissel）の水源は誤りであり、英国（王立地理学会RGS）はパイセルの主張を認めるべきではなかったという考え方に同意します。

一九九九年のメコン源流下降遠征を計画している折、このことをアメリカ地質調査所（US Geological Survey）とナショナル・ジオグラフィック・ソサイティー（NGS）の代表者に話したことがあります。両者とも、RGSは中国の河川の水源を確定するには適当ではない組織であるという判断に賛成しています。中国政府によってそのための責務を与えられた中国の機関のみが中国の河川の水源を確定することができます。

周長進博士は一九九九年八月に莫雲まで我々に同行し、彼が所属する機関、中国科学院自然資源綜合考察委員会がメコン川の水源を決定する権限を付与されていると私に語りました。このことが正しいなら、その委員会はラサゴンマ（拉賽貢瑪）がメコンの最長の支流であると決定したので、ラサゴンマがメコンの水源です。

RGSとUSGSに提供するため、周博士に報告書を私に送ってくれるよう依頼したが、受けとっていません。私は貴方のリポートを両学会に送ろうと思いますが、周博士の報告書を添付したほうがよいでしょう。もし周博士の英文の報告書（抜粋ではない）をお持ちでしたらお送り下さい。私はそれらをNGS、

USGSとRGSに送ります。

貴方の結論を支持する私のテキストをウエブ・サイトからピックアップして下記します。

ピート・ウィン」

じつに明快な見解である。一読して頭の中のもやもやが霧消するような爽快感を味わった。時を措かずに関志華、周長進、陶宝祥の三人の手になる中国科学院自然資源綜合考察委員会の報告書「瀾滄江（湄公河）正源および源頭の確定」の全文を英訳（A4　七ページ）しEメールで送信した。すぐ質問が返ってきた。真面目に対応してくれる。

メコン川の水源（ウィン氏のウエブ・サイトよりの全訳）

メコン川は世界で十番目に長い川である。メコンを含む世界の主な川の水源は一八〇〇年代に発見された。しかし、一九九四年にフランスと日本のチームがそれぞれ別々にメコンの水源の位置を新しい場所に設定した。フランス隊は、歴史的な記録を検証し、一八〇〇年代に特定された水源は「精神的」（「民俗的」）なものであり、「正しい」水源（"True" source）ではないと決めつけた。一方、日本隊もまた人工衛星から撮った地図を調べ、歴史的な水源は「正しい」水源ではないことをはっきり認識したというが疑問が残る。

NGSとUSGSの地理にかんする通常の判断基準では、「正しい」水源は河口から最も遠い地点である。それが最大の支流であり、最も高い標高に位置していれば理想的であるが、決定的な要素ではない。且つまた、習慣的には、その水源が存在する国の公的な地理学協会が「正しい」水源問題の調停者である。何故なら、彼らのところに豊富な調査資料が集積されるからである。

一八〇〇年代の「民俗的」水源、ルングム峠（Lungmu La）は西から流れ出る大きな支流、扎那曲に南から北に注ぎ込む泉のあるところである。フランス隊をリードしたミッシェル・パイセルはルプサ峠（Rupsa La）を水源に選定するために、一九八三年のジェット・ナビゲーション用のTPC五〇万分の一地図を使用した。その水源は莫雲の道路の終点から扎那曲をさらに遡ったところにある泉である。彼らは正確な経度・緯度を確定するためにGPSを携行している。

遠征記録のなかでパイセルは、日本隊が自分たちより数日先行して北に流れるもう一つの大きな支流、扎阿曲に向かったと記している（パイセルは日本隊の意図を読めなかったのだろうか）。明らかに両チームとも二つの支流の大きさを測量するためにチベット族が尕納松多と呼んでいる合流点には行っていない。（アンダーラインは訳者、以下同じ）尕納松多から下流は扎曲と呼ばれる。さらに、昌都付近で瀾滄江と名を変え、中国

を離れてメコン川となる。

パイセルはルプサ峠がメコンの「正しい」水源であるとRGSを確信させ、一九九五年に遠征の本『メコン川水源の発見』("The Discovery of the Source of the Mekong")を出版した。日本チームは日本の雑誌か新聞に紀行を発表したようだ。しかし、パイセルはそのことを書いていないし、我々も(日本隊の)公表された記録を見つけることはできなかった。テレビの特集番組の話も聞いたが、確認はできなかった。

一九九四年一月にロシアの地図管理局が一九六〇年代に作られた中国の二〇万分の一の地形図の完全なセットを多くの主要大学の図書館に売り出した。が、一九九四年八月の遠征時点ではパイセルは明らかにこれらの地図があることを知らなかった。我々も一九九四年十月の最初のメコン遠征から帰るまで、その地図のことは知らなかった。

スタンフォード大学から該当するロシア製の地図を手に入れて、我々はパイセルが特定した水源に遠征する計画を練り始めた。ところが、ロシアの地図によると扎阿曲のほうが長く、集水面積も大きく、水源の標高も高いように見えた。パイセルが使った地図の上ではこのことは判然としないし、ロシアの地図の精度は知る由もなかった。一九九九年の早春にダマ(Da Ma)氏が中国の一〇万分の一の地図をチェックした。この地図はベストであるが、国外では見ることはできない。

ダマ氏は中国の地図が我々の結論を裏付けることを確かめた。そして、日本隊は扎阿曲の源頭に行ったと仮定して日本の遠征隊の動向を知っている人を探し始めた。彼は日本隊に同行した中国科学院の代表者を探し当て、中国科学院はメコンの水源は扎阿曲にあると認識していることを確認した。しかし、日本隊はGPSを携行しなかったので、水源の正確な位置の決定、あるいは記録をすることはできなかった。

ダマ氏は、メコン水源の情報を中国科学院に問合せている過程で、中国科学院がGPSを携行して北の水源に出かけ、衛星写真を使って尕納松多から西と北の二つの水源までの距離を測る計画の実行を図らずも促進した。中国科学院は一九九九年の七月に彼らの遠征を完遂し、八月初旬に扎阿曲の水源が「正しい」水源であることを確認した。パイセルは間違えていた。我々が出発する一ヶ月以前に、パイセルが「誤りの水源」への遠征を計画していたことを知っていた。

具合の悪いことに、メコン源頭域への道は莫雲で終わり、そこには「誤りの水源」と尕納松多との間に中国軍の前哨基地の廃屋があるだけである。我々は最初馬とヤクで六日かけて「誤りの水源」を往復する計画を立てた。一方、「正しい水源」を馬とヤクで往復するには十二日かかる。もし「正しい水源」まで行って、下降可能な最高地点から流れに入るとしたら遠征の日程を四日延ばさねばならない。我々のメンバーは皆川下りの

連中で、二日の空路と五日のドライブの後、十日間もの馬による長旅はきつすぎたろう。そこで、「正しい水源」の下流約三〇マイルの地点から下降を開始した。

状況は上記の通りである。「正しい水源」を決定するための七月の遠征隊を指揮した中国の調査官、周長進は莫雲まで我々に同行し、馬で「正しい水源」に行って、そこに銘板を建てた。その後、彼は車で雑多の下降終了点に戻ってきた。かくして、我々はメコンの水源は北緯33度42分、東経94度42分、海抜五二二四㍍（一七一三五ft）に位置することを知ることとなる。

（ピート・ウィン記、中村訳）

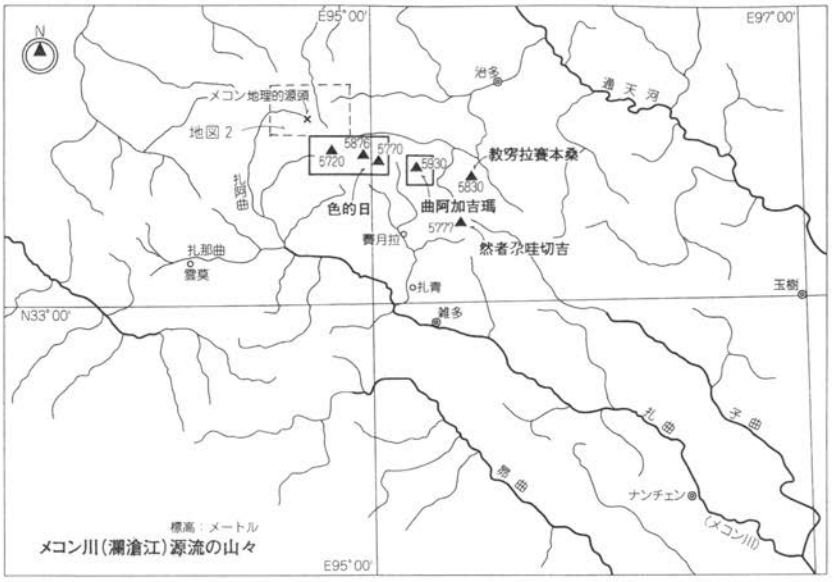
「正しい水源」への第一到達者は誰か

ウィン氏のウェブ・サイトの内容はパイセルに関する限り正しいと思う。東京農大については、「合流点の尕納松多には行っていない」、「GPSを携行しなかったので位置の確定ができなかった」と書いているが、いずれも誤りである。農大隊はGPSで測定をしているし、尕納松多でフィールド・サーベイを行っている。日本から英語できちっと発信されていないことが理解不足を生んでいる。地理学上の価値ある日本隊の成果が世界の注目を浴びることもなく、海外で正当に評価されるための発信をしないのは惜しいことである。

ピート・ウィン氏には東京農大の記録を改めて詳しく伝えた。同氏は客観的に事実を認識するに当たってはたいへんフェアーである。私の情報にもとづき、各隊の記録を改めて注意深く追ってくれた。扎阿曲の拉賽貢瑪が「正しい水源」だとすれば、一九九四年の東京農大の日中合同隊が水源への最初の到達者であると判断するためには、一九九四年の東京農大の記録と周長進博士の発表数値との食い違い（前述）を糺さねばならない。早速ウィン氏は周博士に問い合わせてくれた。

周博士の返事は、食い違いについては釈明はなかったが、自分自身が参加した一九九九年の徳祥隊の記録について正当性を主張してきた。ラサゴンマの源頭部を広く精査し、正しい源頭を特定したという。東京農大の成果については何も触れていない。国家機関の要員としては外国隊をメコン源頭への第一到達者として認めることは許されないのだろう。そのへんを忖度して、ウィン氏は「政治的に判断して、中国側に東京農大隊がメコン源頭の最初の発見者・到達者であると主張し続けるのはいかがなものか」というニュアンスのことを私に伝えてきた。今後の中国での活動を考えると、これには私も北村氏も同意せざるを得なかった。

一九九四年の東京農大・日中合同隊の水源と一九九九年の中国科学院・徳祥隊の水源とは水平距離で三六〇㍍、標高差で五七㍍の僅かの違いしかない。ウィン氏はGPSの誤差（一九九四年と一九九九年ではGPSの精度は違う。五年の間に精度は



地図 3

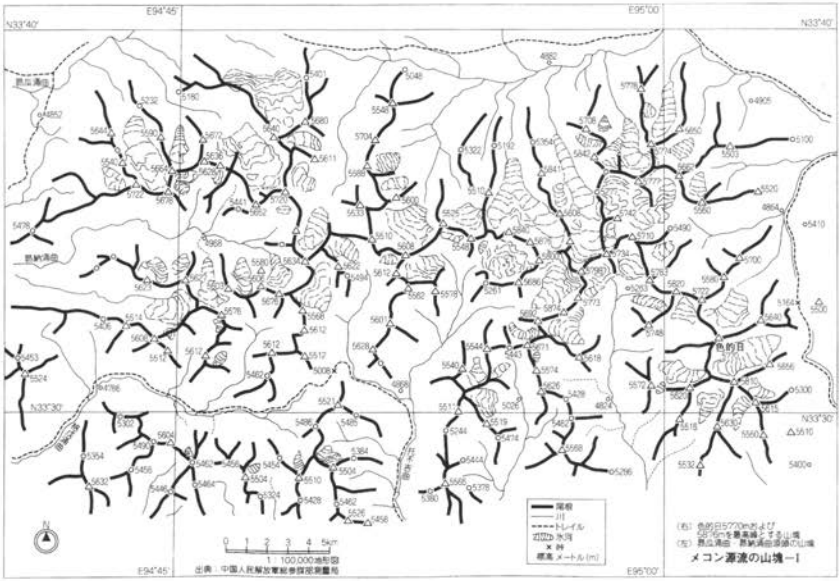
向上している。）や五年間の源頭氷河の後退を考慮にいれると東京農大隊と徳祥隊の源頭は至近距離にある。中国科学院は認めないが、メコン水源の第一発見者・到達者は一九九四年の東京農大探検部の隊員と、同行した中国側の通訳であると結論づけてよいだろうと私は考える。

【付記】

メコン源流の山々

川のことを書いてきたので、山岳についても触れておこう。「青蔵高原山峰図」（二五〇万分の一）を見るとメコン川源流部と揚子江上流の分水嶺上に幾つかの六〇〇〇メートル近いピークの存在が目にとまる。最高峰は曲阿加吉瑪（チアジャジマ、五九三〇メートル）という山で、地勢的には唐古拉山東縁の北側にあり、メコン源流が揚子江支流の源流部に囲繞されている山域である。メコン源流域特有の景観を呈しているようだ。標高が全体に高く、四五〇〇メートルから五〇〇〇メートルにいたる開けた谷の側面や奥に顕著な岩峰群が聳える。中国人民解放軍総参謀部測量局の一〇万分の一の地図から登山の対象として興味を惹く山塊を探してみると、次の三つに絞られる。東から西に列挙する。地図3をご参照いただきたい。

一．曲阿加吉瑪山塊：



地図4

東経95度11分5秒、北緯33度28分5秒に位置する。最高峰の曲阿加吉瑪Ⅰ峰五九三〇㍍を中心に五八〇〇㍍峰が五つ、五七〇〇㍍峰が二つある。堆積岩の砂岩からなる茶褐色の岩峰である。氷河は殆ど発達していない。後述のとおり、一九九七年に新潟県山岳協会と青海省登山協会の日中合同隊が初めて入域し、曲阿加吉瑪Ⅱ峰五八九〇㍍に初登頂した。最高峰のⅠ峰は未登である。（地図5）

二、色的日五七七〇㍍および五八七六㍍を最高峰とする山塊：曲阿加吉瑪の北西に位置する。地図で見る限り、全体に氷河がよく発達しており、氷雪のピークが期待される未踏の山塊である。が、残念ながら写真はない。五八〇〇㍍峰が八つ、五七〇〇㍍峰が十四ある。メコン源流域の山塊としては最も規模が大きく、今後の探査が待たれるところであろう。（地図4東半）

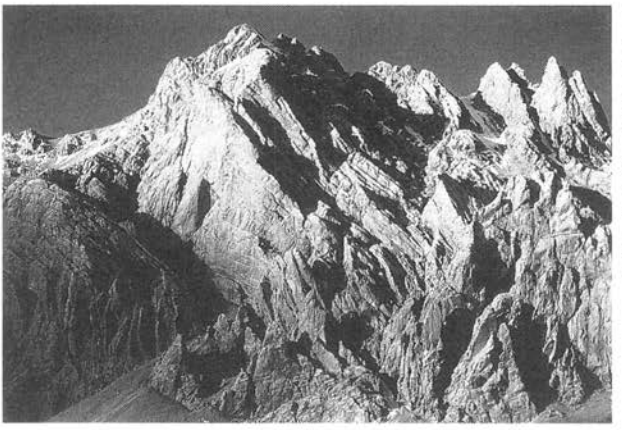
三、昂瓜涌曲・昂納涌曲源頭の山塊：メコンの地理的源頭即ち扎阿曲本流の水源、拉賽貢瑪の南側の山塊である。昂瓜涌曲・昂涌曲は扎阿曲の大きな支流である。二つの五七〇〇㍍峰と多くの五六〇〇㍍峰が山塊を形成し、小規模ながら多くの氷河が懸かり、険しい地形であることが地図から見て取れる。山のプロファイルが気になる。（地図4西半）

以上の三つの山塊は東西約六〇㌔㍍（東経94度40分－95度20

写真4 〔メコン源流の山々〕 曲阿加吉瑪峰（藤井信氏提供）

南西面の全容　左がⅠ峰（五九三〇メートル）右がⅡ峰（五八九〇メートル）

Ⅰ峰とⅡ峰の中間稜線より望むⅠ峰（五九三〇メートル）（左）と北側の山（右）



Ⅱ峰の南西面　BCより望む

分）、南北約三五キロメートル（北緯33度20分―33度40分）の間に広がっている。これら三つの山塊以外に、賽月拉の東二〇―二五キロメートルのところに五七七七メートルを中心に三つの五七〇〇メートル峰を擁する然者尕哇切吉と記された小さな山塊と、曲阿加吉瑪の東二五キロメートルのところに教　拉賽本桑という五八三〇メートルと五八〇一メートルの小規模だ興味を惹く山塊が存在する。（地図3参照）この他五五〇〇―五六〇〇メートルの山は数え切れないほどあるが、探検登山のターゲットになるような魅力のある山ではないだろう。登山活動の面では、偵察も含め本格的な記録は新潟県山岳協会との日中合同隊の成果が唯一のものであり、曲阿加吉瑪の他は全く手がつけられていない未踏査の山塊である。今年（二〇〇一年）の一月に、新潟県山岳協会会長の藤井信氏から青海登山協会の秘書長、鄧海平氏に問合せていただいたところ、一九九七年の日中合同隊以後、日本からの隊も含め外国登山隊は入っておらず、最高峰の曲阿加吉瑪Ⅰ峰は未登まま残されていることが確認されている。

新潟県山岳協会隊の報告のあらましを『遥かなり　曲阿加吉瑪　一九九七年チアジャジマ峰登山報告書』（新潟県山岳協会）から紹介させていただく。

新潟県山岳協会は創立五〇周年、ならびに青海登山協会との兄弟友好協定締結五周年を記念して、会長の藤井信氏を隊長とする日中曲阿加吉瑪登山隊を組織した。藤井氏の青海省との関係は深い。計画は、同氏の粘り強い精力的な交渉の結果実現した。一九九七年八月十四日午後一時二十二分、海抜五八九〇メートルの曲阿加吉瑪Ⅱ峰の初登頂に成功した。

このメコン源流の山が選ばれたきっかけは、中国登山協会のチョモランマ登頂者、屈銀華氏（合同隊に中国側の隊長の一人として参加）の示唆によるもので、未知の領域へ足を踏み入れたことは大いに価値があると思う。写真で見る山のイメージとはかなり違うが、曲阿加吉瑪（チアジャジマ）とはチベット族の言葉で「白い水の山」を意味するという。

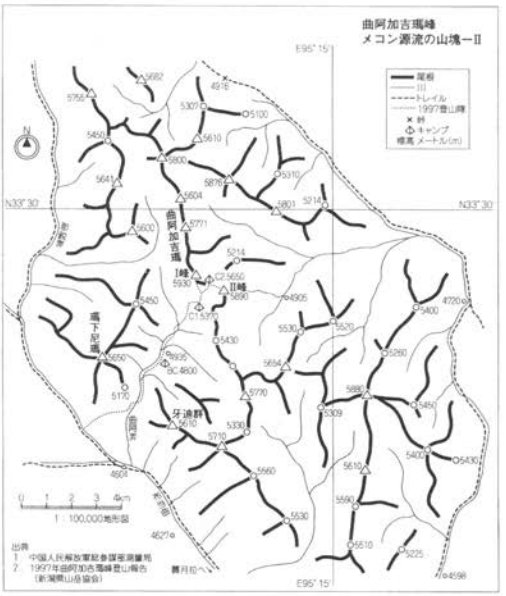
隊の構成は日本側八名、中国側が運転手と通訳を含めて九人である。日本人メンバーの平均年齢は五十歳、熟年が主力の隊であることが嬉しい。報告書に沿って行動記録を以下要約する。

七月二十六日、新潟―成田―北京。
七月二十七日、北京―西寧（空路）。
七月二十九―三十一日、西寧―温泉―玉樹（車）。青康公路を行く。八一七キロメートル。アムネマチン（六二八二メートル）を東に望み、黄河源流部（四二〇〇―四三〇〇メートル）を横断し、長大な巴顔喀拉（バヤンカラ）山（峠四八三二メートル）を越えて無人地帯を辿る青蔵高原のドライブである。四四〇〇メートル以上の峠を五つ越える。道は良い。玉樹の手前で揚子江上流の通天河（この付近で金沙江は呼称を変える）を渡る。
八月一日、玉樹―雑多（車）。長拉山峠（四七〇〇メートル）を越え

て揚子江流域がらメコン川上流部へ入る。峠の周辺は岩山が林立する特異な景観を呈している。

八月二日、雑多―賽月拉（車）。メコン川（扎曲）の左岸沿いに北にむかう。難所マルチンマルチ峠（四八〇〇㍍）を越え、扎曲の支流、布当曲の左岸に出て扎青に着く。この支流沿いに北上し、この日のうちに賽月拉に辿りつき幕営する。ここから先は馬とヤクの世界である。手配に難儀する。

八月五日、賽月拉出発、キャラバン開始。一〇㌔㍍進んで幕営。



地図5

八月六日、幕営地―BC。目的のルート曲阿弄（支流）の分岐点に来る。高巻きして四六〇〇㍍の山に登り、曲阿弄に下る。ゴルジュ帯を通過し広い河原に出る。至近距離に曲阿加吉瑪峰が現れる。標高四八〇〇㍍のところにBCを設営する。

八月七―八日、登攀ルート偵察。南稜班と北稜班の二手に分かれて行動する。

八月九―十日、C1設営。南稜ルートを断念し北稜の偵察を続行。C1への荷上げ。偵察隊は岩壁の基部（五六〇〇㍍）でビバークし、北峰ルンゼをルートにとる。クロアールは硬く氷結しているが、解け出すと落石が多くなり危険なのでクラックに入り、右手の岩稜を登攀する。岩は脆い。穂高の滝谷のような雰囲気である。I峰への最後の登りはかなりきつそうである。時間切れで引き返す。

八月十一―十三日、C1上部偵察、II峰北稜の登攀ルート偵察、C2設営。時間の制約上、I峰を断念し、II峰の登頂に集中する。吹雪の中、I峰とII峰の鞍部（五六五〇㍍）にC2を建設し、II峰へのルート工作をする。

八月十四日、II峰登頂。新雪が積もり、ベルグラがはり条件が悪い。岩と雪の七ピッチ（III－V級）の登攀で頂稜に達した。別働隊がこの日のうちにC1、C2をBCに撤収。

八月十五日、BC―賽月拉。

慣れない馬にてこずる。

八月十六―二十三日、賽月拉―雑多―玉樹―西寧―蘭州―上海―成田―長岡。

最高峰を断念せざるを得なかったことは、遠征隊にとっては断腸の思いだったろう。しかし、目玉商品を残しておいてくれたと考えたい。東南チベットの「深い浸食の国」の雪山ほどの吸引力は無いが、メコン川源流域も最高峰は未登であり、氷河が発達しているであろう知られざる無垢の山々が、未踏の地に思いを馳せる登山家や冒険家を待っているフィールドである。「西部大開発」という国家的事業のうねりに洗われ、急ピッチで現代化が進んでいる中国南西辺境であるが、一歩奥へ入れば、まだまだ探検家や好奇心旺盛な旅行者を惹きつける未知の世界が残されている。実践家にとってだけでなく、探検史をひもとくアームチェアー・トラベラーにとっても楽しめる土地である。

終わりに、快く貴重な情報と資料をご提供してくれた新潟県山岳協会会長の藤井信氏、ならびに、東京農大農友会探検部の北村昌之氏に重ねて感謝の意を表したい。

【追　記】

メコン川水源の確定については海外向けの英文誌第1号“Japanese Alpine News, Vol. 1 October 2001”でも紹介したが、『山岳』の原稿が書き終わり、校正の段階で中国側の新しい論考を載せた資料が手に入った。中国科学院地理学・資源研究所編纂『地理研究』（第二〇巻、第二期、二〇〇一年五月）に掲載された「瀾滄江（メコン川）源流とその水源の再確定」（周長進、関志華）である。新しい事実を書いているわけではないが、中国科学院として一九九九年までの探査・調査・研究を総括し正しい水源と源頭を再確定している。一九九九年の徳祥隊の記録が国家機関の認定を受け、これでメコン源流問題は解決したと考えてよいだろう。ただ残念なことは、東京農大の一九九四年の成果が一九九九年の土台になっているにもかかわらず、中国科学院はそのことを積極的には評価をしていないことである。私はこの論文を全文英訳し、コメントを付けてピート・ウィン氏に送った。同氏は彼なりに一九九四年以降の事実関係を整理して十月に英国の王立地理学会に手紙を出した。反応が楽しみである。

参考文献

- Gill, William; THE RIVER OF GOLDEN SAND, 1883 London
- Fernand, Grenard; TIBET: THE COUNTRY AND ITS INHABITANTS, 1904 London
- Osborne, Milton; RIVER ROAD TO CHINA, THE MEKONG RIVER EXPEDITION 1866-73, 1975 London
- Peissel, Michel; THE LAST BARBARIANS, THE DIS-

COVERY OF THE SOURCE OF THE MEKONG IN TIBET. 1997 New York
・**Rijnhart, Susie Carson**; WITH THE TIBETANS IN TENT AND TEMPLE. 1902 Edinburgh
・The Geographical. April 1995. London
・The Geographical Journal, July 1995. London
・National Geographic, February 1993. Washington, DC
・「关于瀾滄江正源問題」（中国科学院・周長進）『地理研究』一九九五
・中国科学院地理学・資源研究所編「瀾滄江（メコン川）源流とその水源の再確定」（周長進・関志華）『地理研究』第二〇巻、第二期、二〇〇一年五月
・中国科学院自然資源綜合考察委員会報告「瀾滄江正源問題及上、中游水化学」（周長進）一九九五
・「科学家　到瀾滄江正源」『人民日報』一九九四年十一月十四日（新華社北京電）
・「瀾滄江の謎を確認、中日両国の科学者」『中国通信』一九九四年十一月十四日（北京新華社）
・「瀾滄江」中国国家地理雑誌『地理』一九九九年一〇月
・中国科学院自然資源綜合考察委員会報告「瀾滄江（湄公河）正源及其源頭確定」（関志華）二〇〇〇
・『日本・中国合同メコン川源頭探検　一九九四年夏　仮報告書』（東京農大農友会探検部ほか）
・「メコン川の源流を求めて」季刊『民族学』73（東京農大農友会探検部）一九九五夏　国立民族博物館監修
・「メコン川源流の人と自然」『岳人』二〇〇〇年二月号（藤森和則）
・「メコン川源流域の民族と自然」（東京農大農友会探検部）季刊『民族学』75　二〇〇一新春
・新潟県山岳協会『遥かなり　曲阿加吉瑪―一九九七年チアジャジマ峰登山報告書』一九九九

参考地図

・中国人民解放軍総参謀部測量局一：一〇〇、〇〇〇地形図
・中国ランドサット一：五〇〇、〇〇〇衛星撮影地図
・青蔵高原山峰図一：二、五〇〇、〇〇〇
・旧ソ連製一：二〇〇、〇〇〇、一：一、〇〇〇、〇〇〇地形図
・米国AMS一：一、〇〇〇、〇〇〇
・米国TPC一：五〇〇、〇〇〇（Defense Mapping Agency）

『山岳』は、一九〇六年四月に第一年第一号が発行されて以来九十六年、あと数年で創刊百年を迎える。その間、わが国の登山および登山文化の形成・発展に大きく貢献してきた。これも、機関誌『山岳』の発行に燃えるような情熱を注いだ本会の発起人の尽力、彼等に引き続いて編集に携わった会員の惜しみない努力、そして執筆を引き受けた有名・無名の会員の無私の協力があればこその賜物である。それは本会が会をあげて作り上げてきた、誇るべき財産である。しかし、現在それらを入手しようとしてもそれは必ずしも容易ではない。『山岳』に掲載された記事は、その後著者の全集等に収録されていて容易に入手できるものがあるものの、一方では登山史上貴重な記録であっても、当時の『山岳』を入手しなければ読むことができない記事も少なくない。そこで、今号からそうした記事を誌面に再録していくこととした。その最初として、今号では第一年第三号に掲載された「駿州田代山奥横断記」を採り上げることとした。著者の荻野音松についても知る人は少ないであろうから、『山岳』第三年第三号に小島烏水が寄せた荻野音松の追悼文を合わせて掲載することとした。なお、いずれも明治時代の文章であり、原文のままでは読みにくいと思われるので、漢字は新字体に、仮名遣いは新仮名遣いに改めたが、文体については極力元のままとした。また、今日の人権意識に照らして不適当と思われる語句については、時代背景と作品の価値にかんがみ、そのままとした。

〔『山岳』編集委員会〕

△『山岳』第1年第3号から再録▽

駿州田代山奥横断記

荻野音松

東海第一の険流たる大井川の元をなせる田代川の水源発する所、駿州の地深く甲信両国の間に突入し、信界赤石の雄峯と甲境白峰の峻嶺とが背中合わせに聳えし辺りは、誠に山また山、谷また谷の奥深く、人寰遠く脱したる霊域にして、まさにその信、飛、越境上崇嶽険山相集まる間、黒部川上流一帯の地と南北相対して、中央大山系の二大絶境と称すべし。しかも黒部川上流の地は東西十里、南北二十里、立山温泉浴屋の外、人家を見ざる深山幽谷として夙に世に現れ、これを横断する針の木峠越えもまた帝国無二の険路として人口に膾炙せるところなるにかかわらず、この駿州田代川上流一帯、余の所謂田代山奥にいたりては、そのあまりに僻陬にして、しかも付近に登客の足繁き名山を有せず（赤石、白峰ようやく登山家の目標たらんとするも登者なお甚だ稀）したがって未だ多く世人の注意を惹くところとならず、余の鮮聞寡見な

る、未だかつてこれを横絶したるものあるを聞かざるは勿論、これに関し何等記述せしものあるを知らざるなり。余も初めこの地の山谷そのあまりに深幽なるに所詮これを通過する道等あるべしとも思わず、これが横断等未だなかなか考え及ばざりしに、たまたま高頭式氏の日本山嶽志を繙きその六六九頁、小島烏水氏が赤石山について増補せる記文中「…、これより大河原よりの登山道を詳記せん。村より小渋川の右岸に沿うこと約二十町にして上蔵に到る（ここより峰伝いにて、甲州切石を経、鰍沢方面に行く間道ありという）これより爪先上がりとなり、…」とあるを見るに及び駭目しておもえらく、ここにまた道ありしかと。この六号活字一行有余の単簡なる注意こそ、余をしてこの秘密蔵を開くに至らしめし鍵とはなりしなれ。即ち地図を検ずるに、農商務省地質調査所二十万の一地形図「富士」図幅によるに、甲州南巨摩郡新倉の北方より一細径の西北に分枝せるあり、道半ばにして「富士」図幅は尽き、「甲府」図幅を見るに、この道の続き記載なし。されど恰もその方向に当たりて甲駿境上「デンツク」嶺（一八四〇㍍）なるものの記されしを見る。よって按ずるに信州上蔵より甲州に至る間道とは、即ちこのデンツク嶺を越えて新倉に出ずるにあらざるなきかと、ここに大体の道順を想像することを得て、遊意鬱勃として湧き、遂に本年（明治三十九年）夏期登山行の番組中に田代山奥横断を加うるに至りたり。

八月二十二日東京出発。余はまず関東山系第一の高嶺たる国司岳に志し、飯田町より汽車にて甲州塩山に至り、それより秩父往還に当たれる川浦温泉に赴き、これより国司岳を征して目的を達す。国司岳より峰伝いに奥仙丈山を経て金峰山顛を窮め、二十七日御岳に下山す。二十九日御岳を発し、新道をとり甲府に出で、馬車にて鰍沢に至る。余の最初の計画はこれより白峰に登り、然る後田代山奥を横断し、最後に赤石を窮めんとするにありて、まず鰍沢より西七里を隔てたる西山村湯島温泉に赴かんと定めたり。

三十日、鰍沢の旅舎粉奈屋を発し湯島に向かう。鰍沢より西一里にして日蓮宗の一名刹妙法寺を過ぎ、これより峠にかかり、森林を穿ちやがて矢川の部落を過ぐれば道いよいよ登る。この日鰍沢の出発遅かりしため、時まさに亭午、樹林尽きて烈日直射しその熱暑に苦しみつつ、午後一時半ようやく峠を登りつむれば一茶店あり。俚称「デチョウ」の茶屋といい、名物粟の水飴等を売りげり。東望すれば甲府の平原遠く展開し、脚下鰍沢の人家櫛比するを俯瞰し、天半巍然たる富嶽を仰ぎ風景甚だ長閑なれども、西を望めば気味悪き山々相重畳して境ようやく幽ならんとす。余の客路はその中にあり。鰍沢よりここまで三里くらいに過ぎざれども、本日余は心身の疲憊きわめて甚だしく、これより湯島温泉まで四里にして

人家全くなしというに、日没までに温泉まで行き得べきやを気遣い、遂に茶店に頼みてこの日はここに一泊することとなりき。翌三十一日、午前七時半茶店を発す。山仕事の人夫や湯島温泉帰りの浴客に会うこと多し。谷を巡り山を越え細径足指なお仰ぎつつ、茶店より二里ばかりにして一嶺上に達すれば、眼界やや開けて西南に危峰磊々たる一雄嶺を望み、風色ようやく豪壮荒涼たり。ここにて道二つに分かれ、いずれを取るも可なる趣にて、余は左を取りしがこれは元来下湯島道なれば温泉に行くには迂路なりしやも知れず。これより道はひた下りに下る。渓声ようやく近づきて道また二つに分かれ、左は下湯島に通ず。即ち右を取りて行けばやがて早川の流れを脚下千仞の谷底に臨み、その左岸下湯島一簇の人家を俯瞰す。これより早川を左に見て進めばやがて川の対岸に上湯島の部落を望む。なお行くこととしばらくにして午後一時半湯島温泉に達したり。

この時余は白峰登山に意ありたれば温泉に立ち寄らず、さらに北一里にして奈良田に至りぬ。然るに奈良田の思いの他なる見るもいぶせき寒村にて、木賃宿の看板掲げし家は数軒あれども、これは木材切り出し等のため入込みし人夫等が普通の民家に止宿せるその百姓家が、無鑑札にてはと申し訳に看板掲げしまでにて、所詮宿屋と称し得べきものにあらざるに、余はまず少なからず閉口せり。しかも翻って考えるに暑中休暇はもはや十日ばかりを残すのみ。この間に白峰に登り、田代山奥を横断し、赤石山までを窮めんとは、あまりに欲深き希望、とうてい不可能のことと悟り、遂に本年は白峰登山を放棄しこれより直ちに田代山奥横断に向かうことに決心するに至りたり。さらば奈良田等には用はなしとて引き返して湯島温泉に泊まる。

九月一日、二日天気定まらず時に雨降り、かつ余は頃日来元気甚だ振るわず暫時静養を欲し、両日温泉に滞留す。温泉場は早川に注ぐ一渓間にありて風色甚だ雅閑なり。新湯、旧湯の二浴舎と、浴客の求めに応じて蕎麦等を調進する店一つあるのみ。浴舎は三階作りにして規模相当に大きく、風趣すべて乗鞍岳麓白骨温泉に似てやや劣る如し。余は新湯に湯せしがこれは蓬莱湯と称し旧湯より二町ばかりの上にあり、温泉は新旧各別の湯口を擁し、温度は少し低けれども火力を加うるほどにもあらず。この地は甲州西部の名湯にて夏期浴客群集し、三、四日前までは浴客充満、部屋に溢れしも、今あたかも旧盆に際し浴客多く家に帰り、余は一人にて悠々眺望に富める一室を占領することを得甚だ幸福なりき。この地郵便箱は旧湯の入り口にあり（奈良田には郵便箱もなし）、郵便局は南五里ばかりなる保にありて、保に至るまではまた旅店なしという。旅店の設備少なきはこの辺りの山谷に分け入るもののまず苦しむところならん。

さて余はいよいよこれより田代山奥を横断して信州へ出んとしたれども、この道を想像する唯一の根拠として、余はただ前記小島氏の一行余りの記文と農商務省二十万分の一地図とを有するのみ。果たしてこれが実際行き得るものなりや否やこれまで人にも尋ねしも所詮知るもの絶えてなく、さらに探検の手掛かりを得ず茫然行くところを知らざりしが、ちょうどこの新湯の若主人に尋ねしに、この南一里の下湯島に大村晃平という猟夫あり、外人の白峰農鳥山等に来るものある時は彼を導き雇うを例とす、信州越えの行き得るや否やもこの男にてもなければ他に謀るべきものなしという。余はようやく暗中一点光を認め得し心地し、即ち二日の朝郵便脚夫の来たりしをとらえ、宿屋よりこれに手紙を託し大村晃平を呼び寄せたり。やがて午後晃平は来りぬ。即ちこれを余の部屋に引きて尋ねしに果然彼は道を知りおり、早速導に任ずべきを諾し成算ここに確立せり。晃平の他、下湯島には中村宗平といえる猟夫あり。新倉にはまた望月万右衛門とかいえるものありて、ともにこの辺りの山谷に詳委し、甲州より田代山奥横断の導に任じ得るものはわずかにこの二、三人に過ぎずという。晃平の語るところによれば、この田代山奥を横断する道は、明治七、八年の頃、如何なる目的をもってしたるものか、信州大河原の沢戸亀作といえるもの主導となり開鑿したるものなりしが、後一回の修繕をも加えざりしより忽ち荒廃に帰し往来全く絶えしなりという。その針の木峠越えの道は明治九年の新開に係る、中央大山系二大絶境の横貫路が偶然ほとんど同時に開けたる、豈にまた奇ならずや。晃平また説明して、新開当時の道は即ちデンツク峠を越えて新倉に出づるものにありしが、デンツク峠は今荒廃甚だしく通行すべからず。それよりはわが下湯島より新沢峠（当て字）というを過ぎ行くもの道甚だよし。信州大河原までは路程十六、七里くらいならんか、まさに三日を要し途中二回も野臥せざるべからざれどもともに小屋はありと語る。さて日当は幾らばかりを望むやといえば、帰村に要する日数をも加え一日六十銭を賜りたし、ただし荷物は自分一人にて担うは甚だ難儀なれば荷持ちは別に一人雇われたしという。よって余は、余の荷物汝の負うべきものただ風呂敷包み一個重量五、六百匁のみ、これに野臥準備品を加うるも総量四、五貫目にはのぼるまじ、汝一人にて持ち行かずやと交渉し、遂に一日一円の日当を払いて晃平一人にて行くことに談判まとまり、明日天気よければ晃平より迎えものを寄越すこととし、晃平は帰りぬ。

三日、朝曇りしがやがて空模様よく、大村晃平の倅迎えに来たりしより即ち出発に決し、食料その他の必要品は温泉場にて買い求め、これらを晃平の倅に持たせ、八時半温泉を発す。かくて温泉より曩日来たりし道を少しく戻り、右に分かれて早川の岸に下り、やがて針金の釣橋を渡り川の右岸に沿っ

ていく。これより上湯島を経、村立尋常小学校の前を過ぎ、再び早川を渡れば即ち下湯島なり。人家なかなか多く、家造りもちょっと小奇麗なり。九時四十分大村晃平の家に至り、さて鍋、毛布等は晃平をして用意せしめ、かくて準備なりて十時十分出発、いよいよ田代山奥横断の途に上る。

下湯島より直ちに一危橋によりて早川を渡る。これより西に当たり屏風の如く連なり立てる峰嶺の絶頂めがけてひた登りに登るなり。初めは粟畑等ありしがやがて樹林となる。あたかも山上暗雲冥濛まさに夕立の来たらんとする状をあらわしたるにおおいに逡巡し、一旦下湯島へ引き返さんとしたるほどなりしも、幸いにして空模様はようやく回復せり。かくて早川に入る一小渓、沢河原（当て字）といえるを越えてその右岸に出で、これより坂路甚だ急、曲折幾十回、幾度か路傍に休みゆるやかに行を続けしが、やがて山腹一帯蕎麦の花白く咲けるところを過ぎ、また樹林に入り、十一時一小祠のあるところに達す。この辺りを蜻蛉尾根（当て字）と称す。晃平の倅荷物を負いこれまで送り来りしがここにて辞し別れて帰る。これより晃平自ら荷物を背負うていく。彼はまた小さけれども黒く逞しき一匹の猟犬を携えたり。すでにして沢河原の渓の上方に出でまた樹林を穿ちて登り行く。たまたま南方に上部雲に蔽われたる一高嶺を望みしが、晃平はこれ七面山なりといえり。かくして午後一時半坂道をのぼりつめ、眼界浩然として北に開けしところに出ず。早川の上流蜿蜒として群巒相迫れる間を貫けるを望見し思わず快哉を叫ばしめたり。これより木材運搬のために造られし道をとりて行く。道幅四、五尺にして薪のごとき木を二、三尺おきくらいに鉄道の枕木のごとく敷設せり。これは木馬とて橇の如く梯子の如き形したるものに木材を四尺ほどに切りたるを積み載せ、この上を曳き下ろすなりという。この道を行くこと数町にしてカザハナといえるところに達し、水もあるに即ちここに弁当を喫す。この地、下湯島より一里半か二里くらいならん。東方富嶽を望み風光やや佳なり。ただしこの日天気晴雲定まらず常に天を睨んで喜憂交々至る。蓋し日本内地の深山窮谷猛獣の害の如きほとんどこれを度外視して可、恐るるところは只天候あるのみ。

この辺りは昨年中製紙原料の木材を切り出すため三、四百人の人夫入り込み、その宿泊用のため数多くの小屋建てられたり。されど今はすでに工を止め小屋も荒廃に帰せり。ただしなお極めて少数の人夫は残り居り本日旧盆のことゝて湯島温泉等へ遊びに行くものとこれまで二、三回会したるが、これよりはまず信州に出づるまで人間に会わず。

二時二十分カザハナを発す。この辺り一帯の森林木の数が六万本くらいありとかにて六万平と呼ぶにいたりし由なるが、今は樹木すでに多く伐採せられて満目荒涼を極む。この間を

登ること二、三十分にして嶺上に達す。さては白峰山脈の絶頂に達せしかと喜びしが、白峰山脈はなお遥か彼方に連なりてここはその前壁たるに過ぎざるに大いに失望せり。これより道南に転じ右に早川の一支流たるナメラ河内とかいえる深谷を俯瞰しつつ、所謂木馬道を取りて行くこと暫時、新沢（当て字）と呼ぶ小渓の上に出づ。ここにも荒廃無人の小屋を見る。これより斧鉞未だ入らざる森林に入り、急峻なる山側を登り遂に東西に通ぜる一山背に達す。時に三時四十分なり（この東方の一高地に参謀本部の三角測量櫓ありて眺望よしと聞きしが、前途を急ぎかつあたかも雲霧ありしより探らざりき）。ここは白峰山脈より派出せる一支嶺にして新沢尾根と呼ぶ。これより尾根を伝い森林を穿ちて西行す。この辺りは即ち下湯島より田代川上流に越ゆる峠の絶頂にして即ち新沢峠なり。デンツク峠の北に位し、デンツク峠は地図に一八四〇㍍と記載せるが、この新沢峠も大抵同じくらいの高さなるべし。かくて四時十五分尾根尽きて道はまさに下らんとす。ここそ即ち甲駿の国境にして白峰山脈の本嶺南北に貫通するところ、カザハナを隔たる一里または一里半くらいならん。樹林より窺うに脚下の谷底微かに響きをなせるは即ち田代川の上渓にして、谷の彼方天柱稜々として高く雲表に聳えしは即ち赤石山脈の一嶺（晃平は千枚沢の岳とかいえり）なり。寂莫太古の如き田代山奥一帯の非人寰区は即ち眼前に迫れるなり。今や余は足一歩をこの絶境に踏み入れて意気大いに昂れり。

これより谷底めがけて道急峻削るが如し。膝の関節痛めつつひた下りに下れば、やがて右に千仞の一深壑を俯瞰す。これをザカ沢という。前方赤石山脈の連峭はいよいよ高く天を刺し、時は五時を過ぎたるばかりなれども日はまさに山の端に隠れんとす。かくて大いに道を急ぎ渓声次第に近づき、遂に坂路下り尽くして五時二十分ザカ沢を渡る。その新倉よりデンツク峠を越ゆるの道はここにて相合するなりという。これより道甚だ荒廃し草木茂りて道を埋めしを押し分け掻き分け、またザカ沢を渡ること二回にしてその右岸にある小屋に達す。時に五時四十五分、今夜はここに泊することとす。この小屋はザカ沢の小屋と称し新沢峠より一里か一里半くらいならん。湯島温泉よりちょうど一日程なり。新倉よりデンツク峠を越ゆる道果たしてしかく荒廃せるや否やは知らざれども、とにかくこの新沢峠には立派に道あり、要するに本日のところはなお易々たり。明日が最も難険を極むべしと戒心を怠らざりき。

ザカ沢はこれより半町ばかりにして、北方白峰の方に発源せる東股川（当て字）に入り、東股川はさらに南走すること一里ばかりにして、赤石山脈中の一峰、間ノ岳の南方に発源せる西股川（当て字）と合し、ここに田代川となり下流は遂

に大井川となる。而して間ノ岳この東股、西股両川の間に一山脈を派出し両川合流点に尽く。当に間ノ山脈と称すべし。ここに疑問なるは東股、西股いずれを田代川の本流となすべきかにあり（水量は西股の方大なり）。参謀本部二十万分の一図はこの行始めより全然用をなさざりしが、比較的最も精確なる農商務省二十万分の一図もここに及んでまた為すなきに至れり。

かくて余等はザカ沢の小屋に宿泊の準備を始めしが、晃平は燃材を求むべく出で行き、その間に余はそこらに残れる木を集めて焚火をなすべく命ぜられぬ。従来野臥の経験は幾度もありしも焚火の役等は常に人夫に任じ余は拱手傍観したるのみ、いま燐寸を握りて火を作らんとするになかなか燃えつかず、好みてかかる深山の探検を企つるほどのものが、焚火一つ出来ぬとありては末代の恥辱と余は冷汗背を湿し、経営惨憺火のわずかに燃え上がりし時晃平は帰り来たり、あやうく油を取らるるところなりき。この地峻嶺四囲に近くあたかも甕の底にあるが如く、小屋は一間半四方ばかりにして屋根は板にて葺き、枯枝等を蔽いて壁とせり。床は張りてなく藁等を敷く。晃平等が年々猟等に来たりて泊するものにて多少の器物も具えあり、通り一遍の輩に荒らされおらざれば居心地甚だよし。この夜少しく雨ありしも忽ち止む。晃平をして携えしめし薄き一枚の毛布にくるまりて寝に就きしが、寒気甚だしくしてほとんど眠る能わざりき。

四日、わずかにまどろみし夢覚めて、頭をもたげ屋外を見れば月皓皓と壑底を照らし風光凄涼を極む。午前五時起き出でやがて朝餐を済まし、六時四十五分小屋を発す。一天拭うが如く晴れたれども、昨日の空模様に比し天気あまり良過ぎて却って薄気味悪かりき。

ザカ沢に沿いて下る。東股の河原連なれるところに出で、川に沿いて上ること一町ばかりにして東股を渡渉す。川幅七、八間、深さは膝の上に及ぶばかりなりしが、朝なお早ければ寒流氷の如くほとんど両脚の感覚を失わんとするほどなりき。晃平の携えたる猟犬は河岸を行きつ戻りつためらいしが、やがて川中に飛び入り流され流れて渡り来しは甚だしおらしき見物なりき。さらに川に沿うて上ること二町ばかり、これより川岸を離れて西なる間ノ山脈に分け登る。新沢峠を越えてザカ沢の小屋に至るまでの道は、猟夫等の往来のため古来存せし由なるが、ザカ沢以西は明治七、八年頃初めて新開せられ今荒廃に帰したるものなり。ただし道はただ細く雑草の生い茂れるまでにして、熊笹や荊棘の道を埋むるものあるにあらざれば、さほどには苦しまず。ただ薊の葉端鋭鉾を尖らして要撃するに会うこと甚だ多し。即ち着莫座を前に回して盾に代用しこれを押しのけ進み行く。一帯樹林鬱葱眺望なく、わずかに折々樹間より山高く連なり、谷深く通ぜるを望むの

み。かくて道はやや南に向かい間ノ山脈の東腹を穿ちて登りしが、ザカ沢の小屋より一里ばかりにして道登り尽くし、山脈尽くるところを巡る。時に八時半。これより道は間ノ山脈の西腹を穿ちてやや北に向かう。左方千仞の脚下には即ち潺湲たる西俣の渓声を聞き、道は或いは立派にあるところもあれば、また甚だ荒廃せるところもあり、すでに登りはなきも道凸凸、ゆるやかに歩を進めたり。ちょうど樹間より谷を越えて赤石山脈中に秀げたる一雄峰を望む。この山何というと晃平に問えば、この山より出づる渓流の西股に注ぐもの甚だ険悪なればこれを悪沢と呼び、この山即ち悪沢岳というなりと答えしは、すこぶる口から出任せの言いぐさに似たり。すべてこの辺りの山名、川名、地名等何ら徴すべき図書あるなく、これを知る人とてもさらになく、余はただ大村晃平一人より聞くがままにここに記したれど、あるいは誤謬もあるべく、また別に定まりたる称呼なく各自勝手の名を付せるもあるべし。

九時十分一地点に休憩す。晃平曰く、これより暫く行けば西股左岸にある柳島（当て字）の小屋といえる岩窟に出づるなるが、そこに至るに道二筋あり。一つはこれよりなお山腹を穿ちて進み柳島の二、三町手前にて西股河岸に下りるもの、一つはこれより直ちに西股河岸に下り河原に沿うて行くものなり。山腹道を取らんか、これより先は道荒廃甚だしく荊棘茂れる等の難もあらん。しかも河原道を取るとすれば、柳島までに川を渡渉すること四回ばかり、そのうち二回ほどは両岸迫り峙ち水また頗る深きところを越えざるべからず。いずれを取るべきかと余の選択に一任せり。余は暫く沈吟したりしが遂に山腹道を取るに決す。蓋し余は激流渡渉の初経験、かつて針の木峠を越えし折、黒部川渡渉の際急湍に足奪われて中流に転倒したることあり。爾来怖気づきたりというわけにはあらざれども、常に激流渡渉の難を思えるなりき。

かくて山腹道を取りて行を続けたりしが、果然これよりは道荒廃甚だしく、やがて山崩れ欠け大岩小石磊々として所謂石の滝ともいうようなる所を横過す。これを大ナギと称す。これより最も険悪を極め、即ち山、西股川に臨みて多く懸崖をなせるを穿ち行くものにて、前後幾回となく桟道を架す。しかもその桟道すでに腐朽して用をなさざるものあり、即ち危うき崖腹木の根、岩角に縋り、わずかにこれを横過するが如きところ少なからず、かつ草木茂りて道を塞ぎ跋渉の難危いうべからず。蓋し田代山奥横断中第一の難所と称すべし。思うにこの辺りの道は年々荒廃に帰すること甚だしく、昨年はありし桟道の本年はすでに落ちて渡るべからざるが如きあり。後には遂に通行する能わざるに至ることあるべく、然る時は危険なる激湍渡渉の難ありとも河原道を取らざるを得ざるに至るべし。かくて十一時、これより先は山腹道は到底進

むべからずというに至り、即ち山側を直下して西股川の河原に下りる。

西股の流れは川幅七、八間、河原はこの辺り広さ一町以上に連なり、今まで陰鬱なる樹林のみを穿ちし身は、ここに至り眼界濶然として心気爽快を覚えたり。この辺りは即ち田代山奥絶境の中心にして、澗底にありては嵯峨天に沖する赤石山脈や白峰山脈は近き支峰に遮られて眼眸に入らず。来て見れば別段変わりし風景というにはあらざれども、流石に天地関としてなんとなく人間界を脱せる幽玄の気象身に迫るを覚ゆ。思うに雄大の眺望豪宕の景趣はこれを高山の頂に求むべし。しかも廓寥神代の如き幽静の風象に至りてはこれを絶谷の澗底に求めざるべからず。

この時宗平は携えたる釣竿を川に垂れ、余は分かれて先に行き河原を辿ること二町ばかりにして柳島の岩小屋に達す。時に十一時半、ザカ沢の小屋より三里くらいならんか。この小屋は西股川の左岸にあり、一枚岩の自然に抉れて棚の如くなりしもの、口は枯れ枝等にて蔽い、内には三畳敷きばかりの平地あり。完全なる岩窟にしていかなる大雨にも驚くまじく見えたるが、ここは進むにも退くにも難場あればこの地に泊するは安心ならざるべし。やがて晃平は岩魚五尾を得て来着せり。余はまた焚火の役に当たりしが今度は忽ち燃やしつけ、焚火学一年級は修業し得たりと誇る。かくて得たる岩魚を塩焼きとし米を炊きて昼餐す。山中の美味これにすぐるものなし。

一時十分岩小屋を発す。これよりまた河原の乱石を伝って進めば、やがて左に深刻なる一渓谷あり。口元暗く奥の方かえって明るく、みるからにもの凄まじく名づけて蛇抜の沢という。なにさま大蛇等の抜け出でし跡が谷となりたりといいそうなる所なり。また行けば右に一小渓あり。これをマサゴ沢と称し、新開当時の道路はここまで山腹を穿ちて来たりここにて河原に下りたるなりという。これより少しく上流において西股川を渡りてその右岸に出づ。水深腿に及びてやや渡渉に苦しみたり。なお河原を行けば左にまた蛇抜の沢に似たる一深渓に会す。これを西の広作沢（当て字）といい、これより北に見ゆる東の広作沢と相対す。この西の広作沢は一昨年のことなとか、渓水氾濫して夥しく土砂を押し出し来たり、西股の川水を堰き止めここに長さ一町、幅半町ばかりの池を貯留し、荒蕩たる絶谷の中、時ならぬ風景を作れり。晃平はまた釣竿を垂れしも獲るところなし。二時五十分ここを発し、川岸の密林中に入れば昨年発見せしという岩窟あり。これを過ぎてあるいは危なき絶崖を越え、あるいは細径例の薊と闘い、遂にまた河原に出で河原を行く。谷の幅は半町くらいにして、山緑に水清く、余等は今やすでに田代山奥の中心点を過ぎ、これよりは暫次人間界に近づきつつ行くなりと思えば

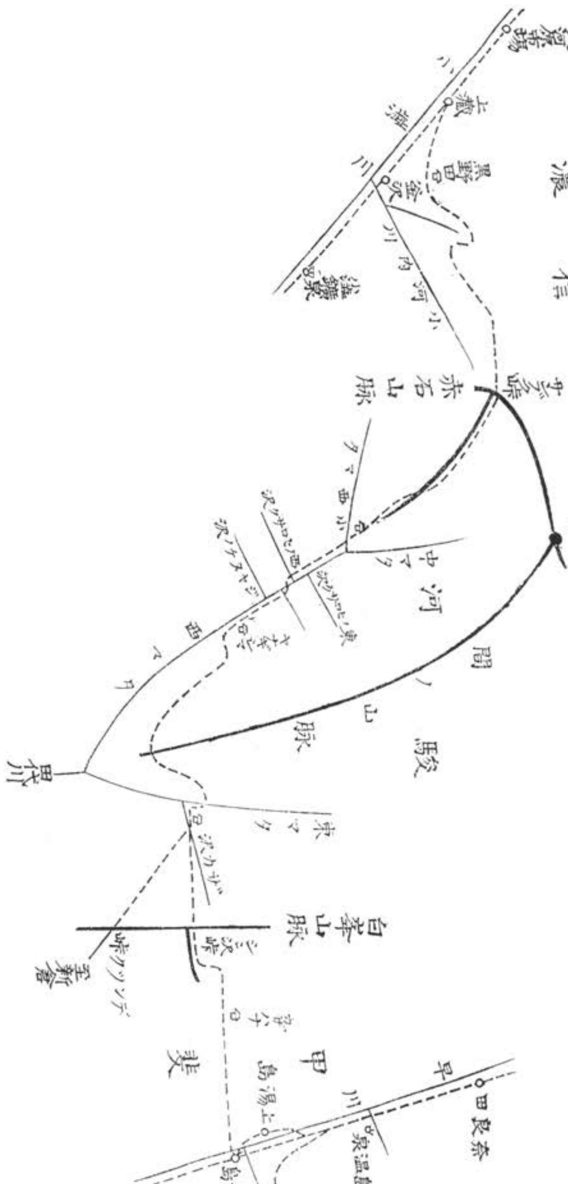
甚だ心賑やかにて、行く手の山々も笑いを含んで余等を迎うるものの如く、今夜宿るべき小屋も遠からず、日はなお高く天気もよきに悠々程を拾いつつ、晃平はまた行く行く釣竿を川に垂れ、頗る暢気の旅となりたりき。かくて川は二つに分かる。北より来るは中股川（当て字）と称しその上流に当たりて間ノ岳の尖頭を仰ぎ、西より来るは即ち西股川の本谷にして、これより上流は小西股川と呼ぶという。ここにて小西股川を渡渉す。水深膝の辺りに及ぶばかりなり。川をへだたる半町ばかり河原の一端に小屋あり。即ち今夜はここに泊することとす。時に四時を過ぐること六分。この地、柳島の岩小屋より二里と称すれど近かるべし。ザカ沢より一日程にして余裕あり。

この小屋は小西股の小屋と称し、昨夜のザカ沢の小屋と同じ構造にして、大きさは一間四方くらいにて甚だ小さく、余と晃平と二人だけなればちょうどよかりしも、三人泊まればちと窮屈ならん。信州の岩魚釣りが来たりしと見え、魚を刺す串等たくさんありき。この夜月あり、天気だによければ夜臥もまた甚だ愉快なるものあり。

蓋し信州人はこの小西股の小屋までは来るものあれども、これより以東を知れるものほとんど稀に、甲州人は大村晃平のこの辺りの山谷に詳委すと称するも、これより以東に精通するばかりにて、小西股以西即ち明日行かんとする道は七年前に越えたることあるのみなりという。されど小西股以西信州大河原に至る間は、一回も激流の渡渉あるにあらず、河原を行くところあるにあらず、一筋道にて比較的分かり易ければ、七年ぶりの晃平もなお誤りなきを得たるも、小西股以東昨今両日越え来しところは道頗る錯雑しおれば、充分これに精通せしものならざれば導に任ずること危うし。さればこの田代山奥横断は、信州よりするに比較的不便なるの事実あらん。後に聞けば頃日も赤石山へ来たりし一登山客にして、信州大河原よりこの道を越えて甲州に出でんことを企てし人ありしが、導を得る能わずして止みたりといえり。

五日、半夜夢破れしに月朧に小屋を覗き、焚火また漸く微かなり。即ち火を盛んにしたれどもほとんど眠られず、遂に四時起き出づ。今日はいよいよ人間界に出づるかと甚だ愉快なり。空も快く晴れたり。この行天候の順なりしは代え難き幸福なりき。

六時小屋を発す。晃平は本日大河原に至り、明日またこの地に引き返すなれば、毛布、鍋等はここに残し、身軽になりて出で立つ。かくして小屋より直ちに背後の山に分け登る。この山は即ち赤石山脈より派出せる一支嶺にして、中股と小西股とを分かてるものなり。急峻なれども道は明らかにあり、相変わらず樹林鬱葱たる内を緩やかに登り、七時半頃山脊に達し、これより山脊に沿うて緩慢に登り行く。樹間より望む


信濃
赤石山脈
間ノ岳
河
間ノ山脈
駿
白峯山脈
甲斐
奈良田
湯島温泉
上湯島
下湯島
至鰍沢
至新倉
早川
田代川
西マタ
東マタ
中マタ
小河内川
大河原

に、左は小西股の深渓、これを越えて赤石山脈中の一峰（晃平は西河内とかいえり）高く霄漢を摩して聳え、右は中股の絶谷、これを隔てて間ノ岳魏峨として天空に踊らんとす。顧みれば間ノ岳より派出したる所謂間ノ山脈は、山勢漸々東南に低下し、これを越えて白峰山脈（白峰は見えず）相連なり、窈冥なる一帯の深谷、わずかに囲みを破って逃れんとす。深山また深山、幽谷また幽谷、実に天下の絶境とこそ知られたり。

晃平の携えたる猟犬は、後になり、先になり馳せていく。この辺り猟の獲物は何が主なりやと晃平に問えば、青鹿なりという。如何にして獲るやといえば、まず犬を放つなり。犬はやがて鹿を駆り出し、これを追いかけ追いまわしてついに岩窟に追いつめ、両者睨み合い、犬は盛んに吠え立てて時を移す。そのうち自分は鉄砲を担ぎて犬の後を追い、捜し求めてその吠え声を聞きつけ、これに達して鹿を射止めるなりと語りぬ。

かくて道は最初は甚だよかりしが、しばらく登ればやがて非常に荒廃し来たり。榛莽茂れる間を押し分け掻き分け進み行く。跋渉甚だ困難を極めたり。而して右には常に間ノ岳を望み、山容登るにしたがっていよいよ雄大豪壮を極め、赤禿げの円顱、左右に両肩を張り、近く谷の彼方にそばだちて呼べば応えんばかり、常に沿道唯一の偉観たり。あたかも後方を顧みしに雲間富士の嶺頭を認め、思わず快哉を叫ばしめたり。道はすでにややよく、余等はひたすら前途を急ぎて次第に登り行きたりしが、行けども行けども容易に峠の頂上に達せず。意外に道の遠きを嘆じたり。蓋しこの田代山奥横断はこれを針の木峠越えに比すれば、路程長く困難なれども、道はかえって比較的単調なるを覚えたりき。かくてようやく山を登りつめ一山肩を越ゆ。ここが峠の絶頂ならんといちずに思いつめしに、来て見ればなお前方に山嶺連なりてさらにこれを越えざるべからざるに、失望落胆ほとんど歩く勇気を失いたり。天また大いに雲霧を発し甚だ心細し。とかくして行を続けしが、半時間程にしてようやく峠の頂上に辿り着く。時に十一時半、小西股の小屋を隔たる三、四里ならんか。峠の頂上というも山尖らずやや平地あり。なんとなく陰湿にして快からず。一帯森林なるが左方の高地樹木なき所あり。即ちここに登り弁当を喫せしが、雲霧のためやはりほとんど眺望をほしいままにすること能わざりき。

この辺り即ち信駿の国境にして赤石山脈の枢軸走るところなり。南方脚下より削りなしたる凄まじき深壑は信州小河内の上渓なるべく、間ノ岳はほとんど東に当たりて濛霧のなか薄くその豪容を望み、南方赤石山の方雲間時に重畳せる群嶺を隠見せり。そもそもこの峠は何というやと尋ねしに晃平はサンブク峠と答えたり。余は仮に三伏峠の字をあておくべし。

海抜高距は如何ばかりなるべきや不明なれども、とにかく八千尺は確かなるべしと思わる。ああ飛騨山脈針の木峠豈にひとり天下無比の険路たる称をほしいままにするを許さんや。赤石山脈わが三伏峠あり。余は今この嶺頭に立ち、冷々たる天風に嘯き田代山奥横断の功程またここに至りて窮まりぬ。

十二時三十分、三伏峠を発しいよいよ信州大河原に向けて下る。山は相変わらず樹林森々、道は初め山脊に沿いて甚だ急峻、左右に深渓あり。右は恐らく鹿塩谷、左は即ち小河内谷なるべし。あたかも雲霧やや晴れ眼界遠く展開し、駒ヶ岳山脈及び天竜川一帯の平地を遠く望み、鹿塩谷の方に当たり、山脚遥かに一簇の人家を認めし時は、いまこそ久しぶりにて人間界に出でしなれと、覚えず雀躍歓呼を禁じ得ざりき。かくて前途を急ぎて次第に下りしに、道は悪き所もあれども大抵立派に通じ、またさまで急にもあらざりしが、やがて一時四十分尾根を越えて小河内谷の方に向けて西南に下り行くに及び、道は漸く荒廃し、樹木多く路上に倒れ榛莽荊棘の茂れる間を分け進む。余は始め小西股、大河原間五里余と聞きしより、大抵二時か三時ころまでには大河原に着し得べしと予想せしに、七、八里あるように思われて道甚だ遠く、未だ容易に人家あるところへ出でそうもなきに、少なからず気を苛立ちしも、道はなかなか捗らず。しかも余は田代山奥の難境無事これを通過し、まさに功を終わらんとするに張り詰めし気も緩みしか勢いさらになく、大村晃平も信州に入りてよりは地理に暗くまた語るべからず。かくて次第に下りしが、やがて路傍屋根板を切り出せるを積みあるを見、人里すでに近づきぬと快を叫ぶ。この辺りより道また漸くよく、二時四十分一大渓の行く手に横たわるに会す。これ即ち小河内谷の一渓にして、渓の口元に当たり一簇の人家あるを見、いよいよ人里に出でぬと喜べり。これ恐らくは釜沢ならん。而してこれより道は渓を隔てし彼方の山腹に通じ、即ちこれより渓の尽くる上方を迂回し行くものにて、これ実に非常の大迂回、全速力一時間以上を費やしぬ。

途中小屋ありしも人居らざりしが、やがて右の山腹に甲州以来始めて人影を見る。顧みれば余等のいままで過ぎ来しところ、山嶺重畳して見るからに物凄くよくも越えたりと思うばかりなり。かくて釜沢の人家を左の谷底に望みしが、ここには下らず直ちに上蔵に向かう。山はしだいに開け、道は山腹を穿ち、四時十分黒野田（当て字）という所に至る。山仕事の人夫等の宿るものにや数多くの小屋ありしも人は居らざりき。これより道はいよいよよく、左には小渋の渓流遠く山また山の間より出で来るを望み、その奥は赤石山なるべきも雲は深く鎖したり。ここに至りて余も晃平も疲弊困憊元気阻喪、山も谷も目に入らずただ道の下るにしたがって茫然足を運ぶのみなりしが、漸く六時少し前、上蔵に達し、ここに再

び俗界の人となれり。上蔵は家造り頗るよく白壁相望みなかなか気のききたる部落なり。案内晃平は明日また引き返して甲州に向かうなれば、遂に一民家を頼みて上蔵に泊することとなり、即ち労を謝して分かれ、余はさらに進んで大河原市場に至り今井旅店に投ず。時に六時四十五分なり。小西股、大河原間一日程には甚だ骨折れたり。大河原市場には、郵便局、尋常高等小学校、巡査駐在所、理髪店等もありて、大都会に出でたるに思えりき。

天下の絶境田代山奥無事これを横断し去り、余に取りては未曾有の成功なりき。大河原に来たりて尋ぬるに、この道新開当時は暫らく措き、一旦荒廃に帰してより二十幾星霜、猟夫等は別とし、通常旅客のこれを越えしもの未だかつてこれあるを聞かず、余を以ってその嚆矢となすにおいて一致し、余の得意は果たして如何ばかりなりしぞや。さりとては世の登山家もまた為すなきかな等、万丈の大気炎を吐きたり。しかしあまり威張り過ぎたる天罰にや、次いで試みたる赤石登山には、今度は未曾有の大失敗をこそ招きけれ。

六日、微雨。七日、大雨。かつ心身休養のため両日大河原に滞留す。八日、一天快晴、即ち諸般の準備を整え、一壮漢を導とし、午前五時大河原出発、赤石山に向かう。上蔵、釜沢を過ぎ、九時小渋温泉に達す。これより片道十八回と聞き及ぶ小渋川の渡渉を始めしが、前日の雨にて増水なお八寸以上、深さ臍の辺りに達したれば渡渉の困難ほとんど名状すべからず。黒部川以来激流渡渉を恐れし身にてありながら、さまでとは思わずしてこの難流に対し何の準備するところなかりしこそ不覚なれ。流さるるに垂んとしてわずかに導者に支えられつつ、ほとんど命懸けの冒険を以って漸く五回の渡渉を終わりしが、ちょうど流れに臨める絶崖を横過せんとして誤りて足滑らし、たちまち河中に墜落せり。ここ幸いにして崖しかく深からざりしより、大怪我もなく流されもせざりしが、衣服、雑嚢を濡れ鼠にしたるはいうまでもなく、左足を挫傷して歩行を難ずるに至り、ここに空しく碧瑠璃の如く晴れ渡りし天を仰ぎて、登山を中止せざるべからざるに至り、天晴器量の一段を下げたりき。かくて踵を巡らして日没大河原に帰る。翌九日、天候また不良に陥り、暑中休暇も尽きんとし、しかも足痛甚だしくほとんど跛曳かぬばかりのありさまにて、所詮登山再挙の望みも絶え、即ちこれより直ちに帰京することと定めたり。

十日、雨天。されど高山登りにあらざる以上、雨中の旅もまた風流と、九時半大河原を発す。足痛昨日よりは快きもなお歩行を難じたれば、なるべく早く車行の便ある地に出でんことを求め、伊那街道飯島に出づることとす。大河原より小渋河に沿ってくだること一里、桶谷に至りこれより枝道に入り（本道は川を渡り飯田方面に至る）、なお川に沿いて凸兀

覚束なき岨路を辿り、桶谷より一里半ばかりにして四徳渡というところに至り、これより小渋川を離れ峠にかかり、暫時にしてこれを上りつむれば数戸の茶店あり。時に午後二時、即ち就いて昼食す。これより西に向かいて下り道となり、山漸々浅く、人家漸々多く遂に峠より一里ばかりにして大草といえるに出づ。それより北して南向村に入り、左折して坂戸橋といえる釣橋によりて天竜川を渡る。暮色漸く蒼然、雨ますます激しく、流石に物悲しき旅となり、かくて本郷を過ぎ与田切川を越え、六時過ぐる頃飯島に着し扇屋といえるに宿る。大河原より六里くらいなるべく、しかく分かりよき道にあらず。

十一日、また雨天。七時過ぎ馬車にて飯島を発し伊那街道を北行す。赤穂、宮田を経て坂下に至る。坂下は即ち伊那町のうちにして、参謀本部二十万分の一図には伊那部と記せるようなり。坂下の名最も人口に膾炙し付近の盛地なり。信州駒ヶ岳伊那方面より登るには宮田（または赤穂）よりすれど、また坂下よりも登り得べきが如し。

余は坂下よりなお馬車に乗り、松島を経て天竜川を渡り、平出に至り再び天竜川を渡れば即ち辰野に達す。辰野は即ち中央東線の停車場ある所。伊那方面に来往する旅客多く吐呑せられ、宿駅甚だ賑わえり。ここに着せしは午後二時、例の田舎の乗合馬車にてしかも雨の中を半日以上揺られたれば、頗る気分を悪しくしたるのみならず、わずかのところにてひと汽車乗り遅れ、空しく二時間余を待たされたり。これより東京へ行くには甲府を経過し行くが当然なれども、来る時と同じ線路に帰るは面白からずと、長野を迂回することとなり、この日は長野に一泊。翌十二日帰京す。連日雨天なお晴れず。返す返す田代山奥横断中天候の順なりしを喜びしが、上蔵より甲州へ引き返したる大村晃平は、途中雨に遇いて如何にせしやと気遣われ、問い合わせの葉書を送りたるに、無事帰村したる旨の返事ありき。

〈『山岳』第3年第3号から再録〉

荻野音松君を憶う

小島烏水

本年七月三十一日、自分は高頭君と、一緒に天竜川下りの舟を下り、東岸の満島という村落に上陸して、田村嘉輔という旅舎に泊まった。そうして友人に七、八枚のハガキを書きなぐって投函した。無論荻野音松君に第一に宛てた。荻野君

が大井川の上流田代山奥を横断せられたのは、自分が『日本山嶽志』の赤石に増補した六号活字一行から思い立ったのだと『山岳』に書かれたことがあるが、実をいうと、自分が荻野氏に負うところは、さらに以上のものがあった。第一に大井川上流に溯って白峰三山に入るに至ったのも、同君のあの紀行文に興味を有したためである。第二に西山温泉を起点としたのも、比較的好案内人をそこで雇い得たのも、皆同氏紀行文によりて教えられたのである。第三にこの田村旅店に投宿したのも、また同君が前号に載せた「天竜川を下る記」のとおりを履行したのである。今回の自分たちの旅行は荻野君の先蹤を踏んだといってもよいほどで、それが幸いに完成に近づこうとしたのだから、自分は愉快で愉快でたまらない。いの一番に君のところへハガキを出した。荻野君がもし在宅せられてあのハガキを読んだら、先年の興を思い起こして会心の笑いを催していられるであろうと思った。なんだか荻野君の会心の笑いが自分の胸まで刹那に反響してくるような気持ちがした。

帰ってからまたハガキを書いて、爾後旅行の経過を報告したが、君はもう旅へ出られたことと直覚で決めているから、格別は返事の来ないのも気に留めていなかった。

するとハガキが来た。表に「音松父荻野勝五郎」とある。なんだかおかしいと思った。ひょいと裏返すと、「倅音松事、二十八日急性脳膜炎にて死去……」。自分は茫然としてしまった。驚愕というほどの弾力などあるものか。あの荻野君が、いま自分の敷いている布団に座ったことのあるあの荻野君が、この部屋で粗末な食事をしながら山の話で夢中になっていた二人、その対手のあの荻野君が……、まあどうして死なれたのであろう。こうなると現実と夢の線が怪しくなって来る。人は一度より多く死ぬことは出来ぬから、自分で自分の死に対面することもしたがって出来ない。しかし親友の死んだときに初めて親友を通して自分を通して、自分の死に対面する気になる。恰もこの時の自分がそのままの感じだ。

荻野君が山岳会の特別会員になられて間もないときのことであって、自分に宛て、大井川の上流を白峰山脈から赤石山脈へとかけて横断したというハガキが寄せられた。この紀行を『山岳』に載せたいと思ったから、在京の幹部員某氏に原稿をもらうようにと依頼した。某氏は、特別会員というところから、荻野君の門構えらしい邸宅を予想して探したがそれらしい宅がない。尋ねあぐんで側の焼き芋屋に寄り、この辺りに荻野というお方がおいでですかと訊ねると、私のところが荻野で…。某氏はその意外に驚きながら、二階に通されて、初めて荻野君に対面した、と後で自分に通信したことがある。今思うと、荻野君は非営利事業なる山岳会の成立を危ぶみながらも、どうか潰したくないという一心から進んで特別会員

に入会せられたらしい。荻野君はすべての点にそういう情誼の温かい人であった。

大井川の紀行というのは、『山岳』第一年第三号「日本アルプスの巻」開巻第一に載っている「田代山奥横断記」がそれである。おそらく荻野君が初めて足跡を印した第一旅客、また第一紹介者であろう。『山岳』第二年第三号の「甲州国司嶽紀行」も、同君によって最初に世の愛山家に紹介されたのである。同君の文を作ること、周密精緻、字画といい、字配りといい、版に刷ったようである。そうしてきっと手元に原文通りの複本を準備しておかれる。原稿が編者の手に渡ってからも、何枚目、何行目、何番目の某字は某字に改められたしなどと注文して来る。どうかすると、一日おきくらいに訂正の注文状が来ることがある。いつか活版職工のあやまちで、氏の原稿の末尾を一枚紛失したことがある。氏に照会すると、例の複本から引き離して、すぐ原文に継ぎ合わしてくれた。こういった綿密なところは大概な人には真似ができないことである。

そのくせ荻野君は、毎年脚気で悩まされておられる。歩行も遅々とするほうだし、体格も頑丈どころか、せいぜい十人並みといくかいかぬかくらいである。登山旅行をされても、人が三日で終わるほどの道筋に五日か、甚だしきは七日くらいも費やされることがある。あれでどうして登山旅行ができるであろうと、自分のことは棚にあげて平常から不思議に思っていた。荻野君の父君の手紙に「天命如何とも致しがたきことと、強いて諦め候えども、学業もおよそは成りたる今日、他に兄弟もなき一人の相続人のこととて、期待することもこれあり候いしに、空に帰り候次第、ご推察を仰ぎ候……。音松事は、幼少の頃よりいまに及ぶまで、一般普通の人よりはほとんど変人を以ってされ、小学時代より朋友とするものなく、自身かえって得意に候ほどゆえ、高等商業学校在学中は一種別物との趣も見え候えども実は一向意に介さず。実は小生においては、本人が品行厳正にて軽浮の風なく、卒業を急がず、平々凡々たるところに望を嘱せし次第に御座候……。音松事は十四、五歳より旅行を好み、時には深山幽谷にて道を失せし様なることは聞き及び候えども、多少の教育ある身、その性行に徴しても無謀のことも致すまじきと思いおり候ゆえに、請うがままにその都度快諾いたせし次第に候」と、この自然児を一夕にして奪い去られたことを痛恨する。聞けば、君は高等商業の本科を卒業され、専攻部に入られて多年の造詣を一論文に集中され、脱稿提出後にわかにこの世を去られてしまったということである。遺憾の極みではないか。

ここに父君より送られた二枚の写真のうち、旅姿の君を掲げる。[注] 金ボタンの制服をつけた方を載せずに、この方を掲げたわけは、君の「田代山奥横断記」に「余は黒飛白の単衣を

着し、雑嚢を肩に掛け、着茣蓙を纏い、麦藁帽子を戴き、蝙蝠傘を携えたる等、登山旅行に似合わしからぬ扮装なり」とあるを思い出して、往時の君の面影を偲びたいからである。

君の死は我が山岳会の一大損失である——自分たちのことばかりいうようだが——君の生彩ある文章は二度と我が誌面に見ることができなくなった。考えれば考えるほど残念でたまらない。

墳墓の中から、君はおそらく唯一の友人なる我が山岳会の前途を心配しておられることであろう。山岳会も微力の我々同志者と、同好諸君の共助によって、あくまでも維持する決心である。安らかに眠りたまえ、君。

（編者註：原文には写真が入っているが、紙面の都合により割愛した。）

未知の世界を世に紹介した荻野音松

—「駿州田代山奥横断記」解説—

南川金一

「駿州田代山奥横断記」は荻野音松が一九〇六（明治三十九）年甲州湯島（現、早川町）から転付峠の北を越えて大井川東俣へ下り、同西俣から三伏峠を越えて大河原（現、大鹿村）へと下った時の紀行文である。この紀行は『山岳』第一年第三号の巻頭を飾った。この号は扉に「日本アルプスの巻」とあり、探検期の日本アルプス特集号であった。当時は大井川源流一帯を田代山と呼んでいた。登山者の目から見た初の南アルプス登山記であり、登山史上にも大きな意義を持つ一編である。

荻野音松は一八八二（明治十五）年東京・日本橋に生まれた。高等商業本科を卒業し、専攻部に進み論文を提出後間もなく、二十六歳で病没した。一九〇六年に山岳会に入会してわずか二年後のことである。したがって、登山の世界では無名ではあったが、山岳会には特別会員として入会し、小島烏水をして「特別会員に名を列した人は……貴族や大名たちではあったが、会費を払ってくれた人は幾何もなかった。……然るに荻野音松なる名で特別会費を申し込み、会費をキチンと払い込んでくれた篤志家があった……」（『アルピニストの手記』）と、さらには「君の死は我が山岳会の一大損失である」と書かしめた。

荻野音松が書いたものは、ここに紹介した「駿州田代山奥横断記」の他に『山岳』第二年第二号に「甲州国司嶽紀行」、同第三年第二号に「天竜川を下る記」がある。「甲州国司嶽紀行」は田代山奥横断に先だって国司岳に登った紀行であり、

「駿州田代山奥横断記」とともに、それまで未知の世界であった南アルプスや奥秩父が彼の緻密な文章によって世に知らしめられたのである。もっと長生きしていれば、その後も大変な山登りをしたと考えられるだけに夭折が惜しまれる。

田代山奥横断のルートを簡単に追ってみる。甲州鰍沢から出頂の茶屋を越えて早川の湯島に下り、下湯島の猟師・大村晃平を案内に南アルプス山中に入る。本来の新倉から転付峠を越える道は荒廃していて通れないとあって、新沢峠を越える。新沢峠は転付峠の北約二㌔、現在の地図には別当代山とある国境稜線から東に伸びる尾根の南面を越える。「参謀本部の三角測量櫓ありて…」とあるのは別当代山の三角点であろう。同三角点の設置は一九〇二年であるから、時期的にも符合する。ただ、「眺望よしと聞きしが…」とあるが、一九九五年に筆者が登った時には周囲に樹林があってそれほどよい展望ではなかった。この東西に伸びる稜線の南側には高原状の疎林の広がりがあり、その下に一条の微かな踏み跡があって、かつてそこに峠道があったことを窺わせる雰囲気が残っていた。国境稜線（現在は県界稜線のすぐ西側を林道が通り転付峠の南まで伸びている）から大井川東俣側へ急下降してジャガ沢に下る。東俣へと下り、塩見岳蝙蝠尾根の末端をトラバースして大井川西俣に下り、小西俣小屋を経て三伏峠に至る。小西俣からは烏帽子岳の東面をトラバースした。「右に常に間ノ岳を望み…」とあるのは塩見岳のことである（この時代にはまだ塩見岳の山名は確定せず、河田黙による『山岳』第四年第三号の「三峯川の上流（荒川岳及仙丈岳を登る記）」の荒川岳は三峯川支流の荒川の源頭の山すなわち塩見岳であり、『山岳』第五年第一号の「白峰及び赤石山脈縦横記」には「白峰の間ノ岳」と「赤石の間ノ岳」が登場している）。

このルートについて、荻野音松は大村晃平の話として、「明治七、八年の頃、……信州大河原の沢戸亀作といえるもの主導となり開鑿したるものなりし」と記しているが、『大鹿村誌』によれば開通は十年ほど後になる。

江戸時代の大河原村、鹿塩村の山は幕府への税を材木で納める椹木（くれき）山であったから、椹木の割り出しや御用材の伐り出しが盛んであったが、大河原村には「駿州田代山御用材伐り出しの杣、日雇い人夫の米、味噌、酒、草履などを大河原村百姓が三伏峠越えで運搬して駄賃稼ぎをした」という安政五年（一八五八）の文書が残っており、江戸時代にはすでに三伏峠越えの山道があったことが裏付けられている。

明治七年大河原村の沢戸亀作ら三人が新甲州街道開鑿を発議して田代村内の通過承認を求めるとともに、筑摩県令に願い書を提出している。田代村への道路開鑿を求める理由は「甲州切石、鰍沢辺りの物品が信州飯田へ送られるには、富

士川支流の釜無川に沿う教来石に到り、金沢峠を越えて高遠を経て飯田へ四十里。しかし甲州新倉から駿州国境まで三里、田代村地内六里、大河原村まで三里、以上十二里の山道を切り開けば二十里余短縮して飯田へ運ぶことができる」というものであった。翌明治八年には甲州早川村、新倉村の戸長にわたりをつけ、同十一年には伊那郡十七町村連名で県に新道開鑿願いを提出、同十六年大河原地内の開鑿許可が下りている。そして明治十九年十一月九日付けで「落成につき甲信新道御見分願」が県に出されている。したがって開通は明治十九年ということになる。しかし、なぜか県は「願いの趣詮議に及び難き事」として竣工検査はしていない。十一月であるから三伏峠はすでに雪であり、実際の利用は翌年からであっただろうが、利用者が少なく改修されなかったとあれば、たちまちに荒廃するのは当然であろう。新道開鑿といっても、三伏峠越えの山道があり、恐らくは転付峠越えの山道もあったであろうから、それらをつなぐ形で整備したのであろうが、今日、登山者の目から見ても随分大胆な発想である。以上のような『大鹿村誌』の記述からすれば、荻野音松が通ったのは開通の二十年後ということになる。

したがって、田代山奥を横断したのは荻野音松が初めてというわけではない。しかし彼が記しているとおり、登山者として足を踏み入れたのは恐らく彼が最初であり、全く情報のなかった世界が彼によってはじめて世に紹介されたことに大きな意義があった。荻野音松にヒントを与えたという『日本山嶽志』の赤石岳に関する小島烏水の追補記事の中の「（ここより峰伝いにて、甲州切石を経、鰍沢方面に行く間道ありという）」の一行は、恐らく烏水が前記甲信新道のことをどこかで耳にして、それを書き加えたのであろうが、それ以上の情報は何もなかったのである。

小島烏水が書いているように、「駿州田代山奥横断記」は悪沢岳に関する最初の報告であった。南アルプスの核心部ともいうべき塩見岳から赤石岳にかけての山域を踏査してみようとの野心的な計画が実行されたのは、三年後の明治四十二年である。小島烏水、高頭仁兵衛、高野鷹蔵、中村清太郎、三枝威之介という山岳会草創期の錚々たるメンバーによるパーティーであった。一行は先蹤者荻野音松の体験に基づき、下湯島で案内人を確保し、新沢峠を越えて東俣へ下りた。小西俣から悪沢岳に登り、赤石岳に到り小渋川へと下った山行は、探検登山期を飾る壮挙であった。その紀行文である『山岳』第五年第一号の「白峰及び赤石山脈縦横記」は今なおわれわれに興奮と感動をもたらし、山岳会草創期のエネルギーが伝わってくる。

図書紹介

リュックサック記念号編集委員会 編

『リュックサック 80周年記念号』

稲門山岳会 二〇〇〇年十一月刊
二〇・五㌢×二一㌢ 四二三ページ

早稲田大学山岳部 編

『リュックサックXIII』

早稲田大学山岳部 二〇〇一年三月刊
二〇・五㌢×二一㌢ 四七二ページ

〈リュックサック 80周年記念号〉

〝早稲田の山〟は、日本の登山界に大きな影響を与えてきた。戦前の穂高滝谷、鹿島槍北壁の冬季登攀の記録、戦後の「極地法」論や「スポーツ・アルピニズム」論などは、賛否両論、様々な議論を巻き起こした登山界の老舗である。登山とは何か、大学山岳部の意義を考える上で、早稲田は、常に重要な発信源になってきた。

『リュックサック 80周年記念号』は、こうした早稲田の山を、一九二〇年から二〇〇〇年までまとめている。Ⅰ章の「山岳部の歩み」は「活動年表」で始まる。各年ごとを見開き二ページを使い、日付けとメンバーが入った部としての山行の全記録と、その年の重要な文献を納めている。参考資料なども一目で分かる簡潔かつ綿密な力作である。例えば、初年度の大正九年の項では、「舟田三郎の登山」（児玉茂）の解説がつく。それは学徒出陣や女子学生の入部であったり、ローツェ・シャール遠征や山の歌創作などであり、様々な角度からの部の歴史がたどれる工夫がある。

次の「登山略史」は、創部から二〇世紀末まで、一読するだけで、その時どきのエポックを中心に山岳部の流れが理解できる。「山岳部八〇年の歩みは、山へ登ろうという積極的な意思と、山、天候など自然そのものが持っている危険との戦いの歴史であった」と総括、途中で倒れた部員への追悼で締めくくる。創刊号から一〇号までをまとめた、小島六郎の「『リュックサック』と早大山岳部」、吉川尚郎の「映像記録『早稲田の山』」などのエッセイも含まれている。

Ⅱ章は、「山・人・時代」。創部者の舟田三郎の「春の槍ケ岳へ」に始まり、冬の滝谷で活躍した今井友之助の「雪の岩稜に

魅せられて」、スポーツ・アルピニズムを提唱した関根吉都の「極地法登山」、濱野吉生の「学生スポーツ登山の原点」、マナスル、ローツェ・シャール、エベレスト、K2登頂などの登頂記、そして近藤等の「モンブラン山群、岩壁と氷壁」、大谷映芳の「山と映像ドキュメンタリー」など二五編のエッセイが並ぶ。いずれも、それぞれが活躍した時代を回顧した価値ある読み物である。その多くは一山岳部の歴史だけでなく、日本の登山史と重なる内容で、続みごたえがある。

Ⅲ章は、「資料」。早大山岳部、稲門山岳会会員による登山関係の著作・翻訳・映像作品の一覧表が掲載されている。会員の著作は創刊号から数えて百六十余、雑誌の論考・記事・記録に至っては千六百五十を超える。単に、八〇年を振り返る編集ではなく、原典資料が呈示されているため、誰でも興味を待った内容についてより深く知ることができる。「計画し、登り、記録する」という山登りの原点を、忠実に守ってきた。〝早稲田の山〟の面目躍如の労作である。克明に資料を発掘して、一覧表にできる点に、早稲田の底力ともいうべき、蓄積の深さに感嘆する。

最近、私の出身山岳部では、五十歳以上のOBが集まると「山岳部はどうあるべきか」論が飛び交うのが常である。部員が減少して存続が危ぶまれる中で、「オールラウンドの山登り」を標榜しながらも、目標を見失いがちな現役学生へのアドバイスが多い。

早稲田の場合はどうだろう。

「私は大学山岳部というのは、より高く、より困難を目指して自己を鍛え、自己を成長させたいと願う若者の場であるべきだと考えている。(「学生スポーツ登山の原点」濱野吉生・二六二ページ)。この目標に、異議を唱える者は誰もいないだろう。しかし、日本に積雪期の未踏ルートが数多く存在し、世界中に未踏峰が目白押しだった七〇年代までは、より高く、より困難な山へ、仲間同士迷うことなく切磋琢磨して、取り組むことができた。

しかし、現在は未踏の対象はほとんどなくなり、山登りは細分化し、共通の目標を見出だすことは、難しくなっている。学生にとって、昭和三〇年代に確立した年間スケジュールの踏襲はマンネリになり勝ちで、先輩たちの栄光の記録は重荷となり、下級生の指導も行わなければならない。全生活を登山に捧げるには、興味対象は多過ぎ、自分たちの目標をどう設定してよいのか、迷っている学生が多い。登山の魅力を知り、困難なクライミングや高所登山を志す学生は、同人組織のクライマー集団に入るのが、現状だ。

ならば、大学山岳部の存在意義は何か?

記念誌を丁寧にめくってゆくと、様々な提言がある。たとえば、一三七ページの「大学山岳部の再構築を目指して」(一九

八三年）では、田村修一監督が「部は学生の為のものであり、登るのは学生であります。学生自身の意志に基づく、明るく、魅力あふれた部でなければなりません。（中略）何よりも増して全員が共通の目標に向かって努力する尊さと美しさを感じとってもらいたい」と記す。

たとえ山の難度が低くても、登山者として未熟であろうとも、自分たちで目標を設定して、それを仲間と達成する。その喜びを地道に後輩に伝えて行くことこそ、教育の一環である大学山岳部の道ではないか……。記念誌には、これから山を志す人への、先人たちのヒントが各所に散りばめられている。

残念なのは、記念誌にも『リュックサックXIII』に掲載した近藤等氏の「剱岳の遭難と山岳部の体質についての反省」も掲載すべきであったと思う。また、学生の指導法に疑問を持つ若手OBの編考も加えるべきではなかったか。XIII号と内容がダブったとしても八〇年を振り返る時、必要な文献ではなかったか。

語り継ぎ、歴史を織り成して来た稲門六百人の思いを、一堂に読み知ることのできる80周年記念誌は、登山が文化であるという点において、成功したと思う。それを栄光への郷愁にしてしまうのか、それとも「これからの前進のため」の〝宝の山〟にするかは、後へ続く者の読み方ひとつだろう。

〈リュックサックXIII〉

早大山岳部がまた一冊、刺激的な部報『リュックサックXIII』をまとめた。一九八三年から二〇〇〇年の十八年間を編集したもので、その形容は、決して輝かしいものではない。悩み、苦しみ、煩悶する大学山岳部像をありのままに呈示した号といってよい。大学山岳部の今後を考える上で、本質的な議論が盛り込まれた点で、示唆に富んでいる。

巻頭の記録は、八四年の「アンデス合宿」、九一年の「トリボール」である。前者は現役学生が立案した意欲に満ちた海外合宿の報告であり、後者は、八〇〇〇㍍峰に集中する登山隊とは一線を画して、いぶし銀のようなパキスタンの高峰への登山報告だ。両隊をリードした大貫敏史氏の軽妙な筆致が、山岳部とOB会の矛盾を客観視しながら、〝早稲田の山〟の良さを表現している。

しかし、その後は二つの遭難に打ちのめされた時期が続く。九四年春、剱岳で三人が亡くなった事故は、チーム登山の枠に閉じこもり勝ちだった山岳部の体質にあるのではと、原因が追及された。その沈滞から脱出しようと企画したネパール・クンブ山群の合宿は成功したものの、九六年夏、今度は朝日連峰で個人山行中の二年部員が遭難した。この事故は同部に深刻な状況を生み出した。

チーム登山中心の部の運営への批判の中で、部員の意志を尊重して許可した個人山行での事故。遺族から部の運営に対する異議申し立てなど、誠意を持って対応しようとすればするほど、

若手ＯＢたちは傷つき、部の指導から離れていった。大学山岳部では無事故が絶対条件ではあるが、アクシデントは不可避なのが登山行為である。どんなに努力しても、事故は起こる。その責任は誰が負うのか？

その問題に正面から取り組んだのが、「早稲田大学山岳部を考える」だ。若手ＯＢの提言の数々、近藤等元部長のアルピニズムの考察を踏まえた部の体質への言及、若手の座談会は、山岳部の在り方を考える上で、まさに〝刺激的な論考〟が並んでいる。

単純に早稲田の旗を振ることができなくなった若手ＯＢたちに対して、中堅ＯＢたちはなんとか光明を見出だそうと、崑崙山脈の未踏峰チョンムスターグ蜂の遠征を計画する。現役五人を加えた二ヵ月に及ぶ活動。その登山報告が、後半のカラーグラフを飾り、学生たちの生の声が載る。商業公募隊が企画するような八〇〇〇㍍峰をコレクションする覇気のない記念登山ではなく、古い文献から山を見出し偵察し、きちんと登頂したところに伝統を感じさせる。

早稲田の山が、日本の登山界へ与えた影響の点では、一九八一年のＫ２西壁初登攀が象徴する『リュックサックⅫ』（八二年刊）の時代で終わっていると思う。それは大学山岳部の現役部員が登山界の一線に、かろうじて伍した最後の時代といってもいい。筆者は、その世代だが、部活動で参考にしたのは早稲田の極地法論ではあったが、少人数で果敢に冬季登山を日高で実践する北大山岳部が理想に映っていた。ヒマラヤは視野に入れたとしても、ペテガリを極地法で登るなんて、愚の骨頂。北大は何人で登ったと思っているんだろうなどと、議論していた。

同じ疑問を持つ男が早稲田にもいた。同学年の故・竹中昇だった。山岳部の現役学生が登山界をリードした最後の記録を、敢えて一つあげるとすれば、恵秀機と竹中昇の一九七六年三月の「大タテガビンから八ツ峰」がある。当時、冬季の剱岳東面に二人で入山するパーティーは皆無だった。今、その冬の剱岳東面は、登山者の試金石の一つとなっている。

その竹中が言ったのは「人格の陶冶の場としての山岳部」だった。「個人の登る意欲を尊重しながら、忌憚なく批判し、議論できる山岳部が理想だよね。一つの理論に染まらずに……」と。『リュックサックⅩⅢ』には、二回の事故に深く傷つきながらも、真摯に早稲田の山を考え続ける若手ＯＢたちがいる。悲しい事故ではあったが、この議論こそが陶冶の場でなかったか。世代による考えの違いもはっきり現れ、やはり刺激的なⅩⅢ号である。

（文中敬称略）

（永田　秀樹）

東京大学スキー山岳部七五周年記念
『輝けるときの記憶』　山と友Ⅱ

東京大学山の会　二〇〇〇年六月刊
A5判　四四八ページ

「東大が面白い」と注目した時期があった。一九七〇年代の後半の頃のことである。志が感じとれる苛酷なクライミングがずっと続いた。『岩と雪』や『岳人』誌を賑わしていたし、行動を共にした仲間からも話を聞いたことがあった。そういう東大の上昇気流は二十年近く続いたろうか。九〇年代半ばまでは年間の行動パターンはほぼ変わることなく代々受け継がれていった。その後、他校と同様、やゝ低迷した時期もあったが、二〇〇〇年一月、東京大学スキー山岳部一年部員の山田淳君（二〇歳）がキリマンジャロに登ったあと続いてアコンカグアにも登った。さらにマッキンリー、エルブルース、コジウスコ、ビンソンマシフに登頂、密かに残るエベレストへのセブンサミッツ最年少登頂を目論んでいることを知った。これはまさに東大の新しい波といえる。今世紀に入って『山と溪谷』誌五月号で早稲田大学四年生の石川直樹君（日本山岳会会員、セブンサミッツ登頂者、非山岳部員）との対談が掲載された。山田淳君は本書に「アコンカグア登頂記」を寄稿している。東大の開かれた自由な気風と好奇心に燃える若者を育むスケールが感じとれて爽やかである。あたかもさなぎが脱皮して羽化するような華々しい世代交代を感じさせてくれる。

本書は十八年前に出版された五〇年誌『山と友』との連続性を意図した記念誌である。東京大学山の会の幅広い群像と変転する世相が詳らかになっていて興味深い。また冒頭に記した一九七〇年代から始まった先鋭的なクライミングが余すところなく掲載されていて痛快である。

初登攀とルート開拓の項では、剱岳小窓尾根白萩川側フランケ、谷川連峰赤谷川ドウドウセン探検調査、甲斐駒ヶ岳南坊主岩東壁、冬期一ノ倉ルンゼ登攀、利根川本谷と日高山脈の単独行、南硫黄島探検と続く。異色な読みものとしては多くのヨセミテ登攀にも関連のある「私とフリーの素敵な関係」が目をひく。永田東一郎さん（一九八二年入会）は、「われらが世代」の座談会の中で「自画自賛が過ぎるかもしれないが、私のころが部員数が最も多く、技術的水準も高かった。黄金期といってもいいのではないか」と自負している。私が「東大が面白い」と注目した時期と符号し、本書のタイトル『輝けるときの記憶』は素直に頷けるのである。

しかしながら歴史を遡ると決して順風満帆の道のりではなかった。戦前の有名な剱沢の遭難は伝説的なものになってしまった

が、一九五九年秋、滝谷の岩登り合宿でかけがえのない六人の命を失い、大きな打撃を受け、再建のため並々ならぬエネルギーと努力が払われた。滝谷の亡霊から解放されるために、自主性に基いた技術と安全の確保のステップとして「TUSAC憲章」が制定された。これは合宿を全てとせず、自己責任に立脚した個人山行も重視しようという主旨の憲章であった。その後「セミポーラー方式」も編み出された。それはポーラーの骨格の上にバリエーションの枝葉を広げたもので、上級生もそれなりに技術面、体力面で鍛えられ、創造性豊かなクライミングが期待できる方式であった。このセミポーラーシステムは難目標を達成するという意味で、一九八〇年のシブリン、一九八四年のK7南西稜の初登頂につながった。最後の八〇〇〇㍍の城塞突破のタクティックスは「垂直極地法」で克服した。

日本山岳会のエベレストやナンダ・デヴィなどで活躍した鹿野勝彦さんの「ヒマラヤ鉄の時代」の一文と、フレンズやナッツなどを駆使したヨセミテを舞台に編み出されたアメリカンエイドと呼ばれるTUSAC「アルミの時代」の浅沼順さんの一文との対比は実に興味深い。八〇年代初頭に現出したピオレトラクションによるアイスクライミングの実践も谷川岳一ノ倉などで多くの好奇心に満ちたOBによってなされている。

一九五三年、マナスル偵察帰りの田口二郎さんは「猫も杓子もポーラー方式による団体行動をやるのはおかしい。それがヒマラヤに通じると思うのは論外。山登りの原則は個々人のアルプス的登山技術の涵養にある筈、戦後の日本登山界の動向は間違っている」と一刀両断にしている。山登りの本質を鋭く説く田口さんの持論は、一九三八年スイスに遊び、兄一郎さんと共にヴェッターホルンなどに登り、さらに翌年、グロース・シュレックホルン北東壁の初登、一九四四年のブライトホルン北面ヤング尾根、メンヒ北壁ラウパー・ルート第三登、四五年には高木正孝さんとヴェッターホルン北壁などに登り、山登りの真の悦びを知ったことに起因している。

「戦後TUSACを語る」の座談会の中で、竹内哲夫さんも「田口さんは、最近の大学山岳部の登り方はおかしいんじゃないか、みんなそろって合宿をやり、みんなでぞろぞろと雪の上に行っている。山というものはもっと個人技を追求すべきものではないかと言っている」と述べているように、TUSACの山登りの根底には個人の目覚めを示唆した「田口イズム」が脈々と息きづいているようにも思える。そこには旧体制を凌駕する予兆がある。山登りの原点回帰といえるのかもしれない。

大学山岳部がかたくなに固執してきた極地法登山訓練が、無残にも打ちくだかれたのはラインホルト・メスナーにより八千㍍峰一四座が登りつくされたときであった。一九七八年、メスナーとハーベラーが無酸素でエベレストに登り、全ての八千㍍峰がアルパイン・スタイルで登れることを実証した。装備

や用具の新素材開発や食糧の軽量化と相まって、大がかりな組織登山の無用論が声高に叫ばれるようになった。これは「田口イズム」そのものである。

ただ、これからの高峰登山のひとつの方向は、未踏の困難なバリエーションルートの開拓、あるいは高峰と高峰を結ぶ長大な尾根の縦走に向かうのはごく自然なことだろう。新たな極地法が見直されることになるかもしれないが、これからの訓練は組織内の一人ひとりが胸躍らせ、開眼できるような体制を構築していくことが必須条件であろう。

TUSACの八千m峰への最初のサミッターは一九八二年、駒宮博男さんによるシシャパンマ登頂だが、私が本書を落手して最初に興味をもって熟読したのは山本正嘉さんの「チョーオユーでの実験登山」である。

山本さんは利根川本谷や日高山脈の単独行、冬期単独一ノ倉四ルンゼ登攀などで自らを練磨し、さらに一九八一年、高山研究所の禿博信さんとアコンカグア南壁の苛酷なクライミングに成功する。その後高峰登山の科学的研究に没頭し、一四年後の一九九五年、小西浩文さんとチョーオユーの無酸素速攻登山に向かう。自らのからだを高所環境にさらした生体実験であった。ひとりのシェルパを加えた三人の綿密な生理的データをとり、これからのハイアルティチュード・クライマーのための貴重な報告としてまとめられている。学者特有の難解な専門用語を排し、平易な論文としてまとめられている。

特筆すべきユニークなことのひとつに中村純二さんが紹介している御殿山記念館の地下に東大クライミングウォールが建設されたことが挙げられる。平成元年以降、この人工岩壁は他大学山岳部員らにも開放され、フリークライミングの恰好の道場になっている。

本書は渡辺兵力さんの「創立七五周年に寄せて」の巻頭言ではじまり、大正十二年（一九二三年）東京大学スキー山岳部創設に立ち会われた草創期の鹿子木員信博士（大正四年、慶応大学山岳部創設にも関与された我国登山界の先達の一人）の「山岳とスキーの思い出」、柳沢保正さんの「田口二郎さんに聞く」、渡辺兵力さんの「登攀断想」、村山雅美さんの「戦いすんでマナスルへ」、田口二郎さんの「マナスルはヒマラヤに咲いた古典の花」、池戸誠二郎さんの「田口さんの本」、鳥居鉄也さんの「南極観測への参加を振り返って」、中村輝子さんの「世代を超えた山行」、都留義之さんの「TUSAC峰誕生」、春田俊郎、大貫良夫さんの「秩父宮賞受賞」などが収められていて本書の厚み、深みを増す編集内容になっている。

登山の文化面で活躍する人も多く、松丸秀夫さん等が中心になって絵画、写真、工芸などの多彩な作品を集めた美術展開催の報告もなされている。評者は二〇〇一年六月まで日本山岳会の会報「山」の編集に携わったが、その前の四年間の労をとら

れたのは東京大学山の会の伊藤敞さんであったことを最後につけ加えておきたい。読み応えのある本書を是非精読いただきたいと思う。

（村井　葵）

上條　武著

『上高地―三部作』

第一巻　神河内　絵画き宿
A五版　四六六ページ
一九九六年十一月刊　三八〇〇円

第二巻　常念烏帽子縦走記
同　四四四ページ
二〇〇〇年十一月刊　三八〇〇円

第三巻　河童橋考
同　三七七ページ
一九九七年四月刊　三三〇〇円

独木書房発行　岩田書院発売

上高地といえば、古い会員は『高山深谷』にある辻村伊助の「牛番小屋の朝」に思いを馳せるであろう。私にとっては戦争中に奇跡のように発行された冠松次郎の豪華写真集『雲表をゆく』の最初の見開きにある「明けゆく明神岳」である。この一枚の写真だけで、私は入営を十日後に控え、今生の思い出として地図も持たずに一人で上高地に入った。敗戦一年前の夏の終わりであった。この二枚の写真には詩があり、しずかなロマンがあって、しかも人を冒険と旅情に誘うインパクトがある。

エッセーや紀行文、例えば田部重治の上高地、松方三郎のアルプス記―「雨と霧」の最終章は大正の初期、田代池近くのキャンプの早朝の風景を彷彿とさせる名文であり、最近では織内信彦さんのエッセーなども同じように詩情があり、繰り返して読みたいと思う。

本書は、まったく違う。一巻と三巻は、誤って伝えられている上高地の歴史の一齣を、資料をあさり調べあげて正そうと意図した本であるが、主人公「井口良一」に情をかけるあまり、「読むのがつらい本」になってしまった。

著者は、『孤高の道しるべ』で鵜殿正雄をとりあげ、穂高から槍へ初縦走など彼の輝かしい登山歴を高く評価するように、世に問うた。同じような情感に突き動かされて、本書の第一巻『神河内　絵画き宿』では、五千尺旅館の創設者でありながら、殆ど忘れられている「画家―井口良一」の物語を書き上げた。その動機となったのは一九九二年（平成四年）三月一日、松本市内のホテルで「上高地五千尺グループ・創業八十周年記念祝

賀会」が開かれ、同時に配られた「五千尺ホテル略史」では、創業者の井口が無視され、しかも開業は一九一五年（大正四年）であるはずなのに、一九一三年（大正二年）となっている。上高地の有力者の説は間違っていても、定説になりやすい。それでは後世に悔いを残すことになる、というのが著者の言い分である。

画家―井口良一は芸術家として、また人柄も著者の主張するように魅力的な人物であるが、生活がかかっている使用人の立場からみると、井口のお人好しぶりは旅館の経営者として最悪である。大正から昭和初期までの上高地は客も少なく、投入した資本を回収して利益を上げるのは難しかった。井口は早晩五千尺を手放さざるを得なかったと思われる。あとを引き継いだ丸山尚にしても、それなりに資本を注ぎ込んでいて、回収できたようにも思えない。申請書類上の借地権は井口となっていたとしても、当時の慣習として、親友同志初めから話し合いで共同経営者として発足した計画だったかも知れない。親友が僅かの行き違いで仲たがいする例は珍しいことではない。今となっては井口、丸山両者の関係も、真相は霧の中に入ってしまった。

私は戦争末期の一九四四年（昭和十九年）八月下旬に初めて上高地へ入った。ホテルも西糸屋も温泉も閉まっていて、五千尺だけが営業していた。客は四人、上高地は明治の閑けさを取り戻していて、中年の婦人が一人で旅館を守っているように見えた。中年の婦人は、現オーナーの母堂の藤澤たいさんではないかと思うが、三日間の滞在中、戦時下の乏しい食材を工夫してご馳走を作り、心からのもてなしを受けた。あの三日間は、いまでも豊かな楽しい思い出となっている。旅館経営が苦しかった大正から昭和初期、戦争末期、戦後にかけて少ない客をもてなして、五千尺の経営を維持し頑張ってきたのは藤澤たいさんであろう。それは、井口、丸山にはなかったであろう資質であり、その頑張りが報われて、子孫に繁栄をもたらした、とも言えよう。その見方からすれば、藤澤たいさんに対する著者の表現と評価は、酷に過ぎるのではないかと思われる。

著者は、また上高地の歴史が、如何に正確さを欠いているかについて例をあげ、作家、山小屋オーナー、郷土史家、登山者などの五千尺旅館についての記述を十以上の文例を並べて比較しているが、これほどの差があると文章を書くことのおそろしさを考えさせる。この現状こそ本書を書かせた原動力となったのであろう。

この不正確さは、第三巻の『河童橋考』でも同じだ、と著者は指摘する。河童橋が何時ごろ架けられたか、がメイン・テーマである。ところが正確な資料が少ない。あるいは資料が失われたところに原因があるのであろうが、ここでも上高地の有力者の「河童橋が吊り橋になったのは、大正十一年（一九二二年）である」との主張がまかり通り、環境庁が所管するビジター・

センターにも「吊り橋は大正十一年に架けられた」と書かれていた。この定説化をおそれた著者が、センターに訂正を申し入れるとともに、『河童橋考』を書いた、と「あとがき」にある。

著者は吊り橋になったのは明治四十三年（一九一〇年）である、と推理する。その根拠は、山岳会発行の明治四十四年刊の『高山深谷』第二輯の辻村伊助の写真、大正二年八月七日に一高生大木操が河童橋上で撮ったウェストン夫妻、嘉門次、根本清蔵の写真である。これらの写真は二枚とも河童橋は明らかに吊り橋である。また吊り橋になる前の初代河童橋が何時架けられたか、どのような橋であったか、についてもふれている。著者は温泉場発行の絵はがきから初代の河童橋は「甲州（山梨県）猿橋と同じ構造のはね橋」で、架けられたのは明治二十三年（一九八〇年）か四年頃と推定している。

確かに、絵はがきをみると猿橋と同じ構造で、角材を筏にくみ、それを浅いアーチ状にずらしながら重ねて延ばし、真ん中でつなぎ合わせた橋のように見える。はね橋というのは、ゴッホの絵にあるとおり跳ねて開く可動橋のことと考えていた。識者によると猿橋のような構造様式を、はね木橋というそうである。勉強になった。

しかし『河童橋考』への疑問もある。九一ページに、窪田空穂が舅と一緒に峠を越えて河童橋を渡ろうとすると、たたずんでいる中学生を見つけ、面倒をみる話がのっている。著者はその中学生を一高生の大木操一行と書いているが違うと思う。確かに大木等は大正二年（一九一三年）八月五日に槍ヶ岳から下りて温泉に泊っているが、彼らには有明の類蔵という立派な案内人がついており、河童橋で行く先に迷っていたとは思えない。窪田の「日本アルプスへ」によると中学生六、七人に会うのは明神池に行くため河童橋を渡るとき、と書いており、八月十日か十一日と推定される。窪田と同宿していた茨木猪之吉は五日に槍沢の雪渓か、坊主の岩小屋をすぎたあたりで、大木らに出会っているが、窪田とは行き違いであった。大木らは六日には前穂高に登り、七日と八日に上高地を離れたと『一高旅行部の足あと』は書いている。蛇足ながら同書には、槍の頂上から下りてくる四人と会う場面がのっている。この四人が茨木らであろう。それを裏づける話が田部重治の「槍ヶ岳から日本海へ」にある。八月四日に茨木一行と相前後して、槍ヶ岳へ登っていた木暮理太郎と田部が一緒に岩小屋に泊まり、翌五日、茨木らと別れて槍の肩で荷物を整理していると「一高の登山隊が上ってくる」という記述がある。まさしく木暮、田部は大木一行と出会ったのである。大正二年の夏はまさにドラマチックな出来事が連続する。しかし窪田らは九日に徳本峠を越えた。大木らと会ったとしても、島々谷あたりてすれちがったであろう。驚くべきことに他にも中学生はいたのである。同じ年の八月初めに神戸一中の二年生か三年生だった辻壮一、神田禎次郎、山崎

武一の三人が上高地に入っていて、六日には大木、茨木、鹿子木員信等とともに前穂高に登っている。しかし窪田が河童橋で見かけた中学生は六、七人とある。別人であろう。大木、辻ら以外の謎の中学生たちである。

最新刊の第二巻『常念烏帽子縦走記』は、著者の文章に慣れたせいか、三巻のうちでは比較的読みやすかった。題名のいわれとなった「井口良一が小林嘉作を案内人として、小槍、屏風岩の初登攀者―土橋壮三、穂刈三寿雄、服部義一、人夫三人、合計八人で縦走した日記帳」の話が最初の章である。続く「日本アルプスの山小屋」は事情通の著者ならではの語りである。槍ヶ岳の穂刈、常念の山田利一とも、女戸羽川と松本城との間の商店街―六九町青年会の出身だった。また最初の小屋「槍沢ロッジ」は青年会が百円ずつを出資、二千円で、穂刈・山田が共同して建てたなど、それぞれの小屋の生い立ち、その相関関係が語られている。さらに上高地温泉物語、西糸屋四代の軌跡、不遇な名写真家―百瀬藤雄、嘉門次最後の山案内―藤山愛一郎等の穂高縦走、鵜殿正雄の槍ヶ岳日帰り登山、軍旗北アルプスを征く、と続く。

この三部作は、上高池で暮した人間の営みの物語でもあるが、読後感をいえば「読み通すには、相当な努力が必要であった」ということである。著者は上高地の歴史を正し、不遇な扱いを受けている功労者たちを世に知らせようと使命感にもえて仕事をした。なかには著者もファンだったに違いない「西糸屋のおばあちゃん」のように懐かしく、楽しい語りもある。また地味だが立派な小屋主だった山田利一さんのエピソードは、共感を呼ぶだろう。しかし、反対にどうしても人間の弱さ、悲しさを露呈する話が多くなったのは、読者にもつらいことであり、著者にも孤独を強いることになったであろう。

第一巻の『絵画き宿』の主人公井口良一が書いた「高山絵紀行」はダイジェストであるが、ユーモアもあり、洒落ていて秀逸である。井口が悲しみや、慣りを乗り越えて、漱石の草枕のように、非人情の世界に生きているように見えるのは、救いでもあり、皮肉なことである。

装丁についてふれれば、井口のスケッチを使った表紙カバーは、いずれも美しい。なかでも第一巻の絵地図が楽しめる。また第一巻の巻末「上高地関係略年表」は力作だが、未完成である。この年表をもとに橋や旅館の変遷、道路など土木建設関係の事項を加え、完成したものを見たいものだ。

（関塚貞亨）

庄田元男 著

『日本アルプスの発見―両洋文化の交流』

茗渓堂　二〇〇一年四月刊
A5版　四三六ページ　三八〇〇円

この書物の内容は、この著者ならではの高潔でユニークな内容である。初期の日本アルプス登山に挑んだ在日西欧人の足跡を調べ上げ、文献を駆使してそのあり方を集大成し、今までほとんど知られていない、それぞれの人物像を解き明かすという内容であるからだ。欧米人の立場から見た日本登山史といえる。これは登山史に新しいジャンルを築く一書でもあろう。

随所に庄田氏の見識が豊富に盛り込まれ、それらの説明から読者を引きずりこんでしまう。日本人による「日本アルプスの発見」ではなく、新たな視点からの「発見」なのである。この著者ならではという意味は、すでに庄田氏の前著『異人たちの日本アルプス』や、訳書『明治日本旅行案内』とか『アーネスト・サトウ伝』など一連の業績を踏まえたもので、この本はそのライフワークの延長線上にある。

各章の文末にそれぞれの初出年が明記されていて、章の配列と発表年がかなり前後していることを考え合わせると、著者は最初から体系的に目論んだのでないことが窺える。しかし、こうして一冊にまとまると、著者の思考は終始一貫していることがわかる。それが、この書物の大動脈となっている。全編を通じて、人物でいえばアーネスト・サトウであり、さらには、のちにB・H・チェンバレンの『日本事物誌』に発展するサトウの編著『中央部・北部日本旅行案内』に関わった人たちが横糸となって織りなす。そして、この書の後半ではウェストン研究とウェストン論が展開され、もちろん、大変読みごたえがある。まえがきの中で著者は、「主として本業以外の分野で彼らは日本をどのように理解したのであろうか。」と問いかける。これが副題にある「両洋文化の交流」の本領であるといえる。

日本人が、まだ登山という喜びを知らなかった時代に、何人かの西欧人たちがすでに日本のある程度の山岳に登っていたという事実があり、それが今日に受け継がれていることを如実に知る。ウェストンの登山は、日本の近代登山からすればかなり先駆けであろうが、それでも書中の人たちと比べれば、初期の範囲ではあるかも知れないが、かなり遅ればせに属するのではないかと思ってしまう。

本書には、E・F・フェノロサとかE・クニッピングなどという、名前だけは通り一遍に聞いたような、という人たちにも焦点を当て、西欧人による日本の伝統文化の評価や、日本の近代化に尽くした功績を紹介している。クニッピングについては、

精度の高い地図を作成したドイツ人として、P・F・シーボルトとともに人物や探検旅行が語られる。シーボルトは、日本の国禁をおかして伊能図を持ち出そうとした、その人である。そのあたりの話もたっぷりと出てくる。

サトウが植物に関心を示すことになる原点は、A・B・ミットフォード著の『竹の庭』だったと記述している。両者は明治初年まで在日英国領事館で勤務した間柄で、帰英後も交際を続けた。サトウはたくさんの山に登って、それを記録した。その次男、武田久吉も登山と植物という共通の趣味を持ち、植物学研究では頂点に立つ。巡り合わせといおうか、著者によると武田の歩いたシコタン島、八ヶ岳や丹沢などは、サトウのそれと重なるという。

武田が父親といっしょに暮らしたのは、日本での五年間と英国留学の時代だけらしい。庄田氏はまた、武田の『明治の山旅』の中に、サトウが著した『日本旅行案内』などに全く触れられていない点を気にかけながらも、『歴史読本』誌の一文に、武田が自分からエルネスト・サトウの子息と書いてあるのを見つけて、ひと安心している。それらを知りつくした上で、ふたりの親子の交流は、量的にも質的にもそれほど濃厚ではなかった感じだ、と結論づける。

『日本旅行案内』の編集者のひとり、A・G・S・ホーズの経歴について、庄田氏は当時の日本政府の公文書、英国公文書館、ハワイの新聞まで調べてまとめ上げた。私も英国公文書館で捜し物をしたことがあるが、原資料であるだけに実に大変な作業だった。さらに驚いたことに、著者はホーズが日本に子孫を残していた事実を発掘していた。そのヒントがサトウの日記を精読した結果だとのことで、意識さえ持てばこのように発見につながるということを教えられる。ホーズによる「甲斐駒登山記」の解説も、詳しく調べている。

それから天文学者、P・ロウエルは、明治二十四年八月にウェストンと四日違いで御岳に登った話がおもしろい。それは偶然の一致であるが、あとから来たウェストンは、ロウエルの登山を、当然、聞いていたはずだとする。ロウエルは帰米後、天体観測によって火星に運河があると唱えた人で、この話題は世界を駆け巡った。

本書の後半はウェストンが占める。

王立地理学協会からバック・グラントを受賞したとき、すぐさま神戸の英字紙に受賞に価しないとする投稿が載り、ウェストンが長文の反論をした。著者は、ウェストンが示した本人の登山歴に西欧人初登のマークがあることに着目し、異常な執着だと感じ、その発表を大人気ないと称している。ウェストンさんの血気が目に浮かぶ。

続いて、ウェストンの書簡八通を解読している。これは重要である。チェンバレンと杉浦藤四郎宛で、これによってウェス

トンの身辺の状況が詳しく読みとれる。杉浦は、チェンバレンの援助で英国に留学し、一時期、ウェストンが牧師を務めるユーエルの教会の牧師館に同居した。ウェストンとチェンバレンの信頼関係の深さをうかがわせる。ウェストンは親代わりになって、杉浦の世話をしたらしい。手紙の内容に付随して、英国聖公会、ウェストンの聖職歴、サトウの日記などの周辺事情が詳しく説明され、興味が尽きない。

「私のウェストン像」という長文の章が出る。この本の真髄である。ウェストンの旅行中の三つの悩みとして、蚤、同宿者の喧噪、外国人に対する割高な料金が挙げられていて、時代を感じさせる。また、案内人である根本清蔵と上條嘉門次への多大な信頼が記されている。小島烏水については、共通の趣味と話題があったから、一度くらいは山に同伴してもよかったのではないか、と回顧する。考えもつかなかったが、なるほどと思える。私は小島とウェストンの付き合いは、一種のもたれ合いの関係があったであろうと感じる。小島はウェストンを日本に紹介し、ウェストンからは英国やアルプスの登山事情を手に入れることができた。ウェストンも日本の山岳資料の入手に、小島を介していた。

さらにウェストンの日本びいきの原点が、西洋化された日本ではなくて、未開の状態で、人情と尊重をもち、昔の伝統を守っている「田舎日本」にあると見抜いている。

氏名や事績を省いたが、この書物には他にも日本アルプスの峠路を越えたりした何人かの西欧人についての章もある。

本書は内容があまりにも濃密なために、最初の一読に私は旬日を要した。そして、それぞれの在日西欧人に対して、アーネスト・サトウが及ぼした影響の偉大さを知らされた。彼は日本語に堪能で、日本に精通していた。

（三井嘉雄）

河村正之 著

『山書散策―埋もれた山の名著を発掘する』

東京新聞出版局　二〇〇一年三月刊
四六版　二九六ページ　一五〇〇円

本書は、山書（山岳関係の書物）に関する文章を集めたもので、大部分は一九九五年一月から二年間にわたって月刊『岳人』誌上に「山書彷徨」のタイトルで連載した文章に加筆したもの。単行本化にあたって順序は入れ替えてある。

著者の河村氏は、一九五五年生まれ。古(いにしえ)の山行を回想したり、若い頃読んだ山書を語る世代ではない。沢登りが得意な浦和浪漫山岳会の現役会員（連載執筆当時）であり、日本山書の会会員。本職は画家である。

山書に関する文章を纏めた本、といえば山の古典や山岳名著とされる書物を一冊ごとに蘊蓄かたむけて紹介するものと思いがちだが、本書は期待に反して名著中の名著とよばれる山書は登場しない。

その理由を著者は冒頭で、〈一口に山書といっても、そこには登山を中心にして、自然関連のもの、民俗関連のもの、紀行文、あるいはガイドブックから技術書まで、幅広い広がりがある。本書で取り上げたものは、あくまでも私個人の興味を引いたものに限られる。いわゆる名著とよばれるものの多くは扱っていない。〉と書いている。それは本書の目次に目を通しただけで瞭然であり、著者の興味が多岐にわたっていることが窺える。

まず、第一章「山と人」では、加藤泰三の画文集『霧の山稜』と、立田實の『失われた記録』を取り上げたかと思うと、第二章「山と時代」では、山と戦争をテーマに著名岳人たちと戦争との係り、登山記録の信憑性、山窩、などのテーマを扱い、第三章「蒐集物語1」では旧満州で発行された幻の「東亜文庫」をはじめ山の文庫本談義を展開。第四章「蒐集物語2」では、山岳雑誌を戦前と戦後に分けて詳しく紹介。他に、山岳会会報や「古本蒐集の世界」の項では、山書コレクターである著者自身の体験談も開陳している。

このように、山岳雑誌などではこれまでむしろ避けてきたような登山史上の「負」の部分も取りあげていて、それが本書の大きな特徴となっているといえる。また、『霧の山稜』を遺して戦死した加藤泰三に関する章は、スクープともいえる内容であり、読みごたえがあり資料的価値も高いと思う。

さらに著者は、画家としての立場から加藤泰三、辻まことなどの画文集について、次のように喝破している。〈初版以来五十年という歴史の篩に耐えた今日、より高いレベルでの評価をしていこうとする機運が生じてしかるべきだと思う。にもかかわらず、それを阻害しているのが、いつまでも趣味のレベルに引き止めておきたがる山の画文集愛好家と出版社の無邪気な悪意なのである。〉

また、「山と時代」の章では、詩人として名高い尾崎喜八の戦時中における詩集『此の糧』と、藤木九三の『登拝頌』を取り上げ、戦争を賛美した責任を糾弾。戦後も自己批判しないで自己弁護ばかりだと弾劾している。また、登山史上における剽窃、捏造記録についても触れ、深田久弥についても、デビュー作『津軽の野づら』が前夫人北畠八穂の作品であることについて、その後ずっと周囲の山岳関係者らによる隠蔽が行われてきたとし、〈私は小説家としての深田は失敗であったとしても、山岳研究家としての功績は称賛に値すると思っている。だからこそ、その汚点も明らかにした上で、全体を再評価すべきだと考えるのだ。〉と主張している。

当然ながら本書には、膨大な書物が紹介されている。そこで巻末に「書名索引」が付いているのはたいへん便利である。それと、本文によくマッチしたイラストについてだが、カバーと各章ごとに見事なイラストが挿入されている。いずれも河村氏本人が描いた作品で、作者ならではのイラスト解説が親切だ。

最後に、本書を読み終えて気付いた点を記しておきたい。一つは、第二章「世にも不思議な物語」の物語、の項で、虚偽の登攀記録発覚後、Y氏がペンネームを使ってその後も山岳雑誌などに執筆していたことについて、河村氏は〈だが、名前を変えることがはたして贖罪（しょくざい）たりうるのだろうか。八百長をやって球界を追放されたプロ野球選手が、その後名前をかえてコーチになったという話は聞いたことがない。歴史に時効はない。〉と批判しておられるが、プロ野球の八百長と登山記録の偽りを同一視する意見に私は賛成することはできない。

つぎに、本文中に「未見」「誌名不詳」「詳細不明」の書物がいくつもでてくることと、本書のタイトルについて。『山書散策』は内容からいってどうもしっくりこない。『山書彷徨』がピッタリなのではあるまいか。もうひとつ言わせてもらえるなら、見出しの「中公文庫はえらい！」と「山岳雑誌大研究」について。他のシリアスな見出しに較べてあまりにもアンバランスだと気になるのは私だけであろうか……。（上村信太郎）

中村　保著
『深い浸食の国――ヒマラヤの東 地図の空白部を行く』

山と渓谷社　二〇〇〇年十一月刊
A5版　三八一ページ　三〇〇〇円

中村保さんが、前回の『ヒマラヤの東』に続いて今回『深い浸食の国』を出版された。場所は名前の如くチベット高原に源流をもち東南チベット、雲南、四川にまたがり、東南アジアの大河ツァンポー、イラワジ、サルウイン、メコン、金沙江が狭い範囲に集まり、南北に深い渓谷と山岳を造って流れ、高さこそ七千メートルを切るが氷河に磨かれた険しい未踏峰の並ぶ魅力的な地域・横断山脈、とその周辺の土地の話が中心である。

私は、特に「ヒマラヤの東」の山々はここから始まるという未知のカンリガルボ山群への話に興味がひかれた。チベット随一の大氷河とそれを囲む未踏の山々の貴重な写真や、過去の探検家の足跡を語り、私を未知の山々への関心を煽りたててくれた。これらの中村さんの旅は「あとがき」に書いている通り、旅を動機づけるキー・ワードは「新しい発見の旅」と「小さなパイオニア・ワーク」である。土地の人たち以外はだれも知らなかった氷雪の山々と自然の驚異にめぐりあう感動を求めて、

辺境に足を運び続けてきた。地理的には、行動範囲を点と線から踏み出して面へ広げて地図の空白部を埋めてゆき、歴史的な関心から、探検家や宣教師の足どりを検証し、中国近現代史の事跡を訪ねた。……眼を冥ると、旅のハイライト・シーンが鮮やかに蘇る。チベット最大のカンリガルポ・拉古氷河を囲繞する高峰、深い浸食の国・サルウィン川流域の豪快なゴルジュ帯、初夏でも凍結している四川省の天上の湖……と云っている。

私は三十二年前に中央ビルマのサガインで仕事をしていた時、休暇がとれるとビルマ、チベット国境の山々を見たいと思い、鉄道の終点ミチナへの旅行の申請を出してきたが、いつも政情不安という理由で許可がおりず、ティルマンが領事をしていたメイミョーや西南部のアラカン山脈の麓でお茶をにごしていた。そんな中でも、十月のモンスーンの終わりの日と四月の雨祭りの日々の記憶が、この本を拝見して鮮明に甦ってきた。

私は、ここ十年間程ヒマラヤの八千㍍峰の山々を一度は見てみたいと云う思いが強く、ヒマラヤの表銀座ともいえるグレートヒマラヤ、カラコルムヒマラヤを歩いたり登ったりしてきた。しかし、なにか自分が期待していた登山と少し違うなという思いが残った山旅となった。そんな時、中村さんのこの地域への紀行を読み、その後度々山岳雑誌で紀行文を拝見するうち、いつのまにか中村さんの行動を注目する様になっていた。

そんなことが切っ掛けで昨年、中村さんの云うチベットで一番大きい氷河であるカンリガルポ山群の中央部にある拉古氷河に入ってみた。短時間ではあったがベンガル湾のモンスーンの影響を受け発達した未知な大氷河と氷河湖、中村さんはこの光景をパタゴニアかアラスカといっているが、私にはグリーンランドの氷河とフィヨルドを思い出させてくれた。また氷河に磨かれた風格を持つ山岳群、モンスーンが育てた森林と谷に沿った放牧地、農耕地と民家はたいへん調和のとれた美しい風景であり、その中を現地のチベッタンとヤクと共に歩いた氷河の山旅は充実したものであった。しかし、私達のカンリガルポの旅は二週間の滞在にも関わらず、この土地の全体像を捉えることができなかった。

それに比べ中村さんは強い執念と執着が動かすのか、強い運の持ち主である。五月にこの地域を訪れ一瞬の雲の晴れ間をとらえ、この山群の最高峰とアザ、拉古氷河とその周辺の山々の写真をとられ、私達に公開した。その紀行は我々を魅了し、なお過去のこの地域への探検家たちのあしどりを検証し、この土地の住人の生活を伝えてくれる。中村さんの筆になるとパンディット・キシュン・シンやベイリー、コールバック、キングドン・ウォードがいまもなお元気に生きて旅を続けているような面白い文章である。

中村さんの漂白の旅はどこまで続くのであろうか。たいていの登山家は、常にその地域の最高峰の登山に集中し、そこが登

られると場所を移し、他の土地に移動していく事が多い。この広い地域でも日本のいくつかの登山隊がスポット的に入り、登山した事実は伝わってくるが、この地域の全体像が私達に伝わってこない。どのような土地か、どのような人々が住んでおり、どのような山々があるのかはっきりしない。こうした中で、今回の中村さんの面的なひろがりを持つ本が出版された意味は大きい。中村さんの今後のご活躍を期待する一人である。

（池田錦重）

山本正嘉 著

『登山の運動生理学百科』

東京新聞出版局　二〇〇〇年八月刊
A5版　三一〇ページ　二〇〇〇円

七年前、私は雑誌『岳人』に「新進クライマー列伝」という連載をしていた。その二十番目の人物ルポルタージュが山本正嘉さんだった（岳人九五年九月号）。その時、彼の人となりをこうタイトル付けた。「知識、経験、体力。確かな視座で登山を科学する」と。

ちょうどその頃、中高年のヒマラヤ詣でが盛んになりつつあり、その記事にこんな事を書いた。

〝ある八千㍍峰に挑む登山隊から壮行会の案内をもらった。メンバー構成は六十歳代から二十歳代まで五世代に渡るという珍しい隊である。したがって平均年齢は十分に高い。

案内状には肩肘張らずにヒマラヤを存分に楽しんでこようという爽やかさが滲み出ていて気分いいものだった。案内の要旨は、ヒマラヤはもはやスペシャリストだけの世界ではない。最近の中高年パワーの活躍を踏まえ、しっかりとしたトレーニングを積めば手の届く冒険で、隊員各自それぞれの夢を実現するために組織したというものだった。

今の日本の登山界は、年代が高いほど非常にナチュラルな意志を示すようになるのかとニヤリとしてしまった。悲壮感は微塵もなく、どんな登り方をしようが人に迷惑がかからない限り自由なんだというスタンスが心地よかった。

トレーニングを重ねれば手の届く冒険か、と思いをめぐらせていた時「運動生理学者のチョーオュー無酸素登山」（岳人九五年八月号）と「運動生理学の成果と陥穽（かんせい）」（山渓九五年八月号）という二つの論文が目に付いた。筆者は國際武道大学の山本正嘉助教授（三十七歳）である（現：国立鹿屋体育大学スポーツトレーニング教育研究センター助教授）。

彼はこの春、十四年振りに八千㍍峰無酸素登山に再挑戦した。隊長小西浩文、隊員山本それにシェルパの三名のみ。（山本さ

んには）運動生理学の研究者の立場から、自分自身を実験台にして高所での体の反応に関するデータを取るという目的があった。頂上までの過程の中で、持論がいかに高所登山に通用するか、自分の知識の確認という誰もやらなかった意欲的な試みである。行動計画とチャレンジの顛末、そして実際とのズレと誤算、反省までが整然とした論旨で記されていた。

「…そんな私が十四年振りの高所登山にもかかわらず登頂できたということは、適切な方法で登山を行えば、八千㍍峰の無酸素登山も多くの人にとって可能なことを示しているように思われる。」と結んでいる。興味あるデータとともに、その軌跡が如実にうかがわれる価値ある論文である。〃

山本さんは八〇年の夏ガルワール・ヒマラヤの鋭峰シヴリン（六五三四㍍）北壁を初登攀した東大スキー山岳部の猛者だ。当時二十三歳の彼をはじめとする現役学生主体の登山隊は、平均年齢二十三・六歳という若く溌剌とした隊だった。翌年はアコンカグア南壁を二人だけのアルパインスタイルで完登、それも上部岩壁は新ルートというおまけ付きだ。

その後、大学に職を得て教壇に立ちながら〃登山と疲労〃や〃登山家の体力測定〃をはじめ数々の登山に関する運動生理学の研究を続ける。海外への山登りはしばらく鳴りを潜めた。しかし、〃八千㍍を無酸素で登ってみたい〃という夢に向けて九五年にチョー・オユー（八二〇一㍍）に羽ばたいた。

それもただ登るためだけではない、野心的な研究目的を帯びてのものである。自らを実験台としての同時進行の調査は並の努力ではできない。そういった意味で、彼のこの〃仕事〃の評価はすこぶる高いものがある。

この研究の発端は専門家というより、ヒマラヤニストとして自らの登頂に向けてのものと理解した。ずいぶん具体的で実は私自身も新鮮なものに響いた。

当時、山本さんは、「真剣勝負の八千㍍無酸素登山は、失敗が即、生命の危険に結びつくから、いくら経験が必要といっても失敗の積み重ねで熟達していく方法では危険が大きい」とし、そのためにトレーニング、自己体力の把握、高所衰退と防衛体力、呼吸法などを登山のタクティクスと同じように位置づけて、解明していかねばならない。という発言をしている。

でもよく考えてみると、これはなにも、登攀や高山ばかりを対象にしたものではない。クライマーやヒマラヤニストも含めたすべての登山愛好家にあてはまる問題だと感じた。運動生理学そのものは、特に中高年、熟年には気に掛かる内容である。なにしろ中高年の山での不可解な遭難問題が大きく社会問題化していたからだ。

いま、人は「快適さの追求」にはすこぶる熱心である。しかし、その過程で生じる面倒なものは、極力回避し先送りというのが時流だ。すべてが人任せといった風潮が幅を効かしている。

そんな中「危機管理」がことさら強調されはじめたが、一般的に言って地震や台風や余程の天災でも直接の被害者以外、怖さは一過性で学習する姿勢は見えてこない。人ごとのような無関心さが潜んでいる。すべてを人工的な安全の中に暮らす人々は耐えて生き抜く能力をどうも失いつつある。

この傾向は登山愛好家にもはっきりいえることで、自然環境、施設、装備、食料、行動にいたる全てにおいて快適・容易を追求し、山での遭難も安全管理されていることと勘違いし、人任せの風潮がはびこっている。だから危急対策など、個々の危機管理を学習しようとする姿勢が登山者に非常に薄くなっている。その基礎である身体（体力や技量）に対しての学習も不熱心に見える。

とくに中高年にその傾向が強い。登山愛好者の数に対する中高年の割合、それに対応する遭難者の数と遭難死の割合を推し量ると、個々の総合的体力というものをそれぞれが把握しているとは到底思えないのだ。自分の安全を管理するのは他人ではない、自分であるという単純なことを忘れている。

安全管理というものを外部に託すことは、登山者として「私は最低レベルなんです」ということを喧伝しているのと同じである。新しい通信手段やヘリなどの機動力、探索・捜索信号発振器、体調管理医療機器などの文明機器は、安全性を運んではくれるが、生き抜く身体の体力や能力は与えてはくれない。

私は登山の危機管理を学習する教科書にはつぎの二つが最適と考えている。ひとつは遭難史、遭難報告や追悼集といった失敗談である。もうひとつは身体の仕組みを教えてくれる生理学の本である。身体の本は読むだけで健康にはならないが、知識として知っているか知らないかでは雲泥の差がでる。

当時山本さんが前後して発表した幾多の論文はその意味では、いままでにない参考文献といえた。

その論文を元に、『岳人』誌に九六年五月から九七年八月まで十六回に渡り連載した記事をまとめたものがここで紹介する『登山の運動生理学百科』である。読んでさらにその感を強くした。

内容は第一部：基礎編　①登山と健康、②登山と疲労、③中高年者、女性、子供の登山、④登山と体力トレーニング。第二部：発展編　⑤クライミング、⑥高所登山と整理されている。非常にテンポよく平易な言葉で表現され、百科と銘打っているだけに辞典的要素も含まれ、コラムが楽しい読み物でアクセントになってまとまりがよい。

この書は、いきなり学説が錯綜するような閉口ものとは違う。特徴は懇切丁寧、平易な文章と理解しやすい内容にある。その理由は、彼自身が実際に登って実験をし、データをとり、表示し結論付けているというところに説得力があるからだ。

われわれ自らの体験と照らし合わせることのできる部分も多々

あり、登山における身体の生理反応という分かりづらい問題を、充分にかみ砕き、知識より知恵として頭に入りやすく表現してくれている。教鞭をとる彼の本領が随所に発揮されている。だから類書にはみられない、読み進むに楽な本である。いずれはバイブル本になるであろう。

さらに、通読すると彼の登山観というものが明確に見えてきて面白い。ある意味では学問的啓蒙のスタイルをとりながら、彼の登山論を展開した興味深い山岳書ともいえる。

この本を読めば即個々の身体的問題の総てが解決されるわけではないが、道理を理解することにより身体の問題に対処する方法がわかり、登山中におおいなる余裕が生まれることは確かである。それは山登りを精神的にも体力的にも気楽にし、知識をより豊かにするに役に立つものだ。

一般から熟年にいたる登山愛好家すべてに薦めたい。さらに健康に言及することによって、登山と運動生理学をやさしく説いている本書は、登山者ばかりではなく一般の中高年にも是非読んでもらいたいものである。

（大蔵喜福）

宮森常雄　著

『カラコルム・ヒンズークシュ登山地図』

宮森常雄・雁部貞夫　編著

『カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究』

京都・ナカニシヤ出版、二〇〇一年五月刊
地図B全判（83×69cm）十三図葉
研究B4変型（21・8×30・5cm）
両者ケース入り（38×23×8・5cm）
セット三万三〇〇〇円

カラコルムとヒンズークシュの地図に関して、宮森常雄氏の右にでるものはいない、といって過言ではないと思う。四十年ほど前の青焼きからはじまり、それ以来、いく度も改訂を重ねて、ついにその決定版ともいえる登山地図が完成、刊行された。しかし、情熱的で貪欲なまでの資料収集、その整理、そして、詮索好きと凝り性をかねがね知るものには、それほど驚くに当たらないのかもしれないが……。

地図はいわゆるカムカルテ（スケルトン・マップ）という、

尾根線と谷線が主体の概念図である。尾根線は濃い茶色、水系（河川と氷河）は青色、道路と地名・標高は黒色。縮尺は十二図葉が一五万分の一。三角印▲と丸印●の赤いものは既登峰を示す。これによって、この地図の作成時点での未踏峰が一目瞭然となる。また、主な高峰には赤色の破線で初登頂のルートが示され、年度と国名が略号で入り、さらに初期の探検家・先駆者の足跡ルートも記入されている。ただ残念なことに、尾根線の茶色と、黒い文字の山名や標高が重なって、読みにくいところが若干ある。尾根線の茶色の濃度を二〇パーセントほど減じてもよかったのではないか。

この十二図葉でヒンズークシュ西端の東経71度から、カラコルム東部のサセール・カンリの東経78度までをカバーし、五色刷、ほとんどがB全判である。英文タイトルは〈Mountaineering Maps of the Karakorum & Hindu-Kush〉で、西から東へと順に番号がつけられている。

ヒンズークシュとヒンズーラジ

①東ヒンズークシュとティリチ・ミール
②南ヒンズーラジとチトラル
③東ヒンズークシュとマストゥジ
④東ヒンズーラジとヤシン

カラコルム

⑤バトゥーラ氷河とフンザ
⑥ナンガ・パルバットとギルギット
⑦ヒスパー氷河とシムシャール
⑧ビアフォ氷河とスカルドゥ
⑨インスガイティ氷河
⑩バルトロ氷河とカプル
⑪シアチェン氷河とリモ氷河
⑫ヌブラ川とシャイヨク川、サセール・カンリ

最後の第13図は等高線入りの「バルトロ氷河」の詳細図（七万五〇〇〇分の一）で、サイズは95×62㎝である。これは一九七七年のK2登山隊の報告書についた一四万分の一、その改訂版一〇万分の一（一九七八年）、さらにその改訂版（『山岳年鑑一九八八年』の付図、一〇万分の一、一九八八年）にもとづいた決定版である。図中には矢印のついた赤線が入っており、それは雪崩のルートを示すというが、では、矢印のないところは雪崩がなく、安全なのかという、ヘソ曲がり的な曲解が生じるかもしれない。傾斜があれば、どこでも雪崩が発生する可能性があり、この赤矢印はなくてもよかったのではないか。そして、この赤矢印についての説明は地図にないようである。

ついでに、地図の「凡例」で気になったことをいくつか列記すると、US、NZは通常、すべて大文字であろう。About Heights よりも Approximate Heights がよいように思う。ス

ペルの間違った単語がいくつも見られ、国際性を考えると、英単語の校正にはもっと念を入れてほしかった。

この種のカムカルテでは、イギリスのレーマン・マップス社から縮尺二〇万分の一で、『インド・ヒマラヤ』（八枚セット、一九八八～八九年）、『カラコルム』（四枚セット、一九九五年ごろ）、『ネパール・ヒマラヤ』（七枚セット?、一九九五年）のトレッキング・登山用地図が市販されている。冷戦が終わって十有余年、そして日夜、人工衛星が上空を飛び交っているというのに、大縮尺の地形図はインド、パキスタン、中国、旧ソ連（一部は海外に流出）では「極秘」扱い。かつての日本もそんな時代があったが、アメリカは地図はもとより、日本全土の航空写真を手にしていた。

一方、対照的にネパールでは、フィンランドと日本の協力・援助によって、まだ全部ではないけれど、続々と地形図（五万分の一と二・五万分の一）が作成され、公刊、市販されている。ヒマラヤ地域で自国の大縮尺地形図を販売する唯一の国である。ならば、ネパールで宮森図のような登山用地図は不要なのだろうか。いや、「シャングリラ・マップ」のシリーズのように各山群ごとに編集したトレッキングと登山用の地図は、大いに便利に違いない。

いずれにせよ、長年にわたって蓄積したデータをもとにし、十三図葉にまとめあげた一大労作と、そのエネルギーにただ脱帽するのみ。あわせて、それを世に送り出すことを英断されたナカニシヤ出版の社長・中西健夫氏にも心から拍手を送りたい。日本が世界に誇れる地図集となった。

つぎに、ずっしりと重い、別冊の『山岳研究』はB4変型、xi＋三七一頁。地図に記載された六〇〇〇メートル以上の一二一五座を山域別に区分し、各山ごとに山名、高度（新・旧）、位置、初登頂（年度、隊名など）、地図との対応などを記述する。そこにパノラマ写真など、日本隊が撮影した一六五点もの写真が加わり、山座同定などを楽しく行える。どれも見事な写真で、資料としてたいへん貴重なものばかり。これはいわば、山名事典となっている。ここで気になったのは略記号の「f」である。フィートには一般的に「ft.」を使うし、また、「Un Named Peak」は「Unnamed Peak」がベターではないか。

参考資料として、「ヒマラヤ地名考」、「チトラル語・語彙集」、「東部ヒンズークシュ地名・山名考」とその英訳、山名索引などが巻末に並ぶ。P・ヴィトーの「ヒマラヤ地名考」はスイス山岳研究財団の『ジャーナル』（第二巻第九号、一九六〇年）に発表されたもので、いまからみれば、あまり新しくない。最初の項目の〈AMA〉はチベット語、シェルパ語、ネパール語で、ともに「母」という一般的な意味がある。また、私事になりそうだが、参考文献の78番はつぎが正しい。

78 Filippo de Filippi (ed.): An Account of Tibet. The travel

of Ippolito Desideri, London, G. Routledge, 1931 & rev. ed. 1939.

薬師義美訳『チベットの報告』（全二巻）平凡社、一九九一～九二年

ほかに「カラコルムの命名法」など、コラムが七編ある。刊行の準備を耳にしてから何年経ったろうか。本当にご苦労様といいたい。編著者にも、出版社にも！　そして、これはわが国だけにとどまらず、世界の登山界、ヒマラヤ研究に大きなケルンを築き、登山の文化史上、きわめて意義深いものとなった。これまで筆者が並べてきた御託などは、まったく瑣末的なことである。価格が高いか否かは、それを利用する人次第であり、版を重ねるぐらいに部数がでることを期待したい。

この十月に開かれたフランクフルトの世界最大の「ブックフェア」に出品されたが、その反響はいかがなものであったろうか。

（薬師義美）

『日本の地形』全七巻

全巻編集委員：貝塚爽平・太田陽子・小疇　尚・小池一之・鎮西清高・野上道男・町田　洋・松田時彦・米倉伸之

東京大学出版会

第一巻「総説」二〇〇一年三月刊

B五版　三四九ページ　五八〇〇円

我が国で初めて、全国を詳しく網羅した地形誌の刊行が始まっている。昨年末に第一回配本の第四巻『関東・伊豆小笠原』、今春には第一巻『総説』。この年末に三回目の配本として『九州・南西諸島』、続いて来春ごろに『北海道』を予定とのことであり、さらに、『東北』、『中部』、『近畿・中国・四国』が続いて発刊される。

本シリーズの特徴は、日本列島および各地域別の地形の成り立ちを、地形発達史・形成史に重点をおいて、地域ごとに説明したものである。当然に、これまでの研究成果に立脚した内容である一方で、新たに製作された図表も多く載せ、専門用語の多用を抑えて、地形に興味を抱く一般読者にもわかり易い記述となっている。また、各ページには、本文記述を補うための注

記も豊富である。

「刊行のことば」の趣旨を一部援用すれば、地形は地球表面そのものの形態であって、人間活動の舞台である。地形は、地球表面での多種多様な自然のはたらきと人間による土地改良の歴史の、現在にいたる最終生成物としてひろがっている。そして、日本列島の地形はきわめて変化に富むことで知られ、それが風景の土台をつくっている。

このシリーズが企画された背景は、自然史と人間活動が刻まれている日本の地形の姿とその形成過程、すなわち地形発達史をこの列島に住む多くの人々に知って貰い、これからの地形環境の保全・創成や防災・土地利用に、また、風景にひそむ歴史を読むのにも役立ててほしいと願ってのことの由である。

シリーズ刊行の計画は、一九九一年に着手されて全体の企画が進められた。初期には、全国の地形区分をどの様に考えるかの議論が長期に亘つて進められた。「地形区分図」については、かつて地理調査所による「自然地域区分」（一九五四）があって、山地・山脈や平野などの名称とともに、国土地理院の小縮尺地図を始めとして教科書地図帳などの分野で今も用いられている。一方では、それにおける区分または地形区名称については、その現地では必ずしも使われていない名称があるなど一部疑問とする声も以前からあって、『理科年表』（丸善、毎年刊）では、十年以上前から別の図が採用されてきた。本書では、日本列島の地形区分について、それに関連した研究者共通の認識としての確定版とも言うべき考え方が、図および区分表として提示された。

最初の発行となった『関東・伊豆小笠原』では、二千メートル級の山地・火山から、台地・低地、海湾・島嶼など、多種多彩な地形で構成されるこの地方について、二四名の著者によって、地形の発達史、形成史に重点をおいて詳細に解説されている。

巻頭には、地方を代表する地形景観の写真多数に続いて、岡山（一九八八）による百万分一接峰面図（その関東地方部分、以下も同じ）や、地形陰影を施した地質図および地形区分図が掲げられている。後者の二図は、国土地理院によるディジタル標高データ（数値地図五十メートルメッシュ「標高」）を使用して作られたもので、従来の地形図によるのでは得られなかった高精細な地形レリーフに、改めて目を見張る思いである。この種の数値データは、地形計測における活用や本書に掲げられた各種の図に見るように、地形の世界に新しい視覚化表現の世界を拓きつつあるように見える。

続いて、前述の「地形区分図」に対応する表（大・中・小区分）が掲げられ、その区分を記述の単位としての説明が展開される。なお、それに先だって、地形特性と地形発達を理解するための「総説」として、この地方の大地形と地形区分、プレート運動との関係、地形研究史・地質の概要、地形・地質の編年

が解説されている。

以上が第一回配本の『関東・伊豆小笠原』であり、今後の各巻とも、同様の構成となろう。

我が国における山地面積は、国土の七割を占めており、本書においても、当然のことながら山地に関する記載内容は豊富である。

日頃の山歩きで目にする興味ある地形、氷河地形や雪蝕地形、各種の火山地形、特徴ある水系パターン、地質構成・構造が支配して様々な見かけをなす地形。あるいは、丘陵部や平野・海岸の散策において目にする平坦地の地形と古地理の変遷。自然地理に興味をいだく者にとっては、本書は、普段目にする地形についての豊富な知識の宝庫であろう。

一方、今年三月刊の『総説』では、各地方編の理解を助けるための基本的事項の記述に重きが置かれている。日本列島と周辺海底の大地形を概観し、列島の基盤地質と地形形成環境、列島を構成する山地、火山、平野、海底の地形特性のほか、人間による地形改変と災害、日本列島の生い立ち（地形発達史）について記述され、日本における地形研究史についても言及されている。

全巻を通しての執筆者は百十一名にわたり、文字どおり、日本の地形学・第四紀学の関係者の総力をあげた成果であり、二十世紀におけるこの分野の研究の総大成でもある。

ところで、このシリーズの作成は、日本の地形学・第四紀学の発展に大きな功績のあった貝塚爽平氏の発案によるものであった。二十世紀初めに着手された我が国の地形学においてなされてきた近代的な調査研究の成果を、百年を経た時点で総括しようとの趣旨で企画は進められ、常に広い視野からの計画推進に当たってこられたが、この事業の途上、一九九八年秋にご逝去された。

一方、『総説』の巻は、米倉伸之氏が中心となって、多数にわたる執筆者相互の調整や加筆を行い、加えて、前述の全国の地形区分についても、地方ごとにばらつきのあったものの総合・統一に心労を注がれたと伺っている。或いはその無理があったのか、本の完成後間もなく闘病生活となって七月末にご逝去された。

なお、このシリーズの刊行は、東京大学出版会の創立五十周年記念事業の一環である。その編集実務においては、編著者多数からの錯綜した原稿・原図が寄せられたであろうことは想像に難くないが、それらが統一的にレイアウトされ、隅々にまで細かな気配りがなされている。出版された美しい表紙カバーの二冊を座右において、どのページを開いても、程良いバランスで美しい仕上がりの図版と、緻密な内容ながらも判り易い記述の本文。地形・地質に志した者としては至福の限りである。

（長岡正利）

Edited by Harish Kapadia

A PASSAGE TO HIMALAYA

Oxford University Press, Delhi, 2001
230×150, 351 pp. no price

この本はヒマラヤン・ジャーナル（ＨＪ）の編集者が、既に五十六冊発刊されたＨＪの記事の中から、およそ七十遍を選んだアンソロジーである。本年は周年期でもなく、切りが良い号数でもないのに、なぜ今この本が編まれたかと言えば、二十一世紀になり、新たな世紀に向けてこれまでのＨＪを読み直す（会員には無料配布）という意味らしい。編者のカパディア氏は、ほかにもヒマラヤン・クラブの名で、「ミレニアム企画」を幾つか実現している。

編集者の前書きには選んだ基準も、なんらかの方針も特になくthe best writingsという以外に何も書かれていないことから、各冊が三〇〇ページ前後の五十六冊のＨＪを前に、数名の編集チームでこれと思う記事（詩も四編含まれる）を各自選び出し、おおよその項目に割り振り、その上で十五の章に分けて並べたということであろうか。目次上のその各項目とは、創設期、郷愁、探検的活動、特定の地域、パイオニア的登山、登山の数々、ナンダ・デヴィ、踏査、遭難と救助、社会と自然の記述、物語の数々、紳士録、書評、追悼、会員通信である。その他写真もかつてＨＪ誌を飾ったものを使っている。書かれている内容もさることながら、書いている人物が誰であるかにも当然注意が注がれている。

例えば一九七〇年代以降のＨＪを開くと、ネパールとインドの初登攀の記録がずらっと並んでいるが、そのような記事はここには全く選び出されていない。新しい登攀記録では一九八九年のＴ・チェセンのジャヌー・ソロくらいだが、遭難と救助の章には、カパディア自身も加わった一九九二年のパンチチュリの顛末が選ばれて、これが最も新しいところである。どの号からも一応満遍なくという傾向はうかがえるが、それがそのままベストだということになればこの上ないことだ。この種の本では編集者の好みが強く出るのは当然であろうが、常日頃ＨＪのバックナンバーに親しみ、永らく編集に携わる者ならではの仕事といえる。スペースの関係から長い記事は短縮化を行なわざるを得ないし、欄外に註の必要なものもある。ゆかりある人物のスケッチをカットに使い、章区分のページに短く内容や意図を説明するなどの「本」にするための作業を加えてある。

カパディア氏は区切りを見付けて、何等かの意図のもとにまとめてゆくことが得意なようである。ヒマラヤン・クラブ五十

周年の折りにはExploring the Hidden Himalaya, 1990というインド・ヒマラヤ各山域の説明、登山史を美しく珍しい写真とともにまとめた本を作ったし、ヒマラヤン・ジャーナルが五十号になった一九九四年の号は、「特集号」を兼ねた編集を行っている。今回のアンソロジーはその「特集号」の続編と言えないことはない。五十号では長老会員の寄稿（当然思い出話になるが、歴史的な逸話も含まれる）と兄弟誌とも言い得るアルパイン・ジャーナルとアメリカン・アルパイン・ジャーナルの編集者による「編集話」、第四代編集者のT・ブラハムの歴代編集者論、そして現役カパディアのHJ概略史と続く。さらにアシスタントのM・コントラクターがHJとの関わりを書き、協力的な寄稿者のアミール・アリは、四十八号から連載中のHJ各号の内容紹介（五十号では第三巻について）をしている。

このようにカパディア氏をはじめとする編集スタッフは、常に記事の内容を吟味し、整理していつでもそれらを役立てられるように準備におこたりないようにみえる。翻って『山岳』はどうなっているだろうか。編集者は短期に、しかも前後の脈絡もないまま交替しているのが最近の慣例である。ごく身近な課題として、百周年＝第百年号の特集はあるのだろうかということが大いに気に懸かるところである。『山岳』を活用するための方法を考えること、まずそこから始めねばなるまい。

（児玉　茂）

会報「山」図書紹介一覧―二〇〇〇年度―

●五月号（六六〇号）

尾瀬総合学術調査団・編『尾瀬の総合研究』（尾瀬総合学術調査団発行）

神長幹雄著『運命の雪稜』―高峰に逝った友へのレクィエム（山と溪谷社）

木暮理太郎著『山の憶い出（上・下巻）』（平凡社）

大久保昭次著『ぶらり・山と花のひとり旅』（㈱近代文芸社）

筒井迪夫著『森への憧憬―第一集・心に残るドイツの林学者たち―』（林野弘済会）

内田嘉弘著『大和まほろばの山旅』（ナカニシヤ出版）

●六月号（六六一号）

永野敏夫、永野正子・著『南アルプス　大いなる山・静かなる山』（黒船出版）

道新スポーツ編『北海道の百名山』（北海道新聞社）

オーレル・スタイン著／澤崎順之助訳『中央アジア踏査記』―新装版―（白水社）

松村武生著―岳人ポケットガイド―『近畿の山Ⅰ―三重・滋賀・京都』『近畿の山Ⅱ―大阪・兵庫・奈良・和歌山』（東京新聞出版局）

THE HIMALAYAN JOURNAL—Vol. 55 1999 (HIMALAYANCLUB, Bombay)

●八月号（六六二号）

山岸武猛男著『丹沢尊仏山荘物語』（山と溪谷社）

大蔵喜福著、沢野ひとし絵『エベレストのぼらせます』—中高年のためのわがまま登山術—（小学館）

横山厚夫著『山麓亭百話（上巻）』（白山書房）

松本清著『よみがえれ池塘よ草原よ』（山と溪谷社）

日本登山医学研究会編『登山の医学ハンドブック』（杏林書院）

深野稔生著『宮城山遊び山語り—蔵王・二口編、栗駒・船形編』（有無名舎出版）

●九月号（六六四号）

関西学院大学山岳部八十年史編集委員会編『DAS EDELWEISS』（第十七号 山岳部八十年史）（関西学院大学山岳会）

新妻喜永著『花の山旅・八ヶ岳』（実業之日本社）

同人シルバータートル編『夢 時を越えて』（同人シルバータートル）

●十月号（六六五号）

和賀山塊自然学術調査会編『和賀山塊の自然—和賀山塊学術調査報告書—』（非売品）

立教大学ガッシャブルムⅡ峰登山隊一九九九編『遠き山 加舒尓布魯木Ⅱ峰』（立教大学ガッシャブルムⅡ峰登山隊一九九九）

W・マンツェンライター著『DIE SOZIALE KONSTRUKTION DES JAPANISCHEN ALPINISMUS（日本アルピニズムの社会的形成）』（Abteilung für Japanologie）

山本紀夫／稲村哲也編著『ヒマラヤの環境誌—山岳地域の自然とシェルパの世界—』（八坂書房）

新潟県山岳協会監修『新潟 花の山旅』（㈱新潟日報事業社）

杉田博著『名山スケッチ漫筆』（日本山書の会）

●十一月号（六六六号）

小浜浩三著『妻と二人の山歩き—実践篇』（光人社）

東京大学山の会編『輝けるときの記憶 山の友Ⅱ』（東京大学山の会）

●十二月号（六六七号）

日本山岳会秋田支部編『日本山岳会秋田支部 設立四十周年記念誌』（日本山岳会秋田支部）

秋月俊幸著『日本北辺の探検と地図の歴史』（北海道大学図書刊行会）

堀公俊著『日本の分水嶺』（山と溪谷社）

H・ハーラー著／長谷見敏訳『新編・白い蜘蛛』（山と溪谷社）

●一月号（六六八号）

リュックサック編集委員会編『リュックサック80周年記念号』（稲門山岳会）

阿部幹雄著『生と死のミニャ・コンガ』（山と溪谷社）

上村信太郎著『その山登り間違ってませんか』（山と溪谷社）
P・スティール著／倉知敬訳『エリック・シプトン―山岳探検家・波瀾の生涯―』（山と溪谷社）
HARISH KOHLI 著『across the frozen himalaya』（INDUS PUBLISHING COMPANY, NEW DELHI）

●二月号（六六九号）

クルト・ディームベルガー著／海津正彦訳『K2嵐の夏』
THE ENDLESS KNOT（山と溪谷社）
岩橋崇至著『北アルプス大百科』（TBSブリタニカ）
水野勉著『山書との対話』（私家版）
山本正嘉著『登山の運動生理学百科』（東京新聞出版局）
酒井敏明著『旅人たちのパミール』（有春風社）
塚本珪一著『アウトドアライフ論』（ナカニシヤ出版）
ラインホルト・メスナー著／黒沢孝夫訳『マロリーは二度死んだ』（山と溪谷社）
藤本一美／田代博編著『車窓展望の山旅―鉄道で楽しむ山―』（実業之日本社）

追悼

サムエル・ブラヴァント氏

SAMUEL BRAWAND（1898～2001）

昨年暮れに貰った、孫娘のマルグリットからの手紙に、祖父は百二歳だが気力もあり、昔のことを喜んで話す、健康も大丈夫なのでまたグリンデルワルトに来てくれると嬉しい、と書いてあった。そこで、今夏、同村を訪れるという岳友にマルグリット宛ての手紙を託した。このとき、ブラヴァント氏の介護役をしていたE・ボス夫人が亡くなり同氏の気力や体力が急速に衰えているようだと聞いた。亡くなったのが七月十一日なので、それから間もなくだったらしい。マルグリットから届いた死亡通知状の消印が七月十二日だったから、衰弱の程度はローソクの火が燃えつきるようにほぼ予測できたのだろう。

ブラヴァント氏が生まれたのは一八九八（明治三十一）年五月十八日で、昨年、同氏が地元の新聞記者に話したものを読むと、当時のグリンデルワルトは極端に貧しく、観光客からの間接的な施しで生活を補った、というように表現している。氏が四歳のとき山案内を兼業していた父がヴェッターホルンで雷にやられたことは聞いていたが、遭難した四人が落雷で遠くにはね飛ばされ、山頂に残ったピッケルはシャフトが裂け、石突きの部分が溶けていたというのは初めて聞いた。

未亡人となったブラヴァント氏の母は氏が七歳のとき伯父のP・ブラヴァントと再婚した。どの仕事についてもよいが、山案内人だけにはなるな、と母にいわれ、教師になる道を選んだという。一九一八年から約三十年、ベルン州の閣僚になるまでは、学校関係の仕事もしていたようにみえる。

氏が赴任したグリンデルワルトの高等中学校には四十八人の生徒がいたが、教室は小さく全員が入り切れなかったという。現在とは違い、生徒の数は多く、教師の給料は少なかった。このため結婚をひかえたブラヴァント氏は生活費の不足を補うため山案内人の資格を取ることになった。夏休みの間に稼ぐガイド料の総額は、教師の年収の半分もあったそうだ。それまでの厳しい生活について氏は私たち日本人に何も話してはいないが、当時グリンデルワルトにいた日本人、特に槇さんなどがうすうす感じていたらしい様子は、麻生（武治）さんなどの話から窺える。槇さんが一九一九年にグリンデルワルトのアドラーに滞在したのはこのときだった。

氏の案内人手帳に槇さんは、「凡ての好性質を具えたる案内なり。『血が山をこがれる』と言ふ詞の如く、ヴェッターホル

ン山頂に死せし父の名を恥しめざる人格の所有者なり、年未だ若しと雖も其優れたる体格と周到なる配慮は嶄然として案内中に立てり。後来の諸賢に衷心より推薦して止まず」と氏について書いている。

槙さんが学ぼうとしたドイツ語のテキストにG・ケラーの作品を選んだというから、お二方のものを見る目、身についた教養の程度も推し量れる。亡くなった田口（二郎）さんなどから見ると、登山技術の点では氏よりフリッツ・アマターのほうが上だったようだが、槙さんがブラヴァント氏を知ったことで、形而下的な山の世界以外のものも日本に持ち帰れたような気がする。それ以来、多くの日本人登山者がスイスを訪れた。

「山小屋に到着する三〇分前くらいの所で小一時間の休息をし、身繕いを正し、ゆっくりと小屋に着くのが登山の基本作法だ」と、渡辺（兵力）さんは、当時スイスの山案内人から教えられたという父上の八郎さんからの話を今でも覚えている。「登山」は山麓の村人が普段の生活道具（服装・食べ物・家具）を持って山地を歩く運動、との理解がこの辺りの当時の人々の考え方だったらしいと渡辺さんは言っている。安全登山の基本なのだ。

氏の案内で登った書上（喜太郎）さんはガイド料を払えなかったが、このことは、氏が社会民主党に属したこととつながるようだ。氏を政治家として成功させたのはグリンデルワルト出身で連邦大臣をやったE・ノブスのおかげだ、とかつて田口さんから聞いた。ノブスはレーニンとも親交があったという。

一九五七年にスイス航空が東京へ乗り入れた時、スイス関係者とともに国会議員の一人として来日した元山案内人の氏を本会の会員は大歓迎したが、その歓迎ぶりはスイス連邦大臣を凌ぐものだった。このため、ブラヴァント氏には終生忘れられない思い出となった。そのときのものと思われる秩父宮妃殿下のお美しい写真を氏が誇らしげに私に見せたのを思い出す。

BLS鉄道の取締役、ベルン州のプレジデント、ベルン大学から授与された名誉博士号など、山以外の分野での氏の業績を知ることができるが、ここで第二次世界大戦の終わるころスイス連邦赦免委員会の委員長をしていた氏のことに少し触れておきたい。

氏はスパイとして銃殺されそうな若者や密輸・密猟にかかわった若者を救ったらしい。

「私の見るところ彼らには深く同情するところがあった。それは客観的判断力の欠けているところが彼らにあると思えたからだ」と氏は述べている。

これを見て、私は、連合国側に立つ者に向かって、枢軸国側にある祖国、日本の立場を懸命に弁護しベルンで客死した若き日の田口一郎さんの話をするブラヴァント氏を思い出し、そして、松方さんを羨ましがらせた、グリンデルワルトの田口一郎

さんの墓を思い浮かべ、中立国スイスの真髄に触れたような気にさせられたのである。

一九五七年に槇さんがグリンデルワルトをほぼ三十年ぶりに訪れたとき、地元の新聞はその理由を、この地にある美しい登山者魂から生まれた、人から人へと伝わる清い友情によって槇が貫かれているから、としていたが、晩年のブラヴァント氏は日本の山登りと仏教との関わりを考えたようだ。

貧しかったグリンデルワルトは観光客により経済的に豊かになった。これは社会民主党出身のブラヴァント氏には良かったのかも知れない。しかし、現在はわれわれの時代ではないとして、氏は、山を通してのおつき合いしかない私に、遠い昔の出来ごとを克明に話すことを期待していたようでもある。

「私の山旅の日は去ろうとしている」と槇さんは『わたしの山旅』の最終章で書いている。のっぽのブラヴァント氏もきっと槇さんたちの後ろをおおまたで追いかけているに違いない。

（サムエル・ブラヴァント氏は一九八八年日本山岳会名誉会員に推薦された。）

（岡澤祐吉）

平塚直秀氏（一九〇三〜二〇〇〇）

平塚直秀会員にはじめてお眼にかかったのは一九七四（昭和四十九）年の春だったか、その前年だったかはっきり覚えていないが、だいたいその頃である。平塚さんは、そもそもは一九三一（昭和六）年に入会された古い会員だったが、戦時をはさんで退会されていたのを知った私が、入会時の会員番号をそのまま使える復活会員としてもう一度再入会されては如何かとお勧めしたところ、ためらわず気持よく諒承されて、一九七九（昭和五十四）年十月復活会員となられ、爾来二〇〇〇（平成十二）年七月二十四日、九十七歳でなくなられるまで、御高齢にもかかわらず、会費などきちんと送られ会員としての責務を果たしてこられた。さぞ煩わしい思いをされていたのではないかと、今にして私は思う。

平塚さんは北海道大学の出身で、学生時代の大正後期、大学スキー部の熱心な部員であったことは、当時札幌で北大関係者有志の集まりで刊行されていた雑誌「山とスキー」にたびたび滑降理論などを寄稿されていたことなどからもうかがうことができる。北大では、日本山岳会草創期の会員であった宮部金吾教授に師事して、植物病理学・菌学を専攻された。

前後するが、平塚さんと私との関わりは、現鳥取大学（当時鳥取高農）、東京教育大学（現筑波大）の教授を歴任されたあと、研究生活最後の拠りどころとされた㈱日本きのこセンター菌蕈研究所（鳥取市所在）の所長を引き受けられてまもなくであった。私もそのころ仕事の関係から、その研究所の理事とか評議員をやらされていたため、年に数回鳥取へ出かけ、平塚さんとお会いする機会をもつようになっていた。あるとき、雑誌「山とスキー」に平塚さんの名前があったような、印象と言うか、古い記憶というかそんな感じがなんとなくひらめいたので、会議も終わりたぶん酒席に移ってからであろう、私はもしやと思いながら、「先生はむかし山へ登られた方ではありませんでしたか」とお聞きしてみた。その時点で平塚さんは東京教育大学の名誉教授、農学博士、理学博士の学位をもち、学者として容易にその席には座れない日本学士院会員にもなっておられたので、おそるおそるおたずねしてみたのであった。

意外なことに平塚さんから返ってきた答は、山やスキーに熱中していたことはもとより、「伊藤秀五郎君や槇有恒さんの紹介で日本山岳会の会員になっていたんですよ」ということ、会員番号は帰京後調べてみると一三〇七番、入会は一九三一年五月であった。そういう経過で、復活手続きはすべて私が取り進め、お陰で私は平塚さんと心易くおつき合いするようになった。ある年、私が大山へ登りたいのですがと言うと、それなら自分の代わりに弟子（教育大山岳部出身、研究員の農博金子繁氏）に案内させようと言われ、天狗ヶ峰は崩落がひどく登山禁止になっているからやめなさい、ナイフリッヂが続くが剣ヶ峰には是非登っていらっしゃい、と万端の助言をして下さった。新緑のブナ林や、大山キャラボクに霧氷がキラキラと美しかった。剣ヶ峰の頂上で伯耆の名山を心ゆくまで楽しめたのも、御同行は願えなかったけれど、平塚さんの心づかいのお陰であった。

平塚さんの山歴は、広範囲にわたっているため、詳述する紙面がないが、残されているメモから要約すると、大正九年から樺太の突岨山、樫保山、知取山、北海道大雪山系の山々、利尻岳、阿寒岳、余市岳、札幌岳他、昭和五年から木曽駒、八ヶ岳、日光白根、岩木山、岩手山、焼石岳、蔵王、朝日連峰、富士山、伯耆大山、小興安嶺（旧満州）、新高連峰（台湾）その他略。

積雪期に伯耆大山を麻生武治さんと二人で登った。たぶん初登山の筈だ、ということを平塚さんからうかがったことがある。麻生さんとも私は親しくしていたのでその話をしたら麻生さんもそう言っておられた。間違いないと思うので書きとめておきたい。

最後になったが、一九七三（昭和四十八）年十一月、勲二等瑞宝章を受けられている。

（織内信彦）

港　叶氏（一九一七〜二〇〇〇）

港叶氏は鳥取県西部で大山山麓に近い淀江町の生まれで早稲田大学に進学、当時の早稲田大学山岳部は黄金時代だったとか、内地の山に限らず台湾新高山の遠征にも参加し単なる登頂だけではなく、未登のルート開拓に成功した。時代が戦時下になり、登山も途絶えた時期を過ぎ、戦後は淀江町の自宅で旅館の経営の傍ら、大山寺部落に山小屋「大山ヒュッテ」も経営した。ここは本人の登山やスキーの拠点であり又山岳会員も利用する根拠地となった。私は学生時代であり交通機関が米子から大山までとどかない積雪期には荷上げのアルバイトで宿泊料と相殺してもらったこともあった。夏はバスがヒュッテのごく近く大山寺橋まで上がったので日帰りで北壁を登ったこともあるが、夏休みや冬休みに、連日の如く各ルートをこなせたのはこの小屋があってこそであった。学生だけでは困難な別山正面、三鈷峯西壁の未登コースは港氏の自信たっぷりのリーダーぶりに魅せられて同行したものである。最後の未登大屏風岩はかねてから港氏はコースの観察を繰り返し腹案ができていたらしい。一九四八年早稲田の富士山合宿に参加しそこなった腹いせにファイトをもやし大屏風岩への挑戦となったと本人の記述がある。大山のバリエーションルートには必ず稜線近くに特殊崩壊地があって、そのコースの選び方と登り方も登攀の成否に大きく影響する。港氏のコースの選定と巧みな登り方を見ならって、若いものだけで大屏風西壁と東壁や三鈷峯の東壁も初登することができたし遭難もさけられたと思う。

俗称泥壁の特殊崩壊地では以前の我流の登り方はスリップがこわいのでやたら大きな足場を堀っていたものであるが、港氏は根のある岩角を判断して足を斜面にフラットに押し、その岩角にバランス良く立って（スキーの斜滑降のように）斜めに登るというやり方だった。以後余計な足場カットによる落石がなくなった。

冬の積雪の多い大山では港氏は好んでスキー登山に応用した。港氏は元来スキーの方が登山より好きで早稲田でもスキー部を希望していたのに山岳部でもスキーが出来るからと強引に入れられたと遺族の話があった。一九四九年一月二十日大山ヒュッテ発約十㌔先の烏ヶ山へ日帰り登山をめざして横手道から鳥越峠にスキーデポ。烏ヶ山主峯の手前で正午となり雪の状態も悪いので断念したことがある。出発は午前二時四十分、帰着は午後六時二十分。港氏以外スキーにシールがない代りに荒縄をスキーに巻いて出かけたものだった。

大山頂上からのスキーでは、一度は縦走路をスキー担いでラクダの背附近まで行って引き返したこともあるが、八合沢の滑

降と正面の滑降では私は斜滑降停止キックターン、港氏は締まり雪でも深い雪でもあの急斜面で、いとも簡単にターンを繰り返し気分良さそうな滑降だった。

ユートピア越しに地獄谷をスキーで下り、一向平を経て関金方面へツアーしたこともある。又ヒマラヤ登山を想定して中宝珠越にC1。ユートピアにC2を設営し頂上往復の雪山トレーニングも行った。

雪山スキー登山では大山のようにブナの大木の樹林には中間木がなくジグザグ切ってラッセルすると登り易い。砂すべりの締まった雪ではスキーを置いてアイゼン。アイスバーンではステップカットなど、実際の登山で見習った。国体富士登山ではAコースを港氏、磐指、高田の三人パーティーが最優秀チームとの講評を得た。この国体参加は大山に国体誘致運動を兼ねて行われ、内定したように聞いた。

大山国体登山は大成功に終了。山陰支部が名ばかりの時期もあった。実質的活動は一九六六年頃より広江研氏が事務局になってから始まった。次々と個人会員が集まり、一九六九年にヒンズークシュ遠征に成功。一九八二年港支部長・井上事務局になって初めて現在のように毎月例会が開かれるようになり、「山陰の百山」の調査、写真、説明文が分担してまとめられ、発行にこぎつけたことは、港支部長時代の大きな成果であった。後に鳥取県出版文化賞を受け、絶版してからは幻の名書ともいわれた。

港氏は晩年入退院を繰り返され、病魔には勝てなかったようで、支部としてのバックボーンが失われ残念である。今後は天から山陰支部の行く末を見守って下さるであろう港氏に心よりご冥福をお祈り申し上げ、筆をおく。

略　歴

一九一七年　鳥取県西伯郡淀江町に生まれる
一九三六年　鳥取県立米子中学（現米子東高校）卒業。早稲田大学に入学し山岳部に入部
一九三八～一九三九年　早稲田大学台湾新高山（玉山）登山隊に参加。主峰をはじめ東峰北面、北峰、主峰北稜などを登攀
一九四六年　大山山岳会を結成し副会長となる
一九四六年　日本山岳会入会（会員番号二四五八）
一九四八年十一月二十三日　大山北壁大屏風岩を高田（旧姓岡田）とともに初登攀（港ルート）
一九四九年　岡田龍平とともに大山北壁小屏風岩を初登攀（東壁ルート）
一九五〇年　大山山岳会をベースに日本山岳会山陰支部を創立
一九五一年　日本山岳会山陰支部として第六回国民大育大会登山を主管、大会委員・登山部副委員長を務める

一九七八年　台湾新高山（玉山）再登頂
一九八二年　第三代山陰支部長に選出される（一九九〇まで）
一九九五年　日本山岳会名誉会員となる
二〇〇〇年　十一月二十四日没。享年八十三歳

（高田允克）

五十嵐　篤雄　氏（一九二六～二〇〇〇）

トクさんの愛称で新潟県内の岳人はもとより各地の岳人にも親しまれた五十嵐篤雄（とくお）氏が二〇〇〇年五月に環境省自然公園指導員自主研修会、日光サミットに参加され帰宅まもなく軽い脳梗塞で倒れました。一時はリハビリを始めるまでに回復して、誰もが再び元気な五十嵐さんの姿を見ることができると思ったのもつかの間、病状が急変し合併症を併発して二〇〇〇年六月二十九日帰らぬ人となってしまいました。

五十嵐さんは幼少の頃より故郷の山々に情熱を燃やして登り続け、その集大成とも言うべき山紀行とエッセイ集『飯豊道』を恒文社より一九九八年四月に全国出版されました。『飯豊道』は五十嵐さんの汗とロマンの記録でもあり、我々後輩に深い感銘を与えました。

一九四六年に下越山岳会に入会し翌一九四七年に日本山岳会に藤島玄氏、北村嘉介氏の紹介で入会（会員番号二七八五）されて、飯豊連峰の開拓期から藤島氏、佐久間氏らと意欲的に登り続け、一九六四年六月の飯豊連峰を会場とした新潟国体、その後の新潟県境全踏査縦走などにも尽力され、一九六五年からは新潟国体を期に下越山岳会長を引退された佐久間惇一氏の後を受けて、一九九八年までの三十四年間の長期にわたり会長として率先して山行を重ねるかたわら後輩の指導にも当たり、一九九九年下越山岳会の蒜場山登山道伐開にも力を尽くされました。

その間一九七一年から一九七三年まで新潟県山岳協会長、一九八九年から新潟県山岳協会名誉会長と、一九九五年から死去されるまで現職の日本山岳会越後支部長として常に我々をリードしてきました。一九九七年には日本山岳会永年会員になられております。歯に衣をきせない語り口、地位や名声にこだわらず、酒豪で、我が道を行く自然人でもありました。そんな人柄が沢山の岳人から愛された所以ではなかったでしょうか。

五十嵐さんと最後になった飯豊連峰の山行は一九九三年七月、山岳会の用で五十嵐さんのお宅へお邪魔した際に、「正ちゃん、俺も飯豊に登り始めでがら五十年になるし、もう一度飯豊連峰の端から端まであゆんで見たいど思うども、もう行げるが行げねがわがらねね……」こんな話がでました。私は即座に「五十

嵐さん、俺計画するすけぜひ行きましょう」と答えて、会員に呼びかけたところ大勢の会員の賛同を得て、一九九三年九月十一日～十四日の三泊四日の日程で杁差岳（権内尾根）～門内岳～北股岳～御西岳～飯豊本山～三国岳～地蔵山～五段山～五枚沢のコースで「五十嵐篤雄飯豊登山五十年記念登山」が実現しました。下越山岳会員送迎も含めて総勢二十名、スタート地点の関川村大石では早朝にもかかわらず高橋賢吉氏一家の大歓迎を受け、関川村山の会、平田会長以下四名がわざわざ東俣林道のゲートまで送って下さいました。これも五十嵐さんの人徳ではないかと思います。この山行は五十嵐さんにとっても感慨深いものがあったのか、道中、飯豊の沢の遡行時の話や飯豊にまつわるエピソード、昔の登山道の様子など色々と話をしてくれました。そして本当に満足げでうれしそうだった顔が今でも浮かんで来ます。

享年七十四歳、西方浄土へ旅立つにはあまりにも早すぎました。生あるものの宿命とはいえ残念です。しかしその踏み跡は故郷の飯豊連峰の谷に尾根に永遠に生きつづけています。新しいお名前は雲峰厚篤居士。流れる白雲のごとく時には積乱雲の様にたくましく山一筋にかけぬけられた五十嵐さん、改めて敬意と哀悼の意を表し御冥福をお祈り致します。

（高橋正英）

徳永篤司氏（一九二七～二〇〇〇）

一九五六年（昭和三十一年）五月日本山岳会第三次マナスル登山隊（隊長槙有恒氏）の今西寿雄氏とガルツェン・ノブルが、八一六三㍍のマナスルに初登頂した時の隊員徳永篤司氏は、昨年九月四日七十三歳でがんにより亡くなった。徳永は（以下普段のように敬称略）旧制大阪府立浪速高等学校（七年制）の山岳部員として、尋常科時代から高等科の部員と共に山行を重ね、敗戦の翌年一九四六年に浪高山岳部の先輩佐谷健吉さん（東大山岳部ＯＢ）が海軍から復員すると佐谷さんを中心にして浪高山岳部を再建し、その後佐谷さんと山行を共にした。一九四七年浪高を卒業、大阪大学医学部に入学した後も、浪高山岳部ＯＢとして、当時ラッシュアタックの主唱者であった佐谷さんのパートナーとして活動した。徳永は尋常科三年の戦時中からあこがれていたヒマラヤに行くには、「坊さんか医者になる以外はない」と思って、医者になったという（戦後史開封2　産経新聞）。当時国内で登山を如何に行うかについて、極地法かラッシュアタックかの激しい論争があったが、佐谷さんはラッシュアタックの一方の旗頭で、一九四八年一月徳永と共に、遠見小屋からカクネ里、鹿島槍北壁扇形残雪ルンゼ、天狗尾根から荒

沢北股に下降し鹿島村まで約四十時間の山行を行った。この記録は『岳人』第八号（一九四八）に佐谷さんが報告している。

この年十一月日本山岳会の企画の下に、富士吉田口から関東、関西の大学山岳部の富士山合同登山が行なわれたが、関西側の企画者は佐谷さんと徳永であった。五合目の小屋で極地法の主唱者である早稲田の関根吉郎氏と佐谷さんがランプの下で向かい合って対座した。自ずから二つのタクティックスを巡っての議論となった。この時佐谷さんは前記の実践に基づいて発言されたのに対して、関根氏が「そんなことでエベレストに登れるか」「登山は登ったルートを降りてくるのが本来の姿である」と言われたことを、私は今でも忘れられない。この論争は『岳人』に関根氏（十一号）、反論を圓山雅也氏（十二号）、永野寛氏（十三号）が展開している。これ等の論争は戦後まだ食糧も十分でなくヒマラヤは遠い彼方と思われた時代に、何とか日本の登山を復活し、ヒマラヤを念頭に描いていた方々の意欲の表れであり、それがマナスル登頂をはじめとする今日の日本の登山の活躍に導き、また形を変えて、ラッシュタクティックスも極地法も今日活きていると言えるのではあるまいか。もし佐谷さんが徳永という良きパートナーを得なければ、その主張は空しいものとなったかも知れない。この点で徳永は一つの記録を越えて戦後の日本の登山史に足跡を残したと言えるだろう。

この佐谷さんと徳永の遠見小屋から鹿島北壁の山行が、戦前阪大の医学部と工学部各々の山岳部に分かれていた大阪大学の山岳部を統一して組織する切っ掛けとなったのは奇縁である。その当時私は阪大理学部の学生であったが、理学部に山岳部は無かったので、中学時代からの山友である土佐洋一君（日本山岳会員）に誘われて京大山岳部の遠見尾根合宿に特別参加していた。その時徳永は遠見尾根にデポしたスキーを回収するため、一人で遠見小屋に登ってきた。これが私と徳永の初対面であった。私が阪大生であることを知った徳永は、二人だけの時私に、「阪大に山岳部をつくりませんか」と話しかけてきた。そしてもう三月には二人で遠見尾根に入っていた。その後前述の富士山合同登山などを経て、一九四九年当時日本山岳会関西支部長であった篠田軍治工学部教授を会長とし、徳永、家田千尋、加藤幹太らの浪高山岳部出身者を中心に我々も加わり、大阪大学山岳部が正式に発足した。その年の冬山合宿は徳永をリーダーとして白馬主稜の厳冬期初登に成功した。

これより先一九四八年浪高山岳部ＯＢの今西寿雄氏がシベリヤより帰還され、その後佐谷さんが自衛隊に入られたので、今西さんが浪高山岳部ＯＢの中心となられた。徳永は今西さん、佐谷さんを山の師として、浪高山岳部の伝統の下に、阪大山岳部を育てたといえるであろう。この間の事情は、『山岳』一九九五年「旧制浪速高校山岳部の歩み―七年制高校の登山記録を中心として―」（今西寿雄、徳永篤司）に記されている。

徳永の日本山岳会入会は、阪大医学部卒業の一九五一年、紹介者は篠田軍治、太田敬両氏、会員番号三八九八であるが、それ以前から関西支部の集会に出席して、支部の仕事を手伝っていた。支部の記録によれば、入会以前の一九四八年に支部委員のリストに徳永の名前が記載されている。

阪大山岳会の会長は篠田軍治先生、水野祥太郎医学部教授（共に日本山岳会名誉会員）、恩地裕医学部教授（松本高等学校山岳部OB、奥又白周辺の記録で知られる）と引き継がれ、この間マナスル三山の一つピーク29（七八七一㍍）に一九六一年から一九七〇年に亘り、四次の登山隊を送り、一九七〇年登頂をなしとげた。この遠征に参加した隊員が中心となり、その後一九七六年カラコルムのアプサラサスI峰（七二四五㍍）、一九八四年サンゲマルマール（七〇五〇㍍）に初登頂した。徳永は阪大山岳会の事務局長として、これらの隊をサポートし、また一九八四年から恩地先生の後を継いで、亡くなるまで阪大山岳会長であった。

昨年八月五日私が阪大病院に徳永を見舞った時、抗がん剤による苦痛のためか、十分位にして欲しいと言いながら、目をつぶったまま「頼みたいことがある。細野（現在白馬村八方）の対岳館の前に碑を建てて欲しい」と私に伝えた。この時彼の脳裏には、今西さん、佐谷さん、浪高山岳部の先輩と後立山の山行を共にし、浪高・阪大を通じて世話になった丸山与兵衛さん、昭和のはじめ以来多くの学生山岳部の根拠地となった細野の人々のことがよみがえったのではあるまいか。私は何とか彼の存命中にこの願いをかなえ、病床に写真を見せたいと思ったが、彼はその一か月後に世を去った。今年八月二十六日、丸山与兵衛さんの跡を継いだ長男丸山庄司氏の経営する対岳館の駐車場の所に「大阪大学山岳会発祥の地」として丸山与兵衛氏をはじめ村内関係者に対する感謝の意を刻んだ碑を、徳永の亡くなった二〇〇〇年九月四日大阪大学山岳会会長徳永篤司の名前で建立し、神式により令嬢徳永智子様が除幕を行った。またこの地から浪高山岳部の今西寿雄氏、佐谷健吉氏らを輩出し、また大阪大学山岳会は篠田軍治・水野祥太郎両教授を隊長としてP29に四次にわたって登山隊を送り初登頂を成し遂げたことに対して同じく会長徳永篤司の名義で、対岳館丸山庄司氏に感謝状を金属の板に刻印して贈った。

徳永は医師としても活躍し、めんどうを良く見てくれる医者として、多くの岳人に感謝された。私もその一人である。徳永はマナスルの報告書に、医薬装備、現地人の医療調査、キャラバン中の衛生管理および辰沼広吉、山崎英雄氏と共著で高所における医学的考察を書いている。

それにしても私と山行を在学中に共にした家田千尋、松久博につづき、最近は徳永・小沢逞夫、坪井圭之助、尾藤昭二と医学部出身者が続いて亡くなった。松久のご家族は亡くなってか

らも、長く日本山岳会の会費を払い続けて頂いた。坪井夫人も阪大山岳部員であったが、昨秋お嬢さんと共にピーク29の山麓に坪井の散骨をされた。徳永をはじめこれらの方々のご冥福をお祈りする次第である。

（大島輝夫）

相川　修氏（一九一〇〜二〇〇〇）

相川家は札幌ではクリスチャンの旧家として知られ、山岳画家坂本直行の生家とは古くから親しい関係にあった。修氏は旧制札幌二中時代から先輩坂本直行に連れられて札幌近郊の山々や十勝岳などを登っていたが、一九二八年に北海道帝国大学予科（当時）に入学し、直ちに北大山岳部に入部した（註）。

北大山岳部報から修氏の現役時代の主な山行を挙げると、

一九二八年七月＝トッタベツ川―札内岳―札内川―カムイエクウチカウシ山

一九二九年七月＝コイボクシュシピチャリ川―一八二三㍍峰―カムイエクウチカウシ山

一九三〇年二月＝羊蹄山・喜茂別岳、五月＝化雲岳―沼ノ原山―石狩岳―音更山―ユニ石狩岳―三国山、七月＝ヌピナイ川―ソエマツ岳―神威岳、八月＝ニセイチャロマップ川―屏風岳―武利岳―石狩川―石狩岳―トムラウシ山―大雪山黒岳、十二月＝芦別岳

一九三一年二月＝エバナオマンドシュベツ川―夕張岳、四月＝メムロ川―メムロ岳、五月―雄冬山―浜益御殿、六月＝白金川―夕張岳、七月―トッタベツ川―エサオマントッタベツ岳―新冠川―幌尻岳―トッタベツ岳、九月＝芦別岳第一尾根岩登り

一九三二年二月＝天塩岳、ニセイカウシュペ山、三月＝楽古岳、五月＝十勝岳―オプタテシケ山―トムラウシ山―大雪山、七月＝ヌカビラ川―幌尻岳―新冠川―イドンナップ岳―カムイエクウチカウシ山、八月＝南日高十勝岳・アポイ岳

一九三三年五月＝芦別岳

一九三四年一月＝コイカクシュサツナイ岳―ヤオロマップ岳―八の沢一九〇〇㍍峰―カムイエクウチカウシ山―一八四〇㍍峰、五月＝芦別岳、七月＝コイカクシュサツナイ岳―ヤオロマップ岳―一八三九㍍峰―ルベツネ山―ペテガリ岳―中ノ川

一九三五年三月＝大雪山・愛別岳、旭岳

このうち一九三〇年の神威岳は日高側からの登路が皆無の当時、幾度かの先人の失敗の後、修氏らの隊はソエマツ岳を経て

苦難の初登頂をかち取った。また一九三二年のヌカビラ川遡行より始まり北日高の三高峰に登った十日間の旅は、その前年七月の山行とともに、その後北大山岳部の伝統的な山あるきの形式の一つとなった沢から頂へ、次の沢に下って新しい頂へ、という漂泊の山行の代表的なものであった。

修氏は一九三五年北大卒業、しばらくの間軍医として海軍に召集されていたが、戦後は北海道に帰って旭川に診療所を開き、後札幌に移った。修氏の登山への強い情熱はこの後も失われず、一九六五年には新妻徹氏（現ＪＡＣ北海道支部長）を登攀隊長としてダウラギリ第一峰の遠征計画を立てられた。しかし当時政情不安であったネパール政府からは登山の許可が得られず不幸にも挫折の止むなきに至った。一九六〇年前後、札幌に藤井運平氏や望月達夫氏が在住されていた頃には、札幌近郊の余市岳、無意根山等の山々をしばしば一緒に登られ、私も札幌岳等に同行させて頂いたことがあった。

また一九八〇年三月には北大探検部のネパール・メラピークへのトレッキングに佐々保雄氏とともに参加された。この時修氏は七〇歳、三歳年長の佐々氏とともに五二四〇㍍第一キャンプまで登られた。一九八一年のＪＡＣ北海道支部のカムイエクウチカウシ記念山行には主賓の一人として参加、八月二十八日の登頂は相川修、一原有徳、望月達夫、佐々木誠、橋本誠二、大塚武の順で行われた。これは年令順ではあったが、五三年前の一九二八年七月に、この山の初登頂を目指した修氏らの北大隊が、一日違いで慶応大の斉藤氏らに先んじられた心情を、今回の参加者がおもんばかったことでもあった。一九六九年のＪＡＣ北海道支部再建に当たり修氏は献身的な努力をされたが、自らは表面に立たず初代支部長には中野征紀氏を推された。

私は北大山岳部員として五年も後輩であったから、毎年十二月末の十勝岳スキー合宿以外には修氏と山行を共にしたことはなかった。修氏兄弟はスキーの名手として知られ、毎年リーダーを務められ、又特別班のリーダーとして前十勝沢源頭の岩壁を登って十勝岳へのバリエーションルートを開かれたりした。一九三六年私が二年班のリーダー時代、吹雪の登頂を一応終わって崖尾根の森林帯に下山し、パーティー一同が林の中のゲレンデで一服しているとき、しばしば上部から先生班や特別班が下ってくることがあった。噂にもきいていた修氏のスラロームは抜群で、みるみる雪煙の中に消えて行った。こんな日の夜の合宿コンパの席であったと思う。それまで座興で盛り上っていた中で突然修氏が立ち上って「今日は少し叱言（こごと）を言います」といわれた。この頃二年班リーダー級の若い部員の間では、一山終わった後の気楽なスキーコーチになると、今までかぶっていた厚い黒ラシャのスキー帽を軽い毛糸編みの帽子に代える者が私も含めて何人かあった。修氏は合宿期間は、北大山岳部の定めた黒い大形スキー帽、黒いスキー服、巻きゲートル等を必ず着用す

るよう注意されたのだった。私たち若手部員はいつもにこやかな修先輩からの叱言だったのでシュンとなった。

この十勝岳合宿が一九二八年開設以来、当時は百人に及ぶ参加者（北大全学内からの希望者。山岳部関係者は約六割）を迎えてこの年まで全く無事故であったのは、その運営が規律正しく行われただけでなく、合宿中は一滴の酒も飲まないといったような北大山岳部の伝統的な緊張感があったためかも知れない。

一九九八年十二月ＪＡＣ道支部の忘年会の席上、修氏がＪＡＣ名誉会員に推薦されたことが披露された。出席者の多くは修氏の山歴を殆ど知らなかったので、私は昭和初期に修氏が行った日高山脈登山開拓時代の業績を紹介した。特にその当時最も困難な山の一つであった神威岳の初登頂者であることを述べた。しかし現在日高側から林道を登山口まで車で行き、あとは夏道伝いに日帰りできる楽な神威岳しか知らない大部分の会員たちには全く反応が無かった。それでも修氏は当時を思い出されたとみえ、私の肩を叩いてにこやかに有難うといわれた。その昔十勝の合宿で見た修氏の温顔を私は六十年振りに見た思いであった。

（註）相川修、坂本直行両氏の関係は修氏の直行追悼の文（北大山の会会報五三号六頁、一九八二年）に詳しい。

本稿執筆に当たり、資料・写真等の入手に御尽力頂いた石井忠雅、高沢光雄、新妻徹の各氏に厚くお礼申し上げる。

（相川修氏は一九五一年日本山岳会入会。会員番号三九〇〇。一九九八年名誉会員に）

（朝比奈英三）

井口正男氏（一九一九～二〇〇〇）

井口正男氏（会員番号四一四〇番）は一九八七年二月「脳出血」で倒れ、ハル夫人の昼夜を分かたぬ看病で一命を取り止めたが、再び好きな山旅をつづけること叶わず、十二年余りの闘病生活をつづけられ、二〇〇〇年五月十九日脳梗塞を併発、満八十一歳で逝去された。

氏は東京都文京区で生まれた生粋の江戸っ子で、幼少の頃から書籍に親しみ、長じて神田の本屋（日本堂）に勤められた。勤務のかたわら、十六・七歳の頃から登山に興味を持ち秩父や高尾山、丹沢や富士山を登られ登山に熱中する。

一九四〇年から一九四六年まで兵員として中国各地を転戦され、一九四六年に復員される。

縁あって新潟市に文信堂出店の開設で、新潟市に移住された。そこでハル夫人と結婚され、その後市街地の中心部の西堀六番町に古書販売の「学生書房」を開店された。

当時たまたま近くに居住される山岸栄三郎氏（会員番号三四〇〇）と出会い、山の話から意気投合、越後支部長藤島玄氏を紹介された。

ここで日本山岳会に入会し、藤島氏の知遇もあって山岳関係の専門店として営業方針を定める。とともに日本山岳会越後支部連絡所となる。県内岳人の連絡所、たまり場として機能していった。常に藤島支部長の山岳活動の秘書官として、玄さんとともに行動し越後の山岳界の発展に尽くされた功績はまことに大きく、文字通り県内山岳界の要衝として長きに亘り事務局長として活躍された。

来潟された槇有恒氏が同店の二階の山岳人の集まりを見られ、これぞ越後の「梁山泊」であると、早速揮毫を贈られ、今では同店の家宝として店頭に掲げられている。また百名山の旅で飯豊山に登る折りに同店を訪れた深田久弥氏が「学生書房」の扁額を贈られ、同店の包装紙には同氏の筆による「学生書房」の文字が印刷されているなど、多くの岳人が同店を訪れ、その度に藤島さんとともに接待山行をお供して来た井口氏である。

一九五三（昭和二十八）年藤島氏ら有志が発起人となり、新潟市に「峡彩山岳会」を創立する。一九六六（昭和四十一）年から一九七五年まで四代目として十年間会長を務められる。地域研究の場を飯豊連峰と定め、一九六九（昭和四十四）年同会の組織力を総動員して支援体制を整え、厳冬期の飯豊連峰全縦走を成し遂げた。その後も主要な谷々の遡登を終えるが、井口さんを慕う会員たちもパイオニアとしての自負のもと、大きな気概を示した。会発足当初よりの願望であった自前の山小屋を、豊富な人脈を活かして建設できたのも井口さんの人柄の成せるところでありましょう。

飽くまでも人格温厚、実直、勇む若手には穏やかに諭し、古参の隔たりなく大きな包容力で会をまとめ上げ、大きな功績を残し職を譲る。

仕事も多忙を来し山行回数は自ずと減って来たが、ご自身も認める「年寄三人衆」山岸さん、斉藤さんのお三方で気ままな山行を楽しんでおられた。井口さんは無類のお酒好きでもあった。酔って乱れず、誰とはなしに誘い合って行きつけの居酒屋「とんちゃん」に繰り出すのが楽しみであった。私たちも幾度となくご相伴にあずかったのがつい先日の事のように思い出される。酔いがまわれば得意の喉で戦中歌を歌い、中でも愛染かつらの名調子には会場は大いに盛り上ったものです。また戦場で散った友を偲び、軍靴に踏まれる一輪の野菊の花に友の面影を見い出す……。そんな人情味の有るお人柄であった。

一九八七（昭和六十二）年十二月脳出血で倒れ病床につく日々に、お見舞いに伺うと話すことは出来ないが、山の話に目を細め「うんうん」と頷いていたのだが……。

二〇〇〇年五月十九日、ご一家、ご親族、岳友、岳兄の願い

追　悼
OBITUARY

名誉会員
Samuel BRAWAND 氏
(Hon. Mem.)
(1898～2001)

名誉会員
相　川　　修 氏
AIKAWA Osamu
(Hon. Mem.)
(1910～2000)

カムイエクウチカウシ山頂にて（1981年8月28日）。前列中央が相川氏。その左：一原有徳氏、相川氏の右側2人目：大塚武氏、その前：望月達夫氏、相川氏の左後方（立っている人）：橋本誠二氏

平　塚　直　秀氏
HIRATSUKA Naohide
(1903～2000)

名誉会員
港　　叶氏
MINATO Kanou (Hon. Mem.)
(1917～2000)

徳　永　篤　司氏
TOKUNAGA Atsusi
(1927～2000)

五十嵐　篤　雄氏
IGARASI Tokuo
(1926～2000)

◀田 中 政 一氏
TANAKA Masakazu
(1927～2000)

▲井 口 正 男氏
IGUCHI Masao
(1919～2000)

尾 藤 昭 二氏▶
BITOU Shouji
(1927～2001)

◀西 郷 正 郎氏
SAIGOU Masarou
(1912～2001)

桑 原 信 夫氏▶
KUWABARA Nobuo
(1932～1999)

◀水　野　公　男氏
MIZUNO Kimio
(1925～2000)

▲山　岸　猛　男氏
YAMAGISI Takeo
(1914～2000)

小　田　　稔氏▶
ODA Minoru
(1923～2001)

須　藤　建　志氏▶
SUDOU Tatesi
(1949～2000)

◀坪　井　圭之助氏
TUBOI Keinosuke
(1930～1999)

も空しく八十一歳の天寿を全うされた。

山に関する主な経歴

一九五三（昭和二十八）年　日本山岳会入会。会員番号四一四〇。紹介者藤島玄氏）一九八七年まで越後支部委員、事務局を担当する

一九六六～一九七五（昭和四十一～五十）年　峡彩山岳会会長、新潟県山岳協会副会長

一九七三～一九七四（昭和四十八～四十九）年　新潟県山岳協会副会長

戒名　正学薫峰信士

合掌

（井出秀雄）

田中政一氏（一九二七～二〇〇〇）

田中君が逝ってしまわれた。彼と共に山に登った人たちも、今では数少なくなってしまった。

山岳部時代の記録は、部報第十号にいろいろと出てくるので、田中君と私のプライベート山行の中で記憶に残る幾つかを述べてみることにした。

あれはたしか、予科二年生の夏休みであった。田中君と私は、秋山純先輩に連れられて三人で、谷川岳南面のオジカ沢とヒツゴー沢の沢登りを楽しんだことがあった。秋山先輩とは、立教山岳部の三年先輩で、昭和二十六年の正月、佐野高校の山岳部長として、部員とともに、谷川岳西黒沢で、雪崩に呑まれてしまった方である。

我々三人は、オジカ沢とヒツゴー沢の合流点のそばにある岩小屋をベースにした。この辺りには、その当時、大型のイワナが沢山泳いでいたものだ。秋山先輩は大きな毛鉤で、三匹の岩魚を釣ってくれた。「この三匹は塩焼きにする。味噌汁に入れる魚を二、三匹釣って来い」。田中君と私は、一本の竿を交替で使って十数匹の岩魚を釣って持ち帰った。「バカ者！　こんなに釣ったら食べ切れないだろう！」。「でも、明日の分と思ったもので……」。「駄目だ、腐ってしまう」。そこで、三匹はサシミに、二匹は味噌汁に、残った十匹ばかりは、焼いて保存することにした。

装備は、ザイルと三つ道具の他に、アイスピック、ワラジと四本爪のカンジキで、沢の上部の草付きでは、今と異なり、ステップの跡もなく、カンジキで、アイスピックが強力な武器となって威力を発揮してくれた。ヒツゴー沢では、全身ズブ濡れで滝登りを楽しんだが、途中で、なんと、滝壺に転落する訓練

を受けた。二度、三度とやってみれば、結構楽しいもので、水の中で三人が大きな声で笑い合ったことがなつかしく想い出される。ベースには岩魚が十匹焼いてある、とルンルン気分で西黒尾根を駆け降りたが、残念ながら、全部熊か狸に荒らされてしまって、ガックリ……。一九四八（昭和二十三）年八月のことであった。

先に他界した福住君と田中君は、今、天国で再会し、何を語り合っているのだろうか。

そんなことを思ったとき、卒業後、三人だけで試みた正月の八ヶ岳縦走を想い出した。

その頃は、ヒマラヤでスピード登頂が始まっていた。「我々で何か記録に残ることをやってみよう」。こんな発想が計画の原点であった。

時は一九五三（昭和二十八）年一月一日の夜明け前、田中、福住、羽鳥の三人は、仮眠をとっていた赤岳の真下で、ゴソゴソと動き出した。まだ暗い稜線は、快晴、強風であった。雪と氷と岩のリッヂを、唯、夢中で走り出した。硫黄岳のあたりで夜が明けた。それは素晴らしい「元日の日の出」であった。天狗岳を越えてから、ルートは楽になった。横岳から夢科温泉に降りる頃は暗くなっていた。渋の湯では驚きながらも、温く泊めてくれた。

その記録は「後日、機会があれば発表しよう」と福住君が写真とともに保管していたが、山岳部では、海外で次々と素晴らしい記録がうち立てられ、その陰に、忘れ去られてしまった。

そして、いつの間にか四十年の時が流れた。

一九九二年立教隊は山岳部創立七十周年の記念事業として、マカルー三峰の一つ、チョモロンゾ（七八一六㍍）に遠征隊を送り出すことになった。中国登山協会に許可を打診したが、「チョモロンゾなる山は地図に無く、不明であり、許可は難しい」との情報が入った。「それならば、我々OBが確認してこよう」となったわけであるが、詳細は一九九三年チョモロンゾ登山隊報告書の五十六ページに記録されている。

かくして、一九九一年十一月、田中君と、ジュニアの千元君を含む七名がカトマンズを訪れた。足慣らしのため、早朝、サランコットの丘に登ったのが田中君のヒマラヤ第一歩であった。頂上の石垣に並んで、ヒマラヤの夜明けを眺める田中君父子の後ろ姿は、まことにほほ笑ましく、又、羨ましい限りであった。

一九九九年、立教隊はガッシャブルムⅡ峰（八〇三五㍍）に遠征することになった。OB会では、支援隊として有志を参加させることが検討された。

一九九八年八月、支援隊の訓練として、前記、秋山先輩の故郷、佐野市の郊外にある、日光の前衛連山の一つである氷室山（一二〇〇㍍）に登ることになった。そこは樹林帯の長い尾根道で、霧と小雨の中のルートは蒸し暑く、ヒマラヤのアプロー

チさながらで、楽なものではなかった。続いて十月には箱根湯本で遠征会議が催されたが、その機会を利用して、湯の花から湯本までの鎌倉古道（湯坂道）を歩くことになった。標高差七〇〇㍍の急下降は七十歳の田中君と私にとっては、予想外にキビシイ。年齢を感じさせられた。

一九九八年夏と秋の小さな山歩きは、田中君と私の最後の山行となってしまった。

振り返れば、共に山岳部の新入部員であった私たちは、出会いから数えて五十三年になる。

田中君は海軍航空隊からの入学で、大へんな元気者であった。マラソンが特に強くて、私は彼に勝った記憶が無い。山では、白線の付いた航空隊員の戦闘帽をトレードマークに、ハッスルしていたが、そんな彼が眩しかったものである。

一周忌が過ぎて、天国で二年生となった田中君は、相変わらず元気印の戦闘帽を愛用して、人気者になっている様な気がしてならない。

合掌

（田中政一氏は一九二七年東京に生まれる。一九五四年日本山岳会入会。会員番号四二二二。紹介者は小原勝郎氏。一九九〇年立教大学山岳部創立七十周年記念事業実行委員会副委員長）

（羽鳥　肇）

尾藤昭二氏（一九二七～二〇〇一）

一九九九年（平成十一）年十二月、坪井圭之助君が亡くなったとき、徳永さん、尾藤さんは至極元気で、徳永さんは葬儀委員長を務め、悲しみの中にもテキパキと事務を処理した。翌年三月徳永さんが発病入院となったとき、尾藤さんから「見舞いは早い方がよい、制癌剤が投与されると機嫌が悪くなる」と連絡があった。それから三ヶ月後、尾藤さんに膵臓癌の診断が下り、九月に亡くなった徳永さんの葬儀には、出席できなくなった。尾藤さんは一年間の闘病と身辺整理の後、三月十九日明和病院で亡くなった。坪井、徳永、尾藤の三氏は、年次は少し異なるがともに阪大医学部第一外科の出身で、三度の葬儀には医療関係者と山の仲間が多く、再三同じ顔ぶれに出会った。

尾藤さんと初めて会ったのは、一九五〇（昭和二十五）年春、阪大山岳部に入部したときである。当時は学制改革の直後でもあり、山岳部の新人の中には旧制高校を卒業して年齢はリーダーと同じとかその上、といった人が何人かいたが、なかでも尾藤さんは独特の個性と落着きがあった。長身で眉目すぐれ、海軍経理学校在学を証明するかのように、スマートな海軍士官のイメージがぴったりの人であった。

彼は自らの山登りを思索から始めた。文献を研究し、目標を定め、あるものは文章として発表し、しかる後、果敢に実践した。自らを厳しく律し、体力と安全の限界を極めるような山登りをめざしていた。極地法による杓子岳双子尾根から唐松岳の往復以来、尾藤さんは、アタック隊員やリーダーとして、数度にわたり積雪期登山に記録を残し、一九五三（昭和二十八）年冬、厳冬期の穂高岳天狗のコルより槍ヶ岳の往復を極地法で完遂し、国内登山を一応しめくくった。

一九六一（昭和三十六）年のP二九峰遠征は、私たちにとって、山岳部入部以来の総決算であった。尾藤さんと一緒に乗った英印航路の貨客船のキャビンで、今西壽雄さんから借りた写真を見直したが、そこに写るP二九峰の西面には登攀ルートらしき白い部分が見えた。そのころのヒマラヤ遠征の常識では、日本を無事出国できたときは、半ば成功したと思ってもおかしくないと言われていた。文字通り希望に満ちた船出であった。

ヒマラヤでも彼は強かった。最初に五千㍍を越えるコルに荷上げしたとき、いささかグロッキーになってテントに着くと、一足早く帰っていた尾藤さんは、ドクターとして隊員の脈拍や血圧などのデータを取りながら健康状態を観察していた。データについて聞くと、「この程度のデータが病院で出たら、すぐ親戚を呼ばんといかんなあ」と笑い、平然としていた。

しかし、このようにして足を踏み入れたP二九峰の西面には、当時の私たちの登山技術では登攀ルートは発見できなかった。加えて、遠征期間の後半に、隊長の篠田先生が発病され、登山活動の中止が決定的になってからは、クライマーとしての尾藤さんの顔が、次第に医師のそれに変貌していったのを記憶している。

このころを境に尾藤さんは登山の実践活動から徐々に離れ、本職の医療に邁進し、それを天職として究めることになる。思うに、彼のような激しい山登りを志向する人は、ある時期に登山活動が職業上の使命感と両立し難くなり、実践とは異なる別の登山の世界に入って行くことになったのではないだろうか。

尾藤さんは一九六五（昭和四十）年から大阪厚生年金病院に勤務し、脳神経外科部長、副院長を歴任した。彼は自らの職務に心血を注ぎ、治療水準の向上に貢献し、病院の経営に参画し、二十七年間の勤務を終えて、一九九三（平成五）年定年退職した。退職後も、西宮の三好病院で脳神経外科の診療を続けるほか、リハビリテーションの支援組織への関与、看護専門学校の講師などを担当し、医療に対する情熱をもち続けた。

一方で尾藤さんは、以前からの趣味であった琵琶湖周辺の歴史探訪に精力的に取り組み、病を得て後、『近江逍遙』を出版し、親しい人々に配った。亡くなる二ヶ月前の一月下旬、友人たちがこの本の出版記念会を催し、ご夫妻を招いたが、この席で尾藤さんは紅茶をひと口飲んだ以外、何も食べず、一同暗然

として帰路についた。

尾藤さんは、ピアノを弾き、音楽を愛する優しさの一面、山では心身ともにあくまでも強く、山岳部時代からヒマラヤまで、一度もへばった姿を見せたことはなかった。また、どんな困難な事態のもとでも、興奮して他人に怒鳴るような場面はなかった。文武両道の達人とは、この人のためにあった言葉と思っている。この得難い人に山登りを通じて出会い、五十年以上も親しくできたことに心から感謝している。

合掌

略　歴

一九二七（昭和二）年五月　大阪市で出生
一九五〇（昭和二十五）年　天王寺中学校、海軍経理学校、旧制大阪高等学校経由大阪大学医学部進学。山岳部入部
一九五二（昭和二十七）年三月　極地法による杓子岳双子尾根から唐松岳往復
同年十二月　北岳バットレス第四尾根登攀
一九五三（昭和二十八）年一月　聖岳
同年三月　針の木岳より白馬岳までの逆縦走
同年十二月　極地法による厳冬期穂高岳（天狗のコル）より槍ヶ岳往復
一九五五（昭和三十）年三月　大阪大学医学部卒業、同学部第一外科入局
同年七月　日本山岳会入会。紹介者篠田軍治・大島輝夫。会員番号四二九九
一九六一（昭和三十六）年　第一次大阪大学ヒマラヤ遠征隊（P二九峰）に参加
一九六五（昭和四十）年　大阪厚生年金病院勤務、脳神経外科部長、副院長歴任
一九九三（平成五）年　同病院定年退職、芳恵会三好病院勤務。公務として大阪府社会保険支払基金審査委員、労災保険地方労災医を担当
二〇〇一（平成十三）年三月十九日　明和病院にて死去。享年七十三歳

（山本光二）

桑原信夫氏（一九三二〜一九九九）

桑原君の追悼文を依頼されたとき、何げなく引きうけたのですが、書きだしてみると意外に解らないことが多いのに気づきました。彼とのつきあいが長いので、知っているつもりでいたのが間違いでした。親しくしていた多くの岳友たちにも聞きましたし、彼の家にも行き資料を見せてもらいましたが、整理されていないので困りました。遠く熊本からも資料を頂き、なん

とかつなぎ合せて年表を作り、やっと彼の生涯を振りかえることができました。

桑原君は一九三二（昭和七）年五月に、現在の家に近い東住吉区今林町で、農家の三男として生まれています。根っからの山好きらしく、生野中学でも生野高校でも山岳部に入り、山に登り続けていたようです。高校を出て法政大学に入ったのが、一九五一（昭和二十六）年ですが、家庭の事情で大学を中退し、同年八月に住友化学に入社しています。

彼の家は東住吉区の杭全ですが、生涯この地を離れることなく、生まれ育ち、生計をたて、数々の山に登りました。そしてこの地で眠っています。彼のわがままで強引な生涯を支え続けた奥さんの玲子さんは従妹で、一男一女に恵まれています。長女の慶子さんは義母と一緒に、彼が経営していた喫茶「キャラバン」をやっておられます。長男の栄樹君は薬科大学から、阪大の大学院を出られ、製薬会社に勤務されています。

彼は一九九七（平成九）年に市大病院、大野記念病院などに、入退院して肝臓癌であることを知りました。私達にも年賀状にそのことを書き送ってきています。生前に自分の墓を作り、法名も自分でつけています。家のすぐ近くに二十七年間経営していた喫茶「キャラバン」がありますが、その横を二百メートルほど行った今林墓地に彼の墓があります。彼は墓碑に一九六八年のアラスカ、一九七七年のカラコルム、一九八一年のアンナプルナⅡ峰、一九八四年のアンナプルナⅡ峰、一九九〇年のエベレスト（日韓合同隊）と五隊の遠征隊長であったことを刻んでいます。彼が考えていたこととは違うかも知れませんが、私は偏見と独断の許しを得て、彼の生涯を三つの時代に区切り記することとしました。

関西登高会の時代

桑原君が関西登高会に入会したのは、一九五二（昭和二十七）年の秋ではないかと思います。十一月に風雪で登れなかったけれど、富士山に行っていますし、五三年の正月に穂高岳涸沢を中心に行なわれた、第七回の冬期合宿に参加しています。この合宿では梶本君等と涸沢から吊り尾根への直登ルートを経て、前穂高岳に登りました。彼は後年新聞紙上でこの時のことを「頂上にたって、あ、よかったと思ったのは、この時だけだった」と語っています。初めての冬山合宿に新人として参加し、厳しくしごかれながら登頂した感激は、彼の生涯を通じて持ち続けていた輝ける体験だったと思われます。私は体格の良い頼もしい新人が入ったと、喜んだことを覚えています。彼の満二十歳の時でした。

この合宿に参加した時は、まだ法政の大学帽をかむり、学生らしく自分のことを「小生」と言っていましたので、何時のまにか「小生」が綽名となってしまいました。資料によると前年の八月に住友化学に入社していますから、学生帽は少しおかし

いのですが、彼の気持はどうだったのか、よくわかりませんが桑原君らしい感じがします。住友化学大阪工場では染料部門に所属し、英訳の仕事をさせられていると言っていました。在職中は、工場の山岳会の行事にも積極的に参加し、メンバーの育成に努力し、また彼は正選手ではありませんが、ラグビー部の練習に参加して、常に体力強化に努めていたと聞いています。

この頃の関西登高会は有望な新人も多数入り、隆盛期を迎えようとしていました。私が第九回の冬期合宿から参加しなくなったように、新旧交代の時期でもありました。

彼とは第七回と第八回の合宿に参加しましたし、一九五五年には第十回の国体に、私は監督として、彼は選手として参加し、雨の大雪山に登りました。毎回熱心に参加して頭角を現わした桑原君は、第十回の奥又白合宿では、サブリーダーをやっています。しかしこの合宿では会として最初で、しかも二重遭難という重大な事故を起こしてしまいました。このことは関西登高会の四十年史に、彼がくわしく報告しています。

会は梶本イズムが浸透すると同時に、会員も増加して第十二回の合宿は、二隊に分かれて実施されました。新人の養成を兼ねた遠見尾根の合宿と、北海道ペテガリ岳遠征です。このペテガリ岳の冬期登山の実行には、桑原君のアイデアと努力による所が大きく、この山行の成功で会は急速にヒマラヤ遠征に向かって動きだします。翌一九五九（昭和三十四）年には屏風岩で、第十三回の冬期合宿が実施され、数々の記録が更新されています。彼はこの年の十月には、屏風岩中央カンテの0（ゼロ）岩溝ルートを初登攀し、九時間で完登する記録を残しています。

しかし、この山行を最後にして、桑原君は翌年の冬期合宿には参加していません。次第に自信を大きくした彼の強い意見が、チーフリーダーたちと合わなくなり、退会を決意されたものと思います。またこの年に大阪岳連で計画したヒマラヤ遠征が、東京との合同隊となり、人員が制限されて選にもれたことも、大きな原因ではないかと考えられます。

けれども会の隆盛期に七年間も在籍され、有能な仲間たちと切磋琢磨され、リーダーとしての自信を深め、多くの岳友を得られました。桑原君はこの時代に元来持っておられた強い体力、技術に加えて精神力、行動力、企画力に磨きをかけ、その後の長い登山活動の基盤を築かれたものと考えています。

戦いの時代

桑原君の一九六〇（昭和三十五）年に関西登高会を退会した時から、一九七七（昭和五十三）年にカラコルムのタフルタム峰に登るまでの十七年間を、「戦いの時代」としました。その理由の一つは、大変負けず嫌いで闘争心の旺盛な彼が、古巣の関西登高会の隆盛と戦い、長期休暇の難しい会社勤務に悩み苦しんだ時代だったと考えるからです。またこれらの悪条件をはねのけ、喫茶店を開店させ経営の苦労を越えて、長期登山体制

を作り上げた時代でもありました。そして彼が長い間の念願であった初登頂の栄誉を、カラコルムで勝ち取った時代と考えるからです。

彼は関西登高会を退会した翌年の一月に結婚し、平和な家庭と仕事に励もうと考えていたと思います。けれど岳友達の海外登山の成功報告が、次々と彼を襲い苦しめました。

関西登高会では一九六〇（昭和三十五）年のヒマラヤ遠征で、合同登山の失敗から会独自の海外遠征熱が高くなっていました。けれどもネパール国は登山禁止令を出し、ヒマラヤに行けないので、一九六四年のセントエライアス峰、翌年のマッキンレー峰とアラスカに遠征隊を出し成功しました。彼の資料によると一九六八年に、アラスカ、バンクーバー峰に行くまでの八年間、大きな登山の記録はありません。

桑原君は一九六八年に大阪府岳連隊を組織して、アラスカ、バンクーバー峰に初めて海外遠征を実行しました。桑原君三十六歳の時でした。ファイト溢れる隊長は、予定していたルートが既に登られていることを知ると、より困難な南西稜に切り換え、登頂に成功しました。しかし、雪崩により三名の犠牲者を出してしまいました。この雪崩には彼も巻き込まれましたが、彼の強力なビレーにもかかわらず、ザイルが切れ桑原君だけが残ったのです。彼は運が悪いと言うのか、強運の持ち主と言うのか、何度も遭難事故に会っていながら、また常に生き帰ってくる人でした。

遠征隊を組織しリーダーとして実行するには、長期の休暇を必要としますので、会社勤務に影響が出るのは当然のことです。この遠征で彼の意欲は更に大きくなり、時間を作るには自ら経営者となるしかないと決意します。奥さんや親戚の協力により一九七一（昭和四十六）年住友化学を退社し、喫茶「キャラバン」を開店しました。海外遠征に参加した岳人たちが、大きな人生の転機を経験するように、彼もまたこの遠征で新しい人生を踏み出してゆきます。

喫茶食堂をスタートさせた桑原君は、翌年の一九七二年に大阪岳連の人たちとレーニア峰に登っています。これらの遠征を通じ知りあったクライマーたちと、彼の念願であった「より困難な初登攀」をめざし、一九七五年に「同人・大阪登攀倶楽部」を結成します。同人達は二年後の一九七七年に美しくて険しい未踏峰であるカラコルムのタフルタム峰（六六五一メートル）に挑戦します。この計画書の中で「この未登の峻峰に挑戦し、遠征登山の新しい分野を拡げ、クライマーとしての限界を追求してゆきたい」と言っています。天候にも恵まれ全員登頂の大成功を収めたこの遠征は、桑原君の登山活動中の頂点だと私は考えています。彼は満四十五歳を迎えていました。

山を楽しんだ時代

タフルタム峰遠征の翌年（一九七八）から、死去する一九九

九（平成十一）年までの二十二年間は、数多くの海外登山や旅行を楽しんだ時代でした。また彼が墓碑に刻んだ五つの遠征隊のうち三隊までが、この年代に実行されています。彼の強い登山意欲と企画力に加え、実行力を存分に発揮した時代でもあり、一番幸せで得意な年代であったと考えています。

これらの旅行は彼の提案による登山行であったり、旅行社からの依頼をうけての旅でした。脇坂順一氏の著書『八十歳はまだ現役』のなかで記しておられるように、ケニア山行は彼の提案した山行でした。

けれども一九八七年以降の登山行は、彼が経営する喫茶食堂の名にちなんで、「キャラバン会」の名称で彼が独自で実施したものです。私はアサバスカ峰とキナバル峰、韓国の智異山に彼と一緒に登りました。今回多くの資料を寄せて頂いた前日本山岳会熊本支部長の本田誠也氏は、八回参加しておられます。本田さんは桑原君のことを「未知の国に行っても、恐れを知らぬ逞しい行動力で、困難を突破する大阪人らしい根性の持ち主だった」と言っておられます。また「権力に迎合せず、拘束を嫌い自由を求め歩いた人生だった」とも評されています。

桑原君は大変気の短いイラチな男でしたし、負けず嫌いな人でしたから、よく議論するもめごとの多い男で、組織での会合等には適さない性格の持ち主でした。けれども半面律儀で真面目な所もあり、温かい心の持ち主でもありました。また淋しがり屋で賑やかなことが好きでしたが、お酒もよく飲み失言が多々ありました。彼と山に行くと美味しい料理を、手早く作ってくれますし、動物的な勘を持った人でした。

彼は肝臓癌と闘いながら、スマトラ島のケリンチ山や、白頭山などを企画しキャラバン会の人たちと行っています。彼は登山家としての適性を持った人で、最後まで山に登り旅を続けました。私は彼との交友に感謝し、「よくがんばったぞ、有難う」という言葉で、彼を追悼し祈りたいと考えています。資料を頂いたり話を聞かせて下さった多くの岳友達に、厚く御礼を申し上げ追悼文とします。

（桑原信夫氏は一九五八年入会。会員番号四六九〇。紹介者は大木保太郎・梶本徳次郎両氏）

（浅野清彦）

西郷正郎氏（一九一二〜二〇〇一）

西郷さんとお付き合いをさせていただきたかだか十数年、年齢もふた回り以上も違う大先輩である。追悼文を書く適任者は沢山いるだろうが、どういう訳か若輩の私の所に回ってきた。親しく付き合って下さった晩年期を思い起こすままに回想し、

追悼の言葉といたします。

晩年の著書『北八ヶ岳の黒い森から』はいかにも西郷さんらしい形而上学的なロマンに満ちた、山岳書としては特異なものであった。

青春時代に燃やした山への情熱とロマンがゲーテの『漂泊者夜の歌』にオーバーラップして展開されている。「山々の頂きの上には憩いがある。……中略……待てしばしやがて汝もまた憩うであろう」。ゲーテは若き日にドイツのキッケルハーン（標高八六一メートル）の狩小屋にこの句を書き残した。五十年後ここに最後に訪れたゲーテは八十一歳と年老いていた。この句を読んで涙を流し、上着からハンカチを取り出して涙をふいたと伝えられている。この歌が生まれて百五十年後、西郷さんは上智大の山岳部の仲間たちと北八ヶ岳に山小屋を建て、この句を刻んで部屋の壁に打ちつけた。五十年後西郷さんはこの小屋に一人で訪れ、この句を前にしてしばらくは立ち去ることができなかったと記している。

二〇〇一年一月十日、新世紀を迎えて間もなく西郷さんは八十八歳の生涯を静かに閉じられた。この愛誦歌を口ずさみ、己れの登山人生を追懐しながら天国に昇ったことでありましょう。

西郷さんを紹介してくれたのは知人の杉本さんである。西郷さんとは日本山岳会の会員同士であったらしく、その杉本さんに連れられてご自宅を訪問した。かれこれ十五年前のことと記憶している。ご自宅は私の家の隣町で閑静な住宅地として知られている東鷹匠町の一隅にあった。門を開けると奥にロシア館風の洒落た建物があり、東向きの広い庭にはヒマラヤ杉が数本植えられ、濃い緑の葉がまだ熱い残照を遮ぎるように広がっていた。玄関に上がると片隅に下駄箱があって、その上に愛用品らしい黒いベレー帽と使い古した小型ザックが無造作に置かれ、登山靴の脇に見たこともない柄の長い珍しいピッケルが立てかけてあった。

これらの登山道具と第二次RCC顧問という肩書から勇猛果敢な老師を想像したのだが、出てこられた方は知性的で温厚そうな学者風の紳士で、いささか尻ごみをさせられる思いであった。部屋に通されると名刺を差し出され、拝見すると、「千坂正郎」と書かれてあった。それまでペンネームを聞いておらず、思いもかけなかった人だけに鸚鵡返しにお名前を聞き返したことを覚えている。

その夜は奥様の手料理にビールをあおぎながらの歓談で、昭和初期の登山模様や造詣の深い山岳図書のこと、そしてご自身が撮った第二次RCC結成時の涸沢で行なわれた登山講習会の一八ミリフィルムを見せていただいたりした。

翌年私も日本山岳会に入会し、それを機に親しくお付き合いさせていただくこととなった。

一九九二年、当時南アルプス千枚小屋の管理人をやっていた

橋本君にご面倒をかけ、千枚小屋で「千坂さんと語る夕べ」と銘打つ親睦会を開催した。これには日本山岳会静岡支部と私の所属する秘湯山楽会などの仲間が二十人ほど集まった。西郷さんは得意の登山論に熱弁をふるわれ、かつて『岳人』に長い間連載した「理想の山・情念の山」の総論的なことを話され、今までのような西洋的＝理念的な登山史のみに片寄らず、東洋的な情念の文化や歴史というものを加味していかなければならないこと、年をとるに従って「山の呼ぶ声」がよく聞こえてくること、そしてエコロジーや自然保護問題に関心をもたざるを得なくなることなど教訓と示唆に富んだ内容であった。

翌日はカラリと晴れ渡る登山日和、私たちは荒川三山を登ったが、西郷さんはお一人で千枚岳まで登られて、赤石岳や聖岳や富士山などが見える山上の絶景や時まさに満開期のお花畑に出会い、大変興奮しておられた。夕食後橋本君の計らいで旧小屋を解放していただき、談論風発、高歌放吟、夜の更けるのも忘れた。西郷さんは山の歌は久し振りだといって、ヴィックス・ドロップを舐めながら大きな声で歌っておられた。

一九九七年十二月、年もおしせまった朝、奥様から「すぐに来て下さい」と電話が入り、駆けつけると、西郷さんは誤って熱湯をかぶり左足に大火傷を負い、ベッドに横になっておられた。医師が来て応急処置がなされたが、翌日入院することになった。この火傷が原因で脱水症になり十日間は絶食、一時は生命も危ぶまれたが幸い一命はとり止め、二か月間入院加療することになった。病院にお見舞いにあがった日、西郷さんは私にピッケルをあげますと言われた。

「私が死んだらピッケルの値打ちの分からぬ家内あたりに、庭いじりの鍬の代用にでもされたらかなわない」、「今のうちに現役の君にあげておく」。西郷さんが長年愛用して、数多くの思い出を刻みつけたピッケルだけに、正直いただくのも躊躇したのだが、決然と言われるだけにお預かりするという気持ちで受けとった。このピッケルは昭和の初め、西郷さんが学生の頃東京の片桐で買ったものだったが、実はこれは黒田正男氏が研究用に取り寄せたもので、それが果たされずそのまま店頭に置いてあったものを目につけ、黒田氏の了解を得て手に入れたと話してくれた。

ところがこのピッケルが数年前話題に上った。慎有恒隊がカナダのアルバータ峰に初登頂した際に山頂に残してきた「折れた幻のピッケル」と同じプリマであり、日本には数少ないものと分かった。山岳雑誌ではこれをスイス製と報じていたが、オーストリアのチロル州フルプメスで作られたことをつき止めた。

翌年と翌々年の二回、私はヨーロッパ・アルプスに登り、その帰路各々フルプメスまで足をのばし、プリマの親元捜しをしたが、捜しあてたのは別のメーカーの製作者で、結局徒労に帰し、残念ながら西郷さんへの土産話をもち帰ることができなかっ

た。「夢は長く温めていた方がいいですよ」と慰められた。

先の火傷は完治したがご高齢なだけに精神的、肉体的ダメージは想像以上に大きかったようであった。達者であったワープロの操作も忘れ、文章も思うように纏められなくなったとボヤいておられ、あの湧き出るような感性豊かな表現や理路整然とした文章も、これを境に見ることはできなかった。

それにしても生涯に書きあげた文章は莫大なものであり、その分野は小説、翻訳、随筆、評論、登山論、登山史と多方面にわたっている。とりわけ『山の仲間』は山岳小説分野の嚆矢であり、アルピニズム論では岳界をリードしたお一人であり、その功績は大変大きなものがあった。

（西郷正郎氏は一九五九年入会。会員番号四九八六。紹介者は藤木九三・岡部一彦両氏）。

（永野敏夫）

山岸猛男氏（一九一四～二〇〇〇）

われわれの山仲間では「丹沢の山岸さん」で知られた尊仏山荘管理人の山岸猛男氏が、二〇〇〇年五月十七日、静かにこの世を去った。享年八十六歳。氏はクリスチャンで、如才なく明るい性格から知人も多かった。

生まれは朝鮮半島の京城府（今の韓国ソウル）。中学を終えると東京で中央大学に学び、卒業後は京城に戻って会社勤めと応召兵で過ごした。終戦後は復員により帰国、ご尊父の郷里に近い秦野市に落ち着いた。

さて、氏の最初の仕事は、塔ノ岳の一角に小さい山小屋を建てることから始まった。ところが、立ち寄る登山者たちから山の話をいろいろ聞くうちに山のすばらしさに魅了され、山小屋経営の夢はさらに膨らんだという。

そのころ、たまたま小田急が塔ノ岳に尊仏小屋を建てる計画があり、さっそく頼んで管理人にさせてもらった。人の一生は、何が縁になるのかわからない。以後、山岸氏は一貫して丹沢での山小屋経営に徹したのである。

私が氏に最初にお会いしたのは、一九五〇（昭和二十五）年の夏に初めて丹沢に登り、尊仏小屋に泊まったときのことで、約五十年の昔になる。

一九五五（昭和三十）年には、丹沢と大山の山域を会場として神奈川国体（登山）が開かれた。県では、それに先立って収容力の大きい山小屋を三棟（尊仏山荘ほか）を建て、国体用のコースを全面的に整備して、さきの三棟の管理運営は山岸氏に任せたのである。

国体後は、当時世間は野外活動の動きが活発化してきた時期

だっただけに、丹沢の自然の魅力には多くの人が注目し、週末には登山者が殺到した。山小屋も、表丹沢一帯に年々急増するし、特に休日には、その前を登山者が列を作って登降するさまは壮観だった。

一九六一（昭和三十六）年には、丹沢の最高峰蛭ヶ岳にも県が山荘（山岸氏が運営管理）を建てたが、登山ブームもこの一、二年後あたりがピークだったようだ。戦後まもなくから丹沢の山小屋の歴史を見てきた氏は、ピークまでを振り返って「国体までの苦しいときが、実はいちばん楽しかった」と述懐したという。心情的に思えば、戦後初期の山では登山者相互で仲間意識が強く、例えば道で出会ってもどちらからともなく声をかけるし、小屋に泊まれば夜はストーブを囲んでよもやま話に花が咲くなど、なごやかな雰囲気がみられた。

それが、自分たちのグループだけが固まったり、知らない人との心の交流を求めたがらない昨今の風潮は、昔を知る山岸氏には、管理人としてもの寂しく思ったのではないか。

経済の高度成長期に向かって、それまで汚い男の世界だった山に女性が進出し（おかげで部屋の柱に鏡が付いた）、やがて若い男の山への関心が薄らぎ、代わって中高年層が主流になって登山者の構成が一新した。

そのころ、山で騒がれ始めたのがゴミ問題である。新聞紙や弁当の食べがら、瓶、缶などが山の至るところに散乱して目にあまり、結局は県民全体の「丹沢ゴミ持ち帰り運動」に発展する端緒となった。

また、毎年起きる大小の遭難事故については、登山知識の高揚と登山技術の向上を目指し、山岸氏が中心となって一九六四（昭和三十九）年に登山学校を開設、六六年には施設を県立登山訓練所に改築し、氏がその所長に就いた。

このほか、登山者への地味な仕事を長年続けられたが、その一つ、毎年六月に上野松坂屋で開く「夏山相談所」は、一九六二年以来毎回出席して安全登山の相談に応じている。中部山岳から東北まで、著名な山小屋の管理人が連日一堂に会するとあってなかなか人気がある。氏自身も、同業者に会って山の苦労話が聞けるので、それをいつも楽しみにしていたという。

その二は、気象協会の「夏山天気予報」に協力して、一九六四（昭和三十九）年から毎年夏の二か月間、塔ノ岳で気象観測を行い、得たデータを一日二回定期的に送信して欠かさなかった。

次に、昭和三十年代のエピソードであるが、その一つは、県と地元で、塔ノ岳―市役所（支所）間を無電源式電話（声で起電する）を架設したことがあった。工事が終わって地元が開いた開通式の日、私が行くと思いがけないことに武田久吉氏が見えており、その隣に座るようにいわれた。おかげで、武田氏から初めて丹沢に登ったときのいきさつ、コース、玄倉川の状況

や山上の景観まで事細かにお話くださり、感激の面持ちで拝聴した。先日、奥様に聞くと、武田氏は山岸氏のご尊父とは一高―東大の学友とのこと。それで、山岸氏が武田氏をお招きし、皆と相談して私の席を作ってくれたらしいのがわかり、その好意があらためて身にしみた。

次に、その山岸氏から「塔ノ岳で、当時流行した記念バッジのオリジナル品を売りたいが」と相談されたことがある。そこで、前からお世話になっている足立源一郎画伯のご自宅を訪ね、三人で相談の結果、女性がブローチにも使えるような物がよいというわけで、丹沢の名花シロヤシオを題材に、画伯のデザインによる品のよいバッジが出来上がった。しかし、最初しばらくは売店で見かけたが、やがてその話は聞かれなくなった。気のいい氏は売るには売ったが親しい人には断われず、かなりの数をプレゼントしてしまったのではないか、というのが私の憶測である。

氏が苦労して管理運営してきた山小屋や登山訓練所も、長い年月を経て施設の老朽化が激しく、改築、管理替え、移築、廃止などになり、今なお運営を続けているのは尊仏山荘だけになった。それも、一九八七（昭和六十二）年に改築され、神奈川工大の協力で太陽電池を使った電気や、丹沢ではりょう線唯一の無線公衆電話が建物より一足早く開通して、長年なれ親しんだランプ生活も終わりを告げた。

若いころは丈夫だった山岸氏も、長い間の無理がたたって一九八四（昭和五十九）年に多発性関節炎（ひざの故障）に悩み、その後さらに肺炎を併発して入院したのをきっかけに病が続き、ついに回復することなく昇天された。尊仏山荘の方は、花立昭雄、篤子夫妻が父の跡を継いで頑張っておられる。

二〇〇〇年に病院へ見舞ったとき、氏は病床から体を起こして「治ったら、家内と三人で食事をしよう」と言ってくれ、奥様と私を喜ばせたが、結局期待はかなえられないままに亡くなったのは残念でならない。氏の風貌、物の言い方、そして優しい心づかいなど、私の頭に今もみんなはっきり覚えている。

山岸さん、これまで本当にありがとうございました。残されたご家族のご多幸を温かく見守ってあげてください。

（山岸猛男氏は一九六二年日本山岳会に入会。会員番号五四三二。紹介者は小野幸・折井健一両氏）

（松尾良文）

水野公男氏（一九二五～二〇〇〇）

一九七二（昭和四十七）年七月、私が成瀬岩雄さんから櫛形山登山に誘われて山行に加わり、山麓の大曾利部落に宿泊した

が、その折同行者に水野君がいて、初めて山行をともにしたのであった。

その日以来、水野君とは比較的住所も近いこともあって、誘い合って方々の山に出かけるようになった。いま改めて振り返って数えて見ると、二十数年で百回以上も、水野君の車を利用させてもらっての登山を続けたことになる。気が合ったということだろう。この中には色々想い出に残る山行が数多くあった。その一部を紹介して、水野君を偲ぼうと思う。

とにかく水野君は、そそっかしいの一語に尽きる。山に行って忘れ物をしないことはまず無かったように思う。天城山に「もみじ会」の偵察に行った時、昔の彼女（後の奥さん）から誕生日に貰った時計を落として、藪山を引き返し同行者達の必死の捜索も甲斐なく見つからなかったことがある。その後帰ってどう言い訳したのかは誰も知らない。その他、カメラや筆記用具などはもちろんだが、最大のものは冬山で山に門田のピッケルを忘れてきたことであろう。よくこれだけ色々なものを忘れかけたり、忘れたりの山行だったものだと不思議であり、印象に強く残っている。

それにもう一つ、彼の運転する車に乗せて貰って怖かったことである。何しろ戦車隊出身、悪い道でも道らしきものが有りさえすれば行ってしまう。東名高速でも軽のスズキフロンテで、フワンフワン半分飛びながら時速一〇〇キロ位で走り、免許証を持たない同乗者からも怖がられたエピソードがある。

今でも忘れられない極めつけの事件は、ある正月の休みに、支部の有志で長野県の恵那山群の大川入山に登ろうということで、石間信夫、水野公男、望月福次、私など七人が一台は水野君の車と、もう一台の二台の車に分乗して、佐久間町から阿南町へ抜けるべく浜松から県道を北へ進路をとった。正月で北へ向かうほど雪が深くなってきた。皆の口から「スパイクを履いてくればよかったなあ」などの声が出始めたが、水野君は、「この程度の雪なら戦車隊なら平気だ。大丈夫、大丈夫」とワダチが一本の道をどんどん奥へ進めた。対向車がきた。左側は天竜川の二十メートル位の崖である。ワダチの真中に右の前輪をのせてゆっくりと左側に寄った途端、左の前輪が滑って崖の上に浮いてしまった。中の四人は、冷や汗をかきながらゆすらないように、そろりそろり右後部座席に身を寄せた。全く生きた心地がしなかったことを今でも頭をかすめる時がある。

反面、水野君には実に研究熱心な面があった。支部の例会で静岡県内の一等三角点が話題になった時、すぐにその所在を調べ上げ、さらに国土地理院に出向いて、日本全土の一等三角点の所在地を調べて一覧表を作成してしまった。一度決めたら離さないというか、スッポンにも劣らない粘り強さを持っていた。これに手を加えて一九七四年に『一等三角点』の自費出版までしてしまったのである。さらに翌年にはその増補版ともいえる

『全国一等三角点（本点・補点・増大点）九六八点の所在地一覧』をまとめた。

軍隊仕込みの几帳面さであろうか、何事にも迅速に対応して実行に移す性格は、なかなかのものであった。そして出来るだけ人に迷惑をかけまいと、物事を人に頼んだりすることがほとんどなく、犠牲的精神で何でも一人でやってしまう性格だった。自ら進んで永年支部事務局の雑用を一人で引き受け、支部会員の名簿などは常にきちんと整理してあり、本部との対応などもよく出来ていたと思う。また、持ち前の手八丁、口八丁でいつも支部を明るく盛り立ててくれた。この功績は、静岡支部にとって得難い人材であって、何時までも記憶に残る存在となっている。

昨年四月、丹沢山麓の寄小屋の集まりで、水野君と一緒に山登りしたのが最後であった。あの時以後帰って間もなく発病されたことを、七月始めに見舞いに行った時に聞かされた。病気など取り付きそうにも無い頑強な体の持ち主と思っていたが、ガンには勝てなかったようだ。これからももっと支部のためにも、活躍して欲しい人だっただけに、発病から六ヶ月余で逝かれて、誠に残念で淋しい限りである。心からご冥福をお祈りしたい。

略　歴

一九二五（大正十四）年十一月十五日　静岡県藤枝市に生まる
一九四一（昭和十六）年　陸軍少年戦車兵学校に入学
一九四三（昭和十八）年　同校卒業。関東軍戦車第二師団に配属さる
一九四五（昭和二十）年　北千島で終戦。シベリアに抑留さる
一九四九（昭和二十四）年　シベリヤから復員
一九五三（昭和二十八）年　慶応義塾大学経済学部中退
一九六三（昭和三十八）年　日本山岳会に入会。会員番号五五三四。紹介者は神谷恭・山本朋三郎両氏。ミサワホーム藤枝工場勤務
二〇〇〇（平成十二）年十月十一日　胃ガンのため死去。享年七十四歳

（牧野　衛）

小田　稔氏（一九二三〜二〇〇一）

小田稔さん（会員番号八九七一）は、昨年まで秩父宮記念山岳賞の審査委員長を勤め、暮れの年次晩餐会にも御夫妻で元気に出席されていた。その数日後には、年来の膝の痛みと、脚力の弱化を恢復し、もう一度山歩きを楽しみたいと、神経の圧迫

を下げる頸椎の手術を受け、年末には退院された。ところが年が明けるとともに、原因不明の発熱が起こって再入院、その後、病院側と御家族の懸命の看護がなされたにもかかわらず、本年（二〇〇一年）三月一日、心不全のため、余りにもあっけなく急逝された。誠に痛恨の極みである。

小田さんは一九二三年二月二十四日、学者一家の小田家の長男として、札幌に生を享け、スキーなどを楽しんだ。一九三四年小学校六年の時、父君の俊郎氏が、北大から新設の台北帝大医学部に移られたので、台湾に転居、名門校である七年制台北高校の尋常科を受験、大変勉強して無事入学できた。この学校の空気は実に好ましかったようで、山岳部員になって、新高山（現在の玉山）に登ったり、酒の味を覚えたり、さらに良き先生に恵まれて、自身の目で考えられる物理に進む決心も固まった。

大学はキクチラインで有名な菊地正士教授に憧れて阪大に進み、宇宙線を専門とした。乗鞍岳の宇宙線観測所にも通ったが、冬期、荷揚げの荷物が重過ぎて膝を痛め、その影響は年とともに昂じていった。しかし山への思いは一層深められた。

一九五三年、米国のＭＩＴに移り、ロッシ教授と出会って、Ｘ線天文学に係わることになる。その間、ヨーロッパに出かけ、メンヒはじめベルナー・オーバーランドの山々にガイドと共に登った。後年このガイドとの再会が機縁となって、ガイドの系譜を調べるうち、ブラバンドや孫娘のマルグリットさんとも出会い、グリンデルヴァルトの名誉村民に選ばれたが、これは大変嬉しい出来事だった。昨年マルグリットさんからの連絡で、ミッテルレギ小屋の村への移設保存計画が、彼を通じて本会にも伝えられ、有志が募金に協力して、計画が実を結んだことは周知の通りである。

その後、Ｘ線用のすだれコリメーターを開発して、中性子星やブラックホールを発見した経緯や、宇宙研、理研、国際高等研の所長を歴任し、学士院賞や文化勲章に輝いた記録は、小田稔著の『青い星を追って』（日経サイエンス社、一九九〇刊）に詳しい。

当会には一九八一年、織内信彦・田尾正両氏の紹介で入会、その後知枝夫人も入会された。その頃、私もロケット実験を行っていたので、宇宙研への通勤電車や、内之浦の宿などで会うと山の話になった。私の家ではテントで冬山に出かける時など、荷物の重量は全員同じにしていると話したところ小田さんは、近頃息子が二対一の比で荷物を担いでくれるので、気楽に日本の山にも出かけているとか、私共がグリンデルヴァルトでストイリーの宿に泊まったと話すと、自分たちも同じ宿に泊まって来たとかと、新高山時代と玉山では登山道は少しも変わっていないが、阿里山鉄道や阿里山は随分変わったものだなど、いろいろ話がはずんだ。

知枝夫人は研究の秘書役を勤め、長男の克郎さんは金属物理、長女の玲子さんは物性物理という、いずれも優れた研究者一家であるが、趣味も広く、全員山好きの上、ピアノも堪能で、四人共日本モーツァルト協会の会員である。夫人は庭で野や山の花を育てるのも趣味であるが、小田さんは、これらの花をスケッチして、優しい水彩画に仕上げるのに余念がなく、その成果は樋口敬二氏や久保亮五氏との展覧会となり、小田稔画文集『花と人と』（アドエース、一九九三刊）の出版ともなった。小田さんは自然保護にも熱心で、自宅近くの武蔵境駅前のJR跡地を「雑木林にしたい会」の発起人になり、中央線沿線の文化人など巻き込んで、今では二千名を越える会となっている。三水会でも皆と気軽に話をするなど、広く人々との誠意ある交流を大切にした、柔和で洒脱な国際的教養人であった。

一九九五年秋、国際高等研での会議に出席した私共夫婦は、翌日小田夫妻とともに、紅葉の美しい談山神社から御破裂山に登り、大和三山をよく見晴らすことができた。当時、小田さんが宇宙研への置土産としたX線天文衛星「あすか」は順調に働き、X線連星や活動銀河からの情報を次々に送って来ていた。「今日は初めて飛鳥の地がよく見渡せ、思い出となる山歩きだった」とのつぶやきは印象的であった。その「あすか」は、奇しくも小田さんがなくなった翌日、大気圏に突入し、八年間の生涯を閉じたからである。

玲子さんは、その後フランスの物理学者と結婚して、ボルドーで生活を始め、昨年秋、第一子を出産された。小田さんは童顔も手伝って、周囲から「星の王子さま」と呼ばれていたが、この時は自ら「星のおじいさま」と称してボルドーに出かけ、孫に対面して来られた。帰国後、ピレネー見物の余裕はなかったが、孫は元気だったと、満足そうな報告の電話があった。

故アルベルトウス・マグヌス・小田稔の葬儀は、三月五日、聖イグナチオ教会に於て、勅使を迎えて、しめやかに行われた。その中で、玲子さんの凛とした聖書朗読は、ひときわ私共の心に染みとおった。

膝の治療をして、これから楽しい登山をしようと意欲を燃やし、東京情報大、日本アイソトープ協会、住友財団の現役の長として、熱意を持って仕事にも当たって居られた矢先の急逝は、御本人にとっても、ただ残念だったろうが、御家族、特に奥様のお嘆きは如何ばかりであったかと拝察し、申し上げる言葉もない。私共も、小田さんを失った悲しみは、測り知れないものがあるが、今は唯、心から御冥福をお祈りするばかりである。

（中村純二）

須藤建志氏（一九四九〜二〇〇〇）

二〇〇〇年八月。京都支部の須藤建志さんがパキスタンで事故にあった。この登山は、須藤さんが計画した、来年の「ラカポシ・初登ルートのアルパインスタイル」登山に向けた、須藤さんと私の二人だけの偵察山行であった。

五日、ギルギットを発ち、七日、テント二張りのBC（四一〇〇㍍）を設けた。八日、ラカポシ（七七八八㍍）南西支稜に取り付いてまもなく、標高四六〇〇㍍アイスフォール下の岩陰で、共にレストしていた須藤さんを、音もなく一発の落石が襲った。もっとも信頼していた相棒を失った私は、いっときは半狂乱になりながらも、救出に自分のすべてを尽くした。が、ほぼ即死状態であった。

須藤建志さんは、一九四九年八月三十一日に長野県豊科市に生まれた。八ヶ岳の原村や諏訪市に親戚があり、私も須藤さんから「小学生の時、ここでよく泳いだのだ……」と、諏訪湖畔にある古い温泉「片倉館」の、大きな深い湯船に案内された。「こういうところで、やんちゃな須藤君が育ったのかなー……」と、思いながら、玉石が敷き詰められたプールのような温泉に感動し、共に浸かったことが、ついこの間のようである。

お父さんの仕事の関係で、京都に住むようになり、伏見工業高校建築科に入学。山岳部に所属し、高校生ですでに本格的な積雪期の登攀を行っていた。

須藤さんは、いくつかの社会人山岳会に所属しながら、「自らの力による自由な登山」を望み、既成の山岳会に限界を感じ、一九七四年「個人の遊びとして、個人の責任の下に、自由な〈山〉を楽しむクラブ」……「京都岳人クラブ」を、同行の士と共に創設し、若干二十五歳で代表となった。その年に博子夫人と結婚している。

仕事でも、建設会社で現場経験を積んで、一九七二年京都市の住宅局に勤め、七八年には「一級建築士」の資格を取っている。一九八八年の「三国友好チョモランマ交差縦走登山隊」に参加するとき、「職場の仲間に迷惑をかけたくない」と、退職。以後「アルム・ツーバイフォー」という建設施工の会社を経営していた。

山歴も、国内の積雪期の数々の登攀とともに、京都岳人クラブ創設後、自ら企画し海外（特にカラコルム）へも積極的に出かけた。

一九七九年七〜八月　K7、チャラク氷河
一九八〇年六〜八月　マンゴクソール（六二八八㍍）アルパインスタイル登頂、タジワス山群
一九八三年六〜八月　マッシャーブルム（七八二一メートル）

アルパインスタイル

一九八四年六～七月　ナンガパルバット・ディアミールフェース・アルパインスタイル

と、立て続けにパキスタンに出かけている。

日本山岳会に入会したのは、そのころの一九八六年二月、紹介者の一人は今西錦司先生である（会員番号九八〇一）。一九八六年三月、今西錦司先生の呼びかけで、京都支部が創設され、京都の多くの山仲間が参集した。須藤さんが、自分のクラブ以外の仲間たちに大きな影響を与え始めたのは、特に一九八六年以降であり、JAC加入による交遊の広がりが、大きな契機となっていると思われる。

須藤さんは以降も、多くの海外登山を行ったが、特筆すべきは一九八九年の京都カラコルムクラブによる「コングール（七七一九㍍）北稜・初登攀」であろう。登攀隊長として指揮を執り、自ら先頭に立って難関の「傘岩」を突破し、アルパインスタイルでの〈登攀隊員九名全員登頂〉の成功を収めた。

この登山報告の中で、須藤さんの勝れたリーダーとしての人となりを表すエピソードを、須藤さんから厳しく指摘されたHさんが記している。

「夕食のあとミーティングが始まった。今日の報告や、これからの行動予定などの打ち合わせが終わったあと、須藤登攀隊長が話し始めた。……『H君、君の昨日の行動は自己管理能力が無いと判断されても仕方ないですよ。登山という行為は自己管理能力がないと、自分だけではなく他人まで危険にさらすことになるし、そういう人は上には登らせませんよ。これは他の人も覚えておいてください。自己管理能力のない人は、たとえ誰でも上には上げません』……返す言葉もなかった。また、ずっしりとこたえる言葉であった。登山隊に参加した以上、登攀のチャンスを奪われることは一番つらい。この言葉は、皆の心にも焼き付いたようだった。それが証拠に、下山後〈自己管理能力〉という言葉は隊員間の流行語になった」

また須藤さんは、「事故」となったとき、すぐに自ら先頭に立って、しかも適切な判断と指示をてきぱきと行う、まさに〈頼れる男〉の典型的なリーダーでもあった。

私も、須藤さんとは一九八六年以降のおつきあいだが、ヒンズークシュのティリッチミール（七七〇八㍍）、ラカポシ北稜、東チベットのミニヤコンガ（七五五六㍍）などの登山をご一緒させていただき、多くのことを学ばされた。

一九九一年の、日本山岳会京都支部十周年を記念したティリッチミール登山では、自ら企画立案し登攀隊長を務めた。そのとき、登頂成功直後に七四〇〇㍍のC4で、D隊員の異常なことに気づき、須藤さんは「脳浮腫」と判断、直ちに救出活動を開始した。六〇㍍のチムニーを含む、15ピッチの岩と氷のルートを、各隊員を指示しながら自ら先頭に立って、よたつくD隊員

をフォローし下降させ、C2に夕刻五時に着く。朝から、九時間ぶっ続けの救出活動に、皆バテバテである。ここで、須藤さんは、一席ぶったのだ。……「ワシらはただばててるだけやし、一晩寝たら回復する。けど、D君は脳浮腫なんや。このまま一晩寝たら助からんかもしれんのや。歩けるうちに、たとえ一〇〇(メートル)でも降ろしたら助かる可能性は大きくなるんや。みんな、今日中にC1まで下るつもりで頑張ってくれ」……パキスタン隊員には、須藤さんの親友サジャードに通訳させ、皆うなずく。

支える者も、支えられる者もお互いによろけながら、ふらふらと下っていく。真っ暗になった、夜九時。C4から高度差で一三〇〇(メートル)降ろした。須藤さんは「ここにテントを張ろう」と、指示した。そのときD隊員をささえていた、ナディーム隊員と私は、テントにD隊員と一緒に倒れ込み、しばらく動けなかった。そして、D隊員は助かったのである。

このように、本当に須藤さんは〈他人が窮地におちいったとき、何かをやってくれる男〉であった。

厳しいリーダーであった須藤さんだが、仲間をまとめる能力もまた抜群で、多くの仲間が須藤さんの周りに出来ていった。パキスタンとの合同登山であった、ティリッチミールの隊長として、登山隊をまとめる上での自分の所信を述べている。

「……しかし私は、これだけの人数がいたとしても、皆登山がしたいという一つの目的をもって集まってきた者ばかりだから、まとめ上げるのはそれほど難しくないと思う。ヒマラヤ登山ではメンバー同士がトラブルを起こしたり、時にはとっくみあいのけんかまでした話を聞くが、私にはそのような経験はない。私にとっての山登りとは、人とのかかわりであり、登山を通じての出会い、一緒に行った仲間とどう登ったか、そこに集まった人とどう関わったかに魅力を感じている」と。彼の、人柄を思わせる言葉である。

須藤さんは、また豊富な経験と知識を生かして、後輩や仲間の指導に熱心であった。日本山岳会京都支部での毎年の、錫杖前衛フェース・穂高屏風岩などでの岩登り教室、富士山・岳沢などでの雪上講習会などでは、須藤講師の魅力に惹かれ多くの会員が参加し盛況であった。また、遭難救助技術について、自分のクラブだけでなく、岳連の若い仲間に呼びかけた実戦的な合同訓練など、積極的に行っていた。

須藤さんは、一九九六年十二月大事に育てていた、ある後輩を八ヶ岳・中山尾根で亡くした。その事故報告の中で、山の危険についてこう語っている。「登山では一瞬の判断ミスや、ちょっとした気のゆるみが命取りになる。私はそのことを〈山登りはいつも、死に神を横に連れとるようなもんや〉と、表現している。一瞬のスキに命を持って行かれる。難しい登山であればあるほどに状況にとらわれることなく、冷静で的確な精神力とも言える判断力が必要になる。しかし、これはいろいろ登山を積

み重ねることでしか得られないものである。たとえ、そうしたとしても危険を絶対に避けられるものでもない」と。

山の危険を、いちばん深くよく知っていた須藤さん。今回の事故は彼にとって不意打ちではあったが……「まあ、しゃあないか」……と、苦笑いしながら納得していることだろう。

須藤建志さん、大好きなパキスタンの上空から、若い仲間をいつまでも見守ってやってください。

合掌

（宮川清明）

坪井　圭之助　氏（一九三〇～一九九九）

一九九九年十二月一日、岳友坪井圭之助君（一九九〇年入会、会員番号一〇六二三）。紹介者は徳永篤司・山田二郎両氏）は忽然として逝ってしまった。かねてから心臓が悪かったが、それにしてもあっけない別れでしばし呆然となってしまった。

坪井君は一九五〇（昭和二十五）年に大阪大学入学後直ちに山岳部に入り、昭和二十年代後半から三十年代前半にかけて現役及び若手のOBとして活躍した。一九五二年春の杓子双子尾根から不帰往復計画、同年夏の鹿島槍カクネ里（この時川島勇君とのコンビで直接尾根を初登）、一九五三年春の後立山逆縦走、一九五五年冬の鹿島槍東尾根、一九五六年春の黒部下廊下横断などに主力メンバーとして参加し計画の遂行に大いに貢献したのである。私の方が一年早く入学していたが年齢も同じで何となくウマがあったから、公式の計画ばかりでなく個人的な山行もよく共にした。スキーをはいてさえ腰までもぐる豪雪に雪まみれになって格闘した冬の猿倉台地、晩秋の穂高で下りルートを誤り薄雪の覆った草付きにアイゼンもなくて悪戦苦闘した明神最南峰でのこと、黒部の底で新雪が来てしまい休暇日程の切迫に死にもの狂いになって越えたザラ峠など、あれこれと思い出は尽きない。

彼はまた良きクライマーであると同時に良き医師でもあった。専門は胸部外科、各地の病院に勤務して実績を挙げ、終わり頃は大阪の日生病院の外科部長を勤めていた。私なども息子を含めて随分世話になったが、特に私が肺結核で入院したときには厄介をかけてしまい文字通り足を向けて寝られないところである。そうした間に一九六八（昭和四十三）年から数年間国際医療協力の一環としてアフリカのケニアに赴任している。現地でいろいろ貴重な経験も積んだであろうがやはりクライマーとしての血が騒いだのであろう。忙しい仕事の合間を縫って山岳部のOGである奥さんを伴ってケニア山（五一九九メートル）に五回も登ったとのこと、国内でウロウロしている私などを尻目に五千メートルの高度を経験して来たわけである。

その後お互いに社会的な責任が重くなってくるに従って山とは縁遠くなってくるのはやむを得ない所で、毎年夏に梅池の大阪大学の山小屋で行われる阪大山岳会の夏季例会に出席して、ついでにその辺りをブラブラ歩くのがせいぜいとなってしまった。もっとも無趣味な私とちがって坪井君は絵心があったから、こうした中でもJAC関西支部のスケッチのグループに加わり週末などに山歩きをかねて出掛けていた。その頃の彼はやや太り気味でかなりのヘビースモーカーではあったものの非常に元気で、とても病に倒れるとは見えなかった。ところが突然一九八五（昭和六十）年八月に彼は最初の心臓発作を起こした。この時の発作は強烈なものでほとんど心臓破裂に近い状態であったようだ。しかし彼はその強靱な体力と類いまれな生命力で生還してきた。嘗てさかんに山へ行っていた頃、彼は二度ばかりスリップで事故を起こし、〝あわや〟という事態に遭遇したのだが、間一髪というところで事無き得たことがある。そういう星に恵まれた、いわば並はずれた生命運を持ち合わせていたからこそ、事故からも逃れ病にも耐え抜いて生き延びて来たのだろう。そしてその後は驚異的なペースで回復し日常生活には殆ど支障がないまでになってきた。晩年の数年間私と二人で大阪大学山岳会の会務を担当したが、万事大雑把な私に対し几帳面な彼は細かい所までよく気配りしてくれ、本来私がやるべき会計のことなども殆ど処理し、私が大過なく勤めあげることが出来たのも彼のお陰といっていいだろう。だがこうして彼に負担をかけたことがその命を縮めたのではないかと忸怩たる思いが無いではない。

その後彼は古巣の日生病院で余り負担のかからない仕事をやりながら余生を楽しんでいた。暇を見附けては奥さんと車をとばして山の見える所に行って好きなスケッチをやり、時には周辺を散歩して山の匂いを懐かしんでいた。亡くなるホンの十日ほど前にも私に電話があり、とりとめのない昔話のあとそのうち一緒に飯でも食おうやということで電話を切った。やはり虫が知らせたのだろうか。そして亡くなった日は何事もなく昼食後、晴天の霹靂の如く発作を起こして旅立ってしまった由である。始めの発作以来十四年、彼の強運も生命力もとうとう寿命には勝てなかったということだろう。あらためて冥福を祈るのみである。

合掌

（田島　汎）

会報「山」訃報・追悼文一覧

二〇〇一年二月号（六六九号）

追悼　山陰支部の精神的主柱　港叶氏を偲ぶ（小椋凱夫）

支部だより

北海道支部

昨年に引き続き開催した「自然児学校」（FACファミリー・アルパイン・クラブ）は、八月二日から五日までの三泊四日の日程により、日高・新冠川上流において子供十七人、同伴者三人、スタッフ三十人の総数五十人で行われ、概ね成功裡に終わった。この「自然児学校」を当支部の主要行事として定着させていくには、まだ問題点が多い。特に運営は会員・会友の完全なるボランティアワークによることから、それぞれのキャリアに期待して事業目的を継続している。趣旨は「山」六月号（第六七三号）支部だより欄に向井副支部長が詳細記述しているが、伊藤秀五郎第二代支部長の理念である「子供たちに自然の大切さを教える」ために何を如何になすべきか、来年の実施三年目に向けて、さらに反省検討を加えて取り組みを始めている。

二〇〇一年の支部総会では、支部委員を一挙に五十五人に増強し、委員会制を導入した。これまでの支部運営は部会制度で、全てに対して支部長などの三役が関与しなければならず、しかも大半の委員が「一任」の傾向があり、より強力な責任ある執行体制が必要とされる実情から、二十一世紀からの委員会制移行により、各委員会の主体的な事業の展開で、支部活動を充実させたい。

特に山行部会を企画委員会と名称変更し、支部事業の根幹である山行計画と共に、二百八十人の会員・会友を擁する広大な面積の支部運営全般に係わるようにして、実行体制の確立を図った。図書委員会のルーム開放業務（四～一〇月、毎週日曜一三時～一七時）など、徐々に独自に委員会を開催して当面の問題に取り組むようになってきているので、支部執行体制も大きく変革しつつある。二〇〇五年の日本山岳会百周年は北海道支部三十五周年に当たり、支部として海外遠征に取り組む時期にきており、日本最北の支部として北方に目を向け、北海道と姉妹県関係にあるカナダ・アルバータ州へのアプローチを課題に挙げている。

定例山行では本年二月、零下三〇度のチトカニウシ山での雪洞、山スキーから始まった山行は好評で、道南の乙部岳（六月十六～十七日）、道央の白水沢（七月一日）、道東の西クマネシリ山（九月十五～十六日）、支部定番「お月見山行」（十月十三～十四日）が札幌郊外・定山渓天狗岳で行われ、十一月二十四～二十五日には北海道で最も早くオープンする層雲峡・黒岳スキー場と黒岳で初雪山スキーを楽しむ。二〇〇二年に入り羊蹄山（二月十六～十七日）、そして恒例の雪洞・山スキーは余市岳、朝里岳で交差登山（三月九～十日）を行うことになっている。同好会活動は、作品展、フォークダンス、グルメ、コーラスなどが定着した。

（新妻　徹）

岩手支部

支部員の要望に沿うような山行を主に行い、月一回の行事を組んでいる。

四月二日盛岡市で支部委員会。総会十八人出席、委任状四十三人、その後に懇親会。

四月三〇日、月例山行　飛竜山・胴具足山。春の陽光を浴びながらのんびりした山行であった。十六人参加。

五月二十八日、月例山行　六角牛山。小雨の中を二等三角点の山頂に登った。九人参加。

六月十七日～十八日　春の例会・委員会と山行。気仙三陸町川古荘宿泊二十人参集。翌日五葉山へ、楢の木平登山口から一等三角点の山頂を経て、しゃくなげ荘で昼食。赤坂峠へ下山。十七人参加。

七月十六日、月例山行　高下岳。尾根道は笹が被り、足場も悪かった。

七月二十三日「新日本山岳志」支部編集委員会　水沢市プラザイン水沢。六人参集。

七月二十五日「岩手支部通信」第十五号発行

八月十九～二十一日、夏の例会山行　剱岳・立山縦走。初日は剱山荘まで。二十日四時三〇分出発、八時に剱岳山頂に到着。落石に緊張しつつ剱山荘に下山昼食。午後三時には内蔵助山荘に入った。二十一日は大汝山・雄山と越えて室堂で解散。十四人参加。

九月十日、月例山行　御大堂山。リンドウの咲き乱れる草地を辿る秋の山。五人参加。

十月七～九日、秋の例会山行は京都支部との交流山行。初日は大迫町岳の民宿大和坊に宿泊。八日は小田峠から早池峰山に登って河原坊に下山。長駆して岩泉町の民宿佐々豊に宿泊。九日は葛巻町の遠別山・安家森に登る。山麓の小屋では遠別山岳会の心尽くしの茸のひっつみ汁に全員満足した。京都支部十二人・岩手支部二十七人参加。

十一月三日、月例山行赤林山・毒ケ森・南昌山　地元山岳会によって最近開かれたコースである。二十人参加

十二月九日、支部晩餐会　十八人参加。

平成十三年一月十三日、月例山行　東根山。様式輪かんの試用を行った。四人参加。

一月二十五日「岩手支部通信」第十六号発行。

二月十～十一日　月例山行。早池峰薬師岳スキー山行。うすゆき山荘で宿泊。翌朝山荘の南斜面から山頂に登り、小田越を経て岳に下山した。七人参加。

三月十七日、月例山行　三ツ石山。スキーを楽しみ峡雲荘に休憩して解散。四人参加。

今後は、支部の人達にもっと全国規模の行事に参加してもらうことを勧めたい。

（中谷　充）

秋田支部

平成十二年度の当支部の活動は平年並みに留まった。四月二十二日に定期総会を開催し、委任状を含め五十五人の会員が参加した。支部山行を中心とした事業案、決算・予算案が提供され、全議案を原案通り承認した。

支部山行は、①四月九日、岩手県境にある残雪の沢尻山、朝日岳、志渡内畚を縦走した。今回は秋田県側に積雪が残っていたため、岩手県沢内村から入山した。会員・会員外を合わせて八人が参加、快晴の山頂で大展望を楽しんだ。②六月四日～十日、韓国の漢拏山（ハンラサン・一九五〇㍍）と俗離山（ソンニサン・一〇五七㍍）の親善登山を行い、十人が参加した。共に韓国山岳会および同慶南支部の岳友と登山、交流を深めた。韓国山行は当支部の主力行事であり、過去を遡ると設立当時から交流の記録がある。今後も継続したいと考えている。③七月二十日、赤田五山と呼ばれる秋田県本荘市近郊の信仰にゆかりの深い里山と、干支に因んで近くの里山「竜馬山」に会員・会員外合わせて九人が登山した。

※赤田五山……東光山（五九四㍍）、笹森山（五九四・五㍍）、仙洞山（四八八㍍）、如意山（四〇四㍍）、黒森山（五四一㍍）を総称。

④十月十五日、辰年生まれの会員のための慶祝山行を行った。会場は秋田県北部のほぼ中心に位置する「竜ヶ森（一〇四九㍍）」で、会員六人、会員外二人が元気に登頂した。

支部会報『秋田山岳』は三回発行し、通算で四十七号となった。また、本会が開催する諸会議、県内の山岳団体等の会議や事業に積極的に参加し、交流を深めるとともに、情報の収集に努めた。

本年度は一人の新会員を迎え、総勢七十三人となった。今後は会員の高齢化に対応した山行計画と、若年の新会員勧誘運動の盛り上げ、あるいは支部会計の財源見直しなど、より身近かなところに目を向けていきたい。

（鈴木要三）

宮城支部

二〇〇〇年度の行事は四月二十三日花山村の御駒山山頂で開催された支部総会で、今年度の決算・予算・行事報告・行事予定などが満場一致で承認された。特記事項としては、支部懸案の中国太白山登山の実施計画を柴崎支部長から提案され承認された。それらの行事報告は以下のとおりである。

四月二十三日　支部総会、御駒山にて二十二人参加。担当、柴崎徹・千石信夫。五月二日　第一回太白山登山打ち合わせ、ホテルメトロポリタン仙台にて五人参加。担当、柴崎徹。五月十三日「新日本山岳志」編集委員会出席、林田健治。五月二十一日　春山山行、船形山にて六人参加。担当、千田早苗・鈴木晃三。六月四日　雨乞山行、雨呼山（山形市）にて十一人参加。担当、大橋克也。六月十三日　第二回太白山登山打ち合わせ、電気会館

にて十五人参加。担当、千石・林田。六月二十日　「宮城山岳」編集会議、三宅邸にて五人参加。担当、三宅泰。六月二十九日　第三回太白山登山打ち合わせ、電気会館にて十五人参加。担当、千石・林田。七月十八日　「新日本山岳志」支部編集会議、電気会館にて七人参加。担当、林田健治。七月二十五日　第四回太白山登山打ち合わせ、電気会館にて十五人参加。担当、千石・林田。七月二十九～三十日　夏山山行、障子ヶ岳にて七人参加。担当、中里正信。八月二日　第五回太白山登山打ち合わせ、電気会館にて十三人参加。担当、千石・林田。八月十六日　第六回太白山登山打ち合わせ、ライオンにて七人参加。担当、千石・林田。八月十八日　第七回太白山登山打ち合わせ、ライオンにて十四人参加。担当、千石・林田。八月二十三日　ビールパーティー　法華クラブ仙台にて三十一人参加。担当、高野笑美。九月十六～十七日　全国支部懇談会参加久住山にて。柴崎支部長夫妻参加。

十月十五日　秋山山行、弥太郎山（白石）にて十九人参加。担当、林田健治。十一月十二日　晩秋芋煮山行、楠峰にて十八人参加。担当、高橋功。十二月二～三日　年次晩餐会・全国支部長会議、高輪プリンスホテルにて十一人参加。十二月六日　支部年次晩餐会、ホテルリッチフィールドにて二十六人参加。担当、木皿謙。二〇〇一年一月一日　元旦登山、泉ヶ岳にて七人参加。自由参加。一月十日　「新日本山岳志」支部編集会議、電気会館にて七人参加。担当、林田健治。一月二十七～二十八日　冬山山行、大東岳にて七人参加。担当、佐藤昭次郎・中篠俊一。二月十三日　役員会、電気会館にて十二人参加。担当、柴崎・千石。二月十七～十八日　スキー山行、山形蔵王三五郎小屋にて六人参加。担当、千石早苗。三月十～十一日　早春山行、熊野岳にて七人参加。担当、佐藤昭次郎・中篠俊一。三月十四日　役員会、電気会館にて十五人参加。担当、柴崎・千石。

中国太白山登山については、その後中国当局の事情により登山の許可を取得できないことになり、残念ながら延期することになった。将来的には必ず登山許可を取得し実現したい山である。延期に伴い急遽有志十三人にてチベットトレッキングを実施することになり、チョモランマの麓ロンブク寺まで足を運んだ。強行軍のスケジュールであったが全員無事帰国した。

宮城支部では、韓国昌原市に宮城支部所属の李会員もいることから、今後も韓国や中国の山を対象に、継続的に登山計画を進めたいと考えている。

（千石信夫）

■福島支部

事業の概要としては、基本的に前年度計画を踏襲したので、恒例の行事には特に付け加えるものはない。

ただし本部で議決された創立百周年記念事業「新日本山岳志」編纂に関わる支部編集委員会（委員長西関良光氏以下三十八人）を発足させたが、対象の山が百二十一座と多いこと、分布地域の

広さなどを考慮して、会員外（佐々木健臣氏他七人）の参加と協力を求めなければならなかった。また県境は山岳地帯が大部分を占めていて、隣県との調整を要する部分の多かったことを付記しておきたい。

なお、支部編集委員会は後述のように三回開催しているが、これらの諸経費は支出予算の五〇パーセントを占め、関連の事務量もかなりのものとなった。作業終了までの負担は今後も相当なものになることが予想される。

1、諸会議

(1)定時総会（六月三日）二十二人出席。(2)役員会（五月十二日）十人出席。

2、小集会（山行・親睦）

(1)鎌倉岳〔六六九㍍〕古殿町竹貫（八月二十日）九人参加。(2)吾妻小舎納涼会（九月二～三日）十人参加。(3)阿武隈川源流遡行、西郷村・南沢（九月十日）十三人参加。(4)鏡山〔一三三九㍍〕西会津町弥平四郎（十月二十八～二十九日）十二人参加。(5)花塚山〔九一七㍍〕飯館村（十一月二十六日）十二人参加。(6)女神山〔五九九㍍〕、最登山〔六八二㍍〕月館町（十二月十六日）十九人参加。(7)新年会、福島市（十三年一月三日）十七人出席。(8)安達太良スキーツアー（三月四日）悪天候のため中止。(9)西吾妻山〔二〇三五㍍〕スキーツアー（三月二十五日）十一人参加。

3、「新日本山岳志」編集委員会

第一回会議、郡山総合体育館（七月二十二日）十七人出席。第二回会議、郡山中央公民館（十月二日）二十一人出席。第三回会議、郡山中央公民館（三月二十四日）二十人出席。

4、その他　本部諸会議や東北地区諸行事への参加を計った。

（安藤　治）

越後支部

平成十二年度支部総会は、五月十三日岩船郡山北町府屋町役場前の平喜旅館にて開催。議長矢尾板二郎会員、書記遠山実会員を選出し、出席総数三十二人、委任出席者百四十人、計百七十二人により議案審議し、承認され、翌日懇親登山を実施した。

懇親登山は、日本国五五五M（山北町小俣地内）五十嵐支部長以下二十五人で登山した。四年前から支部会員のいる地区持ち回りとして、四地区（上越、中越、下越、県外会津他の順）で開催している。

五十嵐篤雄支部長が平成十二年六月二十九日逝去（七十四歳）。日本山岳会発起人の一人かつ「日本山嶽志」の編者の高頭仁兵衛氏が初めて弥彦山に登山されたことから、弥彦神社の灯籠神事に花を添えることとして昭和二十九年七月から開催されている高頭祭は、第四十三回を平成十二年七月二十五日開催した。弥彦山大平園地に建立の高頭仁兵衛翁壽像碑前にて黙祷、献花、献杯を行いその後直らいを実施した。三十二人が参加。

弥彦神社山頂の神廟に移動・第四十七回弥彦松明登山祭に合流

し、神官の祝詞や玉串奉献等の後、記念講演、登山賛歌合唱後約百二十人が一八時四〇分松明行進開始、神社境内にてお払いを受け弥彦駅前まで行進・弥彦体育館にて懇親会・解散。

第十七回全国支部懇談会、十月十六～十七日。東九州支部主管九重集会。別府温泉九州の屋根・九重連山の久住山登山参加四人。

第十一回支部年次晩餐会および「越後山岳第十号」発刊記念祝賀会。十二月九日・新潟東映ホテル六十九人参加。

越後山岳第十号出版記念と併催し、記念講演。本部評議員・平林克敏氏から演題「自然・環境・資源」の御講演をいただいた。本部晩餐会の翌週土曜日に越後のサロンとして開催している。

「越後山岳」第十号、六百部。晩餐会に高頭仁兵衛および藤島玄両氏の特集号として発行。

特集の両氏の記録は今が最後であろうということから、編集委員会は渾身の力を込めて記事の収集を図ったことから、個性豊かな作品が集約され、多彩な内容の十号が生まれ、二十一世紀を控え、越後支部五十年の歴史を飾るに相応しい記念すべき文献が完成したと編集子は伝えている。故五十嵐支部長懸案の出版であった。

（田邊信行）

■信濃支部

昭和二十二年、県内に疎開していた槙有恒氏を初代支部長として創立し、早や半世紀、五十四歳を迎えた信濃支部は二百人近い大所帯となった。しかし会員の多くは登山年齢から言えば高齢者ばかりである、と言わざるをえないのが現状である。しかしその中の多くの人は、その道のエキスパートであったり、それを目指して切磋琢磨した若い何年かを経験してきた人達でもある。

貯えた知識や体で覚えた技術は簡単に失うものではない。日本の山にしろ、海外のそれにしろ、そこに足を置けばそれなりの対応の仕方が自然と生まれてくるだろうと思う。「山登り」それはどだい一生のほんの一部かも知れないが、しかし人生の縮図でもある。豊かな体験を通して、良きリーダーであってほしいと願わずにはいられない。

文末の支部山行参加人数が示す様に、本格的な雪の山には限られた人のみという現状を見るにつけ、社会構造や自意識の多様化等原因はいくつもあるにせよ、これからの支部山行再考の素としなければと考える。

昭和三十～四十年代には、十一月から五月まで毎月の雪の合宿には長い行列ができたものである。いつもそこにいた若者は、今は六十過ぎの爺達ばかりである。かつてアンナプルナ主峰や二ヶ月におよぶ県境一周踏査もこの爺等の若き頃のトレースである。

平成十三年度には「支部報復刻版」の発行のための作業を立ち上げ、松本市が主催する世界岳都々市会議等々の参加・協力をしながら、信濃支部の位置づけと将来像を議論する場を作らねばと考えている。

支部行事は以下の通り。カッコ内は参加人数。
四月　通常総会（三十八人）
六月　第五十四回ウエストン祭（七十二人）
八月　夏山山行　穂高涸沢周辺（九人）
十月　女性部山行　焼岳（十人）
十月　秋山山行　十石山（二十人）
一月　新年例会　松本市（四十二人）
三月　春山山行　鉢盛山（四人）
「支部報」四月および十月、年二回発行
ニューズレター随時発行
ホームページ立ち上げ
「新日本山岳誌」二百三座（支部）執筆分担
会員名簿発行

（中野和郎）

山梨支部

平成十二年度の支部活動は例年通り、新年会で幕を開け、春の深田祭は韮崎市・山梨県山岳連盟と共に、故深田久弥氏を偲ぶイベントを開催した。続いて定期総会、それに続く木暮碑前祭、夏山シーズンは南アルプスでの自然保護活動、県のレインジャーとして県内各地域の高山での巡視活動、上高地や八ヶ岳、櫛形山での支部山行等の行事を無事終えた。さらに秋の木暮祭、福井県越前での自然保護全国大会に参加、富士山、南アルプスでの山のトイレ持ち帰りキャンペーン等に協力した。平成十三年度においても新年会から始まり、今年は竹内副会長の参加を得るなど恒例の事業計画に加え、支部役員改選の年にあたり、山本・池田、両氏の退任、また、新任役員として日本、中田、遠山三名の委員が決まるなどの動きがあり、新たな出発となりました。また山村会員が突然の病に倒れたため、例年山村氏主導の木暮碑前祭を支部委員が協力し合い、一丸となって開催にこぎつけた。会場の金山平には会員が焼いたイワナの香ばしい匂いが、参加した者の食欲をそそったことは言うまでもない。今夏の櫛形山支部山行は、レインジャーを兼ねて多くの支部会員が参加し、緑豊かな森林浴を楽しんだ。秋には木暮祭、支部山行には八ヶ岳を予定している。また、自然保護活動の一環として、レイチェルカーソンの上映会を後援し、読書の秋の気分を一般の方々に味わっていただく。さらに今年は久々の新入会員があり、三つ峠山荘の中村氏を始め三人が加わった。若手の新入会員は大変うれしいことであり、大いに歓迎したいものだ。支部の今後の活動方針としては、他支部との交流会の企画や支部としてできることはなにか等の活動テーマを検討しながら、新会員の拡大や若手会員の養成等、これまで同様に会員相互の親睦を図りつつ、潤滑な支部運営が出来ることを願っている。

（遠山若枝）

静岡支部

静岡支部の平成十二年度の活動は、支部創立五十周年記念事業に尽きると言える。

二年越しに立案して来た事業は、平成十二年五月九日通常総会で「記念誌発行」「記念式典と講演会」「祝賀会と山行」「記念海外登山①十二年度台湾・雪山②十三年度韓国・雪岳山」と決定され、各委員は詳細な実行計画の立案と関係先との折衝に奔走した。

そうした中で、ほとんど記録のない創立時の経緯、その後の活動の事実が掘り起こされ、記念誌「不盡」に半世紀の歩みとして、ほぼ正確に歴史的事実を残すことができた。また一つの事業に会員が努力することにより、緊密な連帯感が生まれ、事業費用として臨時支部費をほとんど全支部員から送金いただいた。

支部会員はそれぞれ別の山岳会に所属し、その会での山行が多く、支部主催の山行というものがほとんどなかったが、記念海外登山、台湾雪山には十人が参加。支部会員の山行が実現した。

支部会員どうしで登山をの思いは、従来静岡市内で開催していた通常総会を、十三年度は安倍奥の登山基地・梅ヶ島で行い、翌日の山行は各人の体力に合わせて四コースが選ばれ、密度の濃い懇親山行ができた。秋には記念海外山行②の韓国雪岳山、会主催ではないが会員の企画したネパール・トレッキングには相当数の参加が見込まれている。この流れが、やがて海外に本格的な登山隊を送り出せるようになることを願っている。

「過去の歴史検証の上、二十一世紀への新しい前進」を目標に、会員の努力・協力により記念事業は成功裏に終了したが、中心になって企画推進してきた水野公男副支部長が病に倒れ、記念式典を見ずに十月十一日逝去されたのは残念なことであった。

記念事業については「支部通信」四十九号に詳述されており、概要のみ以下に記す。

一、海外登山の台湾雪山（三八八四㍍）十二年四月二十八～五月二日　参加者十人

二、記念誌「不盡」　B五版　一三八頁

三、式典　十二年十一月十一日　一三時　来賓、大塚博美会長、西丸震哉会員、小原晴子会員、勝山康雄理事、高木碕男岐阜支部長、中世古隆司東海支部長。

講演「山で出会った様々な動物たち」講師　西丸震哉

四、祝賀会　十二年十一月十一日　一八時　井川少年自然の家

五、山行　十二年十一月十二日　山伏

六、海外登山②韓国雪岳山（一七〇七㍍）

平成十三年十月十一～十四日

（山田　透）

東海支部

次年度に支部設立四十周年の節目を迎えるため、平成十二年度の支部活動は記念事業の準備が中心となった。支部設立四十周年

記念事業実行委員会」では、尾上昇実行委員長を中心に以下の案が承認された。海外行事として、ローツェ南壁冬期登攀、インドヒマラヤ実年登山、ロブジェイースト登山、そしてネパールトレッキング（四コース）。国内行事では、記念式典と懇親会、写真およびスケッチ展、記念講演会、「支部報」の合本版出版。登山では四月よりスタートした四十山（愛知、三重県から各二十山）ラリーと同日登山、身体障害者とのふれあい登山等である。各行事の担当は、年毎に充実して来た十三の委員会であり、現在の東海支部を動かしている七十名程の委員である。

海外登山委員会の田辺治は、ローツェ峰の偵察を十二月に行い、慎重にルート等を決定した。また、小川繁ら青年部委員会はロブジェ峰登山計画に加えて、名古屋地区の大学山岳部や岳連の海外遠征希望者にガネッシュヒマールⅡ峰遠征報告会（十二月一日）を、続いてアンナプルナⅠ峰遠征報告会（一月十七日）を開き、「開かれた東海支部」をアピールした。一月二十日の支部新年会では、本部常任評議員である平林克敏氏が「熱き心」と題して四十周年記念講演を行い、参加者の好評を得た。

橋村一豊を中心とした自然保護委員会は、関西・京都支部と合同で「第二回森の勉強会」を五月に開催、十月十四～十五日の自然保護全国集会では、野呂邦彦が「御在所岳裏道の過剰なペイントマーク」の実情を話題提供した。また社会問題化している「徳山ダム」や万博会場隣接の「海上の森」についても支部員・支部友に見学会の場を提供した。

石田文男ら図書委員会は、記念出版の計画に加え、支部蔵書目録を完成させ、支部員・支部友に図書を活用しやすい閲覧の場をどのように提供するかという課題への対策として、図書の日を設けるなどの試行を始めた。

鈴木常夫ら登山教室委員会は、「朝日カルチャーセンター」「愛知県労働協会」の教室に加え「瀬戸市教育委員会主催の登山教室」を座学と実地山行で行った。

長坂博ら支部友委員会は、国内行事の中心である四十山ラリー、同日登山の推進に加えて、約二百七十人の支部友に「安全な山登り」「山登りの楽しさ」を啓発実践してきた。登山では月に三回の月例山行と、三泊四日の夏山山行「雲倉岳・朝日岳縦走」を行った。また支部友集会では、六月に「ネパールの文化・言語」（高岡秀暢）八月「軽アイゼンとストックについて」（梶田民雄）十月「中高年登山医学の話」（中田昌敏）十二月「忘年会」二月「海外トレッキング事情」と題して講演会等を開催した。

金田博秋らインターネット委員会は、漸くホームページを立ち上げた。「支部報」と共に支部の情報発信となるよう課題を克服していきたい。

故鈴木重彦・生田浩両氏が中心メンバーであった集会委員会（林芳弘委員長）では、両氏の遺志を継いで四十周年の総会と懇親会（本年十月）、写真展とスケッチ展（平成十四年二月）を計画した。

稲葉省吾委員の情熱から恒例行事となった、第六回伊吹山幡隆

祭を十一月十一日に山東町の鴨池荘で開催した。シンポジウムでは伊吹山研究所の福永円澄氏から伊吹山について、中川義晶氏から伊吹山の自然と歴史と山岳仏教について報告があった。翌十二日は行者岩を経由して伊吹山登山を行い、参加者との交流を深めた。

本年に入り、四十周年の行事は着実に進行している。海外行事のトップバッターである「インドヒマラヤ・ガングスタン峰登山」は、二隊が同時登頂に成功し、中日新聞紙面（八月十五日付）にも掲載された。未踏ルートの北壁隊（水野起己隊長）と最高齢七十二歳の田中守之隊長率いる南西稜隊も、二十一世紀初年を飾るに相応しい登頂成功を遂げ、「幸先良し」である。

（星　一男）

■岐阜支部

平成十年度は全国支部懇談会の主管等で何かと忙しかった当支部だが、平成十二年度は一転穏やかに、かつ順調に予定の行事をこなした一年だった。それでも、春秋冬計五回実施した定例山行の参加者数の平均を見ると、平成九年度二十七人、十年度二十二人、十一年度二十八人に対し、今年度は三十六人と増えている。勿論当日の天候等の影響もあるが、支部が活性化していることもまた事実であろう。その中には、東京、埼玉、山梨、京都、兵庫等から参加してくれる本部並びに他支部の会員も多く、このネットワークの広がりを今後とも大切にしていきたい。

一方、前年度の支部会友の遭難騒ぎから見直しを計った会友制度については、年度当初五十三人いた一般会友は年度末には二十二人と三十一人の大幅減少となった。その内十二人は日本山岳会に入会したが、十九人は退会または除籍である。将来会員になる意欲のない人は退会願う、という方針に応じて自主的に退会された方がほとんどで、少々薬が効き過ぎた嫌いはあるが、この会友制度の見直しはかなりの効果を上げたと考えている。会員数も百八人に増え、しっかりしたメンバーによる支部運営ができるようになった。

以下に十二年度の主な支部行事を簡単に記していく。

恒例の支部総会は、四月二十二日、天下の名泉下呂温泉で大塚会長を迎え開催し、翌日は大塚会長以下六十人が「下呂御前」に登り御嶽山を遙拝した。

春季現地小集会は、六月十一日、悪天候にもかかわらず二十六人が参加し、奥美濃の名峰「雷倉」に藪を分けて登った。

九月二十四日の秋季懇親山行も天候に恵まれず、ガスの中を登った「霊仙山」では蛭の大歓迎を受けた。

十月の秋期懇親山行は二十一日「国立乗鞍青年の家」に泊まり、翌二十二日は「丸黒山」に登り北アルプスの大観を満喫した。

当支部恒例の行事である山岳講演会は、十一月十七日、またしても大塚会長においで願い植村直巳さんの話をうかがった。大塚会長には昨年の支部懇談会から三回連続の岐阜支部となり、すっ

かり顔なじみである。翌日は初雪の舞う「貝月山」に一緒に登り、熱いうどんを分け合って食べた。

一月二十日の新春懇談会当日、昼頃から突然の大雪となり交通機関は大混乱となったが、欠席者はほとんどなく、雪を見ながら飲みかつ語り合った。

今年で二回目となる冬季現地小集会は、二月二十五日、昨年同様雪のない三河の山を選んだところ思いがけず霧氷に出会い、それを見ながら「寧比曽岳」から「筈ヶ岳」へ縦走した。

その他には、海外山行として楽山や峨眉山に登った「中国の名峰巡り」、国内登山ツアーは四国方面で石鎚山と剣山、兵庫での京都支部との懇親山行、全国支部懇談会別府九重大会、いずれも十人以上の参加者があり盛況の内に無事終えることができた。

このように平成十二年度は平凡な内にも充実した一年であったが、十四年度には支部創立三十周年事業があり、またまた雑務に追われる十三年度になると覚悟している。

（堀　義博）

■京都支部

一、支部行事や例会山行の参加者が半ば固定化し、一年間一回も支部行事に参加していない会員が六〇パーセントに達することから、支部運営、例会山行、各種催しに対して気軽に意見を聴く場を設ける必要があるとの認識から、二〇〇〇年十月、山水会の場を借りて山の情報交換会を開いた。北山の会・崑崙登山隊の登頂報告とスライド映写をアトラクションに、四十人の参加を得て開会した。会場を対話形式に改め、ビールで少し喉を潤し気分をほぐしてから意見交換会を開会、出席者からは活発な発言があった。支部委員会に対する要望、支部行事に対する要望や具体的山行計画の提案等々、会員同志の生の意見交換ができて非常に有意義な会になった。この結果を今後の運営に生かすべく委員会で検討し、できることから取り組んで行くことを約して散会した。

二、二〇〇一年四月の京都支部総会において、横田明男氏が満場一致にて新支部長に就任した。氏は今西錦司先生と共に京都支部を創立したメンバーの一人であり、その熱い思いは健在である。総会後の講演会では、中村保氏が「ヒマラヤの東の空白部―深い侵食の国」と題し、メコン川の源流や横断山脈の未知の地域、未踏峰について、最新の調査結果を素晴らしい写真とともに披露。

三、二〇〇〇年八月、京都支部の海外高所登山、登山技術の中心である須藤建志氏を、ラカポシ偵察山行中の不慮の落石事故で失うというショッキングな事件に遭遇した。十二月十五日発行の「支部報」No.六一号にて斉藤支部顧問、酒井支部長の追悼の辞、現地事故報告、お別れの会の詳報と経過報告、須藤氏の数々の海外山行暦を披露し追悼の意を表した。

四、以下に支部の山行報告とこれからの計画を記す。

・各地支部との交流山行・合同山行

㈠　二〇〇〇年十月　岩手支部との交流山行。早池峰山、遠別

山

(二) 同十一月　岐阜支部との交流登山。播磨・三室山

(三) 二〇〇一年三月　関西支部との合同スキー山行。荒島岳・橋架谷は大雨になり中止、来年再戦とする

(四) 二〇〇一年九月　宮崎支部との交流山行を「秘境椎葉と九州山脈脊梁の山旅」と題して扇山、白鳥山にて開催

(五) 同年十一月には富山、石川、岐阜、福井、京都五支部合同山行・傘山が計画されている

・展望の山シリーズ

(一) 二〇〇〇年九月　奥美濃・平家岳に廃村になった旧荷暮部落の岩魚つり名人の案内を得て、荷暮川ルートから登頂。渡渉、木の根登り、藪こぎ、岩魚の骨酒と美濃の山の醍醐味を味わった

(二) 同年十月の竜王山から初瀬山は辰年にちなみ竜尽くし山行で、八月の沢登りも宇賀渓・竜ケ岳であったが、惜しくも雨天中止、二〇〇一年八月に再戦の予定

(三) 同年十一月は播磨・鷹ノ巣山から高御位山、二〇〇一年四月は丹後半島・赤岩山とユニークな山が選ばれている

(四) 二〇〇一年八月には多紀アルプス、三嶽・小金ヶ嶽を計画

・雪上技術講習会は二〇〇一年四月に御岳山にて行われた

・わかん山行　近年京都近郊では積雪不足に悩んでおり、その対応策として「わかん山行」が企画された。二〇〇〇年二月の北山・白倉谷山が大好評を得、今年は無雪期には藪が深く積雪期登山に最適な湖北・武奈に向かい、荒天の中で十二分に雪山を満喫した

・スケッチ山行　二〇〇〇年十月大山にて行われ、伯耆国美術館にてJAC寄託の絵画も鑑賞。二〇〇一年十月には開田高原でのスケッチ山行も予定されている

・恒例の大文字ビアパーティーが、七月最終日曜日に賑やかに行われた

・九月の鉢盛山のお月見山行は、昨年雨天のため果たせなかった再戦になる

・京都支部十五周年記念集会が十月に花背・交流の森にて、支部備品の大型ロースターを持ち出し、支部会員同士で夜を徹して食べ、飲み、語り明かそうと計画されている

・東海、関西、京都支部自然保護委員会合同・森の勉強会に、今年から岐阜支部も加わり、四支部合同で十月に朽木・朝日の森にて行われる。前二回が六月開催であったが、今回初めて紅葉の一番美しい時期の芦生に入る

その他に、展望の山を年三回、支部スキー山行、国宝見学、カラコルム空撮、遭難対策講演会等々を計画中である。

（田中昌二郎）

富山支部

二〇〇〇年は第五十五回国体が富山県五箇山五ヶ町村で開催さ

れた。六月にはミニ国体、十月は本国体と会員の多数がこれに役員として参加、準備から終了までの間力を合わせた。十月十八日には無事に閉会式、次年に開催される仙台へ引継ぐことができた。

支部事業は、四月十四日総会にて一年の行事が決まった。毎年行っている旧河内村での播隆祭は、道路の決壊のため、残念ながら中止とした。

五月十三～十四日石川支部担当で、北陸三県合同支部懇談会が開催され五人が参加した。

五月二十七～二十八日今西祭。遠い九州からの参加もあり三十七人の参加で、千寿ヶ原にて開き、十八日には大辻山へ登り、昼食後解散無事に終ることができた。

七月二日例会山行。ここ五年続いている新潟県の山へ。今回は頸城駒ヶ岳、ハシゴ、ロープなどもあり、登りがいのある花の多い山であった。

九月十六～十七日全国支部懇談会。東九州支部担当にて九重山へ、天候に恵まれ素晴らしい山々を眺めた。帰りは自家用車で大分駅まで送って頂く。

十月十二～十八日までは国体のため多忙、無事に終り、十一月五日会員が所持している朝日町の夢創塾でのきのこ山行。山は毬頭山（イノカシラ）へ。温かいきのこ汁と、差し入れのアオリイカの焼きたてのつまみで舌鼓を打つ。国体の疲れをいやすことが出来た。

一月七～八日、三年続いている冬の上高地へ。中ノ湯で宿泊、翌朝目覚めてびっくり、四〇センチ以上も雪が降りラッセルをしながら目的地へ、近くを散策し帰る。

暫く開くことが出来なかった室内例会を十二月と二月に開く。

十三年度に入り播隆祭、夏山山行と行い、山行の帰りに立寄った風呂で一服。二年後の五十五周年にはどこへ行くかなどの話がはずみ、参加者の顔が期待と夢に向って明るく思えた。十二年度には、新入会員が八人、その中には三十代の会員も入会、支部の若返りとともに、例会・山行と参加者が増えればと願っている。

（木戸繁良）

■石川支部

平成十二年度は四月八日の定期総会で始まった。総会は小松市の粟津温泉「おびし荘」で、十九人が出席し開催された。役員の任期は二年で、平成十二年度はその改選期にあたるが、一部の委員に変更があったものの前期の役員が再任された。

翌日は、五月に石川支部主管で開催される山行会場予定の鈴ヶ岳に下見に行く予定であったが、豪雪のため林道が開通しておらず断念せざるを得なかった。

五月十三～十四日に、小松市で北陸三支部合同登山集会を開催した。十三日は小松市の「大杉青年の家」にて午後六時三十分から懇親会を開催。翌十四日は鈴ヶ岳（一一七五メートル）に懇親登山を行った。昼頃からあいにくの雨となり、早々に下山した。この鈴ヶ岳は、当支部の西出会員が昔の道跡を長年に亘り整備し、近年

ようやく登山道が完成したものである。また登山道の途中の水場の「ヌギ谷原」に避難小屋を建設中であったので、力のある皆さんとともにその資材運びに協力をした。この小屋は現在完成し、当支部は上高地の山研にあるような鐘を寄贈したので、鈴ヶ岳に登られることがあれば、是非この鐘を鳴らしていただきたい。参加者は富山支部木戸支部長以下四人、福井支部宮本支部長以下十人、石川支部津田支部長以下十七人であった。

六月二十四～十五日は「出湯山行」で、今回は富山県大山町に行き大品山〔一四〇四㍍〕に登山した。参加者津田支部長以下十一人。七月二十九～三十日は上高地で「山研集会」を行った。今年は「石川支部山岳写真展」を開催するので、二十九日は展示飾り付けに一日費やした。翌三十日は焼岳に登り中尾高原に下る者と、上高地を散策する者とに別れ、それぞれ帰途についた。参加者は津田支部長以下十九人。

「石川支部山岳写真展」は、七月三十日から九月二日まで上高地の山研展示室において開催した。展示室は一階にあるため湿気が多く、夏とはいえその対策に苦労し、山研の木村夫妻には大変お世話になった。

九月十六～十七日は、東九州支部主管の第十七回全国支部懇談会に津田支部長以下七人が参加。

十月二十一～二十二日は白山千振尾根で「紅葉山行」を行った。紅葉は素晴らしく、またなめこなどのきのこが例年になく早く出ていたので、紅葉狩りキノコ狩りに皆大いに堪能した。参加者は津田支部長以下十六人。

十一月二十五～二十六日は、山祭りを白山の麓白峰村民宿「山和荘」で行った。参加者は津田支部長以下十八人。

十二月二日の年次晩餐会には津田支部長以下四人が参加。

二月に行われる予定のスキー集会は、諸般の事情から中止。

以上が石川支部の平成十二年度の支部活動である。今後の支部活動は、参加しやすい日帰り山行を積極的に取り入れて、一人でも多くの会員の参加を得ることにより、活力ある支部にしたいと思っている。

（織田伸治）

■山陰支部

当支部にとって大きな出来事は、平成十二月十月の鳥取県西部地震により、伯耆大山の頂上が崩壊、標高が一七一一㍍から一七〇九㍍に下がったこと、そして十一月には支部会員にとって心の支えであった名誉会員・港　叶氏の死去であった。高田支部長体制二年目、五十周年記念事業の総まとめ「五十周年記念誌」が発刊できた。同事業は平成十一年度から始まり、出版事業二件（鳥取県境の山、美しき伯耆の滝たち）、ネパール遠征（メラ・ピーク登頂）、五十周年記念展、最後が五十周年記念誌の発刊、足掛け三年に及ぶ大事業がここに漸く完結し、支部体制新たなスタートの年度となった。

本年度総会支部長挨拶の中で「確実なステップアップ」、「会員相互の協力関係の強化」、「着実な前進」を提起し新年度がスタートした。海外遠征の気運の高まり、七〇〇〇㍍、八〇〇〇㍍とステップアップしながら着実に実力を貯え、事業の成功を図ってゆきたい。そして、活動の活性化、会員の高齢化など内包する諸問題も一層明らかとなってきた。これらのことをどのようにクリアしてゆくのか、険しい道程が予想されるが会員相互の協力を基盤に着実な前進望まれる。

次なる十年。「山に登る」第一歩はここからはじまる、高山あり、低山あり、一人一人の体力によりその形態は異なるであろうが、研究、観察、調査、保護、記録、芸術、人により様々であっても、意図することが継続されることにより貴重な価値が生まれる。それが支部組織の中でまとまり、それが次なる十年の成果となるのである。まずもって五十周年の事業が完結したいま、会員それぞれが次の十年の目標を設定し実行にうつしてほしいものである。

滝調査の継続（因幡の滝・鳥取県東部）、アコンカグア（六九五九㍍）への挑戦。具体的な行動が継続されることは支部組織として大いに慶ぶことである。

（吉川明秀）

関西支部

平成十二年度は支部蔵書目録（約四千冊）完成。蔵書リストの支部会員への公開、重複本の処理など今後の運営方法を検討中である。「支部報」百二号を本年六月に発行、五十一～百号の合本を検討中。

平成十三年度、かねてより懸案の支部ルームの新設を七月の支部委員会で決定。十月二十日現在のスポーツマン会館（西区靱公園内）を引き払い、大阪市東成区大今里西二の五の十二　大阪セルロイド会館の一室（大阪府山岳連盟の隣室）を賃貸、移転の予定。

新ルームは会員相互の懇談や少人数の集会に利用し、支部活性化と会員相互の懇親を深める。支部業務の円滑な運営の推進と委員会、各種集会等の会議の場とする（大人数の場合会館付属の会議場を安価に利用できる）。それなりの経費負担を強いられる支部ルーム運営について、支部委員一同大いに努力しなければならない今後の課題だ。新ルームのお披露目会も近く計画中。

十月六～七日は、第二十七回自然保護全国集会（大台ケ原）に協力支援する。

支部行事は以下の通り。四月二十五日支部総会、支部委員二名交代（凌霜クラブ、参加六十四人）。四月十五日高尾の森植樹祭参加（桑田）。四月十九日金剛山写真撮影山行（参加十三人）。五月一日ディペンドラ・ネパール皇太子神戸案内（桑田結・中島龍）。五月十七日伊勢辻山。六月二十一日播州・七種山。七月二十二日大峰・七面山（参加二十二人）。八月十八日台高・迷岳（参加二十人）。八月二十九日夏期懇談会（凌霜クラブ、参加予定五十五

人)。九月二十二日京都北山・皆子山。十月二十七～二十八日東海・岐阜・関西・京都四支部自然保護委員会共催「森の勉強会」。一月支部新年会および日だまり山行。二月チロル・スキーツアー。三月京都支部との合同山スキー。年数回スケッチの会。

(川戸昭三)

広島支部

支部が誕生して今年で三年目、支部長が平位剛氏に変わって二年目、人間に置き換えると、ようやく意思表示ができるようになった頃。活発な活動に目覚める年でもある。

平成十二年度の主な活動としては、十月二十八～二十九日にかけ広島県民の森において、支部設立三周年記念事業が行われた。また、比婆山登山の折、支部員の紺野昇氏の指導により、写真教室が行われた。中国新聞社写真部現役の講師も真剣なら、教わる生徒も真剣そのもの。参加者十五人の腕前はピンキリだが、紅葉を背景に思い思いにシャッターを切った。

十一月十八～十九日、兄貴分の山陰支部との合同登山が伯耆大山を舞台に行われた。前夜、大山寺SOBの山小屋では、両支部和気藹々と懇親会が盛り上がった。翌日は、大山・烏ヶ山と別れて登山する。ちょうど気温も下がり、その年初めての霧氷に、感嘆の声を上げた。

十一月二十四～十二月二十二日、広島支部主催「知られざる世界・ワハン回廊を行く」平位剛写真展開催。毎年アフガニスタンに潜入している平位氏の貴重な写真・映像を広島INAXショールームにおいて開催し、好評を博した。

「広島支部支部報」を十月に第三号、三月に第四号を発刊した。最後に、二〇〇二年九月の全国支部懇談会は広島支部開催で準備を進めており、「広島らしい支部懇を!」と意気込んでいる。多くの皆様の参加をお待ちしたい。

(吉村千春)

福岡支部

平成十二年四月支部総会を開催し、松本徑夫支部長の任期満了に伴い、新しく深田泰三支部長を選任した。

十二年度の事業について次のように承認された。

(1)九州登山史の編集を進める、(2)「新日本山岳志」の作成および編集に関わる、(3)新年の集いを開催する。

議案審議は滞りなく進みその他の事項に入った時、北九州市在住の会員から、北九州地区と下関在住の会員で新支部を設立したいので承認を、と緊急動議が出された。審議を重ねた結果、本年度中に検討、協議を行うことで了承された。

総会終了後、恒例の記念講演を行った。今回は、一九九八年冬季マッキンリー単独登山に成功された福岡市在住の登山家栗秋正寿氏を招き、「マッキンリー単独登山とアラスカ縦断」と題して

講演いただいた。

マッキンリーおよびフォレイカー峰の厳しい冬季単独登山の状況、一方、一四〇〇キロにわたるアラスカ半島の愉快な水平の旅を、スライドを交えながらユーモアある語り口でお話しをいただき、登山の厳しさと旅の楽しさが感じられた講演であった。

九州登山史の編集については、井上優、松尾良彦両会員の執筆も進み、三年度発刊の予定である。

日本山岳会創立百周年行事の一つである「新日本山岳志」の編集に関しては、山口、福岡、佐賀、長崎の各県および鹿児島県の離島並びに沖縄県の山々から、百二十四山を選定し、原稿作成担当者へ執筆依頼を行った。

平成十三年一月二十七日支部恒例の「新年の集い」を開催した。会場には、九十二歳とは感じられないかくしゃくとした村上巌会員をはじめ二十八人の参加者があり、深田支部長の挨拶のあと宴会となった。参加者の平均年齢六十五歳、しかし酒量と食欲は反比例で、「若さ」を感じた楽しい集いであった。

北九州支部の設立については一年間の検討期間となっていたが、急遽九月二日、本部役員の参列の中、設立総会が行われた。福岡支部としては、総会での決議事項が反故にされたことではあるが、今後のことについては、支部同士友好関係を築いていく方針である。

（副島勝人）

■東九州支部

東九州支部は二〇〇一年、設立から四十一年目に入った。四十周年の昨年度は、ミレニアムの年でもあり、記念に全国支部懇談会を別府と九重山群で開催した。大塚会長、斎藤前会長はじめ本部や各支部の協力、さらに好天もあって、まずは無事に終えることができた。支部の周年記念事業はこれまで二十、二十五、三十と続け、その度に歴代会長はじめ多くの会員の協力をいただいた。その積み重ねが四十周年の下地にあり、支部の役員も一般会員も、それなりのノウハウを身に付けていたのが幸いだった。

しかし、何かの行事を行った後、フッと気が抜けるのは人の常。支部も本年は一息ついた気分で、定例の山行や「会報」などでの顔合わせのほかは、個人的な山行がもっぱらという状態である。だが、この間に徐々にではあるが会員は数と質で充実してきているし、入れ替わりはあっても会友が特に急増している。従って、これまで以上に会員・会友の連携・交流と組織的な行動が求められるということでもある。その点、軌道に乗った「会報」の発行とその内容について、担当者の努力に感謝したいものだ。

そして一段落したところで、次への飛躍を考えねばならない時期であろう。個人にしても組織にしても、燃焼するためには燃料の準備というか、ある意味での蓄積が必要であり、沈静の時間も大切だと思う。支部としては今、新しい局面へ向けての助走を始める時点に来たとも言えそうだ。問題は、その行く手に何を設定

するかである。

支部の力を結集してのビッグな登山はもちろん、山をテーマにした環境保全への取り組み、あるいは次世代の登山界を担う青少年の育成、相変わらず多い中高年登山者のリードなどなど。さらには日本山岳会の百周年への参画もある。行わなければならないことは山積している。要は重点目標を定めて、様々な活動をいかに充実、前進させるかである。支部では登山界の動きをグローバルに見つめながら、ローカルの活動を強めたい。地球環境を視野に入れながら、足下の山を守る運動を進めるように。

（梅木秀徳）

熊本支部

先ず、この一年間の支部の活動状況について報告したい。活動の主体を成す山行は、熊本県境踏査である。熊本県境の陸上部分四百三十六キロメートルを六十八区間に分け、月例会の形で歩くという計画で平成十年秋にスタートした。当初、県境線をトレースする予定が、中高年登山隊の実力不足で、いつのまにかトーンダウンし、県境線沿いの山に登ることになってしまったが、目下のところ順調に進み、現在県南部の鹿児島県境を進行中で、今年度中には達成の見込みである。できれば終了後に踏査記録を一冊にまとめたいと考えている。実際に歩き、改めて身近な所にまだ登山の対象となる山が数多くあることを知ったのは大きな収穫だった。

山行以外の例会としては、一月の新年会と八月の夏季例会がある。平成十三年の新年会は一月十四日に開催された。新世紀初めての今年は二十四人が出席し、年末からキリマンジャロに遠征した広永会員のスライド映写もあり盛会だった。夏季例会は当初、山行だったが、暑い時期の登山が次第に敬遠されるようになったため、昭和六十三年より現在の山の映画とビールの夕べ、と銘うった例会になった。山のビデオ作品を見ながらのビールパーティーは、支部の例会の中では最も人気が高い。ビデオの製作は、当初からビデオに豊かな経験を持つ神谷会員（現副支部長）に任せっきりになっているが、近頃ではプロ顔負けの作品も多く、支部会員だけで見るのはもったいないほどの出来栄えである。今年は八月二十六日に開催され、「霧島えびの春紀行」「早春の仰烏帽子山」「雁保山の春」の三作品が上映された。いずれも山の花をモチーフにしたハイレベルな作品で出席者にも好評だった。

ところで熊本支部は五月の支部長会議で二〇〇四年の全国集会に立候補し、六月の理事会で正式承認された。現在、熊本支部は全国で一番小さく（会員数四十二人）、また会員の平均年齢も最も高いのではないかと思う。このような現状で、三年後に迫った全国集会で何を行ったらよいのか、正直のところ思案中である。しかし、そこは人生経験の豊富な会員が多いのだと開き直り、それらの経験を生かして、支部の身の丈に合った個性のある集会ができるよう、ぼちぼち準備に取りかからねばと考えている。

（田上敏行）

宮崎支部

「みやざき百山」が平成十二年度宮日出版文化賞に輝いた。晴れの授賞式は平成十三年三月一五日に執り行われ、四月七日に支部総会と併せて挙行した記念祝賀会では、大塚会長にお祝いの言葉と特別講演を賜った。この賞は、年度内に発刊された多くの著書の中から、厳選された上位三点のみに与えられるもので、県内では最高の文化的名誉である。山々にまつわる神話・伝説・民俗をはじめ地質・動植物などをエッセイ風に仕上げた支部長による美しい文章がこの本の魅力となり、爆発的な人気を呼んでいる。初版以来、一年も経たないが、二度の増刷を含めて五〇〇〇部を出版した。しかし、それも既に完売し店頭には無い。本書のあとがきに「単なるガイドブックではなくふるさとの山を賛歌し、郷土の豊かな自然を見直すきっかけになれたらと念じている……私たちは、山岳自然の環境を保護する精神の高揚と実践を培いながら山に登っている。山行を通じての得難い感情体験は、クラブライフの産物であり豊かな感性づくりへのいざないとなっている……」とある。自然・山に寄せる熱い思い、そして人間愛が本書の随所に満ちあふれているが、とりもなおさずこの崇高な精神が宮崎支部を支える原動力となっているのである。宮崎支部は故・今西錦司先生のご助言により、昭和六十年に全国二十番目の支部として誕生した。支部結成時の三大目標の一つであった「みやざき百山」刊行がこのような形で完成したことを支部全会員の誇りとしたい。

宮崎は、照葉樹林をはじめとして全国有数の自然を残した地域である。山もオーバーユースの時代、人が山に入れば自然を傷つけずにはいられない。それを最小限に抑え、このすばらしい山岳環境を後世に引き継ぐために、いかにすべきか真剣に考えなければならない。その一つの取り組みとして、当支部ではストックの使用を制限した。また、川上川下理論に基づく水を守る森づくり運動に参画するなど、小さくとも出来ることからの実践を心がけている。

現在、支部会員数は百四十人であるが、月例研究会は平均四十五人の参加を得ている。月例山行は延べ三百七十八人（一回平均三十一人）、国外・県外遠征は延べ二十四回百三十四人、グループ山行は延べ七十九回三百余人が参加しており、一人年平均約八回の山行という盛況ぶりである。十七歳という若い会員も加わり一段と活性化しているが、将来像としては若い会員をより多く勧誘しなければならない。その一端として学童の野外活動や学校単位の登山をサポートしているが、これを通して健全な心の育成を目指しながら、子供たちの目が山・自然に対して畏敬・憧憬として向けられることを期待している。さらに、今後は北海道支部が実践しているような自然児学校等の理論的カリキュラムも検討しなければならない。

（荒武八起）

会務報告

二〇〇〇年（平成十二年）六月～二〇〇一年（平成十三年）五月

二〇〇〇年度役員・評議員・支部長

会　　長　大塚博美

副 会 長　小倉茂暉・大森薫雄・竹内哲夫

常務理事　西村政晃（総務）・村井龍一（財務）・森　武昭（科学研究）・宮崎紘一（学生部指導）

理　　事　高原三平（総務）・勝山康雄（集会）・村井　葵（会報編集）・高遠宏（山岳編集・百年史）・宮下啓三（図書）・鯵坂青青（資料・フィルム・ビデオ）・松原尚之（指導・遭難対策・青年部）・増山　茂（医療・海外連絡）・坂井広志（高所登山研究）・河西瑛一郎（自然保護）・坂本正智（山研運営）

監　　事　神崎忠男・中村　保

常任評議員　平山善吉・中川　武・平野眞市・田邊　壽・吉永英明

評 議 員　若林啓之助・中村純二・芳賀孝郎・山本健一郎・宮下秀樹・岩間弘雄・魚本定良・中谷　充・山本久子・平林克敏・斎藤惇生・尾上　昇・宇田川芳伸・絹川祥夫・古市　進

支 部 長（☆印は年度内途中交替・◎印は年度途中に新規設立）

新妻　徹（北海道）・松島靜吾（青森）・中谷　充（岩手）・佐藤謙治（秋田）・木村喜代志（山形）・柴崎　徹（宮城）・佐久間高男（福島）・☆五十嵐篤雄→室賀輝男（越後・二〇〇〇年六月二十一日に五十嵐支部長逝去により、室賀氏が支部長代行に。二〇〇一年支部長総会を経て支部長就任）・山浦源太郎（信濃）・古屋学而（山梨）・大石　惇（静岡）・中世古隆司（東海）・高木崎男（岐阜）・酒井敏明（京都）・木戸繁良（富山）・津田文夫（石川）・宮本数男（福井）・阿部和行（関西）・高田允克・平位　剛（広島）・深田泰三（福岡）・梅本秀徳（東九州）・工藤文昭（熊本）・大谷　優（宮崎）・◎吉村健児（北九州・九月創立）

◇二〇〇〇年六月理事会　二〇〇〇年六月十四日　本会会議室

出席者　二十一名

▽審議事項

一、二〇〇〇年および二〇〇一年度秩父宮記念山岳賞審査委員会から、審査委員の候補者リストが出され討議したが、決定は来月の理事会に持ち越された。

継続審議

二、許可願い六件

①㈱ナカニシヤ出版との『新日本山岳志』の出版契約締結について、小倉副会長より、出版契約書・案の説明があり、契約したいと提案。　承認

②会員資格の復活に関する内規について、西村理事より提案。一九六五（昭和四十）年六月三日の理事・評議委員会の決議に基づき、執行されていた本制度を明確にするための内規を二〇〇〇年六月十四日より実施する。　承認

③アルパータ峰メンバー追加選考について、増山理事より、BCマネージャーとして東海大学山岳部OBの山中康正氏（六月に本会入会予定）が推薦される。　承認

④カザフスタン登山協会から同国の山を紹介したい旨のメッセージと大塚会長・増山理事宛ての招待状（八月十五日～二十二日）が届く。新しい山岳フィールドとして興味深いこともあり、宮崎・松原両理事を派遣する。　承認

⑤二〇〇〇年度より環境事業団からのネパール・シバプリへの環境基金の交付が打ち切りとなったが、今後三年間ほどは手をかける必要があるので、今年

の予算として五十万円を計上したいこと、現在植林されている石楠花の管理を長期的視野にたって方向性を定めていきたいと河西理事より説明。次回理事会に計画書の提出を求める。　継続審議

⑥㈱講談社出版研究所より、『日本人名辞典』（二〇〇〇一年秋刊行予定）への写真撮影と書籍掲載の許可願いがあり、これを承認する。　承認

三、六月の新入会員　十五名

▽報告事項

一、日中友好登山二十周年記念事業について、中国山岳協会より五月末に、機構改革、役員改選があり平常に機能するのにしばらくの期間を要すること、学生が登山に向けて休みを取ることが難しいことの二点を理由に、今回は見送りたいとの連絡あり。これを受け、今年度の標記事業を取りやめることになった。

二、㈶自然公園美化管理財団の評議委員に大塚会長を再任することを了承。

三、第四回加賀市《深田久弥「日本百名山」写真コンテスト》の後援を承認。

四、二見書房に対し、『深田久弥の山がたり』（第三巻・神々の峰）の内容に沿った資料の写真撮影、書籍掲載願いを承認。

五、上越市「日本スキー発祥記念館」へのスキー寄託延長を了承。

六、青森支部の「白神山地体験林業（ブナ林再生事業）実施計画」を百周年事業の一環として実施する。

その他、日本勤労者山岳連盟四十周年行事（五月十三日、竹内副会長）、山梨支部・木暮碑前祭（五月二十七～八日、高原理事）、日本山岳協会四十周年行事（五月二十七日、大塚会長）、上高地ウェストン祭（六月四日、大塚会長、UIAA主催シューベルト氏歓迎会（六月九日、坂井理事）の行事に出席した旨の報告があった。また、総務、財務、医療各委員会、アルパータ実行委員会、青年部、山研委員会からの報告と、ミニ水力発電の報告があった。

会報「山」六六三号参照

◇七月理事会　二〇〇〇年七月十二日　本会会議室

出席者　十九名　オブザーバー　一名

▽審議事項

一、二〇〇〇年および二〇〇一年度秩父宮記念山岳賞審査委員の委嘱について、候補者リストもとに討議の結果、村木潤次郎、斎藤惇生、小田稔、木下是雄、松浦祥次郎、山口峯生、平山善吉、小倉茂暉、大森薫雄、竹内哲夫、西村政晃に委嘱。　承認

二、七月一日付けで、北九州支部発起人一同より「支部設立並びに運営に関する規定」第四条にある必要書類と設立了解願いが提出された。　了解

三、ネパール植林継続に関して、自然保護委員会より五十万円の補助金申請があった。来年の植林継続の計画書を再提出することを条件に、今年度に限り四十万円の補助金を出すことになった。来年度以降の予算計上はない。また、今後の事業展開について、補助金援助には長期保証がない場合がほとんどであること、海外の場合は現地の人たちに事業を移行・継承していくためのカリキュラムが必要であること、以上の二点が確認された。　承認

四、日本の山の自然復元を目指す「山岳会の森」構想の候補地として林野庁管理の高尾山周辺の山林（二十五ヘクタール）の利用を認めてもらったので、活動に愛する三百万円の補助金申請を㈶国土緑化推進機構に対して行ないたい。　承認

五、富山県から、室堂立山自然保護センターの展示パネルの参考資料としてウェストン夫妻の写真の使用許可願いが出された。　承認

六、七月の新入会員　十四名

▽報告事項

一、晩餐会当日に実施予定のエベレスト登頂記念行事の担当メンバーは、坂井理事、その他数名（一九七〇年隊、八〇年隊、八八年隊）で構成。九月には企

画の概要を決める。

二、審議事項のうち、本会所有の図書、写真、資料などの使用許可願いなどについては、総務担当理事に判断を委ねる。ただし、金銭が絡むもの、重要事項と判断されるものは、従来どおり理事会の審議事項とする。理事会では、本会のあり方、百周年に向けてといったテーマを設けて、時間を有効に使い論議したい。

その他、総務、財務、図書管理、海外連絡、山研運営、化学、海外登山基金の各委員会、アルバータ二〇〇〇実行委員会、ミニ水力発電実行委員会からの報告があった。

会報「山」六六四号参照

◇**八月理事会**　休会

◇**九月理事会**　九月十三日　本会会議室

出席者　二十二名

▽審議事項

一、会員アンケートの実施案を検討。高齢化が進むなか、いかに若年層を育成し活性化させていくかということ、百周年記念事業についてなど多数の意見が出された。一部手直しする。　承認

二、青年部K2登山（一九九六年）のビデオフィルムの使用許可願いが、米国オアシス・プロダクションより、日本のコーディネーターを通じてあった。同プロダクションは、ナショナルジオグラフィック社より製作依頼を受けているという。内容を確認中。

三、八～九月の新入会員　二十名

▽報告事項

一、九月二日に北九州支部の設立総会があり、大塚会長と小倉副会長が出席した。

二、アルバータ・プロジェクト二〇〇〇初登頂七十五周年記念事業の報告があった。

三、武井会員から絵画「タムセルク」の寄贈があった。

四、カザフスタン登山協会の招待で、宮崎・松原両理事が、八月十六日～二十二日まで同国を訪問した。

五、九月九日に本会会議室で名誉会員を囲む会が開催され、二十三名（うち名誉会員十二名）の出席があった。

六、年次晩餐会当日実施予定のエベレスト登頂記念行事についての、準備委員会を開催し計画案をまとめた。

七、総務担当理事より以下の名義後援および資料借用願いについて報告があった。

①北区飛鳥山博物館に対して「冠松次郎遺品資料一式」など四点、書籍七点の貸し出しと名義後援。

②BBSテレビに対して「河童橋上のウェストン卿ご夫妻の写真」などの写真撮影と書籍掲載許可。

③富山県立博物館に対して伊藤孝一氏「雪の立山、針ノ木越え」など二点の山岳映画上映会の名義後援。

④IWASAKI ROCKISES FORUMに対して写真展「岩崎崇至　山の世界」の名義後援

⑤東京都山岳連盟に対して「第八回長谷川恒男CUP」の名義後援。

その他、総務、財務、会報編集、海外登山基金、高所登山、指導、集会、山岳編集、科学、図書、自然保護の各委員会、山研運営委員会より報告があった。

また、越後支部の五十嵐支部長逝去にともない、来年五月まで室賀副支部長が支部長代行をすることが報告された。

会報「山」六六六号参照

◇**十月理事会**　二〇〇〇年十月十一日　本会会議室
出席者　十九名
▽審議事項
一、会員アンケート実行委員会による実施案の説明　　承認
二、青年部K2登山隊（一九九六年）のビデオフィルム使用許可願いについて、ナレーションとBGMを除くことを条件として、使用を許可。また、本ビデオの著作権が本会にあることも確認した。今後、海外に資料を貸与する場合に備えて、使用料請求や条件設定などについて検討しておく必要がある。　承認
三、十月の新入会員　十四名
▽報告事項
一、二〇〇〇年度永年会員予定者十一名の確認。
二、二〇〇〇年度年次晩餐会の企画について、日時、会場、会費、企画内容などを報告。
三、二〇〇〇年度秩父宮記念山岳賞の審査中間報告。
①「山岳地の環境保全と災害防止に関わる大気科学の研究」　吉川友章会員
②「大峯・行仙宿山小屋建設」　玉岡憲昭会員
③「十一次にわたるマッキンリー気象観測登山隊による若手登山者の育成」　大蔵喜福会員
四、総務担当理事より以下の資料借用願についての報告
①㈱山と溪谷社に対して『山岳』三十二年より六十九ページ黒部下部奥山概念を『山と溪谷』十一月号への転載許可。
②㈱スタジオアルタに対して「日本隊エベレスト初登頂」のオリジナル写真をテレビ番組「ミス。インターナショナル世界大会」に使用許可。
③名古屋市教育委員会に対して「チョモランマ未踏の北壁、登頂成功」の写真を新成人への記念アルバムに使用許可。
　その他、総務、財務、会報編集、海外登山、高所登山研究、学生部指導、科学、図書、自然保護、医療の各委員会、山研運営委員会、アルバータ運営委員会から報告があった。また、入会者減少に関して、意見が交わされた。
会報「山」六六七号参照
◇**十一月理事会**　二〇〇〇年十一月八日　本会会議室
出席者　二十一名
▽審議事項
一、二〇〇〇年度第三回秩父宮記念山岳賞について、審査委員会は大蔵喜福会員の「マッキンリー通年気象観測の成功とそれを通じての若手登山家の育成」を授賞候補として推薦し、副賞として二十万円を贈る。　承認
二、二〇〇〇年度会長特別表彰について、法政大学チョモランマ登山隊二〇〇〇に登攀隊長として参加し世界最高年齢で登頂した山本俊雄会員を推薦する。　承認
三、日本山岳会創立百周年記念切手を二〇〇五年に発行するための、発行申請を郵政省に対して行なう。　承認
四、特定預金「図書出版研究基金」を「長期計画準備積立金」に振り替え、戦略的な運営を図るよう改善案が提示された。　継続審査
五、十一月の新入会員　二十五名
▽報告事項
一、十月二十八日の評議委員会では、名誉会員の推薦について見送りとした。
二、山岳四団体「山岳保険・共済」に関する懇談会に、高原理事と総務委員一名が参加予定。
三、年次晩餐会の進捗状況報告。
四、総務担当理事より以下の資料等使用許可願いの報告があった。
①㈱ウォークに対してウェストン夫妻の写真のビデオシリーズ「日本の森自然

紀行（仮題）」使用許可。

五、支部長会議を十二月二日に開催する。

六、十月二十八日のカナダ山岳会年次総会および晩餐会に大森副会長が出席。

七、十月二十七日に会員アンケートを発送。順次返送されているので、集計を行なう。

その他、財務、会報編集、海外連絡、集会、自然保護、資料の各委員会、および山研運営委員会からの報告。

会報「山」六六八号参照

◇**十二月理事会**　二〇〇〇年十二月十三日　本会会議室

出席者　二十一名

▽審議事項

一、『日本山岳会百年史』の発行企画についての審議があった。発行時期について、百周年記念行事の記録を取り込むために二〇〇六年との提案があったが、百周年の当該年である二〇〇五年とする。予算額三千五百万円は大きすぎないかとの意見があり、百周年記念事業全体の予算枠を決めることが先決であることが確認された。編集方針が決まっていない。記念事業全体の実行委員会を来年度に立ち上げる予定であるなどの意見が出た。　継続審議

二、特定預金「図書出版研究基金」の「長期計画準備積立金」への振替について、理事会が了承している旨を、設立当時の関係者に説明したうえで、決定。　継続審議

三、「小下沢風景林の森づくり活動」実施に関わる協定締結は、七月理事会で承認されているので、竹内副会長と吟味して締結する。　承認

五、十二月の新入会員　九名　復活会員　一名

▽報告事項

一、十二月二日の年次晩餐会は、皇太子殿下、橋本龍太郎会員他六百名の会員が出席。来賓は、カナダ山岳会のモーティマー会長夫妻、ロウ副会長、マテマ駐日ネパール大使の四名。

二、総務担当理事より、次の資料借用許可願いの報告があった。

①㈱エスオーケイ東京支社の書籍『日本古墳文化論・考古論集』の巻頭、および全国都道府県を紹介するホームページの長野県コーナーに、W・ゴーランド氏の肖像写真を使用することを許可する。

三、十一月十一～十二日に実施された静岡支部立五十周年記念式典および、記念山行に、大塚会長、勝山理事が出席。

四、会員アンケートは、三千二百五十五名から回答があり（回答率五十四・四％）、現在集計中。

その他、財務、会報編集科学、高所登山研究、学生部指導、フィルムビデオの各委員会、山研運営委員会、インターネット小委員会、青年部より報告があった。

また、秩父宮記念山岳賞を受賞した大蔵喜福会員を祝う集いを、科学委員会主催で二月七日に開催予定であることが報告された。来年度の役員候補者選定について、委員会組織の改革も視野に入れながら検討してもらいたいとの意見が出された。

会報「山」六六九号参照

◇**一月理事会**　二〇〇一年一月十日　本会会議室

出席者　二十五名

▽審議事項

一、㈱アテネ書房より戦前の『山岳』復刻の許可願いがあり、これに対して、以下の五点について意見が出され、今後も引き続き前向きに検討していくことになった。

①出版社が本会の百周年を祝う形で出版されるのが妥当。

②日本山岳会の監修は不要ではないか。
③版権使用料（初版五百部までは、定価の三パーセント相当である十二万八千円）は妥当だろうか。
④原本を使用する場合は、破損などの心配がある。合本が複数あるので、こちらを使用したほうがよいのでは。
⑤復刻にはメリットがある。買い取りの必要はない。　継続審議

二、東京農業大学ダウラギリⅠ峰登山隊（谷川太郎隊長、二〇〇一年三月～五月）への推薦依頼を承認。　承認

三、山研の進め方について以下の二点が協議された。
①ミニ水力発電実行委員会は当初の目的を果たしたので、今年度末で解散。平成十三年度からは実験研究継続のために、山研運営員会内の小委員会としてミニ水力発電運営委員会を設置。当面は、委員長＝小倉副会長、委員＝坂本理事、森理事で構成し、五月の役員改選を経て組織体制を確立する。
②本プロジェクトを円滑に実施するために、研究は本会と神奈川工科大学の共同研究で進めてきたが、この期限は二年間（ことし三月末まで）。今後、研究を継続するために、さらに期限を三年間延長したい（この研究は、環境庁との了解事項として、最低五年間実施することと、大学などの研究機関との共同研究であることが前提条件となっている）。

四、一月の新入会員　十七名　復活会員　一名

▽報告事項

一、総務担当理事より、資料等使用許可願いに関して、以下の二点を許可したことが報告された。
①朝日新聞出版局『週刊日本百名山』（第十三号）に掲載予定の、上條嘉門次の輪かんじきなど七点（本会所蔵　大町山岳博物館展示資料）の撮影。
②ＮＨＫ「プロジェクトX挑戦者たち」の放映に対して、田部井淳子さんが一九七五年にエベレスト登頂した際に使用した登山装備一式（本会所蔵　松本市アルプス山岳館展示資料）の撮影。

その他、財務、会報、海外登山基金、アルバータ二〇〇〇、医療、指導の各委員会、インターネット小委員会より報告があった。また、信濃支部新年例会に小倉副会長と坂本理事、山梨支部新年会に竹内副会長が出席予定であること、日山協・都岳連新年会に大森副会長が出席予定であることが報告された。

会報「山」六七〇号参照

◇二月理事会　二〇〇一年二月十四日　本会会議室

出席者　二十三名

▽審議事項

一、二〇〇一年度海外登山基金に、三隊から申請があり、一月十二日の海外登山基金委員会で助成案が決定した。　承認
①ガッシャーブルムⅠ・Ⅱ峰　明治大学山岳部・炉辺会　助成金額五十万円
②サンルン峰　日本大学桜門山岳会　助成金額五十万円
③ローツェ南壁　日本山岳会東海支部　助成金額六十万円

二、二〇〇〇年度期末推計と二〇〇一年度収支予算編成について。また、本会の定期預金が一銀行に集中しているので、財務委員会で分散することを検討し、提案したい旨の説明があった。　継続審議

三、特定預金「図書出版研究基金」の「長期計画準備積立金」への振替について説明があり、基金作りに尽力している会員に敬意を表することと、本会創立百周年記念事業に活用する際には改めて表明する二点を留意したうえで承認。　承認

四、㈱アテネ書房による戦前の『山岳』を復刻に関する覚書の内容について、法律家の意見を聞いたうえで修正することで応諾。修正した覚書については、三月理事会で報告。

五、二〇〇一年度地球環境基金助成金交付の申請について、締切期日の関係から理事会の承認を経ないで申請した旨が報告された。これに対し理事会は、ネパール・シバプリの石楠花植林がうまくいっていないのに別件の事業に取り組むのを問題と考えることと、理事会を経ずに手続きしたことが不適切であることから、本件を承認せず、申請を取り下げることとする。　不承認

▽報告事項

一、総務担当理事より、資料所在調査協力依頼と『山岳』記事転載への許可に関する報告があった。

①千葉県立中央博物館の平成十三年度特別展「ヒマラヤ―人、自然、文化―」の開催に際し、協力要請があり、「マナスル初登関連資料」「ナンダ・コット遠征関連資料」の所在調査の協力をすることとした。

②京都工芸繊維大学学士山岳会より、本会会員でもある故新井清氏の『山岳』一九九四年の追悼文の転載を許可した。

二、松本市よりアルプス山岳館整備基金構想談話会への参加依頼があり、信濃支部長に出席依頼をした。

三、以下の通り、行事、集会などの出席報告があった。日山協新年会（一月二十日　大森副会長）、都岳連新年会（一月二十三日　大森副会長）、山梨支部新年会（二月四日　竹内副会長）。

その他、財務、会報、フィルムビデオ、医療、海外連絡、自然保護、資料の各委員会、および青年部、インターネット小委員会よりそれぞれ報告があった。また、国際山岳年行事（二〇〇二年）に関する打ち合わせに、本会より高遠理事、江本海外連絡委員会委員に出席依頼。理事が長期間留守にする場合は、代行を立てるなどの対策を講じる必要があるのではないかと意見も出された。

会報「山」六七一号参照

◇三月理事会　二〇〇一年三月十四日　本会会議室

出席者　二十一名

▽審議事項

一、二〇〇一年度事業計画（案）および収支予算（案）について提案があり、一部追加改正。また、本案件議事録を文部科学省に提出する際の署名人は、村井（龍）、高原両理事とする。　承認

二、定期預金の預金先分散について、財務委員会に一任することを提案。基本的姿勢としては、元金を大切にしながら、ペイオフの対応を考えること。一行への預金額は三千～五千万円を目安とする。　承認

三、松本市岳都年会議「アルプス山岳館特別企画展」（十月七日～九日）への協力依頼を受け、北アルプスなどの空撮写真、アルパインフォトクラブ所蔵の写真などの展示に協力する。費用は基本的には依頼者側がもつが、詳細は検討中。　承認

▽報告事項

一、『山岳』復刻版に関する覚書について、二月理事会を踏まえ、弁護士などの専門家にも相談のうえ、内容を一部修正し、㈱アテネ書房と取り交わす。　承認

二、第四回会員アンケートの集計結果について報告があった。会員構成、会員のニーズなどの現状を把握し、中長期のビジョン作りの基礎資料として、また年度事業計画、収支予算作成の参考とする。アンケート回答者は三二五五名（回答率五十四・四％）。

三、二月二十二日に文部科学省の立ち入り監査（担当　競技スポーツ課）があり、小倉副会長、西村、村井（龍）、中村各理事が対応。とくに大きな指摘はなかった。

四、松本市長より、世界岳都年会議への名義後援依頼があり、了承した。

五、マナスル登山などでお世話になったローク・ダルシャン氏へ感謝状を贈呈

する。
六、大町山岳博物館創立五十周年記念事業を本会と共催することになった。
七、総務担当理事より、以下三点の写真、資料などの掲載、使用願いを許可した旨の報告があった。
①信濃毎日新聞出版局『知られざるW・ウェストン』（二〇〇一年八月刊行予定）への写真掲載。
②茗渓堂『日本アルプス発見―西洋文化の交流』（庄田元男著）への『山岳』記事などの転載使用。
③㈱山と溪谷社『目で見る日本登山史』（二〇〇一年四月刊行予定）への、写真、イラストなどの図版の複写掲載。
八、環境事業団の募金箱を本会ルーム内に設置。
九、国際山岳年（二〇〇二年）取り組み準備会に、高遠理事が出席。
十、次期改選の評議員十二名について、会長、副会長を中心に候補者を選定中。推薦者があれば、推薦を。
十一、一月理事会に提案された「委員会再編成の提案」を踏まえ、学生部指導、集会、高所登山研究、指導、青年部、遭難対策の担当四理事より、本会の組織および運営に関する改革が提案され、意見が交わされた。今後、重要課題と認識し、機会を設けて十分な論議を行なうこととする。
十二、「JACマーク」の商標権の登録更新を予定している。
その他、財務、総務、会報、自然保護、資料各委員会、青年部からそれぞれ報告があった。
会報「山」六七二号参照

◇**四月理事会**　二〇〇一年四月十一日　本会会議室
出席者　二十四名
▽審議事項
一、二〇〇〇年度事業報告（案）について、一部記載事項を修正、追加し決定。　承認
二、二〇〇〇度収支報告（案）について、監査の結果、いずれも性格克定説に処理されているとの報告があった。　承認
三、本会自然保護委員会から増田岩手県知事および合田岩手県教育委員会教育長宛てに、「山岳競技による早池峰山高山植物の被害についての報告とお願い」を提出。中谷岩手支部長との連携をとる。　承認
四、四月の新入会員　五十九名　復活会員　二名
▽報告事項
一、評議員会（三月二十四日）において、次期会長候補の選定を行なった。投票結果、平山常任理事を推挙することが決まった。これを受けて、現状のやり方について多数の意見が出され、理事会としては、会長は早急に評議員会を招集し、次期会長候補の調整および、副会長、理事、監事の候補者推薦を行なうことを確認した。
二、㈱山と溪谷社が『ヤマケイ・クラシックス』の販売案内を行なうに際し、本会員に購入特典を設けることにより、会員名簿の使用依頼があり、これを許可した。
三、六月に富山テレビ放送で放映予定の「ナンダコット登攀隊の軌跡」に関して、製作会社のラックプロ㈱より、資料貸し出しなどの協力依頼があり、これを許可した。なお、立教大学山岳部ＯＢでもある鯵坂理事に相談窓口を担当してもらう。
四、中津川市観光協会より、恵那山登山口にW・ウェストン氏の胸像を造り、「恵那山・ウェストン公園」（仮称）を設置するために、同氏の肖像写真の貸し出し依頼があり、これを許可した。
五、外務省より、ディペンドラ・ネパール皇太子殿下来日にあたり、歓迎各行

事の協力依頼があった。本会は、四月二十八日夕刻より、国際文化会館で歓迎パーティを開催。京都訪問に関しては、京都支部が中心となり担当。

その他、財務、会報編集、自然保護、学生部指導、海外連絡、医療の各委員会、青年部、山研運営委員会から、それぞれ報告があった。

会報「山」六七三号参照

◇五月理事会　二〇〇一年五月九日　本会会議室

出席者　十八名

▽審議事項

一、以下の三支部より、新支部長選任の届出があった。秋田支部＝佐々木民秀会員（五七四八）、宮城支部＝千田早苗会員（七二一一）、京都支部＝横田明男会（六八四八）。　承認

二、五月の新入会員　十七名　復活会員　一名

▽報告事項

一、四月二十六日に開催された評議員会で、副会長以外の理事と監事候補者が決まった。副会長については、調整中。

二、四月二十五日の臨時理事会で会長に一任されていた、次期評議員候補者の鯵坂氏については、本人の意思確認を取ったうえで、候補者とした。

三、ディペンドラ・ネパール国皇太子殿下の来日中、四月二十八日夕刻に歓迎パーティを開催。出席者は八十人。また、二十九日からの京都滞在では、京都支部を中心に歓迎会を開催。

四、本会内の同好会「アルパインフォトビデオクラブ」より上野松坂屋にて開催する「山岳写真展」の後援依頼があり、これを承諾した。

五、千葉大学学士山岳会より、「五十周年記念誌」にあたり、『山岳』第八一年（一九八六年）のブータンヒマラヤ・ナムシラ峰初登頂など二点の記事について転載許可願依頼あり、これを承諾した。

六、山岳遭難保険の代理店を、二〇〇一年四月一日より、現行の新都市住販㈱より新都市リビング㈱へ変更。

その他、財務、総務、会報、自然保護、アルバータ二〇〇〇プロジェクトの各委員会より、それぞれ報告があった。

会報「山」六七四号参照

◇二〇〇一年度通常総会

二〇〇一年五月十九日　東京グリーン・ホテル

出席者　一六八名（ほか委任状二四六六名）

▽議案

一、二〇〇〇年度事業報告および収支決算・財務目録の承認

二、二〇〇一年度事業計画および収支予算案の承認

三、二〇〇一年度・二〇〇二年度役員および評議員改選について次の通り決定。

会　長　大塚博美（再任）

副会長　芳賀孝郎（新任）・長尾悌夫（新任）・村井龍一（再任・財務担当兼任）

常務理事　西村政晃（総務　再任）・今村千秋（会報編集　新任）・坂井広志（高所　再任）（常務理事については、後日の臨時理事会で決定）

理　事　高遠　宏（山岳編集・百年史　再任）・宮下啓三（図書　再任）・高原三平（総務　再任）・松原尚之（青年部　再任）・河西瑛一郎（自然保護　再任）・中村　保（海外連絡　新任）・小川　武（山研運営　新任）・黒川　恵（指導・遭難対策　新任）・大野秀樹（医療　新任）・朴元鐘徳（集会・新任）・鈴木敬吾（資料・フィルムビデオ　新任）・鳥居和雄（学生部　新任）・藤本慶光（科学　新任）

監　事　内田　博（新任）・古市　進（新任）

常任評議員　平林克敏（再任）・宮崎紘一（新任）・宇田川芳伸（再任）・鰺坂青青（新任）（常任評議員については、総会後、評議員内で決定）

評議員　田邊壽（再任）・山本久子（再任）・尾上昇（再任）・吉永英明（再任）・絹川祥夫（再任）・中尾正武（新任）・赤羽孝一郎（新任）・小倉茂暉（新任）・大森薫雄（新任）・本田誠也（新任）・岡田光行（新任）・坂本観晃（新任）・森武昭（新任）・中井俊一（新任）・竹内哲夫（新任）・山本晃弘（新任）

▽役員改選経過

次期会長候補が総会通知を会員に発送する期限になっても、決定をみなかったため、「役員および評議員改選の件」が重要議題でありながら、重要項目である候補者名簿が同封できないまま総会通知が発送された。欠席者の委任状は半数を大幅に下回った。

内訳は、①会長委任五百八十一　②議長委任三百三十一　③白紙委任千五百四十四　④記名捺印のない無効委任状三百六十五　⑤委任しないもの七十三。

会長候補が決まらなかったのは、評議員会が会長の若返りを図ろうとして新しい会長候補を推薦したのに対し、大塚博美会長が再任を希望し、理事会もこれを支持したためであった。このため、会長選任は総会で決定するという、本会創立以来初めての事態となった。

総会当日、出席者には、評議員会が推挙する平山善吉会員を会長候補とした役員・評議員候補者名簿が配布され、大塚会長が議長のまま討議された。結果、評議員会案は否決され、委任状を含む賛成多数で大塚会長の再任が決定した。

副会長、理事、評議員は、大塚会長の提案により評議員会推薦のとおり、承認された（総会における会長選任に関する質疑・討議の詳細は、会報「山」六七四号参照）。

四、二〇〇〇年度除籍者の件

五、その他

▽会務報告

二〇〇〇年度末会員数

名誉会員　三十八名
永年会員　七十三名
終身会員　百三十八名
通常会員　五千四百九十名
夫婦会員　百五十名
団体会員　百一団体
　計　五千九百九十名（前年度末会員数五千九百十五名）
新入会員　百九十名
復活会員　十二名
物故会員　五十二名
退会会員　七十六名
除籍者　四十五名

◇**五月臨時理事会**　二〇〇一年五月三十一日　本会会議室

出席者　二十六名

▽審議事項

一、会長に事故があったときの副会長の代行順序について、長尾、村井、芳賀各副会長の順とする。　承認

二、常務理事と理事の委嘱。　承認

三、常任評議員の委嘱。　承認

四、戦略的な課題について、一部担務を以下の通りに依頼する。

①秩父宮記念山岳賞　長尾副会長

②海外登山基金助成　村井副会長

③百周年記念事業企画プロジェクト・リーダー　平林常任評議員
④長期改善計画策定プロジェクト・リーダー　西村常務理事
⑤『新日本山岳誌』　高原理事
⑥ミニ水力発電　小川理事

五、定例理事会の開催日を原則として、第二水曜日十八時三十分からとする。　承認

▽報告事項

一、団法人の理事、監事、評議員の任務、民法上の意義、本会における役割と特徴、課題について説明があった。
二、予算執行に関して説明があった。
三、「海外連絡委員会」を「海外委員会」と名称変更をする。
四、本年度の各委員会名簿を六月三十日までに提出。
五、青年部より『キリギリス』三号を刊行した。
六、「高尾の森づくり」の作業日は、毎月第二土曜日の午前九時からとする。
七、理事会議事録は、高原理事が作成し、西村理事が校閲後、理事会メンバー、評議員、支部長に郵送。訂正などがある場合は、当月内に総務担当まで連絡すること。

◇登山の指導と奨励を目的とした集会、研究会、講演会、展覧会、およびシンポジウムの開催（二〇〇〇年六月～二〇〇一年五月）

（A）**集会**

▽六月三日　上高地
第五十四回ウェストン祭（信濃支部）
▽六月四日　高尾山周辺小下沢風景林
高尾の森づくり（自然保護）
▽六月九日～十二日　白神山地
白神山地のブナ林再生事業（青森支部）
▽六月十日　富士山
古道を訪ねて（図書）
▽六月二十六日　本会会議室
委員会・同好会連絡会議（総務）
▽六月二十八日　カナダ大使公邸
アルパータ二〇〇〇登山隊歓送会
▽六月二十九日　本会会議室
気象講座「夏の天気図の見方」（科学）
▽七月一日～二日　湯の丸・高峰高原周辺
上信越国境の大分水嶺と高山植物を探る（科学）
▽七月十八日　本会会議室
インド登山財団名誉幹事・P.C.ラテラ氏来訪
▽八月十七日～二十日　上高地山岳研究所
インタープリター養成セミナー（山研）
▽九月二日　高尾山周辺
高尾山自然観察山行（自然保護）
▽九月二日～三日　福岡県
北九州支部設立総会
▽九月八日～十一日　白神山地
白神山地のブナ林再生事業（青森支部）
▽九月二十日　本会大集会室
山野井泰史氏講演会（青年部）
▽九月三十日　本会会議室
第三十一回新入会員オリエンテーション

▽九月三十日～十月一日　焼岳・徳本峠周辺きのこ山行（集会）
▽十月十四日～十五日　焼岳・上高地周辺
焼岳登山と山研ミニ水力発電見学（科学・山研）
▽十月十四日～十五日　越前大野市
二〇〇〇年度自然保護全国集会（自然保護・福井支部）
▽十月十五日　多摩スポーツ会館
第一回スポーツクライミング体験講習会（集会・指導・青年部）
▽十月二十七日　本会集会室
アルバータ初登頂と当時の登山の背景（図書）
▽十月二十八日　高尾山周辺小下沢風景林
高尾の森づくり（自然保護）
▽十一月一日　本会集会室
「雪の薬師、槍越え」上映（フィルムビデオ）
▽十一月十八日　東京体育会館
高所登山に関するアンケート発表とシンポジウム（高所登山研究）
▽十一月十八日　高尾山周辺小下沢風景林
高尾の森づくり（自然保護）
▽十二月二日　新高輪プリンスホテル
二〇〇〇年度年次晩餐会（総務）
▽一月十一日　アルカディア市ヶ谷
ガモフ博士講演会（医療）
▽一月二十九日　本会集会室
山岳図書を語る夕べ（図書）
▽二月三日～五日　八ヶ岳・赤岳鉱泉周辺
アイスクライミング講習会（指導）
▽二月十日～十二日　蔵王周辺
スキー親睦会（集会・山形支部）
▽二月十七日　高尾山周辺小下沢風景林
高尾の森づくり（自然保護）
▽二月二十四日～二十五日　東京グリーンホテル・本会集会室
支部事務局担当者会議（総務）
▽二月二十八日　本会集会室
第二十九回山岳史懇談会（図書）
▽三月三十一日　本会会議室
二〇〇〇年度下期・第三十二回新入会員オリエンテーション（総務）
▽四月十五日　高尾山周辺小下沢風景林
高尾の森「植樹祭」（自然保護）

（B）研究会・講演会・展覧会

▽七月十七日～二十七日　上高地山岳研究所
山岳絵画をめぐる美と感動（山研）
▽九月二十日～十月十五日　上高地山岳研究所
山岳写真展（フィルムビデオ・フォトビデオクラブ）

（C）シンポジウム

▽六月三・四日　慈恵会医科大学
第二十回日本登山医学シンポジウム（医療）
▽十一月十八日　東京体育館
高所登山に関するシンポジウム（高所登山研究）
▽十一月二十五日　東京都高齢者就業センター講堂
登山者の立場から山のトイレ問題を考える（科学・自然保護）

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Volume 96 No.154 **Issued December 2001**

CONTENTS

Japanese Mountaineerings in China in the Last 20 Years
……KODAMA Shigeru……(7)
The Achievements of The Rock Climbing Club II ……NINOMIYA Youtaro……(40)
An Open Forum: Mt. Everest Climbs by The Japanese Alpine Club
……compiled by SAKAI Hiroshi……(60)
The Weather Conditions of Mt. McKiley ……OHKURA Yoshitomi……(82)
K2 2000 ……TERASAWA Reiko……(104)
Chong Muztagh, First Ascent……YAMADA Shin……(114)
Higher and Further in the Quest for Unknown ……NAKAMURA Jun……(127)
Wandering in the Farthest Northwest Nepal ……OHNISHI Tamotsu……(137)
Quest for the Source of the Mekong River ……NAKAMURA Tamotsu……(148)
"Wandering through Mt. Tashiro in Suruga Region"—A Reissue from the Sangaku vol. 1-Ⅲ ……OGINO Otomatsu……(177)
Book Reviews……(197)
In Memoriam……(227)
Reports from Local Section ……(264)
Club's Notes June 2000-May 2001……(283)
Catalogue of Japanese Mountain Books in 2000……(A46)
Questionnaires to 110 Eight-Thousanders; Acclimatization and Stamina on the High Altitude Climbs ……YAMAMOTO Masayoshi……(A37)
English summary ……(A15)

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : 5-4 Yonban-cho Chiyoda-ku, Tokyo 102-0081

Office Bearers and Committee

2001 (May 2001-April 2002)

President : OTSUKA Hiroyoshi

Vice Presidents : NAGAO Yoshio
MURAI Ryuichi
HAGA Takao

Secretary : NISHIMURA Masaaki

Editor : TAKATOH Hiroshi

Treasurer : MURAI Ryuichi

Auditor : FURUICHI Susumu, UCHIDA Hiroshi

Director

EMOTO Kanenori
FUJIMOTO Keikow
IMAMURA Chiaki
KASAI Eiichirou
KUROKAWA Satoshi
MATSUBARA Masayuki
MIYASHITA Keizo
NAKAMURA Tamotsu
OGAWA Takeshi
OHNO Hideki
SAKAI Hiroshi
SUZUKI Keigo
TAKAHARA Sanpei
TORII Kazuo

Council

AJISAKA Seisei
AKABANE Koichiro
HIRABAYASHI Katsutoshi
HONDA Seiya
KINUGAWA Yoshio
MIYAZAKI Koichi
MORI Takeaki
NAKAI Shun-ichi
NAKAO Masatake
OGURA Shigeki
OHMORI Shigeo
OKADA Mitsuyuki
ONOE Noboru
SAKAMOTO Kanko
TAKEUCHI Tetsuo
TANABE Hisashi
UDAGAWA Yoshinobu
YAMAMOTO Akihiro
YAMAMOTO Hisako
YOSHINAGA Hideaki

Section Chair

Hokkaido : NIIZUMA Toru
Aomori : MATSUSHIMA Seigo
Iwate : NAKAYA Mitsuru
Akita : SASAKI Tamihide
Yamagata : KIMURA Kiyoshi
Miyagi : CHIDA Sanae
Fukushima : SAKUMA Takao
Echigo : MUROGA Teruo
Shinano : YAMAURA Gentaro
Yamanashi : FURUYA Gakuji
Shizuoka : OHISHI Atsushi
Tohkai : NAKASEKO Takashi
Gifu : TAKAGI Sakio
Kyoto : YOKOTA Akio
Toyama : KIDO Shigeyoshi
Ishikawa : TSUDA Fumio
Fukui : MIYAMOTO Kazuo
Kansai : ABE Kazuyuki
San-in : TAKADA Mitsuyoshi
Hiroshima : HIRAI Takeshi
Fukuoka : FUKADA Taizo
Kita Kyushu : YOSHIMURA Kenji
Higashi Kyushu : UMEKI Hidenori
Kumamoto : KUDOH Fumiaki
Miyazaki : OHTANI Masaru

K 2-2000

Reiko Terasawa

K2-2000 groupe consisted of two climbing parties, Kazuo Tobita and Taeko Yamanoi who planned to climb South-southeast Rib, and Yasushi Yamanoi paired up with Wojciech Kurtyka aiming at first ascent of East Face, and me as a manager.

When we reached the site of K2 Base Camp at June 26, two Koreans, a Brazilian, an International and H. Kamarander's parties were climbing their respective routes.

July 6 ; Tobita party went up Camp 1 on South-east Ridge for acclimatization, and return to Base Camp.
East Face party continued to serch the climbable route.

July 7 ; East Face party return to Base Camp, they had to abandon this route because of the wall condition were worst.

July 10 ; Yamanoi and Kurtyka start from Base Camp for South-southeast Rib.

July 11 ; Owing to the bad weather, Yamanoi and Kurtyka return to Base Camp.

July 18 ; Yamanoi went up and down South-east Ridge for acclimatization.

July 19 ; Kurtyka went home with high altitude poters who engaged Japanese Broad Peak party.
Yamnoi and Taeko went up for Camp 2 (7,000m) which made by Kamarander's party on South-southeast Rib.

July 21 ; Taeko return to Base Camp, Tobita went up for Camp 2.

July 22 ; Yamanoi return to Base Camp.

July 23 ; Tobiota return to Base Camp.

July 27 ; Tobita and Taeko start from Base Camp for the Camp 3.

July 28 ; Yamanoi left Base Camp at noon, reached Camp 2 at 22:00 and joined Tobita and Taeko.

July 29 ; Yamanoi reached Camp 3 site at 7,900m.
Tobita retrun to Base Camp. Taeko reached 7,400 m and returnt Camp 2.

July 30 ; Taeko return to Base Camp.
Yamanoi continued to climb and stood on the summit of K2 at 12:28, and went back to Camp 3 site.

July 31 ; Yamanoi return to Base Camp with two Korean climbers, one of them also climbed the summit on the same day via South-east Ridge.

August 4 ; Taeko went up for Camp 1 on South-east Ridge.

August 9 ; Taeko abandoned South-east Ridge, return to Base Camp.

Chong Muztag, First Ascent.

Shin Yamada

Waseda University Alpine Club of Tokyo sent an expedition to the Kunlun range of Sinkiang, China in the summer of 2000. They made the first ascent of Mt. Chong Muztag (or Qong Muztag, 6962 meter) on August 15. Twelve member expedition including 5 students was led by Shin Yamada.

We started the approach march from Kyantokai, a small village at the northern foot of Kunlun, on July 23. Kyantokai was reached from the town of Minfeng, some 300 kilometers east of Hotan, in a one day drive on 4 WD vehicles.

The caravan consisted of 90 donkeys, 58 for baggage and 32 for riding, 17 donkey handlers, three staff members of the Sinkiang Mountaineering Association and us. Unusual rainy weather of this summer affected the 220 kilometer approach march. The rushing torrents of rivers forced us to stay on the banks for two days. It took twelve days of crossing the high-altitude desert to reach Base Camp (4850 meter) at the northern foot of the mountain.

We made Advanced Base Camp at 5200 m. Baggage was carried there on the back of donkeys. Then we established Camp 1 at 5900 m and Camp 2 at 6400 m, both on the north-west ridge of Chong Muztag by August 12. The ridge was broad and covered with deep snow.

On August 15, Eiho Otani, Hiroaki Kino and Yasushi Tanahashi started their summit assault from Camp 2. They fixed some pitches of ropes on steep slope of the 'Snow Dome' (6650 meter) in order to avoid the risk of avalanche. Changeable weather often forced them to stop going forward. Snowstorm shut the visibility.

They reached the bottom of rock face near the summit at 2:00 p.m. (Beijing time) when it began to snow fiercely. They stayed there for two hours waiting for clear view. They started again to climb at 4:00 p.m. It was the most difficult part of the route to climb. They choose the route along the contact line of rock and steep snow slope where they fixed 50 meters of rope. The final section to the summit was easy snow slope. At 5:30 p.m. they reached the summit. The poor weather continued. At 9:00 p.m. Otani decided to bivouac beside the large rock on the saddle between the summit and the junction to the west peak (6740 m). They went back to Camp 2 next day at 12:30.

The upper Keriya river basin where Chong Muztag is located was explored for the first time in 1898 by Captain H.H.P. Deasy, with the Survey of India. We sent two reconnaissance parties for exploring the approach route to Chong Muztag on May and September 1999. Hiroaki Kino and Hideki Inaba started their caravan from Polu

village. Polu is located 75 kilometers south of Keriya town. They went into the upper basin of Keriya river for the first time as foreigners since 1898. But they could not reach the intended Base Camp due to lack of grass for donkeys and cold weather. On September 1999, Shigeru Kodama who is a geographer explored the Karasai route. He followed the caravan route which Deasy traced in 1898. Kodama reached the northern foot of Chong Muztag after 10 days of donkey caravan from Karasai, upper village of Kyantokai.

Higher and Further in the Quest for Unknown

Jun Nakamura

1. A Caravan of 4 WD Vehicles

On July 24, 2000, the Kunlun expedition members whose average age was 63.5 years took a flight from Kansai airport and via Xian and Wulumuqi landed at Kashgar the next day. The first batch of air-cargo sent earlier was kept in the store of the Kashgar Mountaineering Association in Kashgar. After inspecting the equipment and material prepared by the Chinese agency, the party bought food items.

On July 27, the expedition left Kashgar with a caravan of six 4-WD jeeps and a cargo truck. We reached Yecheng the same day and stayed there overnight. As it was the last dinner at a hotel, everybody enjoyed dining and wining. In the mean time, each member vowed to stop alcohol from the following day. As a preventive measure against possible altitude sickness, everybody started taking Diamox pills (2 tablets a day; 1 each in the morning & evening) from that evening.

In the morning of July 28, we departed Yecheng and drove along the Xinzang Road towards the mountainous region. To get accustomed with the altitude, we got down well before reaching the Akazu pass (3300 m high) and walked to the pass for an hour. After the pass, we came across very bad road conditions. The road passed along the floor of a gorge flanked by the walls of steep cliffs on both sides. It was damaged and washed off here and there owing to a heavy downpour that took place some days ago. Thanks to the presence of army, who made temporary repair of the roads, our caravan could pass at last with great difficulty. After reaching an open meadow, situated at 170 km milestone of the Xinzang Road at 3170 m altitude, we pitched our tents for overnight stay.

The plan for the next day was to reach Serak pass (4900 m) and to travel about 100 km to the camp site situated at the right bank of the Yarkand River, which flows across the south of the Kunlun mountains. Just before crossing Serak pass, we

walked for some time to get acclimatized as we did the day before. Because of rather slow speed of the truck owing to bad road conditions, we reached the campsite 3 hours later than it was planned.

On July 30, the cargo truck was allowed to depart 3 hours earlier than our caravan of jeeps. We reached Heika pass (4950 m) and crossed it without getting down. We headed further east along the Xinzang Road. As the river crossed the road several times, all along the route, a skillful driving was required. Despite every care, however, the rear wheels of the cargo truck got buried into the riverbed. Thanks to the help from army once more, the truck was taken out of the river. It was the middle of the night when we could move further. That night, we stayed at a guesthouse of the No. 509 Road Administration Office situated at an altitude of 4750 m above sea level.

2. Setting Base Camp and Preparation for Peak Climbing

July 31 was a rest day meant for high altitude acclimatization. That morning, members got together and talked to each other openly and freely so as to release the cumulative stress and to reunite for the teamwork that lied ahead. Later, with the help of two jeeps, they went for searching Base Camp (BC) site. The BC site was fixed at 5240 m altitudes.

On August 1, everybody joined hands for shifting to BC. After crossing Kidai pass (5341 m), we drove off-road towards East. After driving for about 8 km, the cargo truck had to be stopped just before a river. The content of the truck was then transferred to jeeps and carried to BC located at 2 km across the river. This process was repeated several times until the load was completely transferred to BC.

Nine tents for the members were fixed around the central tent that contained medical supplies. A light snowfall accompanied with strong winds that started just after pitching the tents, made us feel the severity of weather in the Kunlun mountains.

August 2 was also a rest day during which care was taken of the environment around the base camp. The next day started with looking at the upper parts of the mountain and making the climbing route. From August 4, the Chinese staff helped us to haul the load towards C 1, which was set one day later.

On August 6, team A members pitched tents at C 1. The next day, they started making route along the glacier traverse and carrying up the load to the Advanced Camp (AC). Unfortunately, they ran out of time just before crossing the glacier. They just left the goods before the glacier and returned back to C 1. The following day, members from team B also joined for carrying up the load from C 1 to AC. Due to adverse weather conditions, however, they too could not cross the glacier. Instead, they climbed up the moraine on the left bank of the glacier, deposited the goods at a 6000 m high point and returned back to C 1. This particular action of team B had big

impact on the ascent of the peak by the attack team later.

3. Challenging the Virgin Peak

On August 9, all members gathered at BC for a rest and preparation for the summit attack scheduled to start the following day. The doctor made·an announcement on the members' health condition by which ten members were declared fit for high altitude climbing and ranked as class A. The leader explained the plan for the summit assault. After consulting the members, he made anew two teams (A and B), each of them with 4 persons, for climbing further.

On August 10, team A left BC and moved to C 1 close to the glacier being assisted by the Chinese staff. The next day, after making the route to AC, located at 6100 m, the team shifted the load and joined team B at C 1. Judging the weather cycle that night, the day for reaching the summit was shifted ahead by one day from the previous schedule.

Team A moved straight to AC on August 12, and set the camp there. Team B went to clear the temporary site at the left bank of the glacier in order to move the goods to AC. It happens that one of the 4 members from team B gave up climbing just before departure. For this reason, that task consumed unexpectedly long time for the remaining 3 persons. While en route to gorge, located directly below AC, team A could see team B further below on top of the glacier. Because of narrow time gap of about 2 hours between the two teams, team B was expected to reach AC in due time.

While waiting for arrival of team B, there was a sudden message through the transceiver. It said, "We are returning back to C 1". That was the voice of the leader of team B. As it was unbelievable, "What's the matter ? " murmured everybody. There was no point of spending time to collect detailed information. After some time, we saw Sugawa to enter AC. Now, there were 5 members in the team: Tanaka (climbing leader), Nakamura, Kamei, Sugawa and Yokokura (the TV reporter).

At 6:59 a.m. of August 13, the summit attack started. The AC was set at the junction of sides, covered by snow in one side but rock on the other, that belong to a level ridge. This ridge is situated to the west of the main ridge, which stretches southwards from the peak. Immediately after departure, we came across a steep-walled snow-clad torrent, which originates from the summit and continues down to the glacier. The fresh snow, that fell the day before, was about 10 cm thick. After carefully judging the conditions, the unstable and snow-clad face was traversed at one stroke.

We reached a ridge with abundant rock and snow. That was the one we observed before, from C 1, along the summit route. There we installed a signal pole with red flag. Because of the westerly dip of the snow-clad face, the summit seemed to be farther. At about 6200 m, we traversed about 100 m thick snowy face and headed

towards east. We moved to the rocky face, at the western ridge, that is connected to the central peak. Due to the soft and loose nature of the snow covering the face on the southern side, we made a slow progress.

At 12:15, we reached col at 6320 m. There, we installed a sign that would be of help in finding the way while descending down the ridge. More than 5 hours had passed after we left AC. Under fine, though slightly windy, weather conditions, we took food. Soon, we reached to a face that was 50 m below the top of the western ridge. There was a rock cliff with cornice to the left of us, while to the right was a snow face falling down to gorge, towards AC. Following the route in between, we climbed at a stroke and got atop the western ridge. From there, the main peak, shining with white snow, appeared just in front of our eyes. Under the foot was a gently sloping ridge that was connected to the col just below it.

At 2:30 p.m., at last, we reached the col situated just below the summit. The altimeter display showed 6470 m. A wide snow face connected to the uppermost part. Just another 50~60 m of climb was needed to reach the summit. There stood the peak lit by sunshine from the sinking west as if it was at the arm's stretch. Reaching there required a little patience. Disturbed by the snow sinking underfoot, we climbed further gaining height steadily.

At 4:15 p.m. of August 13, 2000, the attack team climbed atop the peak on the ridge of the rock face at the northern end. The peak was hidden under a thick cover of fog. From the peak, a narrow ridge continued for about 40 m along N-S direction while to the east was an overhanging snow scarp. Towards the west of the peak, a steep snow face led to the col stretching further towards the western ridge. On the top of the northern end was a rock wall that seemed falling down deeply into the fog.

At the top, Nakamura erected the ice ax to which the flags of Japan and China were fastened together with a pennant of the Kitayama no Kai. The members united their loud voice saying "Yo-Ho". GPS measurements, made soon thereafter, gave a reading of 6540 m, which was higher than that read in the Soviet map by 29 m.

At 4:30 p.m., with approach of the dusk, we started going down. Just after starting the descent along the western ridge towards AC, the fog got denser because of snowfall and wind. Footmarks of our hope began gradually fading out, and summit tension mounted further. We continued the descent holding our worries. The view from the fog openings widened gradually. A signal flag, installed earlier, flashed down below. A small tent at the AC could be confirmed towards a snow-clad face. We returned to AC safely at 7:20 p.m. That was the end of an intensive trek that lasted for 12 hours and 21 minutes since the time we left that morning and returned back to AC.

Next morning, the AC was dismantled. C 1 was dismantled in the morning of

August 15 with the help from the Chinese staff. In the afternoon, everybody returned back to BC. On August 17, after disbanding BC, we started the return trip through the mountainous region. After 2 days, we reached hotel in Yecheng. After a shower, the members of the expedition celebrated the success of the climb by drinking liquor and having a delicious food.

Epilog

It is a matter of common sense that good things occur together with bad things. For the Kunlun expedition, the result was surely good as it was a success in making the first ever ascent to KOR 65. If viewed from another angle, however, there have been several problems too.

It was already mentioned that expedition comprised senior citizens that were members of the alpine clubs of the olden times (junior high school to high school days). As retirees, the old-boys had reunited after several decades to realize their school-age dream for curiosities. As a climbing team with no record of experience or technical skills and no real knowledge of own capabilities, the decision of the members for reckless climb was a matter of criticism too.

Though initiated by un-experienced people, the process aimed at exchange of wisdom through joint efforts. So, let us not deny for possible shortcomings in way of thinking or judgment. On top of that, self-centered attitude of old-boys might have at times acted negatively.

Despite being immature, the expedition members worked out a plan and put it into practice steadily and finally they achieved a success. For them, it is not that important to report the "first ascent" as it is to describe about the process that led to the good result, which deserves an evaluation.

Rather, the intention here is to sum-up the process by highlighting the good points but pinpointing the bad points, with brevity, and explaining the underlying factors. We believe that the experience gained by the old-boys' expedition will be useful for senior citizens in their pursuit for active life.

The Chinese members acted together with us right from BC to C 1 and didn't spare most generous support and cooperation despite the fact that it was an ordinary Japanese expedition. For this, our thanks go to Mr. So (the president of Da Ban Cheng Travel Services, Xinjiang, China) and his employees. We are confident that our encounters will promote the friendly ties between Japan and China.

Wandering in the Farthest Northwestern Nepal —The Ascent of Nalakankar (6062 m)—

Tamotsu Ohnishi

Simikot, the headquater of Humla District of Karnali Zone, lies on the steep mountain slope 900 m above north side of Humla Karnali River. Recent progress of the air transportation between here and southern air terminals such as Nepalganj or Surkhet (Birendranagar), has changed this old small village into the important base town for the local ecoomy and for the tourists visit Mt. Kailas and Manasarowar Lake through Purang in Tibet (China), about 100 km upstream of the river.

On 3rd June, 2000, we, 12 Japanese and 4 Nepalese gathered at Simikot to explore and to climb Nalakankar Himal (6062 m), for the name of which our permission was allowed. The mountain exists in the border area of the farthest northwest Nepal. At first, we estimated it would take 3 weeks to get there from Simikot, including the important acclimatizing periods on the way. Unfortunately, our trek was forced to stop on the third day from Simikot, because of heavy rain continued for three days and we had to stay in the thick conifer forest along Chungmsa Khola. The violent current of the river caused some landslides and damaged the track along the river before reaching Sinjungma, where a few families are living in only two stone houses with tiny field. On 11th we arrived at Chumsa, an open valley after passing through the forest of silver birch in the ravine and enjoying to admire the abundant blue poppies (*Meconopsis grandis*) along the track.

At Chumsa (3920 m), we had the first scheduled stay for three days to acclimatize ourselves to the altitude of 5000 m. After crossing Nya La (4940 m) a few days ahead, it would become difficult to bring one down to the valley lower than 4000 m and from now on we have to live on the highland, constantly over 5000 m like as Tibetan high plain for more than four weeks. There were much snow remained on the peaks above 4500 m and all of Sherpas worked to open the way to Nya La for those three days. On 16th June, we crossed Nya La, after Camping a night on the lake side of Selima Tso. From the top of the pass, all the mountains surrounding us were not visible in the thick cloud and it was not possible to get a view of Namnani (Gurla Mandhata) which we had expected to see by the report of Hokkaido University's expedition in1963. Two days trek toward north along Talung Chu was a comfortable one and we reached the confluence of Takche Chu on 18th and stayed there for a few days to prepare our real exploring and climbing activities. Two aged members with two horses and a Sherpa started on 19th ahead of the main party to circuit around Tibetan passes, Lolung La (4953 m) and Lapche La (5018 m). Two days later, they

got a grand views of Namnani (7694 m) on the way north and Mt. Kailas (6638 m) far beyond Manasarowar Lake from the high hills on the border.

On 22nd, the Takche camp was moved to the high grass land just above Saja Khola (4712 m). First group of the main party, consist of 4 Japanese (Mizutani, Yanagihara, Akayama and me) and 2 Sharpas started next day to explore for a week the eastern border mountains of Changdhi Himal through Taisolu Khola. Other members stayed there and wandered near Lolung La and the lower part of Gyo Khola, walking about several high lakes and hills on the border.

Taisolu Khola is a north-easternmost source of Takche Chu. We followed a poor track along the shallow river bed for 2 and a half days and reached a frozen lake at the source of it, very near the vast mountain saddle to the source of Nin Khola, the northwestern tributary of Dojam Khola. Base camp was settled there, from where, toward our back 70 km due west, we could catch a fascinating figure of Namunani commanding the scenary of the lower valley. On 27th, we pitched a high camp (5738 m) on the snow plain of the southern divide, to climb a beautiful snow peak just front of us. Toward south, we obtained a view of a few splendidly glaciated peaks of six thousanders. These mountain range has been remained not surveyed and shown in blank on the Survey of India Map (62/F 15, 1967).

In the early mornning of 28th, we left the high camp at 5:00 am, and climbed up 5 pitches along the glacier to get west ridge, and got over the last 2 pitches of steep snow face, after a long struggle in deep snow on the West ridge leading to near the main summit. We stood on the top of Changwatang (6125 m) at 8:40. am. Mr. Akayama, 73 aged old climber, who had once joined Big White Peak (Lenpo Gang) Expedition 40 years ago, did quite a fine achievement. From the top, though the sky was unstable, we were able to identify the highest of Chandhi Himal, Kananu Pukari (6256 m, N 30 20 32/E 82 00 27) and Changla (6563 m, N 301811/E 82 07 44) far to the east. To the north and northwest, there are several peaks of 6000ers on the border along Taisolu Khola, but most of them are not worth climbing. On the contrary, peaks of the southern group surrounded by the glaciers of Ling Khola, are now still completely unexplored, and seemed to be more preferable by their alpine features than those on the northern divide. We hurridly rappeled down another route of the peak. After all the camps were dismantled, we descended to the river side camp of Taisolu Khola (4779 m) on the same day.

For a few days after that, we also wandered among the Tibetan pass to the north and stood on Lapche La (5018 m), and experienced intolerable long and solitary walk on the vast Tibetan wild, where dashing a herd of wild sheep often can be seen.

To Nalakankar (6062 m. Regulation Peak)

Our climbing permission was granted for Nalakankar, But ours was the first expedition since 1963. According to the Cimbing Regulation revised in 1989., Nalakankar is ranked "A" group, which means the expedition should be jointed with at least 3 Nepalese. Its height 6062 m is extreemly low in the Himalaya; and too much cost should be requested for so far distant transportation. These factors has staggered the worldwide mountaineers for nearly four decades. Recent years, a few guide book for trekkers to Mt. Kailas has been published, but almost all of them described nothing about the area north of Limi valley (Takche Chu) and the old route through the border ranges.

Wading in the freezing cold stream of Saja Khola, we advanced north and changed our course toward west along Gya Khola. We settled our base camp for climbing Nalakankar in the upper stream of a lake, (5250 m), now mostly dried up. Here, just in front of us, we faced to the gigantic east face of Namnani (7694 m, Gurla Mandhata), showing its formidable route, achieved in alpine style last Autumn (1999) by young Japanese climbers. From here, an easy one and a half days' walk bring one to the south shore of Manasarowar Lake through Nalakankar Bhanjyang (5514 m).

Climbing Nalakankar (6062 m, N 30 21 27, E 81 23 58 permission peak) was quite easy. On 6th of July, when some of the reconnnaisance party was finding route to its south col, they stood on the summit without using climbing ropes or any of other climbing gears, as there was free from snow and too easy the way was. Next day, with a climbing friend and two Sherpas, I enjoyed a direct ice route on the east face of southern peak, and all of us used to call this peak Nalakankar South peak. In fact, this South Peak (6024 m, N 30 21 15, E 81 24 20). is a neighbouring peak, only 0.7 km southeast of real Nalakankar (permission peak) and plausibly covered with more snow and ice. Other all members, including a few with slightly less climbing careers, were vividly joined the first ascent of the peak by its northern ridge route. Anyway, curiously enough "Nalakankar" in summer season, granted as the opened peak for foreign expedition jointed with Nepalese , was proved only one peak for sneakers style climbing is possible among entire Nepal Himalayan peaks.

After the climbs on Nalrakankar group, we turned for further south Takphu Himal (highest 6422 m, N 30 15 05, E 81 23 31). We left Gya Khola at a confluence of its southern fork, and climbed up to a vast high plateau with three beautiful lakes to the southwestern part. Although a long walk on the high land of over 5000 m was comfortable with a gentle breeze. The grand view to the entire Takphu Himal which previously expected to see was unfortunately hidden in the thin cloud above the snow

line. Crossed a pass on the eastern foot of Til Kang (6369 m, N 30 16 27, E 81 24 16), we descended to Halji, the largest village of Limi valley and we reached there on 12th July.

For ten days were spent for reconnaissance to the highest peak of Takphu Himal (6422 m). The attempt to the peak by four members was prevented by huge ice cliffs of hanging glaciers. We enjoyed the most pleasant days to visit three Tibetan villages of Limi valley, Halji, Jang and Til. These villagers are unexpectedly modernized in recent living life. We were astonished when we were invited into their clean rooms of their house and welcomed with tea and plenty of chocolates! not with buttered tea and tsampa. However, we were impressed enough by their traditional buddhist faith, their clean appearance and their high manners compared with Tibetans living in other part of northern part of Nepal.

We reached Hilsa on 22nd July, by the steep mountain path along the Hulma Karnali gorge. Here is Nepalese border check post, but we could not find any Nepalese official or policeman. We learned that all staffs were now retreated to Muchu, about 40 km down the river toward Simikot. Only except was a Nepalese restaurant for trekkers. Most of our Nepalese members enjoyed a brief visit to Manasarwar Lake and returned with a bottle of sacred water and fruit and vegetable they bought at Purang. Meanwhile, Japanese members stayed there enjoying a holiday. It was very interesting to see that Chinese government staffs usually took their meals and drank beers merrily in Nepalese restaurant coming across the border bridge.

Tottering steps to Simikot started on 24th and it took five days from Hilsa, via Yari, Muchu, Yarban and Toling. At Simikot, on 28th fortunately we took an afternoon flight to Nepalganj and returned Kathmandu within the same day.

Quest for the Source of the Mekong River —Notes on a Controversial Issue on the True Source—

Tamotsu Nakamura

"……. Then I took an altitude reading (4,975 meters, or 16,322 feet); and, most important of course, the exact latitude and longitude.

Lat. 33°16′534 N.

Long. 93°52′929 E

On the surface these numbers were the entire purpose of our venture, the figures necessary to be able to pinpoint the source on any map of the world. This was what geography and exploration were all about. Just a few numbers, yet what a struggle

to record them—how much bloodshed, tears, and sweat so that what had been spelled out in 1866 as the goal of the Mekong Committee of the French Societe de Geographie could at long last be fulfilled. Suddenly it became important to record the day, September 17, 1994. Twenty-five years after man had set foot on the moon, here we were recording for the first time the source of the third-largest river of Asia."

This is the mention of Dr. Michel Peissel, a leader of Franco-British Expedition to the source of Mekong River that appears in his book, *THE LAST BARBARIAN S—The Discovery of the Source of the Mekong in Tibet* (Henry Holt, New York 1997). Needless to say, he is one of the world's foremost Tibet experts. When I read it, however, I had a feeling that something was not correct with Dr. Peissel's claim since I acknowledged that Japan-Sino Joint party had reached another source of Mekong a couple of days earlier than the Peissel's party did. The issue seems controversial. It would be worthwhile, therefore, to look into a chronicle of the exploration of the upper Mekong and to follow the footsteps of the current expeditions to have searched the source of Mekong.

A brief history of the exploration—1866 to 1894

In succession to the death of Henri Mouhot, a discoverer of Angkor Wat, who had first led a French expedition to the Upper Mekong in 1866, Doudart de Lagree of French Navy took over Mouhot's post. The newly appointed leader crossed the border to Yunnan Province of China and further continued their march northeastward to the Upper Yangtze on the way to head for Tali Fu together with Francis Garnier, a famous explorer of Northwest Yunnan. The same tragedy fell on Lagree too. He died of a disease at Hui-tse in 1868, while Garnier could arrive at Tali Fu being helped by a missionary, M. Leiguilcher.

1868 was a notable year for the chronicle. In this year no less than three attempts from three points were made to penetrate the obscurities of the unknown region. One was by Lagree's party which had started from Saigon; a second was by Mr. T.T. Cooper from Sichuan to East Tibet; the third by an English party of Major Sladen from Bhamo (Burma) on the Irrawaddy river. The great effort of the Lagree's expedition had been the exploration of the Mekong, which they ascended and surveyed from the delta, as far as a point of latitude 22°00′. From there they traveled through Southern Yunnan and reached the provincial capital, Yunnan Fu (Kunming) at the end of 1867, the first time in my knowledge that any European traveler (not being a missionary priest) since Marco Polo visited in 1283.

In July 1890, the French Government entrusted Dutreuil de Rhins, who had been a distinguished explorer to Congo, Indo-China and Central Asia as well, with a

scientific mission to Upper Asia. In October of the same year Fernand Grenard was appointed to the mission. The small party calmly left Paris on February 19, 1891. It was a start of the long journey over three years across the Caucasus, Russian Turkestan, Chinese Turkestan, Karakoram Pass to Ladakh, again back to Chinese Turkestan, Taklimakan Desert, Kun Lun and then desolate Changtang high plateau towards Lhasa of their destination from the northwest. Three months of the uninviting hardship to struggle against a desolate wilderness of the northern Tibet brought the travelers to Nam Co Lake (Tengri Nor), and here they were but a week's march to Lhasa. After Bonvalot, they were the first Europeans to touch the shores of the lake since the day of Huc. However the officials of the Lhasa deputation stopped them to further proceed to Lhasa. So they turned northward as Bower, Littledale, Rockhill, and Bonvalot had to turn, and as far as Nakchu-ka they were following the usual Mongol pilgrim and caravan route bound for the Chinese frontier at Sining Fu (Xining).

In early March of 1894, from Nagchu de Rhins and Grenard left the direct pilgrim road and struck into the northern trade route between Lhasa and Batang, eastward. But subsequently they made a long detour to regain the direct route to Xining, on the way of which they traveled through the source of the Mekong River. They explored a part of the upper Salween River and, having crossed Tangla range, they found themselves on a marshy plateau crossed by the Dam Chu, the longest branch of the Yangtze River. They made what was, from the geographical point of view, the most interesting discovery in their journey, but it resulted in the misfortune of a fatal accident that de Rhins was brutally murdered by local Khambas near Jyekundo.

On April 8 they entered from the Yangtze River basin into the Mekong River basin. Grenard described "At nine o'clock in the morning, we had the satisfaction, in crossing the Zanag Lungmug La, to achieve one of the objects which we had set ourselves to accomplish. From this pass, which is 16,760 feet high, runs the Lungmug Chu, the most westernly of the source of the Mekong. The joys of discovery, which are enough to make any good explorer forget the sufferings of a journey were increased two-fold for us by the fact that this humble stream of water, now motionless under ice, but soon to flow over mountains and plains to French territory, ..." in his book TIBET; The Country and Inhabitants (Hutchinson, London 1904). They followed the Lungmug Chu down to Zanag (Current Chinese name: Zanaqu river), one of the two main headwaters of the Upper Mekong and rather hastily congratulated themselves for having discovered the source of the great river. The head of Lungmug Chu which, they claimed, they had reached first was not exactly a pinpoint of the real source of the Mekong. This is shown in the attached sketch map which is

drawn being based on the topographical maps of both the Chinese Peoples Liberation Army (1:100,000) and the Russian mapping agency (1:200,000).

Franco-British expedition—1994

"One of the last great geographical mysteries of the world solved"—THE GEOGRAPHICAL , The magazine of The Royal Geographical Society. Dr. Peissel wrote in his book that the tacit approval and publicity of the Royal Geographical Society convinced the skeptics at last who had been a suspicious about the performance of the Franco-British party. The following is the Record of *THE GEOGRAPHICAL JOURNAL, Vol.161 Part 2, July 1995.*

The source of the Mekong identified

Explorer—Tibetologist Michel Peissel FRGS accompanied by DR. Jaques Falck and the Hon. Sebastian Guinness has just returned from China after having located and surveyed the principal source of the Mekong River. They reached the source on the 17th September, 1994 at the head of the Rup-sa pass at an elevation of 4,975 metres. The Rup-sa pass is on a saddle which links the Drug-di and Sag-ri ranges which frame the last forty kirometres of the course of the Dza-nak (Current Chinese name: Zaqu river), or Black-Dza as the upper Mekong is called in Tibet.

The Rup-sa pass marks the watershed between the Mekong and the Yangste River system. The exact location of the source is at latitude 33°16′N; longitude 93°52′E.

Over the past century a dozen expeditions failed to reach source of the Mekong. 1894 the French explorer Dutireuil de Rhins was assassinated by Tibetan Khambas just two months after having erroneously recorded the source of the Mekong to be that of the Lung-Mog (Lungmug of Grenard) river, a tributary on the right bank of the Dza-nak.

To the best of our knowledge there is no other record or claim of the source having been reached by other foreigners (underlined by T. Nakamura). Of the early explorers who travelled the region, Kozloff, Teichman and Rockhill never reached the source. The reasons for this being both political and geographical.

The source of the Mekong is located in the very inner heartland of the highest and most inhospitable portion of the central Asian highlands, hundreds of kilometres from any settlement. The region was part of the far-flung realm of the kings of Nangchen, the home of 200,000 Khamba nomads who still live today a life very similar to that of their earliest ancestors. Nomadic mounted warriors, these Nangchen Khambas are divided into 25 semi-independent tribes who ferociously opposed the Chinese takeover, in the same manner in which they had, in the past, opposed all those who attempted to penetrate their territory. To complicate matters

further they were never under the jurisdiction of the Dalai Lamas. Most of these nomads still today escape Chinese control, as a result the Chinese Government has been reluctant to authorize foreigners to travel into southern Qinghai.

Last year (1994), as part of a two-year study of Tibetan horse, Dr. Peissel was exceptionally allowed into western Nangchen where he identified a new breed of hot-blooded horse with enlarged lungs. I was in continuation of this research that he was allowed to travel to the source of the Mekong in 1994 under the auspices of the Qinghai Mountaineering Association.

THE GEOGRAPHICAL, April 1995 introduced that Peissel acknowledges the possibility that Chinese Military may have recorded the true source of the Mekong. "Alas any such information, if it exists, was never published." And this, he say, would be the necessary requirement for them to claim its discovery.

Regarding this question Dr. Peissel himself mentions in his book only what he heard from a staff of the travel office of the Chinese Academy of Science in Zadoi, who had organized the Japanese party composed of 6 members from the Agricultural University of Tokyo, under the leadership of Mr. Junichi Nakanishi assisted by Mr. Masayuki Kitamura , say, Peissel was told by the staff that the Japanese party had not been looking for the source of the Mekong after all. Dr. Peissel should have contacted either the Chinese Academy of Science or the Agricultutral University of Tokyo in order to obtain their record of having reached the real source of the Mekong just five days earlier than Franco-British party stood on the head of Rup-sa pass.

Japan-Sino Joint Expedition—1994

We should say that it was merely a coincidence that the two expeditions entered simultaneously into the source of the Mekong in September 1994 with the same mission to search and survey the real source of the Mekong.

According to the latest data being issued by the Chinese Academy of Science, the name of the Mekong River varies in the four stages as under:

(1) Mekong……The lower stream in Myanmar, Laos, Cambodia, Thailand and Vietnam.

(2) Lancang Jiang ……The middle and lower stream from Qamdo (Chamdo) to the border between China and Myanmar/Laos.

(3) Zaqu (Dza Chu) ……The upper stream—the Upper Mekong—from Ganasongdou to Qamdo.

(4) Zayaqu (Dza Kar) ……The upper stream of the northernmost source to Ganasongdou which is a confluence with

Zanaqu.

(5) Zanaqu (Dza Nak)·····The upper stream of the westernmost source to Ganasongdou.

Here is raised a question which of Zayaqu or Zanaqu should be recognized as the true source of the Mekong if the only one source is selected to be more authentic from a geographical point of view. It is understood, however, that this question has been resolved by the survey of the Japan-Sino Joint party in 1994 and the other two parties in 1999, both of which were expedited separately in collaboration with the Chinese Academy of Science. The report on the Japanese part is summarized as under.

Japan-Sino Joint expedition of the Agricultural University and the Chinese Academy of Science, six Japanese and four Chinese members departed from Sining on August 20, 1994 and arrived at Zadoi via Yushu (Jyekundo) on August 25. Zadoi is the remotest county of the Qinghai Province where is the source of the Mekong. On the following day they drove from Zadoi village (4,100m) to Moyun (4,539m), the last settlement on the right bank of Zanaqu that was a starting point of the caravan with yaks and horses.

September 2 to 4: Moyun to Ganasongdou, a confluence of Zayaqu and Zanaqu where they measured a discharge (the flowing water volume) of the both streams. A discharge of Zayaqu was proved five times of that of Zanaqu accordingly. With the result they judged Zayaqu must be the real source of the Mekong and chose the way up to search the watershed of Zayaqu.

September 5 to 12: Caravan and survey from Ganasongdou to Lasagongma. On September 12 they discovered the geographical source which was flowing out from a glacier. The location is in a latitude 33°42′41″and longitude 94°41′37″ (recorded from GPS) at 5,160m above sea level.

September 13 to 17: Climbing a peak of 5632m, the highest in the vicinity and moving to one of the legendary sources, Zaxiqiwa Lake in a latitude 33°34′15″ and longitude 94°18′14″ at 4,650m.

September 18 to 20: Searching the other legendary ("spiritual") source, a sacred mountain of Zanarigen in a latitude 33°19′20″ and longitude 94°13′40″ at 5,550m 17 km north of Moyun, and upon returning to Moyun their field works were completed.

They specifies two categories of the source of the Mekong.

1. Zayaqu: A. Geographical source·····Lasagongma
   B. Legendary source·····Zaxiqiwa Lake
2. Zanaqu: A. Geographical source·····Chajialima Mountain
   B. Legendary source·····Zanarigen and other two places

(Notes—It cannot be confirmed whether Chajialima Mountain corresponds to

Rup-sa pass of Dr. Peissel.)

On November 9 the Xinhua (the national press agency of China) released the news that the expedition team of the Chinese Academy of Science and the Agricultural University of Tokyo surveyed Zayaqu, a left triburary of Zaqu in early September, and the experts of the both institutions confirmed a head-spring of Zayaqu to be the source of Lancang Jiang (Mekong River).

The following is an abstract in English version of *GEOGRAPHICAL RESEARCH, Vol.14 No.1, March 1995* issued in China on an outcome of the 1994 Japan-Sino Joint expedition.

The Source of Mekong River

Jin Chang-xing

(*Institute of Geography, Chinese Academy of Science and State Planning Commission of People's Republic of China, Beijing* 100101)

Zhou Chang-Jin

(*Commission for Integrated Survey of Natural Resources, Chinese Academy of Science, Beijing* 100101)

Abstract

By a field survey it is decided that the source of Mekong River is the Zayaqu river which starts from the end of a small glacier on the Lasagongma Mountain in Zadoi County, Qinghai Province. The altitude of the source is 5,167 m and the location is 94°41′35″ E and 33°44′13″ N.

Mekong River is the 7th biggest river in Asia and the 12th biggest river in the world. From the source to its first bigger tributary point, Ganasongdou (94°36′40″ E and 33°12′33″ N), Zayaqu river has a length of 93.9 km, an area of 2,560 k m^2, a discharge of 54.9 m^3/s , a width of 40.0 m, a mean depth of 0.726 m and a mean flowing speed of 1.89 m/s which was measured on September 4, 1994. From Ganasongdou to Qamdo in Tibet Autonomous Region, the river is called Zaqu River which has a length of 518 km . Down from Qamdo to the outlet of the river inside China, the river is called Lancang Jiang River which has an area of 164,766 km^2, a length of 2,354 km and a mean annual discharge of 2,180 m^3/s.

The research report also describes the figures of Zanaqu having been measured at the same time for comparison. From the source to Ganasongdou, Zanaqu has a length of 90.7 km, an area of 1,983 km^2, a discharge of 10.6 m^3/s, a width of 30.0 m, a mean depth of 0.33 m and a mean flowing speed of 1,067 m. This indicates that Zayaqu

should be the principal tributary of the Mekong in all respects.

[Writer's note]

Differences are found between the Japanese record and the above Chinese record. The difference in an altitude is negligible but the difference in location is too large and the Chinese figure cannot be justified because the Chinese members except a interpreter did not go to the headwater.

In the other report of the Chinese Academy of Science, the Chinese part has turned down the Dr. Peissel's claim to have first discovered the source of the Mekong at Rup-sa pass of Zanaqu, as it is not scientific.

Two Chinese Expeditions—1999

The Chinese national geographical magazine *GEOGRAPHY, October 1999* reported an outcome of the two parties having conducted extensively a survey of the source of the Mekong in June to July of 1999. A chapter sub-titled 【Two expeditions going upstream the source have triggered a controversy】 opens with the following writing. "Too many opinions prevailing on the source of the Mekong have had the scientists and explorers feel, day by day, an urgency and importance to go up the source of Lancang Jiang (Mekong) and consider that the source must be searched and identified by the Chinese themselves." Both the parties were composed chiefly of the Chinese Academy of Science.

A. Dexiang Party: Large expedition sponsored by Dexiang Business Group of Tianjin. Professor Guan-Zhihua led the team of eight scientists accompanied by several press-men.

B. Dr. Liu-Shaochuang Party: Small team though supported by several institutions. Actual work was conducted only by Dr. Liu-Shaochuang. He was belonging to the Remote Sensing Office of the Chinese Academy of Science.

The two parties came to the different conclusions that drew an attention of the mass media, and consequently, if the authentic source is to be only one, an argument has inevitably carried on. Dexiang Party concluded the head (5,224m) of Lasagongma, a stream flowing out from a glacier on the eastern slope of Guozongmucha Shan (5,514m) to be the real source. The location is a longitude 94°41′44″ and latitude 33°42′31″. They installed here a stone monument to indicate "The Source of Mekong". In the other hand, Dr. Liu-Shaochuang declared a stream from a snowfield of Jifu Shan (5,552m) to be the source that is just 6km north of the Dexiang's source. The location is a longitude 94°41′12″ and latitude 33°45′35″.

Dr. Liu-Shaochuang's Survey

According to *GEOGRAPHY, October 1999*, Dr. Liu focused his survey points mainly to the following three places.

(1) Zaxiqiwa Lake (Legendary source)

Zaxiqiwa is a most popular legendary source of the Mekong that local Tibetans have long believed. It locates in an area of small lakes and marshes of the upper tributary which flows into Zayaqu from northwest at a longitude 94°26′00″ and latitude 33°27′20″. A length of the longest tributary of Zaxiqiwa from Ganasongdou to the head is 76.7 m whilst that of the main stream of Zayaqu from Ganasongdou to Jifu Shan is 101.5 km.

(2) Lasagongma (Geographical source)

His field survey decided the source of Lasagongma to be in a glacier end (5,160 m) at a longitude 94°41′37″ and latitude 33°42′39″. These figures are almost similar to those of The Agricultural University of Tokyo in 1994. The doctor refers to the lengths of the two streams of Zayaqu from Ganasongdou to Lasagongma (99.4 km) and Jifu Shan (101.5 km).

(3) Jifu Shan (Geographical source)

The two upper streams of Zayaqu, of which one is Gaoshanxigu being origjinated in Lasagongma and the other is Gaodepu from Jifu Shan join at Yeyongsongdou. The doctor surveyed lengths of the both streams. The former was 21.5 km and the latter was 23.6 km. He measured twice a discharge at the junction, but no differences to take note had been observed. He turns his attention to the fact that a stream of Gaodepu flows northward following the same flowing direction of Zanaqu. From the points of view of the length and flowing direction, Dr. Liu squeezed Jifu Shan to the true source of the Mekong. He measured also a length, an area of the basin and a discharge of Zanaqu and compared with Zayaqu. The result has convinced him that the source of the Mekong should not be in Zanaqu but in Zayaqu.

Dexiang Party's Survey

This party fully equipped with the newest model of tools and instruments carried out the most scientific survey in a large scale. For the purpose of calculating river lengths and areas of water collecting basin, they took advantages of not only topographical maps of 1:100,000 but also TM Satellite Pictures. The collected data were analyzed and duly corrected by a computer. They employed a special instrument in order to measure a discharge and flowing velocity of river water. Needless to say,

they used GPS, GIS (Geographic Information System) and SRS. An official report written by the three members of Commission for Integrated Survey of Natural Resources, China Academy of Science in 2000 is available. The title is "Identification of the Source of Lancang Jiang (Mekong River)", a summary of which is introduced herein as under:

1. Criteria for evaluation

In general the following factors are taken into accounts to decide the river source.

—River length
—Discharge
—Area of basin
—Legend
—Direction of stream
—Geological history

Among the above, a river length is the most important and has a first priority. The sources of the major rivers of China such as Chang Jiang (Yangtze River), Huang He (Yellow River) and Yalung Tsangpo-Brahmaputra were identified in accordance with the said criteria. In case no substantial difference is found in the river length and discharge, etc. a consideration for solution could be given to a similarity of the flowing directions.

2. Evaluation on Zayaqu and Zanaqu

The report quotes first a comparison of Zayaqu and Zanaqu surveyed by Japan-Sino Joint expedition in September 1994 and then describes Dexiang Party's survey that was conducted at Ganasongdou, a confluence of the both tributaries on July 12, 1999.

The results of Dexiang Party are:

	Zayaqu	Zanaqu
River width ·····	62.0 m	51.0 m
Max. depth of water ·····	1.30 m	0.65 m
Mean depth of water ·····	0.73 m	0.38 m
Velocity of river flow		
Max. velocity ·····	4.89 m/s	2.52 m/s
Mean velocity ·····	2.63 m/s	1.81 m/s
Discharge ·····	119.0 m^3/s	35.1 m^3/s

(The velocity of river flow was measured by a flow meter of propeller type, Model LS25-3A.)

A discharge of Zayaqu was 3.39 times of that of Zanaqu.

Meanwhile, an analysis of TM Satellite Photos of September 1998 and a

calculation by computers after correction present the following figures.

	Zayaqu	Zanaqu
River length ·····	97.83 km	92.96 km
Area of basin ·····	2,457.9 km^2	1,999.3 km^2

The above figures are self-explanatory and provide an evidence in all respects to claim that Zayaqu is the principal tributary going up toward the source of the Mekong.

3. Identification of the true source

The main stream of Zayaqu further separates into two tributaries of Gaoshanguxi and Gaodepu at Yeyongsongdou. The greatest concern of Dexiang party was to confirm which place of Guozongmucha Shan or Jifu Shan is duly identified to the true source of the Mekong. With an utmost care they calculated lengths and areas of basin in details and measured a discharge of the both streams at Yeyongsongdou on September 14, 1999. The result contradicted what Dr. Liu-Shaochang had surveyed.

	Gaoshanguxi		Gaodepu	
	Dexiang	Dr. Liu	Dexiang	Dr. Liu
River length ·····	22.59 km	21.5 km	21.62 km	23.6 km
Area of basin·····	97.25 km^2		78.83 km^2	
Glacier·····	2.78 km^2		0.60 km^2	
Discharge ·····	9.55 m^3/s		7.94 m^3/s	

The above figures clearly indicate that Gaoshanguxi has a longer stream than Gaodepu (1.04:1), larger area of basin (1.23:1) and larger glacier (4.63:1) and accordingly an annual discharge from the basin of Gaoshanxigu would inevitably be greater. Another point to be noted is the fact that the glacier of Jifu Shan is distributed chiefly in the side of Yangtze River basin and melting water from the glacier naturally flows down to Yangtze River.

In conclusion, Dexiang Party of Professor Guan-Zhihua has recognized Guozongmucha Shan to be the real source of the Mekong. Melting water from a glacier is being supplied to the source of the Mekong. An area of the glacier to cover is 0.67 km^2. The geographical location is a longitude 94°41′44″ and latitude 33°41′44″ and at an altitude of 5224. From the glacier there a humble and narrow stream gathers to Lasagongma and then flows down to Gaoshanguxi/Zayaqu.

Who should decide the source of the Mekong?

"It would draw a widespread attention to the source of the Mekong that the two parties of the China Academy of Science have brought up different survey results.", the *GEOGRAPHY, October 1999* emphasizes.

It comments in continuation that the leaders of the both expeditions have

expressed that the decision must have a strictly scientific basis and the relevant arguments should be welcome.

The writer feels, however, that the Dexiang Party's claim is more convincing as their survey was conducted more widely and in a more scientific method as abovementioned. The writer is also of the opinion that the true source of the Mekong must locate at the point having been identified by Dexiang Party in Lasagongma Creek of the upper Zayaqu in 1999 and that Tokyo University of Agriculture first discovered and reached the true source in 1999. The writer referred whole the story to a great expert of river rafting, Mr. Pete Winn of Earth Science Expeditions (NPO organization) in Colorado with a view to have his comment and assessment. He kindly appreciates the writer's study and has taken a trouble to confirm the relevant fact through his channel. The following is a summary of the conclusion incorporating Mr. Winn's opinion and judgement.

"By international geographic convention, the source of a river is the furthest source of water from the mouth of river, typically a spring or glacier. The agency of the country responsible for official surveys makes the final decision regarding geographic sources of rivers within its boundaries.

The geographic source of the Mekong River (Langcang Jiang) was officially recognized by the Commission for Integrated Survey of Natural Resources of the Chinese Academy of Sciences in October 1999 as being located at an altitude of 5,224 meters (17,135 feet) at the foot of the glacier that discharges into Lasagongma Creek on the north side of Guosongmucha Mountain (5,514 meters or 18,086 feet), 94°41′44″E longitude and 33°42′31″N latitude. The actual survey was conducted in July 1999 by the team of the Chinese Academy of Sciences under the sponsorship of Dexiang Business Group of Tainjin.

A special attention must be drawn, however, to the fact that the above geographic source had already been first discovered and reached by a Japan-China Joint party to the nearest point on the 12th September 1994, then due to conflicts with another Chinese survey, the source was more precisely located by a Chinese team."

8,000 m 峰登頂者 110 人に聞く

高所登山—体力と順化に関するアンケート（中間報告）

高所登山研究委員会　山本正嘉

1990 年以降に 8,000 m 峰に登頂した日本人登山者 202 人のうちで，住所のわかる 156 人にアンケート用紙を郵送し，110 人の方から回答を得た（回収率は 70.5%）．質問したのは，高所登山を行う上での身体に関する問題（高所順化，基礎体力ほか）についてである．

回答者のうち男性は 101 人，女性は 9 人だった．年代は，20 歳代が 12 人，30 歳代が 47 人，40 歳代が 26 人，50 歳代が 15 人，60 歳代が 9 人，70 歳代が 1 人だった．集計は，男女，年齢の区別をせずに行った．

1.　身体的特性

○年　齢：41.3±10.8（23〜70）歳……（注）平均値±標準偏差（最小値〜最高値）を表す，本稿では以下これと同じ表示形式を用いる．
○身　長：169.3±7.1（151〜185）cm
○体　重：64.0±7.0（43〜83）kg
○ＢＭＩ：22.3±1.8（17.9〜27.7）

＊身長と体重は，平均値でみると日本人の標準値とほぼ同じである．またBMI（体重を身長の 2 乗で割った値で，肥満度を表す）は，健康にとって理想値とされる 22.0 に近く，中肉中背の体格をしている．

2.　登山歴

○登山の開始年齢：18.8±4.8（8〜39）歳
○高所登山の開始年齢：27.0±8.0（19〜55）歳
○8,000 m 峰の登頂歴：
回答者 110 名のうち，無酸素登頂の経験者は 47 名（43%）だった．
・酸素使用，無酸素を合わせたトータルの登頂回数：1.8±1.4（1〜6）回
1 回：66 人，2 回：19 人，3 回：6 人，4 回：5 人，5 回：6 人，6 回：4 人
・無酸素登頂の回数：0.8±1.2（0〜6）回
1 回：31 人，2 回：4 人，3 回：4 人，4 回：5 人，5 回：1 人，6 回：1 人

＊無酸素登頂の経験者は全体の40%強である．8,000 m峰の登頂回数は，トータルの回数でみても1〜2回，無酸素登頂になると1回だけという人が圧倒的に多かった．したがって，酸素を使う・使わないに関係なく，8,000 m峰の登頂について豊富な経験をもとに語れる人はきわめて少ないといえよう．

3. 高所登山に必要な基礎体力

登山に必要な基礎体力を，誰にでもわかるような指標で表すことは難しいと思うが，ここでは8,000 m峰の登山をするにあたって最低限必要な基礎体力について，日本の山を登る能力におきかえて尋ねてみた．

○1,000 m級の低山で，標高差1,000 mを何時間で登れる能力が必要か
2.0±0.7（1.0〜5.0）時間（回答者：54人）
○無雪期の富士山で，5合目〜頂上間を何時間で登れる能力が必要か
3.2±0.8（2.0〜5.0）時間（回答者：56人）

＊低山（酸素が十分にある環境）では1,000 mを2時間で，富士山（酸素が不十分な環境）では5合目から頂上まで3時間程度で登れることが必要，という回答だった．1時間当たりの登高能力に直すと，前者は500 m，後者は450 m程度となる．ただし，このような数値では計れないと指摘した人もいた．

○高所登山に効果的だった体力トレーニングの種目とその評価（5段階）について尋ねた．
回答者は83人．最も多かったのは「ランニング」（LSD，ジョギング，マラソンレースまで多様）で49人（59%，評価は4.1），次いで「実際の登山・クライミング」（週末のハイキング，富士登山，カモシカ登山など多様）で41人（49%，評価は4.4），両者の折衷である「ランニング登山」も20人（24%，評価は4.2）と目立った．その他，「自転車」が21人（25%，評価は3.7），「筋トレ」が11人（13%，評価は3.9），「階段昇降」が9人（11%，評価は4.0），「水泳」が9人（11%，評価は3.9），など．

○その他トレーニングに関して心がけていること，初心者へのアドバイスなど
→省略

4. 低圧室，富士登山，プレ登山の効果

○本番の登山を始める前に，事前の高所順化トレーニングとして，①低圧室，②富士登山，③プレ登山（またはトレッキング）をしたことがある人に，効果のあるなしを尋ねた（回答者数は①が45人，②が90人，③が68人）．

	①低圧室	②富士登山	③プレ登山	
あると思う	15.6%	46.1%	63.2%	肯定的評価
やり方によってはあると思う	46.7	35.2	27.9	
どちらともいえない	28.9	11.0	5.9	
ないと思う	4.4	4.4	1.5	
わからない	4.4	3.3	1.5	

＊①，②，③とも「効果がない」とした人は少なかった．ただし，肯定的評価（「ある」＋「やり方によってはある」）をした人は，①が 62%，②が 81%，③が 91% で，①→②→③となるほど肯定的評価が高くなった．また「ある」と答えた人は，①＜②＜③で，「やり方によってはある」と答えた人は，①＞②＞③だった．つまり順化の効果は，①→②→③となるほど確実性が高く，③→②→①となるほどやり方のよしあしに依存することが窺える．

○低圧室，富士登山，プレ登山について，効果的なやり方を尋ねた．

①低圧室

きわめて多種多様な回答があったが，身体的な順化を求めるならば，入室の期間や時間を長く，また回数も多くすべき，という点で共通点が見られた．ただしこの条件を満たさなくても（たとえば 1 回のみの入室であっても），高所を体験したという心理的な効果に大きな意義がある，とした人も多かった．

②富士登山

高所順化が獲得できる，という点では肯定的な意見が多かった．しかし実際のやり方となると，頂上で宿泊するか否か，遠征の直前に登るか否か，登高速度を速くするか否か，ザックを重くするか否か，冬富士登山の賛否，などの点で正反対の対立意見があり，方法論は確立していないことを窺わせた．その他，頂上で宿泊することの環境問題を指摘したものがあった．

③プレ登山

BC までのキャラバン中，および BC 到着直後に高山病を起こさないために行うものと位置づけている人が多かった．また，疲労を残さないためにハードなプレ登山は避けるべき，とした人も多かった．ただし具体的な実施方法については，高度は 4,000～7,000 m，登山期間は 3～4 日から 1 カ月，休養期間は 2～3 日から 1 カ月と非常に幅広い回答があり，富士登山と同様方法論は確立していないことが窺えた．

5. 高所で身体を上手に扱う技術

○「行動中」に，高度障害や行動能力低下を防ぐために留意しているポイントを尋ねた．

回答者は 94 人．「ゆっくり歩く」といった趣旨の答えが 54 人（57%）で最も多かっ

た．続いて「水分補給」が 43 人（46%），「呼吸法に気をつける」が 31 人（33%）となった．その他，多種多様．

○「生活中」に，高度障害や行動能力低下を防ぐために留意しているポイントを尋ねた．回答者は 98 人．「水分補給を多くする」が 51 人（52%）で最も多く，次いで「呼吸法に気をつける」が 29 人（30%）だった．その他，多種多様．

○超高所に行くと食欲が落ちるが，このような状況でも食べ（飲み）やすい食料・飲料を尋ねた．

→省略

6. 高所に順化したことをどうやって判断しているか

○ある高度に順化できたことをどうやって判断しているかを尋ねた．
回答者は 102 人．最も多かったのは「頭痛の消失」で 42 人（41%）だった．高山病の医学的な定義も頭痛を第一義としているので，この観点からも妥当な考え方といえる．続いて「食欲の増加」が 40 人（39%），「登高能力の改善」が 26 人（25%），「よく眠れるようになる」が 17 人（17%）．起床時の心拍数やパルスオキシメーターの値といった，客観的な指標を参考にしている人も多かった．その他，多種多様．

7. パルスオキシメーター（注 1）と AMS スコア（注 2）

高山病や高所順化の程度を把握するために，最近普及しつつあるパルスオキシメーターと AMS スコア（急性高山病自己判定表）について，使用経験や使用しての感想を尋ねた（トレッキングの添乗員等で他の人に使用させた人にも書いてもらった）．

○使用経験

	パルスオキシメーター	AMS スコア
使ったことがある	85.0%	28.7%
知っているが使ったことはない	13.1	25.7
このような方法があること自体を知らない	1.9	45.6

○使用しての感想

	パルスオキシメーター	AMS スコア	
有効と思う	37.0%	37.5%	肯定的評価
使い方によっては有効と思う	42.4	37.5	

どちらともいえない	14.1%	15.6%
あまり有効ではない	2.2	6.3
わからない	4.3	3.1

＊パルスオキシメーターの認知度はきわめて高い（98%）が，AMS スコアは知らない人が半数近く（46%）いた．しかし両者とも，利用したことがある人の間では肯定的評価（「有効」+「使い方によっては有効」）が 75〜80% を占めており，有効性は高いと考えられる．AMS スコアは，高価な機器は必要とせず，記録紙だけがあればよいので，一度は試してみるとよいだろう．

○パルスオキシメーター，AMS スコアの有効な利用法や，その他のコメントを記入してもらった．

→省略

（注 1） パルスオキシメーター：体内の酸素不足の程度を測定するために開発された機器で，指先または耳たぶをクリップではさむだけで，心拍数と動脈血中の酸素飽和度（SpO_2）がわかる．この数値を高度順化の判定に利用する．

（注 2） AMS スコア：高山病（AMS）の重症度を自己判断するために作成され，国際的に合意されたテストである．頭痛，吐き気，疲労感といった自覚症状を点数化するだけなので，簡単に実施できる．このテストはもともと，高山病の「程度」あるいは「重症度」を判定するために開発されたものだが，高所順化の評価にも活用できる．

8. 高所に強い人・弱い人の問題

高所に強い人と弱い人がいるとよく言われるが，このような「個人差」の問題について尋ねた．

○日本人の登山者の間でも，高所に強い人と弱い人がいると思うか？

いると思う	95.5%
いないと思う	0.0
わからない	4.5

○自分自身の高所に対する強さは，周りの人に比べてどうか？

強い方だと思う	31.5%

平均的だと思う	54.6%
弱い方だと思う	11.1
わからない	2.8

*「個人差はある」と回答した人が圧倒的に多かった．高所に対する強さの自己評価については，「平均的」と答えた人が最も多かったが，「強い方」と答えた人も比較的多かった．

○「強い方」，「弱い方」と答えた人に，その理由として思い当たることがあれば書いてもらった．

→省略

○高所に全く向かない人を見た経験がある場合，その様子を書いてもらった．
体質的な意味で，高所に全く適合しない人の例を書いてもらおうと意図した質問だったが，性格的な面で向かない人の例（神経質な人，自己管理の出来ない人，わがままな人，頑張りすぎる人など）も多くあげられていた．

○高所経験を繰り返すと高山病が出にくくなるとよく言われるが，これについて意見を求めた．

出にくくなったと思う	45.9%
あまり変わらないと思う	25.7
その時々で波があり一定しない	11.0
わからない	17.4

○「出にくくなった」と答えた人に，いつ頃からどのように変化したかを尋ねた．

→省略

9. 重篤な高山病（肺水腫，脳浮腫等）の体験

肺水腫：3人……5,000 mで（26男），4,000 mで（36男），4,750 mで（51男）
脳浮腫：0人
その他：4人……6,000 mで過呼吸のため行動不能（43男），7,700 mで呼吸不全・酸欠・足なえ・幻覚・目のかすみ（58男），7,000 mで視野狭窄（63男），6,000 mで極度の疲労・視野狭窄・顔面のしびれ（39女）

＊110 名中のうち 7 名（6 %）が記入．ただしこのような症状を起こした場合，そのまま死亡してしまうケースもあるので，実際の発生率はもっと高いといえるだろう．高所登山が初めての人だけではなく，ベテランにも起きていることが注目される．また年齢層も幅広い．なお 3 件の肺水腫はすべて，4,000〜5,000 m とさほど高くない高度で起こっていることにも注意すべきだろう．

10. 高山病予防薬の使用

ダイアモックスなど，高山病を予防するとされる薬品を使用したことのある人に尋ねた（トレッキングの添乗員などで他の人に使用させた人にも書いてもらった）．

○使用した薬品の種類（回答者数：53 人）

ダイアモックス	83.0%
ラシックス	35.8
デキサメタゾン	5.7
その他	7.5

○薬品を使用してみての感想（回答者数：54 人）

適切に使えば効果的だと思う	56.4%
どちらともいえない	30.9
効果はないと思う	0.0
逆効果だった	3.6
わからない	9.1

＊他の人に使用させた場合も含めて，約半数（53 人）の人が使用経験を持っていた．使用した薬品はダイアモックスが最も多かった．そして，これらの薬品を使用した人の半数以上が「適切に使えば効果的」と答えていた．ただし，ダイアモックスなどの積極的な使用は，スポーツでいうドーピングに相当するので，酸素の使用以上に倫理的な問題を議論すべき，という意見もあった．

○これらの薬品の利用に関して，効果的な利用方法や使用上の注意等を尋ねた．

→省略

11. 酸素の使用

酸素ボンベを使用したことがある人に尋ねた（他の人に使用させたことのある人にも

書いてもらった).

○酸素の使用により，行動中の体感高度はどのように変化したかを尋ねた．回答者は60人で，合計82例の報告があり，これらを集計した．

使用高度（使用開始～終了の平均値）：8,050±320（7,100～8,720）m
酸素の流量：2.1±0.7（0.3～4.0）リットル
体感高度：6,040±1,350（0～変化なし）m

＊あくまでも主観的な感じ方を数値化したものにすぎないが，平均値でみると，およそ8,000 mの高度で2リットルの酸素を吸い，6,000 mに感じていることがわかる．つまり酸素の使用により体感高度は約2,000 m下がるといえる．ただし個人的にみると，「0 mの低地のように感じた」と答えた人から「体感高度に変化はなかった」と答えた人までいたので，個人差も大きいといえる．また「その時の体調，ルート状況，天候で異なる」と答えた人も数名いた．個人間だけではなく個人内での差も大きいといえよう．

○「安易には使わないが，極度のリスクもまた冒さない」という前提で，どれくらいの高度から何リットルの酸素を使用すべきかを尋ねた．

- 睡眠中：7,360±430（6,000～8,500）mから0.7±0.5（0.2～3.5）リットルくらい必要（回答者数：73人）
- 行動中：7,720±310（7,000～8,500）mから2.1±0.7（0.2～6.0）リットルくらい必要（回答者数：73人）

＊睡眠時0.5リットル，行動時2リットルと回答した人が最も多かった．使用すべき高度は，平均値でみると睡眠時が7,000 m台前半，行動時が7,000 m台後半となった．以上のことは，行動時よりも睡眠時をより低くするなど，従来から言われてきた内容とほぼ一致していた．

○酸素の使用に関するコメントを，使用上の注意や危険性（切れた時など）も含めて尋ねた．

回答者は74人．「非常に効果があった」と答えた人が多かったのは予想通りだが，それ以外には「切れたときに危険である」という指摘が目立った（14人，19%）．その他，多種多様．

この中間報告では割愛した質問
○回答者の高所登山歴の詳細
○ある高度（たとえば4,000 m）になると高度障害が強く現れるという「高度の壁」についての意見
○日本人と欧米人の間で，高所での強さに差があるか

○シェルパの高所での強さについて
○このアンケートに書かなかったことで，高所登山の際に重視していること

（追記）

高所登山・体力と順化（順応）に関するアンケート実施の趣旨

この 10 年ほど，ヒマラヤでの高所登山は急速にポピュラーになり，公募登山の発達と現地での受入態勢の整備等が相まって，現在では初心者や中高年者でも，気軽にヒマラヤの八千メートル峰に出掛けて行く時代となっています．将来この傾向は，ますます強くなっていくものと予想されています．しかし，高所登山の厳しさは昔も今も変わらず，痛ましい遭難事故もしばしば起こっていることはご承知の通りです．このような登山界の背景を考えてみますと，今後，高所登山を目指す方のために，より合理的で安全性の高い登山方法の指針を示すことは急務だと言えます．この指針を探る有力な方法の一つとして，豊富な登山経験を持つ登山家の方々の経験や意見を広く集め，そのデータを解析することにより，より合理的な登山方法が浮き彫りになると考えられます．

高所登山の能力には，さまざまな要素が複雑に関係し，普遍化しにくいものと考えられてきましたが，沢山の経験者のデータを集めることが出来れば，日本での合理的なトレーニング方法や，現地での効果的な高所順応方法，高所での人間の能力などについて，「最大公約数」や「極限値」などが，ある程度明確になると予想されます．こうして得られる指針は，これから高所登山を目指す初心者のみならず，ベテラン登山者がより高度な登山を目指していく際のヒントにもなると考えます．

本アンケートは 1990 年以降の八千メートル峰の登頂者を対象にお願いし，平成 12 年 11 月 18 日に中間発表したものです．なお，全アンケート集計分析と当日のシンポジウムをまとめた報告書が 11 月末に発行される予定です．ご入用の方は日本山岳会事務局までお問い合わせください．

（高所登山研究委員会・坂井広志）

山岳図書目録（2000年）

「山岳図書目録について」

日本山岳会図書委員会

「山岳図書目録」も、本年で8年目になりました。この種の目録は、いまのところ各種山岳・アウトドア関係の定期刊行物でも整理・記録の対象とされていないので、この「山岳」掲載のものだけがわが国でのただ一つの資料です。その意味でも、毎年継続して掲載していくことに、よりいっそう価値があるといえます。山の本も年々多様化しており、掲載の範囲に苦労しました。そのため一部に収録できなかったものもありますが、どうか有効にご活用ください。

＊記載は書名、著者名、発行所、価格、判型、ページ数の順です。
＊判型が数字で表示されているものの単位はmm（天地×左右）、価格は原則として本体価格です。
＊記載の配列は、書名の五十音順です。
＊一部1999年発行のものも含まれています。

山岳図書目録

書　名	著者名	発行所	価格	判型	ページ数
愛知県の山―分県登山ガイド22	与呉日出夫	山と渓谷社	1699	A5	111p
アウトドア・サバイバル・テクニック	赤津孝夫	地球丸	1000	B6	191p
アウトドア用具のメンテナンス	鶴田康男	地球丸	1000	B6	191p
アウトドアライフ救急マニュアル	太田祥一・行岡哲男／監	荘道社	1800	A5	152p
アウトドアライフ論	塚本珪一	ナカニシヤ出版	2500	A5	194p
青森県の山―分県登山ガイド1	根深　誠	山と渓谷社	1699	A5	111p
秋田駒ケ岳花紀行　※写真集	山田隆雄	無明舎出版	2400	210×230	124p
あきた滝300―フォトガイド名爆紀行	佐藤俊正	秋田魁新報社	2300	B5	152p
秋田の山登り50	奥村清明	無明舎出版	1600	A5	117p
アジアの山紀行―身近な海外登山とトレッキングのすすめ	藤田健次郎	山と渓谷社	1600	四六判	286p
阿蘇山と水	田中伸広	一の宮町　熊本日日新聞／発売	952	新書判	216p
あなたと歩く世界の名峰	今井通子	小学館	1700	A5	127p
天翔ける船紀行	深野稔生	無明舎出版	1800	A5	293p
アラスカ垂直と水平の旅	栗秋正寿	山と渓谷社	1500	四六判	253p
歩いて見て撮る 那須の四季　※写真集	信太一高	下野新聞社	1500	B5	155p

アルピニストたちの神話	水野　勉	水野　勉	非売品	B5	190p
アルプス・ピレネー鱒釣り紀行	中村和彦	健友館	1300	四六判	208p
飯豊・朝日―花の山旅3	高橋金雄	山と溪谷社	1200	A5	111p
飯豊連峰―万年雪とお花畑	小荒井実	歴史春秋社	1200	四六判	158p
石川県の山―分県登山ガイド18	林　正一・他	山と溪谷社	1699	A5	111p
異境に楽しむ山旅	後藤　純	文芸社	1300	四六判	381p
一日二日の百名山	深田久弥	河出書房新社	1900	A5	226p
茨城と近県の山―マイカーで行く日帰りハイキング	岡野重一	茨城新聞社	1333	B6	199p
いまさら聞けないキャンプ用具の基礎知識	堀内一秀・上野陽之助	山と溪谷社	950	四六判	159p
岩木山信仰史	小館衷三	北方新社	1500	B6	189p
岩出山の自然通信	阿部敏一	無明舎出版	1500	四六判	316p
岩山・鉱物・地層	神奈川県立生命の星・地球博物館／編	有隣堂	1600	B6	143p
失われた森―レイチェル・カーソン遺稿集	レイチェル カーソン／著　リンダ リア／編　古草秀子／訳	集英社	2100	四六判	299p
有珠山噴火	北海道新聞社／編	北海道新聞社	600	A4	64p
ウスバキチョウ	渡辺康之	北海道大学図書刊行会	15000	A4	188p
美しき山河―僧ヶ岳・毛勝三山の四季　※写真集	佐伯邦夫	シー・エー・ピー	1905	200×220	83p
裏の山にいます	遠藤ケイ	山と溪谷社	1700	A5	238p
運命の雪稜―高峰に逝った友へのレクイエム	神長幹雄	山と溪谷社	1500	四六判	288p
英国＝湖水地方四季物語	辻丸純一	東京書籍	1700	A5	175p
エヴェレストより高い山―登山をめぐる12の話	ジョン クラカワー／著　森　雄二／訳	朝日新聞社	660	文庫判	318p
DAS EDELWEISS―No.17 山岳部80年史	関西学院大学山岳部80年史編集委員会／編	関西学院大学山岳会	非売品	A4	396p
越前・若狭魅力の日帰り40山	柚本寿二／著　日本山岳会福井支部／監	北国新聞社	2200	B5	163p
エベレストのぼらせます―中高年のためのわがまま登山術	大蔵喜福／著　沢野ひとし／絵	小学館	1300	四六判	224p
エベレスト・ママさん―山登り半生記	田部井淳子	山と溪谷社	1600	四六判	253p
エリック・シプトン―山岳探検家波瀾の生涯	ピーター スティール／著　倉知　敬／訳	山と溪谷社	2800	A5	400p
おいしい山歩き―宿と料理と温泉と	小池すみこ	大月書店	800	A5	200p
奥入瀬渓流の四季　※写真集	新里源治	フォト民俗社	2381	A5	77p
近江の山を歩く	草川啓三	ナカニシヤ出版	2000	200×220	160p
近江富士遊々　※写真集	八田正文	サンライズ印刷出版部	3600	A4	120p
狼は帰らず―アルピニスト・森田勝の生と死	佐瀬　稔	山と溪谷社	1600	四六判	277p

オーストリア・アルプスハイキング案内	小口和利	山と溪谷社	3800	B5	215p
オオタカの森	新保国弘	崙書房出版	1300	新書判	226p
岡山県の山―分県登山ガイド32	岡山県山岳連盟	山と溪谷社	1699	A5	127p
岡山県百名山	中島篤巳	葦書房	1700	四六判	337p
奥多摩・奥武蔵の山々	伊佐九三四郎	実業之日本社	1600	A5	253p
奥多摩に生きる動物たち―山小屋撮影日記より	久田雅夫	けやき出版	1800	A5	127p
奥利根の山と谷	小泉共司	白山書房	3000	A5	291p
尾瀬―花の山旅4	花畑日尚	山と溪谷社	1200	A5	127p
尾瀬ヶ原と赤井谷地	樫村利道	歴史春秋社	1200	B6	163p
尾瀬と周辺の山々	ネイチャーネットワーク企画編集室	ネイチャーネットワーク	1524	新書判	134p
女たちの山歩き―ゆっくり、あせらず、前向きに	日本勤労者山岳連盟女性委員会	本の泉社	1600	A5	143p
快適登山入門	地球丸／編	地球丸	1600	AB判	144p
甲斐の山より　※写真集	原　光	朝日アートコミュニケーション 星雲社／発売	1500	A4	
輝けるときの記憶―山と友Ⅱ	東京大学山の会／編	東京大学山の会	5000	B5	462p
火山―雲仙普賢岳がもたらしたもの	長崎大学「火山と災害」教育研究グループ	長崎出島文庫	1905	B6	293p
火山大災害	金子史朗	古今書院	2500	四六判	254p
火山のはなし	下鶴大輔	朝倉書店	2900	A5	166p
彼方の山へ	谷　甲州	中央公論新社	648	文庫判	216p
カナディアンロッキー・トレッキング	益田幸郎	NTT出版	1500	B6	212p
神々の棲む山―東北・信越篇	長池　透	たま出版	1600	B6	285p
上高地2―常念烏帽子縦走記	上條　武	独木書房　岩田書院／発売	3800	A5	444p
上高地永遠　※写真集	中沢義直	信濃毎日新聞社	2600	菊判	136p
上高地と周辺の山々	ネイチャーネットワーク企画編集室	ネイチャーネットワーク	1524	新書判	135p
上高地・乗鞍岳を歩く	平田謙一	山と溪谷社	1750	A5	143p
カムチャツカ探検記―水と火と風の大地	岡田　昇	三五館	2000	四六判	430p
河口慧海―日本最初のチベット入国者	河口　正	春秋社	2500	四六判	312p
関西の山あるき100選	梶山　正	昭文社	1700	A5	256p
関西の山100選	阪急電鉄株式会社コミュニケーション事業部	阪急電鉄株式会社	1429	B6	241p
関西ハイキングガイド	創元社編集部／編	創元社	1500	B6	412p
関東北辺の山歩き―名峰から秘峰まで100山	石井昭子	恒文社	1800	四六判	248p

傷ついた自然の側から—手稲山紀行	早川禎治	中西出版	1500	四六判	253p
基礎雪氷学講座3—雪崩と吹雪	古今書院／編	古今書院	4800	A5	236p
北アルプス大百科	岩橋崇至	TBSブリタニカ	4700	A4変	224p
北アルプスを登る	昭文社／編	昭文社	1400	A5	175p
北岳—花の山旅9	中西俊明	山と溪谷社	1200	A5	111p
北山渓	羽根田二郎	羽根田二郎		四六判	328p
木と動物の森づくり	斎藤新一郎	八坂書房	2000	A5	206p
記念日の山に登ろう	石井光造	東京新聞出版局	1300	四六判	224p
究極のアウトドア体験—北米アパラチア自然歩道を歩く	ビル プライソン／著 仙名 紀／訳	中央公論新社	1900	四六判	278p
九州の山をゆく	西日本新聞社／編	西日本新聞社	2700	B5変	244p
京都と周辺の山々	ネイチャーネットワーク企画編集室	ネイチャーネットワーク	1524	新書判	127p
極北に駆ける	植村直己	山と溪谷社	1600	四六判	261p
極北の迷宮—北極探検とヴィクトリア朝文化	谷田博幸	名古屋大学出版会	3800	四六判	361p
魚名文化圏—イワナ編	鈴野藤夫	東京書籍	2800	A5変	239p
霧ヶ峰・美ヶ原	宮坂直本・他／写真 川崎史郎／文	信濃毎日新聞社	1400	A5	95p
霧島花だより	初島住彦／監 川原勝征／写真・文	南方新社	1800	四六判	147p
霧島連山 ＊写真集	内村秀次	鉱脈社	1905	205×225	123p
キリマンジャロとマッターホルンの麓で	高橋 晟	文芸社	1200	四六判	162p
GINREI—氷雪の立山室堂平 ＊写真集	岡田徳右衛門順一	桂書房	5500	297×260	71p
九重山—花の山旅10	藤田晴一	山と溪谷社	1200	A5	111p
釧路湿原	杉沢拓男	北海道新聞社	1400	A5	160p
雲・山・太陽—串田孫一随想集	串田孫一	講談社	1200	文庫判	325p
グリーンランド氷山誕生 ＊写真集	松岡弓祐	海鳥社	3500	245×250	95p
グリンデルワルト周辺を歩く	小川清美	山と溪谷社	1800	A5	144p
グレート・ジャーニー6—シベリア・モンゴル編 ＊写真集	関野吉晴	毎日新聞社	3800	B5	95p
黒部奥山と扇状地の歴史	奥田淳爾	桂書房	6000	A5	483p
K2風の夏	クルト ディームベルガー／著 海津正彦／訳	山と溪谷社	2400	A5	445p
京阪神から行ける滋賀の山	朝日新聞大津支局／編	かもがわ出版	1400	A5	150p
月光の屋久島 ＊写真集	石川賢治	新潮社	2800	B5	
検証 士幌高原道路と時のアセス	北海道新聞社／編	北海道新聞社	1600	四六判	248p
源流紀行—秘渓悠釣編	辰巳出版／編	辰巳出版	2500	B5	160p
高山植物の自然史—お花畑の生態学	工藤 岳／編	北海道大学図書刊行会	3000	A5	222p

甲信越百名山	山と溪谷社／編	山と溪谷社	2200	240×190	159p
高知県の山—分県登山ガイド38	大森義彦・他	山と溪谷社	1699	A5	111p
五〇歳から再開した山歩き	本多勝一	朝日新聞社	540	文庫判	304p
湖沼の伝説　＊写真集	中野晴生	新潮社	2600	190×270	102p
湖東三山　＊写真集	藤森　武	世界文化社	1524	A5	79p
小屋番の山語り	宮本康二	ほおずき書籍 星雲社／発売	800	B6	112p
最新山歩き事情	矢野和明／著　山の応援団／監	きんのくわがた社	1400	A5	224p
埼玉県の山—分県登山ガイド10	打田鉄一・堀江　昇・星　進	山と溪谷社	1553	A5	143p
ザイルを結ぶとき	奥山　章	山と溪谷社	1800	四六判	373p
里山大百科	平野伸明	TBSブリタニカ	4700	A4	239p
里山を考える101のヒント	社団法人日本林業技術協会／編	東京書籍	1400	四六判	225p
サランコットの彼方に—山男の独白（詩編と詩論）	高橋サブロー	詩画工房	2381	150×220	179p
山岳—第95年	日本山岳会／編	日本山岳会	3500	A5	328p
山岳展望ハンドブック—山名がわかる広角展望図集1	佐古清隆	山と溪谷社	980	150×210	206p
山岳展望ハンドブック—山名がわかる広角展望図集2	佐古清隆	山と溪谷社	980	150×210	205p
山岳悠々	筑木　力	恒文社	2500	B6	352p
山窩物語—三角寛サンカ選集第一巻	三角　寛	現代書館	2800	四六判	332p
山村の保続と森林・林業	堀　靖人	九州大学出版会	3600	A5	227p
山地・河川の自然と文化	松本繁樹	大明堂	3000	B5	148p
山地の地形工学	日本応用地質学会／編	古今書院	4600	B5	213p
山頂の憩い—『日本百名山』その後	深田久弥	新潮社	400	文庫判	186p
山野草ウオッチング	夏梅陸夫	大泉書店	1300	文庫判	286p
山稜2000—全日本山岳写真展作品集	全日本山岳写真協会	全日本山岳写真協会		220×220	194p
山麓亭百話・中	横山厚夫	白山書房	1400	四六判	206p
山麓トレッキング花ガイド	中村至伸	ほおずき書籍 星雲社／発売	1000	文庫判	155p
滋賀県の山—分県登山ガイド24	片岡浜子・他	山と溪谷社	1699	A5	111p
四季の花を楽しむ100山—関東周辺	石丸哲也	実業之日本社	1900	A5	211p
四季を歩くぐんま滝めぐり90選	上毛新聞社／編	上毛新聞社	1800	A5	173p
四国百名山	山と溪谷社大阪支局／編	山と溪谷社	2200	240×190	151p
地震の記憶—安政5年大震大水災記	廣瀬　誠	桂書房	2400	210×180	260p
静岡市周辺の山々	馬場直之	馬場直之	3000	A5	362p

自然環境データブック5	自然保護年鑑編集委員会／編	インタラクション	8000	A4	403p
自然と親しむはじめての山歩き	樋口英子	池田書店	1100	A5	207p
自然について、私の考えを話そう。	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1400	四六判	237p
湿原を歩く—関東周辺	水尾一郎	実業之日本社	1700	A5	168p
島根県の山—分県登山ガイド31	長野　至・他	山と溪谷社	1699	A5	111p
写真と図で見るロープとひもの結び方	ロープワーク研究会	西東社	900	四六判	210p
車窓展望の山旅—鉄道で楽しむ山	藤本一美・田代　博	実業之日本社	2000	四六判	221p
シャモニ周辺を歩く	小川清美	山と溪谷社	1800	A5	144p
瞬輝幻彩—四季尾瀬　＊写真集	菅田隆雄	日本写真企画	2800		
処女峰アンナプルナ—最初の8000メートル峰登頂	モーリス エゾーグ著　近藤　等／訳	山と溪谷社	1800	四六判	347p
女性の山—もっと素敵に	岩崎元郎・堀川虎男	かもがわ出版	1600	A5	166p
白神山地と共に歩む道Ⅱ—第二回白神自然文化賞受賞作品集	能代山本広域市町村圏組合／編	現代書館	2000	B6	182p
白神山地と共に歩む道Ⅲ—第三回白神自然文化賞受賞作品集	能代山本広域市町村圏組合／編	現代書館	2000	B6	194p
白神　ブナの森博物誌	根深　誠	白神山地を守る会	1000	A5	80p
白簱史朗の山の花撮影テクニックと見分け方	白簱史朗	山と溪谷社	2800	A5	335p
時輪のチベット　＊写真集	塩澤孝平	ラ・テール	15000	A4変	296p
シルクロード波欄万丈	長澤和俊	新潮社	1600	四六判	236p
白馬岳—花の山旅5	竹内真一	山と溪谷社	1200	A5	127p
新 傷だらけの百名山	加藤久晴	リベルタ出版	1900	四六判	238p
信州美しき百山—下	信濃毎日新聞社出版局／編	信濃毎日新聞社	2600	242×258	143p
信州魅力の山と湯	丸山晴弘	信濃毎日新聞社	1500	A5	165p
心象の山々—山の版画と断章　＊画文集	大谷一良	恒文社	1800	四六判	96p
新磐梯紀行—ルポルタージュ・明治21年の磐梯山噴火	小檜山六郎	歴史春秋社	1600	四六判	311p
新編 白い蜘蛛	ハインリッヒ ハラー／著　長谷見敏／訳	山と溪谷社	2400	四六判	525p
新編 単独行	加藤文太郎	山と溪谷社	1600	四六判	272p
新編 風説のビヴァーク	松濤　明	山と溪谷社	1600	四六判	304p
スイスアルプス山歩き・花紀行	市原芳夫	本の泉社	1905	A5	223p
「菅江真澄」読本4	田口昌樹	無明舎出版	1800	B6	246p
菅江真澄遊覧記1	菅江真澄／著　内田武志・宮本常一／編・訳	平凡社	1300	HL判	411p
菅江真澄遊覧記2	菅江真澄／著　内田武志・宮本常一／編・訳	平凡社	1200	HL判	368p

菅江真澄遊覧記 3	菅江真澄／著　内田武志・宮本常一／編・訳	平凡社	1500	HL 判	465p
菅江真澄遊覧記 4	菅江真澄／著　内田武志・宮本常一／編・訳	平凡社	1400	HL 判	398p
菅江真澄遊覧記 5	菅江真澄／著　内田武志・宮本常一／編・訳	平凡社	1400	HL 判	415p
ステップアップ登山	宮下岳夫	北海道新聞社	1400	A5	149p
すばらしき東濃の自然、再発見!!	岐阜県博物館	岐阜新聞社　岐阜新聞情報センター／発売	952	A4	47p
炭焼紀行	三宅　岳	創森社	2800	A5	222p
生還—山岳遭難からの救出	羽根田治	山と溪谷社	1600	四六判	252p
生と死のミニャ・コンガ	阿部幹雄	山と溪谷社	1700	四六判	317p
世界遺産屋久島　※写真集	三好和義	小学館	3600	B5	142p
世界探検アトラス	ジョン エドモンズ／編　古川奈々子／訳	ニュートンプレス	3000	B5	247p
千年の森へ—屋久島の森の不思議なちから	吉田　繁／写真　蟹江節子／文	アスペクト	1900	A5変	130p
俗界富士　※写真集	藤原新也	新潮社	2900	270×340	
その山登り間違ってませんか	上村信太郎	山と溪谷社	950	新書判	208p
大雪山—花の山旅 1	梅沢　俊	山と溪谷社	1200	A5	127p
大雪山のお花畑が語ること—高山植物と雪渓の生態学	工藤　岳	京都大学学術出版会	2100	四六判	234p
大雪山母なる大地　＊写真集	市根井孝悦	山と溪谷社	3800	220×300	111p
大山爽風　＊写真集	北川英雄	毎日新聞社	3500	B5	91p
大地の記憶—富山の自然史	藤井昭二	桂書房	2000	210×180	197p
大冒険術—ぼくらはなぜ世界に挑むのか	野口　健・白石康次郎	文藝春秋	1333	四六判	224p
高尾山1999—光りと水と風と	清水英雄・清水文美子	揺籃社	952	170×182	51p
高尾山・陣場山　花ハイキング	いだよう	のんぶる舎	1200	B6	124p
高尾山ゆっくり散歩	雪子 F. グレイセング	けやき出版	1300	B6	159p
滝—2　＊写真集	鉄　弘一	光村推古書院	1600	170×190	106p
立山花草木　＊写真集	高橋敬市	アートフォトギャラリー「NATURナトゥーア」	1500	170×180	76p
谷川岳と上越・上信の山々	岡田敏夫	実業之日本社	1600	A5	197p
旅人たちのパミール—玄奘、マルコ・ポーロはどの道を通ったか	酒井敏明	春風社	1800	四六判	336p
多摩川と源流の山々	ネイチャーネットワーク企画編集室	ネイチャーネットワーク	1524	新書判	138p
多摩・武蔵野 花の歳時記	青木　登	のんぶる舎	1800	A5	166p

丹沢・残されたブナの森　＊写真集	斉藤　進	山と溪谷社	2300	230×200	79p
丹沢・箱根日帰りハイキング	水尾一郎	実業之日本社	1600	A5	159p
ダンプ＆通子の夫婦でゆったり登山術	今井通子・高橋和之	小学館	552	文庫判	247p
探訪ひょうごの滝 Part 3	須田京介／文　北村泰生／写真	神戸新聞総合出版センター	1600	A5	127p
地球環境データブック2000—2001	レスター ブラウン・他／編・著　福田克也／監・訳	家の光協会	2500	A5	251p
地図のことがわかる事典	田代　博・星野　朗	日本実業出版社	1500	四六判	296p
「西蔵研究」分類目録	熊切武彦	東京文献センター	2000	B5	109p
中央アジア踏査記	オーレル スタイン／著　沢崎順之助／訳	白水社	3400	B6	320p
中央アルプス—花の山旅8	津野祐次	山と溪谷社	1200	A5	112p
中高年から山歩きを楽しむ本	小出正一	旬報社	1600	A5	190p
中国山地の四季　＊写真集	田原一久	東京新聞出版局	2800	250×260	72p
中国百名山	山と溪谷社大阪支局／編	山と溪谷社	2200	240×190	151p
中部・近畿・中国の火山—フィールドガイド日本の火山6	築地書館／編	築地書館	2000	B6	151p
鳥海山に魅せられて—風・雲・光そして岩魚たち	福田伴男・福田貞子	アヤベ企画	8000	AB判	164p
超初心者の元気山歩き	みなみらんぼう／監	主婦と生活社	1200	B5	128p
ツァンポー峡谷の謎	F．キングドン ウォード／著　金子民雄／訳	岩波書店	900	文庫判	540p
追悼　中島寛—天地ある限り	追悼集刊行委員会／編	追悼集刊行編集委員会	非売品	A5	340p
ツェルマット周辺を歩く	小川清美	山と溪谷社	1800	A5	144p
津軽白神山がたり	根深　誠	つり人社	950	新書判	238p
辻まこと全集2	辻まこと	みすず書房	8000	A5	470p
津別峠の四季—阿寒・知床・大雪のパノラマ　＊写真集	兼本延男	東方出版	2000	220×207	107p
妻と二人の山歩き—実践篇	小浜浩三	光人社	1700	四六判	222p
低山趣味—深山・芦生・越美	広谷吉韶	ナカニシヤ出版	1800	四六判	204p
天の花回廊—ヒマラヤ・中国横断山脈の植物たち	吉田外司夫	朝日新聞社	4800	A4	143p
天保山から富士山へ—東海自然歩道を辿って900 km 35日の徒歩旅行	宇津木慎一	宇津木慎一		A5	260p
東海自然歩道30選—関西編	大阪府社会体育研究所／編	七賢出版	1500	B6	211p
東海自然歩道31選—東海編	名古屋歩く会／編	七賢出版	1500	B6	229p
東海の天然記念物	岡田文士・志賀靖二・白井伸昌	風媒社	1600	A5	169p

東京周辺の沢—沢登りルート図集1	白山書房編集部／編	白山書房	2000	A5	292p
東京・首都圏クルマで出かける山歩き　続	寺田政晴	実業之日本社	1900	A5	231p
峠 幻視行—上州の峠で見たもの	吉永哲郎	上毛新聞社	1400	四六判	155p
峠を越えた魚—アマゴ・ヤマメの文化誌	鈴野藤夫	平凡社	2800	四六判	355p
東北の山旅釣り紀行	根深　誠	中央公論新社	819	文庫判	288p
東北百名山	東北山岳写真家集団／編	山と溪谷社	2200	240×190	159p
とうほく名水紀行	長南里香・無明舎出版／編	無明舎出版	1600	A5	128p
十勝の自然を歩く　＊改訂版	十勝の自然史研究会／編	北海道大学図書刊行会	1800	新書判	269p
土佐のマイナー山—素晴らしき身近な山々	春野公麻呂	南の風社	1700	A5	160p
登山者のための観天望気	城所邦夫	山と溪谷社	950	新書判	221p
登山道で出会える花Ⅲ—中高年のための登山学	日本放送出版協会／編	日本放送出版協会	1500	B5	143p
登山と自然の科学Q&A	日本勤労者山岳連盟／編	大月書店	1800	A5	221p
登山の医学ハンドブック	松林公蔵／監　日本登山医学研究会／編	杏林書院	2350	B6	236p
登山の運動生理学百科	山本正嘉	東京新聞出版局	2000	A5	310p
栃木県の山—分県登山ガイド8	室井正松・他	山と溪谷社	1700	A5	111p
鳥取県の山—分県登山ガイド30	藤原道弘	山と溪谷社	1699	A5	111p
都民の森　三頭山に咲く　＊写真集	牛尾征治	のんぶる舎	2500	182×227	94p
富山県の山—分県登山ガイド17	佐伯郁夫・佐伯克美	山と溪谷社	1699	A5	127p
富山とっておきの33山	渋谷　茂／著　高志山の会／監	北国新聞社	2200	B5	151p
長崎県の山歩き　＊新版	林　正康	葦書房	1600	四六判	228p
那須の四季	信太一高	下野新聞社	1500	B5	155p
76歳、山の楽しさと恐ろしさ—平和なればこそ	尾形　憲	オリジン出版センター	2800	四六判	277p
ナンガ・パルバート単独行	ラインホルト メスナー／著　横川文雄／訳	山と溪谷社	1800	四六判	293p
南極発・地球環境レポート	斎藤清明	中央公論新社	660	新書判	186p
新潟県の山—分県登山ガイド16	三菱ガス化学山岳部・他	山と溪谷社	1700	A5	127p
新潟の名水—湧水 滝 渓谷	新潟日報事業社／編	新潟日報事業社	1400	A5	140p
新潟花の山旅	新潟県山岳協会／監	新潟日報事業社	1600	A5	259p
西丸式山遊記	西丸震哉	中央公論新社	686	文庫判	310p
日光四十八滝を歩く—秘瀑をかける峡谷巡歴	奥村隆志	随想舎	1500	A5	151p

日光の花―花トレッキング携帯図鑑	小杉国夫／写真・文　青山　廣／監	下野新聞社	1000	B6変	127p
日本アルプス百名山紀行	深田久弥	河出書房新社	1900	A5	230p
日本奥地紀行	イザベラ バード／著　高梨健吉／訳	平凡社	1500	HL判	529p
ニホンカモシカのたどった道	小野勇一	中央公論新社	700	新書判	184p
日本巨樹論	牧野和春	惜水社　星雲社／発売	2000	B6	212p
日本三百名山登山ガイド―上	山と溪谷社／編	山と溪谷社	2200	B5	207p
日本三百名山登山ガイド―中	山と溪谷社／編	山と溪谷社	2200	B5	197p
日本植物誌―シーボルト『フローラ・ヤポニカ』　＊新装版	木村陽二郎・大場秀章／解説	八坂書房	4500	B5	159p
日本の岳人たち	斎藤一男	岩峰社出版部	2375	四六判	494p
日本の国立公園	加藤則芳	平凡社	760	新書判	272p
日本の国立公園・国定公園―上	森田敏隆	クレオ	2800	A4	127p
日本の国立公園・国定公園―下	森田敏隆	クレオ	2800	A4	127p
日本のこころ富士山　＊写真集	キュウ・フォト・インターナショナル／編	クレオ	2800	A4	127p
日本の山野草	大貫　茂	クレオ	2800	A4	127p
日本の自然―2000年版	朝日新聞社／編	朝日新聞社	4280	B5	138p
日本の滝200選　続　＊写真集	中西栄一	東方出版	2500	A5	150p
日本の美富士	鈴木　進／監　成瀬不二雄・他／執筆	美術年鑑社	3000	A4	427p
日本の分水嶺―地図で旅する列島縦断6000キロ	堀　公俊	山と溪谷社	1700	A5	272p
日本の森	石橋睦美	新潮社	3800	B5変	168p
日本の森大百科	姉崎一馬	TBSブリタニカ	4700	A4	223p
日本の山と溪谷1―知床・阿寒	谷口淳一	山と溪谷社	1900	B5	111p
日本の山と溪谷3―日高連峰	伊藤健次	山と溪谷社	1900	B5	111p
日本の山と溪谷7―尾瀬	岩沢正平	山と溪谷社	1900	B5	111p
日本の山と溪谷9―妙高・戸隠連峰	渡辺正敏	山と溪谷社	1900	B5	111p
日本の山と溪谷13―北岳	今野岳志	山と溪谷社	1900	B5	111p
日本の山と溪谷14―甲斐駒・仙丈・塩見岳	津野祐次	山と溪谷社	1900	B5	119p
日本の山と溪谷17―剣岳	畠山　高	山と溪谷社	1900	B5	111p
日本の山と溪谷18―白馬岳	花畑日尚	山と溪谷社	1900	B5	111p
日本の山と溪谷19―鹿島槍・五竜岳	中西俊明	山と溪谷社	1900	B5	111p
日本の山と溪谷29―九重山	藤田晴一	山と溪谷社	1900	B5	111p
日本100岩場1―北海道・東北	北山　真／編	山と溪谷社	1700	A5	135p
日本100岩場2―関東	北山　真／編	山と溪谷社	1600	A5	143p
日本百名谷	関根幸次・他／編	白山書房	3000	B5	214p
ネパール―微笑みの風　＊写真集	荻野矢慶記	東方出版	2800	A5	90p

ネパールを知るための60章	日本ネパール協会／編	明石書店	2000	四六判	265p
野口健—最高峰でつかんだ未来	綾野まさる	旺文社	1000	四六判	152p
野山の樹木	姉崎一馬	山と溪谷社	1000	文庫判	281p
ハイキング＋日帰り温泉—中国地方	種村　融	山と溪谷社	1600	A5	135p
白山の花のはなし—高山植物と野の花の絵本	金栄健介	中日新聞北陸本社	1000	新書判	116p
八甲田・八幡平—花の山旅2	一戸義孝	山と溪谷社	1200	A5	111p
花かおる阿蘇・くじゅう	梅野秀和	ほおずき書籍星雲社／発売	1000	新書判	94p
花かおる御岳山	小谷宗司	ほおずき書籍星雲社／発売	1000	新書判	101p
花かおる御在所岳	市橋　甫	ほおずき書籍星雲社／発売	1000	新書判	76p
花かおる磐梯・雄国	小荒井実	ほおずき書籍星雲社／発売	1000	新書判	102p
花と出会うフォトハイキング—東京起点28コース	小川清美	山と溪谷社	1700	A5	111p
花と山撮影ワンポイント	坂井道子・渋谷　健	日本出版社	1200	A5	141p
花に出会う山歩き—ゆっくりと感動を味わう静岡県の25コース	川崎順二	静岡新聞社	1800	A5	159p
花の蔵王	大場俊司	ほおずき書籍星雲社／発売	1000	新書判	96p
花のほほえみ—Smile of Flowers	倉下生代／写真　久山　敦／解説	東方出版	1200	170×185	58p
花の山旅・八ヶ岳	新妻喜永	実業之日本社	2000	四六判	221p
はりまハイキング—日帰りできる30コース	須磨岡輯	神戸新聞総合出版センター	1500	A5	127p
遥かなるシルクロード	長沢和俊	里文出版	3000	A5	246p
ハワイアン・ハイキングトレイル　＊改訂新版	クレイグ チズム／著　桜井安彦／訳	ブロンズ新社	1600	B5	142p
日翳の山ひなたの山	上田哲農	平凡社	1300	HL判	324p
東日本・四季の山旅	濱舘郷一	白山書房	1600	四六判	462p
秘渓を巡る釣りの旅	佐々木一男	つり人社	1300	新書判	223p
ヒグマ　＊増補改訂版	門崎充昭・犬飼哲夫	北海道新聞社	1800	B6	377p
日の出の森につづくみち—未来のいのちを奪うごみ処分場はいらない！	日の出の森関西ひとの会／編	スタジオ・リーフ	1000	A5	113p
日の出の森をたすけて	田島征三	法蔵館	1600	B6	133p
ヒマラヤ巡礼—ネパール8000m8座をめぐる山旅　＊写真集	野村薫夫	東京新聞出版局	2800	250×260	84p
ヒマラヤの環境誌—山岳地域の自然とシェルパの世界	山本紀夫・稲村哲也	八坂書房	4500	A5	351p
ヒマラヤ一つの峰の物語	宮澤　憲	東京新聞出版局	2500	A5	302p
ヒマラヤへの挑戦1　＊再刊	日本ヒマラヤ協会／監	アテネ書房	4200	B5	338p

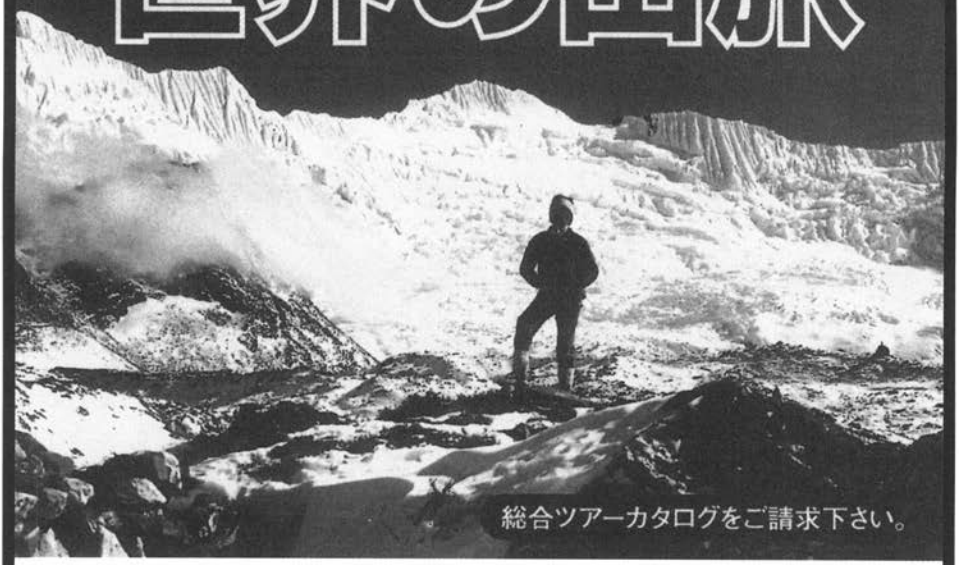
ヒマラヤへの挑戦2　＊再刊	日本ヒマラヤ協会／監	アテネ書房	4200	B5	321p
百名山ふたたび	深田久弥	河出書房新社	1900	A5	233p
百楽の山 常念岳—写真で辿る自然と歴史	田淵行男記念館／編	田淵行男記念館	1500	A4	72p
兵庫丹波の山—下	慶佐次盛一	ナカニシヤ出版	1942	四六判	201p
広島県の山—分県登山ガイド33	平田恒雄／文　岡本良治／写真	山と溪谷社	1700	A5	111p
深い浸食の国—ヒマラヤの東地図の空白部を行く	中村　保	山と溪谷社	3000	A5	381p
深田久弥の山がたり1—山嶺の風	深田久弥	二見書房	2300	四六判	314p
深田久弥の山がたり2—百の頂に百の喜び	深田久弥	二見書房	2300	四六判	325p
深田久弥の山がたり3—ヒマラヤ物語	深田久弥	二見書房	2300	四六判	317p
福岡県の山歩き—ハイキングから一日登山まで全82コース	福岡山の会／編	海鳥社	1800	A5	175p
ふくしまの名水	歴史春秋社／編	歴史春秋出版	1200	四六判	158p
福島の山と温泉	奥田　博	歴史春秋出版	1200	四六判	164p
富士光明　＊写真集	竹内トキ子	文一総合出版	1500	B6	59p
富士山が見える日帰り100低山	穂高亜樹	主婦と生活社	1300	A5	151p
富士山世界遺産への道—山麓に生きる人々の姿を追って	静岡地理教育研究会／編	古今書院	2800	A5	242p
富士山の見える山60選	成美堂出版編集部／編	成美堂出版	1200	B5	159p
富士山風光200景　＊写真集	白簇史朗／監　白い峰／編	日本カメラ社	2800	AB判	188p
富士よ富士 この美しき　＊写真集	山岳写真の会「白い峰」／著　白簇史朗／編	朝日新聞社	3800	B5	192p
ぶらり・山と花のひとり旅	大久保昭次	近代文芸社	1800	四六判	318p
ふるさとの富士250山をゆく	吉野晴朗	毎日新聞社	2000	B5	253p
ベア・アタックス—クマはなぜ人を襲うか　I	S. ヘレロ／著　嶋田みどり・大山卓悠／訳	北海道大学図書刊行会	2400	四六判	272p
ベア・アタックス—クマはなぜ人を襲うか　II	S. ヘレロ／著　嶋田みどり・大山卓悠／訳	北海道大学図書刊行会	2400	四六判	272p
辺境の旅 悠久のロマン	小谷　明	実業之日本社	1900	A5	256p
宝満山歴史散歩	森　弘子	葦書房	1600	四六判	205p
僕はこんな旅をしてきた	西丸震哉	DHC	1800	四六判	417p
星と嵐—6つの北壁登行	ガストン レビュファ／著　近藤　等／訳	山と溪谷社	1600	四六判	237p
星の頂　＊写真集	松本　修	朝日ソノラマ	2200	210×230	87p
穂高—その流れに沿って　＊写真集	写真フォーラム涸沢	東京新聞出版局	3000	A4	86p

北海道女一人の山登り	田村恵美	ほおずき書籍 星雲社／発売	1200	四六判	129p
北海道 湖沼と湿原—水辺の散歩道	大木隆志	北海道新聞社	2300	B5	215p
北海道 島の野鳥	寺沢孝毅／編	北海道新聞社	2500	A5	163p
北海道夏山ガイド２—表大雪の山々	梅沢　俊・菅原靖彦	北海道新聞社	2200	B6	271p
北海道ネイチャーツアーガイド	北海道のエコツーリズムを考える会／編	山と溪谷社	1500	A5	151p
北海道の百名山	道新スポーツ／編	北海道新聞社	1600	A5	213p
北海道の山—分県登山ガイド０	伊藤健次	山と溪谷社	1700	A5	111p
堀ちえみと３人の小さな山男	堀ちえみ	山と溪谷社	1400	A5	214p
本多勝一の探検と冒険	岡崎洋三	山と溪谷社	1500	四六判	368p
ほんわか奥多摩—四季だより	花森俊一	東京文献センター	1600	B6	238p
マイカーで行く九州百山峰	渡部智倶人	葦書房	2000	A5	431p
マイカー登山—名阪道	山と溪谷社大阪支局／編	山と溪谷社	1600	A5	135p
マイカー登山便利マップ—日本アルプスと長野周辺	山と溪谷社／編	山と溪谷社	933	B5	114p
マッターホルンの空中トイレ	今井通子	中央公論新社	648	文庫判	227p
マッターホルン北壁	小西政継	山と溪谷社	1600	四六判	237p
マロリーは二度死んだ	ラインホルト メスナー／著　黒沢孝夫／訳	山と溪谷社	1600	四六判	351p
道草山行ひとり旅	遠藤一郎	朝日新聞社	1600	四六判	224p
みちのく源流考	根深　誠	つり人社	950	新書判	254p
南アルプス—大いなる山、静かなる山	永野敏夫・永野正子	黒船出版	2286	A4	350p
南アルプス夏の風—ロマンの道	三田末治	文芸社	1100	四六判	154p
南大東島の自然	奥土晴夫	ニライ社　新日本教育図書／発売	1800	A5	135p
南ラオス・山河紀行	シャンティ国際ボランティア会／編	シャンティ国際ボランティア会現代企画室／発売	730	A5	90p
みなみらんぼうの一歩二歩山歩	みなみらんぼう	中央公論新社	2000	A5	200p
ミニヤコンカ奇跡の生還	松田宏也／著　徳丸壮也／構成	山と溪谷社	1600	四六判	253p
みやざき百山	日本山岳会宮崎支部／編	宮崎日日新聞社	2000	A5	216p
ミラレパの足跡—チベットの聖なる谷へ	伊藤健司	地湧社	2000	四六判	320p
陸奥の屹立峰・岩木山	三浦章男	北方新社	2000	A5	400p
名山スケッチ漫筆	杉田　博	日本山書の会	4500	A5変	296p
目からウロコの山岳写真術	川崎　博	山と溪谷社	950	新書判	205p
目指せトムラウシ—藻岩から始めるステップアップ登山	宮下岳夫	北海道新聞社	1400	A5	149p

「モリ」地名と金属伝承—続・日本山岳伝承の謎	谷　有二	未來社	2200	A5	232p
森との共生—持続可能な社会のために	藤森隆郎	丸善出版事業部	780	新書判	236p
森の語り部	宇江敏勝	新宿書房	2200	四六判	387p
森の自然史—複雑系の生態学	菊沢喜八郎・甲山隆司／編	北海道大学図書刊行会	3000	A5	236p
森への憧憬　第1集—心に残るドイツの林学者たち	筒井迪夫	林野弘済会	1100	四六判	114p
「森を守れ」が森を殺す	田中淳夫	新潮社	562	文庫判	286p
野外のエマージェンシー・ブック	大蔵喜福	地球丸	1000	B6	191p
八木山物語	石沢友隆	河北新報社	1400	A5	245p
屋久島　＊写真集	三好和義	小学館	80000	A3	183p
「屋久島の森」のメッセージ	山尾三省	大和出版	1400	B6	190p
野生の実践　＊改訳	ゲーリー スナイダー／著　原　成吉・重松宗育／訳	山と溪谷社	2000	四六判	368p
八ガ岳—花の山旅7	北原一三	山と溪谷社	1200	A5	111p
八ケ岳火山—その生いたちを探る	八ケ岳団体研究グループ	ほおずき書籍　星雲社／発売	1300	四六判	166p
柳田國男トレッキング	宮崎修二朗	編集工房ノア	3000	四六判	261p
山歩きと温泉宿	近代プランニング／編	近代プランニング　婦人生活社／発売	686	B5	144p
山川草木紀行	高田　宏	新思索社	2800	B6	324p
山靴はいて街を出る—夫婦で歩いた日帰りの山旅	服部　豊	文芸社	1200	四六判	177p
山小舎日記—3000メートル青春賦	宮崎　拓	文芸社	1200	四六判	231p
山里にダムがくる	菅　聖子／文　大西暢夫／写真	山と溪谷社	1500	四六判	240p
山好き新聞記者が登った東海の百山　前編	読売新聞中部本社社会部／編	人間社	1500	四六判	229p
山旅の記	吉田武文	東京プリント	2200	A5	416p
山旅の楽しみイラストマップ—関東とその周辺	まえじまてつお	講談社	1700	B5	128p
山旅浪漫記	小林泰彦	山と溪谷社	1800	A5	176p
山といで湯—静岡県とその周辺	永野敏夫	静岡新聞社	1600	A5	119p
大和の三角点を尋ねて　上・下	上田倖弘	ぶよお堂	4762	B5	
山と俳句の五十年	岡田日朗	梅里書房	2600	四六判	252p
大和まほろばの山旅—奈良県北・中部の山	内田嘉弘	ナカニシヤ出版	2000	四六判	222p
ヤマネって知ってる？—ヤマネおもしろ観察記	湊　秋作	築地書館	1500	四六判	126p
山の温泉へ行こう	平野恵理子	東京書籍	1700	A5	172p
山の宗教—修験道とは何か	久保田展弘	平凡社	2300	A4	149p

山の巡礼者たち―山梨登山百年	山梨日日新聞社／編	山梨日日新聞社	952	新書判	232p
山の植物誌	大場達之／編・解説 熊田達夫・他／写真	山と溪谷社	3500	A5	455p
山の俳句歳時記	大野雑草子／編	博友社	2600	110×160	326p
山の独り言	山村幸雄	文芸社	1200	B6	282p
山登りの始め方	柏　澄子	山と溪谷社	950	新書判	205p
山の眼玉	畦地梅太郎	平凡社	1000	HL判	192p
山はいのちをのばす	田中澄江	青春出版社	552	文庫判	231p
山屋の釣り物語	小山渓志	東洋出版	1300	四六判	171p
山をめぐる人と書物	手塚宗求	恒文社	1800	四六判	188p
槍ガ岳・雲ノ平―花の山旅6	三宅　岳	山と溪谷社	1200	A5	111p
悠遊大山	松下順一	米子今井書店	2000	A5	167p
雪山・藪山	川崎精雄	山と溪谷社	1800	四六判	325p
夢 時を越えて―チョー・オユー・ダウラギリ主峰・ガッシャブルムⅡ峰	同人シルバータートル／編	同人シルバータートル	2500	B5	216p
よみがえれ池塘よ草原よ―巻機山ボランティアからのメッセージ	松本　清	山と溪谷社	1600	四六判	296p
ライン川源流域紀行―知られざるスイスの水の風景	堀　淳一	東京書籍	2200	A5	253p
リュックサック―80周年記念号	リュックサック編集委員会／編	稲門山岳会	5000	205×210	424p
旅愁の川	根深　誠	つり人社	1500	A5	236p
我が心に映る山　＊写真集	山岳写真同人＜四季＞	東京新聞出版局	2800	250×260	82p
わたしの尾瀬　＊写真集	新井幸人	シンク　ブティック／発売	3238	B5	93p
私の草木漫筆　＊新版	坂本直行	茗渓堂	1500	文庫判	226p
わたしのチベット紀行	渡辺一枝	集英社	1600	B6	260p
われわれはなぜ山が好きか	安川茂雄	小学館	657	文庫判	308p

世界の山旅



トレッキングからエクスペディションまで。

ALPINE TOUR

アルパインツアーはヒマラヤからカラコルム、
ヨーロッパアルプス、アラスカ、カナダ、USA、南極、
アンデス、パタゴニア、ニュージーランド、中国、
アフリカ、北極圏その他の山岳地帯・辺境地域への
主催ツアーやインフォメーションを用意しております。
もちろん日本国内の山旅も企画しております。
トレッキングのパッケージはもとより登山隊のための
航空便や地上手配などに関し、私達は豊富な知識と経験をもとに
ご相談に応じることができます。ぜひ、お問合せ下さい。

国土交通大臣登録旅行業第490号／㈳日本旅行業協会正会員 ボンド保証会員

アルパインツアーサービス株式会社

東　京	／〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1（西新橋1森ビル2階）	TEL.03-3503-1911
大　阪	／〒550-0004 大阪市西区靱本町1-10-22（ポロロッカビル4階）	TEL.06-6444-3033
名古屋	／〒450-0002 名古屋市中村区名駅3-23-6（第2千福ビル8階）	TEL.052-581-3211
福　岡	／〒810-0073 福岡市中央区舞鶴1-2-8（セントラルビル5階）	TEL.092-715-1557
広　島	／広島サービスステーション（大阪支店転送電話）	TEL.082-542-1660
仙　台	／仙台サービスステーション（東京本社転送電話）	TEL.022-265-4611
札　幌	／北海道地区総代理店㈱りんゆう観光 〒060-8582 札幌市東区北9条東2丁目	TEL.011-711-7106

NEW ALPINE STANDARD

NEW V SERIES DEBUT

DUNLOP

あらゆるフィールドで高い使用実績を誇るVシリーズが、さらに強く、さらに軽くなって生まれ変わりました。

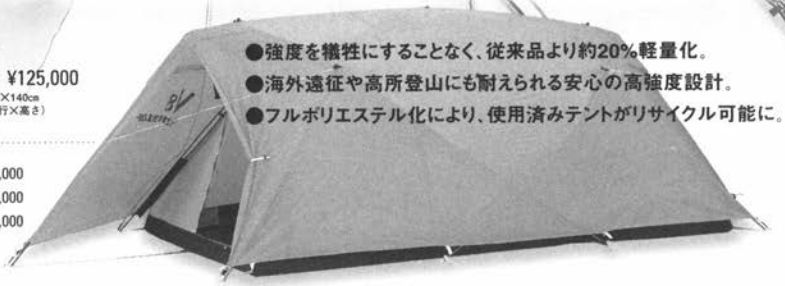
登山四季用テント

V-8 8人用 ¥125,000

■サイズ：220×360×140cm
（間口×奥行×高さ）

■重　量：約7.3kg

V-3 3人用 ¥63,000
V-4 4人用 ¥69,000
V-6 6人用 ¥84,000
もあります。



●強度を犠牲にすることなく、従来品より約20%軽量化。
●海外遠征や高所登山にも耐えられる安心の高強度設計。
●フルポリエステル化により、使用済みテントがリサイクル可能に。

詳しくはダンロップのホームページへ http://www.dunlop.co.jp

株式会社ダンロップスポーツ

東京／〒108-0075 東京都港区港南3丁目8番1号（森永乳業港南ビル） TEL.03-5463-7325
大阪／〒532-0004 大阪市淀川区西宮原1丁目8番24号（新大阪第3ドイビル） TEL.06-6392-8153

軽く、コンパクトなテントのことなら

ARAI TENT

㈱アライテント

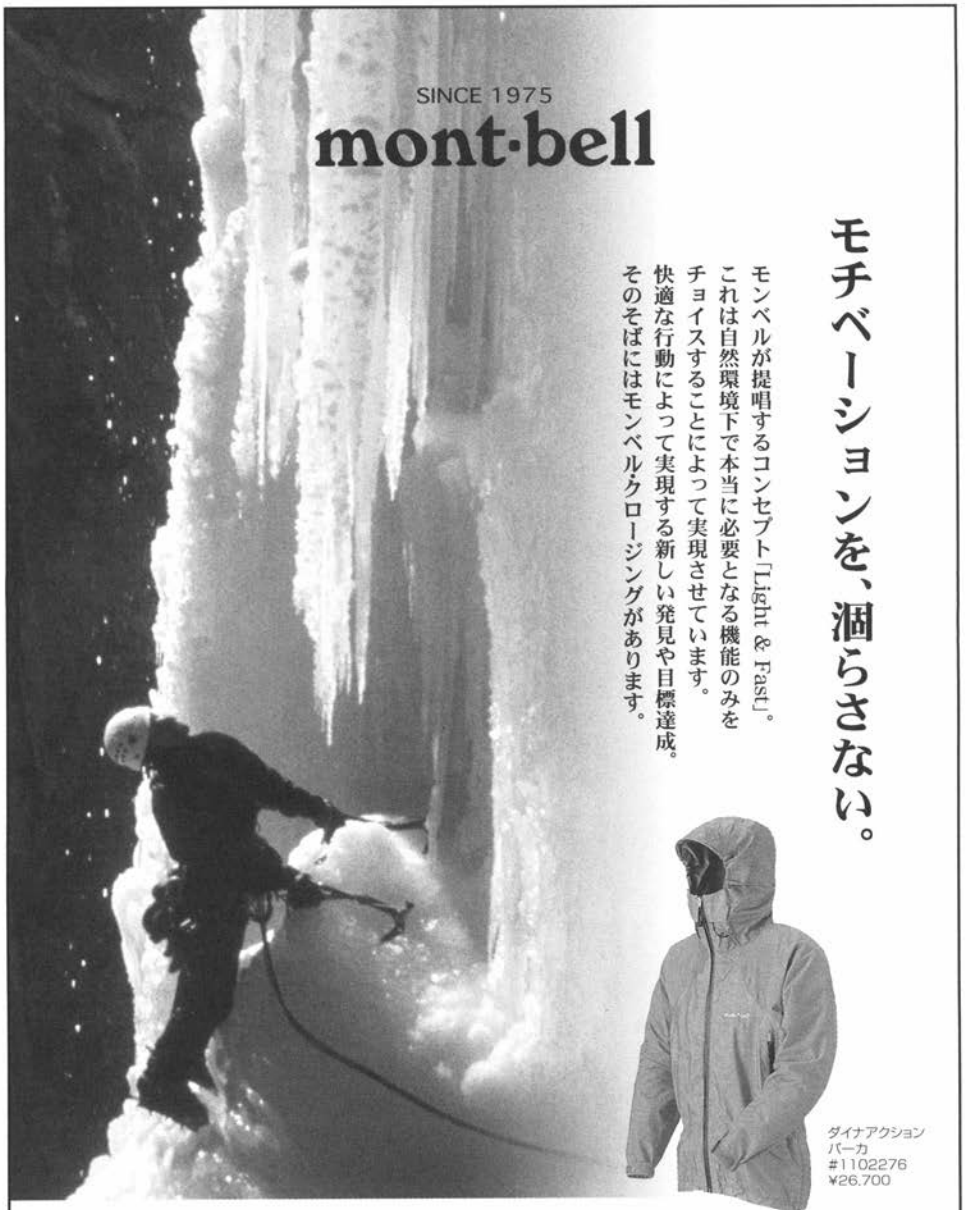
〒359-0021 埼玉県所沢市東所沢5-12-12 TEL 042-944-5855

(株)キャラバン

東京本社　〒170-0002　東京都豊島区巣鴨1-25-7　TEL(03)3944-2331
大阪支店　〒560-0872　大阪府豊中市寺内2-3-15緑地サンプラザ301号
TEL(06)6866-0505

(株)北海道キャラバン　TEL(011)822-8664
(株)九州キャラバン　TEL(092)715-9151

www.caravan-web.com



SINCE 1975

mont·bell

モチベーションを、涸らさない。

モンベルが提唱するコンセプト「Light & Fast」。
これは自然環境下で本当に必要となる機能のみを
チョイスすることによって実現させています。
快適な行動によって実現する新しい発見や目標達成。
そのそばにはモンベル・クロージングがあります。

ダイナアクション
パーカ
#1102276
¥26,700

《商品について詳しくはカタログをご請求下さい》
「2001年ギアカタログ」「2001-2002秋冬クロージングカタログ」をご用意しています。ご希望の方は、封書に1冊¥500、2冊¥800分の切手を同封の上、希望カタログ名・住所・氏名・電話番号を明記し、本社〈コンシューマ・山岳96カタログ希望係〉までお送りください。

株式会社モンベル
本　　社●〒550-0013　大阪市西区新町1-33-20　TEL.06-6531-4761(代)
東京営業所●〒150-0012　東京都渋谷区広尾1-15-3　TEL.03-3445-5401(代)

恒文社の山のエッセイ集

もう登らない山
串田孫一著　本体2718円

心象の山々 山の版画と断章
大谷一良著　本体1800円

山をめぐる人と書物
手塚宗求著　本体1800円

飯豊道 五十嵐篤雄著
本体2800円

山岳悠々 越後と周辺の山を行く
筑木力著　本体2500円

画歴の山々 穂高からヒマラヤへ
増田欣子著　本体1748円

わたしのヒマラヤ紀行
茂市久美子著　本体1748円

詩人の山 わたしの詞華集
田中清光著　本体1748円

恒文社
宅配(着払)のご注文は、電話かFAXで ☎0257-80-1231 FAX0257-80-1232
受注センターコレクト便係　(宅配料380円)　千代田区三崎町3-10-10

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア
株式会社 西遊旅行
国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員
西遊旅行ホームページ (http://www.saiyu.co.jp)

■本　社／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2－3－1 岩波書店アネックス5F
☎03(3237)1391(代)　FAX 03(3237)1396
■大阪営業所／〒530-0026 大阪市北区神山町6－4　北川ビル5F
☎06(6367)1391(代)　FAX 06(6367)1966
お問い合わせ・お申し込みにフリーダイヤル(通話料無料)をご利用下さい。
0120－811395

大好評「週刊日本百名山」(全50冊)に続く新シリーズ!!

朝日新聞社

朝日ビジュアルシリーズ Vol.2 『日本百名山その後』・深田クラブ選定『日本200名山』

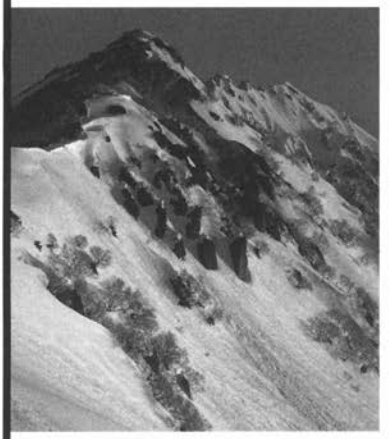
週刊 続日本百名山 【全30冊】

2002年1月10日(木)創刊

予約受付中!

毎週木曜日発売 定価560円(税込) A4判変型・逆中綴じ・オールカラー36ページ

日本百名山が選び残した隠れたふるさとの山100座を紹介



山頂パノラマ図、詳細行程図、実践的なデータを満載!

ダイナミックで雄大な山岳写真
四季折々の表情を凝視した第一線の写真家の作品で迫ります。

あふれる自然にズームアップ
多彩な花々を網羅。隠れた名水、いやしの名湯、壮快名瀑紀行情報。

登山に欠かせないガイド情報
山小屋、避難小屋、アクセスデータなど役立つ麓情報満載。

CG(コンピューターグラフィックス)でポイントチェック
鳥瞰図でイメージ登山&登山ポイントを立体的に図解。

深田久弥の感動深い名文を収録
深田久弥・百名山以外の山行エッセー28編を再録。

『週刊 続 日本百名山』全30冊 毎週木曜日、号数順に配本。

1 針ノ木岳・烏帽子岳・赤牛岳
2 燕岳・餓鬼岳・有明山
3 大天井岳・霞沢岳・経ヶ岳
4 南駒ヶ岳・小秀山・安平路山
5 農鳥岳・鋸岳・櫛形山
6 上河内岳・池口岳・大無間山
7 笊ヶ岳・七面山・毛無山
8 三ツ峠山・御正体山・愛鷹山
9 武甲山・白石山・大岳山
10 天狗岳・御座山・乾徳山・茅ヶ岳
11 榛名山・浅間隠山・妙義山・荒船山
12 雪倉岳・毛勝山・奥大日岳
13 黒姫山・戸隠山・飯縄山
14 佐武流山・白砂山・鳥甲山・岩菅山
15 八海山・中ノ岳・荒沢岳・仙ノ倉山
16 机差岳・二王子岳・御神楽岳・守門岳
17 会津朝日岳・帝釈山・女峰山
18 栗駒山・神室山・船形山・以東岳
19 秋田駒ヶ岳・和賀岳・焼石岳
20 白神岳・森吉山・姫神山
21 署寒別岳・樽前山・駒ヶ岳
22 芦別岳・夕張岳・カムイエクウチカウシ山・ペテガリ岳
23 天塩岳・石狩岳・ニペソツ山
24 金剛堂山・笈ヶ岳・大日ヶ岳・位山
25 御在所岳・武奈ヶ岳・能郷白山
26 金剛山・釈迦ヶ岳・伯母子岳
27 氷ノ山・上蒜山・三瓶山
28 三嶺・東赤石山・笹ヶ峰
29 英彦山・雲仙岳・由布岳・大崩山
30 市房山・尾鈴山・高千穂峰・桜島

創刊号
針ノ木岳・烏帽子岳・赤牛岳

週刊日本百名山【全50冊】
好評配本中 2001年12月末完結

21世紀の山岳文化をリードする **東京新聞＆岳人の本**

中高年の雪山入門
低山の雪山からヒマラヤまでをアドバイス。
福島正明
1、600円

山小屋の主人の炉端話
36軒の山小屋主人のとっておきの36話。
工藤隆雄
1、500円

写真集・燕岳と安曇野
創立80周年の燕山荘主人の「四季の心象」を活写。
赤沼淳夫
3、800円

山書散策
「数多くの山書の何を読めば」の読書の指針。
河村正之
1、500円

登山の運動生理学百科
「どうしたら合理的で安全な登山ができるか」の答えは。
山本正嘉
2、000円

百名山からの眺望〈CG版〉
国土地理院のデータをもとに立体図化した山名ガイド。
石垣博史
石垣修司
1、700円

快楽登山のすすめ
「ガイドに連れられて登る山のどこが楽しい！」
原　真
1、700円

彼ら「挑戦者」
飽食の時代に敢えて限界に挑むヤングクライマー列伝。
大蔵喜福
1、359円

さわやかに山へ
世界的な女性登山家が山の楽しみのコツを伝授。
田部井淳子
1、500円

山の名著30選
国内外の山の名著を気鋭の登山史研究家が再評価する。
福島功夫
1、400円

私でも登れた百名山
58歳からチャレンジした記録。モデルプラン付き。
高橋哲雄
1、400円

新版　登山の医学
米国で大ロングセラー「山の救急解説書」の完全翻訳。
J・A・ウィルカーソン
2、039円

価格は本体価格。別途消費税がかかります

東京新聞出版局（中日新聞東京本社）■〒108-8010 港区港南2-3-13 電話■03-3740-2674 FAX■03-3458-0689

イラスト
ソリマチアキラ

山歩き はじめの一歩

●本体各1300円＋税　A5判/144ページ

山歩きにむずかしいルールはありませんが、快適に楽しむにはコツがあります。これからはじめたい方、あるいは、自己流で歩いているアナタ、山の基本をマスターすれば、より快適に安全に山を楽しめること、マチガイナシです。

❶山選び
太田昭彦=監修・文
柏 澄子=文

自分の山歩きのペースを知り、体調に合わせて山行計画を立てる……山歩きのカギをにぎるプランニングを中心に、山を楽しむための技術と知識を解説します。

❷歩き方
福島正明=監修
羽根田 治・高木みなこ=文

疲れにくく、安全な歩き方とは。山の歩行術を体系づけた第一人者が、効率的な休憩の取り方や呼吸法などをまじえ、山を快適に歩くノウハウを指南します。

❸山の用具
笹原芳樹=監修
大久保忠男・砂永純子=文

本当に必要な用具ってなんだろう。基本装備の選び方、使い方は、山歩きのスタイルによってさまざま。あなたのスタイルに合った用具選びを提案します。

❹健康と山の食事
大森薫雄=監修・文
柏 澄子=文

山歩きとカラダの関係について考えます。山歩きに必要な体力とは、山歩きによって得られる健康とは。はたまた、山行における栄養補給や水分補給についての基礎知識まで。

❺山の天気
村山貢司=監修・文
松尾裕美・柳澤美樹子=文

山の天気はむずかしくない！　気象のメカニズムから、天気予報の活用術、山岳地で悪天に見舞われたときの対処法まで、基本的な理論と実践を解説します。

❻地図とガイドブック
寺田政晴=監修・文
泉 久恵=文

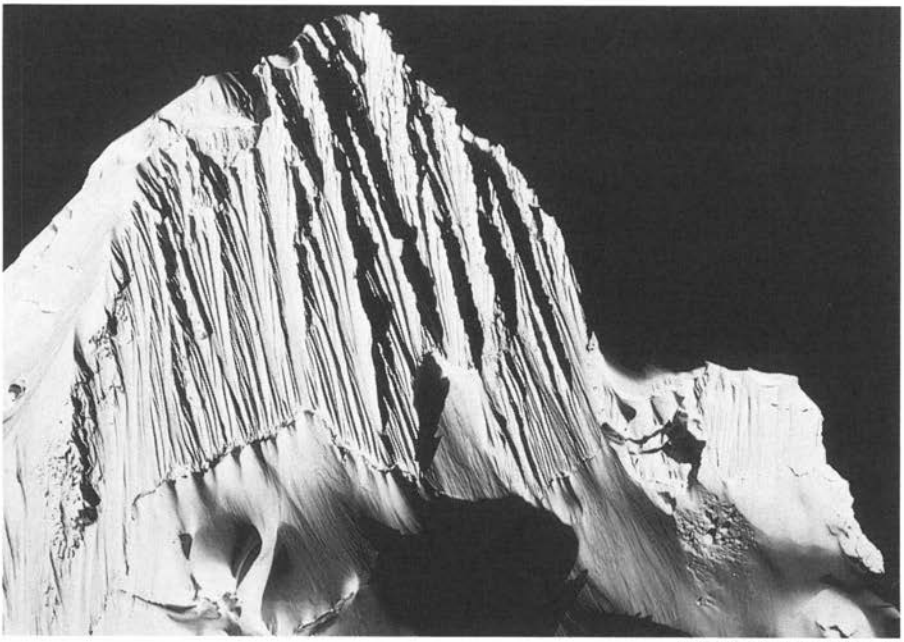
さまざまな仕掛けがほどこされているガイドブックと地図。それらを大解剖して、10倍おもしろい活用術を紹介します。

❼山の危険
丸山晴弘=監修・文
羽根田 治=文

低山とはいえ、山は危険がいっぱい。安全な山歩きを実践するための心構え・知識を、多くの実例を検証しながら考えます。

山と渓谷社　※ホームページ http://www.yamakei.co.jp/
〒105-8503 東京都港区芝大門1-1-33／☎03(3436)4055〈営業部〉・FAX03(3433)4057〈営業部〉

これが白川芸術の最高峰。
世紀を超える偉業をここに集大成。



〈I〉より「アルパマーヨ南西壁(ペルー)」

白川義員作品集

世界百名山

THE WORLD'S HUNDRED GREATEST MOUNTAINS

好評発売中　〈I〉**ネパール・南北アメリカ**ほか

好評発売中　〈II〉**パキスタン・ヨーロッパアルプス**ほか

2002年春発売予定　〈III〉**インド・中国**ほか

ヒラリー卿をはじめ世界の偉大な登山家、著名山岳関係者が選出した荘厳で秀麗な名峰のすべてを白川義員が4年をかけて撮影。撮影エリア27ヵ国、50地域以上。生命を賭して神々の峰と対峙した魂の記録が圧倒的な感動を呼びます。新世紀の幕明けを飾るにふさわしい気高き峰々の美の記録です。

定価(各): 本体38,000円 ＋税　A3判／総176ページ(カラー136ページ)／ケース入り　**全3巻／小学館**

■内容見本進呈。書名をご記入のうえ、右記の宛先までお願いします。〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館宣伝営業部「世界百名山」内容見本 係
小学館「愛読者注文センター」 ●TEL03-3230-5739 ●FAX03-3230-0094 インターネット小学館オンラインショップ http://www.shogakukan.co.jp

国内外の多くの登山家・探検家の努力と協力による
最新情報を刻み込んだ
世界で最も詳しい登山地図完成

カラコルム・ヒンズークシュ登山地図

Mountaineering Maps of the KARAKORUM & HINDU-KUSH

宮森常雄 著
by Tsuneo Miyamori

■本登山地図の特色

本文収録の6,000m超1,215峰については、全て経緯度を位置づけ、既登峰・未登峰を明示し、地図上の氷河地帯には知り得るかぎりの堆積・氷塔・氷瀑の位置・河岸段丘の様子なども盛り込んだ。そして過去の探検家の足跡、近年の主要な峰の登攀ルートもあわせて記載した。

本登山地図の収録山域・山群一覧（5色刷／6色刷）

		(タテ×ヨコ)単位：mm
■HINDU-KUSH & HINDU-RAJ〔1/150,000〕		
No.1	EASTERN HINDU-KUSH & TIRICH MIR	(834×692)
No.2	SOUTHERN HINDU-RAJ & CHITRAL	(834×692)
No.3	EASTERN HINDU-KUSH & MASTUJ	(834×692)
No.4	EASTERN HINDU-RAJ & YASIN	(834×692)
■KARAKORUM〔1/150,000〕		(タテ×ヨコ)単位：mm
No.5	BATURA GLACIER & HUNZA	(834×692)
No.6	NANGA PALBAT & GILGIT	(834×692)
No.7	HISPAR GLACIER & SHIMSHAL	(834×692)
No.8	BIAFO GLACIER & SKARDU	(834×692)
No.9	INSGAITI GLACIER	(438×692)
No.10	BALTORO GLACIER & KHAPULU (KHAPALU)	(1,030×692)
No.11	SIACHEN & RIMO GLACIER	(758×846)
No.12	NUBRA & SHYOK RIVER & SASER KANGRI	(594×753)
No.13	BALTORO GLACIER詳細図〔1/75,000〕	(626×952)

(付) 宮森常雄・雁部貞夫 編著
『カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究』
supplement : A Study of KARAKORUM & HINDU-KUSH Mountains
Edited by Tsuneo Miyamori & Sadao Karibe

■別冊山岳研究の特色

別冊に併載するパノラマ写真は、登頂・登攀者によって撮影され、両山脈の高峰の大部分に高度・山名をそえて網羅した貴重な記録である。また、雁部氏編纂の「チトラール語—語彙集」、および「東部ヒンズークシュ地名・山名考」は、30年にわたる現地踏査から言語を収録した労作。諏訪多栄蔵氏・青木正樹氏共訳によるピエール・ヴィトーズの「ヒマラヤ地名考」はヒマラヤ全域の知識を提供するものである。

定価（本体33,000＋税）
〔B全判地図13葉〕＋
〔A4変型判・上製美装ケース入・385頁〕

・カタログをご請求ください。

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2 振替 01030-0-13128
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL http://www.nakanishiya.co.jp/ e-mail iihon-ippai@nakanishiya.co.jp

ナカニシヤ出版

茗溪堂＝山の本

近藤 等　アルプスの蒼い空に

上巻

〈モン・ブラン山群〉
〈ドーフィネ、ゼクラン山群〉
〈アルプスの二十世紀〉
—アルプス登山の変遷をめぐって—
〈山岳図書を翻訳して六十年〉

下巻

〈スイス・アルプス　ヴァリス山群〉
〈スイス・アルプス
ベルナー・オーバーラント山群〉
〈スイス・アルプス　ベルニナ山群〉
〈オーストリア・アルプス〉
〈山の本のデディケーション〉
〈心に残る人々〉

A５変型判　上製
上巻　280ページ　下巻　296ページ　各　5,000円＋税
上、下巻セットケース入　10,000円＋税

鹿野勝彦　シェルパ
ヒマラヤ高地民族の二〇世紀
A５変型判
286頁　6500円（税別）

庄田元男　日本アルプスの発見
—両洋文化の交流—
A５判　438頁　3800円（税別）

山の本と山の絵　本の雑誌などの店

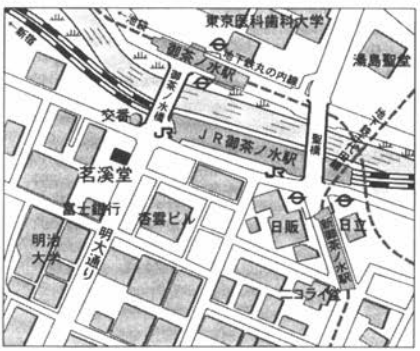
お茶の水店 営業のご案内
営業時間　午前11時～午後７時
定休　日曜日・年末年始12/31～1/3
通販もいたしております。

はがき、電話、FAX、E-mail等でご注文を承わり、ご自宅までお届けいたします。発送費がかかります。
お問合せ下さい。

TEL 03-3291-2811
FAX 03-3295-2043
郵便振替 00180-2-24723
E-mail meikeido@din.or.jp
茗溪堂on Web-山の本Access to
http://www.din.or.jp/~meikeido/

茗溪堂　〒101-0062東京都千代田区
神田駿河台2-1-11

●JRお茶の水駅お茶の水橋口下車、駅前のスクランブル信号を正面の交番に向って斜め左に渡るとスグ前です。
●山の本の売場はビルの３Ｆです。入口は１Ｆのパン・ミュージュックと同じです。奥の階段をお上がり下さい。



編集後記

・中国登山が開放されて二十年が経過し、その間に多くの日本人が中国の高峰に挑んできた。それらの数多くある記録や資料を精力的に調査し、集大成したものを「日本人による中国登山二十年」として児玉　茂氏が纏めた論文を取り上げた。これは日本だけでなく海外の登山界に対する発信情報としても貴重で有益なものである。

・追悼には名誉会員のサムエル・ブラヴァント氏（百三歳で死去）の紹介があるが、氏と親交のあった往年の日本の岳人も既に亡くなっている方々も多く、氏と天国で再会して美しいスイスの山々を一緒に楽しく語らいながら歩いている様子が目に浮かんでくる。

・「山岳」の創刊期には登山記録などでも良い文章が多く、読者に感銘を与えるものがあり、これらは本会の貴重な財産でもある。本会の他の記録とともに、これらの名文を会員諸氏に認識してもらえるよう再録を試みた。解説もつけて読者の理解を助けるよう努めた。

・今号は、広告が通常と異なっているのは、広告代理店の倒産という事態の発生で、編集の業務と同時に広告依頼の作業が重なり、編集以外の方々にもいろいろご協力いただき予定の期日に刊行することができた。委員と担当は次のとおりである。

高遠　宏（担当理事）、南川金一（総括・追悼・名作再録）、関塚貞亨（第二次RCC・会務報告）、児玉　茂（中国登山二十年・海外の山・書評）、小浜浩三（フォーラム・海外の山・書評）、大関義明（支部だより・山岳図書目録）、永田弘太郎（秩父宮山岳賞）、柏澄子（会務報告）。

（高遠）

山岳　第九十六年（通巻一五四号）
二〇〇一年十二月一日発行
価三五〇〇円
発行所　社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビューハイツ四番町
（〒一〇二―〇〇八一）
電話　〇三―三二六一―四四三三
振替口座　〇〇一三〇―一―四八二九
発行人　大塚博美
編集人　高遠　宏
印刷所　株式会社　技報堂
発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二―一
電話　〇三―三二九一―九四四二
振替口座　〇〇一八〇―二―二四七二三

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

大好きな自然を、ゆっくりと楽しみたい

ATLAS TREK

ビギナーのための山旅から、未知の魅力を秘めた国々へ、そしてエクスペディションまで、それぞれのニーズにを応えし、新鮮でユニークな手づくりの山旅をコーディネイトします。

●バイネ

●エベレスト・アマダブラム

●アイガー

●お問い合わせ・お申し込みは

国土交通大臣登録旅行業第1167号

株式会社アトラストレック

★世界各地、日本の名峰へのレックツアー、各種手配旅行、登山隊、航空券等々を取り扱っております。

〈東京〉03-3341-0030(代)
東京都新宿区三栄町23番地
FAX：03-3341-9200

〈大阪〉06-6946-9111(代)
大阪市中央区谷町3丁目4番地5号-501
FAX：06-6940-3799

〈名古屋〉0561-64-3299(代)
愛知県愛知郡長久手町戸田谷1108-3FBパワーゾーン内
FAX：0561-64-3345

冒険心を満たす、クルーズ

OCEAN DREAM

船は山小屋、船はベースキャンプ。アラスカ、ビーグル海峡、北極・南極。海や川からのみアプローチできる大自然のただ中へ、皆様をご案内します。また元犬ぞりチャンピオンをリーダーに各人が犬ぞりで、スカンジナビア半島縦断220kmの特別コースもおすすめです。

●南極　ロス海、ウエデル海沿岸
●北極海、ベーリング海沿岸
●アラスカ・グレーシャーベイ
●チリ・ビーグル海峡
●イラワジ川、メコン川(2003年より)
●ラップランド犬ぞり縦断

●ラップランド犬ぞり縦断

●グレーシャーベイ国立公園

●ロス海・南極クルーズ

●お問い合わせ・お申し込みは

株式会社オーシャンドリーム

Tel：042-773-4037　Fax：042-773-3021
〒229-1103　神奈川県相模原市橋本6-17-15

日本船旅業協会会員
バイキングリバークルーズ日本総代理店

URL: www.oceandream.net
e-mail:info@oceandream.net

ISSN 0286-7508

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. 96

2001